
真・恋姫†無双～巨乳将伝～

イグニス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜巨乳将伝〜

【Nコード】

N7079R

【作者名】

イグニス

【あらすじ】

聖フランチェスカ学園の薙刀部に在籍し、慎ましやかな青春を送っていた主人公はある日：友人のやらかした事故をきっかけに大事件へ巻き込まれる。事件のきっかけとなった事故は単なる事故にあらず、後の己の人生を多大に揺るがす大事故だった。事故で死んだ主人公は夢とも現ともつかぬ世界で『外史の管理者』なる人物に事情を説明され、その上で『とある外史の崩壊を救ってくれ』と頼まれる。頼まれ事の内容に面白みを見出した主人公は、管理者が与えてくれた数個の特殊能力を引っさげ：再誕生と言う形で外史救出：

そして己の野望（巨乳ハーレム構築）の成就に乗り出したのだった。

伝記の1 主人公、死去すること（前書き）

当拙作をお読みいただく上での注意点

1. 当作品は周りの皆様及び既に描かれている作品に触発され、脳内のピンク色をした妄想とノリと勢いだけで執筆した『恋姫†無双』シリーズの二次創作になっています。

2. 随所に他作者様が使われている表現や描写：設定等の引用が見られますが、盗作をしているつもりは一切ありません。

3. 設定に名前だけを借りたオリジナル武将が登場します。

4. 女性武将に死者は出さないつもりです。

5. 一部キャラは思考や体型等、性格が崩壊を起こしていますし…時系列もムチャクチャです。

6. 携帯等に対し機種依存文字等が出てくる作品を原作としておりますが、表示されない文字を考慮してそれらは全てカタカナ（しすいかん∥シ水関、ていいく∥程イクetc）で記載しております。この字（携帯では絵文字となっているはず）はなんて読むのか等疑問がありましたら『メッセージボックス』へお願いします。

7. オリジナルキャラを主人公とするオリキャラ物ですが、原作主人公も登場します。

上記7点“全て”に了解と納得が出来、かつそれでも読んでみたい
と思う方のみ読み進めてください。

また1点でも許せない場合即座にお戻りください。

気に入らないのに読んで行う非難・批判は一切受け付けませんので
悪しからず。

それでは、どうぞ。

伝記の1 主人公、死去すること

白の上着と、後ろ襟に施された短剣符（十）。

そして名が示す通り宗教系…クリスチャンかカトリック系の学園。

それが俺の通う『聖フランチェスカ学園』である。

敷地は広大で内容も濃く、中には学生寮も備えている。

校風は『清廉潔白』『質素儉約』『自由責任』なのだが、清廉潔白と質素儉約は自由責任と相反すると思わないか？
それが在学生としての俺の本心。

さてここで自己紹介をしておこうか。

俺の名は呂堂^{りょどう} 刃^{じん}。

年は18だが学年は2年：剣道部・薙刀部・空手部・柔道部・ボクシング部の5部を掛け持ちしており、薙刀部は主将で部長。
また、趣味の範疇として料理同好会・軽音楽同好会・漢文同好会・サバイバル同好会にも籍を置いている。

身長は先日 of 身体検査で170cmを超えていたのを覚えている。

体重は忘れた：適正体重だったとは思うが。

体型は普通：だが、薙刀部の部員によると『着衣の上から見た体型が標準体型だからとタカを括ると、その下に隠された鞭のようにしなやかで：かつ、鍛えこまれた強靱な筋肉が生み出す剛力の餌食になる』との事。

頭の出来は中の下くらい、顔立ちは多分普通：イケメンとか意識した事が無いから知らん。

あと強いてあげれる特徴として、髪が生まれつき赤い事ぐらいか。

さてそんな俺だが、喧嘩には勝てても事故には勝てない。
どういう事かと言うと、今現在俺は病院のベッドにいるからだ。

「悪い、刃：マジでスマン」

事故の原因は今必死の形相で謝っているコイツにある。

「いや別に良いんだけど：こうなっただのは事故なんだし」

「と言われてもな：」

「俺が良いって言ったら良いんだよ：特に異常は無いし：それともアレか？ 完治した後お礼参りと称されてボコボコにされたり、骨の髄までたかり尽くされるのが希望ほどマゾなのか？ 一刀は」

コイツの名前は北郷 ほんぐう 一刀 かずと。

鹿児島にある、祖父が営む道場で剣術の指南を受け：剣道部に在籍している、俺の同級生で筆頭友人その1。

顔立ちは中の中：まあ整ってはいると思うが、俺は他の男の顔と自分の顔を比べて一喜一憂する趣味は無い。

身長は俺と同程度。

ちなみに友人その2もいて、その名を及川 おいかわ 佑 たすくと言う。

いわゆるチャラ男 おの部類で、自らオープンスケベを公言するダメな奴。

何かにつけて俺や一刀を合コンに誘い、俺達を引き立て役にしようとする姑息な男で：女の子にモテる為に生きていると言っても過言では無い。

ただ『女の子の幸せはワイの幸せや』と豪語する辺り、並のチャラ男とは一線を画するようだ。

もちろん三次元リアルの女の子は好きだが、二次元の女の子も好きで：先日、最近ハマっている『恋姫無双』なる：非常に多くの美少女が登場するゲームの登場キャラの画像を、萌えキャラと称して送ってきたのだが、それが何とひどいオカマだった。

同じ画像を受け取った一刀と思わずボコボコにしたのはいい思い出だ。

一刀はその画像を即刻消去したらしいが、俺は消さずに取ってある：他人から貰った物は借金以外ならなんであれ、おいそれと手放せないのが俺だからだ。

さて：そんな個性の強い友人達に囲まれ、慎ましやかな青春を過ごしていた俺が：こうして病院のベッドへ寝ている事態となった、事の起こりは昨日の夕方。

その日の部活を終え、帰宅しようとしていた俺達を担当の教師が呼び止めた。

どうやら明日：つまり今日の授業で使う予定の資料を作るから、作成を手伝ってくれと言う旨らしい。

たまたま目に付いたのが俺達だったと言う事もあったが、俺達はそれを快諾：俺達は学内にある資料室へ向かった。

資料室は古今東西の様々な文献・現物等を古史の資料として有形保管しており、聞く所によると『伝国璽でんこくじ』も保管しているとか。

『伝国璽でんこくじ』は有名な史実【三国志】において、董卓と言う悪漢を討ち滅ぼさんと組まれた連合軍が董卓の収める街へ攻め上った際：連

合軍のある軍勢を率いていた武将『孫堅』（息子で次男の『孫権』だったような気もする）が、市内にあった井戸の中から発見したとされるアレ：つまり金印、もしくは玉璽ぎょくじと呼ばれる道具だ。

まあ流石にそんな：博物館行きの重要文化財を、こんな学園のいち資料室で保管するとは思えないが。

資料室に着いた俺達は担任の教師が用意したリストに従い、資料室内で資料収集を開始。

ジャンケンの結果：一刀が脚立を使って資料室の上層部を、俺が下層部を探す事となった。

そしてある棚の前で事故は起こった。

資料室には照明の死角となる棚がいくつかある。

そんな場所が必要な資料を探していた俺は、薄暗さから：目前で脚立に乗っている一刀に気付かず、脚立に激突。

乗っていた一刀はバランスを崩し転倒したのだが、その時：一刀が持っていた物が、不運にも俺の頭の上に落ちてきたのだ。

どうやら石か金属で出来ていた物らしく、その衝撃で俺は気絶。

救急車で運ばれ、目を覚ましたのが今から8時間前：つまり今朝と言う事だ。

俺はまだ謝り続ける一刀を見て言う。

「にしても一刀さ」

「ん？」

「お前が落としたのって何だったんだ？ エラく硬くて重い：石か

鉄のように感じたんだが」

「ああ、アレは銅鏡だよ」

「銅鏡？　銅鏡ってアレか…ヤタノカガミとかってアレか？」

「そうそう、それ…その類」

一刀曰く、古代の史実と神道の関係を説明する上で必要な必ず必要な物らしく…これまでも度々資料室から持ち出して授業で使っていたらしい。

担任の教師が言うには鑑定書付きの本物らしいが、作られた時代から考えて鑑定書もクソも無いと思うのだが…

「…そんなモン、あんな薄暗い場所の高いところに保管するなよな…」

「全くだよ…で、その銅鏡が入った箱を手にとった直後…」

「俺が、お前の乗る脚立に激突…バランスを崩した拍子に銅鏡入りの箱がお前の手を離れて宙を舞い…重力に従って自由落下し、俺の頭の上に降って来た…」

「うん」

「…はあ」

一刀が使っていたのは7尺脚立と呼ばれる高所作業用の脚立。

銅鏡は重さが約4kg…そんな高所から4kgの金属塊が頭を直撃したんだ…気絶もするわな。

「まあ検査入院で2〜3日入院する事にはなるだろうが、すぐに退院するさ」

「そうしてくれ…でないと剣道部のインターハイが危ない」

「つか剣道は一刀の方が強いだろうに…俺は薙刀部がメインなんだぞ？」

「なら助っ人としてやって来て、全国大会優勝経験者の主将から…10本中、面で5本は取れる刃は弱いと？」

「…いや確かにそんな事もあったが」

「そんな主将から、得意と自負する竹刀で1本も取れない俺はどうなるんだ？」

「そう言えばあの女主将から1本取るのが目標なんだっけ？」

「ああそうだ…くっ、こんなことなら爺ちゃんの指南をもっと真面目に受けるべきだったかな？」

「…だろうな…その点俺は大丈夫だが」

「ならその大丈夫さで剣道部の助っ人に来てくれよ」

「いやいや、それでも俺の得物は薙刀であってだな」

ちなみに剣道と薙刀以外の運動部…つまり空手・柔道・ボクシングの各部からも、大会応援として引っ張りだこなのは一刀の名誉の為に黙っておく事にする。

「剣道部の次期主将はお前にするんだって、主将が息巻いてたぞ？」

「…オイオイ、マジか？」

「ああ、真剣と書いてマジと読むほどにマジだ」

こりゃ薙刀で剣道部の現主将を…現剣道部員全員の前でボコして、俺は薙刀部員だって納得させる他ないかな？

…つかあの姉ちゃん、あんま追い詰めると泣くしな…どうしたもんか。

そんな事を考えていると、一刀が椅子から立ち上がるのが見えた。

「ん？ もう帰るのか？」

「ああ、もうこんな時間だしな」

言って一刀が差し出した携帯の画面には『16..45』の表示があった。

…そうか、この病院の面会終了時間は確か17時ちょうどだったはず…なるほど。

「そっか…じゃあ仕方ないな」

「悪いな」

「気にすんなって言っただろ？」

「そうだったな」

「ああ…んじゃ次会うのは学園だな」

「そうだな…お、本格的に時間がヤバイ…んじゃ、またな…及川にもよろしく」

「おう」

そうして一刀は病室を出て行った。

それから3日後…俺は無事に退院し、家路に着いた。

世話になった担当医が見送る中、俺は家まで至る道をゆっくりと歩いていた。

手にはカバンと愛用の練習用薙刀。

格好はもちろんフランチエスカの制服。

「今日まで3日寝倒して、感覚も鈍っているだろう…明日は朝練に出て、感覚を元に戻さねば…」

そんな事を考えていたのが災いしたらしい。

「危ない！ 上っ！！」

「え？」

突如上から声が聞こえ、見上げた俺の眼前には植木鉢の底。

あ、ヤバイ。

と思ったのも束の間…

—ガッ!—

植木鉢が俺の前頭部を直撃。

そこは奇しくも先日、銅鏡がぶつかったのと同じ場所だった。

「なんて…ベタな…ああダメだ、死んだなこりゃ…」

「大丈夫?　しっかり…」

薄れ行く意識の中、俺を心配してくれる人がいるらしい。

「……おえっ…」

とりあえず礼をと思い、声をかけてくれた人の方へ顔を向ける。

次の瞬間…俺の口を突いて出たのは感謝の意ではなく、強烈な吐き気だった。

何故なら俺を覗き込んでいたのは、髪をおさげにしたヒゲ面で…逞しい大胸筋と見事に割れた腹筋をした、なぜかビキニパンツのみを身に着けたオッサンだったからだ。

「んもう、こんな可愛い漢女おとめを目の当たりにして『おえっ』だなんて…失礼しちゃうわん」

言ってくねくねするムキムキおかま。

その身なりに俺は、つい最近どこかで見たような顔だと思ったが…そのあまりの気持ち悪さに、トドメを刺されたらしい。

俺はとりあえず意識を手放した。

伝記の2 主人公、再誕すること（前書き）

ダメだ：貂蟬の口調が分らないし安定しない。
しかも最初からムチャクチャ都合的展開：まあいいか。

2011／03／30：感想での指摘に伴い、都合的大改編

伝記の2 主人公、再誕すること

―ズキッ―

―ズキズキッ!―

「んぐ、んっ…」

頭に走る痛みが、それまで闇の中にあつた俺の意識を表層部まで引き上げてきた。背中に感じる感触から察するに、どうやら俺は横になっているらしい。

「ん…ん、んん？　ここは…」

「気がついたかしらん？」

そこはかたなく眠たい頭を覚醒させるため、体を起こして目を開ける。

すると視界に映ったのはショッキングピンクのビキニを穿いた、筋肉ムキムキのオカマだった。

直後、俺の頭は音速を超えた速度で覚醒する。

そして本能が体を支配し、本能が理性を凌駕する。

「ふんっ！」

―バギィッ!!―

次の瞬間俺は今まで寝ていたらしい場所から即座に立ち上がり、跳

躍。

そして眼前に聳え立つ放送禁止の存在の顔面めがけ、渾身の空中跳び膝蹴りを叩き込んだ。

「ぶるるるるあぁっ!!」

『る』を物凄い巻き舌で叫びつつ、鼻から鮮血の弧を描いて吹き飛ばすオカマ。

…よし、悪は去った。

「なああにさらしてくれよんじゃこのクソガキがあああぁっ!」

と思いきやすぐに復活し、またもおぞましい表情で俺ににじり寄るオカマ。

「そおいつ!」

—ガスッ!—

「あふっ…」

そのしゃくれた顎先に拳の先端部を当て、脳を揺すってやる。

こうする事で人間の脳は正しく機能しなくなり、脳震盪と言う症状に陥るのだ。

…まあこのオカマが正しく『人間』であればの話だが。

3分後

「んはっ!？」

M字開脚で気絶していたオカマが、意識を取り戻したらしい。

「気が付いたか？」

「…あらん？　ワタシは一体…ここはどこ？」

「それは俺が聞きたいんだけどな…」

オカマは俺のセリフを聞いて立ち上がると、ズレていたビキニを調整して立ち上がる。

デケェ！

つかデケェ!!

デカすぎだろ!？

はみ出してたモツのでかさが半端じゃねえ!!

「平常時で30cmは人間じゃねえ」

あれでエレクトするとうなるんだろう…ドキドキ。

つか絶対嫁は泣くな。

「んもう、恥ずかしいわねん…こんなの、私達漢女おとめの間じゃまだまだなのよん？」

「つう事はナニか、そのデカさで掘るのがイイと？」

「もちろん掘られるのもね…って、やだはずかしいわん」

ダメだコイツ、正真正銘の変態だ。

…いやいや話を戻したほうが賢明だな。

「さて…ひとしきり話が落ち着いたところで本題と行こうか、アンタ…貂蟬だろ？」

俺の声色から俺の心中を察したのか…不意に真面目な顔になるむきむきオカマ。

「あら、ワタシの事を知ってるのん？」

「いや、姿格好と名前を知ってるだけさ」

「どうしてん？」

どうしてって…理由とするなら、あの及川アホンダラから『貂蟬の萌え画像』

と称してこの筋肉オカマの画像が送られてきた事があるからだ。

何でも『恋姫無双』と言う18禁PCソフトの登場キャラで、可愛い子が多いらしい。

あ…確か携帯に貂蟬の画像が残ってなかったか？

そう考え、俺はポケットに入っている携帯を取り出しデータフォルダ内を探す。

「お、あったあった…これ、アンタだろ？」

言って貂蟬に見せたのは、件のアホンダラから送られてきた貂蟬の画像。

画像下部に『貂蟬』とロゴが入ってるし、画像の貂蟬と眼前の貂蟬は全く同じだ。

「あら、ワタシの画像ね？」

「ああ、ダチ…いやツレから送られてきたんだ…貂蟬の萌え画像ってタイトルで」

にしても『恋姫無双』か…タイトルだけ聞くとコー〇ーの『三國無双』を思い浮かべるんだが。

懐かしいな…三國無双。

呂布で雑魚を吹き飛ばすのが楽しかったっけ。

ちなみに一番好きなのは甘寧…孫子兵法装備して阿斗拾って真無双乱舞。

そういえば昔、ジャンプに『1番線に、無双乱舞をする甘寧が参ります』ってネタがあったっけ。

「なるほど…このアタシが『貂蟬である』と言う事は知ってるアナタは、外史の観察経験者って訳ねん？」

「外史観察経験者？ そんなモンになった覚えは無いが、外史ってアレだろ？ 正しい史実…いわゆる正史から外れ、正史の終局とは別の終局を迎える『形』を持った世界の事だよな？」

「そう、その外史よん」

この貂蟬が言う外史とは、歴史からは外れたがそれでも形を保ったまま…世界としての終焉を迎える形を持った世界の事を指す。

例えば有名どころだと某鍵のCLANADで、ヒロインの少女が主人公の娘を産むシーン…あれで13個（だっけ？）の光の球を集めておくとその少女は存命するのだが、球が足りないと少女は出産

と同時に死んでしまう。

どっちが正史でどっちが外史に当たるかは知らないが、ともかくそう言った：正しい流れと、それに酷似しながらも最終的には大きく違っている流れの両方を有する世界とか物語を指す。

三國無双を例題に出すならば、三國無双の元となった設定：つまり三国志を正史とし、三國無双が外史に当たる。

つまりは正史を元に作られた、似て非なる別世界：いわゆるパラレルワールドと言うのがそうなる。

ああ、三國無双をプレイすると言う事は『三国志の外史を垣間見る』と同義なわけか。

「それで？」

「ワタシはこの外史が育ち、いずれは終局を迎えるのを監視・管理してるんだけど：その外史と外史の境界の役割を果たす門の鍵が、つい先日破損しちゃったのよん」

「外史と外史を隔てる門の鍵？」

「そうよん：そしてその鍵が壊れた事によって、とある外史と外史が：極僅かな部分で融合を果たしちゃったのん」

貂蟬が言うには各外史は未来に向かって平行に並んでおり、多数の境界線によってその存在を保っていると言う。

稀に世界を超越した存在：例えばこの貂蟬オカマの様に、自らが管理する外史に相応しくない終局が用意されるのを防ぐ為：境界を乗り越えられる存在もいるとか。

「赤い夜とその前後？」

「孤児院絡みのイベント？ 随分コアなネタねん…でも認識としては間違っていないわよん」

「ふむ…じゃあ質問その2、なぜ俺が関係あるんだ？」

「それがさっきも言った境界の鍵なんだけど、アナタの頭に破片があるのよん」

「俺の頭に、鍵の破片？ ……オイオイ、まさか」

「ご明察、その『融合した極僅かな部分』を区切っていた境界の門の鍵…それはアナタの学園にあった、あの銅鏡なの…そしてその銅鏡こそ『ワタシの力の結晶』なのよん」

ヤブ医者め…レントゲンもCTもMRも異常無しだって言ってたじやねえか。

俺の頭蓋内に銅片があるんだとよ！

つか力の結晶って何だ？

この破片が頭にあることで俺に何かあるのか？

「ふむ、まあ銅鏡の破片の事は今は良いだろう…で？ 最期の質問だ…鍵が頭の中にある俺とこの場所、そして貂蟬…アンタとの関係は？」

「それが…驚かないで聞いて欲しいのん…今から数日の後、今は部分的欠損で済んでいる境界の鍵…銅鏡が、事故により完璧に壊れてしまうのん…その際、アナタが良く知る人物が…鍵が持つエネルギーに巻き込まれ、三国志の外史に飛ぶのよん」

俺が良く知る人物？

及川おいかわか？

いや北郷ほんごうか？

まあ誰でも良いや。

「で？ ソイツを救えばいいのか？」

「違うわん、そうじゃないの：実はこの『外史』なんだけどねん？
その巻き込まれた知人のせいで不安定になる可能性が高いのよん」

外史とは正史に引つ張られやすい物で、放っておくといつの間にか
大々的には正史に限りなく近い外史になるそうで：貂蟬曰くそれが
外史として、本来あるべき正しい形。

ただこの知人が存在する外史は話が違い、知人が存在するせいで不
安定になり：元来『その外史』として迎えるべき終局からかけ離れ
た物になるかも知れなくなる可能性が高いことが分かったらしい。

「終局とはかけ離れた三国志の外史：じゃあ例えば赤壁の戦いで、
介入者のせいで曹操が敗走しない可能性とか：介入者のせいで定軍
山の戦いで夏侯淵が生きていたりする可能性があるって事か？ それ
じゃまるつきり三國無双じゃねえか」

「そうね、このアナタの知人：便宜上『介入者』が例えば黄巾側に
付いちちゃって、黄巾の乱で諸侯が敗北：そのまま黄巾族が天下統一
をしちちゃたりする、いわゆる『黄巾賊エンド』を迎える可能性があ
ったり：…反董卓連合戦で、介入者の存在によって諸侯が敗北して
董卓が世を治める『董卓エンド』を迎える可能性があったり：…ヒ
ドイ物だと劉備・関羽・張飛の3人が出会って桃園の誓いを果たさ

ず、介入者が劉備に成り代わって介入者・関羽・張飛の3人で桃園の誓いを果たし、そのまま三国を統一しちゃう終局を迎える可能性……ってのも出てくる訳よん」

「はあ！？ その介入者が存在する外史は、そこまで正史から外れるのか？ ちなみに今言った『介入者が桃園の誓いを行って三国統一をする可能性の外史』だと、ハブられた劉備はどうなるんだ？」

「もちろん何も知らない庶民として過ごす、もちろん時は乱世だからいずれは賊に襲われて死亡よ……そしてその事態が、その外史の影響を受ける正史に大きな影響を与える……例えば劉備の血を引くであろう子孫の、絶対存在数が極端に減少したり」

貂蟬曰く、外史1つが消えると正史に反動が行き……結果として正史が歪むんだそうだ。

つかアイツだ、絶対及川が介入者になるんだ。

アイツじゃなきゃそんな結末はありえないし、考えられないからな。

「そうなの……で、最も性質が悪いのが終局の後の話なの……本来ならば正史に酷似した外史として、あるべき形で終局を迎えるはずだったんだけど……介入者が存在するせいで史実の流れが乱れ、ありえない形の終局をもたらすの……でも正史の外史に対する修正力・干渉力と言うのは無情かつ残酷で、そんな『ありえない形の終局』を認めようとせず……結果として最終的にその外史は、介入者自体を『歪み』として……その外史を消滅させてしまうの」

「なるほど……つまりその介入者を放置すると、俺は知人を一人失う事になるのか……けど俺、死んでるんだよな」

「そう、そこなのよポイントは」

言って貂蟬は右手人差し指を立てて左右に振りつつ、飛ぶ鳥も落とす勢いのウィンクをばちこーんと放った。

…悪い、正直キモい。

某海賊マンガの『エン○リオ・イ○ンコフ』のウィンクなんざメジやないぐらいキモい。

「アナタは既に、アナタの存在していた世界では故人扱いなの…もちろん肉体は存在しない…でもここにアナタは存在する、それはどうしてだと思う？」

「…余り実感が無いが、俺が幽体だとか霊体だとか…いわゆるお化けって言われる存在だから…か？」

「そう、つまり今のアナタは魂だけの存在と言う事よん…：そして本当なら肉体から離れた魂はそのまま輪廻の輪に組み込まれるんだけど、アナタは頭の銅鏡の破片がそれを許さなかった…銅鏡は元はと言えばワタシの力の破片、だから元来の持ち主たるワタシの下へ来たのよん…アナタの魂を伴って」

つまりアレか？

銅鏡があったせいで俺は成仏できず、輪廻の輪に組み込まれなかったから生まれ変わる事も出来ないって事か？

ば一刀め…枕元^{かずと}に立ってやろうか。

「さて、ここまでは良いかしらん？」

「…おう」

「じゃあここからが本題…さっき言った『介入者が存在する外史』

は、最終的には消滅すると言うのは話したわねん？」

「ああ、聞いた…それが？」

「外史の消滅は防がねばならぬ事態…けどアタシは数日の後に訪れるであろう、銅鏡の完全破損…つまり『力の喪失』に備えて動いちゃいけないの…で、そんなアタシの元へ『アタシの力』を宿したアナタがやってきた…」

一刀がきつかけとなった、あの資料室の事故で俺は銅鏡の破片と言う『貂蟬の力』を宿し…そのまま死んだ。

死ぬ事によって魂は輪廻の輪に組み込まれるが、貂蟬の力を宿したままだったせいで俺は輪廻の輪から外れた。

そして数日の後、貂蟬の力の結晶である銅鏡が完全に壊れ…その際、俺の知人が1人外史へ飛ばされ…同時に貂蟬は力を失ってしまう。この知人は、自身が存在する外史をいずれ…自身ごと消滅させる可能性がある。

外史を管理する貂蟬にとって力の消失は、外史消滅を加速させる要因で…貂蟬はそれを防ぎたい。

だが力を失った貂蟬に外史消滅阻止は不可能…そこへ自身の力を宿したせいで、輪廻の輪から外れた俺がやってきた。

俺には貂蟬の力がある。

…つまり？

「…なるほど、俺に何かをさせたいんだな？」

「察しが良いわねん…その通りよん」

貂蟬は考えたらしい。

その介入者はその外史にとってイレギュラーな為、その外史が消える。

ならばそこへもう一つの…それも管理者の力を有した、つまり代理管理者をイレギュラーとして飛び込ませれば？

「介入者と言うマイナス要素に、管理者の力を有した俺と言うプラス要素をぶつけ…いずれ訪れる外史消滅を回避しよう、と…そう言う事なんだな？」

「ええ、そうよん…そしてアタシはアナタが頑張っている間、全力で力の回復に努めるわ」

貂蟬曰く、失った力の再結晶化には人間換算で約80年の時間が必要らしい。

「80年もかかるのか？」

「ゴメンナサイねん…しかもこの『80年』って言う数値なんだけど…『一切の障害が無く、全てが滞りなく行われた場合』の概算数値なの」

ンなアホな。

「そして…仮に今のアナタをそのまま外史へ送ったところで、アナタはただのヒト…いくら外史と言えど向こうは三国志の外史、一般人が80年も生き残るには相当キツイと思うのよん」

三国志の世界で一般人。

劉備軍の劉備シナリオで義民兵が出てくるステージがあったが…そうか、武将と民とじゃ確かに体力差が大きかったな。

ちなみにあのステージ、義民兵を斬ると敵将の士気が上がってえらく手ごわくなるんだっけ？

「……大丈夫なのか？」

「やっぱり不安でしょう？ だから、ワタシはアナタを代理管理者として外史へ送るにあたり、アナタに宿ってるアタシの力をアナタの魂へ『アナタ自身が本来持つてる力』として定着させる…けど、アナタの魂へアタシの力が馴染むのに結構な年数がかかるのよん」

「どれぐらい？」

「そうね…ざっと17年ぐらいかしら？」

「17年！？ そんなに時間がかかるんじゃ、その分だけ外史の崩壊が進むんじゃ…」

「心配しないでねん…アナタが行った後の17年は…こちらで言う17日と同じなのよん」

貂蟬曰く…外史で過ごす時間と俺が過ごしてきた時間概念では、世界の境界と言うものを挟むせいか、外史の1年＝生前の日本で1日と言う事になっているらしい。

「…と言う事は、俺の肉体は今頃墓地へ？」

「そう言う事よん」

「なるほど」

つまりその介入者が現れるまでの17年で、貂蟬から貰った力を使いこなして物にし：17歳の時に現れるであろう介入者に干渉しつつ、差し引き残り63年の時を生きれば良いのか。

「とりあえず80年の生存：それさえやってくれれば何をしても構わないわん」

「ほう？」

「アナタが思うままの世界にするもよし、ハーレムを作るもよし：ああ、介入者を殺す事だけはしないでねん？ 隣接する平行世界に大影響が出るから」

「分かった：じゃあ行こうか？」

「良いわよん：じゃあアナタにはあっちの世界で力を蓄える為、頭に埋まってる銅鏡の力を『能力』として備えてあげるわん：6つまで言ってちょうだい」

そう言えば17年十干渉を始めて以降の63年間：計80年を生き延びる為、俺に力を与えろとか言ってたよな。
そうかそうか、じゃあ何にしようかな。

「：なあ貂蟬、その6つの能力はどんな能力でも良いのか？」

「身体能力超強化とか、成長限界突破とかって言うならまだしも：魔法だ魔術だって言うのは流石に無理があるわねん：三国志の世界には魔法なんて無いし、あっても氣や妖術・仙術・同術の類だけ：だからその手の力を欲しがるなら、三国志の世界にちなんだ能力に自動変換されるわん：あと人相もその世界に合ったものにしかなら

ないわよん？　と言ってもアナタの今の人相は向こうでも大丈夫だけれど……まあ三国志基準でなら何でも、と言う条件を付け加えておくわん」

「そうか、じゃあ：『三國無双の呂布を凌駕する身体・戦闘能力の素質』と『成長限界突破』と『氣の扱い方の素質が最初から最高値』と『毒耐性』と、後は：そうだ：『巨乳ハーレム被認可体質』と『俺が俺である全て』の6つで頼む」

「『三國無双の呂布を凌駕する身体・戦闘能力の素質』『成長限界突破』『氣の扱い方の素質が最初から最高値』『毒耐性』『巨乳ハーレム被認可体質』『俺が俺である全て』ねん？　任せてちょうだいなん」

―バチンッ！―

そう言って貂蟬が指を鳴らすと、頭のとっぺんから：何か暖かい物が体の中を走り、力がみなぎるような感覚がもたらされた。

「これで良いわん」

「よっしゃ！」

ちなみになぜこの6つかと言うと、まず『三國無双の呂布を凌駕する身体・戦闘能力の素質』は向かう先が戦国時代だからだ：目的果たす前に死にたくないし、身体能力と戦闘技術が呂布を凌駕するならそう簡単には死なないだろうと踏んでのこと。

次の『成長限界突破』は言わずもがな呂布を超えるためのブースター的能力。

『氣の扱い方の素質が最初から最高値』は、氣と言うものは医学的に立証された…人体に備わるエネルギーで、これの扱いに長けるならば自己治癒や自己強化も思いのままになるから。

そして『毒耐性』は、いくら呂布を超えるスーパーボディでも毒には弱いはず…ましてや三国志の平行ワールドなら、毒矢による暗殺も十分にありうる…だからそれに対する防御策だ。

最後2つの『巨乳ハーレム被認可体質』『俺が俺である全て』は言わずもがなでとこか。

「じゃあ最短で80年後に、また会いましょう…」

こうして俺は80年後の貂蟬（の力の再結晶化成功）を待つ為、今から17年後に…いずれその世界を消滅させると言う介入者が現れる、三国志の外史へと旅立って行った。

…のだが…

「おぎゃああああああああっ！（なんじゃこりゃあああああ
あああっ！）」

次に気が付けば俺は赤子で、物凄い美人に抱き上げられていた。

「（なんじゃこりゃって：そりゃそうよん、言ったでしょ？ 17
年：つまりアナタはこの世界で、生まれたところから17年を始め
るんだもの）」

「あぎゃっ、おぎゃ！ おぎゃああああああああっ！（この糞
オカマ、最初に言え！ これから数年は羞恥プレイかあああああ
っ！）」

：と言うオチが付きました。

ちゃんちゃん。

伝記の3 刃、立場を理解すること（前書き）

早くも原作キャラ（と言っても幼少期）と遭遇。

察しのいい人は既に察しているかも…。

またオリキャラも登場します。

この話以降サブタイの『主人公』は、主人公の真名である『刃』へ変わります。

伝記の3 刃、立場を理解すること

どうも、刃です。

ようやく1歳になりました。

…え？

それまでの生活描写はどうしたって？

ンなモン『キンクリ』するに決まってるだろ！？

朝起きると、地球じゃお目にかかれないような超美人が、コレでもかって言うぐらい大きなおっぱいを顔に押し付けてきたり（授乳）とか…それが済むと下の世話…

言わ せ ん な ！

まあそれ以外にも驚いた事は沢山あるんだが、一番驚いたのがコレ。

真名^{まな}

真名はその人間の本質を示す聖なる名前で、心を許した人間にのみ呼ぶことが許される名前で…許可無く呼べば殺されても文句は言えない物らしい。

つかその設定、どっかで聞いた様な…。

ともあれ俺の真名は『刃^{じん}』だ。

そして真名を含めた本名が…

姓^{せい}…呂^{りょ}
名^な…堂^{どう}

あざな せんが
字…戦牙

真名…刃

呂堂 戦牙…転生前の名前が『呂堂 刃』だったから、自己紹介の際に『呂堂と呼んでくれ』とでも言えば十分に誤魔化せる。

字が厨二臭満載だとか色々言いたい事はあるだろうが、文句は受け付けないので悪しからず。

そしてウチの真向かいにはさっきの超美人…つまりは母さんの妹が住んでるんだが、先月娘が生まれたそうだ。

姓は呂、^{りよ}名は布…^ふ字は奉先、^{ほうせん}真名は恋。^{れん}

赤毛の可愛らしい、将来は絶対美人になる女の子。

生まれたばかりとは言え、俺は彼女の姓名を聞いて思わず絶句した。何故なら俺が知る『呂布』とは、高身長で豪腕を誇る男だったからだ。

それがどうして女？

まあたまたまこの世界の呂布だけが女なのかもしれない。

ともあれ生まれて授かった俺の名前、^{りよ}姓が呂だから呂布か呂蒙の關係者じゃなからうかとは思ってたが、まさか呂布の従兄妹^{いとこ}とは…。

つかここ三国志の外史だよな？

呂布に従兄妹なんていたっけ？

俺、貂蟬に頼んで手に入れたチートに『呂布を凌駕する身体能力』があったと思うんだが…大丈夫なのだろうか。

まあそれは今考えても仕方が無い事だ。

ようやく体が落ち着きつつあるので、今日から動乱の世に向けて体を作っていかなばなるまい。

しかし1歳児にできる事と言えば。

「んしょ、んしょ…んしょ、んしょ…」

家中を歩き回り、基礎体力をつける事。

これでも同世代の子供の中では成長が物凄く早いらしく、生後半年で始めて喋った言葉が『おはようございます、ははうえ』なのだから仕方無いと言えば仕方無いのか？

まあ1歳で部屋中を歩き回るし、筆を片手で竹簡に（達者な白文で）日記を書くんだから神童なんてあだ名がついても不可抗力だ。

家から出れないからこの場所は分からないが、格子窓から見える外の景色を見るにどこかの村らしい事は分かった。

ちなみに家族構成は父と母と俺の3人暮らし。

両親はどちらも若く、武芸者だ。

この世界は女性上位の傾向が強く、両親が手合わせをしているのを見た事があるが…父の勝ったところを見た記憶が無い。

—ドゴン！—

あ、また父が沈んだ。

親父よ、その沈み方はどうかと思うぞ？

「ふうっ！　良い汗かいたわ」

裏庭にリアル犬神家で突き刺さった父を見もせず、額に浮いた珠のような汗を拭う母。

「…朱寧しゆねいよ、額の汗を拭うより先に僕を引き上げてはくれないのかい？」

そんな母に対し（あの姿勢で見えているのか！？）愚痴をこぼす父。

「あら、今日こそは勝つって息巻いて…受身もおろそかにしたのはどなたかしら？ 天覧てんらんさん？」

父は姓が呂、名が奉山ほうざん、字が天覧…真名は響ひびき。

この村の自警団団長を務める人物で人望も厚く、この村の中で頼れる大人。

愛妻家・家庭重視派の朗らかな人格で、武器は大戦斧…長柄の片刃斧ってやつと、無手…つまり徒手空拳。

母は姓が嚴げん、名が伯はく、字が朱寧しゆねい…真名は珊瑚さんご。

元自警団副長で、昔は荊州の中郎将の補佐もやっていたらしい。家庭重視で朗らかなのは父と同じ。

武器は槍と、昔の上司の影響で弓と剣も使う。

真名を呼ばないのは、裏庭とは言え他人ひとの目があるからだとか。

にしても父が長柄片刃斧と徒手空拳、母が弓と剣……史実の呂布は武芸百般で、三國無双の呂布は長柄の片刃斧＋槍のような『方天画戟』と弓の名手だったらしいが…運命の示し合わせだろうか？

「んしょ、んしょ…はふう、つかれた」

俺は息を吐きつつ座り込む。

流石に1歳児の体だと出来る事に限界があるな。

腕立て伏せなんか1回が限界だし…

「ただいま、あら刃…今日の特訓は終わったの？」

そんな事を考えていると、母がその手で父を引き摺りながら帰宅した。

「あだっ、ちょ…痛いよ珊瑚…僕の顔が、うぎゃっ！ 頼むから、降ろし…うぐっ！」

「とっくんはおわかりました…ははうえ、ちちうえをおろしてあげてください」

「おお！刃よ、私の事を心配…」

「よそこにおおむけできないかおになりますよ」

…そんな…」

俺の言った“至極当然”の意見に父が崩れ落ちた。

だって足首を掴まれて、顔面を地面にこすり付けてんだもん…大根おろしならぬ人面おろしだよ…その内鼻やら唇と言った突起物が擦れてなくなり、能面みたいに…ヴォ○デモート卿見たいな顔になるんじゃないか？

「そうね、流石に夫が能面じゃ可愛そうね…アナタ？ 次回からはもう少し、攻め手を考えて下さいね？」

―ドサツ―

「あふっ」

母はそう言って父を解放し、土間でそれを見ていた俺を抱き上げる。

「きょうはなんせんなんしゅうでしたか？」

「今日も無敗よ？ 下手に負けたんじゃ師匠に申し訳が立たないもの」

今日も無敗。

それだけ親父は負けている計算だ。

男児の父として情けなくないか？ 親父よ…

と、母に抱かれていると強烈な眠気が襲ってきた。

：最初に言っとくが胸が気持ち良いのではない、1歳児だから仕方ないのだ。

1歳だから仕方ないのだ…大事な事だから2回言う。

「なるほど…ふぁ…ははうえ、ねむたくなってきました」

「あらあら、私が抱っこすると眠たくなるのね？ いいわ、夕餉には時間があるからゆっくりと寝なさい」

「はい、おやすみなさい…ははうえ」

こうして俺は意識を落とした。

：父は復活したのだろうか？

伝記の3 刃、立場を理解すること（後書き）

次回、冒頭でまたキンクリします。

伝記の4 刃、育つこと（前書き）

恋姫では使われてるのに、書いてない武器もあるかも……。
なお当作品では1刻を15分としております。

伝記の4 刃、育つこと

5歳になった刃だ。

うん、また『キンクリ』させてもらった。

まあ今日までの経緯を掻い摘んで説明するなら、4歳の後半までは体作りと読み書きの訓練に明け暮れた。

今じゃ同世代の中では一番足が速いし、売り物の書物ぐらいなら十分に楽しんで読める。

ちなみに従兄妹の呂布：恋は、同世代のナンバー2だ。

かけっこも読み書きも、食事量も喧嘩も俺には勝てない。

さてそんな時期を過ごし、先日5歳になった俺だが：今日は朝から裏庭にいる。

そう、いよいよ武器を使った訓練に入るのだ。

：理由か？

80まで生き：世界の崩壊を防いで正しく輪廻転生をする為、とは言えないから『もし何かあっても家族や友達を守るように』と言う事にしてある：母さんは見抜いているっばいけど。

「さあ戦牙、どれを選ぶかしら？」

母に指し示された先には無数の武器がある。

武器を使った訓練をしたいと言った俺に対し、母はそれを笑って快諾：『準備をするから明日からね』と言っていたのが昨日だったはず。

さて用意されていたのは短刀・曲刀・大曲刀・剣・双剣・大剣・大槌・大斧・槍・鎖鉄球・薙刀（偃月刀）^{えんげつとう}・棍・多節棍^{べん}・鞭^{べん}・弓、

そして無手用の籠手の15種類。

母曰く

短刀…軽く小回りが利いて扱いやすいが殺傷力が低く、相手の懐に潜り込まなければ真の価値が出ない。

曲刀…斬る事に向いた近距離用の武器で、殺傷力は高いが突きには不向き。

大曲刀…刃の幅&刃の厚み&長さを増した曲刀で、殺傷力は非常に高いが重いので扱いが難しい…斬ると言うよりは薙ぎ払う、あるいは叩きつけると言った使い方をされる。

剣…刺す事に向いた近距離用の武器で、殺傷力は高いが斬りには不向き…ただ物によっては切断剣としても運用可能。

大剣…刃の幅&刃の厚み&長さを増した剣で、殺傷力は非常に高いが重いので扱いが難しい…刺すと言うよりは突き砕く、あるいは叩きつけると言った使い方をされる。

大槌…大曲刀や大剣を超える重さを持つ武器で、力任せに振り回して周囲の相手を弾き飛ばすのが効果的…破壊力を生む重量が枷となり、対人戦に使うのは苦勞する。

大斧…長い柄の先に分厚く重い斧を刃として取り付けた武器で、大槌に匹敵する破壊力を対人戦でも発揮できるようになっている…扱い方が扱い方なだけに、斬る事を狙うよりは粉碎と言った使い方が吉…防御には不向き。

槍…長い柄の先に先端の鋭い金属製の穂先をつけた武器で、柄の長さにより剣では危ない距離でも比較的安全に攻撃が可能…ただし狙った箇所を正確に突くにはそれ相応の訓練を要する…防御には不向き。

鎖鉄球…太く丈夫な鎖の先に、重い鉄の塊を取り付けた武器…振り回して使用するのが一般的だが、非常に重いので力及び制御力を養わなければ扱えない。

薙刀…大斧や槍よりは幾分短い、それでも長い柄の先に斬り・突きを兼用できる特殊形状の刃を据え付けた武器…振ってよし・突いてよし・薙いでよし・回して良しの逸品だが、扱いは難しい。

棍…大斧や槍、薙刀が刃を失った後の柄を有効活用できないかと作り出された武器…素材こそ違えど長い棒なので、突くか振り回すかの使い方しか出来ない。

この武器で大斧・槍・薙刀の型の練習を行う運用法もある。

多節棍…棍をいくつかの節で分け、節を短い鎖で繋いだ武器…鎖による動きの変化を掴めば変幻自在の攻撃が出来る。

弓…遠距離から相手を攻撃する武器で、集中力と筋力を両立させて始めて使える武器…鏃に毒を塗ったり火をつけて火矢としたり出来るが、要とも言える弦が切られると全く役に立たなくなる。

他の手持ち武器を持っていなければ辛いものがある。

籠手…攻撃用というよりは、獲物が相手に当たった時の反動を削いだり相手からの攻撃を防御する際に用いる事が多い物…基本は金属製で、肘から先を覆うようにして装着する物なので着用して殴れば

それなりに痛手を負わせられる。

…との事。

「私は剣と槍と弓、天覧さん…夫は大斧と、籠手を使った徒手空拳…近しいものなら教えるのも詳しくできるんだけど、戦牙はどうする？」

「母さんの槍と、父さんの大斧…俺は薙刀使いになりたい」

「あら、私達の武器の長所を両方とも合わせた武器が良いのね？」

「うん」

「なるほど…じゃあまずコレね」

手渡されたのは棍。

長さは2m10cm…ちょうど7尺、直径は1寸(3cm)の円状棍だ。

「いきなり薙刀を扱うと、体が追いつかない場合があるから最初は棍にしときましょう」

「はい」

「じゃあまず利き手で棍の中ほどを持って、逆手は棍の下の方を…」

こうして訓練は始まったわけだが…

「残り左右で50本！」

「はっ！ はっ！」

6刻（1刻が15分）の姿勢保持訓練、それと1日500本の振り下ろしと250本ずつの左右への薙ぎ払いを繰り返す。

―ビュッ、ビュッ！―

「6：4：2：はあいお疲れ様、お昼にしましょうか」

―カラン、カランカラン：―

「はぁ、はぁ：はい」

母さんの合図で棍を振るのを止め、俺は棍を手放す。

『どんな武器でもそうだが、一流の使い手になるためには日々の鍛錬を怠ってはいけない』

これは昼から夕方にかけて、俺に徒手空拳用の体術と体捌きを教えてくれている父さんの言葉。

継続は力なり：まさにその通りだと思う。

ちなみに予断だが、恋が薙刀の訓練を考えているらしい。

本人に聞いても理由を教えたくないそうだが、何かあったのだろうか？

こうして俺は地道な鍛錬を続けて行った。

伝記の4 刃、育つのこと（後書き）

次回、また冒頭でキンクリ予定。

：詳細に書くと原作開始まで何話かかるか分かったものでは無いので。

伝記の5 刃、最終試験へ臨むのこと（前書き）

強引設定大爆発！

2011/03/29...06	刃の武器名などを修正
2011/03/27...00	刃の年齢を修正

伝記の5 刃、最終試験へ臨むのこと

―ガキッ、ガンッ！―

「せいっ！」

―ブンッ、シュバッ！―

「甘いっ！」

―ガッ、ドスッ！―

「ぐっ！」

「それまで！ 刃、一本！！！」

おう、15歳になった刃だ。

武器の訓練を始めて今日で10年経つが、ようやく父さんや母さんと並ぶ力が身についた。

…随分『キンクリ』したなって？

そりゃそうだろう…話したってつまらないし。

例えば母さんの元上司の人（話を聞く限りどうやら血縁関係にあらしい）から遠距離武器の指南を受けたり、その友人を名乗る人から遠距離武器の指南を受けたり。

…遠距離武器の指南ばかりだなって？

気にしたら負けさ。

そんな感じであの日から毎日欠かさず鍛錬したせいかな、氣の扱いは

もはや人外ランク。

遠距離武器：と言っても弓なんだが：その腕前は奇跡級：今じゃこの村で俺に太刀打ちできるのは恋ぐらいしか居らず、父さんや母さんを相手にしてもまず負けない。

今も父さんの剣と俺の薙刀で手合わせをして勝ったところだ。

もちろん読み書きの訓練は欠かしてないし、帳簿のつけ方も履修している。

「強くなったわね、刃」

「いや、まだまだだよ」

『己の強さを誇れ、だが決して慢心するな』

これは転生前に在籍していた薙刀部の教訓で、己の強さに自信を持つのは良いが世の中は常に上には上が居る事を忘れるな：と言う意味だ。

『最強たるな、最高たれ』

これは両親と：件の師匠達から教わった武の心構えで、強きを突き詰めるよりも高みを突き詰めたほうが更に成長できる：と言う意味らしい。

「なあ、刃」

「何？」

「そろそろ頃合だと思うから話すが、刃：お前はその、私達及び自身でも培った武を何に使う？」

父さんと母さんが教えてくれた言葉の意味を反芻していると、ふと真面目な顔になった父さんがそう言った。

「…俺は、この武で己の守れる範囲の者を守りたいんだ」

「守れる範囲の者？」

「そう…父さんや母さん、向かいの叔母さんや恋…そして願わくば、この村の人を」

俺が今日まで、肉体年齢で15年過ごしたこの村は…村の規模としては小さい部類に入るだろう。

しかしそこには老若男女様々な人が暮らし、決して裕福とは言えないかも知れないがそれぞれの人生を精一杯生きている。

転生して数年の間は特に意識しなかったが、10歳を超え始めた辺りから急に意識するようになった。

きっかけはまた別にあるのだが、それは後々話す機会もあるだろうから置いておく。

ちなみに自分の手の届く範囲のモノを守ろうとする内に、俺の体は酷い傷痕が沢山目立つようになった。

どれだけの戦場を潜ったのか…正に満身創痍と言われそうだが、この傷痕は俺の誇り…氣を使えば消せるが、敢えて消していない。

「そうか…よし、刃」

「はい」

「お前に最終試験を課す」

「最終試験？」

「最近、冀州きしゅうの近くで不穏な動きがあるんだ」

冀州で不穏な動き？

三国志関連で冀州絡みの動乱…黄巾の乱か！

「冀州周辺では、黄色い布を装着した一団が賊と化し…近隣の村を襲っているらしい」

「恋ちゃんは親御さんの命で豫州よしゅう潁川えいせんへ実地訓練に行って、単身で三万の賊を討ったらしいわ」

母さん曰く…豫州は潁川地方にて発生した黄巾賊の蜂起に際し、朱儁しゆん及び皇甫嵩こうほうそうが派遣された。

朱儁は一足先に潁川で波才はさいと激突するも敗走…この際に恋が獅子奮迅の活躍で3万の黄巾兵を討ち、これが元で朱儁は安全に退避を成功させる…つまり恋が殿しんがり（撤退軍の一番後ろの部隊）を務めたわけだ。

なるほど、呂布の一騎当万説はこの時に出来上がったのか。

…にしても原作だと呂布は孤児で、生き抜くために武を磨いたと言われているが…ふむ、正史と外史の違いか。

「殿を務めて三万討ちか…恋の事だ、恐らくは無傷だろうな」

「ほう、流石は幼馴染…良く分かってるじゃないか」

「茶化さないでくれよ、父さん」

「そうだな…さて刃よ、実はこの朱儁だが…今は長社で、皇甫嵩と共に籠城しており…追撃に出た波才の大軍勢に囲まれているそうだ」

長社？

地名としてはちんぷんかんぷんだけど…三國無双で、皇甫嵩を総大将とする籠城戦のステージがあったな…確か皇甫嵩が自軍を鼓舞して氣勢を上げ、火計を用いて波才軍を混乱させ…打って出て波才を破るんだったか？

「つまり俺にはその長社へ行き、皇甫嵩軍を包囲している波才軍をブチのめせばいいんだな？」

「流石我らが自慢の息子だ…その通り、皇甫嵩を助けるんだ」

「刃にとって、いえ武人にとって最初の障害が立ちはだかると思うんだけど…刃なら乗り越えられると信じてるから…そんな貴方にこれを」

言って母さんはその手に、無骨ながら荘厳な…1振りの薙刀と、意匠が美しい弓…そして真っ赤な籠手の3種を手に入れている。

薙刀に至っては、どう見ても目立つ大きな片刃の剣が勇ましい。

「それは？」

「これは最終試験へ向かう愛息への選別よ」

「まずはこれ…刃の体つきや体裁き等、お前の武に関するすべての

情報を凝縮し結晶化した：特注の方天画戟だ」

方天画戟：三國無双において呂布が己の武器とし、その強さの代名詞ともなった武器。

大斧と槍の利点を併せ持ち、突く・刺す・斬る・割る・砕く・薙ぐ・払う・叩くと言った攻撃的動作各種を1本で行え：かつ、受ける・弾く・捌く・いなす・引っ掛けると言った防御的動作も1本でこなす武器。

その利便性故に扱いづらく、使いこなすには凄まじい鍛錬と天性の才能が要る。

八角柱の柄の先端に、穂先として斧状の刃と青龍刀のような刃。

刃の根元には宝玉を嵌めるような穴があり、その内部は十字型の細工物。

：俺が知ってる方天画戟とは随分と形状が違うのだが、まあいいか。

「銘を『飛刃赤戟』ひじんせきげきと言う：刃に彫ってあるだろう？」

「ああ、ある：飛刃赤戟ひじんせきげきか：」

俺は飛刃赤戟を手に取り、どんな具合か振るってみる事にする。

―チャキツ：ビュッ！―

―ブンブンブンブンブン：―

―ビュオッ！ビュンビュンビュンビュン：―

父曰く柄は特別に硬い鋼を素材に八角棍として仕上げ、相手の攻撃を受ける際に真価を発揮するよう設計：もちろん滑り止めと言う意味合いもあるらしい。

母曰く刃先は全て鋼に金剛石の粉末を塗りこんだ特注の合金を用いており、そんじょそこの武器では傷一つ付けられないほどの剛性を持たせたそうだ。

「長さは柄部が四尺で穂先部が三尺、重さは十貫ある…剛性を得る為に重量を犠牲にしたが、刃ならば軽々と振り回すだろう」

現代値換算で2mを越える巨大な長柄で、重さは37.5kgの超重量武器だそうだ。

(1貫≒3.75kg)

そんな…俺用に用意されたそれは、生まれてからずっと握っていたように手へ馴染み…持ち手に至っては吸い付くような感触を覚えた。

「っせえいっ!!」

—ビュオツ、ガギンツ!—

腰構えから突きを繰り出し、穂先で薙ぎ…振り上げて、降ろす!すると目の前にあった、訓練用の大槌が真っ二つに寸断される。

「…こりやすげえや、全力で振っても刃が折れない」

俺の筋力と言うか力は凄まじらしく、どんな武器だろうと本気で振るうと大地に亀裂が走る。

その威力のせいもあって普通の訓練用武器じゃ、接地の瞬間に刃先や柄が折れてしまい…何の役にも立たなくなる、と言う事がこれまでも多々あった。

「良い感じね…じゃあ次はコレ、格納機構搭載蜘蛛糸弓『朱雀』よ」

次に母が差し出したのは、普通の弓よりも少々小ぶりの弓。

この弓の最大の特徴は、弦と…弓部に仕込まれた可変式の折り畳み機構。

弦には蜘蛛の糸を紙縊り合わせ、1mmの太さにした物を3本用意して…更にそれらを三つ編みにした物が用いられている。

蜘蛛の糸は自然界に存在する中でも、最高級の強度と伸縮性を併せ持ち…強度は同じ太さの鋼鉄の5倍、伸縮率はナイロンの2倍もある。

鉛筆程度の太さに作られた糸を用いれば、理論上は飛行機を受け止めることができるほどであるとされる。

だがその強靱性故に、矢を番えて引き絞るのに凄まじい力を必要とし…俺にしか射れない。

だがその専用化した強靱な弦から放たれる矢は、凄まじい初速と射程距離を誇り…連射性も高いらしい。

弓の部分には持ち手の辺りで折り畳んで背負えるようにしており、咄嗟の時に高速展開して意表を突く使い方もできるそうだ。

可変機構は父さんの知り合いに頼んだそうだが、その知り合い…娘と同じくカラクリ好きらしい。

つかこの様式、どこの狩猟ゲームから引っ張って来たんだろうか。

—カコン…スチャッ、ギリギリギリ…—

—ヒュオッ!—

—スカァンッ!—

ともあれ試しに1矢射ってみたが、この弓も論外な性能を持っているらしい。

射ったのはごく普通の鉄矢なのだが、それが鍛錬用の大斧を貫通し…その向こうに立っていた的の中央に刺さっているのだ。

「鉄製の斧の刃を貫通するか…見事なものだな」

「それでもなお的の中央を外さない弓射力…刃？ 今度は矢穿ちをやってくれる？」

「わかった」

―スチャッ…キリキリキリ…―

―ヒュンッ！―

―バキン！―

立て続けに矢を射る。

放った矢は斧に開けた穴を正確に通り返け、先に撃って刺さっていた矢に命中…矢を綺麗に割って尚、木に刺さっていた。

先に射った矢と寸分違わぬ場所に再び矢を射る…これを我が家では矢穿ちと呼んでいる。

「頑張って弓を教えた甲斐があるってものよ…じゃあ最後がコレ、無手格闘用の握込式籠手…銘は『穿紅』せんこうよ」

籠手…ガントレットだな。

元来は手首の関節を保護し、武器を当てた瞬間に発生する衝撃を緩和するための道具だが…氣の扱い方をマスターした俺には、こんな籠手だって立派な…徒手空拳用の武器となる。

―ガチャッ、パチン―

―シュシュシュ、ボッ！―

―ブンブンブン…シュッ、ガゴンッ！―

手に装着してジャブジャブジャブブロー、フックフックフックアッパ―。

気が付けば目の前にあった…先ほど方天画戟で両断した大槌の鎚頭が、無残なまでにボコボコにへしゃげていた。

「はああああっ！」

そんなへしゃげた大槌の成れの果てに向かい、練った氣をパンチと共に打ち出す。

―ドゴンッ！！―

打ち出された氣塊はまっすぐ鎚頭へ飛び、着弾地点に拳大のトンネルを穿った。

どうやら向こうまで貫通しているようだ。

「ふむ…どの武器にも適性はあったけど、やっぱり方天画戟と弓と籠手に絞って正解だったね」

「そうね…さて刃、貴方はこれから死地に向かうのだけど」

「死地…はい」

「その意味、分かるわね？」

つまり人を殺す覚悟と、命を奪った責任を負う覚悟があるかと言う事。

転生前の世界では真剣の刃物を振り回す事なんて滅多に無いし、ましてや人殺しなんて恥ずべき愚行。

だがここはいずれ戦乱の世となる。

それゆえ無血決着なぞまずあり得ない：人と人の衝突はいつしか心と心、意思と意思の衝突になり：それは必ず、どんな量であっても出血が伴う。

時には腕や足の1本飛ばしたり、状況によっては首を刎ねる必要すらあるだろう。

つまりは理想の名の元に行う、首級制：敵対した相手の首を以て己の地位とする、合法的な殺人の必要があると言う事。

それ即ち己の理想を掲げる限り、罪悪感や拒絶感は早めに乗り越える必要がある事に他ならない。

「…はい！」

「…良い目ね、刃」

「よし、出発は今夜になる…生きている限り最後とは言わないが、刃の門出を祝って盛大な宴にするからな…大いに楽しむとしようか」

「おう！」

伝記の6 刃、戦場に立つこと（前書き）

オリキャラ及びオリ設定があります。
そして厨二臭満載なのでご注意を。

伝記の6 刃、戦場に立つこと

く 皇甫嵩 視点く
こうぼうそう

私は皇甫嵩：姓は皇甫、名は嵩、字は義真。ぎしん
現在はこの長社で賊徒を相手に籠城戦真っ只中の身。

豫州は潁川にて蜂起した黄巾の一団を鎮圧する為、同僚の朱儁が派遣されたが：一団を率いる波才の痛烈な反撃を受け、朱儁は敗走する事となった。

その際に殿を務めた、名も知らぬ少女の武勲もあって朱儁は無傷でここ長社へ逃げおおせる事ができたらしいが：

「報告します！」

「何だ？」

「南方3里の付近に砂塵を確認！」

「砂塵だと！？ 数は」

「それが、単騎です：牙門旗は無し、朱儁將軍敗走時に殿を務めた少女と風体が似ています」

「個人支援と言ったところか？」

「どういたしましょうか」

「ふむ、予定では火計を用いて波才軍を混乱させ打って出るつもりだったが…火計工作兵に伝令、計の発動はしばし待てと」

「御意！」

朱儁から聞いた話だけだったが、猛然と追撃に出た波才軍と朱儁軍の間にその少女は颯爽と現れたらしい。

そして朱儁に対し「…朱儁？」と聞き、それを朱儁が肯定するや否や夥しい殺気を撒き散らし「恋、殿…朱儁、逃げる」と言い残し…波才軍の元へ駆け出していったとか。

その少女の言う『恋』とは真名なのだろうから、姓名は知らん。だがあの少女の獅子奮迅の活躍により、波才軍は3万の兵を失ったのだ。

そして今はその少女がおらず、好機と見られたのか…3万の兵を失ったにもかかわらず、波才は本陣から6万の兵を率い…ここ長社で籠城する私たちを殲滅せんと、今も城外で攻城戦の構えを取っている。

「伝令！ 朱儁將軍より救援要請、波才軍が抑えきれぬそうです！」

「波才め…一度勝った相手だから調子に乗っているな？ 誰かある！」

「はっ」

「私は精銳二百を従え朱儁の援護に向かう、本陣はお前に任せる…いいな？」

「御意！」

朱儁とは幼き頃から寝食を共にした、竹馬の友とも言える親友だ。こんな…筋も義も持たぬ暴虐の賊共に殺されて良い言われは無い。

「……朱儁よ、死ぬ時は一緒だ」

私が死を決意し、朱儁と過ごした時間に匹敵する時を過ごした愛馬に跨り…精鋭の氣勢を上げんとした、その時だった。

「聞けい黄巾の賊徒共！ 我は命により朱儁殿そして皇甫嵩殿に加勢する者なり！ 賊共は怯えよ、震えよ！ 味方は立てよ、吼えよ！ そして氣勢を上げよ！ 我が方天画戟に断てぬ物なし…いざ参る！！！」

凄まじく心強さを感じさせる、張りのある大きな声が長社全域に木霊した。

く刃 視点く

長社は俺の生まれ育った村から程近く、全力疾走して9刻ほどの場所にあった。

：いや9刻、つまり135分も全力疾走する距離を程近いと言うかはさておこう。

見れば長社の周辺は、その身のどこかに黄色い布を巻いた人間が殺到しており：手には剣や鉞、弓などを携えている。

「あれが黄巾賊か：兵数はザッと見て六万から七万：よく考えれば恋の倍じゃねえか」

黄巾賊は張角・張宝・張梁の3兄弟が首謀者となっている動乱で、長兄たる張角が漢王朝への反乱を試みたのが中心原因。

『蒼天已死 黄天當立 歳在甲子 天下大吉』をスローガンに、役所の門等に甲子の文字を描いて回ったと言う舞台背景を持つ。

「：つと、状況整理とか知識把握と言う名の現実逃避をしてる場合じゃねえな……よし、名乗りを上げるか」

俺は手にした方天画戟を天へ突き上げ、腹の底から声を張り上げた。

「聞けい黄巾の賊徒共！ 我は命により朱儁殿そして皇甫嵩殿に加勢する者なり！ 賊共は怯えよ、震えよ！ 味方は立てよ、吼えよ！ そして氣勢を上げよ！ 我が方天画戟に断てぬ物なし：いざ参る！！」

言って俺は駆け出した。

く朱儁 視点く

―ガキインッ！―

「くっ…怯むな、押し返せ！」

―キン！キンッ！―

―ザシュッ！―

「これ以上は…ぐはっ！」

またもや我が眼前で、私が不甲斐ないばかりに1つの命が失われた。

私は姓が朱、名は儁、字は公偉…靈帝より大將軍の位を授かった何^か進^{しん}様に命ぜられ、豫州の潁川で黄巾の一団を討つ為にやって来た者だ。

精銳を率いて勇み挑んだは良いが、敵將波才が率いる賊徒共は思いのほか手ごわく…何進様の御顔に泥を塗る結果…生きながらにして敗走する結果となった。

生きている事に不満がある訳ではないが、ともかく私は助かった。

あの少女のおかげで。

その少女は濃紅の髪に引き締まった体軀をしており、私が朱儁であることを確認するなり…自ら殿を買って出て、追撃に出てきた波才軍3万を単身で打ち破ってしまった。

それが元でこうして皇甫嵩殿の籠る長社へ逃げ仰せたのだが、波才の執念はこちらの予想を上回るものだった。

—ギン！ガキン！カインツ！—

「ふんっ！」

—ズバツ！—

「ぎゃっ！」

今また賊徒の1人の首を飛ばしたが、こちらの消耗度合いたるや凄惨たるものだ。

いずれの兵もどこかを負傷し、治療もままならない。

あの時殿を務めてくれた少女がいるならこの窮地、必ず脱して礼を言いたい。

「皇甫嵩殿より伝令です！」

「義真から？ 何だ」

「我、精鋭を率いて救援に向かう…しばし耐えよとの事です」

…そうか義真、やはり竹馬の友だな…考える事が近しい。

ならばその気持ち、ありがたく頂戴しようぞ。

そう考え、手にした剣を握る力を更に込めた…その時だった。

「聞けい黄巾の賊徒共！ 我は命により朱儁殿そして皇甫嵩殿に加勢する者なり！ 賊共は怯えよ、震えよ！ 味方は立てよ、吼えよ！
！そして氣勢を上げよ！ 我が方天画戟に断てぬ物なし…いざ参る…！」

そんな、名乗りとも雄たけびとも言えぬ声が響き割り…

「うぎゃあああっ！」

「ぐわあああああっ！」

目の前に出来ていた人だかりの向こう…私を取り囲む波才軍の後ろの方から、人が埃を吹き飛ばすように…賊徒共が“本当に”吹き飛び始めた。

ゝ刃 視点ゝ

―ザザザンツ！―

「うぎゃあああっ！」

「ぐわっ！！！」

「がっ…」

俺の一振りによって3人が首ちよんぱと化し、頭が無くなった首から盛大な血飛沫を吹き上げる。

それでなくても俺の振るう戟は威力や速度が凄まじいらしく、武器を振った風圧や衝撃で相手は高々と…まるで『三國無双』をプレイ

している時のように、人が放物線を描いてバンバン飛んで行く。

手に伝わるは肉を斬って殺し、骨を砕いて殺し…と言う、初めての殺人の感触。

だが不思議と嫌悪感は少ない。

戦意高揚で感覚が麻痺してると言われればそれまでだが…罪悪感ばかりとあるんだ。

俺の方天画戟によりこの3人は命を失い、この3人と絆を深めていたであろう多くの人の心に…この3人が殺された傷を残しただろう事は。

死ぬのが嫌ならなぜ前線へ出た？

いや死ぬのが嫌ならなぜ蜂起した？

いやいや死ぬのが嫌ならなぜ黄巾賊に加わった？

…挙げればキリが無い。

しかしそれは全て『己の信じた正義による物』と断じられればそれまでだが。

「テメエ、死にやが…」

「遅いっ！」

―ドスッ！―

…れっ…」

仲間の死に憤り、剣を振りかざした黄巾賊の1人を刺して殺し…ま

だまだ居並ぶ黄巾賊へ方天画戟を振るう。

俺が軽く方天画戟を振るだけで、いくつもの命が消える。

己の信じた正義とは、他人には決して理解出来ない物だと俺は思う。

俺に薙刀を、刃物を握る事を、戦う事を…結果的に命を殺めると言うのがどう言う事を、昔…ばあちゃんが教えてくれた。

『良いか刃、薙刀に関わらず全ての刃物…武器は、握ったが最後、自衛ではなく人を殺める力を得ると言う事じゃ』

『戦う事と抗う事は似ておる…お前がお前の理論を持つ限り、お前の理論に従わぬ者は必ずおる…その者を叩き伏せるなり、問い諭すなり…それはお前にしては戦い、相手にすれば抗いとなる』

『殺める力は扱いに正義や覚悟と言った、いわゆる心構えが必要になる…そしてそれは、心から同調せぬ相手には決して理解出来ぬだろう…だが理解してもらう為には貫け、己の決めた正義や覚悟を』

『自らの正義や覚悟に従って動いた時、様々な物が動く…それは例えば心、それは例えば金…そしてそれは例えば命…等価交換と言う言葉があるが、ワシはあれは虚言じゃと思つとる…何故か？ 正義1に対し、動く物は1ではないからじゃ』

『正義や覚悟に則って動く…即ち理想を目指して動く時、動く物の中で失う物もあるだろう…しかし刃よ、失った物を拾おうとするな…それが例えば命であっても』

『決して理解出来ぬ物を貫き通すは己の意志、だからこそ受け止めよ…己が貫き通す中で失った物を、事実を…そして忘れず、己の糧と…血肉として生きよ』

『それが生きると言う事なのだ』

拾える物は拾いたい。

だが拾う事で失う理想がある。

ましてや俺は転生者…まだ理想に至ってない。

だが俺には守りたい物がある。

守りたい物を守ろうとする俺に、いずれその守りたい物を脅かす…この、賊と化した一団の正義は理解出来ない。

そしてこの一団に問い諭すと言う、つまりは平和的解決法は存在しない。

ならばどうするか…叩き伏せるしかない。

その結果、彼らに出血を強いようとも。

村のみんなを、手の届く範囲で守る事。

それが今の俺の生きる理由でもあるから。

「ぬうあああっ！」

—ブオンツ！—

「うわああっ！」

邪魔をするなら叩き潰すまで…そう思い戟を振る俺の視界に、黄巾賊達とは一線を画した…やや精強な男達に守られるようにして立つ、短髪の女性が映った。

佇まい及び装備品からして、恐らくは味方…そして護衛対象だろう。

―ブオンツブオンツ―

―ズバズバツ！―

「何だテメエは…うぎゃあっ！」

「ぐはっ…」

―ギリギリ…ヒュオッ！―

―ドスッ！！―

「そん…っ！」

女武将との間に立ちはだかる黄巾賊を、1人目は言葉の途中で戟の一振りですべて首を落とす…2人目は振り向きざまにまた戟で胴体を袈裟懸けで両断、3人目は2人目の死に動揺した瞬間を弓矢で射殺した。

―ギャリッ…ガキン！―

「俺の剣が一撃で…」

最後の4人目は振りかぶった剣を籠手で殴って、文字通り叩き折り…

「はあああっ！」

—キュイイイ…—
—ドンッ!—

瞬時に練り上げた氣弾を喰らわし、その爆風で遙か彼方まで吹き飛ばしてやった。

あの威力に高さと速度…無事じゃ済まないだろう。

「…」

そんな事をしていてふと、呆然とした表情でこちらを見ている件の女武将の視線に気が付いた。

「何進大將軍より賊の鎮圧に派遣された朱儁殿とお見受けします」

「っ!? ああ、いかにも…私が朱儁だ」

…やはりこの人が朱儁か。

朱儁が女性なら、皇甫嵩も恐らくは女性。

朱儁と言えば副長的イメージが強いが、眼前の女性はそうは見えない。

ともあれ彼女の味方である事を示さねば。

「私は故あって貴殿の味方、これより貴軍に加勢し賊を討ちます」

「……そうか、かたじけない…」

「いえ、ではご指示を」

「ここは大丈夫そうだ…よし、私を案じて義真…皇甫嵩がこちらへ手勢を伴って向かってきているはず」

会ってすぐの他人を、己の命を預けれる者として即座に信用できるのも武将らしい。

「…皇甫嵩殿と合流して反転し、賊の首魁を討てばよろしいので？」

「出来るか？」

敵将は…波才だな。

黄巾賊に属す中でかなり有名な武将だったはず。

同じくらいの武将として張曼成ちょうまんせいや韓忠かんちゅうと言った武将もいたはずだが『三國無双』の【黄巾の乱】で経験値稼ぎとして倒しまくってた位にしか記憶に無い。

やれるだけやるつもりだが、負ける要素は薄そうだ。
だから俺は朱儁の質問に胸を張って答える。

「無論！」

「よし、願わくばこの戦場から…皇甫嵩と共に生きて帰りたいものだ…頼んだぞ！」

「お任せ下さい、必ずや敵首魁の首を揚げ…皇甫嵩殿と共に生きて帰還致しましょう」

こうして俺は長社城内へ駆け出した。

伝記の7 刃、帰還すること（前書き）

ストック終わりました。

連続投稿は終了です。

恋がキャラ崩壊を起こしています。

2011/03/19	(土)	00..11	刃の年齢間違いを修正。
2011/03/27	(日)	19..42	刃の年齢間違いを更に修正。

伝記の7 刃、帰還すること

（刃 視点）

ほとんど敗走確定だった状態での反撃だったせいか、朱備さん及び皇甫嵩さんの軍の士気は低く：正直邪魔だった。

だからこそ俺個人が単身で奮闘し、結果として波才の首級を揚げる
ことが出来た。

もちろん波才軍6万の軍勢を壊走させて。

後に知った事だが：この戦闘で波才軍は死者約2万、負傷者約3万
2千の痛撃を被っていたそうだ。

「凄まじいな：」

「あ、皇甫嵩殿：お疲れ様です」

「いや、貴殿が抱えた疲れに比べては我らの疲労等然したる事もあるまい：」

「いえいえ」

あれからすぐに皇甫嵩さんと合流し、その周囲を取り囲んでいた黄
巾賊200を殲滅した。

皇甫嵩さんもやはり女武將で、青髪の凛々しい女性だった。

皇甫嵩、字は義真：冀州きしゅうは広宗で、奇襲により張梁を討つ武將。
ちようりよう

件の無双シリーズにも、彼を総大將に据えて張梁を討つシナリオが
あった気がする。

：こここの皇甫嵩さんは女性だけでも。

「それにしても貴殿は強いな」

「いえいえ、それほどでも…まだまだ鍛錬が足りぬ、年端も行かぬ若造にございます」

とりあえずは謙遜。

まあ結局のところ100を超えた辺りから数えるのがめんどくさくなった。

頭の中では曹操さんが『貴様こそ真の三国無双よ!』と言っていた気がするが、戦局の中盤ではもはや機械の様に黄巾賊を討ち回った。

振り、斬り、薙ぎ、突き、討つ。

殴り、蹴り、投げ、撃ち、討つ。

技量面での実戦経験とすれば相当な経験を積めたかとは思う。

特に氣の扱いに関しては上々の収穫で、今なら徒手空拳で『波○拳』とか『か○はめ波』

剣に氣を纏わせて『極○剣』とか『アバnst○ツシュ』とかも撃てそうだ。

「若輩…ふむ、年はいくつだ？」

「はっ、今年で十五になったばかりにございます」

「十五…元服を迎えたばかりではないか!?　だがその傷痕は…」

「はっ、某には果たすべき大望がある為幼少期より鍛錬を積んでまいりました…この傷痕は鍛錬の賜物…そして今日が初陣、両親…」

え師からは『最終試験として戦場を学んでこい』と命がありましたので、こうして馳せ参じました」

ちなみに俺の体が年齢の割に傷だらけなのは、両親の扱きと師匠との鍛練が主原因だったりする。

まあ、村を襲撃してきた賊から恋を庇って付いた傷痕もあるが。

「それで傷痕はあれど無傷と言うのだから、その年でたいした武の持ち主だな」

「滅相ありません」

ちなみに敵の首魁、波才の首は俺の傍にある麻袋の中だ。

朱儒さん及び皇甫嵩さんも女だった事から波才も女だと期待した。しかし現れたのはチョビ髭の小男…もといチョビヒゲオヤジ。

俺の顔を見るなり『寄るなこの化け物め』とか言われ、カッチーンと来たから特大の氣弾を放ち…髪形をブラザーアフロにした後、斬首刑に処した。

殺した後には朱儒さんから『ソイツが波才だ』と知らされたのは、最早良い思い出だ。

…だから麻袋の中の生首はアフロヘアーのままだったりする。

「君はこれからどうするんだ？」

「とりあえず帰省し、師に結果を報告するつもりです」

「そうか…行く宛があるのか」

「ええ」

「将来的に仕官するつもりならば、我が軍へ来て欲しかったのだが」

「ご期待に沿えず申し訳ないです」

「いや、こちら無理を言ったのだ…気にしないでくれ」

「ありがとうございます」

言って立ち去る朱儁さんと皇甫嵩さんの姿を、俺は最敬礼で見送った。

こうして第一次黄巾騒動は終結を迎える。

（恋 視点）

「恋、ただいま」

「…おかえり、刃兄」

実地訓練へ出ていた刃兄（じんにい）が帰ってきた。

私は嬉しくなって刃兄を出迎えたのだが、久しぶりに会えた緊張か

らか舌がうまく動かない。

私の名前は、姓が呂^{りょ}、名は布^ふ、字は奉先^{ほうせん}…真名は恋^{れん}。
刃兄の名前は、姓が呂^{りょ}、名は堂^{どう}、字は戦牙^{せんが}…真名は刃^{じん}。

刃兄は私の従兄になる。

刃兄には確固たる目標があつて、その達成の為に武術を始めたらしい。

私は刃兄が好きで、刃兄に憧れている。

年齢的には同じ年なのに兄と呼んでいるのも憧れの証…そして私の武器が方天画戟なのも、全ては刃兄に近づく為。

だからこそ刃兄に呆れられないように訓練をして、この間『黄巾賊』と戦ってきた。

私は敗走して逃げる官軍の殿を務め、倒した黄巾賊は全部で3万だった…でも刃兄は難しい籠城戦の場に官軍側の増援として戦闘を始め、その倍にあたる6万の黄巾賊をほぼ壊走させ…更には敵將の波才と言う人物を討ったとか。

「六万？」

「頭数こそ六万だけど、実際は二万程度しか討ててない…まあ治療が間に合わず、これから死ぬ連中を計算に入ればほぼ六万か」

「恋の倍…どうだった？」

「……思ってたほどに嫌悪感を感じなかったし、斬られる事もなかったぞ」

そう言う刃兄の体は頬や鼻先、額から首筋まで：全身至るところが傷痕だらけ。

大多数が鍛練で付いた傷痕だけど、中には私を庇って付いた傷痕もある。

特に胸と背中の中傷痕は、ほとんどが賊の攻撃から私を庇った時の物。

刃兄はその傷痕の事を『この傷痕は俺の誇りだ』と言ってくれるけど：嬉しさ半分辛さ半分と言ったところ。

その傷痕を撫でながら、この前の黄巾賊討伐の事を思い出す。

確かに、私も刃兄と同じく怪我こそしなかったけど：3万を倒し、友軍兵が居なくなっただけ：死ぬほど吐いた。

吐いて吐いて吐き倒して吐いて、胃の中が空になって胃液しかなくなっても吐いて：吐き疲れて寝る。

村に帰ってきた後も夢で、自分が殺した兵士に何度も殺される夢を見て魘され：起きてまた吐いた。

3日ほど散々吐き倒し、部屋中が吐瀉物だらけになってもなお吐こうとする私を抱きしめ：それが人を殺す代価と母さんは言った。

私は吐かずに泣いた。

でも刃兄にはそんな様子が全く見られない。

普通、吐けば吐くだけ胃液や吐瀉物の匂いが体に付くはずなのに：刃兄の体はいつも通り、私が好きな匂いしかない。

「その袋が？」

「そう、敵將波才の首だよ」

言って刃兄は波才の生首を見せてくれた。

：髪の毛が全部チリチリなのは何故だろう。

刃兄曰く『恋の事を馬鹿にされて頭に來たから、必殺技の練習台になってもらった』らしい。

「恋を馬鹿にされて、怒ったの？」

「当然だ…恋を馬鹿にする奴は許しちゃおけねえ」

私を馬鹿にする奴は許さない。

その言葉に私は胸の内側がきゅんとした。

刃兄と接しているとこの『きゅん』は何度か経験した事があるが、今日感じた『きゅん』はこれまでよりずっと強かった。

どうしたんだろう、私。

「うむ、精悍な顔立ちになったな…刃よ」

「そうね貴方…おかえり、刃」

「ただいま…父さん、母さん」

そうこうする内に朱寧おばさんと天覧おじさんがやってきた。

朱寧おばさんは、私のお母さんのお姉さん。

昔どこかの武将に仕えた事があるらしく、よく天覧おじさんを地面に刺してるのを見る。

刃兄はそれを見て『また、りあるいぬがみけか』と言ってたけど、りあるいぬがみけって何だろう。

「どうだった？ 初の戦場、そして命をその手にかけてた事実は」

「うん、戦闘自体は楽だった…けど、命を手にかけて事に関しては…重い」

「でしょうね…でもその重さを忘れず、前を向きなさい？」

「うん、分かった」

「さて急な長旅で疲れただろう…波才の生首はこっちで処理しておくから」

「じゃあよろしく」

「お風呂沸いてるから入りなさいな」

その言葉を聞いて刃兄は立ち上がる。

そして私を見つめてニコツと笑ったあと、頭を撫でてくれた。

「……………／／／」

「じゃあまたな、恋」

そうして刃兄は家へ帰っていった。

私の胸の中をより一層『きゅん』とさせて。

伝記の7 刃、帰還すること（後書き）

単騎で6万を無傷で討つ。

呂布の従兄妹だからそれぐらい…と思ったけど、書きあがったものを見てあまりの強引な展開に自身で失笑。

…と言う描写でしたが、時間換算でも無理があるとの意見を多数受けまして…死者2万の重傷者3万2千、死傷者合計5万2千としました。

伝記の8 刃、名太守に会うのこと（前書き）

ついに月（董卓）および詠（賈馮）が登場です。

：月の口癖が『へう』で、賈馮の一人称が『ボク』である事を印象付ける以外大した意味もない話になりました。

伝記の8 刃、名太守に会うのこと

く刃 視点く

「ほう、賑わってるな」

所狭しと展開されている露店や商店を見つつ、俺は手にした練り砂糖：いわゆる棒飴を舐めながら大通りを歩いていた。

俺は今、河南州^{かなん}の大都市である洛陽へ来ている。

理由は朝廷からの呼び出しだ。

先日ぶちのめした黄巾軍の武将『波才』だが、その首がなんと現金に変わると父さんから聞いた。

『揚げた首級に応じて対価』と言う、いわゆる首級制が浸透しているらしく：国へ武官で仕えようと思うなら、名のある賊を倒してその首を：ってのが普遍的らしい。

面倒くさいと思っていられたのもほんの2日、あの戦いで父さんは身内が波才を討った事を皇帝へ進言し：褒美を取らせるという事で俺が召喚された、と言う経緯がある。

「にしてもここが反董卓連合決戦の終結地、洛陽か」

黄巾の乱が終結し、各国が安堵する中で霊帝が崩御する。

空位となった帝の座を賭け：何皇后が生んだ劉弁と、董太后に養育された劉協の間で衝突が起こり：熾烈な争いの末何皇后と劉弁が勝利、劉弁が小帝弁と呼ばれるようになる。

後継争いに勝利した事で宦官（去勢された官吏）勢力を押さえ込んだ何進は、地位と財力で名門となっていた袁紹に唆されて宦官殲滅を図るが失敗…宦官に殺害される。

これを見た袁紹は宮中に入り込んで宦官の虐殺を開始…この混乱で小帝弁（劉弁）と陳留王（劉協）は外へ連れ出され、生前の何進の呼びかけで洛陽へやってきていた西涼の董卓に保護された。

劉弁及び劉協と言う手札を得た董卓は、その効力を以て朝廷の実権を掌握…洛陽にて暴政を行い、小帝を廃して陳留王を皇帝につけた。だがこれに反対する刺史や太守と言った軍閥達が各地で蜂起し、連合を組んで董卓のいる洛陽を攻める。

…この『洛陽を攻める軍閥連合軍』を『反董卓連合』と言う。

「…時期的にはそろそろ兆候があってもいいんだが、やっぱりおかしいよな」

おかしいというのはこの街の様子。

俺の知る董卓がそのままなら、この街はもっと寂れててもいいはず。だが街は活気に溢れている。

これはどう言う事だとそんな事を考えていた矢先、洛陽上京命令が来た…まさに渡りに船だと喜んださ。

だからこうして洛陽まで走ってきた訳だ。

さてどうしたものかと悩んでいると、本屋の軒先で『へう』と唸る少女を見つけた。

俺はその少女に歩み寄った。

「どうした？ 何か困ってんのか？」

「へうっ!?! あ、貴方は?」

「つと、スマン…俺の名は呂堂と言う…今日は董卓さんに呼ばれて、先日討った賊の首を換金してもらいに来たんだ」

「呂堂さん…赤髪で方天画戟を振るう、賊を討った人…あ、もしかして朱儁さんや皇甫嵩さんをご存知ですか?」

「え? あ、ああ…換金してもらう賊を討った時助けた友軍の将だよな?」

「なるほど、そうですか…あ、お初にお目にかかります…私は姓を董、名を卓、字を仲穎と申します…董卓とお呼びください、まずはようこそ洛陽へ」

ちょっと待て、今この子…何て言った?

自分の名前を董卓と名乗ったか?

いや董卓といえば『勝てば官軍、負ければ死刑じゃ』って言う…闇魔大王なイメージの強い、悪人面をしたオッサンじゃなかったか?

「…マジ?」

「まじ…とは?」

「ああ、悪い…本当に?」

「と言いますと?」

「君が董卓?」

「はい♪」

…ウソだろ？

いや確かに三國無双での三国志の知識はあるが、朱儁さんしゆしゆんや皇甫嵩くわうぼうそうさんは女性…でも波才はオッサンだった。

と言う事はナニか？

この外史は三国志の外史だが、有名武将は全員女性って事か？

「…くそ、転生前に血筋は指名するべきだったか？」

やべえ…俺の野望、早くも詰んだかも？

ああどんな野望だって？

どうせ80年の生存が義務付けられているなら、面白おかしく生きたいじゃん？

だから俺は、転生前に過ごした18年間は『慎ましやかな青春だった』と見切りをつけ、今世では巨乳ハーレムを作ろうと思ってる。

…そうだ、恋もその一員…光源氏計画と言う言葉を知っているか？

話が逸れたな、そう…もしこの子が本当に董卓で、今が反董卓連合結成前なら…董卓軍には張遼と華雄、そして呂布がいるはず。

だが呂布…恋は俺の故郷で今日も武の特訓中で、董卓軍には居ない…つまり董卓軍の中に有名武将は2人しかいない訳だ。

待て…2人？

…ああ陳宮^{ちんぎゆう}なんて武将も居たっけ…でも波才はオッサンだったしなあ。

「どうしました？」

「いや、ちと脳内の情報の整理を」

「…はあ」

俺が一人百面相を始めたのを不審に思ったのか、やや呆れた表情で俺を見る（自称）董卓。

ゆったりウェーブのかかった淡紫の長髪に、庶民風とは言え豪勢な服…そして『へう』

これが董卓だと言うのは無理が無いかな？

如何せん信じがたい。

情報と推測を確定した事実へ変える為にも、もうワンパンチ欲しいところだ。

「月^{ゆえ}〜！」

とそこへ走って来るは、目の前の（自称）董卓を呼んでいると思わしき眼鏡の少女。

「あ、詠^{えい}ちゃん！ こっちこっち！」

「探したわよ月…波才の首を換金したいって人が来るから、探し物は早くしてって言ってあったのに」

「ごめん詠ちゃん」

「つと、こちらは？」

（自称）董卓を嗜めていた眼鏡の少女が俺に気付いたらしい。俺を見るなり目つきが鋭くなり、俄かに雰囲気が強くなった。

「俺は姓が呂、名が堂…字は戦牙、君の言う『波才の首を換金してきた者』だよ」

「ふうん…ボクは姓を^か買、名を^く駆、字を^{ぶんわ}文和って言うの…そう、ア
ンタが呂堂ね？　で…月に何してたの？」

賈^か^く駆、だと！？

この眼鏡の少女が、あの名高い賈文和だと言うのか！？

賈^か^く駆が付き従う少女が董卓なら間違いない…この世界の有名武将は、
全員女だ。

さて、とすれば…

「いや、街に入っすぐ…本屋の前で困ってる董卓さんを見つけて
さ、どうしたんだって声をかけたんだよ」

「ちょ、月に何かしてないでしょうね！？」

「詠ちゃん…それは呂堂さんに失礼だよ」

「うっ…そうね、悪かったわね呂堂」

「いや、この子が大事だと言う気持ちが伝わってくるからな…気に
しないでいい」

「…そう言ってもらえると助かるわ…で、波才の首の換金だったかしら？」

「そうだよ…これが首だ」

言って俺は波才の首が入った麻袋を賈馱に渡す。

賈馱はそれを受け取り、董卓に見えないように中を確認…そして

「……ぷっ」

吹き出した。

「詠ちゃん、何かあったの？」

「いえ、波才の髪が焦げて縮んで毬藻まりもみたいになってるから可笑しくて…」

「ああ、それな…討伐した時の状況がムチャクチャでさ、その無茶をやらかした俺を見てソイツから『化け物』と罵られてよ…頭に来たから氣弾で髪型を変えた後、討ったんだ」

「へえ…じゃあ朱儁や皇甫嵩から聞いている『波才軍六万を、単騎かつ無傷で屠った男』ってやっぱりアンタ？」

「正確には七万近いがな」

「…ウソではなさそうね」

「こんなんでウソ言っただうするんだ？」

「そうだよ詠ちゃん」

「うっ…そうね、じゃあ城まで来てくれる？ 波才の懸賞金を渡したいから」

「了解、じゃあ案内よろしく」

「ん…ついてきて、こっちよ」

こうして俺は董卓と賈馱に出会い、懸賞金を貰いに洛陽城へ向かう。同時に俺は、俺の野望の達成要員になりえるかも知れない…恐らくは女であろう張遼と華雄を見る事ができるかもしれない事を、内心で密かに喜んだのだった。

伝記の8 刃、名太守に会うのこと（後書き）

次回はあの2人が登場する予定…刃はどう反応するのか？
乞うご期待！

伝記の9 刃、本音をこぼすのこと（前書き）

霞の関西弁がどうにも不安。

伝記の9 刃、本音をこぼすのこと

〽刃 視点〽

大都市洛陽の中に構えられた城だけあって、洛陽城はムチャクチャ大きい。

見渡す限り城壁が続く洛陽城の中庭を、先を行く董卓と賈馱にくつついて歩く。

「ねえ呂堂」

「ん？」

「呂堂から見てこの街はどう思う？」

「賑やかでいいんじゃないか？ 住民の顔には笑顔が溢れてるし、アチコチ発展してるし：君主って言うのか？ ソイツがよっぽどの善政を布かなきゃあり得ないと思うが？」

賈馱の質問に対し、俺はそう答えた。

街の雰囲気を見る限り君主：董卓が無能なクズって事は無いだろうし。

「ふうん」

「じゃあ俺からの質問に答えてくれ」

「何？」

「この内情を知らない連中から『君主が圧政を敷いている…虐げられた民を救うため暴君董卓を討つべし』ていちゃもんで、諸侯の連合軍が組まれたらどうする？」

「…アンタはどうするの？」

「質問に質問で返すなよ…俺は董卓派かな？」

「へえ…よかったじゃない、月」

「へう…」

ちなみにこれは、今のうちに反董卓連合について少しでも危機感を持ってもらおうとした質問。

もしこれが本当に勅として出た場合、俺は宣言通り間違いなく董卓軍へ付くつもり。

そう言った事も考慮しつつ、中からも備えてもらおうと思った。

…が

「月が圧政？ あれへんあれへん…でなきゃウチらが月に従うはずあれへんし」

望んでいた答えが、董卓や賈馱からではなく別の方向から返ってきた。

「あら霞、今日は警邏じゃなかったの？」

「黄巾賊六万を単身で壊走させた奴が、首魁『波才』の首持って来るんやろ？ 手合わせ出来たらええなって早めに切り上げたんや」

そう言って俺たちの行く手に立ちはだかったのは、董卓よりも濃い紫の髪をして…猫のような目つきをした女性。

肩に羽織、大きな胸にはサラシだけ…袴を穿いて、手にするは偃月刀。

武器だけしか判別要素が無いが、董卓軍に居て偃月刀を持つ武将は1人しかいない。

俺は一縷の望みを賭けて、董卓に説明をしてもらう事にする。

「董卓さん、こちらの方は？」

「ウチは張遼、ああ姓が張で名は遼…字は文遠や、よしなに」

「…俺は姓が呂、名が堂、字が戦牙…口調はこの方がいいだろう？」

「おおっ！？ 何やウチの好みよう分かつとるやないかい」

やはりこの人が張遼か。

張文遠…反董卓連合に董卓が敗れた後、曹操軍に拾われる猛将。

三国無双では関羽のライバルであり、武器も同じ偃月刀の使い手。

「…どうしたんや？ ウチの事ジツと見て」

うむ、良き体じゃ。

その丰满な胸はサラシのみで包まれ、彼女が歩きたびにプルンプルン揺れる。

「いや、好みだなと」

「ッ！？／＼／＼」

しまった、つい本音が。

まあ良いか：曹操に取られるのは癪だし、先に唾付けといても。

「あんまりからかうモンやないで？　ウチ、あんま求められたら本気にしてまうで？」

俺の言葉に対し顔を赤くして、その場でクネクネしながらもそう言う張遼。

サラシの下で左右に揺れる大きな双子山：眼福です、ご馳走様です。

「ああ、いずれ娶りたいね」

「ちょ、こらアカン：ウチじゃ太刀打ち出来へんわ！　華雄はどこや！？　アイツも一緒に居らんとともに話が出来へん！」

そう言って張遼は顔を真っ赤にし、あたふたしながら立ち去った。本人が言うとおり、華雄をつれて来るのだろう。

ちなみにその一部始終を見ていた董卓と賈馱はと言うと：

「へう…」

「なるほど、霞が好み…と」

董卓は張遼以上に顔を赤くし、うつむいてへうっていた。

賈馱はなにやらしたり顔で竹簡にメモを取っていた。

「霞め、真後ろに私が居たのも気付かないほど恥ずかしかったのか？」

「あ、華雄さん」

言われて、さっきまで張遼が立っていた場所に姿を現したのは猛将華雄だった。

華雄。

三国志では反董卓連合と戦った際…連合軍の孫堅に挑発されてシ水関から飛び出し、そのまま討たれてしまうかわいそうな人。

三国無双では関羽に挑発されて同上。

…かわいそうな人って言うイメージが強すぎる。

竹を割ったようなまっすぐな性格、そしてこの世界の華雄が持つその美貌…実に好みなんだけどなあ…。

「呂堂と言ったな？」

「ああ」

「波才を討ったそうだが？」

「波才及びその軍勢六万、単身で怪我なし…実質は二万討伐の三万二千負傷だけだな」

「ほほう、随分な使い手と見える…そしてあの霞をあの一瞬であそこまで慌てさせるその心力、是非とも一勝負願いたいのだが」

「いいよ」

「よし、それでこそ武人！ 場所はここ、決着は気絶か降参…真剣を用いた本気の一本勝負で行こうじゃないか」

言って華雄が階段から降り、俺の向かいに立つ。

真剣を用いた本気の一本勝負か：いずれ肩を並べて戦う仲間になるかもしれないな：よし、本気で行こう。

「俺は構わない：董卓、賈馱：済まんが少し離れていてくれ、それと衛生兵か救護兵の準備を」

「大丈夫なの？ 相手は華雄よ？」

「大丈夫だ、みすみす負けはしないし怪我をする気も無い：だが、相手が本気で来る以上、本気で行かねば失礼になるからな」

そう言っただけ董卓と賈馱を少し遠ざけ、大戦斧を構える華雄の正面に立つ。

俺の武器は相棒である方天画戟だ。

大戦斧を相手にしてどう動けるかのいい経験になるだろう。

「頑張ってくださいね、呂堂さん」

「ああ」

董卓の声援を受け：俺は左手で戟の柄の下の方を持ち、右手は柄の中ほどで握り：振りおろしや薙ぎ払いに移れる姿勢で構える。

対して華雄は大戦斧を上段に構えた。

開始と同時に突撃し、重量と筋力で脳天から両断する一撃必殺のスタイルだろう。

「準備はいいか？」

「私の方はいつでもいいぞ」

「よし、なら賈馱…合図を頼む」

「まったく武將ってどいつもこいつも…じゃあこの石を投げるから、石が地面に落ちたら開始ね？」

言って賈馱は足元にあった拳大の石を拾い上げ、それを宙に投げる。

「さあ、行くぞ華雄」

その石を視界の端で見ながら俺が言うと…

「来い…勝負だ呂堂」

華雄も応える。

そして…

—…カランツ—

—ダッ!—

「「いざ参る!」」

石の落下音を聞き、俺達は同時に駆け出した。

伝記の9 刃、本音をこぼすのこと（後書き）

霞が初対面で陥落寸前：刃、恐ろしい子！

次回は華雄と試合で、戦闘描写を入れる予定です。

伝記の10 刃、真名を交換すること

く刃 視点く

―ビュオッ！―

―ブウン！―

―ガギンッ！―

華雄が俺の武器の射程距離に入った事もあり、俺は華雄めがけて方天画戟を右から左へ振る。

だがそれは同じく華雄の武器の射程に俺が入っている事もあり、俺を両断しようと振るわれた大戦斧とカチ合い…甲高い金属音を発する。

「ふっ！」

すぐさま姿勢を整えて体を左へ回転させ、華雄の左わき腹を石突で狙う。

石突は突くだけの物じゃない…だがこんなものでやられるタマではないはず。

「ふんっ！」

やはりそれを見越していたのか、華雄は振り下ろした大戦斧の穂先を左へ払い…

―ガンッ！―

大戦斧の鎬で俺が放った薙ぎ払いを弾くと…

「シッ！」

―ヒュッ！―

そのまま石突で突き上げの姿勢に入る。

このままだと良くて鳩尾、最悪だと顎をカチ上げられて意識を失うだろう。

「くっ…」

だから俺は腰から上を反らし、華雄の振るった石突を射程範囲から外す。

大戦斧は重い武器として分類される。

だから連続攻撃には不向きなはずだ…そう思い反撃しようと思ったのだが…

「せいせいせいせいせいせい！」

―ブオンブオンブオンブオンブオン！―

怒涛の勢いで華雄の大戦斧が唸りを上げる。

振り下ろし、逆袈裟、薙ぎ払い、袈裟、石突袈裟、切り上げ、突き…と、まるで竜巻の如く白銀の刃が暴れ回る。

―ガイン！キインキイン、ガン！―

「ぐ…（なんて重い一撃なんだ）」

華雄の乱撃を捌きながら、俺はその一撃の重さに冷や汗を流した。

恋の一撃も重いには重いが、あいつはまだ未熟の部類…だが華雄はいくつもの死線を潜り抜け、武将としての経験を積んだ猛将。今の恋なんざ足元にも及ばないだろう。

「どうした呂堂、防御一辺倒じゃないか」

「ほざけ」

「そう思うなら攻撃すればどうなんだ？」

俺に乱撃を浴びせながら、華雄が余裕の発言をする。

くっそ、大戦斧戦のいい経験だと思って勝負を受けたが…中々キツイ。

…仕方ない、奥の手行くか。

「じゃあ反撃するぞ？　しっかり捌いてくれよな」

「戯言を…ハッ！」

—ガアンッ！—

—…ガランガラン…—

俺は華雄の乱撃で方天画戟を弾き落とされたかのように演出する。

「無手では勝てまい…この勝負、もらっ…」

「俺がいつ『俺の武器は方天画戟だけ』って言った？　はあああああっ！」

武器を手放すという、普通では考えられないような事態に一瞬の隙

を見せる華雄。

だが俺の奥の手はその“一瞬の隙”さえあればいい。

一呼吸で左右の拳及び両足と首、頭を包むように氣を練り上げて纏う。

「何だその光は!？」

「行くぞ！」

―シュシュシュ!―

―ブンブン、シャツ…シュバババツ!―

「ぬ、く…まさか、無手も…こなすとは！」

―シュバツ!―

―ドンドンドンツ!―

両足で氣を爆発させ、凄まじい加速を得た拳打と蹴打のラッシュ。
突如無手に切り替わり、それまでがウソの様に怒涛の連撃を放つ俺に…今度は華雄が防御一辺倒になる。

「ちっ！」

―ブオンツ!―

―ガッ、バキッ!―

―タンツ…ズサササ…―

俺の繰り出した右の中段回し蹴りに対し大戦斧を当て、一瞬できた蹴りの隙に自らの蹴りを合わせて距離を取る華雄。

華雄め、やっぱイイ蹴り放つよな…予想通りだけど。

大戦斧や方天画戟と言った穂先の重い武器は、その扱いの根底に『重心制御』がある。

重い穂先を自在に振り回すため、上半身は強い遠心力にさらされる：だがその強い遠心力を制御するのが下半身の力で、関節と筋肉を駆使して遠心力を分散させる必要がある。

長期間これ続ける事で自然と下半身は鍛えられ：その結果、意識せずとも蹴りがとんでもない威力を持つ事になる。

その威力を以て距離を取った華雄。

うむ：自身が長柄持ちで、相手が無手の場合には距離を取るのが正解。

：だが、俺に対してはそれは不正解となる！

「俺は無手で遠距離もこなす！」

—ドンッ！—

「何っ！？」

振りかぶった腕の先から、光の塊が飛び出し：

「うおおっ！？」

—ドオンッ！—

放たれた氣弾は華雄の大戦斧の穂先に当たり、ちょっとした爆発を起こす。

巻き上がる砂塵…勝機！

「ッ！！」

華雄の視界が砂塵で奪われた隙を突き、俺は華雄に肉薄。

—スッ—

その首筋に手刀を突きつけた。

「…王手」

「くっ…私の、負けか…降参だ」

—ガラッ—

言って華雄が大戦斧を手放し、その穂先が地面の石畳に当たって金属音を立てる。

「そうか、これが氣か」

「ああ、まだ切り札はあるんだがな」

「何だと？」

俺は背から弓を取り出し…

—カカツ、ギリギリ…—
—ヒュオッ！—

出来る限り素早く矢を番え、洛陽城の城門のほうへ撃つ。

――ドスッ――

「うぎゃっ！」

…あ、誰かに刺さっちゃった。

深蒼の鎧を身につけた、痩せた体軀の男だが…

「おい見ろ、曹操の細作が射殺されてるぞ!？」

曹操って…オイオイ、この時期から細作を洛陽へ送ってんのか？
いや偶然とは言え俺…曹操に恨まれなきやいいが。

「…なるほど、無手でなくともその弓で射殺せたわけだ」

「まあな…（適当に射ったら当たりましたなんて絶対言えない!）」

「そうか…完敗だな」

つか曹操の細作、そのまんまでいいのか？

董卓に賈馱よ、呆れてないでやる事あんだろ？

驚愕の表情のまま死んでる曹操の細作をそのままに、呆然とした表情の董卓と賈馱を見て…そんな事を考えた俺。

「呂堂の勝ちやな」

そこへ響く嬉しそうな声。

「霞、見てたのか？」

「呂堂が戟を手放した辺りからな」

まだ顔の赤い張遼が現れ、尻餅をついたままの華雄に肩を貸す。戟を手放した辺りからという事は…

「そう言うこっちゃ…呂堂の奥の手はぜーんぶ見せてもらたで」

「あゝあ、隠しとかなきゃ意味ねえってのに…つか良いのか？　アレ」

「曹操んこの細作やろ？　ほっときほっとき、ここ最近ちよくちよく見るねん…うざいからたまに大掃除したるんやけど、今日もおったか」

「今日も？」

「せやねん…あのじゃじゃ馬やけど、どうもこの洛陽を探っとるらしいんや…何かやらかす気かいな？」

曹操がじゃじゃ馬…うわ、会ってもねえのに生理的嫌悪感が！

「さあ、俺は知らんが」

「まあええわ…なあ、呂堂…これから暇か？」

「あ？　ああ、暇っちゃ暇だが？」

「ホンマに？　ならウチと飲まへん？」

言って張遼が取り出したのは、酒が入ったと思わしき樽と杯が2つ。

「ほう、年代物だな」

「お？ 何や自分、酒飲みかいな？」

「ああ、割と好きだし…強さにも自信があるぞ？」

俺がそう言っていると張遼の表情が、より一層嬉しそうなものになる。
そして爆弾発言。

「お、おおう！ よっしゃ、ええ奴やな呂堂は…ウチはアンタが気に入ったで！ ウチの真名は霞しあや、酒好きに悪い奴はおらん…受け取ってくれや！」

真名

その人の本質を示す神聖な名前で、許可なく呼べば切り殺されても文句は言えない。

「真名を？ 良いのか？」

「言うたやろ？ 酒好きに悪い奴はおらんのや…それにウチ、なんかアンタに惚れてしもうたみたいやし」

惚れたって…ああ、さっきの『実に好みだ』発言か。
いや間違いない本心だが、そうか…

「俺でいいのか？ 張遼」

「ウチにはもうアンタしかおらへん…なあ、せつかく預けてんから真名で呼んでえな」

「…ありがとう、霞…俺の真名は刃^{じん}だ、受け取ってくれ」

「おおきに、刃…んっ、んっ」

言いつつ霞は杯に酒を注いで口へ含み…

「…んっ」

それを俺の口へ流し込む。

唇に感じる霞の体温と、喉で感じる酒の温度。

俺はその、霞味の酒をゆっくりと飲み干す。

「んっ…んっ…んっ…んっ…ぷはあ」

「おお、ええ飲みっぷりやんか」

「はは、よし…んっ、んっ、んっ…」

返杯とばかりに俺は杯へ酒を注ぎ、それを口に含む。

そして自らの顔を霞へ寄せ、その唇に自らの唇を合わせ…口内の酒を霞の口へ流し込む。

「んっ、んっ、んっ…ぷはあ、美味しいなあ…刃味の酒は」

「霞味の酒も美味かったぞ？」

「そうか／＼／　よっしゃあっ！　今日は浴びるほど飲むでえ！」

こうして俺と霞は真名を交換し、そのまま酒宴に突入した。

…ん？

何か大事な事を2つほど忘れているような…

「霞、私はどうすれば…」

「アンタ達ねえ、真昼間からなんて熱いのよ…見なさいよ月を」

「へう、へう…霞ちゃん、大胆…呂堂さんも…」

見れば董卓も賈馱も顔が赤かった。

そんな2人を霞と2人、微笑ましく見る。

「それに呂堂、アンタ懸賞金はどうすんの？」

…はは、そう言えばそうだったな。

「なあ月、詠…私はどうすればいいんだ？」

そして華雄が空気だったのは言うまでも無い。

伝記の10 刃、真名を交換すること（後書き）

はい、まずは霞こと張遼が陥落しました。

次回は物語に動きが出始め、あの方の登場です。

伝記の11 霞、陥落のこと【番外編】（前書き）

伝記の10を霞の視点で書いてみました。
…が、関西弁の出来が苦しいものに…。

伝記の11 霞、陥落のこと【番外編】

（霞 視点）

ウチの名前は張文遠。

姓が張^{ちやう}で名は遼^{りやう}：字は文遠^{ぶんえん}、真名は霞^{しあ}や。

今は月^{ゆえ}：いや董卓んとこに仕官しとるんやけど、その日は朝から結構な騒ぎやったわ。

こないだ長社の辺で黄巾賊って賊の蜂起があつたんやけどな、それを潰す戦いでごっつい武勲を揚げた奴がおるらしい。

ウチの同僚に朱儁^{しゆしゅん}ってのがおるんやけど、ソイツ：豫州^{よしゅう}は潁川^{えいせん}でも蜂起した黄巾の一団に敗走したんや。

いや別に敗走したんが悪いとは言わんけど、その敗走の途中：なんや赤い髪した得体の知れん奴が突然現れて、朱儁に自分が殿務めるからはよ逃げって言うたらしいわ。

んで朱儁から聞いたんやけどソイツ、戟振り回して追撃の黄巾を3万倒したって言うやんか。

それも無傷で。

ウチそれ最初に聞いた時どんなバケモンやつて思つたんやけど、ホンマもんのバケモンはもつと凄かつたんやな。

敗走した朱儁やけど、何とか生き延びて同僚の皇甫嵩^{こうほうそう}がおる長社に

辿り着いたんや。

けど殺り損な^ゃった朱儁を敵が見逃すはずもなかったわ…敵将の波才^{はさい}は6万の兵で長社を囲ったんや。

長社に籠る総大将は皇甫嵩やけど、相手は数の暴力で迫ってくる…なぶり殺されるんは目に見えとったはずやった。

そこに現れたんがさっき言うたホンマもんのバケモンや。

ソイツも朱儁を逃がした時の奴と似た風体やったらしいんやけど、コイツの方が度合いは上やったんや。

ソイツ…今まさに死ぬかもって状態の朱儁とこに現れて、派手な名乗り上げて黄巾賊を斬り始めてんて。

その光景が凄まじかったんやて…マジで人が空飛ぶの見たら、なあ？

居並ぶ6万の賊共を吹き飛ばすみたいに蹴散らして、ソイツが波才を討った。

…信じられるか!?

一人で6万の賊を相手に無傷で、敵将も討ち取ったんやで!?

それ聞いた時ウチ、肌が粟立つを抑えられなかったわ。

…で、や…今日その6万斬りのバケモンが…波才の首を換金しに来るって言うやん？

そんな強い奴と試合えたら、武人としてまだ上行けるて思わんか？

…ってな考えをした奴がぎょーさんおって、朝から洛陽はてんてこ舞いっちゅう訳や。

ああウチか？

ウチはその日、本来やったら街の見回りやねんけど…ソイツに会いたいから途中で切り上げて帰って来てたんや。

したらおったわ。

月と詠えいに連れられた、ムチャクチャな強さを感じる男前が。

「じゃあ俺からの質問に答えてくれ」

「何？」

「この内情を知らない連中から『君主が圧政を敷いている…虐げられた民を救うため暴君董卓を討つべし』ていちゃもんで、諸侯の連合軍が組まれたらどうする？」

「…アンタはどうするの？」

「質問に質問で返すなよ…俺は董卓派かな？」

「へえ…よかったじゃない、月」

「へう…」

おお、月が真っ赤やん。

このあんちゃんやりよるな。

まあええわ…にしても月が圧政か…

…

.....

.....

あれへんな。

よし、ウチの意見言うてみよか。

「月が圧政？ あれへんあれへん…でなきゃウチらが月に従うはずあれへんし」

…いきなり口挟んだせいか、後ろのあんちゃんが狐に化かされたみたいなの顔しとる。

流石に唐突過ぎたか？
まあ掴みはええやろ。

「あら霞、今日は警邏じゃなかったの？」

やっぱ詠は食い付くか。

誤魔化してもしゃーないし、正直言うところか。

「黄巾賊六万を単身で壊走させた奴が、首魁『波才』の首持って来るんやろ？ 手合わせ出来たらええなって早めに切り上げたんや」

言っつて月と詠、それとその後ろにおる奴の行く手を遮るように立ってやる。

さあどんな反応を…うわ、胸に視線が…肩に羽織、胸にはサラシ…袴穿いて、手にするんは偃月刀。

…やっぱウチの格好って変わってんかなあ？

「董卓さん、こちらの方は？」

お、ウチの事やな？

よっしゃ、自己紹介したるで。

「ウチは張遼、ちやうりやうああ…姓が張で名は遼…字は文遠や、よしなに」

…ウチの口調聞くと大体の奴が引くんやけど、このあんちゃんはどうやろ。

そう思て一旦黙ったんや。

「…俺は姓が呂、名が堂、字が戦牙…口調はの方がいいだろ？」

したらあんちゃん…いや呂堂はウチの口調聞いて引くどころか、口調を崩して口利きよった。

「おおっ！？ 何やウチの好みよう分かつとるやないかい」

そうかそうか、ウチの口調聞いて素が出せる奴もおるんや。

ええやんええや…ん？

「…どうしたんや？ ウチの事ジツと見て」

なんや？

ウチに惚れてしもたんか？

あかんで、ウチは。

ウチは自分より強い奴にしか靡かへんからな。

「いや、好みだなと」

「ッ！？／／／」

ちよ、今なんて言うた自分！？
好みやて？

こないな女どこがええねんな！
いやでも好みやてウチ：胸がドキドキしてきたわ。

ええい落ち着け、落ち着かんかい張遼。

お前はこんな、どこの馬の骨とも知らん男にほだされるような安い
女とちゃうで！

：そうや：からかつとんねんな？
そうに違いない。

今に見さらせ、逆にからこうてビビらしたるわい。

「あんまりからかうモンやないで？　ウチ、あんま求められたら本
気にしてまうで？」

どないや！

いや言いたかった事とちつとばかしズレあんねんけど、まあええわ
：さあどうするんや？

これで下が：

「ああ、いずれ娶りたいね」

何やお！？

：そこまでウチの事：：：いや、落ち着き霞、自分にゃ酒があるやろ？
武があるやろ？

そうや：けど、けど：アカン、顔が赤こなってるんが丸分かりや。

うあああああ！

どないすればええねんウチ！

「ちょ、こらアカン…ウチじゃ太刀打ちできん！

（そうや、こんな時こそ華雄や。

アイツがおったら、アイツに戦わして…呂堂が負けたとこ見ればお
さまるはずや。）

→この間0・3秒。

…華雄はどこや！？ アイツも一緒に居らんとまともに話が出来へ
ん！」

…言うて逃げるウチ。

はぁ、この胸の高鳴り…どないしよ。

半刻後。

ウチはまた宮前に立っとなった。

「…」

…つか何で帰って来てんな、ウチ。

こんなことしよったら呂堂に気があるんと同じやんか。

しかも湯浴みして酒持ってって…やる気と飲む気満々かい！

…まあええわ。

さてと呂堂は…

「じゃあ反撃するぞ？　しっかり捌いてくれよな」

「戯言を…ハッ！」

—ガアンッ！—

—…ガランガラン…—

呂堂の手から戟を弾き飛ばして、得意気な顔をする華雄…つかアカンで華雄、それは罠や。

呂堂は得物をワザと落としてしまったんやて…気づいてへんのか！？

ってそうやない！

何しとんねんな呂堂！

華雄は相手が無手でも容赦せえへんぞ！？

それやのに華雄を目の前にして得物手放すって…

「無手では勝てまい…この勝負、もらっ…

「俺がいつ『俺の武器は方天画戟だけ』って言った？　はあああああ
あっ！」

けど次の瞬間に、呂堂はとんでもない事しでかしよった。

呂堂が吼えるなり呂堂の体が薄い黄色の光に包まれて、手足と首…
頭がその光の膜を纏ったんや。

「何だその光は!？」

「行くぞ!」

言うて呂堂は無手のまんま華雄に突っ込んでった。

―シュシュシュ!―

―ブンブン、シャツ…シュババババツ!―

速い!

『神速』の二つ名持つとるウチの目でも捉えられんぐらい速い突きと蹴りの連撃や。

「ぬ、く…まさか、無手も…こなすとは!」

―シュバツ!―

―ドンドンドンツ!―

あの華雄が防御一辺倒?
んなアホな!

ってか瞬き1回の間に何べん攻撃しとるんや?

「ちっ!」

―ブオンツ!―

―ガッ、バキツ!―

―タンツ…ズサササ…―

呂堂の繰り出した右の中段回し蹴りに対し大戦斧を当て、一瞬でき
た蹴りの隙に自らの蹴りを合わせて距離を取る華雄。

そうや、長物が距離詰められたら距離を取るんが正解や。
…ウチもそう思ってた。

けど呂堂はやっぱバケモンやった。

「俺は無手で遠距離もこなす！」

—ドンッ！—

「何っ!？」

振りかぶった呂堂の腕の先から、光の塊が飛び出し…

「うおおっ!？」

—ドオンッ！—

それが華雄の大戦斧の穂先を直撃し、華雄の周囲に砂塵が巻き起
る。

アカン、華雄そこから退きい！

「ッ!!」

そう思った時にはもう遅かったんや。

華雄の視界が砂塵で奪われた隙を突き、呂堂は華雄に肉薄。

—スッ—

その首筋に手刀を突きつけとった。

「…王手」

詰みやな。

あの体裁きや…無手でも華雄を叩けるっちゅうことやろ。

「くっ…私の、負けか…降参だ」

—ガラン…—

言って華雄が大戦斧を手放し、その穂先が地面の石畳に当たって金属音を立てる。

「そうか、これが氣か」

氣ってアレか？

あの黄色い光の膜…いや、腕から飛ばした光の塊の事か？

そうか…アレが氣か。

ウチにも出来るやろか…アレが出来たらもっと強うなれんのに。

そんな事考えとったら呂堂が口開いた。

「ああ、まだ切り札はあるんだがな」

「何だと？」

生憎やな、ウチも同じこと考えとったで？

見れば呂堂は背から弓を取り出し…って、弓背負っててあの体裁きなんか！？

—カカツ、ギリギリ…—

—ヒュオッ！—
—…ドスッ！—

「うぎゃっ！」

呂堂は素早く弓に矢を番え、ロクに狙いもせんと矢を射った。

放った矢は城門の方へ飛んでったんやけど、なんや…蒼い鎧着たモヤシ男に刺さったで？

ねろたんか？

「おい見ろ、曹操の細作が射殺されてるぞ！？」

って、曹操んとこの細作かいな！？

またおったんか…しつこいな。

「…なるほど、無手でなくともその弓で射殺せたわけだ」

「まあな…」

「そうか…完敗だな」

ウチも完敗や。

華雄とやりあえるだけの長物の腕、華雄を越える無手の腕。

華雄なんかメじゃないぐらいの弓の腕。

オマケに女に優しい…アカン、もう何やっても勝てる気せえへん。

「呂堂の勝ちやな」

と、気が付いたら口が動い妥妥た。

なんや華雄、ウチの事気い付かへんかったんか？

「霞、見てたのか？」

「呂堂が戟を手放した辺りからな」

…ん？

何や呂堂、ウチの方向いて『あっちゃ』みたいな顔して…あ、なるほど。

「そう言うこっちゃ…呂堂の奥の手はぜーんぶ見せてもらたで」

「あゝあ、隠しとかなきゃ意味ねえってのに…つか良いのか？ アレ」

言うて呂堂が、死んだ細作を指差す。

「曹操んとこの細作やろ？ ほっときほっとき、ここ最近ちよくちよく見るねん…うざいからたまに大掃除したるんやけど、今日もおったか」

「今日も？」

「せやねん…あのじゃじゃ馬やけど、どうもこの洛陽を探っとるらしいんや…何かやらかす気かいな？」

「さあ、俺は知らんが」

「まあええわ…なあ、呂堂…これから暇か？」

「あ？ ああ、暇っちゃ暇だが？」

よっしゃ、暇なんやな？

そんなら持ってきた甲斐もあるっちゅうもんや。

「ホンマに？　ならウチと飲まへん？」

言ってウチが取り出したのは、酒が入ったと樽と杯が2つ。
ウチ秘蔵の年代モンらおちゅうの老酒や。

「ほう、年代物だな」

お、樽見ただけで寝かした年分かるんかいな。

呂堂、かなりの酒好きやと見た：ニシシ、逃がさへんでえ？

「お？　何や自分、酒飲みかいな？」

「ああ、割と好きだし：強さにも自信があるぞ？」

呂動がそう言うと言分の表情が、より一層嬉しそうに変わるが分かった。

舞い上がってしもたんやろか：ウチ。

次の瞬間、ウチの口：エライ事口走ったんや。

「お、おおう！　よっしゃ、ええ奴やな呂堂は：ウチはアンタが気に入ったで！　ウチの真名は霞しあや、酒好きに悪い奴はおらん：受け取ってくれや！」

真名。

ソイツの本質を示す神聖な名前で、許可なく呼べば切り殺されても文句は言えん。

「真名を？　良いのか？」

…まあええか。

ウチ、なんか呂堂の事ホンマに惚れたみたいやし。

「言うたやろ？　酒好きに悪い奴はおらんのや…それにウチ、なんかアンタに惚れてしもうたみたいやし」

「俺でいいのか？　張遼」

…アカン。

呂堂に名前で呼ばれた瞬間、背筋に寒気が走った。
ってかせっかく真名教えたんやから真名で呼んで欲しいわ。

「ウチにはもうアンタしかおらへん…なあ、せっかく預けてんから
真名で呼んでえな」

そう思て呂堂にしな作って寄りかかってみた。

「…ありがとう、霞…俺の真名は刃^{じん}だ、受け取ってくれ」

したら刃も真名を預けてくれたんや。
胸の高鳴りが煩い。

「おおきに、刃…んっ、んっ」

言いつつウチは杯に酒を注いで口へ含み…

「…んっ」

けど…それからの記憶があれへん。

ウチは起きたら裸で、刃も裸で横に寝とるし…敷布に血の染みあつたし、部屋の中はかすかに烏賊^{イカ}みたいな匂いするし…腰が鈍く痛いし、刃の背中には…ウチが付けたと思わしき引っ掻き傷と、鎖骨の辺りに齒型あつたし…

「…ナニがあつたかは一目瞭然やな」

安らかな表情で寝る、呂堂の頭を撫でながら言う。

…酒持ってきた時はやる気満々やったけど、実際やってしもたし…ええか。

スマンな華雄、女として一步先行かしてもらうわ。

「…刃、ウチの事…幸せにしてや？」

言うてウチは、未だ寝続ける呂堂の唇に自分の唇を重ね合わせた。

伝記の11 霞、陥落のこと【番外編】（後書き）

後悔はしていない！

伝記の12 刃、他者に字を与えるのこと（前書き）

2011／03／23…17…37 華雄の真名のルビを修正

2011／03／24…01…27 突然現れた霞と、驚きつつ話

す時のセリフを修正

伝記の12 刃 他者に字を与えるのこと

く刃 視点く

それは霞との深く交わった日の翌朝の事だった。

波才の首の換金が1週間ほどかかると知り、俺は与えられた客室に寝泊りしているのだが…今朝は太陽が黄ばんで見える。

「…やりすぎたか？ 腰が重い…」

そうぼやいて身を起こし、寝台から1人起き出し…着替えて得物を持って部屋を出た。

洛陽は街中も宮も平和を具象したような場所で、家庭的な雰囲気と厳格な雰囲気とを併せ持ち…文武官及びその他の住人にとっても住みやすそうな場所だと感じられる。

しばらく見て回り、恋へのお土産等を買ひ込む。

そして気が付けば時刻は既に昼過ぎ。

街を散策していて腹が減ったので、出ていた屋台の暖簾をくぐって昼飯と洒落込む事とする。

「親父、ラーメン頼む…麺大盛りで」

「あいよっ！」

ラーメンは好きだ。

チャーハンも好きだが、ラーメンも好きだ。

「はいよっ、大盛りラーメンお待ちっ！」

そしてすぐに物を出す店も好きだ。

…と言う事で（何が!？）

「いただきます」

—パキッ!—

—ズルズルズル…—

「もぐ、もぐもぐ」

—ズルズルズル…—

「もぐ、もぐもぐ」

—ズルズルズル…—

「もぐ、もぐもぐ」

—ズルズルズル…—

「もぐ、もぐもぐ」

—ズルズルズル…—

「もごもご、んぐっんぐっ…んぐっ、ぷはぁ…親父、ラーメン追加…
…麺大盛りで」

「あいよっ…なあ、腹は大丈夫か？」

―ズルズルズル…ズズズズズ…―

「…ぷはぁ！ あ、腹？ 大丈夫だ…問題ない、ついで言うところも問題ない」

「そうか、なら良いんだが…へい、ラーメンお待ち！」

「いただきます」

屋台のラーメンをすする俺。

中太の直麺にほどよく絡む鶏がらスープ。

良く煮込まれたチャーシューと、コリコリの歯応えが良いメンマ。絶妙な煮加減の卵と、シャキシャキのもやし・ネギも素晴らしい。

―ズルズルズル！―

「もぐもぐもぐ…ごくっ…うむ、至高なり…食がすすm…」

「そうだな、ここのラーメンは至高だな」

…ぶほっ！ げえっほげえっほ！」

突然の同意に俺はむせ込んだ。

俺の口から飛び出した麺をまともにかぶる親父…スマン。

「おいおい汚い奴だなお前は、食事ぐらい落ち着いて取れんのか」

当たり前だ、突然驚かされて…それが食事中ならむせるに決まっている！

つか誰だ？

この時間は宮の武将は大概が警邏に…

「誰だ？」

「邪魔するぞ」

「お？ 華雄か」

「うむ」

隣に現れたのは、ヘソ出しと言うこの時代にはありえないような武装と…少々無骨な斧を引っさげた董卓軍の猛将、華雄だった。

「休憩か？」

「いや、昼餉だ」

「そかそか」

むお…上気道に麺が…降りてきやしねえ。

まあその内取れんだろ。

そんな俺を見ながら華雄が横の席へ座る…華雄は麻婆豆腐を注文している。

にしてもやっぱこの世界、変だな…確か、黄巾の乱が本格化する前のこの時期…後漢に、麻婆豆腐はまだないはずだし。

「（まあいいか）」

—ズルズルズル—

とりあえず今は食事を楽しむ事にする。

中太の直麵にほどよく絡む鶏がらスープ。

良く煮込まれたチャーシューと、コリコリの歯応えが良いメンm…
しつこいって？

いいじゃん、事実だし…んゝ、やっぱうめゝ。

「ところで呂堂、貴様…霞と体を交えたらしいな」

と、ご機嫌でラーメンをすすする俺を見ながら華雄がとんでもない事をのたまった。

「ぶーーーーーーっ！ げっほげっほ！ おいコラ華雄、テメ
今なんつった!？」

「聞こえてなかったのか？ 霞と体をm…」

こんなトコで言う事か!」

…むぐっ!」

華雄の口から飛び出した爆弾発言に、俺は頬張っていたラーメンを
噴出してむせてしまう。

今度は親父をスープが直撃…重ね重ねスマン。

同時に華雄の口を塞ぐ事を忘れないが。

「……何で華雄がソレ知ってんだ？」

「何故もどうしても…今朝、私と会った霞が嬉しそうに言い回って
たぞ? 『ウチな…ひょっとしたら死ぬまで生娘^{ガキ}や思ってたけど、

刃はウチを好きや言うてくれて…ウチ、大人オンナにしてもうてん…クセになるわ、アレも…刃も』と」

「ったく…アイツめ」

霞の事だ…破瓜と初経験に傷むであろう腰を引き摺りつつ、チェシヤ猫みたいな顔して言い回ったんだろう。

華雄に伝えたと言う事は、董卓や賈馱の耳にも入っているはず。あゝあ、スケコマシの異名はいらないんだけどなあ。

「…なあ呂堂」

「なんだよ」

―ズルズルズル―

そんな俺の反応を見て聞きたい事でも出来たのか、華雄が俯き加減に口を開いた。

「…どうして霞だったんだ？」

「…あ？ どう言う事だ？」

「詠…賈馱から聞いたのだが、お前には故郷に幼馴染がいるそうじゃないか」

「幼馴染…ああ、恋…呂布の事か」

そう言えば昨日、霞とやる前…出身地の事を賈馱へ伝えた際、賈馱が手元の資料か何かで俺の故郷の村の事を言ってたっけ。

確かに当たってたもんなあ…俺の両親の名前とか、年とか…つまり村の情報全部。

「呂布がどうかしたのか？」

「いや、普通…最初に体を交えるのは、故郷や私塾等で長きを共に過ごした竹馬の友と…が定説ではないのかと思うのだ…そしてその説で言えば最初に抱くのはその呂布とやらのはず、だがお前は昨日が初対面の…それも全く知らぬ他人を抱いたんだ…何故かと思うのは間違っていないはずだが？」

…なるほど、つまりは硬い人…あるいは古い人か、華雄って。

「あのな華雄、その『最初に体を交えるのは、故郷や私塾等で長きを共に過ごした竹馬の友』って説な？ 間違ってもないが正しくもないんだ」

「…どう言う事だ？」

「確かに幼少期などを共に過ごした竹馬の友が最初の相手と言うのはあり得る話だが、じゃあそれが是だとすると『一目惚れ』は非なのか？」

「…いや、それは…」

「俺の住んでる村に『惚れるに理由は要らない』って言葉があるし、それが不可解だって言うなら俺と霞は刃を交えた仲だ…華雄、お前も武人なら刃を交えて分かり合える事の多さは分かるだろ？」

「…なるほど」

拳を交えて友情を深める。

夕暮れの土手でタイマン張って相打って『やるじゃねえか』『フツ、お前もな』と言ったアレ。

傍から見ればどっちも子供じみてるが、やってる本人達はその拳に己の全てを乗せてるんだ：拳に乗った思いはやがて相手の体だけではなく心も打ち、それは最終的に『コイツ、やるじゃないか』となる：あゝ、科学的根拠は無いんで悪しからず。

「それに俺、霞と試合う前に言ったしな：実に好みだ、娶りたいって」

「…」

「もちろんあの言葉にウソは無い」

「嘘だったら貴様を叩き斬ってるところだ」

「だろう？ まあ俺もアレは本音で本心だし、いずれ娶れればいいなと思った心が漏れ出したんだ：それを霞が受け、考え：あの結果って訳さ」

「……なあ、呂堂：私m：

「止めとけ」

「…え？」

俺の惚気を聞いて何か思う事があったのだろう：華雄が食の手を休め、レンゲを皿に置いて真面目な顔で何かを言おうとする。

…が、俺はそれを察して言葉を遮った。

「今の話を聞いて『じゃあ私もお前が好きだ』と言われたって、今の俺には二人もの女を満足させてやれる甲斐は無いと自覚している…それにお前の事だ『生涯一夫一妻』を是として考えているんだろう？ その説を是とするお前に『妾』『愛人』と言う言葉は似合わない…まあこれは霞を正妻とした場合の話だが」

―ズルズルズル…―

後宮：日本の戦国時代に、有名な大名や将軍が本拠地となっている城に構えた…今で言うハーレム要員の部屋。

徳川の後宮を題材とした大河ドラマ『大奥』は有名だが、アレは殿たる男にアレだけの甲斐性があるって初めて成り立つものだ。

俺みたいな半端者にそんな甲斐性があるはずが無い。

「第一、お前を抱くにしたり霞が認めるはずは無いだろう」

「じゃあウチが認めれば華雄も抱くんか？」

「ぶーーーーーーっ！ げえっほげえっほ！ し、霞！？」

また介入されたそのセリフに俺はむせ込み、今度はメンマが上気道へ上がる。

親父は華雄の噴出した麻婆豆腐を顔面で受けていた。
今度は誰だと振り返ったら、そこに立つのは何と霞だった。

「お前、今日は警邏のはずじゃ…」

「さつき終わったとこやで？　　ってかもうお天道さんが西日やし」

言われて空を見れば、空は既に黄昏色に染まっており…遠くにカラ
スが飛んでいるのが見える。

華雄は親父の顔を手ぬぐいで拭いている。

「もうこんな時間か」

「そうやで？　　で？　　ウチが認めたら華雄も抱くんか？」

「いやいや、それは男として恥ずかしくないか？」

「なら抱かんのか？」

霞の問いに対し、華雄は見れば…俯いてジッとしている。

「…華雄には悪いが、さつきも言った通り俺には多数の女全員を満
足させるだけの甲斐性はない」

「こんなエエ子やのに？」

「いや確かに何事にもまっすぐで友達想いイイ奴なのは分かってる、
けどな…」

「ウチはええよ？」

「だろう？　　霞もこう言って…は？」

今、俺が華雄を抱く事に反対したんじゃねえのか？

聞き間違いないじゃなかったら『ウチはええよ？』って言わなかったか？

「…スマン霞、俺…耳が詰まってるらしい、もう一度言ってくれるか？」

「だからウチは、刃が華雄を女として抱いても構わへんって言うたんやけど？」

「Why？」

「ほわい？ 何やそれ」

「ああ…なんでさ」

思わず英語が出ちまう。

そしてどこぞの英霊が人間だった時の口癖も出ちまう。
…そうか、これは夢なんだな？

「本当の俺は霞の胸の中でまだ夢を…」

—むにゅ—

「ホンマ刃は助兵衛やな、こないな時間や言うのにそんなにウチに抱かれないんか？」

気が付けば霞の胸に顔が埋まっていました。

ああ、アヴァロンはここにあったんだ…じゃなくて！
口に出てたのか？

「ウチも刃に抱いて欲しい…けど街中は勘弁してや？ ウチ露出狂のケ無いからな…今は、その…ウチの胸だけで堪忍してや／／／」

言いつつ俺の頭を胸に抱き、顔を赤らめる霞。
くそう、可愛いじゃねえか。

「…霞」

「…あつ」

俺の言った言葉に何かを察したのか、俺の頭を解放する霞。
ちよつと口惜しいが今は仕方ない…今夜たっぷり堪能する……じゃ
なくて、今は華雄の事が先決だ。

「それで、霞が認めれば…ってのは？」

「それやねんけど、ウチな？ 華雄と幼馴染で…ちっさい頃から一
緒やねん」

「…そうだな、隣の翁の家の裏庭に忍び込んで柿を取ったり…互い
の家に泊まったり、正に『寝食を共にした仲』だな」

柿を取った時は華雄の失敗で家主に見つかり、霞が庇うも結局両方
怒鳴られたらしい。

泊まりに行ったのはその柿泥棒の件で互いが互いの友達となり、親
同士も仲良くなった為に始まった家族間交流の一環だったらしい。

「それだけやあれへん、得物握った年も一緒やし…初出陣も一緒、
仕官の年も場所もみーんな同じや…喜びも怒りも、哀しみも楽しみ
も…ぜーんぶ分け合って来たんや」

なるほど、華雄をして『竹馬の友』とは霞の事を言うのか。

「そんである日、華雄が言うねん」

「『私達は何をするのも同じ時を過ごし、それはこれからも続くだろう…そしていつの日か理想の男と出会うかも知れん、だが我らは親友…お前を泣かせるような男は斬って捨てる』だったか？」

「そうや…んでウチがこう続けるんや…『けどかたっぽが認めた、あるいは認められた場合はもうかたっぽは全力で応援しよな』ってな」

「…と言う事は、霞は華雄の応援を？」

「応援…ちゅうよりは、共有しようや…やな」

「共有!？」

「せや…ウチは華雄の親友、ウチは華雄を泣かす奴や貶める奴は絶対に許さへん! けどな? ウチのせいで華雄が泣くのは避けたい…で、泣く原因が男ならウチはその男を斬って捨てる…せやけどウチは刃を離しとくないし」

と、とんでもなくこっぴどかしい事を平然と…真面目な顔で言う霞。

「そうだな、俺も霞と分かれるのは嫌だ」

「やろ? それやったらいつその事共有してもうたらええやんっちゃう結論に至った訳や」

「…何つう無茶苦茶な」

「それにウチは『男』 っちゅうイキモンに対して、ある程度理解はあるつもりや」

「理解？」

「そうや？ 全ての事に実力のある男なら一夫多妻もええと思うねん」

徳川の後宮も、将軍があれだけの実力者だったから成り立ったのだろう。

アラブとかでも王様や豪族と言った実力者は、普通に一夫多妻だしな。

「それに男が生涯一人の女だけを愛し続けるんは難しいと思うし」

「いやそれは…」

…なあ、呂堂」

そんな事を考えていると、華雄が口を開いた。

「んあ？」

「私はな、お前さえ良ければと思ってるんだ」

「いや確かにお前は…」

「理沙だ」
りーしゃ

…え？」

「私の真名だ、私の真名は『理沙』と言う…受け取ってくれ…男に預ける事はないと思っていたが、自分が思う以上に私はお前の事が好きらしい」

突然の真名明示。

真名って確か神聖な名前なんだよな？

つか俺の事が好きだって？

「嬉しいが…良いのか？」

「受け取ったってや…華雄はな、己の伴侶となるべき男にしか真名を預けんってちっさい頃から豪語しとんねん…それを預けられる…意味は分かるやろ？」

「…ああ、しかし本当に良いのか？ 霞の言う通り俺は他にも女を作る気でいるぞ？」

ここまで華雄がぶっちゃけ、霞が補則するんだ。
俺にも隠す理由はない。

「分かってる…けどこれだけは約束してくれ」

「約束？」

「そうだ…私や霞以外の女に惚れた…あるいは惚れられた時は、包み隠さず言っで欲しい」

「せや、その女が刃に相応しいかどうかはウチらも知る権利があるはずやからな」

…どうするんだよ、俺。

ハーレム公認されちまったぞ？

いや確かに貂蟬からもらったチート能力に『巨乳ハーレム被認可体質』はあるが、大丈夫なのか？

しかし！

俺はここで引き下がっては男が廢る！

悲しいけど俺、男なのよね。

…どこのスレッガーさんだ？

「……………分かった、そこまで言われて…認められた上で引き下がったら男が廢るしな」

「よう言うた！　そうや…据え膳食わぬは男の恥や」

「…良いのか？　呂堂」

「刃だ」

「え？」

「俺の真名は刃だ、受け取ってくれ…理沙」

「ッ！？　…ありがとう、刃」

こうして俺は華雄…理沙と真名を交換し、その夜…理沙を美味しく頂いた。

…途中で興奮しすぎた霞が乱入し、翌朝…太陽が黄ばんで見えたの

はお約束である。

余談だが、理沙の胸は霞に負けず劣らずの大きさだった。

そして、華雄は女となり…乱交パーティーの翌日、理沙にある変化があった。

「おはよう、牙遠きえん…いや理沙」

「おはよう、刃」

「んうう…もう、朝なんかあ？」

「そうだよ、霞もおはよう」

「ふぁ…おはよう、刃」

華雄はその名を『華雄 牙遠』と改名した。

そう、字を得たのだ。

もちろん名付け親は俺と霞。

霞の字から『遠』の文字、俺の字から『牙』の文字を取って合わせた物。

早速…賈駟に申請して本名を『華雄 牙遠』として貰い、見事受理された。

もちろん華雄も霞も喜んでくれた。

その様子を俺も笑顔で見ていたのだった。

ちなみ理沙に字を付けるに至った理由だが

『シ水関の戦いで、理沙が字無しと馬鹿にされるのが嫌だった』から。

と言うのが字命名の本当のところ…

理沙はシ水関で籠城中のところを、字が無い事や孫堅に負けた事を侮辱され…激昂して突出、結果として関羽に斬られて没するのだが…それは俺がご免被るので急遽命名するに至った。

なおこれは俺だけの、墓まで持って行く秘密だったりする。

伝記の12 刃、他者に字を与えるのこと（後書き）

当作品で出てくる『宮』とは、市街地の一角に作られた権力者が執務を行う砦のような物…とお考え下さい。

さて、かゆー姉さんのシ水関戦死フラグ、1つ折ってやりました。

そしてかゆー姉さん、半ばオリキャラ化しました。

こんなハズじゃなかったのに…ちなみに、華雄の字は作者のオリジナル…真名は感想で頂いた意見を参考にしました。

次話、かゆー姉さんを魔改造し…シ水関戦死フラグを全て折ります。

乞うご期待。

伝記の13 刃、魔改造すること【前編】

く刃 視点く

「なあ、刃：一つ頼まれてくれないか？」

霞しあと交わって3日、つまり理沙りしゃと交わった翌々日の事：帰る時の旅費用の路銀を少しでも増やそうと、街へ繰り出す準備をしていた俺を理沙が呼び止めた。

「頼み？ 俺に出来る事か？」

「と言うより今この宮においては刃にしか出来ないだろう」

「何だ？」

「私と霞の部隊の訓練に立ち会って欲しい」

「訓練に立ち会えって？」

この当時の個人軍勢とは多くても200人が関の山で、ほとんどが歩兵と弓兵。

馬を用いる騎馬兵はいても、馬が購入費や維持費の問題で高級品とされ：馬を有する騎馬隊は存在しても、鞍や鎧を装備していない場合がほとんどだったりする。

だから仮に馬を持っていたとしてもそれはあくまで戦地までの移動手段でしかなく、戦地へ到着すれば即座に馬から降り：実際に足を使って敵に歩み寄りなくてはならないのだ。

「俺は軍勢の扱いや心得に関し、ほとんど知識のない素人だが…俺が立ち会っていいのか？」

「うむ…調練と言っても兵達と模擬戦を行い、武器の扱いや体捌きを見て指示・意見するのが主流なのだ…そこへ来て刃は七万を討った豪傑、一家言はあるだろうと思っただけだ」

「……ふむ…一理あるかも知れん…だが先に聞いておきたい事がある」

「聞いておきたい事？」

「ああ、理沙の部隊の特色をな」

ひょっとすると華雄を魔改造するチャンスかもしれない。

自らの部隊の調練に立ち会えと言われた時、俺は内心そう考えた。

「我が部隊の特色か？」

「例えば最前線で大暴れするのか、遊撃して相手の守りの薄いところを狙うのか…あるいは別働隊が動きやすいよう補佐して回るのか、鉄壁の守備で本陣を守るのか…歩遊補守、どれに属するかを聞いておかなくちや助言できないじゃないか」

史実の華雄は『猪武者』の異名を付けられるほど単純で、頭に血がのぼりやすく…後の反董卓連合との戦いで、シ水関において…味方の静止も聞かず相手の挑発に乗り関から飛び出し、挑発を行った武将と…冷静さを欠いたまま一騎討ちに依じて負けてしまう人物。もしこの『理沙』が、史実通りの猪武者なら…いずれ起こるであろう

うシ水関の戦いで間違いなく突出し、間違いなく討たれてしまう。そして彼女が猪武者なら、その部下達も間違いなく『突撃粉碎至上主義者』である可能性が極めて高い。

そこで俺が、彼女が死地へ出る前にその『突撃至上主義』を粉碎し…虚実を織り交ぜる事の出来る猛将部隊へ変える事が出来れば？結果として理沙は敵将の挑発を逆にあざ笑い、冷静に敵将を下す事ができるに違いない…そう考えた訳だ。

「我が軍の方針は突撃型…その身に有する武の全てを以て相手を真正面から粉碎し、勝利を勝ち取る部隊だ」

「…なるほど」

そして理沙は予想通り猪だった。さて、どう改良するか…俺は思案を巡らせ始める。

「…よし、とりあえず調練場へ行こうか」

「立ち会ってくれるのか？」

「ああ、やろう」

「それでこそ私が認めた男だな」

「よせやい、照れるぜ」

「はっはっは！」

俺が何を企んでいるかも知らず豪快に笑い、俺を調練場へ先導する

理沙。

スマンな理沙、予め言っとく…今日ここで『猪武者・華雄』には死んでもらう。

調練場へ着くとそこには先客が居た。

先客は霞。

見れば彼女は100騎余りの騎馬隊を率い…小さいながらも鶴翼陣と鎬矢陣、それに縦奥陣を切り替え…敵団に見立てた藁人形に攻撃を繰り返していた。

流石は神速の張遼。

個人の攻撃速度もさる事ながら、騎馬隊の運用速度…特に陣形切り替えは凄まじい速度を誇ってるな。

「…よし、三列で整列してちっと休憩するで」

「」「御意!」「」

「おい、霞」

「ん?」

一段落着いたのだろうか…霞が、陣形を組む部隊の面々へ休憩の指示を出し始めた。

そんな彼女をタイミング良く呼ぶ。

呼んだ主が俺だと気付くなり、その表情が嬉しそうになる霞。

「お、今日の調練は刃も一緒かいな…こら燃えるでえ！」

「そうだ…刃には調練に立ち会ってもらい、我らの部隊の至らぬ所を意見してもらおうつもりだ」

「じゃ、まずは顔合わせも含めて自己紹介してもらおか…刃」

「おう」

霞と理沙の紹介で俺は霞軍と理沙軍、いや張遼軍と華雄軍を構成する兵達の前に立つ。

俺の顔を見るなり表情を締める兵が目立つ…ふむ、やり甲斐がありそうだ。

「俺の名は呂堂 戦牙、今日は霞と理沙…いや張遼と華雄の頼みで君らの調練に立ち会う事になった者だ」

「刃は強いでえ？」

「ああ、今の私では歯が立たんしな」

霞と理沙の補足紹介を受け、兵達にざわめきが起こる。

その様子を見ていて俺はある懸念を思いつき、それを確認する為に理沙を呼ぶ。

「…（なあ、理沙）」

「…（？ 何だ、刃）」

「…（もう訓練始まってんだよね？）」

「…（ああ、もちろんだ）」

…この程度でざわめいちゃ命が幾つあっても足らんよ？
まずはその事を分からせてやろうか。

「…シッ！！」

―ドスッ―

「…ガッ！？」

俺は手にしていた方天画戟を地へ置き、同時に近くに居た張遼隊の
先頭の兵へ高速で肉薄…その鳩尾へ右拳をねじ込んだ。
…防御する素振りすら見せない…少しやばいな。

「貴様、何をする！」

「日々是戦場也」
ひびこれせんじょうなり

「…何だと？」

「武人たるもの何時何時いつなんどきでも神経を張り巡らし、不測の事態に備え
るべし…お前ら、本当に武将配下の精鋭か？」

「…」

「冷静さを失うな、自分だけは一步引いて戦場と戦況の両方を見据
えろ」

言って俺は視界の隅で俺に矢を射ろうとしている華雄隊の兵士を確認する。

すっかりこっちを見てるんだが…俺がまだ気付かないとでも？
外しても距離があるんだから、二手三手先を見据えるぐらいしろっての。

—シャコン…スチャ—

—キリキリキリ—

俺はそう思い…背から愛弓を取り出して展開し、可能な限り最速で矢を番えて弦を引き…

—ヒュオッ！—

俺に向けて矢を射ろうとしている華雄隊の兵士目掛け、番えた矢を放つ。

—スカンツ—

「うぐあっ!？」

俺が射った矢は調練用に改良した、鏃が無い非殺傷仕様だが…当たれば痛い。

俺を射殺しようとしていた華雄隊の兵士は眉間に調練用の矢を受け、そのまま崩れ落ちる。

「目を見張らせ耳を研ぎ澄ませろ…対峙した相手の一挙手一投足を見逃すな、対峙した相手が出す全ての音に注意を払え…張遼隊、前から二列目の左から三番目…その剣で俺を斬るか？」

「ッ!？」

見れば当該の隊員はその腰に佩いた剣の柄に手をかけており、今にも抜刀して切りかかってきそうな殺気を放っている。

「いいぞ? かかって来い、一撃入れたらお前の勝ちだ: なんならその一撃で俺を殺したって構わん: だが負けたらお前は今日一日、俺に対しての一切の反抗を禁止するぞ?」

「ふざけやがって: 死ねっ!」

―スラッ: ダダダッ、ビュオッ!―

俺の挑発を受け、我慢の限界に達したらしい。

その隊員は同僚の制止も聞かず、俺目掛けて襲い掛かってきた。

「(ニヤッ) 殺^とった!」

真正面へ移動しつつ、最上段からの両手唐竹割り。

ふむ、太刀筋は良いんだが如何せん遅いし素直すぎる。

そして何より:

「相手の得物を確認したり、それまでの行動から相手の力量を読んだ上で挑まんと死ぬぞ?」

―ヒュガッ!―

―パキインッ!!--

振り下ろされた一撃を避けようともせず、俺はその正面に立つ。

そして俺の額が割れる数cm手前で左拳を右下から左上へ振り抜き、籠手を着けた左の裏拳でソイツの剣の鎬を思いつき殴ってやる。すると剣は中腹で真っ二つに折れ、その先端が調練場の端にある茂みへ飛んでった。

―ドスッ！―

「…ぐええ」

…茂みから転がり出てくる、深蒼の鎧を纏った兵士らしき男。その喉には俺が叩き折り飛ばしたらしい剣の切っ先が刺さっており、男はまもなく息絶えた。

「…曹操の細作か？」

「みたいやな」

「狙ったのか？」

つかこの街に来て以来、俺が何か…武術に携わる行動を行うと、何か他所の細作が死ぬ。

それも決まって曹操の細作が。

「まさか、今のは偶然さ…と言うよりこの街には曹操の細作しかないのか？」

「いんや？　んなことあれへん、黄巾の細作とかもしっかりおるよ？」

「ふむ…まあ良いか、さて…」

俺は剣を砕かれた格好のまま微動だにしない、俺に襲い掛かってきた張遼隊員を真正面から見据え：

「負け犬の貴様は今日一日、俺の言う事に逆らうな…」

渾身の殺気を発してそう凄む。

見ればその隊員は顔を青くして、この距離でも震えているのが丸分かりだ。

「逆らえばあの細作と同じ目に遭わせてやる…いいな？」

「ぎ、御意…」

こうして俺はまず、己の力を見せ付けてやり…場の雰囲気完全に掌握する。

これから行う事は場の雰囲気全てだからな。

さて、楽しい楽しい理沙（華雄）改造講座…もとい理沙（華雄）のシ水関戦死フラグ破壊講座、はじまりはじまり♪

伝記の14 刃 魔改造すること【後編】

（刃 視点）

「よし…さて、さっき言った通り日々それ即ち戦場だ…いいか？勘違いするなよ？ 戦場に居て武を、知を振るう事だけが戦場ではない…生きとし生ける事それ全てが戦場なんだ」

寝るも起きるも、飯を食うも便を出すも…人と会うも、人と話すも…全てが、生きると言う戦いの為の戦場だ。

「さて生きる為として一人で出来る事と言うのは言うほど多くない…そして逆に『一人で出来ない事』と言うのは、多くの場合戦場で露見する…特に、大事な何かを守る戦いの時は特に多く露見する」

「…」

「その『一人で出来ない事』を成し遂げる為に大きな力を持つのが仲間の存在な訳だが、お前達は仲間を信用しているか？」

仲間が居れば出来る事は多くなる。

それは例え、絶対数で劣る不利な戦であれ…仲間が策を弄したり、あるいは自身が策を弄する事で逆転勝利という場合もある。

そしてそれは信頼度が成功率を大きく左右し、信頼度次第では例え仲間でも…成る策が成らなくなる場合だってある。

「じゃあ聞こう、この『一人で出来ない事』を仲間と共に実践するに辺り…一番不要なものは何か分かるか？ どうだ理沙、答えられ

るか？」

「…一人では出来ない事を仲間と成す場合に一番不要な物か……なんだろう」

「霞は答えられるか？」

「…さっきまで刃が言うたり、見せてくれたモンをひっくるめて考えたんやけど…焦りちゃうか？」

「そう、基本はそれが正解だ…逆を言えば『冷静さを失うな』とも言える……そして更に言うなら、時として矜持も邪魔になるんだ」

「矜持も邪魔？ どう言う事だ？」

矜持、つまりプライド。

己が己たる最高の理由…基本的に曲げてはいけないものだが、生きると言う事をなす場合…この矜持は時として邪魔になる。

「例えば無実の親友に在らぬ疑いがかけられ、その友が攻撃されようとしている…霞ならどうする？」

「そらそのダチ守るやろ」

「そう、その友は親友だからな…じゃあその友を攻撃しようとしている対象が、その友を守ろうとする霞を邪魔だとしている……どうする？」

「もちろん潰したる！ ダチ泣かす奴は誰であろうとブチのめすんがウチの信条やさかい、真っ向から潰したるわい！！」

「……理沙も同じ意見か？」

「当然だ！ 友を泣かせる悪漢などに今日を生きる資格は無い……我が斧にて叩き斬ってやるぞ！！」

……ふむ、なるほど。

よし、ならば演じて見せるほかあるまい。

俺だって情を持ってる相手をむざむざ死なすわけには行かないしな。

「君、その槍を貸してくれないか？」

「はっ！ どうぞ」

「ありがとう」

――……ザリザリ――

俺は張遼隊の1人から槍を借り、それを使って霞と理沙を囲うように大きな円を描く。

「よし、これでいいだろう……君、無手でその円の奥の端に立ってくれ」

「……こうですか？」

「そうだ……いいか？ 今から俺が『もう良いぞ』と言うまで、何があってもそこから動くんじゃないぞ？」

「はっ！」

言って円の奥で直立のまま動かなくなる兵士。
それを見てこれからする事の意が分からないのだろうか：霞が疑問
の声を上げる。

「なあ刃、何やコレ」

「今から俺が『理沙の大事な友を討たんとする敵』に扮し、その人
を攻撃する：理沙はその人を『大事な友』として、俺の攻撃から守
るんだ：さあ、円の中に入って友人役の兵士の前に立つんだ」

：察しのいい奴ならもう分かるだろう。
そうコレはシ水関の戦いの予行演習である。

「いいか？ この場においては俺が『呂堂 戦牙』である事は一旦
置いておき、本当に敵対者然として動くんだぞ？」

「：分かった」

言って大戦斧を構え、真剣な形相で『友人』役の兵士の前に立つ理
沙。

さあて、何て挑発してやろうか：

「：董卓軍の敵将華雄に告ぐ！ 戦だと言うのに関などに籠りおっ
て、臆病者か貴様は：武人なら前へ出ろ！」

「なっ!？」

この辺りの言葉は実際にシ水関で華雄にかけられた挑發文と大差は
無いだろう。

誰が行ったかは覚えてない：確か関羽だったと思うが。

まあ誰が行うかなんて些細な違いはあれど、史実の華雄はこんな『安い挑発』で激昂し：籠城中のシ水関から突出し、関羽だったかの手にかかり戦死するのだ。

「どうした腰抜け華雄、貴様の武とはこの程度の挑発で萎える物なのか？ 手にした斧は飾りか？ 何とか言ったらどうなんだ？」

「き、きききききき：貴様っ！」

お、もうちょいか？

まだ俺を『呂堂 戦牙』あるいは『理沙を愛している男、刃』としてみているのか：イマイチ反応が薄い。

まあ仕方ない：トドメと行きましょう。

「猪武者め、所詮貴様は字無しの人間としても半人前の出来損ないよ！」

「：許さんぞ貴様！ 我が武を愚弄しただけではなく我が名すら貶めるその所業、万死に値する！ この金剛爆斧こんごうばくふの錆としてくれるわっ！！」

言って理沙が顔を真っ赤にし、目に怒りの炎を宿す。

いくら俺と霞が付けた字とは言え、目の前でそれをコケにされたのだ：怒って当然。

そして手にしていた大戦斧を振りかざし、俺目掛けて突撃してくる：もちろん『友人』は地に書いた円の最奥部へ置き去りにしたまま。

「死ねえええええっ！！」

―ブォン！―

理沙の大戦斧が俺を両断しようと振り下ろされる。
俺はそれを半歩だけ左へ避けてやる。

こうすると俺の眼前を斧が通り過ぎる形になる。

「クッ、くそおおおっ！」

―ビュオッ！―

―ブォンッ！―

―ブォンブォン！―

―ビュウンッ！―

攻撃をかわされた事で更に怒りが加速し、理沙は力いっば大战斧を振り回す。

袈裟掛け、逆袈裟…薙ぎ、振り下ろし…突き、薙ぎ…

どれも当たれば致命の一撃だが、怒りで単調化した攻撃はまず当たらない。

「…」

俺はそれを口には出さず、理沙の乱撃を全て最小限の動きだけで回避する。

もちろん例の円から理沙を遠ざけるように動きつつ。

チラッと目を場外へ動かせば、張遼隊も華雄隊も今の理沙を俺の動きを真剣な顔で見ている。

そうだ、よく見ておけよ？

怒りに踊らされた人間はこうなるんだ。

「ぬおおおっ！」

そうして計四十合ほどの斬撃を全て回避し、俺は理沙の額に汗が滲んでいるのを確認する。

そしてそれを確認し、わざと足を“一瞬だけ”止める。

「ッ！？ 隙あり、だりゃああああああっ！！」

こうしてやると、己の攻撃が当たらない事を焦った奴は大概それを隙として捉える。

だからこそ渾身の一撃を加えようとするのだが、その渾身の一撃こそ一番隙が出来やすいんだ。

「よっ」

振り下ろした後の一瞬の隙を突き理沙に肉薄：

—ぎゅっ…—

—ちゅっ—

「んむっ！？」

理沙の唇へ自分の唇を押し付け、同時に理沙を強く抱きしめる。
同時に胸へ手をやることも忘れない。

「ちゅ、ちゅちゅ…ちゅっ、んむ…ちゅ…」

4〜6秒唇を貪っていると、理沙の目から怒りの炎が消えうせ…乙女の雰囲気滲み出し始めた。

「…っはあ、気が付いたか？ 理沙」

「…刃？ 私は何を…」

「『大事な友人を襲撃から守る』と言う訓練だったんだが…」

俺のセリフでその事を思い出したのか、理沙はゆっくりと後ろを振り向いた。

当然、円の奥には『友人』役の兵士がビックリした顔で佇んでいる。

「あ…」

「持つておくべき矜持を貶された事で冷静さを失い…守るべき対象を残し、討って出る…これが意味する事は？」

「……守るべき対象の死」

「そうだ、だがもう一つあるぞ？ それは理沙、お前の戦死だ」

「え？」

「冷静さを失った攻撃は単調となり、相手には決して当たらないんだ」

「…」

俺の言葉で怒り、大戦斧を力任せに振り回し…その悉くを回避されていた、さっきの自分を思い出したのだろう。

理沙が恥ずかしそうに俯いた。

「攻撃が当たらないという事は相手が倒せない…だが冷静さが無いから、無駄に攻撃を続ける事の愚かさが分からない…何としてもソイツを倒そうとするからな？ 対して敵は冷静だ…理沙の攻撃の悉くをかわし、隙すら演じて作り…理沙の失態を誘う」

「なるほど…そうして下手こいた理沙は、戦場の真ん中で討たれるつちゅう事やねんな？」

「そうか…『怒にしてこれを撓^{みだ}せ』か」

「そう、戦とは何も正々堂々ばかりが通じる清いものじゃないんだ…策を弄することを筆頭とし、色んな思惑が入り混じるもの…それが戦だ…そして、その矜持が…怒って冷静さを欠く要いんなら、即座に捨てる事だな…何、捨てた矜持などあとでいくらでも拾えるさ」

兵は詭道^{きどう}なり。

故に能なるも不能を示し、要なるも不要を示し、近くともこれに遠きを示し、遠くともこれに近きを示す。

利にしてこれを誘い、乱にしてこれを取り、実にしてこれを備え、今日にしてこれを避ける。

怒にしてこれを撓し、卑にしてこれを驕らせ、佚^{いつ}にしてこれを勞し、親にしてこれを離す。

その無備を攻め、その不意を出ず。

「…どう言う意味や？」

「戦いにおける心得や動き方の要点を纏めた書物にある言葉で…全十三篇からなるその書物の第一篇にある、戦を始める前の準備段階で使う兵法の1つさ」

「十三の篇からなる兵法書の第一篇：孫子兵法の始計篇だったか？」

「そう…その通り」

『戦とは騙す事。』

出来るのに出来ないふりをしてみたり、必要なのに不要さを演出したり、近いのに遠く見せたり、遠いのに近く見せたりする。

有利だと思わせて誘い出したり、混乱させて倒したり、充実している相手には準備を入念にし、強い相手とは戦いを避ける。

挑発して怒らせて掻き乱し、低姿勢に出て油断したところを襲い、休養を取っているものは動かして疲れさせ、親密な者達はこれを引き離す。

無防備なところを攻めて、不意を突く』

「口に出して分かりやすい言葉に直すとこんな言葉になるんだけど…理沙、そして霞も…その『兵は詭道なり』って言う言葉、良く覚えておいて欲しい」

「けどなあ、ウチ難しい事覚えるんは苦手やしなあ」

「いずれ役立つ日がきつと来る…理沙や霞が武人である限り」

「そうは言っても、私だって難しい事は苦手なんだ」

「…俺が骨身に叩き込む他無いかな？」

こうして理沙（華雄）及び霞（張遼）改造講座は盛り上がりを見せつつ、日が沈むまで続いた。

…余談だがこの後、理沙へのキスを羨んだ霞に寝込みを襲われ…ま

た翌日、太陽が黄ばんで見えたのは言うまでも無い。

ちなみに翌朝、理沙から『猪武者』と言う不名誉な称号が消え去った。

シ水関戦死フラグ：これで完全に折れたかな？

伝記の14 刃、魔改造すること【後編】（後書き）

孫子兵法の始計編【兵は詭道なり】の和訳文ですが、文中の訳は作者の独自解釈を含みます。
悪しからずご了承下さい。

伝記の15 刃、身の上を話すのこと

く刃 視点く

「せいっ！」

ービュッ！ー

「脇を締めろ！」

ーガッ！ー

「ぐはっ！」

ーどさっー

「次！」

「宜しくお願いします！ でええいりゃあっ！」

ーブオンッ！ー

「間合いの把握が甘い！ 自分の武器の間合いを体に叩き込め！」

ードスッ！ー

「ぐえっ…！」

ーどさっー

理沙^{リーシャ}は迫り来る兵士1人1人に、その場その場での確なアドバイスを
を出しつつ…一撃の下に昏倒させている。

昨日までの理沙ならば考え付かないほど落ち着き払い、だが熱の入
った調練に…俺は理沙魔改造が成功した事を確信した。

今朝も件の擬似シ水関前の舌戦をやってみたのだが、以下はそのハ
イライト。

「敵将華雄！ 私は連合軍、平原の劉備が配下の関雲長！ 貴様の
武は大陸中に轟くほどの物と聞いたのだが、何だその有様は！？」

「…」

「亀の様に甲羅と言う名の関に閉じ籠もるばかりではないか！ 貴
様の武はその程度のものなのか！」

「…ふっ」

「何がおかしい！」

「関雲長と言ったか？ 貴様、頭は大丈夫か？」

「何だと！？」

「私は籠城兵だぞ？ そんな安い挑発に乗って打って出る等有り得
んよ…それにしても随分な焦りだな、余裕が無いのが見て取れる…
功^{カキ}だけでは不服なのか？ 何を焦っている…ああ、そうか…これが
生娘^{オンナ}と開通済みの違いからくる余裕の差か」

…この後、関羽役の女性兵士は役だというのも忘れて激昂し理沙に突撃…軽くあしらわれて気絶させられた。

うむ、実際に関羽を相手にしても十分に通用するだろう。

関羽が開通済みなはず無いだろうしな。

…まあ関羽が劉備達と桃園の誓いを交わしているかは不明だ。

ただ、実際にシ水関で相対した際は両者の間には構造的な高低差があると思うんだが…なんとかなるだろう。

「にしてもこれがあの華雄、いえ理沙なのね…随分と変わったものだわ」

と、自兵を鍛える理沙を遠巻きに見ている俺に賈馱が話しかけてきた。

「そうなのか？ 賈馱」

「詠でいいわよ」

「それ、真名だろ？ 良いのか？」

「ええ、霞や理沙が認めてるのにボクだけ認めてないのもおかしいじゃない？」

「そうか、ありがとう詠…俺の真名は刃だ…ところで詠、理沙は変わったといっていたが、昔はやっぱり猪武者だったのか？」

「ええそうよ、理沙は…よく言えば性根がまっすぐで、己の武に全てを賭けていたの…でも裏を返せば武以外に誇れるものが無くて、

その武を貶されようものなら即座に烈火の如く怒り出して：」

詠から聞いた話だけでも、やはりこの『理沙（華雄）魔改造講座』は効果があったと思える。

霞もそんな理沙の影響を受けてか、近頃では極真面目に調練に取り組んでいるようだ。

「でも刃、一つ聞かせて：今アナタ、理沙が猪武者だった事を指して『やっぱり』って言ったわよね？ それってどう言う事？ 理沙が猪武者“だった”事を知ってたの？」

：やはり食いついて来るか。

これが董卓や霞、理沙なら誤魔化しも効いたんだろうが：やはり軍師相手には通用しないらしい。

まあ諸葛亮とホウ統しょうとう、旬イクじゅんや周瑜達しゅうう、各国軍勢の名軍師達にも通用しないだろうが。

他にも程イクていや郭嘉かくかなんて軍師もいるが、俺の記憶には薄い。

「：どうしたの？」

「いや、どう話そうか言葉を選んでたんだよ」

「適切な言葉はあった？」

「そうだな：これは詠だけじゃなく、他の人間も交えて話をしたほうが良さそうだ」

董卓・詠・霞・理沙、そして小帝の兄弟も。

：元来ならここに呂布（Ⅱ恋）や陳宮もいるはずなんだが、どこかで立てるフラグを間違えたらしくどっちもない。

…集まってみて、小帝の兄弟が姉妹だったのは今更か？

「さて刃…アナタの言う通り、アナタが言った人間を全員集めたわよ？」

「なんや刃、話したい事って」

「我らの今後に関する話だと聞いたが？」

「……今から俺が言う事は、俺の武器と真名に誓って真実だと言う事を先に明言しておく」

こうでもしないと間違いなく狂人扱いされるからな。

「さて…まず俺だが、実はこの国…いやこの世界で生まれた人間ではない」

「どう言うこっちゃ？」

「生まれた場所だけで言うならここ漢の国より更に東、海を越えた先の小さな島国で生まれたんだ」

「…ほう」

「ただし、生まれたのは今から約千八百年後の世界でな……未来の知識を持っているとすればどうする？」

「何だと!？」

俺は今の自分がこの世界へ至るまでの事を掻い摘んで説明する。

1800年後の世界で生まれ、そこで17年間を過ごした事。

1800年後の世界ではこの世界が『物語』として描かれている事。
ある日、事故に巻き込まれて死んだ事。

死んで、この世界に『前世の記憶』を持ったまま再誕生した事。

再誕生の条件としてこの世界に起こるであろう、大きな悲しみを消す任務を負った事。

貂蟬の事や三國無双の世界観、一部の未来の歴史等は伏せておく。

「…それで？」

「それで？ とは？」

俺の説明を聞いて詠が真面目な表情で俺に問いかける。

『その未来の知識で何をしたいのか』と言う事を問いたいのだろう。

「詠、落ち着いて聞いて欲しいんだが」

「？ 何よ」

「『反董卓連合』と言う言葉を聞いて何を想像する？」

「反、董卓連合…ですって!？」

「ちょ、それやと月が何かやらかして…それに反発して立ち上がった連合みたいな表現やんか」

黄巾の乱が終結し、各国が安堵する中で霊帝が崩御する。

空位となった帝の座を賭け…何皇后が生んだ劉弁と、董太后に養育された劉協の間で衝突が起こり…熾烈な争いの末何皇后と劉弁が勝利、劉弁が小帝弁と呼ばれるようになる。

後継争いに勝利した事で宦官かんがん（去勢された官吏）勢力を押さえ込んだ何進は、地位と財力で名門となっていた袁紹えんしょうに唆されて宦官殲滅を図るが失敗…宦官に殺害される。

これを見た袁紹は宮中に入り込んで宦官の虐殺は開始…この混乱で小帝弁（劉弁）と陳留王（劉協）は外へ連れ出され、生前の何進の呼びかけで洛陽へやってきていた西涼の董卓せいりょうに保護された。

劉弁及び劉協と言う手札を得た董卓は、その効力を以て朝廷の実権を掌握…洛陽にて暴政を行い、小帝を廃して陳留王（＝劉協）を皇帝につけた。

だがこれに反対する刺史や太守と言った軍閥達が各地で蜂起し、連合を組んで董卓のいる洛陽を攻める。

「これが俺の知る『反董卓連合』結成と蜂起の経緯だ」

「そんな…霊帝が崩御するなんて」

「何進が宦官殲滅に失敗して死ぬ！？」

「それを唆すんは袁紹って、待てや…袁紹ってあの、頭のアレな袁紹かいな！？」

「ここの袁紹は頭がアレなのか？」

「その袁紹が宮に入り込んで宦官の虐殺を初め、両小帝が都を追放…」

「私その小帝を保護して都を掌握し、圧政を敷くんですか？」

「その月を妬んで軍閥が連合を…そんな馬鹿な事が、刃の知る史実では事実だったと言うのか!？」

やはり後の史実を語るところなるだろう。
だがこれを話しておかねば先へは進めない。

「そうだ…そして黄巾賊が出没し、俺が…俺の知る史実でも実在する黄巾賊の将『波才』を斬っている以上、この騒動は間違いなく発生する事実であると言える…そしてそれは、今日からおよそ二、三年後に発生するだろう」

「そんな…騒動の発生までそんな僅かな時間しか無いなんて」

「それで…その連合軍が洛陽を攻めた後、月はどうなるのよ？」

「…董卓は善良な住民に圧政を布いて苦勞させ、小帝を掌握して天下に牙を剥いた悪漢として捕縛…連合の総大将の手によって斬首に処されるんだ」

「斬…首…」

「…ドサッ」

俺が言った事が何を示すか察したのだろう。

詠が青ざめた顔で崩れ落ちた。

「あ、おい詠！」

「詠ちゃん？ 詠ちゃん！」

「月が、斬首に？ こんないい子が生首に…どうすれば……」

「どうすればって、そうや…そないな連合、真正面から叩き潰したれば…」

「兵は詭道きどうなり」

「ッ！？ それって…」

俺の一言に対し、息を吞む霞と理沙。

特に理沙の息の吞みようは尋常ではない。

「そう、ここ洛陽へ至るまでの道に『虎牢関』と『シ水関』と言う関があるな？」

「うん、あるで？ シ水関と、片側に絶壁と片側は川に挟まれた虎牢関の二関：特に虎牢関は洛陽へ進軍するなら間違いなく難所になる堅牢な関で、洛陽防備の要だな」

「その反董卓連合にまつわる史実では…連合軍の結成を受け、詠はそのシ水関で霞と理沙に命じて籠城戦を展開するんだが…この時“華雄”が敵将の挑発を受け突出、そのまま戦死するんだ」

「「「「ッ！？」」「」「」」

「だからこそ俺はそのシ水関における華雄戦死…つまり理沙戦死の未来を捻じ曲げる為、ここに存在する」

あの孫子兵法・始計篇を教え込んだのも、全ては理沙の戦死を回避する為。

理沙が死ねば連合軍は氣勢に乗り、虎牢関で魏が張遼を下し…蜀が関羽と張飛と趙雲の尽力のもと、呂布を投網で捕縛し…そのまま洛陽へ上がる。

その先に待つのは董卓の死。

つまり理沙が死ぬ事は董卓の死と同義なのだ。

「……ましてや理沙は俺が愛した女、むざむざ死なせはしない」

「ありがとう、刃…」

「ならウチらはどうすればええんや？」

「まず俺はその華雄戦死（やぐあくの）と言う未来を捻じ曲げる為、各地で下準備を行うつもりだ」

「下準備…ですか？」

「ああ、とりあえず最終的に洛陽は『全住民を無傷かつ1人も減らさないまま放棄』して、同時に『董卓と詠は真名と命以外の全てを捨て、戦死した事にして洛陽から逃げる』と言う事になるだろう」

「真名と命以外の全てを捨てる…なるほど…ボクと月は、実際は生きてるんだけど風評的には死ぬって事？　けど、どうやって？」

「街で聞き回った結果、住民のほとんどが月と詠の顔を知らなかったんだ…だから今からでも月と詠の風貌を流言し、住民に概念を植え付けておくんだ」

「…なるほど、そして然る後…連合の将に“董卓”を討ち取らせれば…」

「そう言う事…もちろん理沙や霞、両小帝にも洛陽は捨ててもらおう…そして俺は、連合結成までの2年間で各地を回り、君達の受け入れ先を作るって寸法さ」

「『実にしてこれを備え』だな」

「そう言う事だ」

とは言う物の、2〜3年で出来る事はあまり多くない。
だからまずは候補の国を見出し、そこへ食い込んでなるだけ信頼関係を築く事が肝要なんだけど。

さて現時点で候補は魏・呉・蜀・袁・公・西の6つ。

つまり曹魏・孫呉・劉蜀のいずれかか、袁家か公孫賛か西涼の馬騰ばていか…だ。

いずれも反董卓連合に参加する国だが、魏はまず却下。
理由としては昨日、細作射殺の際に霞が漏らした『あのじゃじゃ馬』
と言うセリフを聞いて以来…この世界の曹操に対する生理的嫌悪感が拭えないから。

呉は現在の最有力候補。

袁術の問題こそあるが身内に対する保護意識が強く、一度抱え込んだ友人はトコトン大事にするから。

…他に個人的な事情もあるが、それは割愛させてもらう。

そして蜀だが、ここは選びたくない…最悪の場合は仕方なし、と言うレベルだが。

次の袁は却下。

霞が言う通りなら、頭がアレらしいし…何より反董卓連合の発起人だ。

そんなところに月や詠を預けては、獅子の口に兎を投げ入れるような物。

そして公だが、ここは第3位候補。

頭たる公孫賛は万能将と呼んでいい位、目立つ欠点らしい欠点がない人で…難しい物を抱えた連中でも受け入れてくれそうな予感がある。

最後の西は第2位。

理由として西涼を治める馬一族の族長馬騰は、受けた恩は必ず返すと言う…当たり前だが奇特な人間で、実を言うと董卓と同郷と言う利点もある。

さて、どうした物か。

俺達は頭を突き合わせて考えを巡らせ始めた。

伝記の16 刃、洛陽を発つのこと

く刃 視点く

俺が洛陽へ来てから今日で7日が経過した。

詠^{えい}は明示した期限ピッタリに波才の首を換金し、俺は帰りの旅費と村の発展費用を確保した。

そしてひとまず村に帰る事を霞^{しあ}と理沙^{りしゃ}に伝えたところ、2人は凄く悲しそうな表情でこう言った。

「もう、行ってまうんか？」

「刃に行かれてしまうと我らはどうやって、体の疼きと心の空白を埋めればいいのだ」

「どうやってってお前ら…アレだけ出させておいてその言い方は卑怯だろうよ」

「じゃあウチらがこうなった責任、持ってくれるんか？」

「…安全日だって言ったのどこの誰だよ……いや子にしてもお前ら自身にしても、責任を持たねえって言ってる訳じゃねえが」

つか霞に理沙よ、男を引き留めるのにそのセリフはアレだと思うぞ？

「安全日やからってウチを寝かさんかった暴れん坊…ウチは離しとくない」

「私もそうだ」

「…お前らだから寝かさなかった、と言えば？」

「…刃は意地悪やわ」

「全くだ」

言って顔を赤らめ、俺の服の袖を摘まむ霞と理沙。

やべえ、この生き物チョー可愛いんだけど。

今すぐ部屋へ連れ込んで…落ち着け俺。

「…」

「…」

視線を下げるとそこにあるのは、今にも泣きそうな表情をした小帝が2人：即ち弁小帝と協小帝の2人。

歳は14だと言っていた。

明るく朗らかで、人付き合いの面に関して人柄は問題ないが正直…俺は関わりたくなかった。

なぜなら…

「にしてもまさか、小帝様が刃に惚れるなんてね」

そうなのだ。

実は昨日の夜半過ぎ…何とか反董卓連合の対策案を出し、とりあえず会議が開きとなったその後…宛がわれた自室で休む俺を両小帝が訪ねて来た。

最初は対策案に対する質問で口火が切られたのだが、少し間を置いた後突然：弁小帝が告白を始めたのだ。

『私は呂堂を慕っているんだ』

『姉者もか！？』

『“も”？　と言う事は協、お前も…』

『そうじゃ、妾^{わらわ}も呂堂を好いておる』

姉に引き摺られて勢いで告白を始める協小帝。

その展開の早さに呆然とする俺を置き去りにして、ワイのワイのと盛り上がりを見せる小帝のお二方。

終いには両小帝とも服を脱ぎ始め『呂堂は胸の大きな女子^{おなこ}が好きなのじゃ、妾より小さな弁姉者は下がるのじゃ！』や『何を言うか、私の方が一寸（3cm）は大きいぞ！　協こそ自重するんだ』と言
い争いを始めた。

そして拳句の果ては2人ともが上半身裸のまま俺に詰め寄り…

『呂堂よ』

『どちらの胸が好みなんじゃ？』

…と、答えるに答えられぬ質問を投げかける始末。

ちなみに両小帝の胸だが、どちらも年齢と体躯に似合わぬ立派な物
をお持ちでした…とだけ言うておく。

その後答えあぐねている俺の部屋に飛び込んで来た詠が両小帝に拳骨を見舞い、月が両小帝2人を俺の部屋から連れ出した。

その時、月が悲しげに俯いていたのには敢えて触れないでおく。

そんな一件もあり、俺は両小帝から距離を取りたいのだが：

―ひしっ―

―ぎゅっ―

俺の腰辺りにもたらされる、誰かがしがみつく感覚。

誰と言う事は無い：茶色い髪をした、顔立ちの良く似た小さな女の子が2人。

これがさっきの視線の持ち主であり：後に継承権争いでもめる、姉の弁小帝と妹の協小帝だ。

「のう呂堂」

「何でしょう？」

「本当に妾達は：：呂堂の嫁になったり、呂堂を婿に迎えたりするのは無理なのか？」

「：無理です：勘弁して下さい：この年で小陛下を嫁に持つなんて、陛下の人柄がどうではなく俺の精神がもちません」

俺が発した拒否の言葉に、さぞ悔しそうな表情で協小帝が答える。

「と言うより：まだ諦めてなかったんですか？」

「お主みたいな男を傍に置かぬ事の方が、天下に仇なす大罪だと思わんか？」

「私達なら全然構わないんだぞ？」

「ですから『陛下』と言う肩書きを持つ人を嫁には迎えられないですし、俺みたいな一庶民が陛下に婿入りしてそれが認可されれば…反董卓連合じゃなくて、反小帝連合が蜂起しますよ？ それに『陛下』と言う肩書きを捨てれば良いって話でもありませんし、そう簡単に捨てれる物でもない…更に言うなら、陛下が肩書きを捨てればまた…後継者争いで洛陽が動乱の源になりますか？」

「むう…こうなったら勅命を使ってでも…」

おいおい、俺ごときを傍に置く為に勅命なんざ使うなよ！？

と思っていると…

「お言葉ですが陛下、もし刃を傍に置く為に勅命を使うと仰るのであれば…刃奪還の為、例え陛下が相手とあれど容赦はしないので悪しからず」

…と、素晴らしい言葉が理沙の口から飛び出した。

即座に相手が小帝であれ、何の戸惑いもなく離反宣言をする理沙って…

けど、すげえな…ここまでくると。

「うぐっ…なあ霞よ、刃を貸してくれんかの？ 一晚…いやせめて二刻だけでも」

理沙にはとりつく島も無いと悟ったのか、今度は霞へ話を振る両小帝。

「嫌や：刃はウチと理沙の男や、いくら陛下でもそれは聞けへんで？ そないな事なったらウチ、刃を殺してウチも死ぬ：あ、刃を殺すんはしたないから：やっぱ陛下を斬る事になるわな」

「そんな…」

だが霞の意見も『拒否』

いやあ、モテる男はツライねえ：

両小帝の熱烈な求愛を、敬意の欠片もない言葉で切り捨てる霞。
俺だって男だが、流石に帝を抱く度胸は無い。
ましてやそれがロリムチであろうとも。

「はいはい弁小帝も協小帝も、刃を誘惑するのはそこまでですよ」

「詠からも何とか言ってやってくれんか？」

「ボクに何を言えって言うんですか？」

「それは：例えば理沙に『刃を二刻だけ弁に貸してやれ』とか」

「それは卑怯だぞ姉者！ それを言うなら霞に『刃を二刻だけでも協に貸してやれ』と」

「へう…」

ほらほら、月ちゃんが顔を真っ赤にして俯いてますから。

「言うのは構いませんが、それを受けるも蹴るも理沙と霞次第だし……それが元で二人がお二方から、ひいては洛陽離れても良いので？二人が洛陽から離れたら洛陽の守りは極薄になりますが……そうなたら誰が月を守るんでしょう……刃一人では無理がありますよ？」

「「うぐっ……」」

……詠よ、その辺にしといてやれ。
両小帝とも半泣きだからさ。

「……とまあ小帝弄りもこのぐらいにして」

「詠ちゃん」

「良いのよ……さて刃、これを」

言って詠が差し出したのは、小麦色をした袋。
手に取るとジャラジャラ音がして、ずっしりとした重みを感じる。

「波才の首の報償金だな？」

「ええ」

俺は中身を確認すると、腰に巻いているベルト状の板紐へ結わえ付ける。

単位が銭せんと言うのは知ってるが、それが日本円換算で1銭いくらかのかは知らない。

……食う分には困らないし。

「さてと」

「やっぱり、もう行ってまうんか？」

腰へ錢袋を結わえ付ける俺を見て霞がなお悲しげに言う。

「やっぱりウチも…」

「霞、それは無理だ…霞が洛陽を離れたら誰が月を守るんだ？」

「…理沙かいな？」

「おい、私だって刃と一緒に行きたいんだ…お前が残るべきなんじゃないのか？」

「そんなん嫌や！ なあ、刃…何とかなれへんのか？」

「そりゃ俺だって離れたくないさ…けど仕方ないんだ、特に今は」

「…あ、そうや！ ウチか理沙と一緒にの軍におったらええやん」

「スマン霞^{しあ}、俺はまだ勢力仕えの武将じゃないんだ…波才を討ったんだって親からの『人の命を奪う事の意味を知れ』って試練だっただけで、何も名を上げようとしてやったんじゃない…更に言うなら波才の首、いや首級制の初体験って感じだしな」

俺が董卓軍所属の武将ならこのまま居着いても良いんだが、三國無双における董卓軍の末路を知っている俺としては…霞が曹操に奪われ、華雄が討ち取られるのは非常に癪だ。

だからこそ敢えて今は自由を気取りつつ、霞を手元に置きつつ華雄も生かせる道を模索したい。

その為には各国を渡る必要があるし、それには資金が必要だ。

俺がそう告げると、理沙も霞も渋々だが納得したらしい。

「おう、じゃあ昨日も言った通り…当面の間は各国の動きに気を付けておいてくれ…特に曹操と劉備には要注意だ」

「確か呉と公孫賛、それに馬騰ばとうはそれほど重要視しなくても良いのだったな？」

「ああ」

曹操と劉備さえ押さえておけば後は何とでもなる。
俺達は昨日の議論でそう決断した。

「そうだ、理沙に言っておきたい事があったんだ」

「何だ？ 刃よ」

俺の呼びかけに対し理沙が顔を上げる。

「月ゆえの事、頼んだぞ」

「任せろ」

俺の言葉に力強く頷く理沙。

ちなみに【月】とは董卓の真名で、昨日…反董卓連合対策で各人が頭を突き合わせた時、董卓本人から『私なんかの為にここまでしていただいて、何と御礼をすればいいか…』と言う流れになり、自分を卑下する必要は無いだの自分達がやりたいからやるだの…皆して月を持ち上げ、それが嬉しかったのか…月本人が涙を流しながら預けてくれた。

…ちなみに直後『月を泣かすな！』と、詠から理不尽に殴られはしたが。

「霞^{しあ}も」

「何や？」

「最悪の場合、月と両小帝だけでも逃がせるよう月と両小帝の三人を乗せれるような馬を探しておいてくれ」

「よっしゃ、騎馬ならウチにお任せや」

俺の見通しが確かなら、後2年ほどで世は戦乱になると思う。それも血で血を洗うような凄惨な戦乱に。

「最後に、これだけは覚えておいて欲しい」

俺は洛陽の街の城門で、みんなを振り返りつつ言う。

「？」

「次に会う時、多分世は乱世…そして月や詠を含め、ここ洛陽は戦火にさらされているだろう…が、俺はどんな事があってもみんなの

味方って事を」

「分かっている」

「心配しなや、月らはウチらが守るで」

「期待せずに待ってるわ」

「詠ちゃん…」

「妾達も待っておるでな」

「むう、また協に抜け駆けされた…」

はは、みんなイイ顔してら。
これなら大丈夫だろう。

「じゃあな、行くわ」

「うむ、壮健でな…刃」

「じゃあまたな、刃」

こうして理沙と霞に見送られ、俺は下地作りの旅へと…第一歩を踏み出したのだった。

伝記の16 刃、洛陽を発つこと（後書き）

かなり強引な文運び&展開である事は否めない。
別れのシーンを書くのは苦手です。

そしてこの話以降、しばらくの間洛陽の面々は出てきませんので宜しくお願い致します。

伝記の17 恋、拾い物のこと【番外編】（前書き）

オリキャラが登場します。

陳宮の口調が難しい。

そして恋がだんだんと壊れ始めました。

伝記の17 恋、拾い物のこと【番外編】

ゝ恋 視点ゝ

刃兄^{じんにい}が洛陽へ、波才の首を換金しに行って今日で5日目。
刃兄はまだ帰ってこない。

暇だ。

暇すぎて死にそう。

―ガギンッ!―

―ドシヤッ…―

「ぐわっ!」

暇にかまけて手合わせ出来る人を探してるんだけど、みんな弱い。

「…みんな弱い、恋^{れん}…つまらない」

恋とともに手合わせ出来るの、刃兄だけ。

刃兄以外だと三合も打ち合うとみんな立てなくなる。

「…刃兄、まだかな…手合わせ、楽しみ」

「恋ちゃん? お昼よ?」

「ん、今行く」

食べてる途中、無性にイライラした。

刃兄に何かあった?

今日は朝から薪用の枯れ枝を集めに、村の裏手にある裏山にやってきました。

母さんは猪や熊と出会えたら、狩って倒すと…長旅で疲れている刃兄に美味しい物を食べさせられる事が出来ると言っていた。

刃兄は恋と一緒に、良く食べる。

刃兄も美味しい物を食べると、笑顔になる。

刃兄の笑顔を見ると、恋は胸が『きゅん』ってなる。

でも『きゅん』ってなるのは嫌いじゃない。

むしろもっと『きゅん』を感じたい。

「……ん！」

恋、頑張る。

山に入ってしばらく経つけど、熊どころか猪すら居ない。

枯れ枝は沢山見つかった。

…ごめん嘘。

本当は立ち枯れした木を切り倒し、薪にして用を済ませた。

木を切り倒したりすると猪とか熊が出る。

でも今日は出てこなかった。

恋、刃兄に美味しい物食べて欲しいけど…残念。

—きゅるるるう、ぐぎゅううう…—

「…／＼／＼」

お腹空いた。

そう言えば今日は朝から山に登ってたから、朝ごはん食べてなかった。

「猪、いない…熊、いない…薪、沢山…恋、お腹空いた…帰る…

—ガッ!—

—びたーん!—

「……?」

用事が済んだから家に帰ろうとして、何かに躓いてこけた。
顔が地面にぶつかった…痛い。

口の中で血の味がする…薪が飛び散った。

「恋、何に躓いた?」

足元を見る。

…足が生えていた。

「……?」

—ずるっ—

足を掴んで引っ張り上げてみる。

…人間だった。

「あら恋ちゃん、籠から出ているその足は何？」

「埋まってた、拾った」

村に帰り、母さんに報告する。

「女の子!？」

「行き倒れか？」

「とにかく家へ：貴方、お医者様を」

「分かった！ 恋は母さんと一緒に家にいるんだ」

「……ん」

それから数刻は大騒ぎだった。

恋が拾ったのは、どうやら人間で：女の子だったらしい。

医者が言うには栄養不足で血が足りず、もう少し遅かったら命が危なかったらしい。

「これで良いだろう：今は気を失っておるが、その内目を覚ますだろう：育ち盛りだから、栄養のある物を食べさせてやりなさい」

そう言って医者は帰って行った。

「ありがとうございました」

女の子はスヤスヤと眠ってる。

恋より小さな女の子。

見ればあちこちに大なり小なり、色んな傷がある。

何があっただろう。

刃兄がいれば分かるかな？

—ぎゅるるる、ぎゅこここここ—

そんな事を考えていると、突然…お腹の虫の鳴く声が聞こえた。

「あら恋、まだお腹空いてるの？」

「…今の、恋じゃ…ない」

「じゃあ…誰？」

「多分この子…」

あ、またイライラしてきた。

刃兄…今、何してる？

「このあぶないところを助けていただきありがとうございます！　ねの名前は陳宮ちんきゅう　公台こうだいと言うのです」

それから4刻して、女の子が目を覚ました。
名前はちんきゅうと言うらしい。

「私は、姓が嚴げん、名が進しん、字が棧越さんえつって言うの…貴女を助けた、この子の母親よ」

「……恋は呂布りよふ、字は奉先ほうせん」

母さんの姓と連の姓が違うのは、父さんが呂姓だから。
夫姓制？
分からない。

「呂布殿でしたか、助けて頂いて感謝なのです！」

表情がくるくる変わる、可愛い女の子だ。
悪い人じゃなさそう。

「……恋でいい」

「ほえ？　それは真名なのでは？」

「ちんきゅう、たぶんいい人…だから恋でいい」

「ありがとうございますのです恋殿！　ではねねの事も真名で呼ぶのです…音が三つで音々音、ねねねと言うのです！」

「…ちんきゅう」

「恋殿！？　今しがた真名をお教えしましたのに」

「ちんきゅーで覚えた…覚えなおすのめんどくさい」

「恋どのおおおおっ!？」

恋はちんきゅーを拾った。

刃兄、喜んでくれるかな。

伝記の18 刃、恋に振り回されること(前書き)

2011/03/27...11..28 桔梗の笑い方を修正

2011/03/27...11..28 紫苑の娘の名前を修正

2011/03/27...11..28 『恋の下』を『恋の舌』に修正

ご指摘頂き感謝します。

伝記の18 刃、恋に振り回されるのこと

く刃 視点く

「お前が恋殿れんの言う『じんにい』とやらですか？」

さて、あれから道中で2泊しつつ故郷まで帰ってきた俺だが…村ではえらい事になっていた。

目の前のこの子、誰だと思う？

服こそ恋のお下がりを着てるから分かりづらいが、口調で分かると思う。

真名を呼ぶ事を許可した覚えは無いが、恋の口調を真似て尋ねているだけだろう。

「俺がその『じんにい』だとして、君は誰かな？」

「おお！ そうでした、ねねの名前は陳宮ちんきゅう 公台こうだいと言うのです」

なるほど、そうでは無いかと思っていたが…やはり陳宮か。

話を聞くと故郷の村を賊にやられ、命からがら逃げ出し…飢えも重なって逃げ疲れ、山中で行き倒れていたのを恋に拾われた…らしい。

と言うか陳宮よ…一人称が真名ってのはクセなのか？

「そうかそうか…俺は姓は呂りよ、名が堂どう、字が戦牙せんが…陳宮の言う恋、呂布の従兄妹にあたる存在さ」

「なるほど、だから兄君で…恋殿の真名も許されている訳なのです

ね？」

ちなみに今更真名の件でどうこう言うつもりは無い。
最初に知った、俺の情報が『あだ名は【じんにい】である』で…情
報源が恋ならなおの事仕方ないさ。

「まあそう言う事…で？ 君を拾った恋は？」

「家の裏庭で鍛錬中なのです」

鍛錬か…もうこの村で恋に勝てる奴などおらんだろうに。
恋の相手になりうる奴なんて、自惚れを抜いても俺しかいねえんじ
やねえか？

そんな事を考えつつ恋の家の裏へ回ると…

「……………」

凄い不機嫌な顔で方天画戟をブン回す恋がいた。
ちなみにこの時点で陳宮は何処かへ行ったようだ。

「恋」

「！？ 刃兄！？」

「おう、刃兄だ」

「刃兄！ 刃兄！」

「がばっ！」

—ぎゅっ：—

声をかけ、その声の主が俺である事を確認した瞬間：矢もビツクリな速度で恋が突撃してきた。

「刃兄！ 刃兄！ 刃兄！ 刃兄！」

—ぐりぐり、ぐりぐり—

恋は俺にしがみつくなり俺の胸元に頭を押し付け、しきりにぐりぐりし始めた。

「刃兄：恋、寂しかった」

「悪かったな、恋」

よっぽど寂しかったのだろう。

いつの間にか恋の声が鼻声になっている。

なので俺は謝罪の意味も込め、恋の頭をゆっくり撫でてやる。

「……帰って来てくれたから、いい」

「そうか」

「次にどこか行く時は、ちゃんと行って」

「分かった：じゃあまた後でな」

「ん」

そうして：散々撫で回してようやく機嫌の戻った恋に別れを告げ、俺は長らく空けていた自宅へと戻ったのだが：

「はっはっはっは、紫苑しおんも未だに乙女じゃのう！」

「そう言う桔梗きぎょうだって乙女でしょう？　そこで『我関せず』みたいな顔をしてる珊瑚さんごだってそうなのよね？」

「私は響ひびきさんがいるから心配は要らないわ：それより桔梗？　貴女の胸、また大きくなったんじゃないの？」

「うゝむ、やはり分かる者には分かってしまうか：そうじゃ、珊瑚の倅を扱いた時より二寸（6cm）は大きくなっておるの：紫苑も大きくなったと聞いたが？」

「夫が死んで一年：もう愛される事は無いと心では割り切ってたつもりなんだけど、体は寂しいみたい：私も二寸大きくなったわ」

家には客人がいた。

それも見知った顔が2人。

「ただいま」

「あら刃、おかえりなさい」

「お、久しいのう刃よ」

「お久しぶりです厳師匠げん、それに黄師匠こうも」

「なんじゃ堅苦しい：刃には真名を預けておるだろう？　真名で呼

べい」

「では改めて、お久しぶりです：桔梗さん、紫苑さん」

「あらあら、しばらく見ない内に一皮剥けたわね：刃君」

「いえいえ、紫苑さんもしばらく見ない内に妖艶さを増したようで
…」

『はっはっは』と豪快な笑い方をするのが、俺の遠距離武器の師匠
その1：桔梗さん。

姓は厳げん、名が顔がん、字は竜胆りんとう：桔梗は真名。
酒と戦をこよなく愛する女傑。

豪天砲と言う、銃のような射撃武器を使う。

ちなみに母の元上司で、母の従姉妹にあたる人（伝記の5を参照）

そして腰まで伸ばした紫の髪に、同じ色のチャイナ服っぽい衣装を
身に纏うのが遠距離武器の師匠その2：紫苑さん。

姓は黄こう、名は忠ちゅう、字は漢升かんしょう：紫苑は真名。

子持ちには見えない妖艶さを保つ未亡人。

武器は大弓『颯鵬くほう』

最初会った時、三國無双の知識から『この人が黄漢升！？　ウソだ
ろ！？』と思った俺は悪くないはず。

ちなみに桔梗さんは30代前半、紫苑さんはギリ20代だと思われる。
る。

：が、年の事は決して触れるべからず：紫苑さんに至っては、歳を
馬鹿にされて怒りで街を半壊させた事もあるそうだ：あれ？桔梗さ

んだったかな？

ともかく、この2人の前で彼女らの年齢に関する話は禁句だ…まあ命がいらぬなら好きにすると良い。

「今日はどうしたんです？」

「いや何、近くまで来たもんでな…従姉妹と愛弟子の顔を見ておこうと思ってな」

「紫苑さんは？」

「私？ 私は…刃君を誘惑しに…かな？」

「えっ!？」

言って立ち上がり、自らの胸を抱いてクネクネし始める紫苑さん。衣服で押さえてあるとは言え、その素晴らしい二子山がプルンプルン…

「美味しそうですね？」

「ッ!？」

「ふふっ…食べたくなったらいつでも言ってね？」

／／／

「ちょっと刃？ 母さんの前で母さんの友人に鼻の下を伸ばさない

でくれるかしら？」

「ふふ、冗談よ」

これが冗談だから堪った物ではない。

まあ霞と理沙しあで女体を経験しているからこそ耐えられる面もあるが。ちなみにこのお二方、性欲を持て余しており：特に紫苑さんはこうして、会う度に誘惑してくる困った人。

「まあ正直に言ってしまうと、暇だったから桔梗について来たのよ」

桔梗さんは劉璋りゅうしょうに仕える武将だけど反りが合わないらしく、度々親友の紫苑さんを誘ってはこうしてアチコチをブラつくのが趣味らしい。

「ところで刃よ」

「何でしょう？」

「お前の手は綺麗か？」

母と仲良く酒を飲んでいた桔梗さんがふと、真面目な表情でそう言った。

俺の手は綺麗かって？

見た感じ汚れは：ああ、そう言う事か。

「いえ、血に濡れています」

「：：そうか、気分はどうだ？」

「決して良くはありません……ですが割り切ってます……己の正義を貫く為には、他者の命を奪う覚悟も必要だと……俺は利己的な正義を貫く為に、事情があって立ち塞がった相手を殺しました」

波才が率いた6万の黄巾族、そして波才本人。

更には偶然とは言え、洛陽で殺した曹操の細作も。

「震えもしました、挫けもしました……吐きもしました、泣きもしました……ですが逃げません、忘れません……支えてくれた仲間の為にも……殺しを正当化する訳じゃありませんが、武器を握ると言うのは……全てを賭けて生きると言う事だと思ってますから」

ちなみに震えた挫けたの辺りは、波才の首を村へ持って帰るまでの話。

村の入り口が見えたあたりで気合を入れ、歯を食いしばって耐えているといつの間にか霧散していた。

「……………そうか、良い顔をするようになったな」

「いえ……両親と言う師、桔梗さんそして紫苑さんと言う師、支えてくれる仲間の存在があってこそです」

「……ねえ刃君、さっきから聞こうと思ってたんだけど……支えられてくれる仲間って、どんな子なの？」

「仲間ですか？ えっと、洛陽の董卓・賈馱・張遼・華雄……ですかね」

「な！？ 董卓と賈馱と、張遼に華雄だと！？」

「ええ」

何を驚く必要があるんだろう。

もし反董卓連合の話だとしても、噂が立ちだして檄文が回るまでまだ2年はあるはず。

今の時期を名づけるのであれば『黄巾賊動乱の時代』なはずだし。

「何かあったんですか？」

「…実はのう、わしには今…刃の妹弟子にあたるやつがおるんじやが、これがまた堅物でのう…己の武こそ最強だと言って聞かんのじや」

「…最強なんて上には上がいますしね」

「うむ、やはり刃はその辺りを心得ておるの…で、じゃ…余りに最強最強と喚くもんじゃから、近場の武将に喧嘩吹っかけて来いと唆してな…洛陽の張遼と華雄に戦いを挑ませたんじや」

それを聞いていて俺は内心、冷や汗と脂汗を抑えるのに苦労していた。

魔改造を施す前の理沙りーしゃならともかく、霞しあは理沙の改造前の段階でも相当に強く…理沙を改造した後は理沙本人の実力向上と並んで更に強くなったからだ。

そんな状態の猛将2人に、大海を知らぬ井の中の蛙が戦いを挑んで無事に済むはずが無い。

「…結果は？」

「華雄は：わしが知る頃の華雄と全く違っておって、落ち着き払った様子じゃった：弟子の挑発を鼻で笑い、逆に弟子を挑発して怒らせ：これを一撃で叩き伏せよった、それも無手で」

ああ、改造後の理沙だ。

挑発を受け流して逆に挑発し返し、それをあしらって沈めるなんて改造後の理沙にしかできないからな。

「張遼は真正面から、目視も難しい一撃で弟子を吹き飛ばし『上には上がおるっちゅう事を知るべきやな：まあウチよりも上なんが、ウチと理沙の大事な人なんやけど』と惚気まで披露してくれたわい」

はは、霞らしいわ。

事実：霞との手合わせは一度も負けなかったけどな。

「それで、張遼さんを仲間って言う『刃君』と：張遼さんが言う『大事な人』って同じ人物かしら？」

と、話を聞いていた紫苑さんからえげつないキラークラスが飛んできた。

「それはどう言う？」

「もう、わかってるくせに：」

そう言う紫苑さんは既に顔がヤバイ。

「そうじゃの、わしも興味あるのう」

桔梗さんもころなしモジモジしているように見える。

ああ、こりゃアレだ。

肉食系女子に狙われた草食系男子の図だ。

両師匠の顔を見る限り、既にスイッチが入りかけているのだろう。

「…」

さて、何と答えたら良いだろうか。

肯定すると母さんに弄られ、両師匠には『女を知ってるなら大丈夫』とか言って迫られそう。

逆に否定すると母さんには『孫はまだ見れないの!?!』と言い寄られ、両師匠には『なら儂らが最初の女になってやるわい』とでも言っ

って襲い掛かってきそう。

…アレ?

軽く詰んでないか?

「(沈黙は肯定なり、ね…助け舟を出そうかしら) ……ねえ紫苑」

「なあに? 珊瑚」

「貴女、子供がいたんじゃない?」

「璃々の事? あの子まだ2歳よ?」

「そんな小さな子をほっぴり出して、私の息子を誑かしてる暇あるの?」

ナイスだ母さん。

もつと言ってやってくれ！

ついでに桔梗さんも黙らせてくれたら言う事は無い！

「溜々ならわしの城で侍女10人が付きっ切りで世話をしておる…
出産及び育児経験のある侍女ばかりを選んで付けたから何の心配も
要らんぞ？」

「だからって…」

「そう言う珊瑚こそ、今夜は昔に帰って天覧殿とイタすんじやろ？」

「ッ！？／＼／＼」

ナンダッテ？

イタすって…オイ！

15歳の健康優良男児が同居中の自宅で、夫とイタすってのか！？

いやまあ、15歳の分際で霞や理沙とやった俺の言うセリフじゃね
えけど。

つか霞と理沙って、今何歳なんだろう。

「はっはっはっは、その顔…凶星じゃな？」

「…／＼／＼」

「…ねえ珊瑚」

「何？ 紫苑」

「刃君、私に頂戴？」

「「は!？」」

今夜、父さんとやる事を見抜かれて前後不覚に陥る母さん。

ああ…援軍が無効化されていく。

そこへ繰り出される紫苑さんの追い討ち。

「いや紫苑、頂戴って…」

「実は刃君ね? 無くなった私の夫に瓜二つなの…顔を見てると私の女が疼くのよ」

「だからって自分の息子を襲う事なんか、親として許容できるはずないじゃない!」

「まあそう言わんと…わしだって女じゃし、このまま生娘として死にたくは無いのう…せめて、好意を持てる男と交わり…女としての喜びを知ってから逝きたいわい」

「…」

母さんが押され始めた。

この場に父さんがいれば打開策も見出せたんだろうけど。

俺って、好意を持って言い寄られると無碍に出来にくい性格なんだよな…

とりあえず、三十六計逃げるに如かず。

そう思い静かに、気配を殺して立ち上がる。

そして床の軋みにすら細心の注意を払い、家の入り口の扉を開け…外に逃げ出そうとする。

が、世間とはそう上手く渡り歩けるものでもないらしい。

—ぎゅむっ—

「もがっ！」

家の入り口の扉を開け、外に出ようとした瞬間…目の前が真っ暗になった。

同時に感じるは、頬にもたらされた柔らかな感触と…実に仄かだが落ち着く、良い匂いだった。

何があつたのかを知らうと顔を上げようとしたが、後頭部がホールドされていて動かない。

眼球だけを動かして見上げると、そこにあつたのは恋の顔。

「…恋？」

「…刃兄は渡さない、刃兄は恋のもの」

イヤ、恋サン？

何ヲ言ッテラッシャルノデ？

ト言ウヨリ、今ノ話…聞イテラッシャッタノデスカ？

「恋、ようやく分かった…恋、刃兄に触れると胸が『きゅん』とする…ちんきゅーに聞いたら『それは恋ですぞ』って教えてくれた」

オイ陳宮。

てめえ何て事してくれたんだ？

つかこの頬に感じる柔らかい感触。
これ…恋の胸なのか？

前傾姿勢でコソコソしたのが拙かったのか、俺は恋の胸の谷間に顔をうずめたいらしい。

恋って胸、意外に大きいんだな…じゃなくて！

「…刃兄、恋は刃兄が好き…恋、刃兄が欲しい」

「ちょ、待て恋…お前は…

—むちゅっ—

…むぐっ！」

言って俺の顔を一瞬だけ開放し、続けざまに手で顔をホールド。
そのまま俺の口に自らの唇を合わせる恋。

「ええええええええええええええええっ！？」

「何じゃとおおおおおおおおっ！？」

「そんなああああああああっ！？」

そして背後で聞こえる母さん・桔梗さん・紫苑さんの悲鳴。

「ちゅ、ちゅちゅ…じゅるる、じゅじゅっ…ちゅ…」

だが、当の俺は口の中を恋の舌に蹂躪されており…それでも頭の中は真っ白だった。

俺の明日はどっちだ？

伝記の18 刃、恋に振り回されるのこと（後書き）

当小説では1寸を3cmとして記載しております。
1尺は30cmです。

桔梗の字はオリジナルです。
あざ

さて今回：桔梗フラグと紫苑フラグ、そして皆さんお待ちかね：恋フラグが立ちました。

3人の女性から慕っていると宣言され、色々な意味で窮地に立たされた刃。

彼の命運や如何に！？

次回『刃、覚悟完了すること』に乞うご期待。

伝記の19 刃、覚悟完了すること(前書き)

ヒロイン追加〜! ドンドンパフパフ〜!
…なぜこうなったorz

伝記の19 刃 覚悟完了すること

く刃 視点く

「……っあ、あ…あ？ 知ってる天井だ…俺、横になってるのか？」

目を覚ました俺は、最初に目に映ったそれに我が目を疑った。

最初に目に映ったのは、良く知った天井…つまり自室の天井だ。

それが見える…横になっていると言う事で、目が覚めたのだからとりあえず体を起こそうとする。

「…」

起こそうとする。

「……」

起こそうとする。

「………」

三度トライした…が、全く動けない。

何故動かないんだ？

俺、昨日何かしたか？

—ふにゅん—

と、そこまで考えていて…不意に右腕へもたらされた柔らかな感覚に、それまで巡らせていた思考が中断される。

「何だ？
今のは……ッ！？」

何が腕に当たったかと右を見て、俺は危うく悲鳴を上げそうになった。

そこにあつたのは、肌をツヤツヤにして満足そうに眠る紫苑しおんさんの顔。

顔がこつちを向いていて、俺の右腕に柔らかい物が当たっていると
いう事は……彼女は今、多分マッパ。

「…（冗談だろ！？）」

凄まじい戦闘力を誇るギガメロンだな。

この俺を一瞬にして動揺させるとは。

…ってそうじゃないだろ。

と、隣で裸の紫苑さんが寝ていると言う状況が何を示しているのか……その事実を受け止められず半ば現実逃避をする俺。

—むによん—

「ッ！？」

そんな俺の左腕に突如もたらされた、紫苑さんのギガメロンを上回る存在感と柔らかさを持つ物体の感触と温度。

俺はまるで錆びた歯車が音を出すような感じにゆっくりと、今度は左を向き……

「ツ！？」

「！ツ」

また絶叫しそうになり、それを全神経と理性を総動員して噛み殺す。俺の左にいるのは、紫苑さんと同じく恐らくはマッパであろう桔梗ききようさん。

こちらへ向けた顔は頬に若干の赤みがある…そして仄かに酒の匂いが漂ってきている。

左腕の状態は多分右腕と同じだ。

これまた素晴らしいギガメロンで。

いや、そうじゃなくて…

「(ウソだろ?)」

これが夢であってほしいと願うのは男として間違っていないはず。

それにしても昨日は何があった?

村へ帰ってきて、音々ねね音と話をして…恋れんと会って、恋をなだめて…家へ戻って、客人(桔梗さんと紫苑さん)がいて…紫苑さんと桔梗さんが俺を食う云々の話になって、俺は逃げ出そうとして…寸前のところで恋に捕まって、恋に告白されてキスされて…その後は…その後は…あるえ…?

記憶が無いぞ…?

「…」

そうだ、寝ぼけた2人が俺の寝所へ潜り込んできただけなんだ…きつとそうだ。

そう言う都合的展開があったからこう言う事になっているんだ。

「…よし、そうと決まればとりあえずは起きなくちゃ…

—もももぞ—

…え…」

これは紫苑さんと桔梗さんのやらかしたお茶目なんだと自分に言い聞かせ、意を決して身を起こそうとした俺。

だがやはり身を起こす事が出来ない。

慎重に動かした手指からは『俺達は動けるぞ』と返答が（マイサンからも『戦闘準備は既に整っている！』と、この場に際して全く不必要な返答が）あったのだが、体を起こす事が出来ない。

そうして『何があった？』と考える俺の上で突然、被っている布団がもももぞと動いた。

これ以上はダメだと俺の理性が訴えている。

だが世の中はいつだって残酷だと言うのを次の瞬間、俺は強烈に思い知らされた。

—…ずぼっ—

「…おはよう、刃兄^{じんにい}」

—ちゅっ—

布団から顔を出したのは、頭頂部にいわゆるアホ毛を2束生やした赤髪の少女。

紛う事なき、恋…その人だった。

その恋は俺が起きた事に気付いたらしく、布団の中から挨拶してくれ…オマケにキスまでしてくれました。

胸辺りに感じる、程よく硬い2つの突起の感触と柔らかさ・温かさ。

位置から察してこれも乳房、そして裸。
ああ恋さん、貴女もですか。

それから数刻もしない内に桔梗さんと紫苑さんが目を覚まし、2人は顔を赤らめながら身支度を整え…

『昨日はありがとね、刃君…久しぶりに満足できたわ』と紫苑さん。
『むう、まだ股間に異物感があるが…これもオナナの特権か、ふむ…いいものじゃな…どれ刃、またな』と桔梗さん。

2人はそれぞれそう言って、満足げに俺の部屋を出て行った。

2人が立ち去った後…俺は掛け布団をめくり、敷き布団を見る。
するとそこには血の染みが2つ。

誰と誰のものは押して知るべし。

「…刃兄」

そんな中、俺の膝の上で…胸元まで布団をたくし上げたまま、恋が口を開いた。

「ん？ どうした、恋」

「刃兄、まだ出したいの？」

「…は？」

「刃兄のココ、大きくなってる…恋は大丈夫…今からする？」

何も知らないような少女が、男の朝の生理現象で膨らんだアレをさすり『まだ出したいの？』『今からする？』だと！？
何と言う破壊力だ。

「しない…ちなみに恋よ、昨晚の俺は何回出した？」

「ん…恋に四回、しおんに三回、ききよーに三回」

「一晩に10発だと！？
よくもまあ腹上死しなかったもんだ。

「…ん？ 恋、今…桔梗さんと紫苑さん…いや巖顔さんと黄忠さんの真名を言わなかったか？」

「ん…ききょうとしおんが『同じ男を愛する女同士、真名ぐらい預け合わず何とする』って預けてくれた」

「ハハハ、ソウデスカ」

「刃兄も納得してくれた…でも刃兄、ききょうとしおんに酒を飲まされて…途中から意識がなかった」

オチながらも腰を振る俺って一体。

「けど恋よ、お前は良かったのか？ 最初の男が俺なんかで」

「…… “なんか” って言わないで欲しい」

「…え？」

俺がそう言うのと恋は体に巻いた布団を広げてマントの様に持ち、素肌をさらす。

そしてそのまま俺に抱きつき、不満そうな顔をする。

「恋が方天画戟を恋の武器にしたのは、恋が好きなのが刃兄で…大好きな刃兄に、少しでも近づきたかったから」

「恋…」

「だから恋が好きな刃兄に、自分の事を指して『俺なんか』って言うて欲しくない」

「…そうだったのか、今まで気付いてやれなくてごめんな？ 恋」

「…いい／＼／」

俺に対し恋心を抱いていた恋の本心を知り、それに応えてあげれたと俺は安堵した。

だが次に恋の口から出てきたのは、世にも恐ろしい爆弾発言だった。

「…でも刃兄…『しあ』と『りーしゃ』って誰？」

恋の口から出たのは、俺の大事な女の子…いや、あえて俺の女と呼称する。

その俺の女2人の真名だった。

「その名をどこで？」

「昨日、恋と一緒に寝てた刃兄の寝言で」

「…俺、何て言った？」

「『しあ、りーしゃ…スマン、俺…襲われちゃった…事情は説明するから、嫌わないでくれ』…って」

やべえ、顔から火が出そうなほど恥ずかしい寝言ジャン！？
けどまあアイツらに黙ってやった（実際はやられた）のは事実なんだから、後で洛陽の2人へ向けて文でも送っておこうか。

「そうか…そうだな、説明しておくか」

俺は恋へ説明を始めた。

波才軍6万と波才本人を討ち、波才本人の首級を揚げた事。

波才の首を換金しに洛陽へ行き、霞と理沙しあ りーしゃと知り合った事。

誓って本心だが、勢い余って霞に好きだと告白した事。

霞がそれを受けてくれた事。

理沙も俺を…俺も理沙を好きだったが、霞の応援で互いに告白した事。

理沙も俺の気持ちに応えてくれた事。

「分かったか？」

「……………ん」

「よかった」

「じゃあその『しあ』と『りーしゃ』…違う、ちょーりよーとかゆ

「も…女の子の大事な物、刃兄にあげたの？」

「そう、だな…」

「…じゃあ恋も、刃兄とそういう関係になったの？」

「え、えっと…それは…」

否定できない。

恋の勘定だから正確性は少し薄いけど、恋曰く俺は恋に4発子種を発射したらしい。

…喉が渴いてきたな。

とりあえずお茶を飲んで…

「ねえ刃兄…恋、刃兄のお嫁さんになれる？」

—ぶほっ！—

突然放たれた爆弾発言に、俺は口に含んでいたお茶を吐き出した。

「口付けも、裸見せるのも…抱いてもらったりもした…恋も、女の子の大事な物…全部刃兄にあげた…女の子の大事なものを全部あげるって事は、あげた人のお嫁さんになるって事だ…ってききょうとしおんが言ってた」

何て事を言うんだ。

イカン、鼻から茶が…

ってか桔梗さんと紫苑さん、こんな無垢な子になんて事を教えてるんですか！？

「あのなあ恋、そう言った事は女の子が軽々しく口にするものじゃないんだぞ？」

「…刃兄だからいい、恋…刃兄のお嫁さんになりたい」

「恋…」

そんな…涙目で上目遣いをされて、ここまで覚悟してる女の子に対し…NOと言える俺じゃない。
…ないんだが。

『是非とも嫁にしたい…いや、誰とも知らぬ馬の骨に恋をやる方が癪だ…だが恋を嫁に迎えたら霞と理沙はどうするんだろう』

おお神よ、この不甲斐ない私に決断力を下さい。

「それに恋、ききようとしおんとも一緒に刃兄と居たい」

悩む俺を尻目に恋さん、原子爆弾を投下なされました。

…さあどうする？

桔梗さんと紫苑さん“とも”一緒にいたい…か。

流石にこれはNOと言わなくちゃならなそうだが、NOと言った後と逆にYESと言った後が恐ろしい。

やはり覚悟を決める必要がありそうだ。

そんな事を考えていた時、天国のとも…地獄のとも表現出来ぬ、とある使者がやって来た。

―ガラララッ―

「話は聞かせてもらったよ」

それは肌が荒れてカサカサになり、目の下には薄い隈を作り…更には頬も少し痩かし、やや声の掠れた父だった。

伝記の20 刃、旅に出ること

く刃 視点く

「刃、じんどうやらお前は女縁じょえんの相を持っているようだ」

やつれてボロボロに、満身創痍と言っても差し支えないほどにくたびれた父さんが言う。

「女縁の相？」

「そうだ、この世には『霸王の相』や『仁王の相』と言った…その人物の歩むであろう道が、人相や気品…風格となって現れる事がある」

いや確かに霸王の相や仁王の相と言った言葉は聞いた事があるが…女縁の相って何だよ。

「女縁の相…それは男なら誰しも羨む物で、己の好みの女性が…自分からは特に何もしなくても側へ寄ってきて、気が付くと深い間柄になっていると言う相なのだ」

「……………恋も、れん仁兄じんにい好みの女の子？」

いや確かに恋は好みのタイプだが、それを相持ちだからと一括りにはできねえっしょ。

つか恋よ、貴女まだそこにいたんですか？

裸で…肌を隠すものは俺の掛け布団1枚で、なおかつ俺に抱きついたらままで。

「…刃兄？」

「ああ、確かに恋は俺好みの女の子だよ」

「恋、刃兄のお嫁さんになれる？」

「…今は無理だけど、きつとなれるよ」

「…」

普通の男ならここで『なれる』と即答するだろうが俺は言わない。
なぜなら今の俺は根無し草で、官位もないただのパンピーだからだ。
…何？

賊徒6万と敵将を無傷で討った奴をパンピーとは言わないだって？
それは言わないでくれ。

そして普通の父なら『どうして即答しない』と聞くのだろうが、ウ
チの父さんはそれをしない。
何故かって？

熾烈な雌豹戦争に勝ち抜いたのが、ウチの母さんだからだ。

母さん曰く『女って言うのは自身が本能で感じた男にしか【この男
の子種を宿したい】と思わない生き物なのよ…よく言うでしょ…】
女は子宮で物を考える』って『だそうだ。』

「さて刃よ、お前はこれから先…多くの女性と関係を持つだろう」

「父さん…この状況でそんな事を言わないでくれ」

「だが刃、英雄色に狂うと言った言葉を聞いたことは無いか？」

「『色に狂う』じゃねえよ『色を好む』だったの！」

「まあどっちでも良いんだが」

「良いのかよ！」

…ダメだ、この親父…疲れる。

「女の子を沢山侍らすなら、いつその事天下で最大の規模にしないか？」

「それは何か？ この世界で好色王にでもなれと？」

「好色王、ふむ…言いえて妙だが良い響きじゃないか」

「……で？ 俺がそれになるとして、どうすればなれるのか指南でもしてくれるのか？」

「いや、それは無い……無い、が…もっと世の中を知れば、自ずとその日も来るんじゃないかと思ってね」

なるほど。

確かに天才はなにをやっても天才然としているって言うし、王になる素質があるなら何をしてても王になるって事か。

そんな事を考えてると、親父の顔が恋の方を向いた。

「それでだ、恋ちゃんに聞きたい」

「…?」

「恋ちゃんは、今の自分に満足かい?」

「…どう言う事?」

「王の側にある女とは強く美しくあるべきだと思わないかい?」

「…どうして?」

「そりゃ王が強く逞しいのに、その傍にいる女が弱くみすぼらしかったらその王の価値が下がってしまうからだよ」

親父よ、恋にその話が分かんと思ってるのか?

恋は子宮でというより胃袋で行動するタイプなんだぞ?

…そう思っていた時期が俺にもありました。

「…恋がこのままだと、傍にいる刃兄がかっこ悪く見える…そう言う事?」

「そうだ、恋ちゃんは賢いな」

オイオイ、親父よ…アンタは何者だよ。

この『もつきゅもつきゅの恋』に、そんな難しい事を理解させるなんて…

恋の両親…父である楽先^{がくせん}さんと、母である棧越^{さんえつ}さんですら出来なかったのに。

ちなみに『もつきゅもつきゅの恋』とは、彼女の食事風景に由来する恋の通称で…食べる事が生きる事と認識されやすいが為に付いた、いわばあだ名のような物。

この村なら誰に聞いても『もつきゅもつきゅの恋』で通じる。
ちなみに俺が『もぐもぐの刃』と呼ばれているのは置いておこう。

「さて、そこで恋ちゃんに…将来、刃の伴侶…お嫁さんになるにあたり、魅力的になる方法の一つを提示しよう」

「魅力的に……？」

「そう、それは旅をして知識を備え…文武共に強くなる事だ」

「文武共に…」

「自慢じゃないが我が息子の刃は、乳幼児の頃から文武共に優れていたんだ…だから恋ちゃんも頑張れば頑張っただけ、刃に相応しいお嫁さんになれると思うんだ」

親父よ、顔から火が出そうだから止めてくれ。

その…人前で当たり前の様に褒めるのは。

「何を言う、信賞必罰…良ければ褒め、悪ければ罰する…これは上に立つ者として最低限守るべき事だぞ？　まあ今の私は人の上に立つ者と言うよりは、親として子の上に立つ者…だがな」

「…干物間近の顔で言っても迫力ねえな」

「…お前だって干物間近だろうが…桔梗さんと言ひ紫苑さんと言ひ恋ちゃんと言ひ、聞いた話だけでは洛陽の張遼將軍や華雄將軍とも

くんずほぐれつの仲だそうじゃないか……揃いも揃って胸の大きな子ばかり、父さん羨ましい！ 父さんも、もう十年若ければ巨乳の子ばかりを集めて後宮を作るん……

―バキッ！―

…ペがぶっ！」

…思わず殴ってしまった。
スマン、親父。

「くう…良い突きだな、だが今のこの干物間近の体には堪えるぞ」

「…もう一発殴って、血も噴出させて…本当に干物にしてやろうか？
それとも母さんに言ってやろうか？」

「…スミマセンデシタ」

言って、素晴らしい速度でジャンピングDO☆GE☆ZAをする親父。

…ジャンピング（以下略）ってこの世界にあっただろうか？

「…ともあれお前が大きな乳房好きで、俺の息子であるのは間違いないのが実は嬉しかったりする」

俺の巨乳好きは転生前から持ってた天性の物だけではなく、父さんからの遺伝でもあった訳か…そう言えば母さん、紫苑さん並に大きいし…胸。

「…だから母さんなのか」

「うむ！」

笑顔でサムズアップする親父…もとい、父と言う皮を被った巨乳好きの同志。

思わず俺もサムズアップしてしまう。

「…？」

それを見て首を傾げる恋。

しまった、恋を置き去りだったな。

「…話が逸れたな…さて恋ちゃん」

「？」

「今おじさんが言ったのは、刃の傍に『相応しく』居られる一つの方法なんだが…どうする？」

「……………（コクリ）」

「やるかい？」

「…（コクリ!）」

親父のロクでもない提案を承諾する恋。

…幼少期はこんな子じゃなかったのになあ。

「そうか…では善は急げだ、今から帰って準備をすると良い…私は恋ちゃんの親御さんに話をしておくから」

「…ん、分かった」

—ばさっ！—

—ぷるんっ—

言って即座に立ち上がり、体に巻いていた布団を引っぺがし…自身の服を置いてあるだろう隣の部屋へ走っていく恋。

「おお、良い乳房…ご馳走m…

—ボグシャアッ！—

…ぐへえいつ！」

今度は狙って、全力で殴ってやった。

「恋は俺アツの女だ、いくら親父だろうと許可無くヒトの女の裸見るんじゃないねえ！」

「じゃあ刃の許可があれb…

—ガスガスガスガスガスガスガスガスガスッ！！！！—
速の全力ストンピング—
(高

…ぐおおおおおおおおおっ！」

その日、親父は本当に干物になった。
ちなみに実行犯は俺じゃない…母さんだ。

恋を交えて俺としていた会話の一部始終を聞いていたらしく、恋の裸を見た辺りで堪忍袋の尾が切れたらしい。

ついでに桔梗さんと紫苑さんだが…

『女を磨く為しばらく旅に出ます…璃々も連れて行くのでご心配な
さらずに　く黄忠く』

『惚れた男を籠絡する修行を行う為、太守職を辞任する事をここに
表する…後任は適当に宜しく　く厳顔く』

…と、意味の分からない置手紙を残して姿を消した。

いや意味は分かるんだが分かりたくないのが俺の本心。

つか桔梗さん、太守職ってそう簡単に辞任出来る物なんですか!?

「…行ってくる」

数刻の後、俺達は恋を見送る為村の出口にいた。

恋が背負った背囊には沢山の食料と替えの衣服、腰の袋には俺と俺の母さん…そして恋自身の両親から渡された路銀が入っている。

恋の横には陳宮ちんぎゅうが立っている。

「恋ちゃん、これは私からの餞別だ」

「…?」

言って親父は恋に、どこかで見たデザインの方天画戟を手渡した。

「…これは？」

「それは銘を『飛恋赤戟』ひれんせきげきと言う、恋ちゃんに合わせた特注の方天画戟でね…長さは柄が四尺の穂先が二尺、重さは二貫ある…今の恋ちゃんには少々重いが、鍛錬を重ねて使い込む内に軽々と振り回せるようになるだろう」

いや親父よ、銘が『飛恋赤戟』って言う奉天画戟って…俺とほぼお揃いじゃん。

色こそ若干薄いが、それと銘以外はほぼ一緒だな…ご丁寧に、鎬に銘が彫ってあるとこまで。

にしてもここまで同じにする必要は…ああ、そう言う事か。

「恋」

「何？ 刃兄」

「俺と同じ武器だな」

言って俺は『飛刃赤戟』ひじんせきげきを恋に見せてやる。
2つ並んだ、全く同じ意匠の方天画戟。

「…！？ ん！！」

それぞれの偃月刀状剣部の鎬に彫られた『飛刃赤戟』『飛恋赤戟』の文字を見て、俺の言いたい事を悟ったのか…恋が嬉しそうに頷いた。

俺の方天画戟が何故『飛刃赤戟』と言う銘なのか考えた事があったが、こう言う事だったとはな。

「恋、頑張れよ」

「ん！ 恋、刃兄に相応しいような女になる」

「おう、飛びきりイイ女になれ！ 俺はもっとイイ男になるから」

「ん！！ じゃあ、行ってくる」

言って、村の出口から歩き出す恋。

その背を追おうとする陳宮…音々音^{ねねね}を俺は呼び止める。

「ねね」

「なんなのですか？」

「ここだけの話…恋は金銭感覚が無く、自愛の精神が薄い…お前がしっかりしてやってくれ」

「大役なのです！ 任せるのです！！」

「頼んだぞ」

「御意なのです！ それでは行ってくるのです！！」

そう言ってねねは走り出し、先を歩く恋を追いかけて行った。

「…さて、刃はどうする？」

「…あれだけ威勢の良い事を言ったんだ…実行しないと恋を裏切る

事になる」

「…そうか、じゃあ刃も行くんだな？」

「ああ、だからこうして旅装を調べてきたんだ」

言って俺は手にした『飛刃赤戟』を見上げ、1つ頷いた。
恋は俺を、そして今より上を目指して旅に出た。
ならば俺も今より上を目指すべきだろう。

最強たるな、最高たれ…か。

「この村も寂しくなるな」

「たまには手紙でも書くさ」

「今度帰ってくる時は孫も一緒にね？」

「気がはええよ！」

「「「ぷっ、ははははは」」」

こうして俺も、自らを更に磨く為…そしてこれから訪れるであろう
大乱の世で、貂蟬から帯びた任を全うする為…旅へと出たのだった。

伝記の20 刃、旅に出ること（後書き）

当小説では1貫を3・75kgとしています。

恋の両親の姓名は作者オリジナル：つまり恋の両親はオリキャラです。

伝記の21 刃、偉人と会うこと

く刃 視点く

…で、意気揚々と村を出ては…とりあえずはあても無くアツチへふらふらコツチへふらふらと、それこそ糸の切れた凧のようにウロウロしてた俺。

道中、10数回…黄巾の連中やその他賊とやり合ったり、邑で休んだりもした。

ちなみに黄巾の連中には悪いが、氣技の鍛練相手になってもらい…結果として『グランド〇ルス（ヒュ〇ケルVer）』と『アバンス〇ラッシュ（衝撃波を飛ばすAタイプ^{アロー}）』の発動…そして『ファイ〇ルフラッシュ』と『極〇壁』及び『極〇剣』のマスターに成功。『グ〇ンドクルス』は、立った1発で黄巾3000が消し炭に。

『ファイナルフ〇ッシュ』は黄巾4000を消し炭にして、同時に地形まで変えちゃったからね。

氣ってすげえなって思った瞬間だったな。

で、だ…そんな感じで、あちこちで戦い（稀に地形を変えつつ）と休息を繰り返しつつ旅をしていたんだが。

―ガキインツ！―

―ギイン！ギャリリ…―

―ガシュツ！―

…な〜んで戦場のド真ん中に出て来るんでしょう。

しかも俺、絶賛攻撃され中で…かつ、モノログ入れもって相手さんを斬ってますから。

「戦も知らぬ素人風情が、我らの野望を邪魔するとは」

「つか話聞けって言うてるのに、問答無用で斬りかかって来たのはお前らだろうが！俺だって我が身に降りかかる火の粉なら、払うくらいするわ！」

―ブオンッ！―

―ガギャッ！―

言って眼前のオッサンが振るう槍を、飛刃赤戟の穂先の槍で受け止める。

気が付けば俺の周囲にオッサンの配下らしい兵はおらず、立っているのは俺とこのオッサンのみ。

で、オッサンの槍を受け止めて痛感…この世界の男性武将ってマジで弱い。

いや精神面とかじゃなく、単純に筋力の話で。

母さんは自分より重たいはずの父さんを、片手で軽々（物理的な意味で）振り回すし。

理沙の武器である『金剛爆斧』（こんごうばくふ）はその重さが8貫（30Kg）あるのに、本人はそれを手足のように振り回すし。

体格的に非力そうなあの月（ゆえ）ですら、竹簡の束を40本ほど抱えて軽快に走るほど。

やっぱりすげえよな、この世界の女の人って。

「戦の最中に敵の眼前で物思いとは貴様…この私を舐めているのか

!?!
」

「舐めるだ?　こんなガキが握る戟一つ払えず言えた事か?」

「おのれ貴様!」

—ぐぐっ—

顔を真っ赤にして力む眼前のオッサン。

だが俺の持つ飛刃赤戟は、その穂先にオッサンの槍を受けたまま微動だにしない。

ちなみに今、俺は戟を片手で握ってたりする。

だって全力で…つまり両手で握ったりすれば、オッサンは槍ごと真っ二つになって死んじまうからな。

—ザワッ!—

そんな時だった。

眼前のオッサンの背後、それも随分離れた位置から…強烈な殺気を感じた。

このままじゃ死ぬ。

直感的にそう感じた俺は出来る限り最速でオッサンの槍を払い、その場にしゃがんだ。

次の瞬間…

—ザンッ!—

「っ……」

オッサンの背後から：鈍い煌めきを放つ、鉈のような剣が：高速で横回転しながら飛来し、オッサンの頭と胴はその剣によって永久にサヨナラした。

―ヒュンヒュンヒュンヒュン…―

―…ザスッ！―

―ブシュウウツ…―

あの時感じた勘に従ってしゃがまなければ、俺もあわや首ちょんぱだ。

オッサンの首を斬り飛ばした剣はクルクルと回転しながら飛び、俺の背後の地面へ突き立った。

オッサンは頭の無くなった首から、間欠泉の如く血を噴き上げ：直後、静かに崩れ落ちた。

見ればオッサン背後、約40m先に：赤いチャイナドレス風の服を来た、桃髪で褐色の肌を持つ女性が：恐らくは剣を投擲したような格好で立っていた。

：あそこから剣を投げ、オッサンの首を飛ばしたって言うのか！？
なんとと言う命中率、そして投擲で相手の首を飛ばせると言う：凄まじい強さ。

「その君、良く避けたわね」

気が付けばその女性は、もう一振りの剣を俺に突き付け：全く油断も隙も無い、だが真剣な表情でそこに立っていた。

「…いわゆる勘って奴ですよ…この姿勢のままじゃ死ぬって勘…勘に従ってしゃがんだら、この人の首“だけ”が飛びましたよ」

迂闊に動けば死ぬ。

勘がそう告げている。

だから俺は立ち上がらず、しゃがんだまま口を開いた。

「ふふっ、そう…勘なのね？　じゃあ今貴方がしゃがんだままなのも、何かの勘かしら？」

…何者だ？

俺の動向を見るだけで、それが勘による物だと見抜くとは。
この人自身の勘も無茶苦茶鋭いんだろう。

「ええ…ところで」

「ああそうね、名乗っておくわ…私の名前は、姓が孫そんで名が堅けん…字が文台ぶんだいよ…この近所にある荊州で太守をやってる…あ、立って良いわよ？　もう貴方に危害を加える気は無いから…貴方が私に敵意を見せない限りだけど」

危害を加える気があったのか…じゃなくて。

今この人、自らを孫文台と名乗らなかったか？

孫文台って確か…劉表配下りゅうひょうはいごの武将である黄祖わうそと一戦して打ち破り、襄陽を包囲するが…襄陽近辺の山にが一人でいる時に、黄祖の部下に射殺されたあの孫堅だよな？

その孫堅がこの人だと？

到底信じられない。

何故なら眼前の孫堅さんはとてもない美人：つまり女性で、史実通りなら『孫策』『孫権』『孫尚香』と言う、3人の子を持つはずなのだが：これが子持ちの出せる妖艶さか？

：正直、紫苑さん並の色気だ：うっ、鼻血出そう。

この溢れ出る妖艶さと、ふとした瞬間に零れ落ちそうなデカメロン。そしてそのデカメロンを、申し訳程度にしか隠していない：恐るべき露出度の高い服。

俺としてはこっちの孫堅が本物に思えて仕方がない：三國無双で得た武将の知識は、今こそ捨て去った方が良さそうだな。

「孫堅殿、ですね？ 俺は姓が呂りよで名は堂どう、字を戦牙せんがと言う：諸国行脚の旅をしている者です」

「呂戦牙：旅人なのね？ だとしたらさっきは、事情を知らなかったとは言え悪い事をしたわね：」

「いえいえ、無事だったので構いませんよ：時に孫堅殿、いくつかお聞きしたいのですが？」

「何？ 答えられる事なら答えるわよ」

「ここ、どこですか？」

「ここ？ ここは襄陽よ？」

「襄陽！？」 と言う事は、今貴女が首を飛ばしたこのオッサンは：」

「えっと…うん、間違いないわ…この男の名は黄祖…今回の戦いで私が倒したかった敵将よ」

言って孫堅殿は、自ら飛ばした男の首を拾い上げ…その顔を見て『黄祖』だと断言した。

「…では孫堅殿、次の質問です…貴女はこの後、どうなさるんですか？」

「……正直に言うと、雪蓮^{しえれん}…ごめんなさい、真名じゃ分からないわね……私はこの戦いの後…長女の孫策に王位を譲り、私は城の奥で相談役に…つまり隠居するつもりだったの」

…何てこった。

今、孫策に王位を譲るって言ったが…それは元来、この後に孫堅が…山で1人になった時に黄祖の部下に矢を射られ、死ぬ事で自動的に起こるイベントのはずだ。

孫策が『長女』である事にはもう驚かない。

「ここにはお一人で？」

「今この瞬間のこの場所には私一人だけど、あの山を越えた辺りに陣があつて…そこには祭^{さい}…ああ、またやっちゃったわね…ごめんなさい……陣には私の仲間で黄蓋^{こうがい}と言う武将と、その部下の兵達がいるわ」

つまりこの人は、山1つ越えたところにある陣から1人で突出してきたらしい…孫堅殿が流石に猪武者ではないのだろうが、状況から察するに総大将がするべき行為じゃないと言うのは素人でも分かる。

「本陣は山の向こうで、孫堅殿は今から陣へ戻られるんですね？」

「ええ、そうよ？」

そして本陣が山の向こうと言う事は、このままだと孫堅殿は単身でまた山を越える事になる。

「…正直言うと、今あの山に一人で行くのは危ないって私の勘が告げてるんだけど…陣へ帰るにはあの山を通る以外、道が無いのよね」

孫堅さん、その勘…多分間違ってる無いです。

そう…史実の孫堅は、黄祖を倒した後…山中を1人でいるところを、潜んでいた黄祖の配下に弓で射殺される。

つまり、今ここで孫堅殿を1人で陣に帰すと孫堅殿はあの山を通り…そして死ぬかもしれない。

今、あの山に黄祖の部下が潜んでいるかどうかの確信は無い。

だが…正直、これだけの美人…ねんごろになれずとも、死なせるには惜しい。

だがそれはあくまで『孫堅が黄祖撃破後、1人で山に入る事』と言う行動が死亡フラグなだけであって…今ここには俺がいる。

つまり、俺がどうにかすれば孫堅の死亡を回避出来るはずだ。

…まさかまた、死亡フラグ回避のチャンスに立ち会えるとは。

「孫堅殿？　一つお願いがあるんですが」

「あら奇遇ね…私も貴方に頼みたい事があるのよ」

「はい？」

「私の勘は『あの山には一人で入るな』って告げてるの…でもここには、あの『赤戟の竜巻』せきげき たつまきである呂堂あなたがいるわけじゃない？」

…待ってくれ。

言いたい事は分かるが、何だよその『赤戟の竜巻』って言う厨二的な名前は。

「『赤戟の竜巻』って何ですか？」

「あら、知らないの？ 最近聞くようになった、とある人物の二つ名なんだけど…その人物と戦った黄巾賊は、いずれもともんでもない大被害を被って敗退するって話」

孫堅殿が目撃者から聞いた話だと…

ある黄巾賊の一団は、出会い頭に巨大な十字の光を浴びて壊滅。
またある黄巾の一団は、戦闘体制を整える前に全員の上半身と下半身が…光の帯のような物で切り離されて壊滅。

「他にも巨大な光の奔流を受け、後続の砦にある本陣にいた将格が砦ごと消滅したとか…巨大な光の剣で居並ぶ全員が滅多切りにされたとか…で、それをやらかしたのであろう人物は『飛刃赤戟』と言う銘の入った赤い方天画戟を持つ…赤髪の少年だって話なの…そして、今私の目の前にいる貴方の持つ武器は『飛刃赤戟』と銘が入った赤い方天画戟で…かつ、貴方自身は見たところまだ少年で赤髪よね？」

最初の『巨大な十字の光』はグランドクロス、次の『光の帯で敵団

を両断』はアバンストラッ○ユ。

砦を消し飛ばした『光の奔流』はファ○ナルフラッシュの事だろうし、敵軍を悉く滅多切りにした『光の剣』は極光○後の『極○剣』の事だろう。

そしてそれをやったのが『飛刃赤戟』と銘が入った赤い方天画戟を持つ、赤髪の少年らしい。

…丸つきり俺じゃないかつ！

「そんな少年に私は、少年と敵対した者に…竜巻に遭ったような凄まじい被害が出る事から『赤戟の竜巻』って名を付けたのよ」

「……後数年は極力目立ちたく無かったですけど…もう、言い逃れも出来ませんね」

「あら、じゃあやっぱり貴方が『赤戟の竜巻』なのね？」

「手にしている方天画戟の銘が『飛刃赤戟』である…と言う情報が間違いじゃない限り、今仰られた人物は恐らく俺の事でしよう」

にしても孫堅か。

母親でこの美貌なら、娘たちも期待して…何言ってるんだ？

「とりあえず、山の向こうにいるであろう黄蓋さん達を呼びましょうか」

「へっ？ 貴方に頼むつもりだったのは確かだけど、この位置から呼ぶの？ どうやって？」

「こうやるんですよ……はああああっ！」

言って俺は左手に氣を集めて練り上げ……

——ドウツ！——

空へ向けて氣弾を打ち上げた。

——ギョオオオオ……

まるで尺玉の花火を打ち上げるように、青空の中でもはっきり見える……空へ昇って行く光弾。

「今の、何？」

「あれは『氣』と言う、全ての生物が持つ力で……それを左手に集めて練り上げて打ち出したんですよ」

「……じゃああの『巨大な十字の光』や『光の帯』とか『光の奔流』や『光の剣』とかも？」

「ええ」

そんな話を話す内に、山の向こうから……赤い服を着た一団が現れた。どうやら黄蓋さんが来たようだ。

それを見て俺は飛刃赤戟と弓、それに籠手を孫堅殿に預け……自らは地面へ座り込んだ。

さて、これからどうするかな？

伝記の21 刃、偉人と会うのこと（後書き）

はい、黄祖が死んで孫堅の死亡フラグが折れました。

孫堅は扱的にオリキャラで、現状はヒロイン“候補”です。

次話でとりあえず呉へ行く予定ですが、定住するかどうかは未定です。すので悪しからず。

伝記の22 刃、誘惑されるのこと（前書き）

孫堅の真名は、例によって作者オリジナルです。

と言うより孫堅自体がオリジナルキャラですのでご了承下さい。

キャライメージは『真・恋姫†無双〜新装版〜』に付属の『特典†無双?』より、原作の原画家『日陰 影次』氏が戯れに書いたイラスト『そんごけ』に書かれている孫堅そのままです。

そして今回、呉軍勢のとあるお方がキャラ崩壊します。

当該の方を嫁と豪語する方々、先に謝罪させて頂きます。

伝記の22 刃、誘惑されるのい

く刃 視点く

「堅殿！」

自身の視認可能距離内に孫堅殿を捉えたのだろうか、山を越えてきた一団から1人：紫苑さんによく似た風貌の女性が走って来た。

走って来たのだが：

ーボインッボインッー

携えたメロンは孫堅殿以上の巨大さ。

そしてその巨大さで走るもんだから、メロンが揺れる揺れる。

「…ぶふっ」

その光景を見た俺は、鼻孔から吹き出た粘血の処理に手一杯だった。

「祭^{さい}? そんなに急がなくても大丈夫よ？」

「急ぎもしますわい：越えてきた山に、黄祖の伏兵がおったんじゃないの」

言って孫堅殿に並び立つ女性。

紫の髪に、深いスリットの入った赤紫のチャイナ服。

手にしているのは弓のようだ。

並んで立つからデカメロンが4つもボインボイン：
呉の發育具合は化け物かつ！

ぐふあっ…

「ふーん…黄祖の伏兵、か…私の勘は外れてなかったのね？」

「勘？」

「そう、勘…黄祖を倒して陣へ帰ろうとした時に『越えてきたあの山に、今は一人で入るな』って勘がしたのよ」

「…なるほど…で、堅殿…この少年は一体？」

「彼の名は呂堂りよどう 戦牙せんが…巷で噂になってる『赤戟の竜巻』その人よ…
…って、どうしたの？ 呂堂、鼻なんか押さえて…まさか怪我でもしたの！？」

誰のせいだと思ってるんですか！？

と、鼻を押さえて鼻血と戦う俺を見て…今しがた合流した妙齡の女性が、面白い物を見付けたと言わんばかりを表情する。

「ほほう…お主がああ噂の……っと、ならば俺も自己紹介をしてお
くか…俺は姓を黄こう、名を蓋がい、字を公覆こうふく言う…昔から堅殿に仕える将
じゃ」

こ、この人が黄蓋こうがいだと！？

あ、あり得ねえ…

「どうも、こんな具合ですみません…初めまして…呂堂と呼んで下さい」

座ったまま、そう挨拶をする。

だがこの姿勢はまずかつただろうか…視点が低いからどうしても見上げる事になるんだが、見上げると見えるのは孫堅殿と黄蓋殿が持つデカメロン4つ。

いや、黄蓋殿のメロンはギガメロンと呼称しても良いだろう。

顔を見ようとするとガン見になるのはもとより、今立ち上がると男の槍が…全力でたぎっているのがバレるんだ。

だから座ったままなのは仕方が無いよな？

「それで、呂堂はなぜこんな場所に…それも堅殿に得物を預けて、座っておるんじゃない？」

「それがですね黄蓋さん、実はかくかくしかじかで…」

俺は座ったまま、黄蓋に事のあらましをかいつまんで説明した。

「…なるほど、まるまるうまうまと言う訳じゃったか…だから自身に敵対心が無い事を示す為、自ら無手になった…と？」

「ええ、こうする事が一番平和的だと思ったので」

まあ正直言うと、武装状態で孫堅殿と立っているのを『孫堅殿を狙う刺客』と見られたくなかった…と言うのが本音。

最悪『黄祖配下の武将』などに間違えられたら目も当てられない。

「ふむ…なるほど、一理あるな…ところで、さっき山の向こうで…」

天へ昇る光が見えたんじゃないが…あれはおぬしが？」

「ええ、己の四肢を砲として圧縮した氣を撃ち出す技ですよ」

「ほう？ おぬしも氣使いか」

「も、と言う事は黄蓋殿も？」

「うむ…おぬしほどの使い手なら、儂が身に纏う氣が見えると思うが」

言われて黄蓋殿の体を見ると確かに、薄く赤い氣の膜が黄蓋さんの全身を包んでいる。

「強化型ですか？」

「ほう、分かるか…おぬしは射出型かの？」

「いえ、言うなれば万能型です…強化・操作・射出、いずれも得意なので」

これはあの貂蟬ぢようせんから授かった力を、15年かけて鍛えた俺の力だ。

「なるほどな…氣弾を発射し、それを狼煙代わりにした訳か…何事かと駆け付けた甲斐があったわ」

「それが狙いでしたから」

「そうかそうか…で、血止めは布が良いか？ 軟膏が良いか？」

そう言えば俺、今鼻血出してるんだっけ？

「氣の事を語るのに夢中で忘れてました…布でお願いします」

「血止め？ 呂堂、あなたやっぱり鼻を？」

「堅殿、呂堂の鼻は怪我ではないんじゃ…そうさな、男児なら仕方無き出血…かのう？」

言って眩しい笑顔で俺の顔を覗き込む黄蓋さん。

「分かってて言ってるでしょう？ 黄蓋さん」

「ふむ、ならばこんなのはどうじゃ？」

—むにゅんっ—

「ッ!？」

と、今度は自らのギガメロンを両腕で抱えあげ…俺の顔の前でむにゅむにゅさせる。

俺はガン見する訳にも行かず、思わず顔を背けた。

「はっはっは！ 良いのう良いのう、初々しいのう…顔も赤いし…あてられた…いや、あててしもうたか？」

「ねえ祭、何の事？」

「はは、実はのう…」

そうして黄蓋さんは孫堅殿の耳に顔を寄せ、こちらには聞こえない小声で：孫堅殿に何かを話し始めた。

最初は目を見開いた孫堅殿だったが、その表情は次第にニヤリとした物に変わり：

「なるほどねえ」

最終的には、弄り甲斐のある玩具を見付けた子供のような表情になった。

「……ん」

そして子供のような表情のまま周囲を見渡し：

「この場には私と祭、それに呂堂だけ：よね？」

「うむ」

そして俺の顔を見て：

「合格ね」

「は？」

「じゃあこんな事をしてもらうと嬉しい訳だ」

言って孫堅殿はそのデカメロンを覆う、それでも最初からカバー面積の少ない胸部の布を：あろう事か下へずり下げ：

—ぶるんっ！—

生デカメロンを俺の眼前に突き出した。

「ぶっ！」

「この大きさ…祭には敵わないけど、そこいらの娘には負けな
いわよ？」

「ちよ、孫堅殿…健康な男児にそれは…」

噴き出す鼻血の量が！

黄蓋殿からもらった血止めの布…つまり鼻栓が、驚くべき速度で赤く染まって行く！！

「さあ呂堂？ 貴方にこの胸^{これ}を『好きにして良い』って言ったら、
どうしたい？」

「触って撫でて掴んで揉んで、舐めて吸ってしゃぶりたいです」

「ほほう、素直じゃな」

…ってしまったあ！

つい口から本音があっ！

ダメだぞ刃、お前にはお前を慕う女の子が既にいるんだ…帝の求婚
を断っておいて、呉王の体には手をだすのか？

否否否、断じて否！

「……とりあえず、おしまい下さい…孫堅殿」

「…どうして？ 私は貴方の好きにして良いって言ってるのよ？
むしろ好きにして欲しいし…」

「……ここで、今さっき俺が口から垂れ流した本音を実行に移すのは簡単です…ですが、それをする俺の中にある『俺が俺である為の物』の一つが、壊れて無くなってしまふんです」

「ふむ…コレか？」

俺の拒絶の態度を見て、黄蓋殿が俺の前に立ち…俺の眼前で、自らの右手小指を立てた。
それ即ち『彼女がいるのか？』のボディランゲージである。

「はい」

「くっくく、そうか…大事な女がおるのか…そうかそうか…堅殿、諦められよ…堅殿では勝てんよ」

「えっ？」

「呂堂は故郷かどこぞに、共に将来を誓った女子^{おなご}がおるそうでの…
今、堅殿に手を出すのは簡単じゃが…それをするとその女子^{おなご}を裏切る事になり、結果として呂堂は呂堂ではなくなる…と、そう言うておるんじゃない」

俺が言いたいのは正にその通り。

いくら孫堅殿が魅力的で、手を出して良いと言われても…俺には霞^{しあ}や理沙^{りしゃ}、そして恋^{れん}がいる。

…桔梗^{きぎよう}さんと紫苑^{しおん}さんは、まだ面と向かって告白してないしされて

ない…更に言えば、どちらかと言うと俺が被害者から除外な。

霞や理沙は『自分達に知らせてくれて、自分達が認めればいい』と言ってくれてはいるが、流石に呉王を相手にする気は持てない。両小帝も似たような理由で拒否ったし。

「…私、負けたの？」

「負けた、とはちと違う気はするがの」

「ねえ刃、考え直さない？ 私と交わったら…私の娘達たちにも手を付けれるわよ？」

いやさっきの話とこれまでの経験を統合するに、孫堅の子供3人中で『孫策』『孫権』が女の子であるのは明白…だが、史実における長女『孫尚香』が“娘”かどうか分からない。

この世界は有名武将が全員女性のようなだが、俺の知ってる三國志…三國無双でも女だった武将は少ない。

蜀の諸葛亮の妻だとされる『月英』^{げつえい}や、南蛮の孟獲の妻『祝融』^{しゅくむつ}がそうだ…ああ、呉の喬姉妹…『大喬』^{だいぎょう}と『小喬』^{しょうぎょう}を忘れてたよ。

……………待て。

今この人、娘たちにもって言ったのか？

“にも”って事は他も？

いやいや、自分も換算に…って、オイ！

「親たる方が、いけしゃあしゃあと親子丼を教唆しないで下さい！」

「じゃあ黄祖撃破の褒美としてなら？」

あれを褒美と言うのか！？

「一つ間違ったら俺と一緒に始末されてたのに、それを俺の殊勲にするんですか！？　と言うより、どうしてそこまで俺に固執するんです？」

「だあってえゝゝ呂堂を見てると、久しく忘れていた私のオンナがゝ貴方を食らえと、ヨダレ垂らしながらゝじゅんじゅん疼くですものゝほら」

オンナが俺を食えゝは？

ヨダレを垂らゝじゅんじゅん疼くってゝマテマテマテ！

言って、着ている服のスリットを捲り上げゝ穿いてる下着を見せて下さる孫堅殿。

見せて下さった下着は、既に濡れそぼっていた。

おお、眼福。

「ゝじゃなくて、それって単なる欲求不満じゃないんですか！？」

「そうよゝ末娘の小蓮しやおれん、いえ尚香を産んで以来ゝずーつとご無沙汰なんだもん」

「それだと、男なら誰でも良いって事になりませんか？」

「ぶーぶー！　それだと私が見境なしみたいじゃない、失礼しちゃうわねゝ私だってやる相手くらい選ぶし、自分の基準でそぐわない相手に胸は見せないわ」

基準に沿えば胸を見せる…どこの痴女だよ。

しかも『ぶーぶー!』って…大人の拗ね方じゃねえぞ。

「…ともかく、俺は孫堅殿と交わる事は出来ません!」

「えーっ!? 良いじゃないのよ三回や四回…男は気持ち良いだけなんだし」

3回や4回ってアンタ…勢いで交わる相手から、何発搾り取る気なんでしょうか?

「…」

…ところで孫堅殿、今…貴女の後ろに、般若の形相をした…眼鏡の、これまたデカメロン引っ提げた美女が立っているのはご存知でしょうか?

「何だったら、口とか胸でシてあげてもいいわよ? この胸で挟んで…ってどうかしら?」

「孫堅殿、一つ進言を」

「何? やる気になったのかしら?」

「後ろを」

「後ろ? 後ろに何が…げっ!」

言われて後ろを振り向き、そこに佇む美女を見て…さぞ嫌そうな声

を上げる孫堅殿。

「帰還が遅いからと心配して見に来て見れば、見知らぬ男を誘惑していようとは…」

「ち、違うの冥琳…これには深い訳が…」

「ふむ、ではどう言った訳があるのか…本陣に戻り、雪蓮や蓮華様…小蓮様の前できちんと説明して頂きましょうか？」

こめかみの辺りに青筋を浮き上がらせ、低く冷たい口調でそう言う眼鏡のメロン美女。

この美女も相当なメロンだな…孫堅殿と同ランク、さしずめメガメロンと言ったところか。

「黄蓋さん、そちらの眼鏡の方は？」

「我が軍の軍師で姓を周、名を瑜、字を公瑾と言う…堅殿や伯符殿のお目付け役じゃ」

周公瑾！？

あの、孫伯符と常に並び立っていたという…あの周瑜か！？

三國無双だとその容姿の美しさから『美周郎』の二つ名を持つけど…この周瑜さんはさしずめ『美周嬢』だな。

大きなメロンが6つボインボイン。

美味しそうにボインボイン。

ここはどここのメロン畑なのかな？

Σ（□、；）

俺は何を！？

と、ここで周瑜さんが俺に気が付いた。

「さて、誘惑されていた君は何者なのかな？」

「俺は姓を呂、名を堂、字を戦牙と言う：諸国行脚中の旅人です」

「ほう、旅人：その旅人が何故、こんな戦場の真ん中で：我らが総大将に誘惑されているのか、話してもらえるか？」

「はい、実は：」

とりあえず話さなければ何も進まない。

と言う事で俺は、本日3回目となる：孫堅殿との邂逅状況、そして周瑜殿が来るまでのやり取りを詳細に話した。

「そうか：その年で、将来に備えて諸国を旅しているのか：立派な物だ」

「いえいえ、まだまだ修練の途中ですよ」

「で、その旅の途中で黄祖の本陣の真っ只中に出てきて：紆余曲折があり、黄祖が死んだ」

「結果的に倒したのは孫堅殿なのですが、話す内にどうやら気に入られたらしくて：」

「『私と交わらないか』と」

「ええ：ですがそれを『想い人がいるから』と断ったんですが、孫

堅殿が退いてくれなくて…」

「だって…こんな良い男、手放す方が勿体無いじゃない？ それにこの呂堂は、大きな胸が好きみたいだし…そう言えば冥琳も大きいわよね？」

ハイ、大きいです。

そして孫堅殿と黄蓋殿、更には周瑜殿…全員好みです。

「…神蓮様しえんれんは黙って下さいますか？」

「ぶーぶー！」

俺の話を聞いていた周瑜殿は、とりあえずその…剥き出しだった孫堅殿のデカメロンを元に戻した。

「さて、呂堂の抱えている事態の把握は出来た訳だが…祭殿、神蓮殿を後続の隊へ合流させてくれ…その際に周瑜隊をこちらへ寄越してくれ」

「心得た」

「ちょ、冥琳？ 私まだ呂堂と…」

「はいはい、積もる話は本陣でして下さい…さて呂堂よ」

「はい？」

「……とりあえず、口調はそれでいいのか？」

「ッ!？」

いつ気が付いたよ。

いやこれ、さっきも言わなかったか？

「…分かってたのか？」

「まあな…名前の後に付ける『殿』がどこかよそしかったのでな…ああそうだ…これ、返しておく」

と言って周瑜が差し出したのは、俺が保身の為に孫堅へ預けていた俺の武器2種。

「ありがとう」

「さて、改めて呂堂」

「何だ？」

「お前はこの後、どうするんだ？」

返してもらった飛刃赤戟と朱雀を装備していると、何かを訴えたげな口調で周瑜が口を開いた。

「そうだな…とりあえず汝南から徐州を経て、官渡へ行こうかと思ってるよ」

官渡は黄巾の乱の終結の地。
ならばせめて地理は把握しておきたい。

距離的には北上して南陽を経て、洛陽か許昌を通って官渡に近い。

しかし南陽は故郷の村がある州で、そう簡単に出戻りたくは無いらしい。洛陽に行くと、今度こそ両小帝から逃げられそうに無い。

そして許昌はあの曹操の本拠地と聞く。

今この瞬間、曹操が本当に許昌にいるかどうかは知らないが…あの生理的嫌悪感が拭えない以上、迂闊に近寄るべきではない。

「……ふむ、激化するであろう黄巾の動乱を追う旅路か」

「冀州にまで行くかどうかは不明だけどな」

「なあ呂堂、物は相談なんだが」

「何だ？」

「呂堂よ、私と一緒に来る気は無いか？」

「それは孫堅殿の下に来いと、仕官しないかと…そう言う事なのか？」

「そうだ…それに呂堂は、胸の大きな女が好きなんだろう？」

「むにゅん」

言って自らの胸を自身で抱き上げ、その大きさをアピールする周瑜。

「正直、私だってお前には興味がある…さあどうする？」

「：悪い、今は無理だな」

確かに、突き詰めれば据え膳と言うこの状況：その据え膳が好きなタイプなだけに、惜しいと言えば惜しい。

だが俺にだって意地がある。

だから俺は周瑜の申し出を断った。

「ほう？ 理由を聞いても良いか？」

「確かに周瑜殿や黄蓋殿：そして孫堅殿は魅力的で、男としては交わりたい：しかし孫堅殿や黄蓋殿に言った通り、俺には既に故郷や他の街に：俺を慕ってくれる女の子がいる：：：いくら俺が巨乳好きで、君達が巨乳とは言え：それだけで交わりなどしたら、俺を慕ってくれている女の子を裏切る事になるし：裏切る事は俺が俺で無くなる事を意味するんだ」

据え膳食わねば男の恥とは言うが、恥をかいても折れてはならぬ一線と言う物があるはず。

洛陽で霞や理沙に『生きる為には矜持を捨てる事も必要』と説いたが、この『恥をかいても折れてはならぬ一線』を守る矜持は：こと女関係においては捨ててはならぬ矜持はずだ。

「だから孫堅殿はもちろん、周瑜殿：貴女も抱く訳には行かないし、そもそもそれが理由で仕官などすべきじゃない」

「ふむ：ならば呂堂はどうするんだ？」

「仕官の話は白紙にしてもらい、かつ俺はこのままここを去るさ」

男の槍も落ち着いて来たようだ。
俺は佇まいを直して立ち上がった。

「そうか…黄祖の兵をここまで蹂躪出来る武力があつて、かつそこそこ回る頭…惜しいな」

「孫呉の智者に惜しまれる、それだけでこの邂逅に意味はあつたと思いたい」

「私がお前を気に入つてると言うのは、冗談では無いんだぞ？」

おいおい、頼むから黙って行かせてくれ。
俺は弱いんだ…だから。

「…なあ呂堂、また会えるか？」

「…世が世で、また会う星になったら会えるだろうさ」

「そうか…」

「あ、そうだ…周瑜、ちょっと来てくれ」

「？」

危うく忘れるところだったぜ。
彼女が本当に周瑜なら、これをしておかなきゃ後で泣く奴が出てくる。

「何だ？」

「……ふっ！」

発した氣に指向性を持たせて周瑜の体に流し、彼女の氣を探る。
…なるほど、やはりそうか。

ならばっ！

「はあっ！」

「!？」

治癒の効力を持たせた氣を、周瑜の体が保有出来る限界近くまで圧縮してその体に押し込む。

周瑜の体から金色の光が溢れ、彼女の体を包み込んで行く。

「これは…!？ 倦怠感や体の重み…煩わしかった胸のつかえが…
ッ!？ 呂堂…お前、私の病を…」

「…貴女が死ぬと、それで心が死ぬ奴が出てくる…そしてそれはここにもいるんだ」

言って俺は自分の顔を指差した。

「…」

「…人手が足りず働かなくちゃならないのは分かってるが、とりあえず…過労はするなよ…アンタの周りには頼れる仲間がいるんだからさ」

言って俺は周瑜に背を向け、とりあえずは件の山と反対側に歩き始めた。

「……………済まん、呂堂…そして、感謝する」

周瑜のそんなセリフに俺は…

—ひらひら—

背中越しに手を振り、無言で歩を進める。

こうして俺は襄陽を後にし、また…諸国行脚の旅へと戻った。

さあて…次はどこへ行こうかなあ…？

伝記の23 淑女組、共に上洛すること【番外編】（前書き）

登場する全員の一人称や呼称、語尾等がおかしな場合が見られるか
と思いますが…現在勉強中なので、悪しからずご了承下さい。

伝記の23 淑女組、共に上洛すること【番外編】

（紫苑 視点）

初めまして皆様、私は黄忠^{（おうしゅう）}：正しくは姓を黄^{（こう）}、名は忠^{（ちゅう）}、字が漢升^{（かんしょう）}と
言う：一児の母で未亡人です。

子持ちの年増？

死にたいんですか：射殺しましょうか？

おほん、失礼しました。

今日は南陽の小さな農村から、桔梗^{（ききよう）}：姓を嚴^{（げん）}、名は顔^{（がん）}、字が竜胆^{（りんとう）}：
と言う友達と共に、南陽の北にある街：洛陽へやって来ました。

「ねえ桔梗、桔梗は洛陽へは来た事あるんでしょう？」

「うむ：刃^{（じん）}とも話した通り、儂の弟子で焰^{（えん）}耶^{（や）}：魏延^{（ぎえん）}と言う娘がおる
んじゃが：これが余りに大海を知らぬ蛙での、一度『世間の広さを
知れ』と言う意味で：ここ洛陽は太守、董卓殿に仕える武人『華雄
將軍』と『張遼將軍』にけしかけた事があつての」

言って桔梗は通りにある酒家を片っ端から覗いて回り、何かを探し
ながらそう言いました。

「そうだったわね」

「うむ：華雄將軍は魏延の挑発を笑ってやり過ごし、逆に挑発し返
して一撃で熨し：張遼將軍に至っては魏延を、儂の目をしても捉え

きれぬ速さの攻撃で吹き飛ばし『上には上がいる事を知るべき…だが自分達ですら勝てないのが、自分や華雄の大事な人だ』と、のろけまで披露してくれたわい…張遼將軍と言えば『神速』の二つ名を持つ猛将、戦に生き戦に死ぬかと思いきや…大事な者の存在を得て、更に飛躍するとは…人間とは侮れんものだとなまげたわい」

「そうね…でもその『大事な人』がまさか刃君だとは思わなかったけどね…で、桔梗…今日はその洛陽まで来た訳なんだけど、さっきから酒家ばかり覗いて…何を探してるの？」

「…その、のろけた將軍じゃよ」

「…張遼將軍を？」

桔梗が言うには張遼將軍は酒豪で、警備任務の最中にあっても酒家へ入り…杯片手に真っ昼間から一杯やる事が多いらしいの。

「…儂らは過程がどうあれ、酔わせて潰した刃を襲って食ろうた身じゃ…ならば先達の華雄將軍と張遼將軍には、面と向かって詫びておくべきだと思ってるの」

そう…私達は2日前、波才と言う将を討ち…その首を換金して村に帰ってきた刃君を、お酒で酔わせて潰し…食べてしまったの。

刃君は私達並にお酒に強かったけど、8升を越えた辺りで呂律が回らなくなってきた…好機と思ったから押し倒したら、軒をかきはじめたの…そして、桔梗と一緒に食べちゃいました。

もちろん『食べる』と言うのは、男と女の性的な比喻表現ですよ？

刃君の幼馴染みの呂布ちゃん…恋ちゃんも混じって、最終的にはく

んずほぐれつの壮大な乱痴気騒ぎになっちゃったんですけど。

「そうよね…行為に及ぶ前に、華雄將軍と張遼將軍が『大事な人』だと刃君から聞いてたのに、襲っちゃったから…」

「まだ婚約がどののと言う段階では無かろうが、華雄將軍と張遼將軍を正妻とするなら儂らは後妻…まずは正妻に伺いを立てるのが筋じゃ無かろうかと思うんじゃないか…」

と言う桔梗の顔は何故か明るかったです。

…桔梗がこう言う顔をする時は、大体勝算が高いのは長年の付き合いで熟知してるんですけど。

けどね桔梗…正妻に『貴女様の夫を襲ってしまったんですが、どうすれば良いのでしょうか』なんて伺いを立てる後妻と言うのも、正直どうかと思うの。

「…お、おったぞ…張遼將軍じゃ」

6件目の酒家を覗いていた桔梗がそう言い、私も促され…桔梗の指し示す席を見ました。

そこに座っていたのは…胸部のサラシ以外は肩に羽織を着流しただけの上半身に、下半身は袴だけと言う出で立ちの…どこか猫を彷彿とさせる、偃月刀を携えた女の人だったんです。

「張遼將軍」

「ん？ おお、厳顔やないか…今日はどないしたんや？ また魏延をしごくんか？」

「いや、今日は別件じゃ…」

「別件？」

「うむ…この代金は儂が持つから、少し付き合ってくれぬか？
公衆の面前でする類の話ではないのでな」

「何なんや一体…まあええわ…店主、勘定や」

言って張遼將軍は訝しげな顔のまま席を立ち、支払いを桔梗に任せ
…店の軒先に出て来ました。

「で、どこ行くんや？」

「出来れば人目に付かず、聞き耳も立てられぬ場所が良いのう…そ
の際、願わくば華雄將軍にも同席して貰いたい」

「理沙も…スマン、華雄もか？」
りーしゃ

「ええ、是非お願いしたいの」

「…アンタは？」

私が口を挟むと、張遼將軍が私を見て誰だと尋ねて来ました。

「ごめんなさい、私は黄忠…厳顔の友人で、今回の話には関わりが
深いのよ」

「さよか…まあとりあえず名乗っとくわ、ウチは張遼や…よしなに」

言って張遼將軍は、私達を先導するように歩き出しました。

「人目がのうて聞き耳も無い場所…ウチの部屋しかあれへんけど、ええか？」

「むしろ好都合じゃ」

「ふん？　ならとりあえず華雄を探さんとな」

張遼將軍はまっすぐ洛陽の宮を目指して歩き、私達はその後ろを追う形で歩いて行きます。

「お、おった」

言って辿り着いたのは、宮の入り口に通じる通りのすぐ傍…食事を出す屋台の前でした。

その屋台の席の一番端で、出されているであろう料理を食べている人物を張遼將軍は呼びます。

「理沙」

「もぐもぐ…む、霞しあではないか…仕事は済んだのか？」

張遼將軍に呼ばれて振り返ったのは、腹部が剥き出しと言う特異な格好をして…厳つい斧を背負う、強気な目をした女性でした。

「いんや、途中で厳顔に呼び出されてな」

「厳顔？　おお、あの時の…む？　そちらの方はどなたかな？」

「初めまして：私は黄忠、嚴顔の友人です」

「なるほど、私は華雄　牙遠きえん：洛陽太守、董卓様を守る剣にして盾だ：して、何用かな？」

「この二人が、ウチと理沙に話があるそうや：内密な話らしいわ」

「内密な話？　分かった、少し待たれよ」

―がつがつがつ―

言って華雄將軍は、食べかけの麻婆丼を口へ掻き込み：手持ちの手拭いで口元を拭いて立ち上がりました：熱くないんでしょうか。

「ご馳走様：店主、代金はここに置いておくぞ」

「毎度あり！」

そうして華雄將軍は私達に一瞥をくれた後、張遼將軍から説明を受けているようです。

「：ちゅう訳や」

「ふむ、ならば霞の言う通り霞の部屋で良からう：詠に頼んで人払いをしてもらえば万全だろう」

「そか：ほなウチは先行って、衛兵と詠に話付けてくるわ：理沙は2人を案内しといてや」

「うむ、頼まれた」

華雄將軍が頷くなり、小走りで走り去る張遼將軍。

「では行こうか」

しばらくして通されたのは、洛陽の宮内にある張遼將軍の私室でした。

「狭い部屋やけど、好きなところ座ってや」

言って自らは寢台に陣取る張遼將軍。

張遼將軍の部屋は女性の部屋とは思えないほど質素で、小さな書卓と寢台：それに衣装箱があり、その横に：刃がボロボロに欠けた偃月刀があるだけでした。

「普通やったら水でも出すとこやねんけど、ウチの部屋には酒しかあれへんねん：真っ昼間っから飲ます事になんねんけど、かまへん？」

「お酒は大丈夫：と言うより好物ですが…」

「…が？」

「その酒のせいでとんでもない事をしてしまったな：自主的に禁酒しとるんじゃよ」

そうなのです。

だからお酒は飲めないんです…本当は飲みたいんですけど、話が話ただけに素面で行こうと言う桔梗の案なのです。

「ふむ…昼間からする内密な話と言うから、酒の肴に良いかと思っただが…酒が理由とあっては仕方があるまい…で？ 我らに話とは？」

「華雄將軍と張遼將軍は、呂堂戦牙と言う青年をご存知か？」

「「！？」」

桔梗の切り出しに、華雄將軍と張遼將軍の顔色が変わりました。

「何や、刃絡みの話か？ それも内密にて何やねんな…下らん話やったら承知せえへんで？」

「まさか貴殿ら、刃を傷付けたのではあるまいな…もしそうなら、貴殿らにはここで死んでもらうぞ？」

「「ッ！？」」

とたんに張遼將軍の部屋に満たされる強烈な殺気。

戦場を経験している私達でさえ、滅多に浴びる事の無いその強烈な殺気に…思わず萎縮してしまいます。

「…実は我ら、酒の勢いもあって…刃を襲ったんじゃ」

「もちろん、男と女の性的な意味で…ですけど」

「何やて!?(何だと!?)」

私達は意を決して、その時の出来事を話しました。
もちろん詳細に。

「はあ~~~~~」

しばらくは黙って聞いていた張遼將軍でしたが、話の区切りを読んだのか、随分と長い溜め息を吐きました。

「なあ理沙、どないしょか」

「:仕方があるまい? 刃の性癖は我らとて熟知している:その性癖からすると、嚴顔と黄忠は完全に適合するではないか」

刃君の性癖?

それはどんな性癖なのかと考えていた、次の瞬間:

「そうやなあ:」

—むにゅっ—

「ひゃあん」

張遼將軍がおもむろに、私の胸に手を伸ばしたのです。
私は思わず、おかしな悲鳴を上げてしまいました。

「:……ウチよりデカイこのチチで、刃をたぶらかしたんかつ!」

―むにゅっむにゅっ―

「このっ！ このっ！」

「やっ、あんっ！」

そんな私の反応が楽しかったのか、張遼將軍が笑みを浮かべ…私の胸を揉みしだきます。

「霞、それぐらいにしておけ」

「何でや！ このけしからんチチで刃をたぶらかしたんやで！？
ウチが揉んだかて別にええやないか！」

「いや、そうじゃない…その、何だ…今の霞を見ていると、刃に抱かれる自分に見えて…切ないんだ」

張遼將軍に胸を揉まれ、喘ぐ私を見て華雄將軍がそんな事を言いました。

「…」

「…」

「…」

「…」

思わず黙り込む私達。

気が付けば私の胸を揉んでいた張遼將軍でさえ、切なそうな表情を

浮かべ…その手が胸から離れて行きました。

「…こらウチらが折れるしかあれへんな」

「だな」

「…どう言う事かの？」

「どないもこないもあれへん…ウチらが、アンタらが刃に向ける愛情を認めるっちゅうてんねん」

「…は？」

そんな張遼將軍の言葉に、思わず呆然とする桔梗。

「刃は私を抱く時に言ったのだ…自分は我らの他にも、女を作る気でいると」

「…男っちゅう生き物に関して、ウチはある程度理解があるつもりや…ホンマに“力”がある男やったら、嫁さん何人抱えてもええて思うねん」

本当に力がある男なら、嫁を何人抱えても良い。

張遼將軍のそんな言葉に、私は深い賛同の念を覚えました。

「刃には武力もそうやし、理沙の突進癖を理詰めで直す頭もある…それに女を惹き付ける魅力かてそうや…刃には力がある、それやから刃はウチら以外に女を作っても構わへんて思うねん…けどな？ウチらは最初に愛された女や…せやからいくら『力がある刃』やからって理由だけで、後から来た女をそう易々と認める訳にはいか

んのや」

「だから我らは刃に約束を取り付けたのだ：我ら以降、別の女に惚れた：あるいは惚れられた場合、すぐに伝えてくれと」

「……つまり？」

「ちいっと手順はちゃうけど、アンタらは自分がやった事を正直に言うてくれたやろ？」

「だから我らは貴殿らを、共に刃を愛でる同志として認め：迎えようと言うのだ」

言って華雄將軍は立ち上がり、張遼將軍の寝台の枕元にある棚から：杯を2つ取り出し、私達に手渡しました。

「これは？」

「アンタらが抱えとった問題はもう済んだはずやろ？　そこに杯渡す言うたら意味は分かると思うんやけどな」

見れば張遼將軍は私達と同じく、その手に杯を持っており：華雄將軍がそこにお酒を注ぎ始めました。

「これはウチらの同盟の酒や」

「うむ、そして我らが真名：共に刃を愛でる同志に託そうではないか！　我が真名は理沙と言う」

「ウチは霞や」

見れば華雄將軍と張遼將軍、いえ理沙さんと霞さんは実ににこやかな笑顔をしていました。

「ありがとうございます、理沙さん…霞さん、私の真名は紫苑です」

「僕の真名は桔梗じゃ」

「真名を預けたからには堅っ苦しいのは無しにしよう…ウチの事は『霞』って呼びつけにしてくれてかめへんからな？　紫苑も、桔梗も」

「だな…ならば私の事も『理沙』と呼びつけにしてくれて構わんぞ」

なんと言う事でしょう。

まさか私達の挙行が認められ、更にはそれが同好のよしみとして真名まで預けて貰えるとは。

「…分かったわ…霞、理沙」

「しゃ！　今日はトコトン飲むでえ！　紫苑も桔梗も酔い潰したるから覚悟しいや？」

「ふふっ、お酒なら負けませんよ？」

「うむ、望むところじゃ！」

…こうして、私達の上洛と懺悔の小旅行は成功と相成り…私達は刃君を愛でる同盟の同志となりました。

もちろん、途中から話に上がらなかった恋ちゃんも…真名の交換こ

そなかったけど、同盟への加入が決定しました。

ちなみに…

「なあ紫苑」

「なあに？ 霞」

「刃に、ウチら5人以外の女って何人出来ると思う？」

「刃なら両手でも足りんのではないか？」

…と言った話がされ、最終的には…

「すー…すー…」

「もっと、もっとお…んうう…」

「くー…くー…」

「んんっ、刃…むにゃむにゃ…」

：泥酔して眠りこける酔っぱらいが4人になったのは、言う間でもありません。

伝記の23 淑女組、共に上洛すること【番外編】（後書き）

恋にどうやって同盟の話をするか、考えてませんでした。

ともかく、機会があればその辺りの話も書きたいと思います。

伝記の24 刃、拐かされること（前書き）

孫堅が大々的なキャラ崩壊を起こしました。

『ウゾダドンドコドーン!』とお考えの方は、遠慮せずお戻り下さい。

伝記の24 刃、拐かされるのい

（刃 視点）

周瑜^{しゅうゆ}Ⅱ短命。

それは史実ならば用語で覚えて損は無い。

ちなみに死因は病死だが、史実はもとよりこの世界の周瑜：彼女が死ぬのは心苦しい。

だから俺は一か八か、この世界の周瑜も病気を持っているかどうか：の賭け的要素はあったが、だからこそ周瑜へ快癒功を打ち込み：結果として彼女の病を治す事に成功した。

まあ俺が見る限りクタクタだったし、悟られないように常時震え：目の下にはくまがあるし、呼吸も荒い：まあ病気だったのだろう。

快癒功とは氣技を鍛える過程で生まれた副次的な技で、肉体の構造的欠損以外ならばほぼ全ての疾病を治療・治癒すると言う効果を持っている。

ちなみに疾病回復の効果が表れなくても、疲労回復や新陳代謝の促進：美容効果や免疫力・自己治癒力の増強など：健康面には良いことづくめの技である。

まあ技としての確立には、俺が持つ能力『氣の扱い方最初から最高値』と『毒耐性』と言う能力に基づく要素が大きいんだろうけど。

にしても呉將に勧誘と言う名の誘惑をされたのか、俺は：

「そう言えば呉將と言えば火計と言うイメージしか無いんだが、この世界の呉將も火計好きなんだろうか？ 陸遜^{りくそん}とか」

陸遜、呉の筆頭軍師の周瑜を補佐する副軍師で…字は伯言はくげんだったか？
やたら敵陣へ火を放ちたがる、呉の放火魔。

三國無双のどこかのステージで、蜀の劉備りゅうびが陸遜の火計を受け『お
お：我が陣が、炎に包まれていく…』とか言ってたっけ。
まあ劉備はその後すぐに石兵八陣せきへいはちじんと言う、諸葛亮しょかつりょう考案の奇策を作動
させ…本陣の白帝城へ引っ込むんだけど。

「俺も策とか、勉強した方がいいのかな？」

戦において危機的状况を脱するには…その危機的状况すら破る圧倒
的な武力と軍勢で突破するか、策を弄するのが定石だと思う。

基本的に圧倒的武力と軍勢で突破するには武将個人の力はもとより、
まずは軍勢を揃えることが重要となる。

だがそれだけの軍勢を揃えるには、その軍勢を構成する…兵自体の
確保を、戦に入る前から整える必要がある。

募兵しかり、調練しかり…またそれだけの人間を動かすのだから、
褒美としての金子や食糧を揃えたり…装備品の調達も行う必要が出
てくる。

そして策は効果的に炸裂させる為に、やはり情報の収集は欠かせな
い。

地形と陣形の把握はもちろん、人為を調べてどのように行動する傾
向にあるかを知るとか…その策に用いる資材の準備、炸裂可能な策
を増やすのもそうだが。

「そこの者、止まれ！」

「む？」

さて…そうした用兵術や策を学ぶには、これからどうするかを考えつつ歩いていると…槍を手にした人に呼び止められた。

「武芸者と見られるが、この村に何の用だ！」

赤の胴鎧に黒色の鉢金…どこの軍だ？

つか村って…ああ、実に簡素だが木製の門枠と…土嚢を積み上げた上に立てたような、外敵侵入防止の立柵がある。

「済まない…考えごとに夢中で、前方に村がある事に気が付かなかったんだ…自分は諸国行脚中の旅人で、名を呂堂と言う」

俺の自己紹介を聞いて、何故か衛兵の目が見開かれた。

そして衛兵は懷から書簡を取り出し、それと俺を見比べ始めた。

「年の頃は十五ほど、身長は約六尺…赤髪の男性で、手にした赤い方天画戟には『飛刃赤戟』の銘…そして名が呂堂……もはや！？失礼ですが貴方様はあの『赤戟の竜巻』殿でいらっしゃいますか！？」

「ちょ、その二つ名は…誰から聞いた？」

「はっ！ 我らが主、孫堅様及びその家臣であらせられる周瑜様に
ございます！」

何！？

今、孫堅…それに周瑜って言ったか？

ここ、ひなびた農村だよな…何でこんなところに孫堅と周瑜、いや孫堅殿と周瑜殿が？

「…一つ聞きたい、ここは村なんだよな？」

「はっ！ 呉郡へ御帰還なさる孫堅様御一行が、休息の為に立ち寄った村にございます」

休息の為に…あの後すぐに帰ったんじゃないか！つかここまだ襄陽だろ！？

呉郡って襄陽からだ、南東に随分と行った辺りじゃなかったか？俺は北上してるはずなんだが、方向的には逆じゃないのか？

「休息の為に言ったが、孫堅殿は村のどの辺りに居るんだ？」

「…申し訳ありません、警備の都合上お伝えする事が出来ません」

「いや、それなら良いんだ…邪魔したな、頑張ってくれ」

そう言って立ち去ろうとしたのだが…

「お待ち下さい！」

「ん？」

「失礼します！」

—がしっ—

何故か衛兵に捕まった。

今気がついたがこの衛兵、何気に女性兵だ。

髪は短いし声も低いから、気を付けないと気が付かないが…。

「ちょ、何!？」

「孫堅様及び周瑜様より、呂堂様をお見かけしたら連行するよう仰せつかっております…どうかご容赦下さい」

「連行!？ 孫堅殿と周瑜さんがそう命令を下したのか!？」

「はっ!」

「冗談ダロオ!？」

余りの驚きに、どこぞのコヴナントエリートになってしまふ。
だがそんな事を言ってる間にも、体に縄が巻かれ…俺は捕獲されてしまった。

「いえ、冗談ではありません…我らは呂堂殿を捕縛するが為だけに結成された、周瑜隊の者であります」

—ジャーン!—

—ジャジャーン!—

言って懷から銅の円盤…銅鑼を取り出し、それを鳴らす衛兵。

—ダッダッダッダ…—

すると次の瞬間、衛兵が6人に増え…俺を御輿よろしく担ぎ上げると…

「孫堅様から確保のご命令のあった呂堂様だ：孫堅様が宿泊しておられる家屋にお連れしてくれ、丁重にな」

と衛兵の指示があり：

「「「「「御意！」「」「」」」」

「ちょ、おい！ 待て、コラ！ 俺を降ろs：

ーザッザッザッザッー

…ぬおおっ！」

俺はその瞬間、拉致被害者となった。

そして俺の叫びを無視し、俺を担ぎ上げた一団（やはり女性兵士だった）は村の中央にある家屋へ。

いや、家屋と言ってもこぢんまりとした屋敷なんだがな？

「孫堅様！ 周瑜様！ ご命令通り呂堂様をお連れ致しました！」

「良くやったわ！ ご苦労様、下がって良いわよ」

そして屋敷の現在の主の前に引き出されたのだが、うわーお…本当に孫堅殿だよ。

「久しぶりね、呂堂」

「：別れてから六刻も経ってませんよ？ と言うより、ここ…呉郡とは逆方向にある村ですよ？ こんな村で何をやってらっしゃる

んです？」

俺の質問を受け、孫堅殿は椅子から立ち上がり…あのニヤリとした、酷く妖艶な笑いを浮かべた。

「…私ね？　自分で言うのもアレなんだけど、結構我儘なのよ」

「はあ…」

「それでね？　どうしても欲しいと思った物は、何が何でも手に入りたい性格なのよ…例えそれが人でも、物であっても」

何が何でも手に入りたい性格って…子供ですか、貴女は…。

「あの後、貴方を見送った…いえ祭まつりに本陣へ連れて行かれた私は、本陣で呉郡へ帰る準備をしてたんだけど…そこへ冥琳めいりんが慌てた様子で駆け込んで来て『もう治らないと諦めていた病が治った』って言うじゃない？　私驚いちゃって、すぐに軍医に診察をしてもらったの…そしたらね？」

軍医曰く『肺の音が綺麗になっているし、腹部にあったしこりが無くなっている…脈拍も正常だし、顔色も良くなった…本当に病人だったのか？』と言われたらしい。

ちなみに会話内容から察するに、祭とは黄蓋殿の真名…そして冥琳とは周瑜殿の真名だろうか？

「冥琳に話を聞いたら、私と祭が立ち去った後…貴方が氣で治療したって言うじゃない？　その時に思ったのよ、貴方を手放したら絶対に損をするって」

「…」

何としても俺を物にしようと思った孫堅殿は、即座に呂堂おれ包囲網を敷く事を考えついた。

そしてそれは自らの病が治り、元気を取り戻した周瑜にとっても望ましい話らしく…彼女は、俺から聞いていた予定経路から『呂堂は許昌には行かない』と言う事を見抜き、その上で予測可能な…俺が歩むであろう旅路にある全ての村に兵を置き、通りがかった所を押さえる策を提案した。

「尤も？ 私は『この村に居れば貴方に会える』と言う勘に従っただけなんだけどね」

「恐ろしい精度を誇る勘ですね…あれですか、軍師泣かせの勘と言う奴」

「ぶーぶー！ 呂堂のイジワル！ 何で冥琳と同じ事を言うのよ…それも一字一句違えずに」

「…と言いつつも、自身の勘では補えぬ穴を繕ってくれる周瑜殿が大事でもある、と」

「……うん…それで、まずは貴方に聞きたい事があるのよ…」

「聞きたい事？」

「……実を言うと冥琳の病気は、呉軍の中でも冥琳本人と私…そして祭と、長女の雪蓮しえれんしか知らないはずなのよ…けど貴方は知っている

た…どうして？」

どうして、か。

今この建物には孫堅殿しかいないように思えるが、話しても良いのだろうか。

俺が、今から約1800年先の時代に生きていた人間で…死して生まれ変わり、その際…前世の記憶を持って生まれたと言う、この時代の人間からしたら正気を疑うようなあの話を。

「……」

「…言えない？」

自分の質問に対し沈黙を示した俺に対し、真面目な表情でそう告げる孫堅殿。

だから俺も真面目に答えを言う。

「とてもではありませんが、内容が内容なだけに正気を疑われること間違いないので…申し訳ありませんが言えません」

「……………そう、まあ良いわ…話してくれる気になった時で」

「そうですか……………って、えっ!？」

諦めてくれたかと思ったのだが、違うらしい。

孫堅殿は俺の前に座り込み、座り込んだ俺に目線を合わせた。どうやら持久戦に持ち込む構えのようだ。

「…」

「…」

互いに一瞬たりとも目をそらさず、無言のまま見つめあう。

「……」

「……」

見つめあう。

はは、こちらあの恋のたどたどしい言葉をいつまでも待つ事が出来るんだぜ？

この程度の持久戦なんざ余裕綽々さ。

「……」

「……」

見つめあう。

「……うゝ」

…お、孫堅殿は我慢の限界が近いか？

「……ううゝ」

「……」

未だに無言で孫堅殿を見つめる俺だが、孫堅殿は既に目尻にうっす

らと涙が浮かんでいる。

「……………ううう」

「……………（おお？）」

ほったたを膨らませ、泣く間近の子供のような顔になってきた孫堅殿。

これがあの『江東の虎』なのか！？

やべえ、この人チョー可愛いんですけど…と内心で1人ギャップ萌えしていると、視界の端に黄蓋殿が映った。

よく見れば黄蓋殿は口をパクパクさせており…

「……………うううう」

俺は孫堅殿から目を逸らさず読唇術を開始。

「……………（んと…せ・き・に・ん・は・と・っ・て・や・る…と…
け・ん・ど・の・に・お・きゅ・う・を・す・え・て・や・れ…つ
まり『責任は取ってやる、孫殿にお灸を据えてやれ』かな？）」

とまあ…好意的に取れば、黄蓋殿は俺を捕縛する事に反対だったようだ。

よし、ならば持久戦続行だ。

…と思ったのも束の間。

「……………うっ、ううう…うううう、うええ…」

「……………（お）」

じっと見詰める孫堅殿の口から、掠れた声が漏れ始めた。
そして…。

「うえええ〜ん、りょどうがイジワルだよお…うえええ〜ん！」

孫堅殿が大声を上げ、目からは大粒の涙を流して泣き始めた。

「なんでめ〜りんのびよーきをしってたのお〜？ ひっく、なんでわたしにつかえてくれないのよお…ぐすっ、うえええ〜ん！」

俺の前から動く事なく床へ座り込み、ぐずる子供のように泣き喚く孫堅殿。

「だから言ったじゃろ？ 呂堂は絶対に首を縦には振らぬ、ましてやこんな方法だと余計に無理じゃと」

「だってだってえ、わたし…りょどうがほしいんだもん！」

……さて、泣き喚く孫堅殿とそれを宥める黄蓋殿。
どっちが家臣でどっちが君主か分かりゃしない。

「済まなかったな呂堂」

「いえ、泣き喚く君主を見れたので」

「そうかそうか、それは良かった…おっと、今から縄を切るから動くでないぞ？」

言って黄蓋殿は懷から小刀を取り出し…ってオイ、その小刀…胸の谷間から出さなかったか？

―ブツツ、ブツブツ―

女の子の不思議を間近で目撃し、次いで感じた解放感。
俺は数刻ぶりの自由を手に入れた。

「これで良からう」

「ありがとうございます、黄蓋殿」

「何、元々為らぬ策じゃし…お主の意向を無視した強引な手立てだったんじゃ…罵られこそすれ、礼を言われる理由は無いわい」

「じゃあ孫堅殿の魔手から解放してくれたお礼と言う事で」

「…ふむ、そう言う事なら仕方ないか…どういたしまして、じゃな」

その言葉を聞きながら立ち上がり、俺は凝り固まった肩と首をほぐす。

うむ、ゴキゴキと鳴る関節…気持ち良いな。

「この後どうするんじゃ？」

「立ち寄る土地を変えますよ…今度はどこを通ってどこへ行くか言いませんから」

だって、足元では孫堅殿…未だにベソかいてるけど、話だけは聞いてそうだし。

また検問張られちゃ意味が無いしな。

「そう言う事なら早く行った方がええのう」

「ええ、そうします」

言って俺はもう一度だけ、足元に座り込んでいる孫堅殿を一瞥する。
目を腫らして赤くしている辺り、マジ泣きだったようだ。

：が、触らぬ神に祟り無し：ここは心を鬼にして、無関心を装って
立ち去る事にする。

「ではこれで」

「うむ、村を出る時は東門と北門の間にある農家を抜けると良い：
あの家は儂の馴染みの家じゃ：これを見せれば黙って通してくれる
じゃろ」

言って黄蓋殿が取り出したのは、1本の矢。

鏃が大きく重い、中距離射撃用の矢。

矢羽根が赤くなっている辺り、呉の弓将の間では公式的な矢なのだろう。

それを持っていれば顔パスと言う事は：

「黄蓋殿の矢の生産先、と言う事ですか？」

「うむ」

やはりそうか。

ならばありがたく頂いて、早急に立ち去るとしよう。

そう思い、黄蓋殿が持つ矢に手を伸ばしたのだが…どうやらそれが隙だったらしい。

「がばっ！
—ぎゅっ！—

「うおっ！」

突然襲いかかってきた衝撃。

何事かと思いい前を見ると、眼前には孫堅殿の顔のどアップが。

「孫堅殿？」

「いっちゃ、やだ」

自身の胸元に柔らかい感触と、後ろ首に感じる細長い物の感触。そして脇腹に感じる微かな圧迫感。

「頭がここで、胸元にアレの感触だから…首の細長い物が腕だとして、脇腹の圧迫感は足か？」

だとするとどう言う事なんだ？

「あの、黄蓋殿？　もしかするともしかしますか？」

「…まさかあの刹那に跳躍し、抱き着く…いやしがみつくとは予想外じゃ」

…やっぱりか。

さて、首と脇腹がホールドされてるだけだから…腕は動くし、足も動かせる。

だが足はともかく、腕のやり場に困る俺。

なぜなら相手は女性で、しかも俺の身柄を手に入れる為なら色仕掛けすら辞さない呉の王。

落ちないようにと触れよう物なら即座に『王の体に許可なく触った、だから罰として冥琳の病気を知ってる理由を話すか…あるいは私に仕官しなさい』とか言い出しかねない。

そう、いわゆる『セクハラされた事実を盾にパワハラを働く女上司』である。

「あの、孫堅殿？ 降りて下さいませんか？」

「…………やだ」

「やだって…俺、旅路に戻りたいんですが？」

「…………ぐすつ、ひつく…ふええ…」

「げえっ!？」

何とか降りてもらおうと説得を試みたが、相手はまさかの泣き落とし作戦を敢行。

この状況で泣かれたら洒落にならんぞ!？

「えーと、黄蓋殿…こんな場合、俺はどうすれば?」

「堅殿、悪足掻きは止すんじゃ…ほれ、呂堂も困っておる…不満だ

と言うなら、落ち着くまで酒に付き合うから…」

と、困り果てた俺をフォローし始めた黄蓋殿。

流石は宿将…主の扱い方を心得てるぜ。

心強い援軍だな。

「…さいはきょうからいっしゅうかんのきんしゅ、ひつく…そしていまからわたしのこうどうをいっかいじゃまするたびに、ぐすつ…きんしゅきかんをいっしゅうかんのばす…ひつく」

「何じゃと!?! 堅殿はこの儂に禁酒を…死ねと申すのか!?!」

「それがいやならだまること…じゃなきゃ、わたし…ひつく、うええ…また、なくもん」

「そんな…済まぬ呂堂、酒を盾に取られては儂は動けぬ」

心強い援軍はあっさりと陥落した。

禁酒で撤退って…

「りょどう、めーりんのびょうき…どうしてしてたの?」

「いえ、それは…」

「ひつく、うええ…りょどう、どうしてわたしにつかえないの?」

「それは…」

「…りょどうはわたしのこと、きらいなんだ…だからはなしてくれないんだ…りょどうはわたしがきらいなんだ、きらいなんだ…きり

やい…つく、ふええん！ りよどうはわたしのときりやいなんだあ！ うえええええんっ！！」

「いいっ!？」

半泣きの状態で繰り返される質問。

だがいずれも今は答える事が出来ない。

だから答えあぐねていると、それを『自分を拒絶した』と取ったのか…孫堅殿は、自らの言葉に込めた言葉で自らを追い込み…再度、大号泣。

「おやおや、これはこれは…我が恩人の呂堂殿ではないか、こんなところで何かあったかな？」

そこへ現れたのは、俺をこんな境遇へ落とし込んだ張本人。眼鏡のメロン軍師、周公瑾その人。

「周瑜殿が諦めてくれないから、こんなメに遭ってるんですよ」

言って振り返ると、俺は自分の胸元を指差した。

そこには俺の肩に頭を乗せ…泣き疲れたのか、いつの間に…スヤスヤと、実に可愛い寝息を立てる孫堅殿の姿が。

その孫堅殿を嬉しそうに見ていた周瑜殿だったが、その表情が急に暗くなった。

「…どうしたんです？」

「これは困ったな」

「何がです？」

「いや、呂堂が我が策に落ちたかどうかは元より…神蓮様しえんれんは寝癖が悪くてな、一度眠りに落ちるとほとんど起きて下さらないのだ」

「……は！？」

「しかも性質たちが悪い事に、泣き疲れて眠られた場合は…丸2日経つまでは決して目を醒まさぬのだ」

オイ、冗談だろ？

丸2日経つまでは決して起きないって…じゃあ俺、2日間はこのままって事か！？

「……致し方あるまい、祭殿」

「…何じゃ」

「帯か何かで神蓮様を呂堂の体に縛り付けてくれ…落ちないようにな」

「何をする気じゃ？」

「呂堂には悪いが、神蓮様は我らが主…よってこの場は神蓮様を呉郡へ連れ帰る事が先決だ」

あの、待って下さい周瑜殿。

その言い方だとまるで…頼む、嘘だと言ってくれ。
でないと俺、俺…

「そうだ…神蓮様の抱き枕と化した呂堂ごと、神蓮様を呉郡へお連れするのだ…重ねて言うが呂堂に拒否権は無いから、虎にでも噛まれたらと思って諦めてくれ」

「そんな…」

ウゾダドンドコドーン！

…ヒドオオヂヨグツテルトヴツトバスゾ！

…済まない。

嘘だそんな事！

…人をおちよくつてるとぶっ飛ばすぞ！

…と言いたかったんだ。

こうした俺はオンドウル神の導きにより、望まぬ形で呉郡入りが決定したのだった。
つかこれ、拐かされたって言うんだよな？

どーすんだ、俺。

伝記の24 刃、拐かされること（後書き）

次からしばらく呉にて話が進みます。

伝記の25 刃、至ること（前書き）

孫堅さん大暴走！

そして、r i s e t t e 作の呉将一同は…端から見ればかなり変です。

どうしてこうなった！？

こんな小説ですが、これからも宜しくお願い致します。

伝記の25 刃、至ること

（刃 視点）

記憶の限りじゃ二度めになるが、敢えてもう一度言わせてくれ。

「…なんでさ」

俺は自分が置かれている現状を認識したくなくて、ここ2日間の回想と言う名の現実逃避を行う。

どうしてこうなった？

＊＊回想1日目＊＊

「では、何か用があったら言ってくれ…可能な限り用意する」

「わ、分かりました…」

周瑜殿が考案した『呂朧包囲網』なる策にひっかかった俺は、策にこそ嵌まりはしたが…その真意たる『周瑜殿の病状把握の理由を話す事』と『呉に孫堅殿の配下として仕官する事』の両方を拒んだ。

拒んだら孫堅殿は諦めると思っていたのは俺と黄蓋殿だけだったらしく、孫堅殿は拒まれてなお俺の説得を開始：沈黙の中で、孫堅殿が発する熱視線を浴びはしたが：受け流しの出来る俺が再度、孫堅殿の意思を退けた。

だがここで孫堅殿が、呉王にあるまじき痴態を繰り広げると言う事態に陥る。

具体的には俺の沈黙を自らへの拒絶と受け取った孫堅殿が、恥も外聞も無く：大声をあげて大号泣を始めたのだ。

泣き喚く孫堅殿をとりあえず放置し、居合わせた黄蓋殿に手解きを受け：今いる村からの退散を画策した俺。

そしていざ退散となったその時、孫堅殿が俺に抱き着く事で俺の退散を阻止。

降りてくれと言う俺の意見に泣き落として反撃を開始する。

焦った俺の元へ黄蓋殿が駆け寄り味方になってくれたが、好物である酒を禁じられ：黄蓋殿は呆気なく撤退。

孤立したところへ現れたのは、俺がこんな事態に陥る原因となった周瑜殿。

最初こそ面白そうに見ていた周瑜殿だったが、俺が抱きかかえたモノを見て愕然とし始めた。

俺が抱きかかえたモノ：それ即ち孫堅殿なのだが、彼女は泣き疲れたのか：気が付くと眠っていた。

寝たなら剥がして貰えば良いと思ったのだが、周瑜殿からもたらされた情報は『孫堅殿は眠ると起こすのが困難』そして『睡眠の原因が泣き疲れの場合は、2日経たねば絶対に起きない』との事だった。

そして最終的に『俺個人の意向く孫堅殿の存在価値』と言う、理不尽にして無情な方程式が成立・採用された：結果として俺は『泣き寝入りした孫堅殿の抱き枕』として、孫呉の現状の本拠地：呉郡へ、半ば物体として輸送される事になったのだ。

そして話は、回想1日目の冒頭へ戻る。

「ではこれより出発する！ 神蓮様は戦に出られぬ為、野盗及び賊の襲撃時には総員奮起せよ！」

見た目に似合わぬ猛々しいかけ声を発し、周瑜殿が出発の音頭を取る。

俺は陣形中央部の馬車の荷台にて、泣き寝入り孫堅殿の御守り役となった。

御者は周瑜殿。

「触れないと言うのはキツイな」

「何故です？ 抱きついたまま寝ている孫堅殿を、支えて差し上げるぐらいしても良いのでは：」

「相手、孫堅殿：貴女方の最上位の上司ですよ？」

荷台にて：親衛隊として選抜された、周瑜隊の人と話をする。

「ただでさえ発育が良く、加えて超の付く美人：それが孫堅殿でしょう？」

「孫堅様、孫策様、そして孫権様と黄蓋殿、更には我らが隊長である周瑜様…皆様発育度合いが凄まじい方々ですから」

ちなみに彼女達は先刻、俺を捕縛した実行犯とも言えるあの子達だったりする

「孫姉妹の実物は見た事が無いから知らんが…ともかく、そんな超美人に抱きつかれているのが、健全な男たる俺…分かる？」

「ああ、なるほど」

「どう言う事？」

「美人が無防備に抱きついてるけど、相手が相手なだけに手は出せない…つまり我慢してるんだけど、落ちるのを支える為に触れたとて理性は危ない…だからなお我慢してる、って事ですよね？」

そう、正にその通り。

周瑜達の子達が言う通り孫堅殿は発育度合いが凄まじい…特に胸。だから眠っているとは言え、抱きつかれれば当然…孫堅殿の胸が、俺の胸板で潰れる。

その感触の素晴らしい事ったら筆舌に尽きない。

しかし俺には彼女がいるし、彼女達との誓いにより…他の女には手を出す事をしたくない。

だがそれを知っていてなお孫堅殿は俺を誘惑し、挙げ句の果てにはこうして抱っこされる感じで眠っている。

彼女の頭は俺の肩に乗っているのだが、彼女の首筋やうなじ…髪を

筆頭とした、全身から立ち上る香りの素晴らしい事…オマケに時折、孫堅殿が…

「んゝ…りょどう、すきよ…んゝ、ちゅ」

…等と寝言で言いつつ、俺の首筋を舐めたり吸ったり…時には背中や脇腹をまさぐったり、胸を押し付けたりするから堪った物ではない。

俺の理性は本能との激戦で既にボロボロ。

そんな危機的状況で彼女に触り、その体の手触りを良しとした場合…自動的に理性の敗北が決定するのは目に見えている。

「にしても罪作りな御方ですよ…孫堅様って」

俺の置かれた立場を理解したのか、親衛隊の一人がそう言った。

「全くだよ…欲しいモノは何がなんでも手に入れる…相手が人間で男なら、色仕掛けも辞さないって…王としてどうなの？」

「そうなんですよ…相手が男なら、戦で屈服させた方が後腐れも無さそうな物なのにねえ？」

「ねえりょどう…わたしのこと、しえんれんってよんでいいわよ…」

そんな中、親衛隊の人達との会話に突如割り込む孫堅殿。

口から放たれた言葉に荷台内が沈黙する。

俺は最早慣れた物で、また悪い癖が出だしたなと考えていた。

「…くー、くー…むにゃむにゃ…」

「…呂堂殿、今のは？」

孫堅殿が寝息をたて始めたのを見て、親衛隊の一人が口を開いた。

「…今の、寝言なんだぜ？」

「えっ？　今の、寝言なんですか！？　あんなにハッキリと喋っておいでなのに？」

「ああ…君達が乗り込む以前からさ…つか寝言で真名を預けられても困るって…」

寝言に返事をする縁起が悪いと言う話を聞いた事はあるが、この人の寝言に返事するのは縁起が悪いどころの騒ぎじゃ無い気がする。

そしてまた寝言を言い始める孫堅殿。

「りょどうってきよにゆうがすきなんでしょ？　わたしの、むね…すきにしているわよ…なんだったら、しえんとかれんふあとか…さいとかめーりんとかも、よんであげりゅ…でもあなたはわたしのだいじなひとだから、うわきはだめなによ」

俺の肩に頭を置いたまま、孫堅殿の口から垂れ流される危ない発言。馬車の荷台内の空気が凍るのが分かる。

止めて！

呂堂の理性のライフはもうゼロよ！

「……くー、くー…」

「今のも寝言ですか？」

「……ああ、幾分おとなしい部類に入るが…間違いなく寝言だよ…つかこの人、夢ん中でも俺に迫ってんのか？　とは言え、孫策殿や孫権殿…それに黄蓋殿や周瑜殿まで連れ出す夢って…この人、根はアレなのか？」

「「あ、あはは…さあ？」」

こんな感じで1日目が経過した。

ちなみに『アレ』とは何なのか…それは皆さんの御想像にお任せしたい。

余談だが…孫堅殿の危ない寝言は、俺の背後の壁越しに…御者をしていた周瑜殿に丸聞こえだったらしく…

「人を無断で誘惑の材料にしないで頂きたい」

…と、周瑜殿に頬をつねられて…寝たままだが、眉間に皺を寄せて…

「いひゃいめーりん…ごめんにゃひゃい」

と言った。

…重ねて言うが、孫堅殿は寝たままである。

そんな光景を見る事が出来たのは、眼福と言って良いのだろうか。

＊＊回想2日目＊＊

この日は朝から賊の襲撃を受けた。

相手は兵数1200人の黄巾賊。

対するこちらは元々少人数の遠征で900人ほどいるが、戦力として動けるのは実質600ほど。

残り300には俺が乗る馬車を守る守備隊と親衛隊、そして馬車の荷台内部の親衛隊と孫堅殿、加えて孫堅殿を守る最終防壁の俺自身が計算に含まれている。

実質的な兵力差は実に600。

いくら相手が統率の取れない烏合の衆と言われる黄巾賊で、味方戦力に黄蓋殿や孫策殿：そして孫権殿と言った武将が居ても、単純に倍の相手は難しいはず。

―ガキイン！―

―ザシユッ！―

「ぐわっ！」

「でええいっ！」

―ドガンッ！―

「うぎゃあっ！」

「撃ち方構え！ 良く狙うんじゃ……放てっ！」

―ヒュヒュヒュヒュ……―

―ドスドスドスドス！―

「ぐはっ！」

「がっ！」

「ぎゃっ！」

「がはっ……」

馬車の荷台の周辺で展開される戦い。

荷台は周囲を木の壁で覆われているから、詳細な現状の把握は難しい。

「……………」

間違いなく激戦になるとは思うが、呉将達も善戦しているらしい。

とは言った物の、俺は動けない事に変わりはない。

だから俺は動けずとも出来る事をしようと、孫堅殿に抱きつかれたまま…無言で氣の練り上げを開始。

―ヴウン……―

発した氣は俺の意思に沿ってその形状を変え、やがて孫堅殿と俺を包む球体結界のような形になる。

これは肉体強化型氣技の亜種で、技名を『硬氣功域』（こうきこういき）と言う。

氣なのに質量を持つ濃密な氣が壁となり…矢等の飛来物の進入や熱、水を防ぎ…かつ、物理攻撃でも弾く技…つまり強固な結界として効

果を発揮する。

ちなみに肉体強化型氣技の代表技が、この技のモチーフとなっている『硬氣功』で…黄蓋殿の得意技。

「伝令！ 東方四里付近に敵兵団の情報あり！」

「何だと!？」

む…周瑜殿の怒声が聞こえる。

「数は！」

「およそ一千だと思われます！」

1000の敵兵団か…きな臭い情報だな。
敵兵団…つまり増援か。

「くそ、この忙しい時に…荷台内の親衛隊を外に出せ！ 警戒を怠るな！」

このジャストタイミングに増援を寄越せるって事は、情報が漏れて…かつ増援を寄越せるだけの知識を持つ軍師が敵って事だ。

厄介な賊徒だな…今回の黄巾は。

―バリッ!―

―ストッ…―

そんな事を考えていると、俺がいる荷台を包む幌の天井が突如破れ

：そこから黄巾賊と思わしき男2人が、その手に錆の浮いた曲刀と剣を持って荷台に降り立った。

「へへ、見付けたぜ：孫堅だ」

「言った通りだろ？ 護衛対象が馬車にいるなら、馬車は混戦地域から遠ざける他無いし：ましてや撤退戦じゃないから、馬車は停めるんだ：後は停めた場所に、気配を殺して近付けば良いわけだよ」

「増援なんて居る訳ないのに、増援の報を聞けば自ずと兵を増やす事になるが：逆にそれが警備を手薄にする：なるほど、流石は頭ですネ」

：そうか、虚言か。

増援こそ誤報で、その誤報に惑わされた呉軍が浮き足立ち：孫堅を、と言うよりは馬車を守る為親衛隊が馬車を離れ：孫堅の周囲から兵がいなくなる。

そしてそれこそ賊の狙いだったんだ。

「頭の『流言の計』成功ですネ」

いや、どちらかと言えば失敗じゃないか？

何故ならこの場には：

—ドシュツ！—

「がっ！ な、何だ：と？」

例え動けずとも、片手で相手を：無手で倒せる俺がいるから。

俺は右腕で氣弾を放ち、部下らしき男の胸に大きめの風穴を開けてやった。

狙いは心臓と気管支、そして肺の一部。

：向こう側が見えるって事は、心臓を直撃して消し飛ばし：綺麗に貫通したって事だよな。

ちなみに俺の『硬氣功域』だが、同種の攻撃は防げないという欠点を持つ。

つまり相手が氣使いだと意味を成さないという事になる。

「まさか：孫堅は体を壊して、治癒効果がある枕に抱き着いて寝てんじゃないのか!？」

「その枕がまさか戦力だとは考えが回らなかったか？」

「何？ 誰だ貴様は！」

「俺か？ 今の立場こそ孫堅殿の抱き枕だが、それでも腕に多少の覚えはある武芸者でね：名を呂堂と言う」

「呂堂だと!？ 呉将にそんな奴がいるなんて情報は無かったのに：」

情報が無かった、か。

当然だな。

俺は呉に仕官してないから、当然将兵名簿には名前が無い。

だが情報が無かったと言う事は、コイツらが持っている情報に『呉の将兵名簿』があると言う事。

孫堅殿：貴女の国の情報規制はザルですか？

「……（む？）」

そんな事を考えていると、賊の頭らしき男の背後に…孫堅殿と似た風貌の少女が、正直寒気を感じるほどの殺気を放ちながら…こちらへ走ってくるのが確認出来た。

…会話を引き延ばして隙を作ってやるか。

「さて、お前の持つてる呉の将兵に関する情報…その真偽や正確性はどうでも良いんだが、お前さん…実は世論に疎いだろ？」

「何だと!？」

「長社で黄巾七万と波才を討ったバケモンの話、知らないだろ」

「抜かせ！ それぐらい知ってるわ！ 長社にて波才將軍、赤髪の武芸者に部下七万共に討たれる…それがどうした!？」

「その武芸者の人相や特徴は？」

「歳は十五前後、身の丈は約六尺で赤髪…武器は赤い弓と赤い籠手、それに『飛刃赤戟』と銘の入った赤い方天画戟を持っている…」

「ならコレ、なーんだ？」

—スチャ、チャキツ…—

…なん、だと!？」

俺は男の前に、ご要望のあった赤弓『朱雀』と赤籠手『穿紅』…そして方天画戟『飛刃赤戟』を出し、見せてやる。

男はその各種武器と俺を見比べ、次の瞬間…顔を青くして震え始めた。

「ば、馬鹿な…あの『赤戟の竜巻』が、なんでこんなところに…奴は南陽が本拠のはず、それがどうしてここ合肥まで…」

「そりゃお前…俺を抱き枕にしているこの人のせいさ」

「孫堅の？」

「そうさ…でなきゃわざわざこんなところ来ねえって」

俺は気をやらない。

俺は気付かせない。

男の背後で、桃色の髪をした…孫堅殿に似た風貌の、これまたデカメロンを携えた…飛びっきりの美少女が、男の首めがけて剣を振った事に。

—ザンッ!—

「な…」

「「時間稼ぎだって分からなかったの? (か?)」」

俺は今しがた男の首を斬り飛ばした少女と同じ言葉を、全く同じタイミングで言いつつ…

―ドサツ：―

…息絶えて崩れ落ちる賊を見ていた。

「時間稼ぎありがと、母様の抱き枕さん？」

「おいおい、俺の名前くらい知ってんだろ？」

「そうね…じゃ改めて、時間稼ぎに感謝するわ…呂堂」

「身なりからして孫策か孫権のどっちかだよな？」

「前者が正解ね」

「ほう」

言って少女は気さくで、取っつきやすい笑みを浮かべた。

「私は孫策、孫策伯符…貴方を抱き枕にしている、孫堅文台の長女よ」

「なら俺も改めて名乗ろうか…俺は呂堂、字は戦牙…元来は旅人なんだが、故あって今は孫堅殿の抱き枕と化している」

「うふふ、冥琳に聞いた話は本当だったのね？」

言ってなお笑う孫策殿。

「で、孫伯符ともあろうお方が…戦をほっぽりだして、馬車途中で

男とくっちゃべってて良いのか？」

「あら、私は敵将を討ったのよ？　この戦、もう終わりよ…そんな気がするし」

「ほう…母譲りの勘ってところか」

「まあね」

言いつつ孫策は手にした剣の血糊を振るい落とし、剣を鞘に納めた。耳を澄ませばそれまで響いていた剣戟の音は止んでおり、飛び交っていた怒声も聞こえない。

「呂堂殿！　堅殿は無事か…おお、孫策殿ではないか」

「遅かったわね、祭…敵の頭っぱいのは私が討ったわ」

そこへ到着したのは、邂逅順で言うとナンバー2のデカメロン…黄蓋殿だった。

黄蓋殿は手にした弓の一部と、着衣のあちこちに返り血を浴びており…腰に剣が提げられているのを見る限り、近接戦闘を行ったらしい。

まあ返り血の比率は孫策の方がずっと上だが。

「そうか、堅殿も呂堂殿も無事で何よりじゃ」

「硬氣功が使えなきゃ別の結果になったかも知れんがな」

「ほう？　どのような結果になったかも知れないか、後学の為に教

えてもらいたい物だな」

言って現れたのは、手に鞭を携えたデカメロンナンバー3：周瑜。

「出会い頭に氣弾でズドン、かな？　そこで胸に風穴開けて転がってる男みたいに」

「なるほど…それでも神蓮様は無事だった訳だ」

「まあな」

孫堅殿を抱きかかえたままそう言うと、周瑜は楽しそうにくつくと笑う。

「姉様！　母様はご無事で…あら」

「蓮華、貴女まで…」

最後に現れたのは、孫策を2歳ほど若くしたような…それでも良く似た風貌の、これまたデカメロンを携えた美少女。
多分、孫権殿だろう。

「貴方が呂堂？」

「如何にも、俺が呂堂だ…口調は勘弁な？」

「まあ…良いわ」

「よかった…で、孫権殿で合ってるか？」

「そう：私は孫権、字は仲謀ちゅうぼう：まずは母様を守ってくれた事、感謝するわ」

「いや、大した事じゃないからな：とりあえず、どういたしまして」

さて後は：孫尚香殿か。

彼女がくれば、名だたる孫将は全員揃うんだが。

そんな俺の心情を察したか、孫策殿が言った。

「ねえ蓮華れんふあ、シャオは？」

「小蓮しょうれんならあそこです」

孫権殿が指差す先には、護衛と思わしき兵士達に囲まれた幼女が。

「：（あれが孫尚香殿か：姉や母、軍師達の発育度合いが凄まじすぎて：何か、落胆感が強い：ロリだしペタだし：：：巨乳好きを自負する俺からすれば、悪いが射程範囲外だな）」

そんな事を考える。

：いや、そうでもしなきゃこのメロン畑で正気を保つ事が出来ないんだ。

「さて呂堂」

「ん？ 何だ？」

「既に知っているかも知れないが、ここは合肥：我らが本拠地である呉郡の西に隣接する州で、もう州境なのだ」

「飛ばすから揺れる、孫堅殿をしつかりな…と言う事か？」

俺の意見に周瑜殿は目を見開き、だがすぐに嬉しそうな笑みを浮かべた。

「察しが早くて助かる…そうだ、頼んだぞ」

「任せな…決して落とさず、と言いながらも手を出さないからな」

「えゝ？ 母様が無事な事と、勝利を祝して宴…なんて事は無いのゝ？」

「…あのな雪蓮、一刻も速く神蓮様を呉郡へお連れする為の急行軍なんだ…宴なんぞで時間を無駄にする暇は無いぞ」

「ぶゝぶゝ！ 冥琳のけちゝ！」

はは、やっぱり母娘おやこだわ。

拗ね方が『ぶゝぶゝ！』って。

「何を笑ってるの？」

「いや何、似た者親子だなと」

俺の呟きに周囲の面々は納得の表情だ。

「そうだな…母様の血を一番濃く継いだのは姉様だな」

「死なれては困るから本陣に居てくれと言っても聞かないし、勘だけで軍策を上回る戦績を叩き出すし」

「何かにつけて政から逃げ出し、かと思えば次の瞬間には酒を…おっと、これは儂も同じか」

ちなみに上から孫権殿・周瑜殿・黄蓋殿の順。つまり今、各人が挙げた特徴を…孫堅殿は全て有している事になる。

ーゴトツー

「周瑜様！ 敵軍が撤退を始めました！」

「速かったな…被害は？」

「はっ！ 死者無し、負傷者百ほど…対して敵軍は死者三百、負傷者四百…快勝と思われます」

「…分かった、自軍の負傷者は手当てを施して後続の馬車に収容…敵軍の負傷者は投降を呼び掛け、応じた者から順次収容しろ…それ以外は、分かるな？」

「はっ！」

「よし、では三刻後に出発だ」

「御意！」

…なるほど。

黄巾賊であっても、負傷者に投降の意志があれば手当てを施して収容。

それ以外は…皆殺しか。

まあ、帰従の意志がない賊をつれ歩く意味は薄いし…一理はあるな。

「ッ!？」

「…どうしたの？」

そんな事を考えていると、孫策殿が俺の顔を覗き込んでいる事に気が付いた。

顔が近いって!

「顔が近い…」

「…問題あるの？」

問題あるのって言われても…つか近付かないでくれ。
これ以上直視すると口が…

—きゅっ—

逃げる為に顔を反らそうとするが、それは孫策が俺の顔をホールドする事で阻止される。

「それにしても呂堂って、整った顔をしてるわよね」

「は? そんなはず無い…ちょ、顔近いから」

俺がタジタジになるのが楽しいのか、孫策は俺の顔を至近距離で真正面から見詰めたまま視線を外そうとしない。

それどころか孫策の顔はジリジリと俺の顔に近付いて行く。

そしてキスまであと一寸に迫った、その時。

「……しえれん」

「「ッ!」?」

俺の肩に頭を乗せている孫堅殿が、件の悪い発作を起こした。

「…だめよ、しえれん…りょどうは…わたしだけのひと……しえれんにも、れんふぁにも…めーりんにも、さいにも…あげない…むにやむにゃ」

孫堅殿…貴女、本当に寝てるんですか?

今の寝言…どう考えてもこの現状を把握していないと、言う事が出来ませんよね?

「ねえ呂堂、今の…何?」

「寝言としか言えん」

「事実なの?」

「何が?」

「貴方が『母様だけの人』で言葉は事実かって聞いてんのよ!」

いや孫策殿、とりあえず落ち着いてくれ。

そんな泣きそうな顔で言われても困る。

そして…皆さんの視線が痛く、寒い。

「俺は確かに孫堅殿から『私に仕えないか』と誘いを受けたが、とある理由により断ったのは知ってるよな？」

「…ええ」

「俺の意思は示したつもりだ…何より孫堅殿は今、睡眠中だ…だから寝言の内容を『事実か』と聞かれても、答える事なんか出来るか？」

…と、こんな話をしながら呉郡入りを果たした。

…で、その日は納得出来ない様子の孫策殿を孫権殿や周瑜殿に任せ、俺は客室へ通された。

無論…孫堅殿にしがみつかれたまま、だ。

俺を客室へ案内した黄蓋殿は…俺を寝台へ座らせたあと、孫堅殿を俺に固定していた帯をほどき…

「なるべく寝台から降りぬようにの…経験からしてあと八刻もすれば、起きはせんでも体からは離れてくれるはずじゃ」

と言が残し、部屋から出ていった。

さて、後8刻…つまり2時間。

良く考えれば俺、ここ2日間寝てないよな。

「ふああ…」

そう考えたのがきつかけとなったのか、俺は強い眠気に襲われた。

「とりあえず、孫堅殿が落ちないように…」

俺は寝台の壁際の端へ移動し、離れた孫堅殿がどんな姿勢になろうが…とりあえずは寝台から落ちないように、自分の姿勢を整えた。

「とりあえずお休み」

と、緊張の連続だった2日間と別れを告げ…ようやく、ひとときの安息を手に入れたのだった。

で、きっちり8刻後…俺は何かに導かれるように目を覚ました。

のだが、何故か体が重たいし…身動きが取れない。
何事かと思つて周囲を見渡し…絶句した。

「くー、くー…」

右を見れば孫堅殿が俺の右腕にしがみついて寝ており…

「すー、すー…」

左を見れば、何故か孫策殿がそこにいて…彼女は左腕にしがみつい

て寝ていた。

待て、孫堅殿はともかく…孫策殿、貴女は8刻前…孫権殿と周瑜殿に連れられ、自室へ帰ったのではありませんでしたか？

うら若き年頃の乙女が、母と一緒によその男と同衾とは何事ですか？

「…すー、すー…：ううん…：りようどう、しゅきよ…：んちゅ…」

「くー、くー…：りようどう…：むにゃむにゃ…」

だが何度まばたきをしても、2人の姿は視界から消えない。

―…ゴッ―

夢じゃないかと思い、寝所の壁に後頭部を打ち付けてみたが…

「~~~~~ッ！」

得られたのは、今のこの光景が事実である事を示す痛みのみ。

しかし俺はそんな現実を認める事が出来ず、気が付けば…

「…なんでさ」

…と言う言葉が、己の意思を無視して口を突いて出ていた。

伝記の26 刃、保身すること（前書き）

孫堅殿が変わらず暴走中。

加えて今回はあの人までもが暴走します。

そして新キャラ登場…ですが、原作でもこのタイミングなのは不明ですし知りません。

時間軸捏造…反省はしてません（笑）

伝記の26 刃、保身すること

〔刃 視点〕

さてそれから2刻の時間を使い、俺は悪戦苦闘の末：ようやく、孫母娘（孫堅そんけん殿&孫策そんさく殿）のハレンチホールドから脱出：与えられた客室から飛び出た。

ちなみに敷布に血の染みは無かったし、部屋の匂いも烏賊臭いなんて事は無い：加えて母娘おやこの着衣は全く乱れて無かったから、親子丼は食べてないだろう。

いや、確信は持てないがそう言う事にしてくれ。

さて、それから俺は：自身に宛がわれた客室に程近い所から行ける：城壁の上へと足を伸ばしていた。

「ふう：ここなら一息付けるだろう」

言ってそこで、城壁を構成する積み石に腰掛け：眼下に広がる城下町を見おろした。

呉郡は建業、孫一族が統治し：呉国としての繁栄のスタート地点。城の名前は忘れた。

城下には洛陽と同規模の城下町を抱え、まだ朝も早いと言うのに沢山の人が商いの仕込みを始めており：商隊と思わしき連中の姿もちよくちよく見られる。

「平和だな…」

「…………あなた、誰？」

「…ん？」

そんな、洛陽とよく似た平和感を満喫していると…耳に、聞き慣れぬ声が耳に入った。

誰か来たのかと思い俺は、音源と思わしき声の主の方を見やった。

するとそこには孫堅殿や孫策殿、そして孫権殿そんけんと良く似た雰囲気と風貌だが…絶対的なサイズとしては全てが小さな、あえて表現するなら『女の子』が立っていた。

「…まだ自己紹介してなかったな…俺は姓が呂りょで名が堂どう、字は戦牙せんが…数刻前まで孫堅殿と、何故かその場にいた孫策殿の抱き枕だった男さ…君は？」

「シャオはね、孫尚香そんしょうこうって言うんだよ」

そうか、どこかで見た事があるなと思っていたが…昨晚、孫堅殿を送る馬車の荷台で遭遇した賊の一件…賊を撃退した後、孫権殿の口から『小蓮しょうれん』と呼ばれていたのが彼女のはずだ。

「まだ朝も早い時間のはずだが、尚香殿しょうこうは何故ここに？」

「お姉ちゃんを探してるの」

「姉…どっちの？」

「あ、えと……子供っぽい方のお姉ちゃん」

子供っぽい方のお姉ちゃん……ああ、孫策殿の方か。

うむ、良く見ているな。

確かに彼女は子供っぽいからな。

ちなみに孫権殿は個人的に『カタブツっぽいお姉ちゃん』と言う表現がピッタリなのだが、これは言わぬが華と言うものだ。

「なるほど、孫策殿か……孫策殿ならこの下の、俺に宛がわれた部屋に……孫堅殿と一緒にいると思うぞ？　誰かから聞いてなかったのか？」

「えっ？　うん、確かに『泣き疲れて眠るお母様にしがみつかれ、動けなくなった武芸者がやってくる』って聞いたけど……本当にお姉ちゃんも一緒なの？」

「ああ、むしろ十刻前からは孫堅殿しか居なかったんだが……八刻経って気が付くと、君のお姉さんも一緒だったのさ」

「ふうん……ねえ、呂堂って呼びつけにしている？　私の事はシャオって呼んでいいから」

「俺を呼びつけにするのは良いが……今言ったのは真名を元にした愛称だろ？　悪いが真名は預かれない」

最近は身内の真名を余りにも平然と他人に言う人ばかりで、価値を忘れそうになるからもう一度言っておこうか。

真名とは、ごく親しい友人間や両親から呼ばれる事が多い……その人

物の本来の姿を示す神聖な名前で、許可なく呼べば殺されても文句は言えない。

「…どうして？」

「俺には、他人に真名を預かる・預けられる為の条件があつて…それを満たさない限り、預かる事も預けられる事もしないんだ」

「……その条件って何なの？」

…言つて良いのか？

師弟関係を結ぶ、あるいは将来的に夫婦となる関係になる事が条件だと言う事を。

いや、前者はともかく後者は倫理的背徳感が凄い。

それにこの子もあの人の子供だ…その手の知識があつても不思議じゃないし、もし仮に万が一の事態になつても不味い。

…俺は犯罪者にも、廃人にもなりたくないんだ。

ちなみに霞・理沙・恋の3人は将来的な夫婦、桔梗さんと紫苑さんは師弟関係だ。

そう言つた状況で言うならこの呉では唯一、周瑜殿のみが『軍策の師匠』として真名を交換する条件を満たしうるのだが。

「ごめんな…条件は言えないんだ…言つたところどころでどうにかなる物でもないからな…けどいつか条件が満たせたら必ず預けるから、その時に預からせてもらうよ」

—ぼむ—

「あ…」

「じゃあな」

言って尚香殿の頭を軽く撫で、俺は城壁の上を後にした。

さて、ところ変わってここは玉座の間へ続く廊下。

城壁の上で尚香殿と別れた後、階下へ降りてきた俺は…忙^{せわ}しない様子で廊下を歩く周瑜殿と会い、改めて紹介の場を設けるから玉座の間へ向かってくれと言われたのだ。

ちなみに周瑜殿が忙しない理由だが、孫堅殿と孫策殿…そして孫尚香殿の姿が見えないかららしい。

そこで俺は孫堅殿と孫策殿が俺用の客室に、孫尚香殿が城壁にいた事を告げたのだが…孫策殿の居場所を聞いた瞬間の周瑜殿の、修羅とも般若とも言えぬ鬼面の形相が今でも忘れられない。

そう言った経緯を経つつ、玉座の間と思わしき部屋の前に到着したのだが…

―チリーン…―

「止まれ、そして動くな…」

「ッ!？」

扉の取っ手に手をかけようとしたのだが、それは鈴の音と共に聞こ

えた声によって止められた。

いや、声だけならば良いのだが……今、俺の首にはひんやりとした曲刀が……刃を首に向けて押し当てられている。

曲刀の持ち主と思わしき人物は、俺の背後から強烈な殺気を滲ませている。

「昨今では見ない顔だが、何者だ？」

「俺の名は呂堂、昨日この城へ……孫堅殿の抱き枕として運び込まれた人間だ」

下手に言い訳をすると殺される。

直感的にそう感じた俺は、ともかく冷静に事実だけを答えた。

「孫堅様の抱き枕、だど？ ……偽りではあるまいな？ もし偽りならその首、斬り落とすぞ？」

「嘘は言っていない……何なら確認を取ってくれ、孫堅殿本人と孫策殿……それに孫権殿と周瑜殿……更には黄蓋殿と孫尚香殿、この六人……更には周瑜殿の親衛隊が知っている」

「……良からう、それで……その抱き枕が玉座に何の用だ？」

「周瑜殿より玉座の間へ来るように告げられた……改めて将兵と顔合わせ、それに紹介をするからと……周瑜殿なら俺に宛がわれた客室で孫堅殿と孫策殿と一瞬か、城壁の上に孫尚香殿を探しに行っている……もうすぐここに来るはずだ」

「……」

俺の言葉を受け、それが事実かどうかを考えているのだろう。
俺は動かない。

―チリーン――

ややあって：凜とした鈴の音が聞こえ、首から曲刀がどけられた。

「：済まない、手荒な事をしたな：劉表りゅうひょうの手の者かと思ったのだ：
黄祖こうそは死んだが、劉表自身はまだ諦めていないようなのでな」

劉表：ああ、先日死んだ黄祖の上役だったか。

そう言えば史実の孫堅は劉表配下の黄祖の部下によって不意を突かれ、弓で射殺されるんだったつけ。

ならピリピリもするってのも頷ける：警戒して当然か。
ふむ、悪気は無い。

「いや、気にしていない：動いていいか？」

「ああ」

許可を得てようやく自由になる。

しかし俺ってほとほとツイてないよな：特にここ数日は。

「では名乗っておこうか：私は姓が甘かん、名は寧ねい、字は興霸こうは：鈴の甘寧かんねいと呼ばれる者だ」

言われて振り返り、そして驚いた。

この強気な目をして、丸見えの下着が禪ふんじしの少女が：あの甘興霸かんこうはだと

!?

鈴の甘寧と言えは江東で名を馳せていた義賊、錦蛮賊きんぱんぞくの若き頭領じゃないか!

思わず『アンタが甘寧? 冗談は禪だけにしろ』と言いそうになり、言って生じるのが命の危険と言う事を察し:同時に、まだ知識依存が強いなど自身を内心で戒める。

「甘寧殿、で良いか?」

「堅苦しいのは好かん:甘寧と呼びつけで構わん」

つか身長は俺より少し低いのに、あの曲刀をどうやって俺の首に突き付けたんだろう。

:気にしたら負けか?

「そうか:で、甘寧」

「何だ?」

「玉座の間に入りたいんだが、許可とかはどうするんだ?」

玉座の間に来いとは言われたが、てっきり開いてると思っていた扉はガッチリ閉まっている。

「いや、特に無いが:ふむ、私が開けよう」

—ギギギツ:—

言って甘寧殿が取っ手に手をかけ、扉を引く。

ふむ…引き戸なら侵入者対策にもなるな。

何故って？

押すより引く方が手間だからさ。

「さあここが玉座の間だ…形式はどうあれ、客人の待ち位置はあそこだ」

そして開いた扉の中に甘寧殿が入り、俺は玉座の間に通された。

「ありがとう、甘寧」

「礼には及ばない…としても、粗相はするなよ？ 疑いは晴れたとは言え部外者は部外者…場合によっては斬り捨てる事になるのでな」

無礼による手討ちか。

江戸時代じゃあるまいし…ともあれ返事をしなければなるまい。

だから俺は…

「ああ、分かった」

…とだけ短く返事をし、玉座の間に入り…指定された場所へ向かった。

さてそれから1刻ほどして、周瑜殿が孫策殿を…黄蓋殿が孫堅殿を、そして孫権殿が孫尚香殿を伴って現れた。

現れた、のだが…

「ほどいてよくめーりーん」

「この年で公衆晒しの緊縛遊戯なんて…やだ、感じてきちゃった…
／＼／」

孫策殿と孫堅殿は何故か縄で縛られていた。
それも厳重な亀甲縛り。

「雪蓮しえんは会議を蔑ろにする傾向があり、今回も脱走を企んだからそれに対しての罰…：神蓮様しえんれんは一国の主でありながら政務を二の次にし…起きてすぐに玉座の間へお越しいただけなかったばかりか、客人に抱き着いて二度寝すると言うあるまじき失態を犯しましたので縛に就いて頂いた…：と言うのは申し上げたはずですが？」

うわ、周瑜殿が未だに鬼面修羅だ。

つか孫堅殿？

感じてきちゃったって…貴女はMもイけるクチですか？

元々ムチムチな体が縄で更にムチムチに…ぐはっ、たまんねえ！

「あ、呂堂！　ねえ呂堂、これほどいて〜！」

「ッ!？」

そんな中、孫策殿が俺を見つけたらしく…縛られたが故になお強調されたデカメロンを揺らし、縄をほどいてくれと俺に走り寄ってきた。

だが…

「ッ!？」

―ガッ!―

「うわわっ!」

―ヒュッ、シユルシユルシユル…ギシッ!―

「きやうっ」

縛られて恍惚の表情を浮かべていた孫堅殿が突如再起動し、俺に走り寄らんとする孫策殿に足払いを放った。

突然突き出された足に孫策殿が転ぶ。

そこへ今度は周瑜殿が、どこからか取り出した鞭を振るい孫策殿を絡め取る。

「やあん、二重緊縛だなんて…」

そして悶える孫策殿。

孫策殿も更にムチムチ…更ムチになる。

今さらだがこの親子、大丈夫なのか？

そう思い、残っている娘達を見たのだが…

「…」

「…」

孫権殿は『アレは他人だ』と言わんばかりの表情を浮かべて沈黙し

ており、孫尚香殿は縛られた姉と母の顔が気になるようでジツと様子を見ている。

「周瑜殿、そろそろ始められてはどうじゃ？　呂堂が呆氣にとられておるぞ」

「あ、ああ…そうしよう、呂堂…こっちへ来てくれないか」

「お、おう」

黄蓋殿の意見を受け、周瑜殿が普通の表情に戻る。

そんな彼女に呼ばれ、俺は更ムチ（亀甲縛り継続中＋顔紅潮）孫堅殿が座る玉座の前に立った。

…孫策殿が未だに更ムチ状態（亀甲縛り継続中＋周瑜殿の鞭を巻かれた）のまま、床で芋虫よろしくジタバタしているのは…この際、見なかった事にしよう。

「さてこの度、貴殿の活躍もあり…我ら孫呉を脅かす宿敵が将、黄祖を討ち取る事に成功した…並びに神蓮様の帰還に際し、神蓮様の護衛を買って出てくれた事…この様な状態の孫王に代わり、孫将を代表してお礼を言わせていただく…感謝する」

「別にいいさ…いずれにしても偶然の要素が大き過ぎて、俺個人の意思とは違うと思うからな」

「貴殿が睡眠を取っている間に緒将と話し合った結果、貴殿には感謝の印として…我らで実行しうる案件を1つ、叶えさせてもらう事になった」

「いや、それは…」

「ちなみに受け取り拒否は受け付けない…信賞必罰は上に立つ者が、最低限守るべき事項…我らの顔を潰さないでくれ」

…ええ」

信賞必罰、か。

確か父さんも言ってたっけ…良ければ誉め、悪ければ叱る…それは人の上に立つ者が最低限守るべき事だと。

「…じゃあ路銀で」

「何だ、そんな物で良いのか？」

「ああ…繰り返し言うが、俺は諸国行脚中の旅人だ…食費にしろ宿泊費にしろ、手持ちの金銭は多い方が良い」

予想外の足止めでこうして呉郡にいるが、本当ならこの段階で既に官渡に着いてるはずなんだ。

「と言う事は、路銀を褒美として受け取り…さっき言った、諸国行脚の旅に戻る…そう言う事なんだな？」

「ああ」

俺にはこの世界で80年…今この瞬間の換算だと後65年は生きる必要がある。

そしてその65年には、今から2年後に訪れる『介入者』絡みで一波乱ある事も計算に含まれている。

「そうか、分かった…ならば少し心許ないがこれを…

「…ひつく、ぐす…」

「うつ、うええ…」

…神蓮様？ 雪蓮まで…何を泣いてるんだ？」

周瑜殿から路銀を受け取ろうとしたその時、それまでは大人しかつた孫堅殿と孫策殿が急に…嗚咽を漏らし始めた。

…孫堅殿に至ってはデジャヴュが酷い。

「神蓮様？ 雪蓮？」

「ぐすつ、ぐす…だめ、いっちゃ…いかないでよおお！」

「…は？」

「うえええ…やだよお、りょどう…いっちゃやだよおお！」

「ええっ!？」

揃って同じ事を言い、同時に泣き始める孫堅殿と孫策殿。

2人が未だに芋虫なのは、この際見なかった事n(ry)

ちなみに「…は？」が周瑜殿で「ええっ!？」が俺のセリフ。

「わたしにできることならなんでもするからあ、いかないでよお…
ひつく…わたしとまぐわいたっていうならなんかいでもするし、
ぐす…むねでだっにくちでだっにするからあ」

「かあさまだけじゃふまんなら、わたしもなんでもするからあ…い
っちゃやだよお…：ぐすっ…わたしもまぐわえっていうならするか
らあ、まえだけじゃなくてうしろもつかっていいからあ…：いかない
でよお…」

俺には旅の目的があるんだが、ここで子供のように泣きじゃくる2
人をほっというて行けるほど精神的余裕は無い。

つか二人とも、とんでもない事を口走ってるって自覚…ある？

「周瑜殿、俺はどうすれば良いんだ？」

「……ふむ」

俺のヘルプを受け、腕を組んで思案モードに入る周瑜殿。

―ズリズリ…―

―ズリズリ…―

その間にも芋虫母娘おやこは俺に、ズリズリとにじり寄ってくる。
いやそろそろマジで怖いんだけど…

「一つ…呂堂は諸国行脚中の旅人で、目的の為に旅をしている…
二つ…呂堂は神蓮様を助け、我々は謝礼を受け取ってほしい…三
つ…呂堂は謝礼に路銀を要求し、再び旅に戻る資金にしたい…四
つ…神蓮様、そして何故か雪蓮は呂堂に行って欲しくない…この
四つを丸く納める策か」

何でも良いから速く献策してくれ！
でない…見てくれ、この状態で俺の体をよじ登ってくるんだから。

「ちょ、何をやってるんですか孫堅殿…そこは俺の玉檣…うわ！
胸押し付けないで下さい、気持ち良くなるかr…どわっ！ 匂いを
嗅ぐなあっ！！」

「「ッ！？」「」」

「孫策殿！ 首筋を舐めないでくれ！ 胸がむにゅむにゅと胸板に
…うお！ ちょ、待て！ 唇をすぼめて顔を近付けないでくれっ！」

「「「ッ！！！？」「」」」

人体の構造を無視した動きで俺を蹂躪し、我が物にせんと正に“蠢
く”孫母娘^{おやし}。

頼む周瑜殿、早く…速く！

周りからの視線もむちゃくちゃ痛いから！！

…ああ、ダメだ…俺の理性^{ライフ}、また赤ゲージで点滅してるよ。

「…そうだ、良い方法を思い付いたぞ」

「とうっ！」

と、野獣化直前に周瑜殿が口を開いた。

それを聞いた瞬間、俺は力尽くで孫堅殿と孫策殿を振り払い跳躍…

—ダンッ！—

—ダダンッ、ダンッ！—

壁面三角跳びの要領で玉座の間の壁を駆け上がり、天井にあしらわ
れた梁を足場に空中を移動。

周瑜殿の正面上空の横梁へ降り立つ。

―ズリズリ…―

「りょどう」

―ズリズリ…―

「りょどう」

足下（周瑜殿の眼前）では2匹のエロンリークリーチャーが…未だに人体の構造を無視した動きで、梁の上とは言え空中にいる俺を…すぎる対象として求め、蠢き…泣いて（鳴いて）いた。

「呂堂が呉の客将になれば良いんだ」

「「「…え？」」」

周瑜殿の発案で正気に帰る孫母娘。おやし

俺は周瑜殿が言った言葉が理解出来ず、梁の上で首を傾げた。

「呂堂には呉の客将になってもらう…ただし、客将とは言え条件付きで…その条件を呂堂が決める事にすれば良いんだ」

「ふむ」

「言っても立場は客将だから規律は呉の物に従ってもらうし、規律を破れば罰がある…だからその辺りを加味して条件を決めてくれ…ああもちろん、部屋と食事…相場的には多少安いが、給金も出そう…どうだ？」

つまりこう言う事か：

- ・客将となれば三食は保証される
- ・客将となれば居住区は保証される
- ・客将となれば給金は保証される
- ・客将となった暁には、呉軍の軍規を守る事
- ・軍規に反しないなら条件を設ける事が可能

…厚待遇過ぎないか？

いや、あのエロンリークリーチャーを相手にするより遥かに良いし…軍規に反しないなら務める条件も決められるのか。

「……よし、乗った」

「そうか…」

「じゃあ周瑜殿、俺が客将でいる条件を言うから書簡か竹簡に認め
てくれ」

「任せてくれ…思春^{ししゅん}、書簡と筆を」

「こちらに」

—シュルルツ—

—スチャツ—

そうして周瑜殿はその甘寧殿から書簡と筆を受け取って、俺を見上げて言った。

「さあ、言ってくれ」

「よし…じゃあ…」

こうしていくつかの条件を定め、俺は呉の客将となった。

伝記の26 刃、保身すること（後書き）

刃が客将になる為にどんな条件を出したか、それは次回のお楽しみです。

なお拙作で冥琳が使用した鞭ですが、原作資料のラフ絵にあるような馬鞭ではなく…本当にムチです。
名前は『白虎九尾』としています。

伝記の27 刃、日々を過ごすのこと

く刃 視点く

「つゝゝゝ…はあ」

久々に気分の良い朝を迎える事が出来た。
うむ、客将の立場もまんざらでは無いな。

さてあれから俺は、呉の客将となるにあたり…いくつか条件を定めたのだが、まずはそのハイライトをご覧いただこう。

＊＊回想開始＊＊

「まず条件その一、俺は全員に対し…城内では敬語を使わない事を認めてもらう…堅苦しいのは嫌なんだな」

未だに、再度（孫堅殿は三度）エロンリークリーチャーと化している2人を足下に…周瑜殿を見下ろしながら、梁の上からそう告げる。

「それは…私や祭殿とは度々、通常の口調で話しているが…神蓮様は…」

「私も別に良いわよ？」

「神蓮様!？」

周瑜殿の弦きを聞き、突如元に戻る孫堅殿。
娘が未だにエロンリークリーチャーなのは放っておく事にする。

「その方が本音で話せるだろうし」

それは理にかなってるかな…取り繕った話し方で本音が言えるとは思えないからな。

「ですが客将に敬語を使わせないと、呉王としての威厳が…」

「…威厳で民が幸せになるの？ 玉座にふんぞり返って威張り散らせば民が幸せになるの？ そんな物で民が幸せになるならいくらでも保ってあげるわ…でもそうじゃないでしょ？ だから採用ね」

威厳とは、備える人間は何をしても備えていると俺は思う。

「じゃあその二、俺は基本的に武官だ…必要とあらば文官もこなすが、実力的には使い物にならないと思って欲しい」

確かに文字の読み書きや簡単な計算は出来るが、文官に比べれば圧倒的に遅いからな。

「これは冥琳の領分ね」

「何が私の領分ですか…毎回お逃げになられるのは神蓮様の方…：…済まん、話が逸れたな…さて、文官としては使えない部類だと思えと言ったが、書類整理すら望めないのか？」

「量にもよるし、早さを問わないなら…だな」

書類を種類別に整理するとかなら出来そうだが、それらを元に別の書類を起こすとなればまず役には立たないだろう。

「その分、武官だって言ってるんだし…賊退治や兵の調練で頑張ってもらえばいいのよ」

「なるほど、分かりました……さて次の条件を聞こうか？」

「…じゃあ三つめ、全呉将は俺に対する性的な交渉や誘惑の類を一切行ってはならない」

「えっ!？」

このセリフで残っていたエロンリークリーチャーが、ようやく元に戻った。

「仮に孫堅さんと俺がまぐわい、子が出来たら長男…風潮から言えば孫策以下三人の女兒は継承権剥奪…そこで巻きおこる、前夫の子を次期呉王に据えたい派閥対後夫の子で長男を次期呉王に据えたい派閥の争い…煩わしくないか？」

「…なるほどこの期に及んで実子だ養子だで呉を混乱させたくはないからな」

「更に言えば産まれた子が本当に孫呉の為になると言えるか？」

『お前は将来、呉を背負って立つ』なんて洗脳紛いのエセ英才教育なんぞ施したくは無い。

「そんなあ：長きに渡る疼きを、やっと鎮める事が出来ると思ったのに」

「初めての相手は呂堂って決めたのに：酷いよお」

問答無用の採用で、日照りの呉王とその長女がガツクリ項垂れた。視界の端では黄蓋殿：いや黄蓋さんも項垂れているんだが、ブルータスお前もか。

はいそこ、小さく『初めては呂堂にあげるから取っとくんだもん』とか言わない。

：誰が言ったかは、口調から推して知るべし。

「まあ俺には彼女がいるから、彼女達を裏切りたくないってのが本音だな」

重ね重ね言うが、俺には霞や理沙：恋と言った嫁（候補）達がいる。ここで呉将達から性的交渉を受け、乗ったりして致す事：それは嫁達を裏切る事に他ならない。

ともかくだ、俺は彼女達を裏切りたくないんだ。

……『彼女さんに許可を取れば良いのね？』って？

相手は洛陽の太守、董卓の配下で：更には幼帝も味方っぽいんだが：

ちなみにそこで目立たないように動揺してる周瑜よ、アンタも一緒にだからな？

距離が近いから、目が泳いでんのが丸わかりだぞ。

「はあ……次、条件その四：滞在期間のは基本的に三ヶ月が目処だが、契約の延縮は俺が決める」

今でこそ三ヶ月と決めたが、今後の経過次第では延長や短縮も十分にあり得るからな。

「やはり、最終的には旅へ出るのか？」

「まあな…やりたい事はあるし会ってみたい人もいるし、会ってみたいじゃなくて逢いたい人もいるからな」

ちなみにこの『逢いたい人』と言うのが、実は霞や理沙…恋であったりするが、気付かれてはいないようだ。

「…だがいずれにしても最低限、書き置きぐらいは残しておいてくれよ？」

「ああ、出る時にゃ引き継ぎ関連も文書化してやるさ」

「ふむ、良かろう…まだあるか？」

「んじゃ最後、真名の交換には応じられない…理由として、俺は客将だが…何かの因果で、後に敵対するかもしれない…その時に真名を交換した相手とは戦いたくないからな」

真名の交換は信頼の証。

真名を交換する相手とは、どんな理由であれ戦いたくはない。

俺の言葉を聞いて沈黙する一同。

雰囲気から察するに、賛成と反対が半々と言ったところか？

「……これがダメだってんならそれでも良いぞ？ 正直まだ路銀は

あるし、すぐにでも出発すれば良いだけの話だから」

…この後再びエロンリークチャーが出現したのは言う間でも無い。

＊＊回想終了＊＊

…ってな条件を定め、全て認可された。

エロンリークチャー達を捕獲、調理しないのかって？

…まだ先って事にしといてくれよ、色々あるから。

さて、そうして条件を付けた後…孫権と甘寧、それに黄蓋さんと手合わせをした。

孫権には楽勝。

評するなら『素直すぎるし、思考が固い』だな。

10合ほど捌き、デコピンで熨してやった。

戦いを見ていた黄蓋さん曰く『氣を併用した強烈な指弾じゃ…手加減しておらなんだら、権姫は頭蓋の中身をぶち蒔いておったかも知れぬ』と。

甘寧とは武器次第。

籠手と弓なら甘寧が圧勝、戟や氣技を使うと俺が圧勝する。

互いに得る物が多い…良い試合だった気がする。

まだ強くなれそうだ。

孫策曰く『やっぱり勘が働かない…呂堂と敵対したら、私死ぬかも』だって。

黄蓋さんとは引き分けだった。

約50m離れたところに立てた的を交代で射り、外したら負け…と言うルールで行ったが、結果として両者一射も外さず…25本の矢を全て射ち尽くした。

周瑜曰く『呉屈指の弓将と称される祭殿と引き分けるとは…戟・弓・無手・氣…正規将でないのが実に惜しい』って話だった。

そうやってその日を難なく過ごし、俺は床に就き…やがて朝を迎えた。

顔でも洗おうかと水場を探して城内をふらつく。

すると水場の前で周瑜と出会った。

「早いな呂堂」

「おはよう、周瑜」

「ああおはよう」

「こんな朝早くにどうした？」

「実はな、呂堂にも手伝って欲しい仕事が入ったんだ」

「俺に手伝って欲しい仕事？」

「ああ」

聞けば甘寧達（錦帆賊きんぱんぞくと言うらしい）が呉に降っている事を受け、江賊の中で覇権争いが激化しているらしい。

甘寧曰く『私達きんぱんぞくを蹴落として、江賊組織の統一を企む連中はたくさんいた』との事。

このままだと長江流域で江賊により被害が相次ぎ、呉の民が危険に曝される事になるとの事だった。

「だから三日後：長江流域を根城にする江賊の中で、現在最大の規模を誇る『愚連』を討伐する為に出発する計画を立てたんだ」

「ふむ、俺はそこで武官客将として力を示せば良いんだな？」

「そうだ：黄巾7万を单身無傷で討った『赤戟の竜巻』の強さを見せてくれ」

「へいへい」

行軍経路や兵構成の詳細、配置位置等は今夜行う軍議で決めると言う。

「と言う事なんだが、今日はどうする？」

「街へ繰り出そうかと思ってる：飛刃赤戟の手入れを頼める鍛冶屋か武器屋を探すつもりだ：あと、いずれ使うかもしれんから牙門旗が欲しいんだ」

牙門旗。

戦場において自身がどこに所属する将なのか、また自身が誰なのかを示す最たる道具。

この旗を汚す事はその旗が示す人物を侮辱する行為に他ならない。

…籠城してる敵将の牙門旗を火矢で焼いたりすると、相手によっては侮辱されたと…立場を忘れて飛び出してくる事もあると言う。

「牙門旗か…地布はともかく、呂の文字じゃだめなのか？」

「……………飛將軍を知ってるか？」

「飛將軍…呂布か？」

ほう、既に飛將軍Ⅱ呂布が通じるのか。
頑張ってるんだな、恋。

「そう、その呂布…アイツな、俺の従妹なんだ」

「何だって！？ あの呂布が従妹だと！？」

「ああ…戦績こそ俺より下だが、個人の武勇なら俺にひけを取らん」

「つまりお前と近しいと言う事か…なるほど、そんな飛將軍も…お前の従妹と言う事で、牙門旗は姓の文字で呂か…だが一つ疑問が沸いた」

「疑問？」

「飛將軍が呂布で、お前は呂布の従兄で武勇はほぼ互角…なのに何故、黄巾賊七万討ちの猛者が…今日まで名が知られていない？」

ああ、なるほど。

呂布Ⅱ飛將軍なら、その従兄たる俺はもっと知名度があってもいい

はず…って事か。

「そりゃ簡単な話さ…何故なら俺は、その七万討ちの際…誰にも名乗って無いからさ、もちろん友軍の将にもな」

呂堂^{おれ} 戦牙が黄巾賊七万討ちの武芸者だと知ってるのは、両親と師匠2人…それに恋と恋の両親、あとは洛陽のみんなだけだ。

孫堅さんですら、襄陽でやらかした戦績に基づく武勇しか知らなかったからな。

いくら周瑜が名軍師と言えど、知らなくても無理はない。

「つまりお前としては、従妹は間違いなく『呂』をあしらった牙門旗になると?」

「多分な…まあ間違える事は無いだろうが、断言は出来ない…仮に俺とアイツが同じ戦場にいて、あつて欲しくは無いが敵同士だった場合…敵味方問わず、間違われた場合は事だしな」

実は呂姓を持つ武将に『呂蒙^{りよもつ}』と言う人物もいるはず…記憶が正しければ呂蒙は呉将なんだが、昨日受けた将紹介では聞いていない。つまり現状は在野の将であると言う事。

他にも『陸遜^{りくそん}』や『太子慈^{たいしじ}』と言った将もいるはずなのだが…紹介されていないと言う事は、その2人も今は在野の将と言う事になる。

「それに長きを共にする牙門旗だ…意匠ぐらいはこだわりたい」

「なるほど…分かった、意匠が決まったら教えてくれ」

「おう」

「ではな」

言って周瑜は去って言った。

さて…さっきから、こちらを見据える視線を2つほど感じるんだが…どうするか。

「……とりあえず分かってるから、出てきたらどうなんだ？ 孫堅さんと、孫策のお二方？」

「えー？ いつから分かったのお？」

「私は分かってないと思ってたんだけどなあ」

言われて茂みから出てきたのは、髪に小枝や葉っぱを引っ掛けた孫堅さんと孫策。

「俺と周瑜の話に興味津々な気配が丸わかりだからな……で？ 母^お娘^{やこ}して政務をほっぽり出してこんなところに潜んで、何してんだ？」

「私は、その…お酒を買いに…」

「私は呂堂と一緒に城下を歩きたかったから」

「ちょ、母さん！？ そんな直接言わなくても」

「言い訳がましいじゃない？」

と、真っ正面から『俺と城下を歩きたかった』と言う孫堅さん…小

難しい話を嫌う彼女らしい。

「まあ俺は良いんだが、アレはどうするんだ？」

「アレって？」

「あれはアレ」

言って指差す先には、手に鞭『白狐九尾』びやうこきゅうびを携え…顔に鬼面を貼り付けた周瑜。

「…いつから？」

「気配が遠ざからなかったのを見る限り、多分最初からだろう…おおよそ、読んでたんじゃないか？」

「何を？」

「君らが政務をほっぽり出して、俺と城下へ繰り出す企みを練っている事を」

気が付いたのは、彼女らが茂みから出てきた辺り。

父さんを扱う時の母さんによく似た感覚を感じてたから、もしかとは思ってたが。

「じゃあ私はこれで…」

「私は急用を思い出したから…」

あからさまな逃げの姿勢を見せる2人。

だがそうは問屋が卸さないらしい。

―ヒュンッ！―

―シュルルッ！―

「あん」

「やだっ！」

周瑜が振るった鞭は、実に鮮やかに2人を絡め取った。
どうやら並んで立っていたのが災いしたらしい。

「脱走犯確保への協力、感謝するぞ」

「何、俺は元々一人で行く予定だったんだ…協力した訳じゃないさ」

女の買い物は長いし、男には拷問に近い物がある。
だからこそ買い物ぐらいは一人で行きたい。

「そんな…呂堂だけは私達の味方だと思ってたのに…」

「まさか冥琳側だったなんて…」

「人選を間違えたんだろ？　まあそれも王と次期王の宿命さ…諦めるこった」

言って背後で叱られる孫堅さんと孫策をその場に残し、俺は城下街へ向かったのだった。

伝記の27 刃 日々を過ごすのこと（後書き）

と言う事で、いわゆる拠点フェイズ的なお話でした。

そしてあえて表現するなら、周瑜にポイント+1…ルート確定が何ポイントかは知りません。

次回もお楽しみに。

伝記の28 理沙、見付けるのこと【番外編】

（理沙 視点）

私は姓を華、名は雄…字を牙遠と言う、洛陽は太守の董卓…いや、月様に仕える家臣。

真名は理沙と言う。

愛しの刃が洛陽を出て1週間が経ち、私と霞…もとい、張遼は…いずれ刃と再会する約束を胸に、日々を一生懸命生きている。もちろん、女を磨く事も忘れてはいない。

「どないや理沙、またちっと大きくなったで？」

「ふっ…私など三寸は膨らんだぞ？」

「何やて!？ くっそ…ウチ何てまだ一寸半しか膨らんでへんのに…」

ちなみに今は…調練で汚れた衣服を脱ぎ捨て、湯浴みをしている。膨らんだのはもちろん胸の事だ。

「だがまだまだだ…この大きさでは桔梗や紫苑には勝てぬ」

桔梗と紫苑と言うのは、先日この洛陽へ…私と霞を訪ねて来た、刃の師匠を名乗る2人の盟友の事だ。

桔梗…姓は厳で名が顔、字を竜胆と言う…豪快な雰囲気纏う、同性の私から見ても妖艶な女である。

紫苑：姓は黄^{こう}で名は忠^{ちゅう}、字は漢升^{かんしょう}と言う：子持ちには見えない若さを備えた未亡人。

「あの二人は規格外ちやうか？」

「規格外だからと言って諦める訳にはいかん：見よ、あのお二方を」

「お二方って：あゝあ」

言って私が指差した先を見て、霞がげんなりする。それもそのはず：我らの視線の先には、幼少ながら帝の血を引く幼帝の姉妹：劉協様と劉弁様がいらっしゃるからだ。

我らと同じく湯浴みをするだけなら良いのだが：

「くふっ、く：あん：」

「ひあっ：あっ、ふあっ：」

両小帝様は必死の形相で自身の胸を揉みしだいており、口からは時折嬌声が漏れている。

「なあ理沙、アレ：何やっとな？」

「月様が城下の書店で『豊胸指南』と言う題が付いた、如何わしい艶本を仕入れてな：恐らくは自身が試すつもりだったのだろうが、本自体が両小帝様に見付かり：あのご様子だ」

「何で両小帝がチチ膨らます必要があんの？」

「…我らと同じだ」

「……………は！？」

「刃に、だそうだ」

「…ウチは柔らかさを突き詰めよかな」

「大きさも大事だが柔らかさもか…ぬ、そろそろ逆上させてきたよう
だ」

「……………そう言うたらそうやな、ウチも上がるわ」

…この後、両小帝が逆上せて倒れ…詠^{えい}が拳骨を見舞ったのは言う間
でも無い。

さて、湯殿でそう言った騒ぎはあった物の…それから数刻の間は、
比較的穏やかだった。

数刻の間は…

「賈^{かく}駆様に申し上げます」

「どうしたの？」

「宮前に、当軍へ仕官したいと申す者が来ており…賈^{かく}駆様へ面会を
望んでおります」

「名前は？」

「は、呂奉先^{りょほうせん}と」

呂奉先：呂布だと！？

それは、もしや…

「その者、二つ教えてくれ」

「は、私めに答えられる事でしたら何なりと！」

「呂奉先の人相と容姿を教えてください」

「は、年の頃は15前後：身長は5尺半、赤髪で：手には槍らしき武器を有しております：性別は女性」

そこまで聞けば間違いないだろう。

今、仕官に来ている呂奉先とは恐らく：

「なあウチにも二個聞かせてや、ソイツ：どんな得物やった？」

「は、手になさった武器は柄が6尺の八角棍で朱色：穂先は4尺ほどの厚みのある偃月刀状剣と：半尺ほどの直刀槍、その基部に鎌状剣を備えておりました：色は穂先も朱色です」

「その偃月刀状剣の鎬に銘が入ってなかったか？」

「は、確か『飛恋赤戟^{ひれんせきげき}』と」

やはり間違いない。

「理沙！」

「分かっている、間違いない…その呂奉先、刃の従妹だ」

私達の話聞いた詠が顔色を変え、呂奉先を宮内に呼び入れた。
…横に並び立つ少女は何者だろうか。

「……………呂布、奉先…感謝」

「『私は姓が呂、名が布…字は奉先、この度はお会い下さり感謝します』と呂布殿は申していますです」

「…君は？」

「ねねの名前は陳宮ちんきゆう 公台こうだいと言う、呂布殿の傍付きなのです！」

陳宮とやらの口調と呂布の語り口を合わせて察するに、呂布は口下手で…陳宮がそれを補佐する、と言ったところか。

「呂布と呼んでも？」

「……………ん」

「どうして私達董卓軍へ仕官しよう？」

「……………刃兄じんにいに相応しい女になる為、でも訓練相手いない…お腹空く、お金ない……………聞いた、仕官…ごはん、お金、訓練…だいじょうぶ」

「『刃兄に相応しい女になる為ですが、訓練に適した相手がいない…そうする間にもお腹は空くし、お金も尽きる…しかし聞いたところ、仕官すれば食事は出るしお金も貰える…更には訓練も出来るから』と呂布殿は申しています」

刃兄…刃か。

つまりこの呂布が、嚴顔や黄忠の言う『恋^{れん}』なのだろう。

「呂布よ、貴殿は嚴顔や黄忠を知ってるか？」

「嚴顔…黄忠……ききよーとしおん？」

当たり、だな。

「詠よ」

「何？」

「こ奴の人為や腕前は私と霞が認めよう」

霞や桔梗、それに紫苑から聞く限り…こ奴は家族思いで、気は優しい…しかし無双の腕を持つ将格だ。

刃が言う通り近い将来、この洛陽が戦火に包まれると言うなら…こ奴をこのまま在野の将にするのは惜しい。

それに…

「…霞？　じゃあそっちが…」

「うむ、私が理沙だ」

こ奴は刃を共に愛でる同盟の盟友だ。

ならば一刻も早く打ち解け、刃の近況を引き出さねばなるまい。

「…分かったわ、当分の間は理沙の下に付ける事にするわ」

「……ん」

「貴女は今日から董卓軍将華雄の副官よ…刃の為にもしっかり頑張んなさい」

「ん！」

よし、詠が許可を出した。

月様の事だ…刃の従妹なら全幅の信頼を置くだろう。

…こう言う私に謀反の気があるように聞こえそうだが、その気は断じて無いと言っておく。

さて、そんな事を考えながら歩を進め…今は私の私室にいる。

「さて、刃から聞いてはいるが…改めて名乗ろうか、私は華雄 牙遠…真名は理沙だ」

「ウチは張遼 文遠…真名は霞、よしなに」

「知ってる、刃兄が言ってた…恋は呂布」

桔梗と紫苑から聞いた話では、恋は刃に初めてをあげたそうだが…

ふむ、刃の好きそうな体つきをしている。

「なあ恋、刃は今どうしとるんや？」

「刃兄は今、襄陽？ を旅してるって聞いた…恋も行きたいけど、次に会う時は恋がもっと…刃兄に相応しくなってから」

そうか、刃は襄陽はんじょうにいるのか。

襄陽と言えば樊城はんじょうぐらいしか思い浮かばない…後は、劉表りゅうひょうとその配下の将…黄祖わうその存在ぐらいか？

「刃兄の父さんが言った…恋がこのままだと、横に立つ刃がみすばらしく見えるって」

「……」

「……」

「だから恋は刃兄に相応しくなる、横に立つても刃兄がみすばらしく見えないように」

刃の父君よ、貴殿は素晴らしい教育者だな。

「なるほどな…なあ、恋」

「……ん？」

「刃の事、好きか？」

「大好き…恋、刃兄に女の子の大事な物…全部あげた…恋、刃兄に

だったら何でもする…」

と、真剣な表情でそう言う恋。

そんな恋を見て『これは手強い』と思わざるを得ない。

「ところで恋」

「？」

「恋はどんな腕前なんだ？」

これは聞いておく必要がある。

もし力を過信する猪武者なら、いずれ行うかもしれない愚行を…今の段階で潰しておこう。

「村で恋に勝てるのは刃兄だけ…んっ、はぁ…恋、刃兄がいないとつまらない…あんっ、んう」

「なるほど…個人的な武勇は自身にひけを取らないと言う刃の言葉、あなたが間違いはなさそうだ……なぁ霞よ、お前はさっきから何をやってるんだ？」

見れば霞は恋の後ろに回り込み、恋の両脇から手を差し込み…恋の胸を揉んでいる。

「何をつて…見たら分かるやろ？ 恋のチチを揉んどるんや」

「…何故だ？」

「…何となく？」

何となくで他者の胸を揉んで良い物か？

いや、霞は違ったな…紫苑の胸も揉んでいたし、眠りこけた桔梗の胸も揉んでいた…私だって何度揉まれたか…何を言わせるんだ！

「んあつ、ふあ…霞、ダメ…恋、切なくなる」

「ん…ウチと同じぐらいかあ、でも柔らかさはウチの方が上やな」

…頭が痛くなってきた。

刃、早く戻って来て…この混乱を鎮めてくれ。

その後、恋は単身で2万の黄巾族を討ち…その武勇を称えられ、飛將軍とあだ名される…董卓軍に仕える猛將となった。

ちなみに恋だが、刃に並ぶ大食漢である事が分かった。

陳宮曰く『恋殿が何かを食べる姿は、刃殿のお気に入りなのです』との事だったが…

「もつきゅ、もつきゅ」

「これも食べるか？」

「…食べる、ぱく…もつきゅ、もつきゅ」

…栗鼠りすのように頬を膨らませるその姿に、月様を含む董卓軍全將が惚けてしまったのは言う間でもない。

伝記の28 理沙、見付けるのこと【番外編】（後書き）

ようやく恋（呂布）が董卓軍に入りました。

ちなみに音々音（陳宮）は軍師となったのですが、その辺りは割愛しました。

伝記の29 刃、沈むのこと

く刃 視点く

「おっちゃん、その肉まん四つ…あ、焼売も十個頼む」

「はいよっ！」

蒸し上がったばかりの肉まんを片手に、焼売を口へ放り込みつつ…俺は城下町を練り歩いていた。

朝飯を食わずに出てきたせいか、腹の虫が泣き止まない。

仕方なく朝飯代わりに点心を摘まんでいるのだが、俺の腹の虫はそれで満足するようなヤワな虫では無かったらしい。

—ぎゅるるるるう…—

「イカンな、下手に食ったから余計に腹が空いてきた…食うべきでは無かったか？」

もっと寄越せと盛大に鳴く腹の虫。

洛陽なら『ラーメン大食い大会』とかが日常的に開催されていたのだが、やはり呉郡では勝手が違うようだ。

「……」

「……」

…視界の端で見え隠れする、桃色の髪をした2人には触れない事にする。

つか周瑜に捕まったんじゃないのか？

「お、武具屋みつけ…ごめんください！」

そんな2人から目を逸らすとちょうどそこに、武具屋を見付けた。軒先に『武器手入れ承ります』とあるから、多分大丈夫だろう。

「おう、どうした若いの！」

暖簾をくぐって声をかけると、上半身がムキムキと逞しい…某死神漫画の花火師の弟みたいな店主が出てきた。

「得物の手入れを頼みたいんですが」

「任せな、どんな得物でどんなにボロボロでも新品みたくしてやるぜ！ 物は何だ？」

「これなんです…」

言って方天画戟『飛刃赤戟』を手渡した。

「ほう…持ち主に対し細やかな配慮と工夫の凝らされた戟だな……斬った相手は、そうだな…見立てで8万前後ってところか」

「分かるんですか！？」

「たりめえよ！ それぐらい分からねえで何が武具屋だってんだ」

店主さん曰く、人の血と言う物は素人の手入れじゃ中々落とせず…落とし残した血はいつしか層となって堆積し、武器に風味と箔を持

たせるが切れ味は下げると言う。

「コイツの手入れをすりゃ良いのか？」

「頼めますか？」

「ああ：素人の手入れにゃ見えん手入れが施されてるから、二日もありゃ終わるぜ？」

2日か：周瑜の言う、江賊退治が3日後：ちょうど良いな。

「ではお願いします」

「任せろい！」

こうして俺は武具屋の店主に飛刃赤戟を預け、店を出た。

この世界の武具の手入れは料金が後払いになっていて、仕上がった武具に対し店主が基準となる仕事料を代金として提示：武具の持ち主は帰って来た武具の仕上がりを見て、代金を払うんだ。

：つまり良い仕事をする店なら、客の都合で代金に色を付ける事が出来る。

逆に大した仕事もせずに法外な料金を吹っ掛ける店もあるそうだが、この店なら大丈夫だろう。

「さて次は牙門旗だな」

自身がどこの軍に属する何と言う将かを示すのに最たる道具：それが牙門旗。

基本的に牙門旗とは1人じゃ建てられないぐらい大きく、それ故に曹操軍将『典章』^{てんしやう}は：その牙門旗を单身片手で建てた怪力無双の将として知られている。

だがこの世界の牙門旗は竿が木軸の直槍で、旗自体も風にはためきやすいよう薄手の布が使われており：全体的な大きさも総じて小さめとなっている。

ちなみにサイズは軸槍が長さ8尺の直径が1寸。

旗部も高さ4尺の幅2尺が基準。

重さはちょうど1貫だ。

「さて：意匠はどうしようか」

この世界の牙門旗は、意匠が至ってシンプル。

例えば呉軍なら赤い地布に白抜きで『孫』一文字の牙門旗を建て：その周囲に『周』や『黄』や『甘』の字を配した牙門旗が立つ：ちなみに周が周瑜で黄が黄蓋さん、甘は甘寧の牙門旗だ。

董卓軍なら紫の地布に白抜きで『董』を配した旗を軍将旗として『張』や『華』『賈』が立つ。

日本なら赤地布に白抜きで六銭を書くと真田軍、白布に黒字で『風林火山』と書くと武田軍の牙門旗を示すんだが：

「恋は多分赤布に黒字で呂の一文字だろうしな：隣に居るであろうねねも赤布に黒字で陳の一文字：…ん？どうしようか」

そうだ！

牙門旗は時に武器として運用する事もある。

だから竿が直槍なんだし：なら俺の牙門旗も、竿を方天画戟にしよ

う。

赤鉄鋼で方天画戟を作ってもらい、それに赤布に白抜きで呂の一文
字…

「うゝむ、我ながらイカすぜ」

そうと決まれば善は急げだ。

俺はさっきの武具屋へダッシュで引き返し、赤鉄鋼で飛刃赤戟と全
く同じ形（刃物としての切れ味は浅打程度）の方天画戟を注文した。
そうして次は布地屋へ行き、牙門旗として使う旗を注文。

幸いにも筆心高い店主らしく…イメージ通りの赤布に、見事な達筆
で白抜きの『呂』を書いてもらった。

「軸戟の完成も二日後…よしよし」

理想的なスケジュール消化にニンマリしつつ、更に町を練り歩く。

ほう、ここは雑貨屋か。

「見せてもらっても良いかい？」

「良いとこに来たねお客さん、ついさっき南陽から珍しい品が入っ
てね」

「珍しい品？」

雑貨屋の店主が言うには、何でも南陽のとある山の小さな祠に、あ
る日突然現れた物らしい。

「南陽の山の祠に、ねえ？」

「物珍しさに大枚はたいて行商から買ったんだが、買い手が付かなくて困ってたんだ…今なら価格は据え置きだから、良かったら買っ
て行っちゃくれないかい？」

「…とりあえず物を見せてもらえるか？」

「ああ良いだろう…これだよ」

言って店主が取り出した道具に、俺は言葉を失い…そして同時に我が目を疑った。

「まさか…どうしてこれがここに？」

「おやお客さん、この品が何かご存知で？」

「ご存知も何も、これは…」

言って俺はそれを手に取り、そして羽織る。

サイズもピッタリ…内ポケットに入った刺繍は『呂堂 刃』
後ろ首には短剣符（十）が入っている。

そう、紛れもなく“俺の”聖フランチェスカ学園の制服の上着だ。

「ならばこの革袋は何です？」

「これはバッグと言ってな…」

「『ばっぐ』ですか？」

「ああ、こうやって口を開いて…」

「おお！　こんなところに口が…」

バックル式の開口部を開き、俺はバッグの中に手を入れる。
するとすぐさま、自身の手に…懐かしい感触が伝わった。

「中に入っている道具を取り出す事が出来るのさ」

「こりゃたまげた！　こんな大きさなのに、随分な量の…こりゃまた見た事が無い道具が沢山入ってら」

俺はバッグの中身をチェックする。

筆箱、ノート8冊（内6冊が未使用）、ルーズリーフ3冊（内2冊が未使用）、ルーズリーフ用リフィルシート30枚組3パック、ポラロイドカメラ、充電池、ソーラー充電器、リフィルフィルムパック…ああ、全てがあの日のもまだ…

「ならこれは…やっぱり俺の練習用薙刀か」

「…へえ、これはお客さんの所持物だったんで？」

「ああ、十五年前に無くしたんだが…まさか出てくるとは」

これらは俺が日本で死んだ際に持っていた道具。
忘れられてるかも知れないが、帰宅中に死んだんだよね…俺。

「店主、これ全部買いたいんだが…いくらだ？」

いくら使っても良い。
そう思って店主に話しかけたんだが…店主から帰って来たのは思いもしない答えだった。

「差し上げますよ…料金は要りません」

「何だって？」

「見ればそれらは全て、お客さんが使うに相応しく…また、私どもには使えない道具でしょう…正直言うと保管場所を圧迫するだけのガラクタなので、引き取ってくれるとありがたいんですよ」

…なるほど。

1800年先で普及している道具が、この世界でまともに使えるはずは無いからな。
使えない道具に割く保管場所など、あったって一利も無い。

「ならありがたく頂戴する」

「大事に使ってやってください」

「おう！」

さて思いがけずとんでもない拾い物が出来たが、これからどうしようか。

まだ昼飯までは時間があるな…と、そんな事を考えていると…

「稟ちゃん、公衆の面前でも噴射するつもりですかあ？」

やけにのんびりとした声が聞こえてきた。

「風！ それだと私が毎日噴射しているみたいではないですか！」

視線を声の主の方に向けると、どうやら言い争いをしているのは小さな女の子2人組のようだ。

見れば片方は金髪で、眠そうな顔をして…頭には、どこかの万博で見た事がある…某太陽塔そっくりの何かを乗せた少女。

もう片方は眼鏡をかけた気の強そうな少女で、向かいの金髪の少女より発育具合が良い。

「毎日じゃないんですかあ？ 艶本を買って来ては読み耽り、登場人物と自分を重ねてはいかがわしい想像を…」

「そんな事するのは風だけです！」

…どことなく月と詠の言い争いを彷彿とさせるんだが…まあ良い…見てて和むし。

「そうですよ、風はその類いの知識に興味があるので…じゃあこの『幼馴染み誘惑・後編』はお預けですねえ…せっかく、主人公が幼馴染みと致すところから始まるのに…」

だが、和んで居られたのもそこまでだった。

依然として金髪の少女のんびりとした口調で言葉を話していたが、それを聞いていた眼鏡の少女が纏う雰囲気がいかに変わったのが分かった。

「おお、主人公のお兄さんは鬼畜ですねえ…幼馴染みが断れない

のを知っていて、寝台に押し倒して服を…」

金髪の少女が読んでいるのは、恐らく最近人気の官能小説だろう。

主人公に一途な恋心を抱く幼馴染みのヒロインが、その恋心が自分に向いている事を知っている主人公とにやんにやんする…砂糖を吐きそうなくらい、甘い官能小説だ。

「身を強張らせて耐える幼馴染みの服を、男の力に物を言わせて剥ぎ…一糸纏わぬ、生まれたままの姿になった幼馴染みに覆い被さり…限界までたぎったその太く長い怒張を、まだ未発達な幼馴染みの幼い蕾に無理矢理…」

眼鏡の少女がそう言った、次の瞬間だった。

「ブーッ！」

眼鏡の少女の鼻から、夥しい量の鮮血が噴き出して弧を描いて飛び…

「ぬおっ！」

—びちやびちやびちや—

俺の顔をめがけて飛んで来た。

「あ…」

俺の悲鳴を聞いて、金髪の少女がこちらを向く。

「……」

頭から爪先まで、眼鏡の少女の鼻血と思わしき血で真っ赤になる俺。
あっちの世界の道具……包装してて良かったぜ。

「すみませんお兄さん、風の連れが迷惑をかけたようで…大丈夫ですかしゅ？」

公衆の面前で血濡れとなった俺に、まだのんびりとした口調で話しかけてくる金髪の少女。

「いや俺は大丈夫なんだが、連れは危ないんじゃないか？」

「いつもの事なので大丈夫ですよ」

いやこの量の鼻血が日常茶飯事だって？
いつか貧血で死ぬぞ？

「はい稟ちゃん、トントン」

眼鏡の少女の首筋を手で叩く金髪の少女。
それを見ていて俺は……

『無傷のまま、血の池に沈んだ呂布の従兄……か』

そんな事を考えていた。

伝記の30 刃、仕返すのこと

く刃 視点く

「この度は私の悪い癖でご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした」

鼻血が止まり、意識を取り戻した眼鏡の少女がそう言った。

「いや、ただ血濡れになったただけだから気にしないでくれ」

「ですがお召し物が…」

町の側を流れる小川で鼻血を洗う。

元々髪も服も赤いから大して分からないのだが、顔とか肌はそうも行かない。

「どうせ客将用に支給された服だから、部屋に帰れば何着もあるから気にするな…にしても一を聞いて十を妄想し、それが原因で鼻血を…ねえ？」

金髪の少女の説明によると、彼女は知り合った時からこの状態らしく…二言三言、その類いの話題の単語を聞くと…すぐさま脳内がピンク色の妄想に入るらしい。

そしてそれが限界に達すると、鼻から凄まじい量の鼻血を噴くのだとか。

つまりさっきは『幼馴染みが断れないのを知っていて、寝台に押し倒して服を』と言う部分から、主人公が幼馴染みを寝台へ押し倒し

…服を剥いでから凌辱するシーンを頭に思い浮かべたらしい。

「想像力がとても豊かなんだな」

「滅相ありません」

俺は川の水に浸した手拭いを絞り、顔や体を拭き…また手拭いを浸してしぼり…を繰り返す。

と…

―ぺたぺた―

「おお、凄い筋肉なんです」

金髪の少女が俺の体をぺたぺたと触り始めた。

「どうした？」

「筋肉質なのに引き締まって、まるで鞭のようにしなやかな筋肉なんです」

「珍しいか？」

「はい…男性の裸を見て、触るのは初めてなのですよ」

―ぺたぺた―

言っとなおも触り続ける金髪の少女。

と言うよりずっと気になってる事があるんだが…

「随分と古い傷痕が、全身に沢山ありますね」

「ああ、鍛練で付いたり幼馴染みを庇って付いた傷…俺の誇りさ」

「ふむふむ…おや？ 肩甲骨辺りに真新しい引っ掻き傷が…この位置にこの形だと…なるほど」

この金髪の少女、頭に乗ってる某太陽塔の人形がさ…ペロキャン持ってるんだよ。

ペロキャンってこの時代、まだ無いよな？

…何？

背中傷は何だって？

…恋と致した時に、恋が引っ掻いて作った傷だよ。
まだ癒えてねえんだ。

そんな事を考えながらペロキャンを見ると、金髪の少女が言った。

「…風の飴、欲しいんですかあ？ 風の食べかけを欲しがるとは、お兄さんはお目が高いですね…でもこの飴はあげませんよ」

—ぱくっ—

ペロキャンを口にくわえる金髪の少女。

ペロキャン自体がデカ過ぎて、口に入ってるのは僅かな部分…よく落ちないなあ。

「…いや別に飴が欲しい訳じゃないが…そうだ、まだ名乗って無かったな…俺は呉の客将で、呂堂と言う…君は？」

人に名を訪ねる時はまず自分から、そう思い先に名乗ってから名を訪ねたのだが：

「ぐう」

金髪の少女は寝ていた。

：いつの間に？

「「寝るなっ！」」

思わずつつこんだのだが、奇しくも眼鏡の少女とツツコミが重なった。

「おおっ！ 麗らかな陽気に誘われてつい：にしても呂堂お兄さんもやりますねえ、稟ちゃんと同時にツツコミを入れるとは」

：ツツコまん、ツツコまんぞ！

この少女の口から『ツツコミ』なんて単語が出てきた事に関して、俺は絶対にツツコまんぞ！！

「私は戯志才ていしさいと申します」

「風は程立ていりつですー」

戯志才に程立だって！？

彼女らの口から出た、自身の名前に思わず絶句してしまう。

戯志才と言えば早期に亡くなり、曹操にその策略の手腕を惜しまれたほどの名手。

程立は後に程イクと名を変え、曹操に仕える軍師。

…まさか未来の曹操軍軍師と出会ってしまうとは。

「どうしました？」

「いや、何でもないんだ…気にしないでくれ」

「……」

う、疑われてるな。

切り返しが不自然だったし、未来の…とは言え軍師が相手なら仕方ないか。

「…お兄さんに聞きたい事があるんですよ」

そんな俺を見ていて程立が口を開いた。

ペロキャンはまた頭の人形が持っている。

「聞きたい事？」

「お兄さんは『呉の客将』と言いましたが、どれぐらいいるつもりなんですか？」

…視界の端に、未だにピンクの髪がちらほら見え隠れしてるんだが…言っているのか？

「当面は三月の予定だが、雇い主の態度次第では延短^{みつぎ}どちらもあり得る」

「その後はどうするんですか？」

「そのまま将として仕官するか、または流浪の旅に戻るか…あるいは客将の立場を長くするか…だな」

『将として仕官する』のくだりで嬉しそうな雰囲気醸し出す桃髪達、だが『流浪の旅に戻る』のくだりで悲しそうな雰囲気を醸し出す。

つかまず気配を消すか、立ち去って欲しいんだが。

「…なるほど」

「…君らはこれからどうするんだ？」

「私達ですか？」

「ああ」

三國無双と、俺が知る限りの三国志の史実を知識源とするならば…この2人はいずれ、かの臥龍と鳳雛に並び立つ軍師となるはず。だが今この時期にここ呉郡にいるとなると、まだ仕えるべき主を見付けていない事になる。

「私達は…世を学ぶ勉強の途中なので、しばらくしたらここを離れます」

「なるほど」

ふむ…そうか。

3日後の長江の江賊退治に知恵を貸してもらおうと思ったのだが、

引き留める訳にもいくまい。

ましてやいくら彼女らの名前が『戯志才』『程立』であるからと言って、本当に軍師とは限らない。

「……よし、服も乾いたな…じゃ、俺は城に戻るとするよ」

「そうですか…では風達は街に戻りますねー…稟ちゃん、行きましよう」

言って戯志才達は去っていったのだが、さて…

「…いつまでそうしてんだよ、そこのお二方？」

端から髪が生えた茂みの前に座り込み、そう言う。

「……いつから分かったの？」

「ほぼ最初から」

「じゃあ私達が街にいる時からって事？」

「何とか俺の視界に留まりつつ、目は合わせないように頑張ってたよな」

「そんなあ…」

—ガサガサ…—

項垂れて出てきたのは、やはり孫堅さんと孫策のデカメロン母娘おやこだった。

「何してんだ？」

「…そうよ、それは私の台詞よ…呂堂こそ何してんのよ！」

「そうよ！ あんな小さな女の子には肌を晒して…私達には見せてくれないくせに…それにその背中の傷、女の子とやった時に出来る傷でしょ！？」

「…は！？ 何が言いたいんだ？」

聞けば俺が方天画戟の手入れを武器屋に頼む前辺りで俺に追い付いたが、俺が戯志才の鼻血を浴びたぐらいで雲行きが怪しくなってきたと感じ…慌てて後をつけてきたと言う。

「背中にやり傷を作ってるクセに、私達に性的交渉と誘惑を禁じるなんて…呂堂って、あんなちんちくりんが趣味なの？」

「何の話だよ」

「好みの女の子の話よ」

「は！？」

「私達、自分の体つきが呂堂の好みにピッタリだって自覚があるんだけど…もしかしてナイチチで、それも年下が好みだったの？」

「ンな訳あるk…」

「そっかぁ…だから客将になる時の条件に『全ての呉将は性的交渉

や誘惑の一切を禁ずる』ってあったのね…」

「けど雪蓮？ それだとシャオや思春もダメって事にならないの？」

…コラてめえら、人の話を聞きやがれ」

女三人寄ればかましいと言うが、この2人は2人だけでも十分か
ましい。

—ガサガサ—

そんな2人をほっというて帰ろうとした時、そばにある茂みが揺れ…

「お兄さん」

立ち去ったはずの程立が姿を現した。

「おろ？ 程立じゃないか…街に戻ったんじゃないのか？」

「いえ、気になる言葉が聞こえてきたので戻って来たのですよ」

「気になる言葉？」

「はい」

言って程立は、自身に気付かぬままわいのわいのと盛り上がる孫堅
さんと孫策を見据える。

「お兄さんは巨乳の女性がお好みなんですか？」

「……は!？」

孫堅さんと孫策のデカチチ2人にはナイチチが好みと聞かれたが、逆にナイチチの程立からはデカチチが好みなのかと聞かれる俺。

「もしそうなら稟ちゃんはどうか？　稟ちゃんは見かけによらず、すごい物を持ってるのです…」

「風！　貴女は何を言って…すみません、呂堂さん…」

……風もあと二年あれば稟ちゃんには負けなくなると思うんですが」

言って程立は自身の体を抱いた。

ちなみに後半の『風もあと二年あれば稟ちゃんには負けなくなると思うんですが』の部分は敢えて聞かなかった事にする。

「ほらお兄さん、想像して下さい…あの上着に隠された、年齢には不釣り合いなぐらい発達した稟ちゃんの肢体…特に胸を」

言われて戯志才を見せられる。

いや想像して下さい…着衣のせいで見えてる肌が顔と手だけなのに、肢体を想像しろって？

いや確かに胸は衣服を押し上げてるが、元の線が見えない以上どうにもならない。

かと思いきや…

「呂堂さんは私の体が年齢以上の発育をしている事を知り、血走った目で私を見る…そして興奮が抑え切れなくなった呂堂さんは、嫌

がる私を羽交い締めにし：背後から私の胸をまさぐり、その巧みな指使いで私は何度も達する：しかし呂堂さんは胸だけでは満足できなかったのか、やがてその手を下腹部に伸ばし始めた：」

戯志才の暴走が始まっていた。

こりゃマズイ！

俺はとっさに戯志才の頭を後ろから掴み、顔を孫母娘おやこの方へ向ける。

「呂堂さんは私の股間部に手をねじ込み、穿き物の上から秘裂をこね回す：その激しい指使いに、私はまた何度も達してしまふ：そして気づけばお尻の辺りを呂堂さんの怒張が押し上げており、耐えられなくなった私は自ら：」

頭を掴まれても戯志才の暴走は止まらない！

「程立！ 俺の横に来い！」

「わかったのです」

言って俺の横に立つ程立：その直後。

「ブーーーーッ！」

ーびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃっー

戯志才の鼻から噴き出した、先ほどとは比べ物にならないほど大量の鼻血が：戯志才や俺達を無視して盛り上がっていた孫母娘おやこを直撃：

「ひあっ！」

「な、何これ…血？」

…2人はようやく我に帰った。

「ねえ呂堂、これ…血なの？」

「ああ、この戯志才の妄想癖からくる鼻血だ」

言って俺は程立と戯志才の紹介を行い、戯志才の悪い癖について程立と2人で説明する。

ちなみに孫堅さんは戯志才の止血を行っている。

「…なるほど、なら自己紹介しましょうか…私は孫堅 文台…そこにいる長女、孫策 伯符の母よ」

「孫策よ、宜しくね」

「程立です」

「戯志才と申します」

「孫堅様は…もしや江東の？」

程立が言うのは、史実にもある孫堅の二つ名『江東の虎』の事だろう。

「あら、私の古い二つ名を良く知ってるわね」

「いえ、風が言ってるのは『江東の虎』ではなくですね…『江東の雌豹』^{めひよう}と言う二つ名なんですけど」

江東の雌豹。

それは俺が付けた孫堅さんの二つ名。
欲しい男を物にする為なら、自身が呉王であつても色仕掛けすら辞さない性格と言動に由来する。

ちなみにこんな二つ名を付けた理由は俺に『赤戟せきげきの竜巻』なんて厨二臭満載の二つ名を付けてくれたから。
また、流通は今日からだ。

「江東の雌豹、虎じゃなくて雌豹…ぷぷつ、お母様にピッタリな二つ名ね」

言つて孫策が笑う。

その様子を見て額に青筋を浮かべた孫堅さん。
そこへ戯志才が追い撃ちをかける。

「雌豹、転じて男性を誘惑する女性の意…ではその大きな胸で、呂堂さんをも誘惑するんですか？」

うわ、事情を知らないからとは言え無情な一言だ。
おい孫策、そんな体を振るわせて笑うのを堪えなくても…

「…そうよ、この巨乳で呂堂を誘惑したのよ…けど呂堂は屈しなかったんだけど」

「え？ お母様、今の話…本当に？」

「本当よ」

まあ知らないのも無理は無いか。

襄陽乳出し誘惑事件：知ってるのは黄蓋さんと周瑜ぐらいだな。

「まあ良いわ：で、貴女が一を聞いて十を知る妄想癖を持つ戯志才なのね？ 想像力が豊かなのかな」

「うっ……呂堂さんにも同じ事を言われました」

「そうなんだ：あ、ねえ程立：それと戯志才」

「何でしょう？」

「貴女達って、立場上とりあえず旅人なのよね？」

「ええ、それが？」

「良かったら私の城に来ない？ 客人としてもてなすし、書庫も一部なら開放するわよ？ どうかしら」

：ヤバい事になって来た。

伝記の30 刃、仕返すこと（後書き）

稟と風の口調が落ち着かない。
しかも無理矢理感が否めない…

伝記の31 刃、氣を放つこと

く刃 視点く

さて、孫堅さんの気まぐれにより…程立^{ていりつ}と戯志才^{ぎしさい}の2人を城へ連れて行く事になり、城への道を歩く俺達。
その道中、孫堅さんが口を開いた。

「ねえ程立」

「なんですかく？」

「世を学ぶ旅って言ってたけど、賊とかは大丈夫だったの？」

「それは私も思ってたわ…程立も戯志才も、どう見たって戦向きじゃないし…武器だって持ってないでしょ」

孫策の言う通り、程立も戯志才も戦向きの体ではない気がする。
背は低いし線は細そうだし…とは言え似たような体躯の孫尚香が、
円月輪…つまりチャクラムを駆使して戦場を駆け回る武芸者なのだから、似た体躯と言うだけで武芸者説を否定する訳にも行かないが。

「風達の武器はここですよ」

「ここって…頭？」

「はいく」

程立がボソッと『いざと言う時は本で頭を叩いて昏倒させますが』

と言ってるんだが…本で昏倒する衝撃を出そうと思ったら、それこそ広辞苑級の本でなくちゃ無理があるんだが。

「頭が武器って事は、程立と戯志才達は軍師なの？」

「まだ見習いですし、大した策を献上した事などありません…ですが100名の義兵で600の黄巾賊を退けた事があります」

やはり程立と戯志才は軍師だったか…

「百で六百を退けたですって!？」

「兵力差が六倍の戦いに勝ったの!？」

「ええ…あれは常山郡でしたか？」

「そうです…溪谷を抜けた先にあった砦に籠っていた黄巾賊が相手だったのですが…」

聞けば黄巾賊の砦と溪谷の間には800mほどの距離があったらしい。

「まず溪谷の上に大岩を設置し、落石計を用意します…石を落とす係に弓を持たせ、溪谷の上に配置します」

次は溪谷の間に、枯れ草や藁束をタツプリと…ばらまくように設置する。

そして木の柵を作ってそれを溪谷の出口に敷設…この柵は人一人ならくぐり抜けられる隙間があるらしい。

「後は足の速い人を五人ほど選び出し、砦へ向かわせて黄巾賊を挑発：相手が打って出てきたら挑発役を反転させ、溪谷へ誘い込むんです」

挑発に踊らされた黄巾賊が溪谷に入るのを確認した後、黄巾賊の退路を塞ぐように落石計を発動。

この隙に挑発役は柵をくぐり抜け、武装を槍から弓へ変更。

同時に枯藁めがけて火矢をいかけ、落石に動揺して混乱した黄巾賊を焼殺する。

落石計を発動させた崖上組は、眼下で混乱の極みにある黄巾賊を上から射殺。

「こうして石に潰されたり、上からの矢に当たったり：火にまかれたりして大多数が減った後、柵を取り払い：三人一組で突っ込ませて、落石組も矢を射ちながら谷へ降りて突撃組と合流：残党を駆逐します」

「もちろん腕っ節の立つ武芸者がいたので、士気の面でも決して負けてはいませんでした」

なるほど、確かに効果的な策だな。

地の利を活かして一方的に相手を蹂躪出来る：勉強になるな。

程立が『星ちゃんは元気でしょうか？』等とつぶやいているが、誰の事だろうか。

「……ねえお母様、お母様は今の戯志才の話：分かった？」

「……私は分からなかったわ：呂堂は分かった？」

おいおい、一国を預かる国王とその娘で次期国王が：今の策ぐらい

理解出来ないでどうするよ!?

「つまり…谷の上に大岩置いて、谷の下に藁敷いて、挑発して、誘い込んで、大岩で逃げ道塞いで、火計と弓で数を減らして、後は武芸者と共に三人組と弓兵で残りを叩く…大筋はこんなところか?」

「はい、大筋はそんな感じですよ」

兵法つつうか策にはまだ疎い俺ですらこの有り様。

大丈夫なのかね?

あ、そう言えば周瑜が言ってたっけ…

『神蓮様と雪蓮は、軍師が苦勞して考案した策を勘の一言で取捨選択し…それなのに計略成功で見出だせるのと同じか、あるいはそれ以上の戦果を叩き出す…軍師泣かせとはあの二人の事を言うのだろうか』

…って。

勘で策以上…ニュータイプか?

元々の素質でって言うならコーディネーターか。

「じゃあさ、こんな戦況で勝てる手立てって何か閃く?」

「どんな戦況なんですか?」

戦地は長江岸辺。

敵戦力は1000。

自戦力は600、内50は水兵。

敵軍の練度は自軍より低い。

敵将は1人、自軍には弓将2人を含む5人の武将。

「準備期間は何日ありますか？」

「…二日ね」

「厳しいですね」

そりゃ厳しいだろう…普通、戦は準備が大事だ。

募兵・訓練・情報・練策・地理・食糧・装備・舞台構成・戦略…いずれも勝利には欠かせない要素だ。

「船は双方木製ですか？」

「…そうね、木製の船が一隻ずつ」

「ふむふむ、ならば…」

まずは弓将2人に弓兵10ずつを付け、敵船近くの岸の樹上や茂みに隠れる。

「長江の岸边には小さな林が多いので、弓将さん達はその林の木に登ると良いですね」

弓将2人と弓兵10人を除く、将3人を含む…水兵50以外の兵を、敵船近くの岸に隠れさせる。

「弓将さん達と水兵さん達以外の皆さんは、弓将さん達が隠れている林に伏せると良いかと」

次に水兵50を乗せた船に乗せ、油を染み込ませた大量の藁を満載

する。

「この藁には外部から火矢で着火出来るよう、船自体に細工を施しておきます」

そしてこの油藁満載の船を…闇夜に紛れて敵船めがけて走らせ、追突させる。

「追突の直前に水兵さん五十名には、船体後部から長江へ飛び込んでもらい…船を脱出して頂きます」

水兵50の脱出を確認したら、樹上の弓将達が火矢を放ち…船外から着火出来るようにした、満載の油藁へ火を付ける。

「無人の油藁船は敵船に深く食いついた状態にあるので、工兵でもない限り分離は難しく…互いの船は木造と言う事もあり、敵船は瞬く間に炎上するでしょう」

激突の衝撃で敵兵が負傷すれば良し、炎上した船で焼死すればなお良し。

「船を焼かれた敵軍は水兵では無いので、水中に逃げると言う手段は多分取りません…火による焼死を恐れ、あるいは沈む船に残留する事で起こりうる水死を恐れ…十中八九、岸边に向かうはずですから」

後は林に伏せていた本隊が敵船に向かい、炎上による混乱の最中にある敵軍を強襲…樹上の弓将の援護と共にこれを殲滅する。
火災で混乱している兵など敵足り得ない。

「…と、理想論で言えばこんな感じでしょうか」

そう言う戯志才に対し、俺はただただ感心していた。
あれだけの情報でこれだけの策を瞬時に練れるんだ…やっぱ軍師ってすごいな。

「…城に帰ったら冥琳に相談してみよつと」

って孫堅さん、丸っと採用ですか!?
貴女が考えた策じゃないでしょうに…

そんな事を考えていると、服の袖をくいくいと引っ張られた。

「あゝ、お兄さん」

「どうした？ 程立」

「……時にお兄さんは、氣を使えたりしますか？」

「……………はっ!？ 突然どうしたよ…程立」

「お兄さんを見ると、どうもそう聞かずにはいられなくなったのですよ」

言ってて程立はしかめっ面をした。

いや、確かに氣は使える…基礎も応用も、俺なりに技術として体現してるが。

「風？ 貴女、何を言って…」

「…使えると言ったら？」

「…願わくば、可能な限り全力の氣を見せて欲しいのですが」

可能な限り全力か…街中で可能な限りの全力…5%ぐらいか？

「良いだろう…はあああああっ！！」

—キイイイイ—

俺は右手の拳を顔の前で構え、そこに現段階で発揮可能な最大の氣を集めた。

「呂堂の右手が…」

「赤く光って…」

「ふっ！」

—ボッ！—

溜めっぱなしだと暴発するから、キリの良いところで球状に固め…

「猛虎蹴撃！！」

—ドオンッ！—

空へ向けて蹴り上げる。

雲を突き破り、天高く氣弾は飛んで行った。

「…ちなみに今の一発でどのぐらいの破壊力が？」

「攻撃に使ったとして、使い方もあるが…放たず殴れば大男が吹き飛び、放てば家一軒が倒壊するだろうな…今のは蹴り飛ばしたから、使い方としては後者だろうが」

ちなみに手で球状に固めず、足から直接放出する撃ち方もある。

俺のイメージとして『猛虎蹴撃』はこちらの方が近いのだが。

モチーフはベノムストライク…分かる奴いるんだろうか。

「攻撃に…と言う事は別の使い方もあるんですか？」

「治癒に使えば、風邪や下痢ぐらいならその場で癒す事が出来るかな」

ちなみに周瑜に使った治癒功は、練氣率60%ほど。

1回の瞬間最大放出量は練氣率75%だが、これを治癒功で使うと人体は耐えられないからな。

「回復率は四刻の休息で一割ってどこ…限界まで使いきっても、一日休めば十分に回復出来る計算だな」

「…凄まじいですね」

「まあな、苦勞して覚えた技だしな…その甲斐あって、全氣の九割までなら使っても問題は無くなった…で？ 俺が氣を使えたとして、程立とどう関係あるんだ？」

「……………どうやら風は、お兄さんに仕える運命にあるようです」

「は!?!」

どうやら俺は、頭がおかしくなってしまったらしい。
今、この程立は…俺に仕える運命にあると言った。

「最初は風の思い過ごしかと思ったのです…ですが今の氣の一件もあり、どう考えてもそうとしか考えられないのですよ」

「風、それってどう言う事？」

「…実は昨晚、易者に占ってもらいまして…面白い事を言われたんですよ」

「占い？」

程立は語る。

動乱の世、赤き国から…神の蓮から燃え上がる、空を裂くほどの強大な氣を宿した赤く強い太陽あり。
その太陽、動乱を鎮め吉日の世をもたらすだろう。

汝、その太陽を支え太陽が照らす道を共に歩まん。

「…と言う占いなんですよ」

「動乱の世に、赤き国から…神の蓮から燃え上がるって…ねえ？」

「空を裂くほどの強大な氣を宿した、赤く強い太陽…か」

神の蓮とは孫堅さんの真名『神蓮』の事だろう。
つまり赤い国は『孫呉』と言う事になる。

だとすると『空を裂くほどの強大な氣を宿した、赤く強い太陽』が俺で…その太陽を支えるのか程立と言う事になるのか。

…あれ？

程立って後の程イクの事じゃなかったか？

史実だと、曹操と言う太陽を支えて立つ夢を見たから改名したはずだったんだが…この世界の程立は占いの結果を受けて改名するのかな？

イクの字は『日』の下に『立』って書くんだしな。

「って事は、だ…程立は俺がその『空を裂くほどの強大な氣を宿した、赤く強い太陽』だと思ってる訳だな？」

「はい…武器の全てが赤く、かつ髪は赤…更には先ほどの『猛虎蹴撃』とやらは、雲を突き破り…正に天を裂く凄まじい威力を持つ氣の技…風の解釈は間違ってるんでしょうか？ それに…」

言って程立は、眼前にいる孫堅さんと孫策の元へトコトコと歩み寄り…

—ぐわしっ！—

—むにゅむにゅ—

「ひあっ！　ちょ、程立！…？　貴女、何を…」

「やっ、駄目…もっと優しく揉んでちょうだい」

おもむろに孫堅さんと孫策のデカメロンを揉み始めた。

孫堅さんとはともかく、孫策よ…『もつと優しく揉んでちょうだい』
って言いながら、頬を赤らめて俺を見るんじゃない…リアクション
に困るだろうが。

「お兄さんに仕えた風の周りが、こんなに巨乳だらけ…それでは風
だけが貧乳だと釣り合いが取れないですよ」

いや程立さん、それは生まれ持った物に対する…一方的な嫉妬と無
い物ねだりでは？

「風の小さな手指が孫堅さんと孫策さんの豊満な乳房を這い回り、
その乱暴な手つきに嫌がる孫堅さんと孫策さん…しかし揉まれ続け
る内にそれは強い快感へ変わり、更に強い快感を求め二人は風を巻
き込んで呂堂さんに襲いかかる…そして迫り来る三人の色気にあて
られ、歯止めの止められなくなった呂堂さんが…それまで傍観者だ
った私にも襲いかか…ブー…ッ！」

戯志才よ、君はこの状況から何をどうすれば5Pの乱交を想像でき
るんだ？

「だから風は決めました…これからしばらく孫堅さんのところでお
世話になり、旅立つまでにきつと大きくなるのですよ」

いや、決意は立派だが…得られるのは絶望の方が多いいんじゃないか？
何せ孫呉の将は巨乳揃いだしなあ…

「ぬおおっ！ 燃えて来たのです！ 頑張るのです！」

…言わない方が良いかな。

「あの…どなたか、トントンを…お花畑が、見えて…」

ああ、戯志才を忘れてたよ。

ちなみにこの後…

「くっ、この儂が…こんな女兒の手腕に…うんっ…気を、遣^やりそうになる…とは！」

「~~~~ツ！~~~~ツ！~~~~ツ！」

「待て、私にそんな気は…ひあっ…止めろと、あひいっ！」

…程立が皆のデカメロンを揉み比べ始めたのは言う間でも無い。

また上記の各嬌声（と書いてセリフと読む）はそれぞれ孫権・周瑜さん・黄蓋さんの物だが…どの嬌声が誰の嬌声なのかは、皆さんのご想像にお任せしようと思う。

伝記の31 刃、氣を放つこと（後書き）

ペタ神様の化身、脱ペタの為にデカメロン農園を強襲す…と言うお話でした。

次回は拠点フェイズ的なお話を書く予定です。

伝記の32 刃 意を決すること（前書き）

とある物品の名称、ルビが不安だ…

伝記の32 刃 意を決すること

（刃 視点）

「さて、今日みんなに集まってもらったのは他でもないわ：雪蓮^{しえれん}」

程立^{ていりつ}と戯志才^{ぎしさい}を迎え、長江の江賊『愚連』討伐を明日に控えたその日：孫堅さんは、みんなが集う玉座の間でそう切り出した。

「何？ お母様」

「：我、孫文台^{そんぶんたい}は：今この時を以て孫伯符^{そんはくふ}に宝剣『南海霸王^{なんかいほうおう}』を授け、受領を以て新呉王に任命する！」

「えっ？」

それは唐突な退位と新王の任命式だった。

史実の孫堅は黄祖^{こそうそ}の部下に射殺され、そのまま流動的に孫策へと王位を継承する。

しかしこの世界の孫堅さんは、黄祖討伐後に訪れるはずだった死期を俺が取り除いてしまっており：史実通りの死を迎えなかった。

だからこそこうして、このタイミングで呉国の様式に則った王位継承式典が行われ：何故か俺も立ちあっている。

「……………はっ」

言われた孫策は数瞬の間の後、孫堅さんが座る玉座の前へ移動：孫堅さんの前に片膝立ちで座り、深々と頭を下げる。

「我が名は孫伯符、呉王の命により今ここに宝剣『南海霸王』を受領し…新たに呉王の任を戴きます」

―チャキツ…―

「頑張りなさい」

「はいっ！」

ちなみに『南海霸王』とは、平原に伝わる『靖王伝家』と…今は所在地不明の『絶』と合わせて、天下三宝剣と呼ばれる希少な武器の事である。

『靖王伝家』は広めの刀身に施された美しい装飾が特徴で、実用剣と言うよりは儀礼剣と言った趣が強い剣。

『南海霸王』は樋の通った細身の刀身に、柄の先端にあしらわれた飾り紐が特徴的な戦い向けの実用剣。

『絶』は剣と言うより鎌で、その切れ味は天下三宝剣中最も鋭い…が、形状故に扱うのは天下三宝剣中最も難しい。

…靖王伝家が平原に伝わってる事から察するに、靖王伝家は三國無双における劉備のユニーク武器『蜀王』で…南海霸王は孫堅のユニーク武器『呉王』で、絶は曹操のユニーク武器『魏王』に代わる武器なのだろう。

「心得は分かったわね？」

「ええ、お母様」

「基本的な方針は変わらないけど、もし貴女なりに思うところがあるならみんなに相談しなさいね？ 貴女は呉王だけど、一人じゃないんだから…次は私の立場とかだけど…」

そんな事を考えつつ意識を前に向けると、孫堅さんが孫策に王としての立ち振舞いや心得を話し…また、自身の扱いについて話そうとしていたところだった。

例えば自身はもう戦場には立たない。

例えば自身はもう政には直接的な干渉はしない。

例えば自身はもう呉王ではない。

例えば自身はもう呉将ではない。

…などなど。

……む？

最後のって…何かおかしくないか？

「さて、呂堂？」

「む？ 何だ？ 孫堅さん」

「ああ、私はもう呉王じゃないから『孫堅さん』なんて呼び方はしなくていいわ…

「…じゃあ孫けん…」

…それと、私の事は『神蓮^{しえんれん}』と呼びつけにしてちょうだい」

「「「えっ?」「」」

神蓮：何度も耳にし、そしてそれに答える彼女の姿を目にしているから間違い無いと思う。

「それ、孫堅の真名だよな?」

「そうよ?」

…なるほど。

自分はもう呉王じゃないし、呉将でもない。
だから戦場に立つ事は無く、例え預けたとしても俺と斬り結ぶ事は無い…と。

あのな、孫堅。

その理論には穴があるぞ?

「…やっぱり、受け取れないな」

「ぶーぶー! 何でよ、私はもう呉の将じゃ…」

「なら聞くが、これから先…俺が孫策の率いる呉軍と敵対する事があつたりするかもしれないんだが、それでも孫堅は俺に真名を預けるのか?」

「…それって…」

「そうだ、例え孫堅が呉王でなくても呉将でなくても…娘たる孫策を斬りうる相手に、母としても真名を預けられるか? と言う話な

んだが」

「…」

俺の質問を聞いて、孫堅は黙り込んだ。

親として、子を殺した相手を許せるはずは無いし…ましてや、そうなりうる相手に真名を預けられるはずも無いからな。

「呂堂は…将来的に、私達の敵になるの？」

「…なりたくはない、が…今は分からない」

既に数日が経過したが、俺はまだ立場的には客将…それも3ヶ月と言う期限付きの。

客将の立場が終わった暁には、また客将で居続ける…野球で言う契約更新を行うか、またはそのまま仕官して正規の呉将となるか…あるいは呉を出て各地を見て回るか…いずれかになるだろう。

―チャキツ…―

そんな事を考えていると、首筋に当たる冷たい感触が2つ。

「…」

「…」

1つは真剣な顔をした孫策が持つ、南海霸王と…1つは甘寧が持つ大振りの曲刀。

視界の端では黄蓋さんも弓に矢3本をつがえ、俺に向かって弦を引き絞っている。

……将来の敵となりうる可能性がある芽なら、今ここで摘んでしまおうと言う腹積もりなんだろう。

「……………」

「……………」

程立と戲志才も固唾を飲んで見守っている。

「…将来の戦力候補なら機嫌を取っておけとか言うつもりは無いし、この対応はある意味正しいとも言える…が」

「……………が、何よ？」

「……………少し侮りすぎじゃねえか？」

「…この状況を覆せると、そう言いたいのか？ 貴様は」

首に当てた曲刀への力を更に強め、甘寧が凄む。

しかし…

「…出来るから言ってるんだが？」

—ギヤギヤッ！—

—ブンッ！—

—ガッ、キンッ！—

静動で練った氣を足で炸裂させ、その場で急激に高速回転する。
そして甘寧が持つ曲刀を首から離すように上体を移動させつつ、同時に回転の勢いを乗せた左の裏拳で玉座の間の端へ曲刀を弾き飛ばす。

「なっ！」

—ドンッ！—

「がはっ！ あ…」

その一瞬の出来事に怯む甘寧の鳩尾へ、回転運動からの掌底を叩き込み、玉座の間の壁まで吹き飛ばして甘寧の意識を刈り取る。

—ドサッ：—

崩れ落ちた甘寧をそのままに、次の脅威の排除へ移る。

—キュオオオ：—

「疾ッ！」

—ビュオッ！—

—ブツンッ！—

掌底を撃った際の回転の勢いがまだある事を利用し、手刀の形に固めた右手を振り：静呼吸で練り上げた氣を刃状にして発射、黄蓋さんが持つ弓の弦を切断する。

「何と！？」

弦を切断されると、弓は一時期に使用が不可能になる…これを利用して矢による遠距離攻撃を防ぐ。
ちなみにここまでが約1秒…後は…

―ババツ！―

―トツ…―

「あっ…」

眼前で南海霸王を突き付けたままの孫策の背後に回り込み、その首筋に軽く手刀を打ち込んで意識を刈り取る。

もちろん崩れ落ちる彼女を支える事は忘れない。

…甘寧はほったらかしたのに、どうして孫策だけ支えるのかって？
なんとなくだよ。

「…で、まだやるか？」

そうして…曲刀を弾き飛ばされ、気を失った甘寧と…弦を切られた弓を手に、齒噛みする黄蓋さんを見ながら言った。

これで諦めてくれればと思った…

「…じゃあ呂堂は、何をすれば私の事を真名で呼んでくれるの…？」

…んだが、帰って来たのは予想とは違うリアクションだった。

「……（ウルウル）」

見れば孫堅は目尻に涙を浮かべ、今にも泣きそうな顔になっていた。
…呉の孫堅は泣き虫か！

「…どうしても呼んで欲しいのか？」

「……（コクコク）」

…どこかで見たようなリアクションだな。

…ああ、恋だ。^{れん}

「……………はあ」

駄目だ。

ここ数日は程立や戯志才の手前、堪える事が出来たが…もう、限界が近い。

「……………分かった」

「じゃあ私の事を真名で…」

「明日の江賊討伐が終わった後、俺は呉の客将“のまま”一度洛陽へ行くわ」

…どうして？
それが私を真名で呼んでくれる事と、どう関係があるの？」

「いや正直、そろそろ理性と我慢が限界でさ…愛しい彼女達に助けてもらって、その上で自分の現状と孫堅の意思を伝えようかな…とね」

本当に限界に近い。

戯志才じゃないが、それこそ今なら他人の言葉は全てエロ方向に誤解釈出来る自信がある。

自分で慰めても良いんだが…この国には男に飢えた獣がおり、下手に又いてしまえば俺が挑発する事になりかねない。

それに俺、自慢じゃないが絶倫だし…

「やっぱり彼女が先なのね？ 分かったわ…それまで我慢する」

「よろしく」

「じゃあこの話はおしまい…冥琳、明日の戦の軍議に入るわよ」

「呉有数の敏捷性を持つ思春を一瞬で沈め、次いで祭殿を無効化…続け様に雪蓮まで鎮圧するとは…やはり正規将に欲しいな」

「…冥琳？」

「…いえ、分かりました」

…さあ、もうちょっとの辛抱だ。

頑張れ、俺。

伝記の32 刃、意を決すること（後書き）

次回、戦闘描写の予定です。

伝記の33 刃、語るのこと（前書き）

前回、後書きで『次回は戦闘描写の予定』と書きましたが…すみません。

書くべき事を書いている内に文字数が増えた為、急遽次回以降へ持ち越す事としました。

期待されていた方がいらっしやいましたら、誠に申し訳ありません。

伝記の33 刃、語るのいつ

く刃 視点く

明くる朝、俺は呉の軍勢に混じり…長江流域の住民に被害をもたらす江賊の一勢力『愚連』を討伐しに来ていた。

「全軍停止！」

先頭に行く孫策の号令を受け、全員が足を止める。

「ではこれより我らはここに陣を敷いて本陣とし、三里先の長江沿岸を根城とする江賊『愚連』の討伐に赴く！」

結局、あの後に行った軍議で…程立や戯志才考案の策が全て採用され、すぐさま準備に取りかかった。

軍構成としては、孫策率いる剣槍混成本隊が2000…軍師は周瑜。

右翼が孫権率いる剣兵130…軍師は戯志才。

左翼が孫尚香率いる槍兵100…軍師は程立。

別動隊その1が黄蓋さん率いる弓隊20…軍師はいないが副長が俺。別動隊その2として甘寧率いる水兵団が50…彼女らは今日の早朝から長江のやや上流に赴き、火計用の工作船を準備している。

「本隊及び右翼、左翼…そして弓隊は林に伏せ、思春水兵団の火計成功に備えよ！」

「小蓮隊から斥候を出して思春隊へ開戦を伝え、船を出すように伝えろ」

元来稼働可能な兵は600だが、ここには500しか連れて来ていない。

残り100は全員が周瑜隊で、本拠地の城で孫堅を守っている。

「上手く行きますかね？」

林に移動する左翼を見ながら、相変わらず眠そうな程立が俺に言う。

「いやいや、発案者は程立だろうに」

「ですがあれはあくまでも机上の理論：策を出すのは誰でも出来ますが、それを成すのは実際に戦地にいる人ですから」

「僅かな要因が様々な結果を生むのが戦場です：だから戦場は『人の意思が及ばぬ巨大な生き物』と呼ばれるんです」

俺の意見に対し：腰に小さな短剣を差し、眼鏡をクイクイしながら戯志才が言う。

眼鏡フェチのケは無いんだが、なるほど：くる奴にはくるかもな。オホン、なるほど：人の意思が及ばぬ巨大な生き物、か。

人員の有無、調練度合い、指揮官の能力、装備の質、士気：そして天候、地理、環境、時刻、タイミング：確かにその通りだ。

「お兄さん？ 移動ですよ？」

「ああ、今行くよ」

とりあえずは討伐作戦が無事に成功する事を願いつつ、程立に促さ

れて俺は…正面に『愚蓮』の船が見える、長江流域の小さな林に入
った。

〔黄蓋 視点〕

程立殿と戲志才殿の献策により、儂らは今日ここ長江に…錦帆賊きんぽうぞくが
無くなった後に勢力を増し、長江流域の民に害を為している江賊『
愚蓮』の討伐に赴いておる。

敵1000に対しこちらは500…単純に倍の相手と戦う、見た目
だけならば不利な戦じゃ。

しかし我らが軍師の冥琳は、呂堂が見出だした軍師見習いの人材…
程立殿と戲志才殿の考えた策を用いれば、この危機的状況を打破し
…かつ、大勝出来ると断言した。

ともあれ儂の役目は呂堂と、儂自身の部下の弓兵と共に戦場の近く
にある林の樹上に身を隠し…思春が行う工作を火矢によって火計と
して炸裂させる事…なのじゃが…

「…ぬぐっ…く…」

その、樹上に身を隠す為の準備段階で苦勞しておる。

子供の時分は童に混じり、木登りもやったが…今と昔では勝手が違
う。

身長や力などは昔より高く強い。

だからそれだけを聞けば木登りなど容易いと思われるじやろうが。

「くっ……く……」

昔と今で、身長と力以外に大きく違う場所。

それは女の象徴……つまり胸じゃ。

儂の胸は神蓮様曰く『歴代の呉軍女将の中で屈指の大きさ』との事。そう、儂はいわゆる巨乳なのじゃが……この胸が、意外にも木登りの邪魔になるんじゃ。

「……っはあ！ はあっ！」

胸を怪我せんように注意して登るから……たった1本の木に、それも地表から9尺ばかりの高さへ登るのに1刻もかかってしもうたわい。

「お疲れ様、黄蓋さん」

ようやく目的の高さに登った儂を出迎えたのは、枝に片膝を立てて座り……にこやかな笑顔を浮かべた呂堂じゃった。

「お主、早いもう」

「ガキの時分から割とやんちゃだったんで……遊び場と言えば野山だったくらいですから、木登りぐらいは造作ありませんよ」

言って呂堂は腰に提げた小さな袋から、黄色い干物を取り出した。

「食べます？ 俺の手作りですが」

「これは何じゃ？」

「皮を剥いて種を取った黄桃を、薄切りにして…蜂蜜と酒を混ぜた調味液に漬け込み、干した物です」

言われてその桃を手にとった。

見れば呂堂は、口に桃をくわえたまま…手元では鏝に薄い布を薄く布を巻いておった。

その布に油を染み込ませているのを見る限り、火矢を作っておるようじゃな。

時折口がモゴモゴと動き、口から出ている桃が徐々に小さくなっていくのが分かる。

「…どれ…ッ！ これは…美味しい」

一口かじって驚いた。

甘い。

いや確かに甘いのだが、嫌になる甘さではない。

「甘い物は疲労回復に良いんですよ」

呂堂曰く黄桃は甘味が強いが肉質が硬く、保存を利かせる為に干すのだが余計に硬くなるらしい。

それを酒に浸す事により柔らかくするのだが、酒だけに漬けると酒の風味が強く染み込んでしまい…果実としての旨味が無くなるそうじゃ。

そこに蜂蜜を加える事により、果実としての旨味を消す事なく…日

持ちする、美味しい食品になるとの事じゃった。

「まだ試作段階ですが、結構いけるでしょう？」

「うむ、この甘さだと強めの酒にも合うかもしれんな」

「ええ…ところで黄蓋さん」

「何じゃ？」

「黄蓋さんって単純な腕力だと俺より力が強いはずなのに、どうしてこんなに遅かったんです？」

「…それは、お主の好きなこれのせいじゃよ」

―むにゅっ―

言って僕は自らの乳房を指で突いた。

「大きいと男受けが良いと堅殿や策殿から聞いてはおるが、流石に想定外じゃ…まさか木登りの邪魔になるとは……む？ 呂堂、如何した？」

見れば呂堂は桃の先端をくわえたまま、左手で自分の鼻を押さえ…顔を赤くしておった。

「黄蓋さん…：乳房、服から零れてますよ」

桃を口に含んだ呂堂の言葉に目線を下げると、僕の大きな乳房が確かに…着衣から零れておった。

「む？ おお…っはっはっは！ 呂堂よ、戦前に良い物を見れたのではないか？」

「確かに眼福でしたが、勘弁して下さいよ…俺に彼女がいなかったら、襲うところですよ？ 俺は相手さえ良ければ野外でも及べるんですから…」

「ほう、ならば呂堂の目から見て俺は襲うに値する女なのか？」

「ええ、襲って良い状況ならそれが戦場であろうと…例えば樹上であろうと、容赦なく襲います…もちろん黄蓋さんだけじゃありませんよ？ 孫堅さんや孫策、孫権だって周瑜だってそう…美人で、かつ乳房の大きな女性が好みなんですから…俺は」

「俺は呂堂の好みなのか…そうかそうか…むう／＼／」

からかいのつもりで聞いたのだが、呂堂の口から帰って来たのは俺の質問を完全肯定する内容じゃった。

つまり呂堂は俺を、襲うに値する女として見ている事に他ならん。

…顔が赤くなっておるのが自分でも分かるわい。
年頃の生娘じゃあるまいし、何を今さら…

「…」

…とも思うのじゃが、自身には襲われるに足り得る魅力がある事を認識したのか…俺は呂堂の顔を見れなくなっておった。

「……なあ呂堂…もしお前が在野の、彼女を持たぬ独り者で…儂が伴侶のおらぬ、どこにも属しておらぬただの個人だとして…そのまま出会ったならお前は、儂を抱いてくれるのかの？」

「……抱きます、抱きたいです…傍に居たいし、手元に置いて大事にします」

儂の質問に対し、よそを向いて…顔を赤らめたまま、呂堂はそう言っただ。

…そうなのか。

「ならば儂ではなく、堅殿や策殿…権殿や冥琳だった場合はどうなんじゃ？」

「もちろん同じですよ…俺、巨乳好きだと自負してますから」

「巨乳………つまり尚香殿や思春は対象外じゃと？」

「……ええ、口が裂けても本人には言えませんしね…」

言って呂堂は小さく笑う。

呂堂は本人の知らぬ場所で、儂や冥琳の配下の女性兵から結構な人気があるんじゃが…一部の連中は、可哀想じゃが今のままなら落選じゃな。

「…呂堂の目から見て、儂はどんな女じゃ？」

「大らかで豪快、だけど面倒見が良く一途で、母性愛に溢れた…手に入れたら決して離したくない女性ですかね」

「嬉しい事を言ってくれおるわ／＼（久々に胸が高鳴っておるわ）」

儂を見た男はすぐに儂の事を年増だ大酒飲みだと、心ない言葉を口にするんじゃが…呂堂は違うようじゃ。

「呂堂、お前はこの先…世が乱世になったとして、動乱の世をどう渡り…何を成す？」

「…俺は自分が認め、認められた…好きな子達と幸せな家庭が築きたいんですよ…そこに黄蓋さんや孫堅さん、孫策や孫権…周瑜さんにいてほしいかなって思うんですよ」

それほどまでに想ってくれておるのか…ふむ。
…む？

「待て呂堂よ…今の言葉じゃと儂ら以外にも沢山の女子おなごを囲うつものがある…と、そう聞こえるんじゃが？」

「ええ、否定はしません…以前、言われたんです…『本当に“力”がある男なら、何人の女を侍らせてもいい』と」

なるほど、それは理に叶っておる。

女が子種を残したいと思うのは、身も心も強く…そして何より“強い”男が相手になった時じゃ。

そしてそんな男を相手取った時、傍にいる女は自身の存在の全てを賭けてその男を高めようとする。
ましてや近くに別の女が居ようとも。

それをこの年で心得ておるとは。

「ふはは、はっはっはっはっ！」

そうかそうか／＼／

なるほどな…ではこの状態こそ『陥落間近』と言う奴か。
儂もまだ女じゃったか。

「呂堂！」

「はい？」

「まず言っておく…儂はまだ処女じゃ」

「…」

「そして儂は呂堂、お前に惚れた！ この処女はお前の為に取っておく…この体はお前の物と心得よ！」

堅殿、策殿…そして呂堂が告げた、呉の『呂堂の好み』に該当する全ての者達よ。

済まん、この黄公覆…先んじさせてもらうぞ！

「黄蓋さん、それ…俺が客将となる際に決めた『全ての呉将は、俺に対する性的交渉や誘惑を禁ず』って言う誓約を破ってるんじゃない？」

「なあに、儂にとって覚悟はある…儂の交渉や誘惑で呂堂が呉を出るなら、それに倣い儂も呉を出るだけの事よ」

「ッ!？ ……分かりました、では俺も最初に言っておきます…俺の夢は大陸中の好みの巨乳の女性を集めて侍らせ、その全員を分け隔てなく愛し…楽しい人生を送る事…俺は欲張りですから、黄蓋さんの他にも…いえむしろ、呉の枠だけに収まらないほどの美女を囲うつもりで居ます…そんな俺でもいいですか？」

…美女を沢山侍らすは男の夢…呂堂はその夢を叶える為に、これから訪れる動乱の世を生き抜くつもりなのじゃ。

「良い！ 良く言った！ その意気やよし！ 男ならばそれを断言する方が逆に好感が持てるわい…とにかく俺は呂堂以外の男に靡く気はもう無いから、必ずもらってくれよ？」

俺が言うのと呂堂は真面目に、だが力強く頷いた。

「にしても剛毅な男じゃな呂堂は…呉の巨乳どころ全てばかりか、大陸中の巨乳美女が欲しいとは…これも呂堂の好み…

―たぶたぷ―

…っ」と

「ッッ！ まずは胸をしましましょう…そしてこの話はとりあえず後にしましょうか…そろそろ作戦発動の瞬間が近いでしょうから」
言われて俺は零れたままだった乳房を、服の中へしまう。

「はっはっは…うむ、この話の続きは勝利後の祝宴で聞かせてもらおうかの」

（孫策 視点）

お母様から呉王の座を受け継ぎ、新たに呉王となった私は…前から話にはあった長江の江賊『愚連』の討伐に来ているんだけど、実はそれは表向きの用件で…真の目的は別にある。

「…以上が、樹上で交わされた黄蓋様と呂堂様の会話内容です…詳細はこちらに」

「ありがとう、下がっていいわ」

「はっ」

私は思春隊の子から受け取った、呂堂の人為調査結果を読んで顔を綻ぼせた。

「雪蓮^{しえれん}、それは？」

「ああ冥琳^{めいりん}、これは呂堂の人為調査の結果よ」

「…私が見ても？」

「いいわよ」

言って私は冥琳に書簡を手渡した。

「…………ふむ、祭殿との会話で呂堂がこう言ったのか…」

「…どう思う？」

「普通に考えればふざけた内容だが、これが事実ならば私も身の振り方を考える必要があるな」

「…と言うと？」

「正直、この軍行において程立と戯志才の策は非常に効果的だ…そしてそんな有効な策を出せる人材を見出だしたのが、一騎当千の武勇を持つ呂堂なんだ」

そう…今回行う江賊討伐にて、大勝利を納める事が可能な策を出したのが…自身は一騎当万の武力を持つ呂堂に見出だされた、将来は有能な軍師になるだろう2人の少女。

「昨日の朝の玉座の間の一件はあれど、あれほどの力を持つ者ならば…敵対すれば厄介な事になる…」

思春も顔をしかめてたっけ…『まさか、あの状況を瞬く間に覆し…手も足も出ないとは』…って。

「ましてや呂堂は神蓮様しえんせんがお気に召されている男…そして幸いにも奴の好みには我々や神蓮様、それに祭殿や蓮華様も適合する」

呂堂の好み。

それは胸の大きな女性。

いま冥琳が言った通り、呉の名だたる将は私や冥琳を含め：胸が大きな子ばかりだ。

：シャオや思春は外れそうだけど。

「：そして私は呉を支える軍師と言う立場にある：呉の為になるなら何だってする：身体を求められたら差し出したっていい」

これは冥琳の口癖みたいな物ね。

『お前は表で正道を歩け：汚れ仕事は全部、私がやってやるから：だったかしら？』

「……だがそれ以前に私だって女だし、気に入られたら応えたい」

と、やや頬を染めながら饒舌に語る冥琳を見る。

冥琳の考えにあった『軍師と言う立場』のくだりはどうとして、気に入られたら応えたいと言う言葉には私も賛成。

「にしても祭にそこまでの覚悟があったとはね：」

「惚れた男の為には国すら捨てる：か、良い覚悟だ：国に対する不敬罪がどうこう言うより、同じ女として負けられん」

そう言って書簡を眺める冥琳の目には、明らかな闘志の炎が燃え盛っていた。

「雪蓮、今日ばかりは前線へ立つ事を認めよう」

「えっ？」

冥琳の口から出た言葉に、私は自分の耳を疑った。

いつもならお母様に『神蓮様は呉の王なのですから、立場と言う物をお考え下さい』と言う風に私も同じように戒めるんだけど、その冥琳が前線突撃を認可するなんて…

「どう言う風の吹き回し？」

「何、私が個人的に…呂堂の築く『呂堂の幸せの形』に加わりたいと思ったまでだ」

私を知る冥琳って基本的に恋より仕事…だと思ってたんだけど、思考に変化が出てきてるわね。

今までなら『私が結婚？ まさか…戯言を言ってる暇があるなら、竹簡の一本でも消化してくれ』と一蹴していた冥琳。

でもそんな冥琳がまさか『呂堂の築く呂堂の幸せの形に加わりたいと思った』だなんて…

「冥琳が呂堂の夢に加わる為に、どうして私を前線へ立たせるの？」

「…良いか？ 呂堂の夢に加わる為には多くの物と、それらを準備する時間が必要になるんだ…それは分かるな？」

確かにそうよね。

男に嫁ぐには色々な物が必要になる。

気持ちは元より家や立場、夫婦間の約束とか。

「うん」

「時間とは元来貴重な物：ならば、こんな戦ごときに時間を割く訳には行かない：ならどうするか？ この戦を手早く終わらせる：その為に、我らが軍勢で最上位の武力を有する者に前線で暴れてもらうのが、時間がかからない一番の方法と言う事だよ：そしてその『我らが軍勢で最上位の武力を有する者』が雪蓮と言う訳だ」

なるほど。

確かに私は難しい事を考えるのが苦手だけど、戦いの場において大暴れするのは得意。

賊徒300ぐらいなら1人で殲滅・完勝出来るわ。

「…それに」

「それに？」

「呂堂は私の命の恩人：恩人に対し、体を含めて持てる物全てで恩を返したいのさ」

言って笑う冥琳。

その顔は本当に楽しそうだった。

「じゃあ、私も参戦しようかしら」

「何だ？ 雪蓮も加わると言うのか？」

「ええ、私の勘が告げるの：呂堂は逃がすなって」

「そうか：だが私も手加減をする気は無いから、覚悟しておけよ？」

「面白いじゃない：私だって負けないんだから」

言って私達は軽く笑いあい、そして気を引き締めた。

まずはこの戦に勝つ。

話はそれからよ！

伝記の33 刃、語るのこと（後書き）

今回の話で刃と祭が食べた『蜂蜜酒漬けの桃』ですが、桃の解釈及び製法は架空の物です。

黄桃に対する認識は記述の通りではありませんし、作り方は違いますので悪しからずご了承下さい。

伝記の34 刃、癖を知ること

〔甘寧 視点〕

「甘寧様、孫策様より計略を開始せよとのご命令です」

「そうか…甘寧水軍、出陣」

私の姓は甘、名は寧、字は興覇。

今日は長江流域の民に害を為す江賊『愚連』を討伐する為、50人の水兵を率いて工作を仕掛ける任を帯びてここにいる。

元々私はここ長江で最高峰の江賊『錦帆賊』きんぽうぞくの頭領だったのだが…我らの力を呉に使わないかと言う孫権様のお心に打たれ…今はこうして孫権様の家臣として、江賊時代に連れ添った精鋭50人と共に『甘寧水軍』を預かっている立場にある。

「頭領」

「どうした」

「外套を」

「そうだな」

私は腰に提げた愛用の曲刀を抜いて逆手に持ち、部下から渡された漆黒の外套を纏う。

「…工作に抜かりは無いな？」

「はっ、万事整って御座います」

「よし、出陣だ…灯りを落とせ」

夜間の江上航行は思いの外難しく、我らであっても絶対は無い。だがそれは相手も同じ。

今回の作戦は、まず敵の本陣となっている船の係留地点の上流に…油を混ぜた黒の塗料で塗り、最低限の骨組みだけで破壊も簡単な無帆船を準備する。

次にこの船の船室に、油を吸わせた藁束を満載し…船壁に穴を空ける等の加工を施し、外部から火矢等で着火出来るようにする。

そしてその船に水兵50と共に乗り込み、離岸…無人の廃船を装いつつ、川の流れに乗り…敵の本船に自船が激突するよう高速で接近。船をぶつける直前に総員が離脱し、我らは水上に潜む。

同時に岸の林に伏した祭殿と呂堂が、激突した我らの船の油藁に火矢を射って着火する。

こうすれば敵船は炎上し、船内の敵は混乱に陥り…焼死と沈没を恐れて船外へ逃げてくる。

後は林の本体が突撃し、合流した我ら水兵と共に『愚連』を殲滅させる。

黒き外套に身を包むのは、作戦が夜間に行われ…闇夜と夜の水に紛れる為。

本来ならば孫呉の象徴たる赤衣のみを纏いたいのだが、国の為だ…我を通す訳には行かない。

「頭領」

副長の呼び掛けにより、この計略船が敵船へ激突する時間が迫っている事を察知する。

「……頃合いだな」

我らは元江賊だからと言うより、暗所での任務に携わる事も多く…その甲斐あって非常に夜目が利く。

だから宵闇の中にあっても敵船の位置は正解に把握出来るし、自船の速度から接敵までの時間の算出も可能だ。

「そのようで」

私達はこれから長江に入水し、江上に潜む。

時刻は既に夜…辺りは暗い為、黒の着衣は目立ちにくい。

「さあ、長江に真っ赤な華を咲かせよう…甘寧水軍、無音より静かに…だが矢よりも迅速に、長江の水へ溶け込め」

く刃 視点く

「…来たぞ」

「うむ、予定通りじゃ」

足元の林に孫策達を伏せさせたまま、江上を見ていた樹上の俺の目に…黒い廃船が江上を下ってきた。

廃船は見た目無人だが、その船首はまっすぐ敵船の方向を向いている。

「黄蓋さん、船体後部の中腹…丸い穴が見えますか？」

「見えておるわい…覗き窓に扮した穴、あれが火矢の的なんじゃない？」

船体には側面に3つほどの穴が空いており、本来なら船内の乗務員がその穴から外界を確認する。

だがその穴の中は乗務員用の船室ではなく…中身はただの部屋。それも、油を吸わせた大量藁束だけが安置された部屋だ。

加えて弓使いは夜間射撃もこなす必要がある為、夜目が利く。

…俺は弓使いじゃないだろうって？

仕込んだのは桔梗さんと紫苑さんだよ。

…闇夜に紛れて十数回、いや毎回修行の度に襲われそうになったが

な！

「…あの船は俺と孫権の指示で、辛うじて浮かぶ程度のボロ船にしましたので…愚連の船と激突すれば確実に壊れ、そのまま突き刺さるように愚連の船と噛み合います」

「その直後、儂と呂堂で目印の船室に積まれた油藁へ火矢で着火…愚連の船が炎上」

「はい…それを合図に全隊と合流し、混乱の極みにある愚連を殲滅する手筈です」

「うむ」

眼前には計略船の接近も気付かずに、内部から宴の雰囲気漏らす愚連の船。
そこへ忍び寄る計略船。

そして…

―ガゴォッ！―

―バキバキバキッ！―

計略船が愚連の船へ激突…計略船は先端から船体がへしゃげるように愚連の船へ食い込んだ。

「何だ!?!」

「敵襲か!?!」

「誰か見てこい！」

計略船の激突に驚き、愚連の中でもしたっばと思わしき男達が…今しがた激突して半壊した計略船に近付いた。

「今です！」

「……………射っ！」

―ヒュヒュヒュヒュヒュッ！―

俺の合図で黄蓋さん以下全弓兵が、その弓につがえた火矢を射る。樹上から放物線を描いて飛んだ火矢は、吸い込まれるように破損した計略船へ向かい…

―トスッ、トスストス―

「ぐあっ…」

「ガッ!？」

衝撃の正体を見極めに来た見張り2名を射殺。

同時に俺と黄蓋さんの射った矢が目印の窓から船室へ飛び込み、油藁へ命中。

―ボッ、シュボボボッ！―

―…ゴオオオオオオッ！―

骨組みに塗料と一緒に塗り込んだ油の力もあり、計略船は瞬く間に炎上…愚連の船は赤い炎に包まれた。

「うわあぁっ！ 火事だぁっ！」

「馬鹿な、ここは水上だぞ！？ 火なんか出な…なんだとっ！？」

「くそっ、消火作業急げっ！」

「駄目です！ 火の勢いが強く、火元まで行けません！」

「くっそおっ！ 運び出せる荷だけ運び出し、総員退避だっ！！」

まさに混乱の極み。

敵は頭目と思わしき男の指示に従い、これまでの戦利品と見られる資材の運び出しを始めた。

我先にと飛び出す愚連の構成員。

「総員拔刀」

それを見ていた孫策が、全軍へ拔刀を告げる。

「目標、長江江賊の愚連構成員…一人足りともにがすな！ かかれっ！！」

「「「うおおおっ！」「」」」

そして孫策の号令を受け、伏せていた林から兵達が飛び出した。

「敵襲！ 敵襲！」

「呉の軍隊だあっ！」

孫策の眼前にいた敵が、孫策の姿を確認して仲間に敵襲を知らせる。

「はあっ！」

―ビュババツ！―

矢のように飛び出した孫策は手にした南海霸王を舞うように振るい、出会い頭の愚連構成員に斬りかかった。

―ザシュツ！―

―ドスツ、ズバツ！―

1人はその左肩から右腰へ袈裟懸けに斬られ、また1人は右太股を刺されて動きが止まった所を斬首にされた。

「流石、孫堅さんの娘だな」

「堅殿は策殿を背負い、戦場を駆け巡っておったんじゃ…じゃから個人の武勇では策殿が堅殿に一番近い…とは言っても、まだまだ遠いが…のっ！」

―ヒュツ、ドスツ！―

言いつつ黄蓋さんは弓に矢をつがえ、孫策を背後から討とうとする敵に向かって発射。

放たれた矢は敵の心臓付近を正確に捉え、一撃で絶命させる。

「なるほど、ねっ！　じゃあ孫策は幼少から戦場の匂いを嗅いで育

った、っと！」

―ヒュッ！―

―ドスッ！―

―ヒュヒュッ！―

―ドスドスッ！―

弓兵は20人しかいないが、降らせる矢はそう少ない訳じゃない。俺は矢を射ち、程立や戯志才に近付く愚連構成員を射殺していく。

「∴（ぺこっ）」

俺の援護に気付いたか、程立が俺に向かって頭を下げる。

「∴（ひらひら）」

それに対し『気にするな』と言う意思を込めて手を振り∴

―ヒュヒュッ！―

―ドスドスッ！―

「ぐえっ！」

「ぎゃっ！」

また愚連構成員を2人、三途の畔へ送り届ける。

「本当なら俺も下へ降りたいんですがね」

「降りれば良からう」

「得物が得物ですし、混戦状態で暴れたら味方まで吹っ飛ばしちゃうんで」

俺のセリフを聞いて、黄蓋さんが俺の武器を見やる。

「…なるほど」

「それに今ちょうど甘寧が合流したんで、混戦の様相はなお強くなってます」

岸に続々と上がる黒マントの集団。

怒号に混じって微かに聞こえる鈴の音…甘寧に間違いないだろう。

―ヒュッ！―

ここに来てようやく俺達弓兵を見つけたか。

余所見をしている俺達に隙ありと捉えたか、愚連構成員の1人が岸边から…黄蓋さん目掛けて矢を放った。

「よっと」

―パシッ―

「むっ！」

放たれた矢は綺麗な弧を描いて飛来したが、黄蓋さんの胸に刺さる前に俺が掴み取る。

こんなお宝級デカメロンを傷物に、そして将来の嫁を亡き者にしようとは…

私刑で死刑が決定、大決定。

「死ね！」

―ヒュヒュヒュヒュヒュッ！―
―ドスドスドスドスッ！―

「ッ！？」

両目・喉・心臓・股間部に矢を射ち込み、ハリネズミにしてやる。
射たれた男は声をあげる事なく絶命、静かに崩れ落ちた。

「呂堂、お主…今、儂を助けてくれたのか？」

「将来の嫁さん、殺されたくないですから…」

「……（ぼん）」

言うのと真っ赤になる黄蓋さん。
やべえ、超カワイイ。

「うむう…ここが戦場でなくば襲うんじやが…」

是非とも襲わりたいですね。

と、そんな事を考える内に戦局は終盤へ。

程立と戯志才の指示により両翼が上がり、1000人いた愚連構成員は既に数えるほどしか居らず…更に彼らの母船は火計により、既

に長江の藻屑と化している。

「はあっ！」

敵陣中央で無双中なのは孫策。

全身を敵の返り血で真っ赤に染め、何故か恍惚の表情で剣を振っている。

「む…まずいのう」

そんな孫策を見て、黄蓋さんがボソツと言った。

「何かありました？」

「いや、策殿なんじゃが…」

「孫策が？」

言われて俺は眼下で敵を蹂躪する孫策を見る。

「何がまずいんです？」

「…血を浴びすぎじゃ」

「単身であれだけ斬り殺せば血濡れにもなりますって…俺だってそうでしたから」

もはや懐かしい思い出になりつつある、黄巾70000対俺。

「いやそうではない…策殿は『一定時間戦い続け、その身に一定量

以上の返り血を浴びると酷い興奮状態に陥る』と言う悪癖があつての」

「……なるほど、狂化癖があるんですか」

「うむ」

そう言われてみれば確かにそうかも。

相手を斬れば斬るほど孫策の恍惚とした表情は強みを増し、今じゃ強い色気を感じる。

「普通、相手が居なくなれば興奮は霧散するはずなんじゃが、策殿の興奮はあとを引くんじゃ」

「どれぐらい？」

「二刻と言ったところかの」

二刻、つまり30分。

30分も興奮しっぱなしだとヤバいんじゃないのか？

「鎮め方は？」

「………冥琳しか知らんのじゃ」

……なるほど、察した。

つまり百合的なアレで興奮を発散する訳だ。

揉まれて潰れてへしゃげる4つのデカメロン。

「…良いなあ、混ざりたいなあ…巨乳の祭典」

「混ざるって…呂堂、鼻血が出ておるぞ」

「ああすみません…って、声に出てました？」

「うむ…しかし、そんなに巨乳が好きならば言えば良からう…眼前に儂と言う巨乳がおるし、儂の胸なら、いや儂の体は呂堂なら…いつだって好きにして良いんじゃないぞ？」

何と！

黄蓋さんはそこまで俺の事を…ならば、と思ったのも束の間。

「敵将！ この孫伯符が討ち取ったわ！」

眼下では孫策が、愚連の頭目と思わしき男の首級を掲げ…ハキハキとした声で叫んでいた。

「孫策が敵将を討ち取ったみたいですよ？」

「後は策殿に任せるとするか…儂らは下がるとしよう」

「ですね」

こうして俺達は木から降り、林の傍に張った本陣へ下がった。
孫策のあげる勝鬨を聞きながら。

ちなみに今回の戦いは、敵軍死者713・負傷者256・逃亡者24・投降者5…孫策軍死者22・負傷者8と言う、まれに見る大勝

だった。

また孫策の興奮を鎮める為、周瑜がその身を割き…数刻の後、孫策が艶々になったのは言う間でもない。

伝記の34 刃、癖を知ること（後書き）

やはり薄い。

何が薄いつて戦闘描写が薄すぎる…しかも孫権と孫尚香、それに程立と戯志才が空気…

まだまだですね。

伝記の35 刃、休暇を貰うのこと（前書き）

無理矢理感が否めない。

しかも超ご都合主義的展開…だが後悔はしていない。

伝記の35 刃、休暇を貰うのこと

（刃 視点）

愚連討伐を終え、呉郡にある城へ帰って来た俺達。

「みんな、良くやってくれたわ」

玉座の前で一同に介した俺達を労う孫策と、その脇に立つ孫権。周瑜と程立、それに戲志才の3人は戦後処理に追われている為この場所にはいない。

ちなみに孫堅さんは玉座の間の裏にある別室で、中々に気ままな生活をしているとか。

「さて…これで戦い自体は一区切り付いたんだけど、呂堂？ ちよつと来てちょうだい」

「ん？」

そんな中、孫策が俺を呼んでいる。

「何だ？」

「貴方、愚連討伐の前に言っただけだと思っただけだ…一度、洛陽に行きたいって？」

「ああ、そうだ」

「どうして？」

「そりゃ…溜まったモノを発散する為さ」

正直ッらい。

どの位ツラいって、気が付けば孫策や黄蓋さん…孫権や周瑜を見て、脳内でそのデカメロンを収穫してる自分がある位な。

「……洛陽にいるって言う彼女にシてもらうの？」

「そう言う事」

俺はこのままだと野獣化するだろうし、そろそろ発散しなくちゃマジでヤバいんだよ。

しまいにゃ手を使わずフルオートで下着を汚す高等テクニクを習得しそうなんだけどな。

「私じゃダメなの？」

…俺に対して性的交渉や誘惑の一切を禁ずって言う誓約、もはや上辺だけの物になってないか？

「あのな、ちょっと軽視されがちに感じてるからもう一回言うが…俺に対して呉将がやっちゃいけない禁則事項、どうなった？」

「じゃあ祭は良いの？」

「どうしてこのタイミングで黄蓋さん？」

「たいみんぐ？」

おっと、思わず横文字が出ちゃったぜ。

「いや、どうしてこの瞬間に黄蓋さんの名前が？」

とも思ったが、さっきから甘寧の目付きが凄まじい事になってるのを察する辺り：愚連との戦いの際、俺と黄蓋さんの間に交わされた話が伝わってるんだろうと思う。

「つてああ、なるほど：そりゃ俺が告白して、黄蓋さんが受けてくれたからさ」

『儂はまだ処女じゃ』

『そして儂は呂堂、お前に惚れた！ この処女はお前の為に取っておく：この体はお前の物と心得よ！』

前世で17年。

今世で15年。

精神年齢としては32年生きてきたが、あそこまで実直で熱い告白は受けた事がない。

だがあくまでも“俺からの告白”と言う事にしておく。

「もっとも？ 俺に対する交渉や誘惑を禁ずるってだけであって：俺からの交渉は禁じていない訳だが」

「何よそれ、言い訳じゃない！ 祭？ 貴女本当に呂堂からそう言った交渉：いえ告白を受けたの？」

言って孫策は、ニヤニヤとしたままの黄蓋さんをみやる。

「おう、受けたぞ？　愚連討伐に赴いた際、呂堂へ戯れに聞いたんじゃない」

「『…呂堂の目から見て、儂はどんな女じゃ？』でしたか？」

「呂堂は何て答えたのよ？」

「『大らかで豪快、だけど面倒見が良く一途で、母性愛に溢れた…手に入れたら決して離したくない女性ですかね』と言ってくれたわい」

マジで良い人だと思ったね。

年上？

年上の何が悪い。

大酒飲み？

大酒飲みの何が悪い。

「そして黄蓋さんは、そんな俺の気持ちに…こう答えてくれたんですよ」

さあ黄蓋さん、俺を落としたあのセリフ…今こそカモン！

そう思い黄蓋さんを見ると、黄蓋さんは俺を見て頷き…

「儂にとって覚悟はある…儂の交渉や誘惑で呂堂が呉が出るなら、それに倣い儂も呉が出るだけの事よ」

…と、あの時と一字一句違わぬセリフを笑顔で言ってくれた。

グッジョブ黄蓋さん！

「「「ッ!？」」」

黄蓋さんのセリフに、息を飲む孫策・孫権・甘寧の3人。
甘寧から殺気を感じてるけど、ンなモン知るかい！

「これだけの返答をもらった…だからこれが性的交渉や誘惑だと認識されて、俺が呉が出る事になったら…黄蓋さんは貫って行きますんで」

「待ちなさい！」

―バアンッ!―

とここで、隣室と玉座の間を隔てる扉を開け放ち…初代エロンリークリーチャー孫堅さんが登場。

既に半泣きなのは、今までの一連の話を壁越しに聞いてたからだろうか？

「お母様!？」

「祭…貴女だけに呂堂は渡さないわよ!」

「堅殿？ それはと言う…」

見れば孫堅さん、その手には中ぶりの袋と酒甕を提げ…どう見てもよそ行きの服を着ている。

「私だって呂堂の事を愛してるんだもん!」

言って孫堅さんはその素晴らしいデカメロンな胸を張り、声高に宣言する。

背景に『ドーン！』と言う擬音が文字となって幻視出来るぐらい、素晴らしい宣言だ。

「それに私、呂堂に性的交渉をしたり誘惑したりするのに制限無し」

「お母様？ それはと言う事ですか！？」

「私、貴女に王位を授けた際に言ったわよね？ 私はもう呉王じゃないし、呉将でもないって」

…なるほど。

確かに言ってたな。

今後の立場の辺りで。

「だからって…」

「なら雪蓮、貴女は我慢出来るの？ 私と同じ『狂化癖』を持ち…戦で昂った性欲を鎮める事を」

「それは…」

「昨日だって冥琳に助けてもらったんでしょ？ 呂堂だって同じ事よ…ただそれが呂堂の場合、洛陽にいる彼女さんってだけの話よ」

「お母様はその理由で、祭が出ていくのを許容するの！？」

「出て行ってほしくないなら、呂堂の洛陽行きを認めなさいな」

「うぐっ…」

流石は三児の親、言う事が違うわ。

言われて苦虫を噛み潰したような顔になり、眉間に皺を寄せて黙り込む孫策。

そんな孫策を見ながら孫堅さんが口を開いた。

「ねえ呂堂」

「はい？」

「ここ呉郡から洛陽までって結構あるんだけど、往復でどれぐらいかかるかしら？」

「使い潰すつもりで馬を使えば、馬にもよりますが二週間程度…ですが技を使えば、全速力で10日ってところでしょいか？」

氣を体外へ放出する氣技を総じて発氣功と呼んでるが、その発氣功を足から行えば…移動速度は生身で馬のそれを越える。

「技？」

「孫堅さんも見たでしょ？ 俺が氣を空へ撃ったあの技を」

「ええ」

「あれを、走る際に一步毎…足から放ちながら走るんですよ」

正直な話、100m6秒フラットなんてチョロいチョロい。

「なるほど、そうすると馬より速いわけだ」

「そうです」

「……じゃあ呂堂は、洛陽行きを認めたら…祭を連れて行かず、かつ戻って来てくれるのね？」

「ええ」

それに正直な話、この世界の呉将には…まだ会った事が無い武将がいる。

彼ら…いや彼女らがどんな人物かは気になるところだ。

「さあ雪蓮、どうするの？」

「…分かったわ…それに呂堂には、計略発案人材の発掘と…弓による火計炸裂補助の功劳もあるから、今日から15日の休暇を与えるわ」

「分かった、ありがたく頂戴する…んじゃ早速行ってくるわ」

＼孫権 視点＼

「分かった、ありがたく頂戴する…んじゃ早速行ってくるわ」

言って呂堂は嬉々として玉座の間から出ていった。

それを見送って祭も玉座の間から立ち去り、私は祭がいなくなるのを見計らって口を開いた。

「お母様」

「あら蓮華、どうしたの？」

「お母様が呂堂を愛している、と言うのは本当ですか？」

「嘘を言ってどうするの？」

お母様の目は真剣その物…と言う事は、お母様は本気で呂堂が好きだと言う事になる。

「…お姉様は？ あそこまで呂堂に執着すると言う事は、お姉様も呂堂の事を好いてるのですよね？」

「私？ 私は…半々かな？」

「半々とは？」

「確かに呂堂は魅力的で、好きって気持ちはあるんだけど…呉の後継ぎの為にその血を取り込まなくちゃって言う…何て言うの？ 責任感…みたいな感情もあるのよ」

なるほど。

女としての自分を取るか、呉王としての自分を取るか…その狭間で葛藤している、と言う事か。

「じゃあ逆に聞くけど、蓮華はどうなの？」

「私ですか？」

私は…どうなんだろう。

確かに呂堂は身なりも風貌も良いし、強いし…そこそこ頭も回るし、他者の才を見抜く観察眼もある。

けどそれが好意に繋がるか…と言えば、首を傾げる他は無い。

「私は、分かりません」

「分からない？」

「はい…確かに呂堂はお母様やお姉様、冥琳や祭が気に入るほどの人材でしょう…しかし、私は私…私も呂堂には好意的ですが…それでもまだ恋心を、とまでは行きません」

「思春は？」

お母様の問いかけに、思春の表情が険しくなる。

「私は反対です…あんな、女一人のみを愛する事が出来ないような男に私は靡きません」

ちよっと思春、姉様の前なのだから殺気を抑えなさい…背筋に寒い物を感じるわ。

「それにもし神蓮様が呂堂とそう言った関係になった場合、私はあの男を様付けで呼ばなくてはなりません：私には耐えきれ自信がありません」

「そうよね：まあ流石に今から私と呂堂が恋仲になって、結婚なんて事になったら：雪蓮達は呂堂の娘になる訳だから、私自身も考えて動かなくちゃならないんだけど」

：それはそうね。

私達3人はお母様の実子で、お母様は未亡人。

子が居る状態で再婚すれば、私達は再婚相手の娘となる。

再婚相手が呂堂なら、私は呂堂を父と呼ばねばならない：ただけないわね。

「ともかく、呂堂が帰ってくるのを待ちましょうか：」

（刃 視点）

「ほっほっほっほっほっほっ…」

踏みしめる足で氣を交互に炸裂させ、人外で速度で荒野を疾走する俺。

実のところこの氣技を使えば、洛陽までは2日あれば十分だったり

する。

じゃあ何であんな長い所要時間を言ったかって？

決まってんじゃないん：霞や理沙と、少しでも長く一緒に居たいからさ。

「コンパスでもあれば楽なんだが、仕方ないか」

見送りに来てくれた黄蓋さんから貰った地図を片手に、呉郡↓合肥↓赤壁↓南郡↓襄陽↓南陽↓洛陽と言うルートを走る。

なるべく山林や溪谷を通ってるから、例えこの速度で走ったとて騒ぎにはならないはずだ。

「流石にこの時代、山間に州境の関所は無いよな：よしよし」

ちなみに現在地は南郡中部。

たまたま見付けた村で聞いたから間違いない。

「：もう少し北上したら、宿を探すかな」

と思った矢先の事：眼前に見える開けた場所に、行軍による大量の砂塵が確認出来た。

「軍か？ 牙門旗は：あれ？」

眼前に見える軍勢は、金色の鎧を身に付け：旗印は『袁』と『張』の文字。

「張を従えた袁の旗：誰だ？」

袁と言えば袁紹：だが袁紹なら文醜と顔良が随伴するから『袁』の

他に『文』と『顔』の旗が並び立ってるはず。

「そうか、袁術か…にしても張って誰だ？ 袁術なら随伴は紀霊だから『紀』の旗のはずなんだが」

…まあ考えても仕方がない。

とりあえず俺は袁一行を無視して迂回し、ここ南郡で最北端の村を探しに向かった。

だがこの袁一行を無視した事が、後の俺にトラブルとなって降りかかる事を…当時の俺は知る由も無かった。

伝記の35 刃、休暇を貰うのこと（後書き）

さて、あのお方が名前だけ登場しました。

登場タイミングだけを見ると、とある事件が予想されそうですがご安心あれ：あのお方は没しませんので。

次回、刃が野獣化します…と言っても明確な描写はしませんが（笑）

伝記の36 刃、爛れること（前書き）

タイトルから本文の内容が想像出来るでしょうが、敢えてノーコメントとさせて頂きます。

…ある方が喜びうるネタを使っただんですが、私とはベクトルが違うやもしれません…反応や如何に…ニヤニヤ（笑）

伝記の36 刃、爛れること

（刃 視点）

前回洛陽を出てから既に1週間ほど経つが、帰ってきて実感した。

「洛陽は平和だ…」

出た時は宮だった建物が城になっている以外、特に変わった様子は見られない洛陽の城下町。

とは言っても、たかが数日で宮を城に変える建築力には目を見張る物があるが。

城に続くメインストリートの一角の、華雄：理沙が良く立ち寄る屋台の軒先で、香ばしい匂いを立てる麻婆豆腐を頬張りながら思う。

つか以前、洛陽を出る際に『次に会う時は乱世』とか言った気がするが…撤回すべきだな。

「もぐもぐ…これで反董卓連合なんて結成されたら、断固戦うべきだな…んぐっ、おっちゃん！ その肉まん三十個を包んでくれ…で、お勘定」

「あいよっ！ 毎度ありっ！」

この街に来た直後、門番との間にちょっとしたいざこざがあったが…詰所にいた上司が俺の事を覚えていたらしく、すんなりと通してくれた。

どうやら昨日配属となった新人らしく、張遼：霞の隊員との事。

上司曰く『刃殿から得た教訓を元に、あらゆる事に対して冷静な判

断を下せるようにしています』との事だった。

中々頑張ってるじゃないかと思う。

さて、そんな平和な洛陽の市街地で俺は奇妙なツレと行動を共にしている。

「クーン…ハッハッハッハッ」

それがこの犬。

見た目ウェルシュコーギーのようだが、尻尾があるからペンブロークではなくカーディガンのようなのだ。

首には赤いスカーフを巻いており、つぶらな瞳で俺を見上げている。見上げているのだが、視線は俺が手にした肉まんの入った包み。

「食いたいのか？」

「ワンッ！ ハッハッハッハッ」

犬に肉まん食わしちゃダメだったような気がするが、細かい事も気にしちゃダメな気がする。

何より可愛いのは正義だ…動物も、もちろん女の子も…ちなみに俺の中では巨乳の美（少）女こそ最強だが。

眼鏡？

周瑜や戲志才級の美（少）女なら文句は無い。

特に周瑜の眼鏡が最強だと思う…あれでビジネスライクなスーツを着て教壇に立てば、立派に眼鏡の巨乳美人教師で通じる。

そして放課後、出来の悪い生徒とマンツーマンで秘密の課外授業…

『フフ、たくさん出したな…私の顔、特に眼鏡がドロドロになったぞ？ 私のコレはそんなに良かったのか？ まだ出したいのか？ そうか…さあ次はどこに出す？ また顔か？ コレか？ 口か？ それともいよいよ本番か？』

眼鏡クイクイも良いんだが、俺は眼鏡を汚す方が好きかな？
じゃあ次は本番で…

………

………

…

「って…馬鹿か俺は！？ あのデカメロンによって溜まったモノを
発散しに帰ってきたのに、まだあのデカメロンに発情しようってか
！？」 しかも眼鏡ドロドロって…」

「クウン？」

ひたすらピンクな妄想を膨らます俺だったが、足元のコーギーの鳴き声で我に帰る。

「ああ、スマン…ホレ、食え」

言って俺はコーギーを抱き上げて肩に乗せ、肉まんの皮を剥いて中の肉餡を差し出す。

「はぐっ、はぐはぐ…ごくっ…ハッハッハッハッ」

「すげえ、一個分ペロリと行ってまだ食うか」

「はぐっ、はぐはぐ…ごくっ」

俺の背にある飛刃赤戟の柄と朱雀（格納機構搭載型の弓）に後ろ足をかけ、尻尾でバランスを取りつつ器用に食うコーギー。

「…ッ！ ワンワンッ！ ハッハッハッハッ…ワンワンッ！」

かと思えば突然俺の肩から飛び降り、真っ直ぐ走り出した。

「ちょ、待ってって」

そんなコーギーを慌てて追いかける俺。

洛陽の市街を右へ左へ走り、たどり着いたのは大きな…屋敷と称してもおかしくはない家。

そんな家の門の前に佇む、赤髪の少女の足元で立ち止まるコーギー。

「セクト…」

「ッ!？」

その少女がコーギーを抱き上げ、コーギーの名前らしき単語を呟いたのだが…その名前より、少女の姿勢好に思わず息を飲んだ。

俺と良く似た赤髪に、触角に見える2束のアホ毛。

臍気に見えるが、実は意思の強い朱目。

全体的に引き締まった体躯だが、胸だけは自己主張が激しい。

俺より頭1つ低いが、同世代の同性の中ではかなり高いと思われる身長。

そして、その背には『飛恋赤戟』の銘が入った朱色の方天画戟。

こんな格好をした少女を、俺は1人しか知らない。

「……恋^{れん}？」

「ッ!？」

俺の呼びかけに対し、少女は俺の方を向いた。

「…刃兄^{じんにい}？」

「恋、だよな？」

「がぼっ!」

「ぐりぐり」

「刃兄! 刃兄!」

「ちょ、恋! よせて、ここ人前…つか胸…」

「……当ててる」

「…」

どうしてこうなった?

旅に出る前はこんな子じゃ…いや、旅立ち前から積極的ではあったが。

いやそれよりも。

「どうして洛陽に？」

「恋、月の部下」

「月の部下？　って事は恋は月に仕官したのか？」

「……ん」

なるほど…月に仕官したなら、洛陽内に屋敷持つても不思議は無い。

「刃兄はどうしてここに？」

「いやそれがな、何て説明したら…」

恋は物事を端的に捉える癖がある。

イエスカノーか。

好きか嫌いか。

するかしないか。

「……？」

だから順を追って話をしても、最終的に理解へ至るまでが凄く手間取る。

そんな時だった。

「おお恋、セキトは見つかったんか？」

俺の耳に届く、これまた懐かしい声。

「って…ウソやろ！？ 何でこないなどこにおんねんな…」

「恋よ、セキトは…ッ！？ まさか…」

2人の声に、恋にしがみつかれたまま後ろを振り返った。

「久しぶりだな…霞、理沙」

「「刃…」」

そこに立っていたのは、やはりと言うか…俺の愛しい彼女達だった。

「ただいま」

「おかえり、刃」

「待ったったんやで？」

—ひしっ—

恋を挟むようにして俺に抱きつく霞と理沙。

「悪いな…事情が事情でさ、色々あって洛陽に…いや、霞達に頼み
が出来て…一時的に帰ってきたんだ」

「頼み？」

「ウチらに出来る事なんか？」

「霞達にと言うよりは、霞達にしか出来ない」

俺が何を言いたいのか察したのか：

—ふにつ：—

恋の手が俺の股間に沿わされた。

「刃兄のここ、大きくなってる」

「「ッ!？」」

「ああ、これが頼みなんだ」

俺は事情を説明した。

洛陽を出てからしばらくは独戦を続けたが、襄陽の山間部で黄祖の陣内に出た事。

黄祖が有無を言わず襲いかかって来た為、黄祖軍と戦闘になった事。

「黄祖て劉表配下の猛将やんか：よう無事やったな」

「それがさ、偶然その場に：黄祖討伐に来ていた、呉の孫堅に出くわしてさ」

「呉の孫堅？ 江東の虎か！？」

孫堅は黄祖ともみ合う俺を、仲間割れを起こした黄祖軍兵と勘違いし…黄祖もろとも滅さんとした事。

「孫堅、許さ…」

「恋、落ち着けて」

…ん」

その後軍師の周瑜が病にかかっていると知り、氣を応用して治療してその場を去った事。

どうやら襄陽の一件で孫堅に気に入られたらしく…襄陽の村に検問を張られて捕まった事。

「検問を張られて捕まった？」

「ああ…俺が一騎当万の実力者で、軍師の病を治療出来るほどの力を秘めている事を知り…軍師自身の言もあり、俺を引き入れようとしたんだ」

襄陽の小さな村で孫堅と対峙したのだが、周瑜の病気を治した事について『周瑜が病気だと何故知っていたのか』と問い詰められた事。

「我らが問い詰めれば話してくれるか？」

「いや理沙達には言ったろうがよ…千八百年云々の話を」

「ああ、言うとしたな…ウチらの時代の話が史実になつとる…って
そうか！ その史実の中に、周瑜は病気で早死にしたっちゅう記述
が？」

「そう言う事」

「周瑜と言えば呉の軍師だろう？ 反董卓連合とやらが結成され
ば、連合軍として参入するだろう将来の敵…何故助けたんだ？」

「……………イイ女だからさ」

だが未来の知識があると告白すれば、間違い無く霞達と敵対せざる
を得なくなると悟り黙秘した。

が、黙秘を『自分を拒絶した』と受け取った孫堅が泣き出し…しが
みついて来た。

「泣かせてしがみつかれたってどう言う事や」

「未来の知識を話す訳には行かず、結局引き入れの話は俺が突っぱ
ねたんだよ…そしたら『何で話してくれないの？ 何で私に仕えて
くれないの？』って泣き出してさ、俺にしがみついて…そのまま眠
っちゃったのさ」

孫堅及び呉の将は非常に魅力的だったが、互いの立場が立場なだけ
に手を触れる事も出来ず…抱き枕として、半ば物資の如く呉郡へ輸
送された事。

輸送された先で客将となったが、客将となる条件に『呉の将は俺に
対する性的交渉と誘惑の一切を禁じる』と言う項目を設けた事。

「なるほど…呉の将にそれほど気に入られた、と？」

「ああ、で…魅力的な事もあって毎日ムラムラしててさ…先日の戦の功労賞で休暇を貰ったから、溜まったモノを消化しに来たんだ」

「なら刃は…アレか？ 呉では…ヤッてないんか？」

「もちろんさ、霞達がいるからな」

言うのと更に力を強めて抱きつく霞と理沙。

「なら行こうではないか」

「やな、ウチも我慢の限界やし」

「恋も行く」

こうした俺は右に霞、左に理沙…背中に恋を背負い、城へ向かった。
…飛刃赤戟と朱雀はどうしたって？
セキトが背負ってるんだが…見かけによらずパワフルな犬だな。

さて、少し歩いて久しぶりの洛陽城。

俺が滞在していた時に使ってた部屋は、ありがたい事に当時のまま
…2日に1度侍女が入り、掃除をしていくらしい。

「久しぶりだな」

「そうだな」

「やな」

で、ベッドに座ろうとして気が付いた。
…ベッドがこんもりと膨らんでいる。

「誰か使ってんのか？」

「いや、この部屋はウチらの指示で誰にも使わさんようにしとるんや」

「ああそうだ」

「ならあの膨らみは何だ？」

時折もぞもぞと動き、また動かなくなる。
明らかに中身は人間だ。

「…一体誰なんだ？」

―バサッ！―

「―「ッ！？」」」

布団をめくって、全員同時に絶句した。

寝台に横たわっていたのは、茶の髪をした…見た目年齢には不釣り合いなメロンを備えた、姉妹と思わしき少女が2人。

「…まさかとは思うが、この二人…」

「ああ、劉弁様と」

「劉協様やな」

何でこの2人がこの部屋に…いや、裸で寝台に…

「んっ、んん…ッ!？」

「んにゅ…ん…ッ!？」

とか考えていると、両小帝が同時に身動きして閉じていた目を開き…

「「呂堂!」」

「がぼっ!」

「ひしっ!」

同時に飛び起きて、同時に抱きついて来た。

「よく来てくれたな、呂堂」

「ずっと待っておったんじゃ」

ちなみに、標準語で喋るのが協で古風な喋り方をするのが弁。
…分かり辛いかな。

「待ってたって…俺を、ですかか?」

「そうだ（じゃ）」

両小帝の話では、霞や理沙が日々のろけるせいで自身に女が目覚め
：鎮静に苦勞しているらしい。

それに加え月が獲得した艶本を盗み読む事で度合いは加速し、今や
同世代で最大の巨乳を手に入れたとか。

「呂堂は巨乳が好きだと聞いたし、知った」

「ええ、確かにそうです：しかし俺は言っただけです：俺には小帝
を嫁に出来るだけの甲斐性は無いと：

「：もう妾達には時間が無いのじゃ」

：え？」

俺の言葉を遮り、弁小帝が口を開いた。
時間が無いってどう言う事だ？

「私達はいずれ、そう遠くない未来に：都の存続の為だけに結婚す
る事になっている」

「じゃが霞や理沙、恋の話を聞く内：妾は、そんな都の存続の為だ
けに結婚なんぞしとうないと思ったんじゃない？」

「そしてそれは私も同じ：だからみんなを交えて話し合いをしたん
だ」

協小帝曰く、王族の結婚は互いが性行為未経験である事が条件らし

い。

だから両小帝は考えた。

結婚前に処女を失えばどうなるかと。

答えは簡単。

王族との結婚資格を失う。

「王族と結婚出来なかったら、世継ぎは産めないんじゃない？」

「私達が処女を失ったとて、小帝としての権力は消えぬ…消えるのは『王族との結婚資格』だけだ…」

「しかし『王族との結婚資格』が消えたとして、武将…いや言っしまえば庶民との結婚は出来るし…親が王族と言うだけで、産まれた子は本当に幸せなのか？」

協小帝は言う。

最近の洛陽では宦官を率いる十常侍が暗躍しており、自身らを担ぎ上げて権力を掌握する動きが強まっているらしい。

自身達の結婚は、十常侍達が自らに都合の良い血を組み込む為の…言わば儀式で、そこに愛は無い。

ならばいっそのこと自身から王族との結婚資格を放棄し、本当に好きな男の子を産み…そして愛そうと。

「妾達に利用価値が…王族との結婚資格が無くなれば、十常侍共宦官はいずれ妾達を殺そうとするじゃろう」

「私達は確かに親が違う…言わば義姉妹」

「じゃがその絆は実の姉妹より濃いと思うておる…妾は義姉者の死

の上に帝位なぞ戴きたくないし、愛してもおらぬ男の子を愛する事も出来ぬ」

「そしてそれは私も同じ…義妹の死で成り立つ帝位と愛せぬ男に愛せぬ子…子に罪は無いが、いずれも受け入れる事は出来ぬ」

「…つまり、むざむざ死にたくは無いし…更に、そんな愛を伴わない結婚なんかしたくない…と？」

俺の言葉に対し、同時に頷く両小帝。

「霞達はどうするんだ？」

「どうする言うても、なあ？」

「…刃、両小帝様の首を見てくれ」

「首？」

言われて俺は、自身にすがり付く両小帝の首筋を見た。

「…」

「…」

そこにあったのは、頸動脈がある辺りの真上の皮膚にうつすらと残った切り傷の跡。

「これは…」

「私達が反対した時の事だった」

「ウチらに認められんと、このまま望まん結婚なんかするんなら死ぬ言うてな…」

立ち会っていた侍女の懷から短刀を抜き取り、それを自らの首にあてがったらしい。

「幸い我らの当て身で気を失わせて頂いたが…」

「あと半刻遅かったらどないなっとったか」

意識を取り戻した両小帝は、しばらくは大人しかったが…霞達の賛成が出ないと知るや、即座に自害へ走ろうとしたらしい。

「呂堂には言ったはずだ…私達は本気だと」

「呂堂を本気で好いておるからこそ、呂堂に抱かれぬのなら妾達は死を選ぶ」

ソレ、ナンテ、ヤンデレ？

「そこまでの覚悟を見せられては、武人たる我らには文句も言えぬ」

「せやから逆にウチらから頼むわ、刃…協ちゃんと弁ちゃん、刃の女にしたってえな」

…ちなみここまで一言も喋っていない恋だが…

「くー…くー…」

俺の背中で夢の世界に旅立っている。

「……みんな良いのか？」

「我らは構わない…むしろ、今日まで他の女の…呉の将達の誘惑に耐えた刃の欲求を晴らすなら…我ら二人では足りぬはず…無論、恋を数に入れても同じ事だろう」

「…それにウチらと協ちゃんや弁ちゃんが、同じ男を愛した仲…ウチらの女としての価値に、箔が付くと思わへん？」

そこまで言われては仕方ない。
俺って愛されてるんだな。

「じゃあまだ夜じゃないけど…」

こうして俺達は全員が裸になり、凄まじく爛れた時間を過ごした。

ちなみその夜…想像を絶する、大乱痴気騒ぎを経た後…

「アカン、腰に力が入らへんし体の火照りが引かん…刃は助平やわ、胸ばっかり…」

「全くだ…激しすぎだぞ、刃…もっと加減してくれ／＼／」

「うう、まだ痛い…股間部を中心に、下半身が痺れているぞ…胸は痺れが酷い」

「これが女の痛みなのか…じゃが、胸を中心に感じる不思議な充足感…心地良い…」

「くー、くー…むにゃむにゃ、刃兄は…胸が、好き…くー、くー」

…と言う言葉を各人から頂いた。

ともかく胸を揉む事と腰を振る事しか頭に無かったんだが…もちろん、誰に何発出したかなんて覚えちゃいない。

そして翌朝、やはり太陽が以前より黄ばんで見えたのは言うまでも無い。

また、劉協様からは字『魅奈』と真名『天』を…
劉弁様からは字『彩矢』と真名『照』を預かるに至ったのだが…

「董卓と賈馱の真名が月と詠で月詠、劉協と劉弁の真名が天と照で
アマテラス
天照」

4人の真名には何か意味があるのか？
と、妙にニヤニヤする月と詠を見ながら…そんな事を考えたのは、
俺だけじゃないはずとここに宣言したい。

伝記の36 刃、爛れること（後書き）

劉協と劉弁の字及び真名は、例によって作者のオリジナルです。他所で記載のある資料や、実際の史実（三国志）とは異なりますので悪しからずご了承下さい。

伝記の37 女性陣、盛り上がるのこ【番外編】

～第三者 視点～

「むう」

「風、どうしたの？」

大量の竹簡を右へ左へ捌いていた風こと程立が、突然唸り声を上げた。

その様子を隣で見ていた稟こと戯志才が、相棒のただならぬ声に思わず質問を投げかける。

「今、風の同胞が風を裏切ったような気がしたのです」

「…は？」

何を言ってるんだと言わんばかりの稟の隣で、しきりに『ペタンコ仲間が命を盾に裏切ったのです』や『風も豊胸指南が欲しいのです』と、あるいは『必ず育つ、いえ育ててみせるのです』や『まずは呉の皆さんを目標にするのです』等と譫言のように繰り返す風。

「…」

そんな風や稟を意にも介さず、風や稟より速い速度で竹簡を捌くのは…呉の軍師、冥琳こと周瑜。

彼女の手にかかれれば当日分は愚か、3日先の分の竹簡すら処理は容易い。

…が。

「……いかん、今朝見た夢が忘れられん…私はそんなにアイツを？」

と、意味深な発言と共にその手が止まる。

顔はやや赤く、息もやや荒い。

「周瑜殿？　どうかされましたか？」

そんな冥琳を見て不思議に思ったのか、未だに暴走中の風を放置し…手を止めぬまま稟が口を開いた。

「いや、今朝見た夢なのだがな…酷くいかがわしい夢だったのだ」

「いかがわしい夢…ですか？」

稟の言葉に答える冥琳。

だが一句喋る度、顔の紅潮は度合いを増して行く。

「ああ…私塾のような場所で、成績の悪い生徒に個人授業を授ける夢なんだが…」

「私塾で個人授業…？　そのどこがいかがわしい夢なんですか？」

「それがな、初めは経済学や軍学…帝王学を授けていたんだが、授業の後半から…その……」

「その…何です？」

「……………性の勉強…に、なって…しまうんだ」

「……………え？」

言った冥琳の顔はすでに限界まで赤くなっており、発する言葉にもはやキレは無い。

「私は自身の体を教材に生徒へ女体の扱い方と、女が持つ女の武器の凄さを…実演を交えて教えるんだが……生徒が呂堂なんだ」

「……………」

冥琳の話聞いていた稟が不意に沈黙する。

その顔は冥琳より赤く、耳を澄ませば『私のコレは』とか『次はどこに出す?』と言った…奇しくも冥琳が昨晚見た、いかがわしい個人授業の夢で…冥琳自身が生徒役の刃に言ったのと、一字一句違わぬ単語を呟いている。

「……おお！ 稟ちゃんの発射が近いですよ」

「……何？」

そんな稟を見ていた冥琳に、我に帰ったと思わしき風が不穏な事を告げる。

「発射？ 何を発射するんだ？ 母乳か？」

「母乳を発射するのならまだ良い…いえそれでも良くないんですが、稟ちゃんが今から発射するのは鼻血なのですよ」

風は言う。

稟には聞いた単語を元に、口には出来ないような風景を誇大に妄想し……それが原因で夥しい量の鼻血を噴く癖があると。

「呂堂さんの逞しい槍を豊かな胸の谷間へ挟み込み……自ら胸を両側から圧迫し、呂堂さんが得るであろう快感の度合いを高めて行く周瑜殿……」

「…………程立、戯志才の前から竹簡を退けてくれ」

「もう終わってるのですよ」

稟の呟く『課外授業の風景』が、自身が見た夢の風景とほぼ同じ事に一瞬閉口する冥琳。

だがこのまま本当に鼻血を噴かれてしまうと、夢の内容に悶々としながらも捌いた大量の竹簡が全て血の海に沈む。

それを懸念して風へ指示を出す冥琳だが、付き合いの長い風は既に竹簡の退避を完了させていた。

「呂堂さんの放った子種は周瑜殿の眼鏡を白く汚し、それでもなお呂堂さんの宝槍は上を向いていきり立ったまま……それを見ていた周瑜殿は次はどうすると問いかけ、呂堂さんはそのたぎった槍を周瑜殿の……ぶーーーーーっ!!」

先程より生々しい、風景の描写を行った直後……稟の鼻から凄まじい勢いで大量の鼻血が噴き出した。

弧を描いて放たれた鼻血は、冥琳の執務室の壁を真っ赤に染め上げた。

「はい稟ちゃん、トントンしますよ」

「ふがふが」

…時間軸的には刃が洛陽へ向かう為、呉郡を出た翌々日（刃が洛陽でにやんにやんしていた日）の事だったが…呉郡の今日は平和である。

＊＊

またところ変わってここは呉郡の城下町、正門に面した通りの一角にある…老舗の酒家。
時間軸としては、冥琳の執務室で稟が鼻血を噴いたのとはほぼ同時刻である。

さて…そんな場所に集まったのは呉の宿将、祭こと黄蓋と…祭の友人で前呉王、神蓮こと孫堅…加えて現呉王、雪蓮こと孫策。
そして女を磨く旅路の途中にあると言う女性と、その友人を名乗る女性が2人の計5人。

女性は片方が姓を黄、名が忠、字は漢升…真名は紫苑と言う。
そして友人が姓を嚴、名を顔、字を竜胆…真名は桔梗と言う。

5人の共通点は、いずれもとんでもないサイズの巨大なメロンを備えている事…そう、デカメロンフェスタが開催されているのである。

「へえ、じゃあ桔梗や紫苑も呂堂の事を？」

「そうなのよ：刃君は確かに気が多いんだけど、根はまっすぐで優しくて：私は昔から狙ってたんだけど、恋ちゃん：いえ呂布ちゃんの積極性に触発されて、刃君を酔わせてヤっちゃったの：神蓮や祭、雪蓮もシたの？」

「それがねえ：呂堂ったら『俺が呉の客将になるに当たり、呉の全ての将は俺に対する性的交渉と誘惑の全てを禁ずる』って条件を設けてて：破ると呂堂がいなくなっちゃうのよ」

「はっはっは、刃らしいのう：儂らの顔を立てる為とは言え、神蓮や雪蓮：祭のような、本当に刃の好みに適合する女を抱かぬとはの」

「全くだわ：こっちはいつでも準備万端なのに：飲まなきゃやってられないわよ」

言って徳利から杯へ酒を注ぐ雪蓮。

ちなみに話を始めてから既に8刻：2時間が経過しているが、机の上には空の徳利が20本以上転がっている。

もちろん真名は全員が交換済みだ。

当然『刃』イコール『呂堂』である事は総員が理解しているので、許された者とそうでない者とも会話は滞りなく成り立つ。

「でも誘惑禁止って事は：破ったら刃君が呉の客将を止めちゃうのよね？」

「そうなのよ：でも祭はそれでも良いって……私達の誘惑で呂堂が呉が出るなら、それを追って自分も呉が出る覚悟があるって言うのよ？」

「まあ僕は呂堂に心底惚れておるからの…堅殿や策殿だってそうじゃろう？」

言って神蓮と雪蓮の杯に酒を注ぎ、自らは杯の酒を飲み干す祭。

いつもならこの辺りで冥琳が止めにくるが、今日はそれも無い事を祭は知っていた。

「まあね…お母様ったら襄陽の山中で乳房のお披露目をしたぐらいだし」

「それを言うなら雪蓮だって鍛練中、呂堂の戟を捌くフリして胸部をかすらせ…わざと胸を溢したじゃない」

「何じゃ、堅殿や策殿もしっかり誘惑しとるではないか」

「けど刃君を物にしたいなら敵は強いわよ？」

紫苑は言いながら店主に、お酒のおかわりを注文する。

「紫苑、それどう言う事？」

「洛陽の小帝陛下と言えば分かるかの？」

「今の小帝様って…劉弁様と劉協様よね？ …ってまさか！？」

「うむ、両小帝様は刃を好いておるし…洛陽には我らが同胞で、刃に愛を捧げた…言わば先駆者、霞と理沙…いや張遼と華雄がおるでな」

張遼（霞）・華雄（理沙）・呂布（恋）・黃忠（紫苑）・嚴顏（桔梗）・孫策（雪蓮）・黃蓋（祭）、そして両小帝。

そのいずれも全員が呂堂に惚れており、自身も例外では無い事に思わず絶句する神蓮。

「この分だとこの場にいない冥琳、いえ周瑜も陥落手前だろうし：程立や戲志才もそろそろ危ないわね」

「その周瑜殿や程立殿、戲志才殿とやらは胸が大きいのか？」

「刃君は大きな胸を持つ女の人が好きですから」

紫苑の注文した徳利から酒を直飲みしつつ、桔梗と紫苑が口を開いた。

「確かに周瑜は立派な物を持ってるわ：程立は今は望み薄だけど頑張ってる途中で、戲志才は既に結構な物を持ってるけどまだまだ育つと思う：勘だけど」

「蓮華：孫権はどうなの？」

「あの子は生真面目で硬いのよ：胸は貴女に追隨するぐらいだけ、どっ！」

「バキッ！」

そんな神蓮達、巨乳美女軍団を物にしようと：酔った不埒者が襲いかかる。

だが神蓮はそんな男を見もせず、座ったまま裏拳で沈める。

「これで八人目かしら…大きいって罪なの？」

言って自らの胸を抱き上げる神蓮。

「いやいや、大は小を兼ねると言うからの…これで九人目じゃ…よっ！」

―ドスッ！―

神蓮の裏拳に沈んだ男を見ながら、自らは肘鉄を背後へ放ち…今まさに襲いかからんとした、別の男を沈める桔梗。

「ねえ紫苑、私達が想いを遂げるにはどうしたら良いと思う？」

「そうねえ…」

こうして巨乳美女軍団の夜は、今で言うガールズトークで更けて行く。

またところ変わってここは城の中、中庭に面した通路に設けられた蓮華こと孫権の部屋。

卓袱台に置かれた湯飲みから水を飲みつつ、蓮華が口を開いた。

「お母様もお姉様も何を考えているのかしら」

「私には判りかねますが、孫呉の将来を見据えての行動かと」

蓮華の言葉を受け、思春こと甘寧が答える。

「そうじゃないわ：私が言ってるのは、呂堂と言う強い者を客将として抱え込んでいながら：条件だからと、功を労うと称して15日も外出を許すとは」

蓮華は母や姉の、呂堂に対する扱い方が理解出来ないでいた。

確かに呂堂は武将としては最たる力量を秘めており、しっかりと抱え込めば呉の為になる事は明白。

しかし客将に甘んじる本人と、客将になる為の条件があんまりと言ってしまうばあんまりだからだ。

「思春は呂堂の事をどう思う？」

「人為、ですか？」

「ええ、感じたままを話してちょうだい」

「は、では僭越ながら」

言って思春は語る。

まず人としては根が素直で、余程の被害を被らない限りは大体の事を成す。

武将としては武力八割対知力二割、雪蓮様のように前線でその力を

發揮する。

また虚実入れ混ぜる事も出来るので、敵に回した場合は恐ろしい。

男としては見上げた物があり、相手が如何に魅力的であろうと先達の顔を立て：むやみやたらに手を付けない誠実さは感心する。

「：王としては？」

「王としての器には少し足りないと思っております：」

「どうして？」

「覇気や武勇：そして人柄や魅力に関しては申し分ありませんが、呂堂は世に覇を唱えるつもりが無いようです」

思春は言う。

王たる人物とは『ただそこにいるだけで王然とし、何をしても結果がついて回る』か『万事に対し如何なる労力も惜しまず、望む結果を自ら取りに行く』かのどちらかだと言う。

「ここから先はあくまでも私個人の见解ですが、神蓮様や雪蓮様は前者：そして蓮華様は後者かと思われます」

「じゃあ思春は私にも王才がある、と？」

「はい……ですが呂堂はどちらでもなく、聞けば好みの女を囲って楽しく暮らせれば良いと言っております：これではどう繕っても、王才があるとは言えません」

思春曰く、呂堂は権力や名声にあまり興味は無く：最終的には自身

の好みの女を侍らせ、気ままに暮らせればそれで良いらしい。
それはそれで良いのだが、その『好みの女』の範疇に：どうやら蓮華が入っているらしい。

「：ねえ思春」

「何でしょう？」

「もし私が呂堂に囲われたとしたら、貴女はどうする？」

「個人的には叩き斬りたいところですが、今はまだ何とも言えませんが：もし蓮華様がそうなられた暁に、呂堂の事を本気で好きになつていたら：呂堂を切り捨てる事は、蓮華様が不幸になられると同義：私にはお答え出来る言葉がありません」

思春個人は呂堂に好意はまだ薄い。

しかし蓮華と結び付けて考えるとどうしようもないようだ。

「：なるほどね」

そんな思春の言葉に、蓮華は一層深い思考の海に沈むのであった。

伝記の37 女性陣、盛り上がるのこと【番外編】（後書き）

神蓮の書きやすさは異常。

しかし蓮華の書きにくさも異常……とつとつとデレデ蓮華にするべきなのかも。

伝記の38 刃、喧嘩を売られるのこと

く刃 視点く

「……」

「……」

2つ並んだ玉座に座るのだが、座りが悪そうに腰をもじもじさせる天と照。

「殿下、どこか体調が優れないのですか？」

座りが悪い天と照を心配する月だが、実際は破瓜の痛みを引きずってるだけだろう。

ここは洛陽城玉座の間。

太陽が黄ばんだその日の昼下がり、俺は理沙との調練の途中で呼び出された。

「いや、大事ないぞ」

「大丈夫だ」

「そうですか…じゃあ詠ちゃん」

「分かったわ…さて刃」

「ん？」

「貴方を呼んだのは他でも無いわ：以前刃に言われた事を受け、私の指示で各地に細作を飛ばし：情報を得てみたんだけど」

言って詠は書簡を1巻、投げて寄越した。

書簡は『派閥調査報告書』とタイトルが付けられている。

まずは魏。

現在まだ『魏』と言う国は無く、曹操は陳留の刺史に任じている。

曹操には加虐趣味と同性愛者の気配があり、また人材確保に余念が無い。

主武将は夏侯惇と夏侯淵の姉妹。

次に呉。

現王は孫堅で、襄陽の劉表との争いを繰り返しており：本拠地から動かない劉表を討つ為、遠征を見据えた調練を行っている。

主武将は実子の孫策・孫権・孫尚香と、軍師である周瑜及び孫家三代に渡って仕える老将黄蓋と水軍出身の甘寧。

蜀は何とまだ無い。

該当地方は劉璋が治めており、劉備と言う名の人物は確認出来ず。とりあえず劉璋配下の主武将として嚴顔とその弟子に魏延、嚴顔の友人に弓使いの黄忠がいる。

袁は主家に袁紹と従妹に袁術。

袁紹と袁術は共に頭が弱く、大陸随一の面積と人口と財を持つ最高峰の見栄っ張りで：華麗さと豪勢さを突き詰める為、有り余る金を湯水のように使う浪費癖がある。

主武将は袁紹が文醜と顔良、客将として趙雲と荀イク。

袁術の主武將は張勳だが、孫堅を配下にしたがっている気配がある。

公の公孫賛は幽州太守の地位にあり、主武將の情報は得られず。とりあえず、是にも非にも『普通』と言う認識しか得られなかった。

最後の西は騎馬を基本とした突破力に優れた部隊を有しており、太守が馬騰。

主武將は娘の馬超と馬岱だが、母の馬騰が体調を崩し勝ちな為…有事の際は馬超が名代として出てくる可能性が高い。

「…って事なんだけど」

「よく調べたな…って言っても呉の面々と桔梗さん、紫苑さんは既知だが」

「桔梗と紫苑は我らの同胞だな」

「同胞？」

理沙曰く…桔梗さんと紫苑さんは顔見知り…と言うより、同じ男を愛した同胞で…霞・理沙・恋・桔梗さん・紫苑さんの5人で『刃愛豊乳連合』と言う同盟を組んでいるらしい。

「今朝ウチ宛に届いた竹簡で知ったんやけど、桔梗と紫苑の二人…今は呉郡におるらしいで？」

「何をしてんだ、あの二人は…なあ？ 恋？」

「……ん」

「で、いくつか気になったんだが…まず魏の曹操だが、加虐趣味に同性愛者の気配って本当なのか？」

「ええ、本当よ…彼女は実績や思考、実力や覇気共に全てが王然としてるんだけど…見目麗しい少女を閨へ引きずり込み、いたぶって嬌声を上げさせて悦に入る趣味があるのよ」

ズーレーでドーサー…スマン、レズビアンサディストか…おわっ、トリハダが…。

んじゃ当然、夏侯姉妹も毒牙にかかっているな…ある種、処女ではない…と。

史実じゃ下ヒの戦いで張遼は魏に下るらしいが…思わず霞の顔を見てしまう。

「ん？ どないしたんや？」

「いや、何でもない」

…絶対渡さねえ！

「次の呉なんだが、現王は長女の孫策になってるぞ？」

「そうなの？」

「ああ、俺が洛陽に来る二日前に王位が継承されてる…継承式典には俺も立ち会ったから間違いない、それに客将として俺…更には軍師見習いとして程立って子と戯れ才って子が、現状は客人の立場で厄介になってるよ」

「なるほど…じゃあ修正しておくわ」

「で、だ…この袁勢の張勳って武將は、どんな武將なんだ？」

「張勳は袁術の下にいる武將で、武官と言うよりは文官寄りの人間ね…筆頭軍師の立場にいるみたいだけど、人為としては…とにかく黒いわ」

「黒い？ 中身がか？」

「ええ、真っ黒だわ…中身と言うより腹が、ね」

つまり袁術を持ち上げ、思う通りに動かすタイプの人間だろう。袁術は御輿だろうけど、張勳の指示を受けて育ててるからワガママだろうな。

「…予測と違う、って言う顔ね」

「まあな」

「どう違う？」

「そうだな…」

言われて俺は自身の見解を述べる。

まず魏。

曹操が現時点で、魏を建ててない事が予測と違う。

更に言えば曹操はこの時期、洛陽北部尉の任に就いていると思っていた。

つまり現在の本拠地は許昌では無いと言う事。

百合女王な件は閉口しておく。

呉は省略。

蜀も国が無く、主が劉備では無く劉璋と言う事にも驚いた。

嚴顔と黄忠：桔梗さんと紫苑さんについては割愛。

この分じゃ蜀軍五虎将と呼ばれる5人が集まる事は無いな。

そして袁は、ある種の予想以上としか言えない。

洛陽に帰ってくる前に袁の旗を見たが、詠の話では『張』の旗がある事からあれが袁術軍で：霞が『頭がアレ』と称している限り：接触を図らなくて正解だったようだ。

袁紹は現在、趙雲を客将として置いているらしいが、彼は蜀の五虎将になるくらいだから：多分黄巾の乱手前ぐらいで劉備に合流すると予測。

…あれ？

三國無双の黄巾の乱に、趙雲は参加してたっけ？

シ水関や虎牢関の戦いにも参加してなかった気もするが：まあいいや。

公も省略。

『普通』って：まあ三國無双の黄巾党シナリオで、黄巾の乱の時に趙雲を率いて出てくるぐらいにしか記憶に無いし：

最後の西は、馬超があれだから騎馬に長けた一族と言うのは想定範囲内だが：馬騰がまだ生きていて、その上で女だと言うのが一番

ビックリだ。

「…ってな具合だな」

「なるほど…そう、じゃあ刃に頼みがあるんだけど…」

「俺に頼み？」

「ええ、西涼の馬騰に会って欲しいのよ」

「馬騰に会えって？」

詠が言うには、馬騰は現在病で床に伏せており…娘の馬超と馬岱が心配しているらしい。

「馬騰さんは昔、私達が大変お世話になった方でして…」

「症状としては決して重くないんだけど、医者は何故かお手上げで…月の為にも、是非とも元気になって欲しいのよ」

「見舞いつて事か…けどそれなら俺が行かなくても良いんじゃないか？ 俺には時間的な余裕が、残り十日ちょっとしか無いし」

確かに周瑜の病を治した実績があるから、大体の病なら治療する事が出来るだろうが…

「大丈夫よ？ 馬騰の居る西涼は…」

「…、ご報告申し上げます！」

…ちよ、アンタ！　ここは殿下の眼前なのよ！？　場を弁えなさい
！」

馬騰の何かを伝えようとした詠の言葉を遮り、1人の兵士が玉座の間に駆け込んで来た。
その顔は酷く慌てているようだ。

「申し訳ありません、ですが至急お伝えしたき事がありました」

「何事よ」

「ハッ！　城門で不審者を発見し、制止を促しましたが指示を振り切られ…不覚にも場内へ侵入を許してしまいました」

「「ッ！？」」

兵士の口から放たれた言葉で、玉座の間に戦慄が走る。
特に月と天と照の怯えようはただ事ではない。

「振り切られたって…何やっとなねんな」

「侵入者の人数、それと主だった者の人相は？」

「ハッ！　人数は一人、人相は…頭髪は一部が白い黒髪で、首に巻布をしております…女性です」

理沙の質問に答える兵士…だが、一部が白い黒髪って…シャギーでも入れてんのか？
俺の知り合いには居ないよな…

「一部が白い黒髪で、首に巻布：ちょい待ち、ソイツ：得物は鉄の塊みたいな棒やなかったか？」

：等と考えてた時、新しい情報が霞の口からもたらされた。

「ハッ、張遼將軍の仰る通り：長さ三尺余りの、黒い鉄棍で武装しておりました」

「：はあ、アイツや」

「ああ、間違いないな」

霞の質問が肯定されるなり、霞はげんなりした様子でため息を吐いた。

隣に立っている理沙も同じようにため息を吐く。
俺は理沙と霞に歩み寄った。

「霞、理沙：知り合いか？」

「まあな」

「どんな奴なんだ？」

「どんな奴て：」

「バアンッ！ー」

「張遼！ 華雄！ ワタシと勝負しろ！！ 今日こそは目に物見せてくれる！」

霞との会話を遮り、今度は特徴的な格好をした：腰に鉄塊を提げた、かなり立派な双子山を備えた少女が玉座の間へ入って来た。

「あんな奴や」

度重なる玉座の間への無礼な進入に、詠は眉間に手をやって俯いた。そんな詠の肩を叩いて慰める月の姿が微笑ましい。

「はあ：あのような魏延、いつでも来いって言うたけど：来る時はウチか理沙の名前を出せて言うたやろ？」

「う、うるさい！　ワ、ワタシはどうしてもお前達に……む？」

霞と言い争いをしていた少女の目が、霞と理沙の隣にいた俺の方を向いて止まる。

「見慣れぬ顔だな：誰だ貴様は」

おいおい、兵士の制止を振り切って侵入した不審者なのに：いきなり貴様呼ばわりか。

「：人に名を尋ねる時は自分からって、親から習わなかったか？」

「何だと！？　良かろう、名乗ってやる：ワタシの名前は魏文長！　巴郡の町を治める城主は厳顔様の弟子だ！」

言って魏文長：恐らく魏延は、その立派な双子山を反らせた。

——くっ——

「…刃？」

「いや、スマン」

巴郡の町を治める城主巖顔：桔梗さんの弟子って、ああ！

「この子か、やたらめったら最強を名乗り…霞や理沙に熨された『大海を知らぬ井の中の蛙』ってのは」

「うん？ 何や刃、その話知っとったんか？」

「ああ、師匠二人から聞いてるよ」

魏延の挑発を鼻で笑い、逆に魏延を挑発して怒らせ…これを手の一撃で叩き伏せ理沙。

「霞に至っては真正面から、目視も難しい一撃で魏延を吹き飛ばし『上には上がおるっちゅう事を知るべきやな…まあウチよりも上なんが、ウチと理沙の大事な人なんやけど』と、魏延に惚気まで披露したそうじゃないか」

「イヤやわ刃…ウチの言葉一字一句違わへんやん…恥ずかしいわ」

言っただけにしなだれかかる霞。

まあ自分で言うのはアレだが、弟子とはいずれ師を超える物。ならば弟子は師の教えがなんたるかを考える必要があるんだが。

「ここまで思考の凝り固まった弟子を持ったら、桔梗さんと紫苑さんも苦労したんだろうな」

「ッ！？ 貴様！ 断りも無く桔梗様と紫苑様の真名を口にしたな！？ そこに直れっ！ 御二人に代わってこのワタシが成敗してくれる！」

と、俺の口から桔梗さんと紫苑さんの真名を聞いた瞬間：魏延が激しい殺気を放ちつつ、腰に提げた鉄塊の柄に手をかけた。

「はあ：霞や理沙が頭を抱えるのも分かる気がするよ」

「分かるか？」

「分かってくれるか？」

「ああ、激しく同意するよ」

どうしようもない猪だな：それも改造前の理沙以上に。

「魏文長と言ったか？」

「何だ？」

「君は桔梗さんから兄弟子の存在を聞いてないのか？」

「兄弟子だと？ 貴様もワタシが未熟者だと侮辱するか！？」

「：はあ？」

魏延の話では桔梗さんから散々兄弟子・最良を聞かされ、弟子たる者のあり方や考え方を教え込まれて来たらしい。

そして最終的には『だからお前は、我が一番弟子：お前の兄弟子と比べて未熟者なのだ』と手厳しい言葉を言われるそうだ。

「何が『最強はたかがでしかない：最強たるな最高だれ』だ：一番強い者が最強なのだ、そしてそれはこのワタシの事：桔梗様の言うワタシの兄弟子なんか、大したこと無いに決まってる：どうせ華雄や張遼にだって勝てるはず無いんだ」

言い過ぎでしょう、桔梗さん。

「じゃあ名乗っておこうか：姓は呂、名は堂、字が戦牙：霞、いや張遼の言う『まあウチよりも上なのが、ウチと理沙の大事な人』で、君の兄弟子だよ」

「呂堂戦牙！？ ならば長社にて単身で七万の黄巾賊を相手にし、無傷で敵将ごと討ち取った豪傑と言うのは…」

「ああ、波才の事か？ そうだ、ありゃ俺の初陣の話だ」

「ぐっ、ぐぬぬぬ…」

ちなみに現在、玉座の間の隅では…

「くー…くー…」

恋がセキトを抱き、陳宮の膝枕で暢気に眠りこけていたりする。

さてそんな恋を微笑ましく見ていると、魏延が口を開いた。

「ワタシと勝負だ！ 呂堂！！」

伝記の39 刃、変貌させるのこと（前書き）

キャラ崩壊警報発令！

伝記の39 刃、変貌させるのこと

（刃 視点）

洛陽城中庭の鍛練場で、俺は魏延と向かい合って立っていた。

「良く逃げなかったな」

「…」

魏延はその手に鉄塊のような武器——銘『鈍砕骨』——を持ち、余裕綽々で立っている。

対する俺は無手。

飛刃赤戟を使っても良かったんだが、あれだと魏延は何も出来ずに終わっちまうからな。

「ふん、ワタシと相対して無手とは…」

「君の為でもあるんだがな」

「何だと!？」

「…理沙、音頭を」

「心得た…ではこれより、魏延対呂堂の試合を執り行う！」

武器は刃物なら刃引きをした物、鈍器なら鉄の棒に布を重ねて巻いた物…弓なら鏃を外した物を矢として使用するのだが、魏延の武器は敢えてそのままだ。

勝敗は気絶か降参、あるいは審判の中断による判定…あるいは鍛練場の石畳から落ちる、つまり場外のみ。

もちろん殺しは御法度。

「魏延、準備は？」

「もちろんだ」

「刃は？」

「いつでも」

「ならば両者構えよ！」

ちなみに魏延の武器がそのまま（保護も何もされてない状態）なのは、俺の指示だったりする。

思い上がった天狗には灸を据えて、その伸びきった鼻をボツキリと折ってやらなくちゃな…桔梗さんばりに。

「では……始めえっ！」

「いくぞっ！」

理沙の合図で魏延が鈍砕骨を振るった。

「ブォンッ！ー」

その名の通り…当たれば骨を砕く威力はあるだろうし、それを出来

るだけの筋力はあるのだろう。

―チッ！―

上体を軽く反らした俺の眼前を、鈍砕骨が唸りをあげて高速で通り過ぎ…弾けた前髪が数本宙を舞う。

「上手く避けたようだが次は無いぞ！」

―ブオンッ！―

―ブオンッブオンッ！―

俺の前髪が弾け飛んだ事に手応えを感じたのか、魏延が更なる猛攻撃を繰り出す。

だが俺はそれを、半歩だけ動いたり半身になったり…上体を反らしたり、時には首を傾げたりするだけ…つまり必要最低限の動き全てかわしてやる。

「…あれはアカン…魏延に勝ち目あれへん…必要最低限の動き“だけ”でかわされとんのが、まるで分かっとらんわ」

「確かに威力のある一撃なのだろうが、刃を相手に『当たれば終わりだ』等と言う思考で攻撃を繰り出すのは愚策だと言うのに…私が魏延なら、既に数回熨されてるな」

「……刃兄、間合い…見切ってる…でも、遊んでる…」

観客と化した霞や理沙、恋達の声が聞こえてくる。

「やな、見てみい刃の口を…笑ろてるし」

流石だな…良く見てるじゃないか。

「くっ、くそっ！　ちょこまかと、逃げて…ばかり！　貴様が、ワタシの…兄弟子だと、言うなら！　正々堂々と、打って！　来い！　この、腰抜けめ！」

中々当たらない自分の攻撃に苛ついて来たのか、魏延の攻撃速度が上がる。

結構な速さの攻撃だが、速さは霞の飛龍偃月刀の連撃には劣るし…正確さは理沙の金剛爆斧未満だし。

第一：

―ビタッ！―

「なっ!？」

「確かに高威力だが、君の攻撃は…軽いよ」

最上段からふりおろされた鈍砕骨の一撃を、左手のみを使って止めてやる。

もちろん氣による強化などしていない。

「ワタシの攻撃が…軽いだと？」

「ああ、軽いね…君の攻撃は“努力”が込められていない」

例えば理沙は、己の武が月や詠…天や照を守り、救うんだ為に日夜努力して武器を振るっている。

例えば霞は、自身の偃月刀は速さなら誰にも負けない為の努力をして武器を振るっている。

例えば恋は、将来俺と添い遂げる為には自身が…武人としても女としても、強くなる必要があると努力している。

「君の攻撃は天性の物があるだろう…が、力が大きいだけで中身が伴っていないのさ」

—シュツ、バシツ！—

言って鈍砕骨を止めたまま、魏延の左ふくらはぎに右のローキックを叩き込んでやる。

「ぐっ！」

—ガッ！—

「つあっ…」

—ガゴオンガランガランガラン…—

ふくらはぎへの痛打で動きが止まった一瞬の隙を突き、鈍砕骨を握っている右手の肘辺りに左手刀を叩き込み…もたらされる痛みで武器を手放させる。

某マンガの『雷神拳』をパクったんだが、ここを殴られると地味に痛いんだ。

「よっ！」

「ガアンッ！」

「あっ！」

そして手放された鈍碎骨を、氣でコーティングした右足で思いっきり蹴り飛ばす。

人間なら挽き肉になりそうな威力の蹴りを受けた鈍碎骨は、放物線を描いて宙を飛び：

「ぐしゃっ！」

「ぐえっ！」

落下地点にいた、金ぴかの鎧を纏った男を挽き肉にした。

「む、あれ細作か？」

「ああ、袁紹んとこの細作や…ほっというてええで」

そうか、ほっというて良いのか…なら事故死って事なんだな。

「ワタシの鈍碎骨が…」

「…さて魏延、これで君は無手になった訳だ…が、生憎俺は優しくなくてね…君みたいに思い上がった子には、徹底的に負けてもらう事にしてるんだ」

「なっ!？」

「けどこのまま負けちゃ君も面白く無いだろうから、そうだな…もし俺が負けたら兄弟子と言う肩書きと認識を改めて、君を師匠と呼ぶ事にしよう」

「ワタシが師匠…」

「ああそうだが、簡単に勝てると思わないでくれよ？」

「ッ！？ 舐めるなっ！ ワタシは最強なんだ！」

「ダッ！」

俺の言った言葉を挑発と取ったのか、魏延は顔を真っ赤にして…見事な震脚を放ち、最初よりも数段速い速度で距離を詰めて来た。

「はあっ！」

「ドンッ！」

「ビュバツ！」

踏み込んだ一步を更に震脚とし、力が十分に加わった右パンチを放つ魏延。

「バチン！」

俺はそれを敢えて左頬で受けた。

瞬間、口の中に血の味が広がる…どうやら口の中を切ったらしい。

素手の方が良い攻撃をするじゃないか。

そう思ったのが悪かったのか…

「くっ、何が可笑しいっ!？」

顔は笑っていたらしい。

俺の笑みを見て、魏延がなおさら怒りのボルテージを上げて行く。

「うおおおおおっ!」

―ズドドドドドド!―

次いで魏延は密接距離から無数の拳打…ラッシュを放って来た。
何発か顔や首、鳩尾を直撃する…いやイイ突きなんだが、やっぱり軽い。

―ズドドドドドドドドドドドドドド―

やがて約40発のラッシュを打った辺りで、魏延のパンチから重みが消えていくのが分かった。

…のだが。

―ズドドドドドドド―

―ぷるぷるぷるぷるぷる…―

パンチの度に揺れる双子山に目が行くのは、男として仕方ないのでは無かろうか。

「はぁ、はぁ…なぜ、倒れないんだ…ワタシは強い、最強なはずなのに…なぜ…」

「だから言っただろう？ 努力が足りないって…才能の上に胡座をかい
てるだけの奴なんか、怖くも何ともない…最強を目指すなら、今座
ってる『才能』の上から更に努力しなくちゃダメだ…最強なんて常
に努力し続けなければ、他の『』すぐに抜かれる…そう、君の言う
最強は俺が既に越えた後なのさ…分かるか？」

「…」

「さあ、構えろ…努力して力を掴んだ者の攻撃を見せてやる！」

俺は左腕を前に突き出し、右手は拳を握って腰溜めに構え…下半身
は左足を前にして、軽く膝を曲げて半身で立つ。

「行くぞっ！」

前に出していた左足を、更に踏み込んで震脚…生じた力を骨から筋
肉、筋肉から皮膚へ伝播させ…腰溜めにした右手の突き出しにかか
る。

右の突きに伴い、足首から膝…膝から腰、腰から背骨…背骨から肩
へと、捻りの力を右拳へ集約する。

全ての力が乗った拳の先端は、射出された矢よりも速くなる。

桔梗さんの豪天砲の発射機構を参考に、徒手空拳の奥義として使え
るよう努力に努力を重ねた…渾身の一撃。

「轟撃！」

—ゴウッ！—

「なっ!?! 肩から先が消え…」

—ビタツ!—

「ッ!?!」

だがその一撃は…魏延の鼻先2mmで寸止めされた。
俺に女の子の顔を殴れるはず無いだろう?

「分かったか? 最強なんて、上には上がいるんだ…けど君は可愛い
妹弟子さ…これからはちゃんと努力するんだよ?」

—くしゃくしゃ—

言って頭を優しく撫でてやる、のだが…

「ふあっ…や、やめろお…努力、するからあ」

…何故悶える?

「ふむ…」

—さすさす—

今度は頬っぺたを擦ってみる。

「ふあっ、あんっ! や、やめろと言ってる…うんっ…やめて、く
ださ…ああんっ…」

これは悶えると言うランクじゃないな…もはや喘ぐ、だ。

…敏感なのか？

「…」

となると双子山の反応が気になるのが、正しい男…と言う事で…

「……」

「……（フルフル）」

「…（ニヤリ）」

俺が何を考えているのか察したのか、魏延が首を振る。

だが俺は、依然として自己主張の強い双子山を目の前にして…引く事をしなかった。

—むにゅっ—

そうして、かなり立派な双子山に手を伸ばしたのだが…

「きゃひいいいっ！　っぁ…」

—ドサッ—

「…あれ？」

途端…彼女は甲高い嬌声を上げ、そのままゆっくりと崩れ落ち…動かなくなった。

どうやら気絶したらしい。

「そこまで！ 勝者、呂堂！」

「」「」「わあああああっ！」「」「」

理沙の決着宣言により、鍛練場が一気に湧いた。

「あの寸止め、轟撃言うたか？ 目視出来へんかったわ…また腕上げよったなあ」

「…それでも刃兄、まだ本気じゃない」

「何と、あれだけの見事な正拳突きで…まだ本気じゃないのか！？」

「…ん、本気と全力は違う」

構えを解いた俺の周り霞恋、理沙達が騒ぐ。

「…誰か、彼女を木陰で休ませてやってくれ」

「ハッ！」

俺の指示で張遼隊と華雄隊から兵士が出てきて、魏延を担ぎ…息の合った足取りで、鍛練場の端の木の下へ向かう。

「ふぁ、ぁん…」

担がれる間も喘ぎ声を上げる魏延。

つかなんてエロい喘ぎ声なんだ…霞や理沙、恋や天と照で発散した物がまた…

「…刃、後でシよな…あの声聞いたら、ウチ…」

「俺もさ…もちろん理沙もな」

「…ああ／＼／＼」

「…さて、恋」

「何？ 刃兄」

「董卓軍に仕官して磨いた力、見せて貰おうか」

「ッ!？」

俺の言葉を受け、いつもならやる気なさげな恋の顔が真剣味を帯びる。

「恋、本気出せる？」

「出せる力全部出してかかって来い…けど恋も覚悟しろよ？ 俺も本気で行くから」

「…ん!」

「刃、得物や」

「ありがとう、霞」

霞から飛刃赤戟を受け取り、鍛練場の中央に立つ。
それに応じ恋も飛恋赤戟を構え、俺と向かい合って立つ。

「さあ記念すべき二百戦目だな」

「…恋、負けない」

「まさか…呂兄妹の本気の試合が見られるのか!？」

「おいおい、どっちが勝つんだ？」

俺と恋が試合をすると知り、周りの観客のざわめきが一気に激化する。

ちなみに恋にも言った通り、これは200戦目の手合わせだ。戦績は199戦100勝99敗…つまりほぼ互角なのだ。

最初の50戦ぐらいはぶっちぎりで俺の圧勝だったんだけど、飛恋赤戟が手に馴染みだした辺りからは互角の実力を発揮しだした。

やはり女の子でも呂布は呂布…侮れない。

「ああそうだ、詠」

「何？」

「これ」

—ジャララツ—

そんな中、俺は詠を呼び…腰に結わえていた銭袋を投げ渡した。

「これは？」

「少ないが、鍛練場の修繕費用の足しにしてくれ…ド派手に壊れる予定だからさ」

そして背中から朱雀を外して傍にいた霞に預け、改めて恋と対峙する。

「さあ恋、準備は良いか？」

「……ん」

―チャキッ―

―チャキッ―

俺が飛刃赤戟を構えたのを合図に、恋も飛恋赤戟を構えた。

「………」

「………」

やはり呂布の名を冠するだけはある。
滲み出る闘志と殺気は並の物じゃない。
だが俺とてそれは同じ…負けられない。

―ジリッ、ジリジリ…―

「………」

「………」

肩に飛恋赤戟を担ぐように構え、体をやや沈めて距離を詰める恋。対する俺も全く同じ構え飛刃赤戟を担いで、同じ姿勢で距離を詰める。

だが互いの足は、両者の間の距離が約2.5mに達した瞬間ピタッと止まる。

やがて訪れる静寂。

「おい、二人とも動かなくなったぞ？」

「阿呆、アレは互いが互いの間合いのギリギリ半歩外におるからや」

「ギリギリ半歩外…ですか？」

「そうだ…あの距離から半歩でも近付けば、それは互いの武器が互いの射程範囲に入る事を示している…迂闊に動けば先の先を取られるんだ」

そう、この相対距離2.5mが俺と恋の最大射程のギリギリ半歩先。互いに半歩でも迂闊に歩を進めれば、即座に攻撃されるのがこの距離。

「……」

「……」

互いにそれが分かっている為、おいそれとは動けなくなる。つまり膠着状態…しかし、そんな膠着状態を先に崩したのは…恋だった。

「…行く！」

―ダッ！―

―ゴウッ！―

一足飛びで跳躍しつつ距離を詰め、右手に構えた飛恋赤戟を袈裟懸けにふりおろて来る恋。

「ふっ！」

―ビュッ！―

―ガインッ！―

「シッ！」

―シュバッ！―

―ガッ！―

それを迎え撃つ逆袈裟の軌道で振った飛刃赤戟で捌き、がら空きの脇腹へ回し蹴りを放つ。

だが恋は俺の蹴りに対し肘鉄を合わせ、空中にしながら完璧なカウンターを放って来た。

「ちいっ…せいっ…！」

恋がカウンターのエルボーで俺の足首を狙っている事を察し、膝を曲げて強引に蹴りの軌道を変え…

―ギャギャッ…ザッ―

―ボツ！―

恋の前を素通りさせて蹴り足を地に付け、回転の勢いを利用して…
円周270度の遠心力が乗った、飛刃赤戟による渾身の薙ぎ払いを
放つ。

「…くっ！」

―ガギインッ！―

肘鉄のカウンターをかわされるとは思っていなかったのか、突然繰
り出された回転薙ぎ払いを…戟を垂直に立てる事で受ける恋。

「はあああっ！」

―ビュビュビュビュッ！―

―ガギギギギギン！―

受け身に回った恋の着地直後の隙を狙い、飛刃赤戟による突きのラ
ッシュをかける。

「速い！」

「ウチには及ばんけど、じゅーぶん速い突きやな」

だが一発も当たらない。

恋はその突き全てを、飛恋赤戟の刃で…時には柄で、全て受け捌く。

「…ふっ！」

そうして突きを全て捌き、最後の突きを引き戻す瞬間の隙を突き…
恋が攻勢に転じる。

―ヒュッ…ビュオッ！―

戟の石突きを俺に向かって振り上げる。

それを上体反らしで避けたのを見計らい、脳天から両断するかのごとく渾身の唐竹割りが襲いかかる。

「あぶねっ！」

上体を反らした状態から後ろへ跳躍し、受ければ即死間違いなしの一撃を回避する。

攻撃目標を見失った飛恋赤戟の切っ先は、振るわれた勢いそのまま鍛練の石畳へ吸い込まれ…

―ドガアッ！―

鍛練場の石畳に亀裂を走らせる。

うむ、流石は我が幼馴染みにして…史実における最強の武将。

まあ石畳を割るなんざ造作も無いが…ねっ！

―ゴウッ！―

―ドガアッ！―

―バキバキバキバキッ！―

恋の飛恋赤戟をかわし、カウンターで飛刃赤戟を振るう。

それを恋は天性の、野性動物じみた勘で跳躍して回避する。

さあ恋、俺が仕掛ける多段攻撃…見切れるかなあ？

「空中ではかわせまい…喰らえっ！」

—ビュオッ！—

言って空中にいる恋に対し、飛刃赤戟での純突きを放つ。

「空中では動けない、でも恋には無意味」

—ガギッ！—

そうやって恋は飛恋赤戟を垂直に立て、俺の飛刃赤戟の突きを真面目から受け止める。

「掛かったな！」

突きが止められる事こそ真の狙い。

恋の考え方からして、飛刃赤戟と言う武器の突きを受け止めるなら…穂先に備わった偃月刀状剣と、その隣にある斧状剣の間に…自身の飛恋赤戟の柄を食い込ませるようにして止めるはず。

しかし受けた一瞬に発生する無重力だけではどうにもなるまい！

—ギュルッ！—

「えっ？」

俺は手首を捻り、飛恋赤戟が食い込んだままの飛刃赤戟の穂先を回

転させ…

―バツ！―

「あっ！」

恋の手から飛恋赤戟を奪い取る。

―がしっ―

その一連の動作で恋の動きが止まったところを、抱きついて捕獲する。

「ん〜！ 強くなったけどまだまだだなあ〜♪」

押し倒す訳では無いが…抱きつかれるほど接近を許すと言う事は、短刀ですら刺されるほど近付かれると言う事。つまり恋の負けだ。

「……負けちゃった」

…こうして恋との200戦目の手合わせは、俺の勝ち越しと言う結果になった。

ちなみにその日の夕方…意識を取り戻した魏延だが…とんでもない

事になっていた。

どうとんでもないかと言うと…

—さすさす—

—むによんむによん—

「はふうん…お兄様あ、もっとお…」

—さすさす—

—むによんむによん—

「焰^{えんや}耶…頭ならいくらでも撫でてやるから、少し離れろって…胸当たってるから…」

「良いんです…当ててますから…この身も心も全て、お兄様の物なんですから…何でしたら頭だけでなく、全身を撫でて下されば…ワタシ、敏感なのでお兄様もきつと満足出来るかと思うのです」

：どうやら胸を揉んで気絶させた事で何かが目覚めたらしく、それまでの天狗っぷりが完全に消失し…何故かエロ従順な少女へと変貌を遂げた。

エロ方面に積極的な巨乳の子はエブリデイカモンな訳だが、口調まで違ってしまったのは如何な物か。

「それですねお兄様、今夜の事なのですが…」

「…」

「ワタシも霞様や理沙様、恋様や劉殿下のように…お兄様からの寵

愛を頂きたく思います」

これも魔改造で、改造成功と言えば成功なのだろう…ただ、霞と理沙がとんでもない勢いで焰耶の変貌ぶりを肯定していたのが気になる。

「お兄様あ、まだ夜には早いですけど…閨へ行きましょうよお…ワタシ、お兄様に揉まれて…もう…我慢が……」

…誰か助けてくれ！

伝記の39 刃、変貌させるのこと（後書き）

と言う訳で焰耶（魏延）がヒロインとして参入…魔改造のオマケ付きですが（笑）

真にデレた焰耶はどんな物か、と思い書いたのですが…皆様の反応や如何に！？

伝記の40 刃、友を得ること（前書き）

新しいオリ武将が1人登場します。
後書きは出来る限り読んでおいて下さい。

伝記の40 刃、友を得ること

く刃 視点く

さてそれから後、俺は何故か焰耶を伴ったまま…西涼の、馬騰に会いに行く事になった。

焰耶の変貌ぶりと嫁候補参入の事実、霞や理沙は激しく賛同していた。

恋に至っては『恋お姉ちゃん』と呼ばれて終始ご機嫌だった。

ただ…そんな焰耶を見ていた、天と照が何かを企むように…見知らぬ妙齡の美女と話していたのが気になる。

身長も顔立ちも、備えたメロンの大きさも…全てが紫苑さんや桔梗さん、黄蓋さんに似てるんだが…誰なんだろうか。

…で、いざ馬騰に会いに行こうとしたその時の事だった。

「刃、いる？」

「詠か？ 入ってくれ」

「入るわよ」

洛陽城の俺用の部屋で、馬騰に会いに行こうと準備している俺に詠が会いに来た。

ちなみに焰耶は理沙の案内で洛陽城を散策しているらしい。

「どうした？」

「お客さんよ」

「客？ 俺にか？」

「そうよ：端の客室に通してあるから、会ってちょうだい」

「分かった」

詠の話では客は3人組で、1人は顔見知りだが後2人は知らないとの事。

：詠の顔見知りで、かつ3人で行動する可能性のある人物：誰だ？

そんな事を考えつつ、詠の言う客室へ向かう俺の視界に：茶髪をポニーテールにした太眉の女の子の姿と、同じく太眉だが：月ほどの身長しか無い女の子の姿が映り込んだ。

「（あそこは：詠の言ってた部屋だよな？）」その女の子2人はその手に携えた槍を扉の前で交差させ、侵入者許すまじとした態度で立っている。

「失礼、俺は呂堂戦牙：この部屋に賈馱文和の知り合いで、俺に会いたいと言っている客人が来ているそうだが？」

客人が中にいるなら、まずは会わねば話にならない：そう感じた俺は、強い意思を込めた口調で門番っぽい女の子2人に話しかけてみた。

「アンタが呂堂か？ あたしは馬超、字は孟起ってんだ」

「たんぽぽは馬岱って言うんだよ」

これは驚いた。

西涼に名を轟かせ、蜀軍五虎将にその人ありと謳われた錦馬超と…その従弟、いや従妹である馬岱がこんな女の子だったとは。

「…馬岱よ、それ真名だよな？」

「あ、ついクセで…私は馬岱って呼んでね」

「分かった…で、君らが馬超に馬岱って事は…」

「そう、アンタに会いたって言ってんのはあたしのお袋…馬騰だよ」

なんつーアクティブな人ですか、馬騰さんは。つか病気を患ってるんじゃないかったのか？

「そうか…馬騰さんは中なのか？」

「ああ、今旅衣から着替えてるんだ」

「だから入っちゃダメなんだよ」

…と、そんな会話をしているその時だった。

「（ッ!?!）」

馬騰さんがいるらしい部屋の中から強大な闘気が感じられた。顔や態度には出さないが、これは眞面目に見ても霞級の闘気だ。

「（誰か…武芸者でも会いに来てんのか？）」

これだけの闘気を以て対峙するなんざ余程の事だろう。

だがとりあえず何があっても良いように、静呼吸で氣を練り全身に纏う。

同時に自身が発する事の出来る最大限の闘気を、自らもまた発する。

…その直後。

―バギヤッ！―

馬超と馬岱が交差させている槍の上部から、木の剣が扉をブチ破り…俺の顔目掛けてまっすぐに飛んで来た。

「…」

―ガシッ！―

だが俺は慌てず騒がず、その木剣を…氣を纏わせた手で掴み取る。

…真剣ならどうするんだって？

手刀で弾き飛ばすか、指で挟んで止めてやるさ。

「……へえ、やるじゃないか…アタシの投擲を掴み取るとは」

―ガチャ…―

剣を弾き飛ばした直後、そんなセリフと共に扉が開き…中から妙齡の女性が姿を現した。

見た目は馬超が年を重ねた感じだが、十分魅力的だ。

身長は俺並で、髪は馬超より長いのを首の後ろで束ねている。
体つきは馬超並だが、備えた双子山の破壊力は馬超より上…太眉は
遺伝だな。

腰には鞘付きの剣を提げているが、娘や姪が槍使いだから本当の得
物は槍なんだろうか？

「…アンタが馬騰か？」

「いかにも…アタシが馬寿成、その翠と蒲公英の…いや馬超の母
親で、馬岱の叔母だよ…アンタが呂戦牙だね？」

「そうだ」

「そうかそうか…いや、まずは非礼を詫びるよ…済まなかったね」

馬騰が言うには、自身に会おうとする輩は大概が自身達『馬一族』
をどうにかしようと…くだらない考えや態度で接する、軟弱者ばかりらしい。

「なるほどな」

「で、アンタもその類いの輩かと思ってね」

「で？ どうだった？」

「アンタに限っては認識を改める必要があるね」

「そうか、そりゃありがたい…じゃあ本題と行こう、馬騰…アンタ、
病を患ってるそうだな？」

「「ッ!？」」

俺の口から馬騰の病に対する意見が出た瞬間、馬超と馬岱…そして馬騰本人の顔が強ばった。

「アンタ、どこでそれを？」

「何、アンタの小さな友人に頼まれたのさ」

「お袋の小さな友人？」

「誰だっけ？」

「…月と詠、と言えば分かるか？」

月と詠、すなわち董卓と賈馱の2人。

「真名を許されてんのかい？」

「まあな」

「そうかい、あの子がね…」

「…」

言って感慨深そうな表情をする馬騰。

そんな馬騰の顔を視界に納めつつ、俺は馬騰の体の氣の流れをチェックした。

頭部の氣、大丈夫。
胸部の氣、大丈夫。
手足の氣、大丈夫。
腹部の氣…淀み有り。

「これは…：胃か？ 腸か？ いや…：肝臓か」

「えっ？」

これでも転生前には大病院の敏腕内科医を父に持つ男だ。
氣の淀んでる場所を、人体の構造に照らし合わせるなんか造作もない。

「馬騰、手を出してもらえるか？」

「あ、ああ…」

—スッ—

差し出された手を握り、馬騰の氣を調べる。

「ふむ…：なあ馬超」

「ん？ 何だ？」

「お袋さん、酒が好きじゃないか？」

「どうしてそれを？」

「やっぱりそうか…」

聞けば戦の前と戦の後、それに起床直後と就寝直前には必ず飲んでいるとか。

「一回に飲む量は大した事無いんだけど…」

「なるほど」

酒の定期摂取による、肝臓のアルコール分解率の低下…放っておくと肝硬変や脂肪肝と言った、肝臓病に発展する恐れがあるな。

ならば氣を打ち込んで、肝臓のアルコール分解率を上げてやるのが良いだろう…本当は鍼か何かがあれば良いんだが。

そんな事を考えている時だった。

「失礼する、ここに病人がいると聞いたのだが」

馬騰にあてがわれた部屋の、穴が空いた扉を開き…赤毛の青年が入って来た。

「君は？」

「俺は華佗^{かだ}、字は元化^{げんか}と言う」

俺は青年の名を聞いてマジで驚いた。

華佗^{かだ}と言えば、麻酔を最初に発明した人とされている。
佗は陀と表記する場合もある。

麻沸散と呼ばれる麻酔薬を使って、腹部切開手術を行ったという話があり：民衆からは『神医』と呼ばれていた。

三國志演義では：ホウ徳との戦闘で毒矢の傷を受けた関羽を治療する為荊州に出向き、肘の骨を削って毒を取り除くエピソードが有名だ。

ちなみにこの時関羽は、酒を飲みながら馬良と碁を打っているという描写があったりするが：正史の年代から言くと、この事件はすでに華佗の没後にあたったりする。

その後頭痛に苦しむ曹操に召し出され『麻肺湯をお飲み頂き、然る後に鋭利な刃を用いて脑袋を開けば病根を取り除く事が出来ます』と治療法を告げる。

いわゆる脳外科手術を奨めるのだが『主は余を殺すつもりか』と曹操は怒る。

華佗は関羽が肘の骨を削られても動じなかった事を引合いに出すのだが、曹操は『肘を切り開く事はできても、脳を切り開くことなどできるものか！ お前は関羽に通じるであろう者であるから、この機会に仇を討とうとするのか』とさらに怒り、華佗を投獄して拷問にかけて末に殺してしまうのである。

ちなみにこの時、史実では軍師荀イクが華佗の処刑を止めるよう乞うのだが：演義では荀イクは既に死んでいた為、命乞いした人物は賈馱に変えられている。

：いや賈馱って詠だろ？

「俺は五斗米道の教えを受けた、流れの医者さ」

「い」とべいど…

「「違う、ゴットヴェイダーだ」

…そうなんだ」

間違った発音をしようとした馬岱を、俺と華佗が同時に止める。

五斗米道を『ゴットヴェイダー』と発音するのは、恐らく現代人でなくば無理だろうが。

「病に苦しむ人を一人でも多く救う為、大陸中を旅しているのだが…西涼に立ち寄った際、馬騰と言う人物が病を患ったまま洛陽へ向かったと聞いてな」

「そうなのか、なら華佗…手伝ってくれ…彼女が馬騰…氣で調べた限り、肝臓の辺りの氣が淀んでるんだが」

俺は自身が氣の扱いが得意で、それを治療に使える事を華佗に告げた。

「肝臓か…」

「患部が深くて、治療効果が効果的には届かないんだ…鍼か何かがあれば良いんだが」

「鍼か！　なら俺の出番だな！　俺は金鍼に氣を流し、病魔を刺し滅す治療法を用いるんだ」

自身も馬騰を診察した華佗は、確かに肝臓に氣の淀みがあると言う。

「名乗り遅れた…俺は呂堂、字は戦牙…今は呉の客将だが、故あって洛陽に帰って来てるんだ」

「そうだったのか」

「華佗、君は鍼灸師だそうだが…馬騰の肝臓まで鍼は届くか？」

「ああ、三寸鍼なら届く…だが、俺には三寸鍼を扱えるだけの気が足りない」

華佗曰く、長い鍼なら患部には届く。

しかし鍼の長さに応じて込める氣の量は増える為、普段はそこまで長い鍼は使わず…いつもは2寸の鍼を使うらしい。

「三寸鍼なら行けるんだな？」

「ああ、確実に届く…だが俺には氣が…」

「氣なら俺が援護する」

…行けるのか？」

「任せろ」

ちなみにこの間、馬騰も馬超も馬岱も完全に置き去りになっている。

「じゃあ、馬騰と言ったか？」

「え？ あ…ああ、何だい？」

「俺達は見ないようにするから、上半身裸になって寝台にうつ伏せになってくれ」

「え？」

「何なら服を捲り上げるだけでも良いぞ」

「わ、分かったよ」

俺達の熱気に押され、馬騰は後ろ腰を晒す格好で寝台にうつ伏せになった。

「よし、行くぞ！」

華佗は袖口から金色の長い鍼を取り出し、それに力を込めるように叫ぶ。

「我が身、我が鍼と一つになり！ 一鍼同体！ 全力全快！ 必察必治癒………病魔覆滅！」

華佗の叫びに合わせ、俺自身も氣を爆発的に練り上げる。
…ヤベエ、華佗カッコいいんだけど。

「…」

そしてそれを華佗の肩に置いた手から、ゆっくりと流し込んで行く。

「よし、これなら…！」

俺の氣を受け、華佗が手にしている金鍼が真っ白に輝き…俺達がい

る部屋を満たして行く。

「行っけえええっ！ 華佗あああああっ！！！」

「うおおおおおっ！ げ・ん・き・に・なれえええええええええええええっ！！！！！」

ープツツー

「うっ…」

俺と華佗の渾身の叫びと共に金鍼が馬騰の体に刺さり、そこから黒い…靄のような物が吹き出し、やがて大気に紛れるようにして掻き消えた。

「…治療、完了」

言って鍼を抜く華佗。

その額には珠のような汗が浮かんでいる。

「…どうだ？ 具合は」

「ッ！？ ずっと感じてた気だるさと体の重さが…なくなってる…」

「手強い病魔だったが、呂堂の氣の力を借りれて良かった…病魔は完全に消滅したからな」

佇まいを直して起き上がった馬騰は、自身の体が治った事を娘達と共に喜んでいる。

「にしても呂堂、良く『五斗米道』を『ゴットヴェイドー』と発音出来たな」

「まあな…君の事を見た瞬間、何となくそう感じただけさ」

「そうか…なあ呂堂、俺が見たところ呂堂には五斗米道を極める資格がある…俺と一緒に大陸を回り、病魔と戦わないか？」

「いや、済まない華佗…俺は武芸者、どちらかと言えば病魔を救うより先に…刃で命を奪い、そして奪われる立場にある…それに、俺にはやる事があるしな」

「やる事？」

「ああ…」

俺は華佗を男、いや漢と見込んで話をした。

「…そうか、好きな女を沢山囲って八十歳まで生きると言う天啓を…」

「この世はいずれ動乱の世になるらしいんだが…その時に喪いたくない人が、今既に沢山いてさ」

「なるほど…動乱に備えての準備期間、と言う事なのか」

「そう言う事さ」

「……なら尚の事…呂堂、この金鍼を受け取ってくれ」

言って華佗が差し出して来たのは、先ほど馬騰の治療に使った物より1寸長い4寸の金鍼。

「時には武力では救えない者も出てくるだろう…その時はこの鍼を使うと良い…幸い呂堂には病魔を見抜く目と、治療に適した氣があるようなのでな…この鍼ならばどんな患部でも確実に届くだろう」

「そうか…なら受け取っておこう」

「それと、最終的な形は違えども理想は同じ人間に出会えた喜びを祝し…俺の真名『烈^{れつ}』を預かって欲しい」

「良いのか？」

「ああ、是非受け取ってくれ」

「そうか、ありがとう烈…俺の真名は刃だ」

こうして俺は五斗米道の基礎を修得し、友情の証に金鍼を得て互いの真名を交換するに至った。

ちなみにこの間…

「若いって羨ましいね」

「熱いな」

「たんぽぽは好きだな…こう言う雰囲気」

…と、馬一族が置き去りだったのは言う間でも無く…その後、馬騰が元氣になった事を喜んだ月と詠に見送られ…彼女達は西涼へ帰って行ったのだった。

またこの後数日…

「我が身、我が鍼と一つになり！ 一鍼同体！ 全力全快！ 必察必治癒………病魔覆滅！ げ・ん・き・に・なれえええええええええええっ！！！！！！！！」

…と、実に熱い叫びが洛陽城下町に木霊し…以後しばらく、病人と怪我人の発生率が激減したと言う。

もちろん叫び声の主は、俺だったりする。

伝記の40 刃、友を得ること（後書き）

華佗については、多くの他二次創作で治療のセリフ等に『勇者王ガオガイガー』のセリフを当て字で記述するケースが見られますが：当拙作では資料不足により、控えめに描写しております。

また、例によって馬一族の呼称がおかしいとは思いますが：PC復活後に修正しますので、予めご了承ください。

伝記の41 刃 来た人に会うのこと(前書き)

フイーツシュ!

伝記の41 刃 来た人に会うのこと

く刃 視点く

さて、それから5日：俺は霞や理沙、恋や焰耶：更には天や照を抱く傍ら、華佗からもらった金鍼を使い：五斗米道の実践経験を積みつつ、久々に充足した日々を過ごしていた。

もちろん、ただ怠惰な日々を過ごしている訳じゃない。

城下町に現れる暴漢退治や見回りと言った警備員紛いの仕事、霞や理沙：恋や焰耶との調練、試合をもこなしている。

文官仕事は書簡・竹簡運びしか出来ないけど。

ちなみに天や照と親しげに話していた、銀髪のメガメロン美女だが：何と、あの何進かしんである事が判明した。

何進って、黄巾の乱の辺りで死ぬような記憶があるんだが：

さて：そんなある日の昼下がりの事、何の予兆も無しにその事件は起こった。

「呉郡から月に贈物？」

「ええ、でも差出人は不明なのよ」

「どんな品物なのだ？」

「一辺が三尺の正方形の板で組まれた、赤塗りの箱です：重さはだいたい十六貫ほどでしょうか？」

16貫：約60Kgか。

随分重いな：魚か何かだろうか？

「今その荷物、どこにあるんかいな？」

「ボクの指示で、玉座の間の手前の小部屋に置いてあるわ：運び込むの大変だったんだから」

詠曰く：荷物を受け取った当初、男手が無くて武将もおらず：仕方なく小帝付きの侍女20人と共に、悪戦苦闘しながら運び込んだと言う。

「お疲れ様、とりあえず今から見に行こうか」

「……恋も、行く」

「恋殿と刃殿がおられるなら、何があっても安心なのです！」

そんなねねの賛同意見を得つつ、俺達は詠の先導に従い：玉座の間の手前の小部屋に置いてあると言う、件の荷物を見に行った。

詠が扉を開いて指し示したその先に、その荷物は鎮座していた。

「これがその荷物よ」

「確かに異様な荷物だよな」

「封も嚴重だな」

箱はいわゆるワイン箱の様式で蓋がされており、角を留めるように

ひし形に朱紐がかかっている。

底面の四隅には、衝撃吸収用の綿入り麻袋がくつついている。

「相当高価な品物だと思うのです」

「割れ物かいな？」

「どうだろう？　とりあえず匂いは…ん？　どこかで嗅いだ匂いだな…甘ったるいけど嫌じゃない…」

と、俺が顔を近付け…匂いを嗅いでいた、その時だった。

―ゴトツ！―

―ゴトゴトゴトツ！―

「「「「「ツ！？」」「」「」「」

俺が顔を近付けた瞬間、木箱が動き出した。

「今、この木箱…動かなかったか？」

「へう…詠ちゃん…」

「見間違いじゃ…ないわよね？」

―ダダッ！―

突然動き出した木箱に対し、恐怖感を露にする月と詠。

そんな木箱を見ながら、ねねが箱から遠ざかるように走り出す。

そして：

「ちんきゅーきゅーつく！」

部屋の入り口付近で高々と跳躍。

そのまま天井付近まで飛び上がると、重力に合わせて落下式の蹴りを放った。

：初代仮面ライダーのライダーキックを彷彿とさせる、見事なジャンピングキックだ。

―バガッ！―

そんな『ちんきゅーきゅーつく』が、後1mで命中すると言うその時：突然木箱の蓋が破碎し：

―がしっ！―

中の何かがねねを抱き留めた。

「ぬおお！ 放せ！ 放すのですっ！」

「：寝起きに蹴り起こされるのは勘弁して欲しいわ：呂堂に突き起こされるなら歓迎だけど♪」

言って箱の中にいた人物は、ねねを抱き上げたままゆっくりと箱から立ち上がる。

待て、どこかで聞いた声だし：どこかで見た顔だ。

いや顔だけじゃない。

その体つきにも見覚えがあるぞ。

「はあい♪お久しぶりね、呂堂♪」

「孫堅さん!？」

そう、箱の中から現れたのは…前呉王にして現呉王孫策の母、孫堅文台その人だった。

「何やってんすか!？」

「何って…呂堂の彼女さん達に、呂堂を抱いて良いかどうか聞きに来たんだけど？」

「はあ!？」

聞けば孫堅さんは先日、呉郡の城下町で桔梗さんと紫苑さんに出会い…俺に関する様々な事を聞いたらしい。

話を聞く内に俺に対する情熱を更にたぎらせた孫堅さんは、その日の内に甘寧に頼んで自身を梱包してもらい…洛陽太守である、月宛ての荷物として発送したのだと言う。

「会いたいが為に、自身を荷物として発送する前呉王って一体…」

項垂れる俺を尻目に、孫堅さんは霞や理沙…恋との話を始める。

「久し振りではないか、神蓮」

「あら、理沙じゃない…元気だった?」

「お陰様でな…子供はどうだ?」

「上の子に王位を継承したわ」

どうやら孫堅さんと理沙は知り合いらしい。

「そうか…で？　こうまでして我らに会いに来たのは、男として刃を抱く為と聞いたが？」

「そうなのよ…呂堂の事を考える度に、私の女が疼いちゃって…」

孫堅さんの口から垂れ流される、俺に対する想いの丈…聞いてて恥ずかしくなってくる。

そんな孫堅さんを見ながら、霞が口を開いた。

「なあ、孫堅はん」

「あら、呂堂や理沙から聞いてるわ…張遼將軍ね？　私の事は真名の神蓮で良いわ」

「…ならウチの事も霞で構わへんで？」

そしてあつという間に打ち解けてしまう霞と孫堅さん。

何なんだ一体…

「ありがとう…で、霞はどうなの？」

「どないや言うたかて、ウチと理沙に恋…桔梗と紫苑は連合の幹部やから、ウチの独断だけじゃ話は進められへんのや」

孫堅さんと理沙、霞が話を進めて行く。

途中『共有』とか『交合』とか『報告』とか『財産』聞こえたんだけど…記憶には残したくない。

…と、そんな時だった。

—コンコン—

「刃よ、昼食が出来たぞ」

「妾達が作ったんじゃない…たんと食べてくれ！」

部屋の扉をノックして、天と照がやって来た。どうやら昼飯の時間が来たらしい。

「霞達も相席するが良い…む？」

「そちは…江東の孫堅かや？」

「小帝殿下っ!？」

そんな俺達を見ていた天と照の目が、部屋の中央に佇んでいた孫堅さんを捉えた。

天と照に声をかけられた孫堅さんは、慌ててねねを降ろし…片膝をついてしゃがみ、叉手礼を取って俯いた。

無論、俺達は立ったままだ。

「ちよ、呂堂! 殿下の御前なのよ!?! 臣下の礼を取りなさい!」

そんな俺達を見て、孫堅さんが慌てた口調で礼を取れと言う。

だが俺達は全く意にも介さない。

「だって…なあ？」

「刃は今更やし…更に言えば臣下でもないし」

「更に言えばここは公の場では無いし」

「そらとひかりは、刃兄のお嫁さん」

「ッ!？」

恋の発言を聞いて息を飲む孫堅さん。

つか恋さんや、それは今言うべきじゃないぞ。

…この人、男に飢えてんだからさ。

「…呂堂、小帝様を抱いたの？」

「…ああ」

「~~~~~ッ! ずるーい!」

ほれ見た事か。

「霞や理沙、恋ちゃんや紫苑と桔梗はともかく…私達、呉の巨乳は抱かないクセに小帝様は抱くなんて…ずるいずるいずるーい!」

言って駄々っ子のように地団駄を踏む孫堅さん。

今は霞や理沙の目があるからこの程度だが、俺や天達しか居なかったらすぐに脱ぎ出すぞ？

「良いわよ、私だって切り札を切るもん…」

言って突如真顔になった孫堅さんは、再び又手札を取って天と照の前にしゃがみ込んだ。

「両小帝殿下に、この場を借りましてお願いがございます」

「お願い、とな？」

「はっ」

「良い、申してみよ」

「はっ！ この孫文台…最早呉王ではない事、先日の御知らせにてご存知かと思われます」

王位継承の儀の話か。

孫堅さんが孫策に、孫家の宝剣『南海霸王』と共に王位を引き渡し
たあの式典だな。

「うむ、新たなる呉王は孫堅が実子…長女の孫策が継ぎ、孫策から
もその旨の知らせがあったのう」

「仰せの通りです…それにより私は既に呉の王ではなく、今ここに
居るのはただの孫堅と言う女……両小帝殿下ならば、私の願い…如
何なる物かお察し頂けるかと」

言って孫堅さんは俺をチラッと見て、ニヤリと笑う。
そしてすぐまた平伏し、言葉が続ける。

「私は呂堂に惚れております」

「「「ッ!?!」」」

「……?」

突然の爆弾発言に、首を傾げる恋以外の面々…特に霞と理沙、天と照が息を飲む。

「呂堂が呉の客将になる以前から、呂堂の口より我ら呉将は好みだと聞いており…私も呂堂が客将となった時は、これ幸いと喜びました…ですが呂堂は有ろう事か『全ての呉将は、俺に対する性的交渉と誘惑の全てを禁ずる』と…」

そりゃそうだ。

確かに俺はハーレムを築いて、80まで生きると言う目標がある。

…いや、もはや80まで生きるのはオマケだが。

女に男を選ぶ権利があるように、男にだって女を選ぶ権利はある。同じ選ぶなら両者が納得出来るだけの立場を選びたい。

そして…俺には既に生涯を共にする約束をした、愛しい彼女達がいるし…いくら彼女達から許しが出ているとはいえ、見境なしにはなりたくない。

「長女の孫策も呂堂に恋心を抱いているようですが、娘は『女としての恋心』を優先するべきか『呉王として後継ぎを作る事』を優先するべきかで悩んでいるようです…しかし私は違います」

言って孫堅さんは立ち上がり…

—がばっ！—

「ちゅっ」

「んむっ！？」

「ちゅちゅ、ちゅっ…ちゅる、じゅるるる…」

それまで静観していた俺に抱き付くと、俺の唇に自らの唇を重ね…舌を差し込む、濃密なディープキスをしてきた。

—むにゅっ、むにゅむにゅ—

キスしながら、自身の胸を揉ませるご丁寧さ。

「ちゅっ、ちゅちゅ…んふっ、ふぁ…ちゅ、あん…ちゅちゅっ、ちゅ…っはぁ」

たっぷり20秒はかけた濃密なキスの後、俺を解放する孫堅さん。俺の唇と彼女の舌の間に、唾液で出来た銀色の橋が架かる。

「…殿下、どうか私に…想いを遂げられる采配を！」

そしてまた平伏する孫堅さん。

対する俺は呆然としていた。

いや確かに孫堅さんは物凄く魅力的だ。

三児の母だけあって包容力は凄まじく、俺を好きでいてくれるの

も知ってる。

「…紫苑や桔梗とはちゃうけど、結局は刃が好きな女の一人っちなう事かいな」

「好かれた男の妻の立場が約束されている我らに、ここまで愛情をまっすぐに示す事が出来る…ある種、羨ましい物があるな」

けどそれを叶える為とは言え、まさか月宛の荷物として洛陽にやってくるばかりか…天と照に直訴するとは。

「ふむ、孫堅はそこまで呂堂の事を好いておるのじゃな？」

「はい」

「うーむ…」

孫堅さんの真摯な訴えを聞き、天と照は考えを巡らせ始めた。

時折、月と詠が話に加わっているのを見る限り…話としては纏まりそうだ。

「…刃、ちょっと」

そんな光景を見ていた俺を、真面目な表情をした理沙が呼ぶ。

「どうした？」

「刃、正直に答えて欲しい…お前の目から見て、神蓮…いや孫堅は抱くに値する女か？」

「……ああ、抱く事が叶うなら抱きたい」

「…そうか……ならもう一つ聞く、刃は孫堅を愛する事が出来るか？」

「…彼女“だけ”じゃないが」

「ふむ」

俺の言葉に理沙は頷き、孫堅さんの前に歩いて行く。

「神蓮」

「…ん？ 何？」

「質問に答えてくれないか？」

「質問？」

「そうだ…神蓮は、刃が他の女に愛を囁いても耐えられるか？ いや、焼き餅を焼くなど言う訳では無いが…見ての通り刃は氣が多い男でな、将来は巨乳の美女美少女を沢山娶って…巨乳後宮を作り、そこで長生きする事が夢らしい」

言って理沙は、俺が未来人である事のみを伏せ…孫堅さんに俺の手柄を語った。

最初は訝しげな孫堅さんだったが、その表情は次第に明るくなっていった。

「なるほどねえ…だから呂堂はあそこまで頑なに、私達呉将の性的交渉と誘惑を禁じ…拒んだのね？」

「律儀な奴だよ…だからこそ惚れたんだがな」

「だとするとますます抱いて欲しいわね…言うなれば雪蓮や蓮華、いえ孫策や孫権も抱いてあげて欲しい…もちろん互いが納得の上だけど」

「そこまで言うなら一つ頼まれてくれないか？」

「なあに？」

言って理沙は霞と恋、それに天と照を近くに呼び寄せ…彼女達の耳元に口を近付けた。

小声で話しているっぽくて、内容は分からない…が、霞や孫堅さんが時折こちらをチラチラ見ている事から…内容は俺に纏わる事だと思ふ。

さて、あの手の問題には男が関わるもんじゃないんだが…

「月、詠」

「何でしょう？」

「何よ」

「膝、貸してくれ」

…こう言った場合は、寝て待つに限る！
ってな訳でおやすみ。

（理沙 視点）

「呉には神蓮の様に、胸が大きく見目麗しい…刃好みの女将が多い
と言うのは本当か？」

刃が体の向きを変え、私達の方から顔を背けたのを確認し…私はそ
う切り出した。

「そうね…呂堂の好みって言うなら、私を筆頭に長女の孫策と次女
の孫権…それに筆頭軍師の周瑜と黄蓋…黄蓋は呂堂に告白までして、
呂堂はそれを受けたらしいわ」

呉にいる主な将に関しては、前に詠から報告があつた通りの名前だ
った。

前呉王・孫堅

現呉王・孫策

王位継承権一位・孫権

王位継承権二位・孫尚香

筆頭軍師・周瑜

弓将・黄蓋

水軍長兼暗部・甘寧

「孫尚香殿や甘寧殿はどうなんだ？」

「あの子達は胸がねえ…」

「なるほど、これが…」

—むにゅ—

…ナイ訳やな？」

「ええ」

言って霞が自身の胸を持ち上げる。

そしてそれを肯定する神蓮。

神蓮が黄蓋殿から聞いた話曰く…刃はかなりの数の一般兵から人気があるが、それでも刃の好みにはそぐわない為…想いを告げる前の段階から範疇外で『可哀想に』と言う認識をされているらしい。

「小蓮は私の娘だから見込みはあるんだけど、なにぶんまだ幼くて…で？ 頼みって？」

「刃が呉にいる間だけで良い…刃の、欲の捌け口になってくれないか？」

「えっ？」

刃の伴侶を名乗る者として、夫の性的欲求は出来る限り解消してや

りたいし：私自身もして欲しいと思う。

しかし今の刃は、期限付きとは言え呉の客将。

雇われたからには最後まで役目を果たして欲しいとも思う。

「なるほどな：男としてきっちり仕事はして欲しいけど、妻の立場としては溜め込み過ぎて欲しくもない：：：せやから、刃がムラムラしてきたら：ウチらの代わりに体を貸してやってくれ：：：ちゅう事やな？」

「その通りだ」

「つまり、私は呂堂の代理妻：：ってところ？」

「うむ、そうなる」

都合の良い話で神蓮には悪いが、我らとて刃を愛でる事に関しては一日の長があると自負しているし：後からやって来た他の女に、刃を寝とられて黙っていられるはずもない。

だが刃とて健全な男：神蓮のように魅力的で、自身の好みに適合する女からの誘惑は耐えるのが辛いはず：先達として、認めたくは無いが：それほどまでに魅力的なのだ、神蓮と言う女は。

「ちなみにさっきも理沙が言うた通り、ウチらは刃に『浮気するな』とは言うてへんねん」

「へ？」

「『隠さずに正直に教えよ』とは言ったがな」

「だから恋も、しおんもききょーも…そらも、ひかりも…刃兄と一緒」

恋の言葉を受け、神蓮は考え込んだ。

神蓮から聞いた話だと、娘の孫策は…女としての自身を優先するか、呉王としての自身を優先するかで悩んでいるらしいが…

「ん~~~~~~~~」

…この悩み方も似たり寄ったりだと思うが。

「くー、くー……むにゃむにゃ、くー…くー…」

見れば刃は部屋の隅で、月様と詠の同時膝枕で寝息を立てていた。全く…話題の中心はお前だと言うのに、呑気な奴だ。

「……いいわ、分かった…それで手を打ちましょう」

「良いのか？ 口火を切っておいて何だが…」

「けどあれでしょ？ もし呂堂が本気になったら…きちんとした手順を踏めば良いし、そうになったら私も連合の一員…違つかしら？」

…ふむ。

昔から勘の鋭い女だったが、呉王を務め…三児の母になってなお、その勘の鋭さは磨きがかかったらしい。

「もちろんだ」

「王位にいた事もあり、かつ母の立場を経験した者か…」

「妾達もいずれは刃の子を産む…これほど心強い事は無いのじゃ」

天様と照様が大いに賛同の意を示す。

子育ての経験で物を言うなら、紫苑も一児の母なのだが…

「じゃあ呂堂が呉にいる間は、私が…ね？」

「もちろんこれ以後、如何なる事があっても刃の味方でいてもらうがな」

「分かったわ…私の真名に賭けて、何があっても呂堂の味方だと誓うわ」

「…なら決まりやな」

「うむ、しっかり頼んだぞ？」

「任せなさい！ お墨付きが出た以上落胆はさせないわ」

言って円陣を解散する一同。

さて、刃を起こして詳細を話し…神蓮と真名を交換してもらい、刃の虜になってもらわないとな。

（刃 視点）

「刃さん、起きて下さい」

「理沙が呼んでるわよ？ 早く起きなさい」

「ん、んん…ふあ、あ…あふ」

肩を揺すられる感覚に俺は、それまで沈んでいた意識を表層まで引き上げて来た。

目の前には困った顔をした月と詠、そして何やら嬉しそうな理沙の顔。

そう言えば、月と詠のダブル膝枕で寝てたんだっけか…俺。

「話は済んだのか？」

「うむ、神蓮を『刃愛豊乳連合』へ加入させる事になった」

「ちょ！？」

ただし、俺には決定権が無い…加入の是非を決めるのは、理沙・霞・恋・桔梗さん・紫苑さんの幹部5人。

ちなみにいずれか3人がいれば、採決を取れる決まりがあるそうだ。

そして、そこに孫堅さんが入ると言う事は…

「ウソだろ？ まさか、認めたのか？」

「話を聞く内に、刃と言う男の素晴らしさを神蓮にも知って欲しく

なつてな」

なんてこった…

理沙達が認めちゃったら…孫策や黄蓋さんに、何て説明するんだ？

「なんや神蓮、上は尖ってカチカチやしい…下は大洪水やないかあ？
下穿き着けとらんしなあ」

「やあん、いじつちやダメえ…呂堂の為に準備して来たんだからあ」

…理沙の向こうで孫堅さの胸と股間をまさぐる、にやけた顔の霞は見なかった事にしたいし…霞と孫堅さんの口から出たセリフは聞かなかった事にしたい。

「さあ刃、神蓮を閨へ連れて行ってやれ…あの肢体、存分に堪能し…お前の証を刻み込んでやれ」

「…はあ」

こうして俺は孫堅さんを自身の閨へ連れて行き、理沙に言われた通りその肢体を堪能したのだった。

ちなみに余談だが…孫堅さん、いや神蓮は底なしの性欲を持っている…俺は抜かず25発を達成、神蓮が気絶して幕引きとなった。

また…他の呉将についても、両者合意の上なら誰を食っても構わないと言われてしまった…とも言っておく。

伝記の42 刃 呼ばれること（前書き）

皆さんお待ちかね、あの人の登場です。

：好きなキャラなので気合いを入れて書きましたが、気合いが入りすぎて長くなりました。

また、時系列の矛盾や設定捏造がありますがあしからずご了承下さい。

伝記の42 刃 呼ばれること

く刃 視点く

「はあああんっ、はあっはあっ…そこお、もっつつよくう」

俺の膝の上に座り、だらしない顔をした少女が…紫苑さんや桔梗さん、黄蓋さん…いや真名で祭さんと言った、屈指のメロン達に並ぶ…言わばギガメロンを“揉ませて”恍惚の表情で身悶えしている。

俺の右手は彼女によって彼女の股間に宛がわれており、彼女自身の意思に従い…下着の中央にある、秘裂を下着越しにさすっている。ちなみに指は、貫通して滲み出す女性特有の分泌液に浸っていて…指の皮はふやけてシワシワだし、手首から先で濡れていない部分が無いほど。

「これ以上強くすると、俺も我慢が限界に達するんだが…ヤっちゃって良いのか？」

下着の中央の縦筋を指で擦りられ、膝の上で悶える少女に質問する。

「良いんですう、もっと強く揉んで捏ねて抜き差しして下さい…それで、お尻に当たってる、硬くて熱いモノでえ…願わくば最後までえ…もちろん和姦ですから、お気になさら…あああんっ！あうっ、うああっ…あんっ！」

言われて俺は、彼女の下着の中に手を入れ…茂みの無い恥丘中央で、熱く濡れそぼった花卉の中に中指を差し込み…指を前後に動かし始めた。

さて：何がどうなってこうなったのかを説明する為には、10日ほど時間を遡らねばなるまい。

10日前

洛陽にて霞・理沙・恋・天・照・焰耶・神蓮の花卉大回転を堪能し、燃え尽きた後の賢者タイムを経験した俺。

流石に日跨ぎで7人切りはツライ物があつたが、溜まりに溜まった物を全部出し尽くし：スッキリとしたのは間違いない。

そして帰り際：

『張文遠・華牙遠・呂奉先の連名にて、前呉王である孫文台の刃愛豊乳連合への加入を：劉弁及び劉協の名においてここに認める……当連合に属する者は刃を至上とし、如何なる時も刃の味方である事を厳命すべし』

：と言う文面の書簡が神蓮に手渡され、神蓮が名実共に俺の嫁候補に加わり：更には神蓮の独断で黄蓋さん：いや祭さんと、焰耶も同じような文面の書簡を手渡され：嫁候補、つまり『刃愛豊乳連合』に参加した。

そんな事がありつつ、俺は神蓮と焰耶を伴って呉郡へ戻り：賊を討ったり策を出したり、神蓮や祭さんや焰耶を抱いたり：時には休暇を貰ってまた洛陽へ戻り、霞や理沙達を抱いたり調練をしつつ：毎

日を過ごしていた。

ちなみに祭さんも連合参加者証があるから、待ちに待ったデカメロン：いや、メガメロンの収穫をさせてもらった。

感想は：すげえ、だな。

ちなみに、江賊『愚連』を討つ前に注文しておいた牙門旗だが：無事に受け取り、とりあえず将として動けるだけの準備は整っていたりする。

「ふむ：方天画戟を素体とした旗軸に、赤布の中央に白抜きで『呂』の文字：その下にある『刃愛豊乳連合共有財産』の文字が気になるが、全体的に中々凝った牙門旗じゃないか」

とは、馬商人が持ち込んだ軍馬を世話しつつ：俺の牙門旗を手にとった周瑜の言葉だ。

つか誰だ？

俺が意図してない文字を書き足したのは。

「まあな」

「赤布に白抜きで『呂』を書いたのには意味があるのか？」

「赤は俺の好きな色だからさ：姓字が白なのは、従妹が赤字布に黒で『呂』だからな：逆色をあしらってみたんだけ」

「なるほどな：で、旗を外せばそのまま戟としても使える訳か：しかしあくまでも旗なのだろう？ 旗持ちが居るなら使いやすいだろうが、呂堂は客将で：更には孤軍だからな：」

「そこがこれからの目標さ……俺としちゃ旗持ちに、文武両道な副官でも居れば良いんだが……程立や戯志才は根っからの文官で、前線には立たせられない……更に言えばアイツらもまだ客将の立場だし……焰耶は武官で前線には立たせられるが、文官としての素質は極めて低いからな……」

戻ってすぐ、程立や戯志才には俺の交遊関係……特に女性との繋がり
を聞いたされた。

隠す事でも無いから全部言っちゃったが、神蓮の事を知った時の孫策と孫権の反応は凄まじかった。

孫策は「ううう……呂堂と母様と祭の裏切り者!」と、目尻に涙を浮かべて駄々をこね、孫権は「このまま行けば呂堂を父と呼ぶ事に!？」
冗談ではない!」と、その目に怒りの炎を灯していた。

直後、甘寧に首を刎ねられそうになったんだが……

まあそんな事もありつつ時を過ごし、やがてその日がやって来た。

「……もう、行っちゃうの?」

「ああ、特に問題はなかった……が、延長も無しだ」

そう……俺が定めた『3ヶ月間の客将』が今日で終わるんだ。

「私を置いて行くの?」

身支度を整え、旅立とうとする俺の右腕にしがみつき……悲しげな顔をした神蓮が言う。

「いくら神蓮や祭さんが、未来の俺の嫁だとして……神蓮や祭さ

んは呉にとって必要や人材だろ？ 心配しなくても、時が来れば必ず迎えに来るからさ」

「約束よ？ 破ったら地の果てまで追いかけて、一物を切り落としてやるんだから」

再会の約束をして…破ったら去勢すると言い張る神蓮に、俺は背筋がブルツと震えるのを感じた。

何故ならその手のセリフは、これまでに数回…真剣な顔で言われた事があるからだ。

霞からは『ウチを捨てたら、刃を殺してウチも死ぬ』って言われた。

理沙からは『私を裏切ったら八つ裂きにする』と言われた。

紫苑さんは『私を捨てると、頭と股間に風穴が空きますよ』と。

桔梗さんは『四肢を叩き落として、一生愛でてやるわい』と。

…俺の周りはヤンだ女しか居ないのか？

恋と焰耶と天と照は別だが…

「堅殿に先を越されたが、俺も待っておる…必ず迎えに来るんじゃないぞ？」

左腕に祭さんがしがみつき、目を潤ませて言う。

「ああ、必ず迎えに来るから」

ちなみに15歳の発するセリフじゃない、と言ったツツコミは受け付けないので悪しからず。

「さて、俺の別れは済んだ訳だが…程立と戯志才はどうする？」

俺のセリフを聞いて納得したのか…ようやく腕を解放した神蓮と祭さんを確認し、俺は程立と戯志才に今後どうするかを聞いた。ちなみに焰耶は『ワタシはお兄様と一緒になら、黄泉だって着いて行きます』と即答してくれた。

「風はお兄さんと一緒に行きますよー？ お兄さんは風の太陽ですし、風にはお兄さんをたぶらかすと言う使命もありますのでー」

言って程立は、いつも眠たそうな目を更に細めた。

…巨乳になる為に呉へ留まったんだっけ？

『やっぱり呉の皆さんと行動を共にして良かったのですー…慎ましやかだった風の胸も、僅か三ヶ月で五寸は大きくなりましたからー』と程立は言う。

…いや、3ヶ月で5寸…15cmは育ち過ぎじゃないのか？

しかも5寸“は”と言う事は、つまり『最低でも5寸の成長を確認している』と言う事。

天や照に近しい成長能力を持つてるな…
まあ聞かなかった事にしておこう。

「戯志才は？」

「私も呂堂さんと共に行きます」

戲志才は周瑜の下で策や軍略を学び、その知力を更に高めたようだ。ただ知力が高まった事で想像力が強化されたのか、鼻血を噴く回数が増えたのは致し方無いだろう。

「次の逗留先が決まったら必ず文を頂戴ね？」

「呉郡在住前呉王、孫文台宛て…で良いのか？」

「うん、それで大丈夫だから」

「了解、んじゃ…次に会う日まで、壮健にな」

「刃もな」

「おう」

交換した真名を呼んでくれる祭さんとも別れを告げ、俺は呉郡から旅立った。

…さて、旅立って数日…俺達4人は順調に各州を回っていた。

映画『レッド・クリフ』で有名な、かの決戦の舞台である赤壁では…黄巾と思わしき賊に襲われていた、軍馬商人を助け…3頭の馬を手に入れ、程立と戲志才と焰耶の足にした。

俺は騎馬無しかったが、赤壁の隣は夷陵の山中で野生の狼の群れに出くわし…何故か懷かれ、若きリーダーの狼を手に入れて騎馬…い

や、騎狼にした。

もちろん、騎狼と言うからには常識はずれの巨体を持つ狼で…体長は2mに達し、孫尚香が飼っていた虎に引けを取らない。

四肢の太さは成人男性のそれを凌駕し、その強靱さと言ったら…黄巾賊200人を相手に、長坂での趙雲よろしく単騎駆け出来るほどだった。

また手足の爪や牙は下手な短剣より長く鋭い。

その爪や牙が持つ破壊力は凄まじく、相手にした黄巾の一団を紙の如く軽く引き裂いてしまう。

「狼を騎馬にしてしまうなんて、お兄さんは変わり者なのですよー」

「速いし乗り心地も良さそうですね」

「人馬一体って訳じゃねえが、コイツが居れば長時間の移動も苦にはならねえ…体力が半端じゃないから移動距離が稼げるし、頭が良いから一度指示を出せば俺が背中まで寝てても大丈夫だからな」

「犬嫌いのワタシとしても、お兄様“にしか”懐かない犬の存在は安心出来る物がありますね」

ちなみに『白雪』^{ばいしえ}と言う名前を付けたんだが…それは白雪の体が、新雪のように白く輝く体毛に覆われている事に由来する。

また、白雪だが…食料が減ってきたなと感じると自ら山林へ赴き、野うさぎや猪…時には熊を仕留めて持ってきてくれたりする。この食料が何度役に立ったか分からない。

「呂堂さん、焰耶さん…あれを」

「あれは…街だな」

「割と大きいですね」

とそこに、夷陵と南郡を隔てる州境に街を発見した俺達。

予定では通過して更に北上するつもりだったが、現実はその優しくない。

「なあ、あの街に少しだけ滞在しないか？　そろそろ路銀と、手持ちの保存食が尽きそうなんだが…」

呉郡を出て7日経過しているが、そろそろ路銀や食料が危なくなっている。

呉郡を出てすぐの頃はまだ余裕があったんだが、3日ほど前に焰耶が熱を出し…治療の為に薬と栄養のある食料を買い、それが少々痛手となっていたのだ。

「申し訳ありませんお兄様…ワタシが感冒など患ったばかりに…」

「たかが感冒されど感冒…治せるなら治すべきだ…気にするな」

ちなみに症状は比較的軽かった為…買った薬を飲ませた後、烈（華佗の真名）からもらった金鍼にて五斗米道による治療を行い…栄養食を食べさせて安静にすると、あっさりと治った。

五斗米道特有の叫びを聞いた戯志才がドン引きをしてたんだが、あの格好よさが分からないんだろうか…いや、男と女の感性の違いとして深くは問うまい。

「じゃあ三日ほど滞在しまして、その間に路銀を稼ぎましょー」

「私と風は酒家で給仕の仕事を探すつもりですが…呂堂さんと焰耶さんはどうしますか？」

「ワタシは街の主に掛け合い、用心棒でもしようかと…お兄様はどうなさいます？」

「病み上がりだから無理するなよ？ 焰耶」

「分かってます、お兄様…お兄様は如何なさいますか？」

「俺は、そうだな…豪族や地主に掛け合って、少しの間だけでも仕事は無いかって聞く事にするよ」

そうして俺達は街へと足を踏み入れた。

街は小さいながらも中々の活気に溢れ、人々の表情も明るい。

「何でも、娘さんが世間に疎いらしくてね…」

ふと立ち寄った食品店の店主に『戦事以外で、男が路銀を稼げる仕事を知らないか？』と聞いたところ、そんな話が聞けた。

「へえ…」

「ちょっとややこしい娘さんで…無事にこなしたら莫大な報酬が出るらしいけど、挑戦した者は数あれど…今まで成功させた者は居ないって話だよ」

ややこしい娘に世の常を教える事が出来るだけの男か…いや確かに戦事以外とは言ったけど、まさかジャイ子みたいなんが出てこねえだろうな？

「娘さんは見目麗しくて、愛嬌も良いんだけど…」

「なるほど…なら物の試し、俺も行ってみようかな？」

「そうかい？ まあ…兄ちゃんなら大丈夫だろうけど…ああ、そうだ…これあげるよ、お腹に入れてから行きなさいな」

言われて手渡されたのは、カラッと揚がった蠍の唐揚げ5つ。

「…これは？」

「『破軍蠍の唐揚げ』よ」

破軍蠍。

体長は8cmと、サイズとしてはやや大きな蠍。

その大きさに似合う、激しく強い攻撃性を持つ。

尾の針に仕込まれた毒は、即効性の強烈な幻覚誘発作用と…血液に反応し激痛をもたらす効果を併せ持ち、刺された者は幻覚に惑わされつつ痛みで暴れ狂うらしい。

たった1匹で軍が壊滅するほどの被害が出る事から、軍を破る蠍としてこの名が付いている。

俺は蠍の唐揚げをもぐもぐと食べつつ、店主と話す。
聞けばその娘さんの家は、街の奥にあるらしい。

「あそこの屋敷さ…見えるかい？」

…確かにあるな、それっぽい屋敷が。

「ともかく、もし成功出来たらまた話を聞かせてちょうだいな」

「分かった、んじゃ行ってくるよ…唐揚げごっそさん、美味かったよ」

そうして俺は店主に別れを告げ、件の屋敷を目指して歩き出した。

…

…

…

通りの最奥部にて聳え立つ、これでもかと言わんばかりの大屋敷。その存在感に若干気圧されつつ、俺は門番さんの案内で屋敷の奥へ通された。

「ここでお待ち下さい、主を呼んで参りますので」

言っただけを案内してくれた門番さん（女性）は、部屋の外へ消えた。

屋敷は見た目より狭く作られており、さっきの門番さん曰く『内部は寝所や台所…居間や客間と言った、最低限の設備しか無く…それ以外の空間は書庫で構成されているんですよ』との事だった。

なるほど、これだけの屋敷の実に7割が書庫なら…屋敷の見た目より中が狭いのも頷ける。

「お待たせ致しました…私が当家の主、陸泰鼎たいていと申します」

待つ事10分ほど。

そう言って現れたのは、薄緑の髪をした…中肉中背の男性。

陸って…まさかなあ？

「姓を呂、名を堂…字を戦牙と言います…呂堂とお呼び下さい」

「ご丁寧にありがとうございます…門番から聞きましたが、娘の事を見て頂けるそうで？」

「はい、自分でもお力になればと思ひまして」

「なるほど…時に呂堂殿にお尋ねしたいのですが、これが何かご存知でしょうか？」

言って陸泰鼎さんが差し出したのは、1巻の書簡だった。

「拝見します」

俺はその書簡を手に取り、中を見た。

そこにあったのは…

故、其疾如風。

其徐如林。

侵掠如火。

不動如山。
難知如陰。
動如雷霆。
掠鄉分衆。
廓地分利。
懸權而動。
先知迂直之計者勝。
此軍爭之法也。

…の文字。

俺はこれを知っている。

ドラマで見たのがきっかけで、意味まで調べて覚えたからだ。
…でなければ理沙の魔改造が成り立たないが。

「春秋の呉将、孫武が著の兵法書『孫子』は第七篇『軍争篇』の
節…風林火山ですね」

「ほう？　ならば意味は分かりますかな？」

「ええ」

言って俺は、風林火山の俺的解釈を諳じる。
風林火山…訳するなら

「疾風のように早いかなと思えば、林のように静まりかえる…燃える
炎のように攻撃するかなと思えば、山のように動かない…暗闇にかく
れたかと思えば、雷のように現れる…」

兵士を分散して村を襲い、守りを固めて領地を増やし…的確な状況判断のもとに行動する…敵より先に迂直の計を使えば勝つ…これが、勝利の法則だ…と言ったところでしょいか？」

淀み無く喋る俺を見て、陸泰霆さんはとても嬉しそうな表情を見せる。

「若いのに大したものですね…ならばもう一つ答えてください…この『風林火山』の文末にある『迂直の計』とは何かお分かりになりますかな？」

「わざと遠回りをして油断させておいて、隙を見せたら電撃的にたたみかける…つまり、静と動…陰と陽…飴と鞭…例えば色々ありますが、とにかく…正攻法と奇襲作戦のような『相反する物を巧みに使え』って事です」

「素晴らしい！」

周瑜と一緒に、程立や戯志才達と軍略の勉強してて助かった。でなきゃ今頃は門前払いを喰らってるだろうからな。

「呂堂殿になら娘を見て貰えるでしょう…今、娘を呼びますので暫しお待ちを…穩！ 穩！？ ちょっと来なさい！」

「はぁい」

泰鼎さんの呼び掛けに応じたのは、程立以上に間延びした声。

「何の御用でしょうか？」

姿を現したのは、呉にいる誰よりも…と言うより、これまで見た中でも一番のサイズであろうデカメロン…いや、メガを飛ばしてギガメロンを引っ提げた…泰鼎さんと同じ髪色をした、眼鏡の少女。

「紹介します、娘の伯言はくげんです」

…待て、陸家の人間で字が伯言だと？

このギガメロン少女が、あの呉の放火魔だと言うのか！？

「陸遜、伯言と申しますう」

言ってお辞儀する陸遜ちゃん。

動く度に激しく揺れ動くギガメロン。

いや、ギガメロンを凝視してる暇は無い。

「姓を呂、名を堂、字を戦牙と申します」

「穏、この方は若いながら大層な知力がありでな…お前の勉強を見て下さるそうだ」

「ッ!？」

泰鼎さんの言葉を聞くなり、突然震え始める陸遜ちゃん。

「ですがお父様…私に勉強は…」

「大丈夫だ、このお方なら…」

「……」

泰鼎さんの言葉に拒絶反応を示す陸遜ちゃん。

…ってか、何が俺なら大丈夫なんだろう？

そんな事を考えている俺をよそに、陸親子は会話を続けている。

「…分かりましたあ」

「うむ」

ややあって陸遜ちゃんが折れたらしく、彼女が俺を呼ぶ。

「ではお願い致します…」

「は、はあ…」

笑顔で居間から俺を送り出す泰鼎さんと、沈んだ顔の陸遜ちゃん。
勉強が嫌いなんだろうか？

「ここが私の部屋ですう」

そうやって案内されたのが『陸家書物庫』と書かれたプレートの下
がる、木の扉の前。

「ここは…書庫？」

「はいい」

通された部屋は、洛陽の玉座の間ほどの広さを持つ部屋で…見渡す
限り書簡と竹簡の山になっている。

「勉強って何を学ぶんだ？」

「実は私…来週からある方に仕える事になってましてえ〜…」

「軍師として？」

「見習いですけどお」

なるほど、これがきっかけで呉は孫家に仕える訳か。
ならば協力しない手は無いな。

「分かった、じゃあ俺で良ければ手伝うよ」

「ありがとうございますう…では準備が出来次第お呼び致しますのでえ、適当な書物をお読みになってお待ち下さいい」

と、陸遜ちゃんは未だに不安色の抜けない顔で…書庫の奥へと歩いて行った。

『なら待つとするか』

そう思い、俺は棚にあった書簡を手にとった。

「これは設計図か？ 支点に作用点…力点もあるから、槌子の原理を利用した何かなんだろうが…作用点がお皿状をしてるな…力点を下げると作用点の皿が上に…投石機か！？」

陸家の書庫は凄かった。

こう言った攻城兵器の類を纏めた書物はもちろん、これまで各地の名君や太守が行った政策の資料もあるし…兵法書も孫子全篇を始め、

孫子と合わせて武経七書と呼ばれる物：すなわち『呉子』『尉繚子』『六韜』『三略』『司馬法』『李衛公問对』までが揃ってる。

「これは武器の設計図だな：熱した鋼を叩いて延ばして折り返し、また熱して叩いて延ばした金属板を研磨して刀身にする：こっちは多節棍か？」

他には衣服の図案（何故かメイド服のデザイン画だった）や料理の資料（料理名は『王無頼素』とある：オムライス、と読むのだろうか）、各地の地理や特産物：日記帳まであったりする。

「……………にしても遅いな」

10数冊の書物を読んだ辺りで、ふと気になった。

他ならぬ：奥に行った陸遜の事だが。
何をしてるんだろうか。

目の前の壁に備え付けられた燭台を見る：立てられている蠟燭が、最後に見た時よりも5cmは短くなっている。
つまりそれだけの時間が経過している、と言う事だ。

「仕方ない：見に行くか」

意を決して書庫の奥へ足を運ぶ：のだが：

「はあっ、はあっ：んんっ、はあっはあっ：ああん、知識が：知識があ：」

奥に進むと聞こえるのは、女の子の物と思わしき喘ぎ声。
だが腑に落ちないのが『知識が』と言う単語。

知識で喘ぐって…艶本、つまるところのエロ本でも読んでんのか？
そんな事を考えつつ更に奥へ進むと、俺の鼻がとある匂いを嗅ぎ取った。

これは…アレの匂いじゃなかったか？

と、視界の端に…こちらへ背を向けて座る、陸遜の背中が見えた。

「陸遜ちゃん？」

「はあっはあっ、んああっ…来ますう、来ちゃいますう」

声をかけられた事に気付いていないらしい。

俺は陸遜に近付いて…

「ッ!？」

言葉を失った。

「はうっ、来ますう来ますう…はあっ、はあっ…来ちゃうんですけどお、読むのが…ああん」

見れば陸遜は、卓上に置かれた竹簡を凝視しつつ…左手は自らのメガメロンを揉みしだき、右手は股間部に伸ばしていた。
耳に響くは喘ぎ声と、水を打つ音。

…あの喘ぎ声にこの格好と水音、もしかしなくても自慰に耽ってるのか？

「…あ」

そんな事を考えてたら、目をキラキラさせた陸遜と視線が交わった。どうやら直視していたらしい。

「呂堂さあん、私の疼きを鎮めて下さあい」

そして飛び掛かれた俺…で、話は冒頭に戻る訳だ。

「呂堂さあん！」

陸遜の願いに答え、両手を激しく動かしてやる。

「んああああっ！」

すると甲高い声を発し、全身を痙攣させた後…陸遜は机に、突っ伏すように倒れ込んだ。

「陸遜ちゃん、あのさ…俺、そろそろ…」

「はあい、どうぞ」

………

………

…

それから数刻後、俺と陸遜は…何故か設置されていた、書庫の奥にある寝台の上で裸で抱き合っていた。

「…すみません、呂堂さん」

「いいって、気にすんな…俺も気持ちよかったし、むしろ手加減出来なくて俺がごめんなさいって感じだから」

その豊か過ぎる双丘を俺の胸板に押し付け、俺にしなだれかかる陸遜が言う。

「事後承諾になるんだが、良かったのか？」

「はい…元々、こんな私を受け入れて下さる方に捧げるつもりでしたから」

聞けば陸遜には『書物を読むと性的に興奮する』と言う、変わった性癖があり…その性癖のせいで、幼少の頃から友達が居ないそうだ。

「大概の人が、あの状態にある私を見ると…顔色を変えて、即座に逃げ出すんですが…」

「俺は違った、と？」

「…（コクリ）」

「そうか…けど、何でそんな性癖が？」

陸遜が言うには幼少期…後学の為と、書物による勉強を始めた際…何を間違ったのか、最初に手にした書物が図解付きの艶本だったらしい。

「…それ以来、書物を読むと性的に興奮するようになってしましてえ…」

「周りとは違いすぎるから、今まで黙り…隠し、人知れず抑えて来た…が、見習い軍師として仕官する事になり…興奮を恐れてはいられず、知識の吸収に踏み切った…と、なるほど」

確かに何も知らない奴が聞けば、陸遜の事をおかしな奴と敬遠するだろう。

しかし俺は、そう言った性癖も少なからず存在する事を知ってるし…だからと言って敬遠する事はない。

「まあ良いんじゃないか？」

「えっ？」

「そんな性癖があっても、って言ったのさ…第一、俺自身が巨乳の女の子にしか興奮しない性癖を持ってるしな」

「…うふふ、そうなんですかあ」

言ってにこやかに微笑む陸遜。

「あのう…これからは旦那さまと及びしても宜しいでしょうか？」

「旦那さま!？」

「はい…曲がりなにも、私の初めてを捧げた相手ですのでえ…陸家存続の為に、私を娶って頂こうかと」

「…なるほど、事後承諾か」

これが噂に名高い孔明の罠、いや伯言の罠か。

いやそれよりも…俺には既に霞・理沙・恋・紫苑さん・桔梗さん・黄蓋さん・天・照・焰耶・神蓮の、計10人からなる『刃愛豊乳連合』と言う未来の嫁達が居る事を言っておかねば。意を決してその事を話す俺だったが、陸遜は薄々察していたらしい。

「女の子の扱いが上手かったので、呂堂さんが他にも女性を囲っているのは薄々察してましたあ…ですがあ、英雄色を好むって言いますしい…私は構いませんよお？　ただあ、平等に愛して頂ければあゝ」

「そうか…：分かった…：じゃあ真名を預ける、俺の真名は刃だ」

「私の真名は穩ですう…不束者ですが、よろしくお願いしますねえ？」

こうして俺は陸遜…穩と真名を交換し、将来的に穩を娶る約束をした。

ちなみにその日は焰耶や程立達に伝言を頼んだ後、陸家に宿泊したのだが…翌朝の朝食にて、穩には赤飯が出てきた。

まあ赤飯だけならまだ分かるが…一番驚いたのはこれ。

「あ、貴女は昨日の！？」

「やっぱり貴方なら大丈夫だと思ってましたよ…私が渡した唐揚げ、食べていて良かったでしょう？」

あの食料品店の店主が、何と穩の母親だったと言う事実。

聞けばあの唐揚げには強力な精力剤としての効力もある他、衣には特殊な着色料が混ざっているらしく…食べた人間の唾液に反応し、歯を薄ピンクに染めるんだと言う。

「アレは妻が“この人なら”と見込んだ人物にだけ渡す唐揚げで、私は呂堂殿の歯を見て判断したんですよ」

「穩？　呂堂さんは貴女を受け入れてくれて、かつ頭も良く…更には『赤戟の竜巻』の異名を持つ、孫呉に名を轟かせる武芸者です」

と仰った。

「え？　あの、その二つ名をどこで？」

「私の知り合いに姓を甘、名を嵐…字を江覇こうはと言う、昔は長江にその人ありと言われた江賊の元長がいます…その人から聞きました」

長江で名を馳せた、甘の姓を持つ元江賊！？

ちよっと待て、もしかすると…

「……ひょっとして、その方には娘さんがいて…名は寧で、字は興覇だったりしますか？」

「はい♪」

甘の姓を持つ、長江に名を馳せた元江賊の長。

娘の名は寧で字は興覇。

つまり甘江覇殿は甘興覇の実父。

甘興霸と言えば呉に仕える将。

そしてこの穩は、数日後には呉へ仕官する。

俺の二つ名『赤戟の竜巻』は、神蓮が名付け親である。

つまり：陸夫人↓甘江霸殿↓甘寧↓（多分）周瑜↓（多分）周瑜↓甘寧↓甘江霸殿↓陸夫人…と言う情報伝達経路を経て、俺を知ったと言う事になる。

まあ“恐らく”と言う単語を付ける必要はあるだろうが。

つかここまで名を轟かせる、神蓮と江霸殿って…

まあ経緯がどうあれ、陸夫人は俺が『赤戟の竜巻』って知ってて、俺に穩を任せたと言う事になる。

そう思い陸夫人を見ると…

「♪」

「…」

満足げに頷いてらっしゃいました。

「実は私、錦帆賊で軍師をしてました♪」

親子して軍師とは…陸母娘おやこ、侮りがたし…ぐはっ。

そうガツクリと項垂れる俺を見つつ、陸夫人は愛娘へ声をかける。

「穩？ 呂堂さんの事、何があっても手放してはなりませんよ？」

「はあい、お母様…えへへ、旦那さまぁん♪　ちゅっ」

言って俺の口に吸い付く穏。

こうして俺は穏から『旦那さま』と呼ばれる事になった訳である。

伝記の43 刃、事態を知るのこと（前書き）

休止中に書き溜めたネタ、その1です。

無茶苦茶な展開ですが、修正は後程。

なお修正はこれ以後の投稿分に関しても同じです。

伝記の43 刃、事態を知るのこと

（刃 視点）

その後、俺は陸家を後にして風達と合流…旅を再開した。

「じゃあお兄さんは、大陸各地を巡って…自身が仕える主を探してるんですかー？」

「ああ、目標があるからな…だがその為にはまず、非力だが心の強い主君が必要だ」

騎狼の白雪に乗り、とりあえずは北を目指す。

程立や戯士才、焰耶達には『君主探しの旅』と言ったが、実を言えば『黄巾の乱終結地の視察』がメイン。

「非力だけど心の強い君主…ですか？」

「そうだ」

俺の描く夢は最終的に、俺自身が君主や太守になって為す物だが…最初の内は誰かの下で行動を起こす必要がある。

仕官によって正規将となっているか、はたまた客将なのか…違いがあればその程度。

そうなった場合…上官や雇い主ではなく、俺個人に忠誠を誓う人物が増えて行くと言う事。

そしてそれは規模が大きくなるにつれ、武官・文官などをひっくるめ…いつか上官や雇い主が有する戦力を超えてしまう事になる。

その現状を受けて心がブレない人物こそ俺の主君には相応しい。

「では別に非力である必要は無い訳では？」

俺の話を聞いていた焰耶から尤もな質問がもたらされた。

「確かにその通りなんだが……じゃあ焰耶、君に質問だ……焰耶が俺を部下として抱える城主や君主だとして、城の内外を問わずに才ある者を次々引き入れる部下を容認できるか？」

「……ワタシには無理ですね……どこをどう考えても、謀叛に向けた戦力増強としか考えられません」

「なら程立、君も同じ立場ならそんな事をしている部下はどう対処する？」

「風なら、そうですねー……権力を駆使して身ぐるみ剥いで放り出すか、消しますね」

つまり強硬手段に出る訳だ。

「……あ、だから非力なんですか？」

「そう言う事」

俺の言葉に何かを察したらしい戯士才の言葉に、俺は肯定の意を示す。

つまりその引き抜き行為を『謀叛』と捉えられて強硬手段に出られなくても、相手が非力ならば俺としては対処がしやすい。

まあ『国力増強を図っていたのに陛下がご乱心なされた』と言って

相手を討ち、自身が後釜に座することもできるが。

「そんな都合の良い君主が、この大陸に存在するのでしょうか」

「個人的見解で言うなら最有力候補は洛陽太守の董卓だが：彼女の場合は配下に筆頭軍師として賈馱を抱えているから、先に彼女をどうにかしておく必要が出てくるけど」

賈馱：詠の口癖は『ボクが月を天下人にする』だから、例えば俺が相手だって容赦はしないだろう。

まあ現段階で霞（張遼）・理沙（華雄）・恋（呂布）と言った主戦力は俺側だし、その他の戦力と言えば詠自身子飼いの私兵しかないはず。

朱儁將軍と皇甫嵩將軍、更に言えば何進將軍も洛陽の戦力たり得ると言えば戦力だが：その3者を纏めるのが天と照こと劉弁・劉協姉妹だが、彼女たちも俺側。
ガチバトルになっても負けはしまい。

「でしたらワタシの師匠は？」

「桔梗さんかあ：桔梗さんも条件的には可、むしろ良だが：現状は劉璋の部下っていうのが焦点だな：：：抜けてくれるか、むしろいつそのこと倒してくれれば」

ただ桔梗さんの場合、自身が俺のハーレム入りを希望してるフシがあるし：その友人たる紫苑さんに至っては会う度に『娶りに来てくださったのですか？』だもんな。

しかし彼女は子持ち：いや璃々ちゃんが悪い訳じゃないが。

：ともかく、俺はまだ親になる気はないんだ：親になる行為を散々やっという何を今更と言う意見は受け付けないのであしからず。

「って言う感じだな」

ちなみに余談だが：これまでの話は全て『主君探し』と言う事で進めており、俺以外の誰もが実は『俺が巨乳ハーレムを形成するには？』と言う話で進められているとは知る由もないだろう。

俺の話術も捨てた物ではないな：等と考えていたその時、相変わらず眠そうな声で程立が：

「……と、これまでの話は全て建前で：本当は『お兄さんが巨乳後宮を作る為に最適な君主は』と言う話だったんですよね？」

と言う、ピンポイントすぎる爆弾発言をしやがった。

程立の言葉で場の空気が凍る。

「……………それ、誰から聞いた？」

俺の夢が巨乳ハーレムであると言う事は、ごく一部の人間を除いて知らないはず。

現に、この場にいる5人では焰耶以外：って、ちょっとマテ。

「5人居るだって？」

「え？」

「???」

俺の右側では程立と戯士才が仲良く並んで栗毛の馬を走らせ：俺の左側では焰耶が黒毛の馬を駆っている。

ならばこの、俺の腰に回された：褐色の肌をした腕は誰だ？

そう思い、後ろを振り返ると…

「ちゅっ」

「んむっ!?!」

突如、俺の唇が柔らかい何かで塞がれた。

びっくりして目を見開くと、眼前には目を閉じた状態の桃色の髪をした女性の顔が。

…あれ?

この人って…

「…ちゅる、ちゅ…ちゅちゅっ、ちゅ…っはあ、はあい♪ 久しぶりね、刃」

「神蓮、なにやってんだよ…」

真名を神蓮こと孫堅が、俺の口と自身の口の間に銀の橋を架けつつ…屈指のワガママボディをアピールしながら笑顔でそこにいた。つかいつの間に白雪の背に乗った?

…

………

………

「その話、本当なのか?」

「ええ、間違いないわ：その場に立ち会ったもの」

聞けば神蓮は俺達が呉を去った後に起きた重大事件を俺に知らせる為、単身で呉を抜け出し俺たちの後を追っていたらしい。

「孫策さんが呉王を継いだ事をきっかけに、孫堅さんのやり方が気に入らなかった各地の豪族が決起して：」

「そのドサクサに紛れて袁術さんが揚州太守に収まった為、孫策さんたちは事実上の客将化：ですかー」

孫策が、呉王は継いだが揚州太守は継いでなかったのが主な原因だと神蓮は語る。

太守不在の揚州にて頻発する豪族の決起と、相次ぐ騒乱に漢王朝は頭を悩ませ：袁家の袁術に揚州太守を命じる。

結果、孫策たちは故郷ともいえる揚州を袁術に奪われたと認識したらしい。

「王と太守を兼任してなくちゃ、領地は守れない：か」

「ええ：だからあの時の雪蓮のキレっぷりと言ったら、これまでに類を見ないほどだったわね：何せ私や蓮華、祭や思春と言った名だたる将格全員で抑えなくちゃいけなかったから：」

感情に任せて暴れ狂った孫策は、持ち前の武の腕を間違った方向で発揮し：建業の街を単身で半壊させたとか。

：俺は歳のことを言われると怒りで街を半壊させる人を知ってるが、似たようなもんか。

「美羽ちゃんや七乃ちゃん：袁術ちゃんや張勳ちゃんとは、袁術ち

やんの母君の袁逢^{えんぼう}さんの頃から面識があるから悪い子じゃないのは知ってるのよ」

「そんな子がどうして揚州を？」

「…袁術ちゃんの部下で張勳ちゃんと同官位の同僚に『紀霊』ってのがいるんだけど、これがとんでもない下衆野郎でね」

ここで来たか、紀霊。

しかし紀霊って聞くと袁術に付き従う副官的イメージがあるんだが、それを指してゲス野郎とは…

「元は袁術家の金子を管理してたんだけど、姑息な手段での横領と着服を重ねて…今じゃ貯まりに貯まったお金で私腹を肥やし、贅沢の限りを尽くしているらしいの」

「袁術は立ち上がらなかったのか？ 例えば肅清とか」

俺の質問に対し、神蓮は首を横に振った。

つまり肅清などの排除行為は行わなかったと言う事。

自分の家の金子を食い荒らす害虫なぞ早々にやってしまえば…と思うのだが。

そう考えていた俺の脳内を見透かしたか…神蓮が神妙な面持ちで口を開いた。

「私と袁逢さんは友達で、彼女の生前から同盟を結んだの…でも袁逢さんの死後、娘の袁術ちゃんがその座を継ぎ…私は呉王を辞してその座を雪蓮に継いだ…だから私と袁逢さんとの同盟を、娘の世代で受け継いで行こうって言う手紙が送られてくるはずだった」

親世代の同盟を子世代が受け継ぐと言うのはそう珍しい話でもなく、この神蓮と袁逢の場合もそのケースで：娘の孫策も袁術との同盟は承諾していた。

しかし実際に送られて来たのは、同盟ではなく傘下に入れという書面だった。

「傘下？ 同盟ではなく？」

「ええ」

それを袁術が、私財の横領とともに紀霊へ言い寄った：すると紀霊は今度は袁術が煩わしいとばかりに、部下に命じて袁術を暗殺しようという画策。

幸い袁術の暗殺は親衛隊である張勳の活躍により未然に防がれたが、暗殺の罪を言及された紀霊はその罪を暗殺の実行犯だった部下に擦り付け：トカゲのしっぽ切りとばかりに暗殺を請け負った部下全員を斬首に処する。

「どこの国にもあるんだな、そう言ったキナ臭い話は」

「そうなのよ…これにより結局紀霊はお咎めなしとなったんだけど、袁術ちゃんは『自身の命は常に部下から狙われている』と言う認識をしてしまうの」

そして紀霊は暗殺の危機に怯える袁術の混乱に乗じ、貯めた金子を駆使して裏から画策：張勳勢を袁術から切り離すと同時に、洛陽の宦官に金子を送って：王位継承時に起きたゴタゴタのせいで太守不在だった揚州太守に担ぎ上げ、紀霊が今で言う摂政となって袁術を動かした。

こうして無能太守が出来上がる、と言う寸法だ。

「自身は死の恐怖に怯えていただけなのに、気が付いたら復讐の対象…か、けど…何で揚州なんだ？」

「紀霊は元々袁逢さんの傍付きだったんだけど、その時に一度だけ見たある人物に一目惚れしたのよ」

「ある人物？ 誰なんですか？」

「真名を蓮華こと、孫権…私の次女よ」

「えっ？」

孫権を手に入れる為には揚州を得る必要がある。

だが揚州は自身の主である袁逢が同盟を結んだ相手が住む土地。おいそれとは侵攻できない…ならばどうするか。

「…なるほど、その計略を練っているその時…袁逢さんが亡くなった訳か」

「そう言う事よ」

同盟とは基本的に締結相手が死ねば無効となってしまう。

だが生前より母から孫呉との同盟を聞いていた袁術は、自身も親世代に倣おうと手紙を書いたのだが…それを、孫権を狙う紀霊に利用されたのだ。

「つまり紀霊が孫権を得ようと起こした行動が、揚州太守に袁術を据える事ですか？」

「そうよ…今頃、揚州奪還に備えて文官は冥琳…周瑜を筆頭に、新参の穩と亞莎…陸遜と呂蒙もてんてこ舞いになってるし、武官の訓練も過酷化…陸遜や呂蒙と同時に仕官してきた、同じく新参の明命…周泰がへばりそうなほど調練が厳しくなってるわ」

周泰と呂蒙か。

これで太史慈を除き、俺が知る限りの初期呉将が全員そろったな。にしても陸遜…穩の奴、本当に孫呉へ仕官したんだな。

…あの性癖、大丈夫なのか？

その頃、建業城のとある一室では

「すゝ、すんすん…あぁん、旦那様ぁゝん♪」

「こんな…こんな事が本当に…母様だけじゃなくて、見習いの軍師に負けるなんて」

その豊かすぎる上肢に、光を反射する白い衣を羽織り…そこから立ち昇る（本人にしか分からない）持ち主の匂いを嗅いで悶えているのは…先日、呉へ軍師見習いとして仕官した真名を穩こと陸遜。

そしてそんな彼女を前にしてがっくりと項垂れているのは、現呉王で真名を雪蓮こと孫策。

ちなみに穩が羽織っている白い衣は何を隠そう、刃が前世で最後に着用していて…転生再誕時に一度失いはしたが、この世界で再び巡り会えた聖フランチエスカ学園の制服である。

「城外で知り合われた者と、呂堂との交流を止めたり阻止したり出来る策など存在しないぞ？ 雪蓮：ましてやこうして最新版とも言える『刃愛豊乳連合加盟者証』を持参されては…」

言って手にした書簡の文面を見つつ、眉間を指で揉みながらため息を吐くのは：呉の筆頭軍師で、真名を冥琳こと周瑜。

「（ほほう、しっかりと外堀を埋めてからの仕官か：それにあの乳房、ふはは！ 刃が戻った時が楽しみじゃ！）」

穏がそなえた、ギガメロンと呼称しても遜色のない大きく豊かな胸を見ながら：近い将来訪れるであろう出来事に期待を膨らませるのは、呉の宿将で真名を祭こと黄蓋。

「：これだけの人数が全員、呂堂に惚れているなんて：」

『刃愛豊乳連合加盟者証』に刻まれた人員名簿を見てそう言う雪蓮。ちなみに人員名簿に刻まれているのは：張遼（霞）・華雄（理沙）・呂布（恋）・嚴顔（桔梗）・黄忠（紫苑）・劉弁（天）・劉協（照）・魏延（焰耶）・孫堅（神蓮）・黄蓋（祭）・陸遜（穩）：と言う面々。

「近距離・中距離・遠距離の全てに、それぞれ適性を持つ武将がひしめき：かつ、軍師を備えつつ小帝殿下の庇護付き：それでいて全員が呂堂の後宮入りを希望、か：」

「これだけの面々が揃ってて、かつ母様がいる上に七万討ちの轟將軍がいる：私達の代わりに、袁術の討伐に行ってくれないかしら」

冥琳の言葉を聞いた雪蓮が、思わず本音を漏らす。

ちなみに『轟將軍』とは『赤戟の竜巻』に次ぐ、刃の第二の二つ名である。

そしてそれを横で聞いていて、今まで黙っていた孫権こと真名を蓮華が口を開いた。

「周瑜の言うとおり凄まじい面々だな…が、これ以上は増えるまいだがそれを穩が笑顔で一蹴する。

「旦那様としてはあゝ、まだ増やすつもりらしいですよおゝ？」

「「…」」

「（堅殿より『刃の後宮構成員は最終的に何人になると思う？』と聞かれた事があるが…いやはや、もはや儂にも想像がつかぬ…じゃが刃、男なら夢は大きく！　そしてこの儂を迎えに来るんじゃないぞ？）」

穩の言葉を聞いて沈黙する、穩以外の一同。

そしてそんな皆を黙って見ながら、刃の夢の濃さを再認識し…自身の加入が確定している事を、1人心中で喜ぶ祭。

と言ったやり取りがあったそうな

「つと、私はここまでね…ここから先は官渡、袁術の従姉で袁家現当主の袁本初が治めるギョウの地よ」

そんな話をしている内に俺たちは官渡との州境までやって来ていたらしい。

言って神蓮が白雪から降りる。

「袁紹か…」

袁本初。

三國無双における、反董卓連合の発起人。

霞の話だと袁紹は頭がアレらしいが、持ってる金は袁術の十数倍にも及ぶらしい。

詠曰く、主な将は文醜と顔良との事だった。

「じゃあ神蓮さんもお元気でー」

「ええ、ありがと…風も元気でね」

「はいー」

この袁紹領をどうやれば問題なく観察できるかと考えていた矢先、俺の耳に神蓮を真名で呼ぶ程立の声が聞こえた。

それだけじゃない…神蓮もまた、程立の事を真名で呼んでいた気がする。

もしかして…いや、それはない。

そう、気のせいだと思い戯士才を見ると…

「…（コクコク）」

俺の考えは間違っていないとばかりに彼女はうなずいてくれた。
なるほど、俺のハーレムドリームを程立に話したのは神蓮だったか
…真名交換はそのついでだろう。

「…とりあえず、気合を入れないとな」

去り行く神蓮の背中を見送りつつ、俺はそう呟いたのだった。

伝記の44 刃、男を見せるのこと（前書き）

書き溜めネタその2。

伝記の44 刃、男を見せるのいこ

（刃 視点）

それから後、俺達は互いの壮健を祈り：友好的な立場での再会を願いつつ、全員が真名を交換：旅団を解散し、それぞれが自身の目的を達するための旅路へ戻った。

程立こと風は『お兄さんに認められる胸を手に入れるべく、この大陸に居ると言われる華佗って人を探し歩きますー：そしてその医の腕で豊胸術を施してもらうのです』と。

：華佗って烈だよな？

つかまだ育てるつもりなのか。

郭嘉こと稟（戯士才は偽名だった）は『私は鼻血噴出癖を治してもらいに、風と同じく華佗殿を探します』と。

見聞を広めるといふ目的はどうしたと聞くと『：私も刃様の後宮に／＼』と顔を紅潮させて言ってくれはしたが、直後にまた盛大な鼻血のアーチを描いてくれましたよ。

稟とは特に何もなかったはずだが、いつフラグを立てたんだろうか？

焰耶は洛陽に来て俺に負けて以降の出来事を報告する為、桔梗さんが本拠地にいる巴郡の城へ戻っていった。

別れ際に『お兄様の頭髪をください、お守りにします：できれば下の毛がいいんですけど』と真顔で言い放った時は流石に引いたが。

そして俺は官渡、ギョウの街へ入ったのだが：

「何じゃこりゃ…」

街は外壁の中と外でギャップが凄まじかった。

外壁の外から見たギョウの街は荘厳にして華麗で雄大。

高さ25m、幅は100mを余裕で超すだろう巨大な壁が…近付く者に袁家の財力を匂わせる。

だが1歩中へ入ればどうだ。

家屋は4割が廃墟か倒壊間近、人通りは少なく…住民の顔に笑顔は無いし、酷い時には腐乱死体が放置してある。

「どんな奴が政を行えば、街や民がこんな有様になるんだ？」

更には街中で普通に婦女暴行や児童虐待、恐喝や窃盗まで発生してるし…

―ドスッ！―

「ぐえっ！」

もう一つ言えばこんな具合に、暴漢までウロチョロしている。

『袁紹は頭がアレ』とは霞の言葉だが、こんな状況じゃまさにその通りだと思う。

「大方、名族の出である事を鼻にかけ…自身の華麗さを磨く事に力を入れ、国の資本たる民草を蔑ろにしたせいだろ」

「……やっぱり、普通の人はそう言う捉え方をしますよね」

襲いかかってきた暴漢を蹴り飛ばして熨し、ふと口をついて出た本音を誰かに納得された。

誰だと思い振り返るとそこには、綺麗な黒髪を肩の辺りで切り揃え
：オーバーニーソックスと白のブーツを履き：見た目にマッチした
大きなメロンで、着込んだ青地の服を押し上げている少女が立っ
ていた。

「君は？」

「っと、失礼しました：私は袁紹様が配下の将で、名を顔良がんりょうと申
します」

言って少女：いや顔良さんはぺこっとお辞儀をする。

—ぷるんっ—

「：（ごくっ）」

それに合わせて揺れる大きなメロン：俺は思わず生唾を飲む。

思わず『やってしまった』と思ったが、どうやら聞かれていなかった
ようだ。

なるほど：この子が袁紹軍の二枚看板が一、顔良か。

「何度も『民は国の宝です』と申し上げているのですが、袁紹様は
聞いてくれなくて：」

：苦勞人属性持ちと見た。

「そうか：おっと、名乗り遅れたな：俺は呂堂、字を戦牙と言う武
芸者だ」

「ッ!？ 呂堂…さん？」

俺が名乗るなり顔良さんはハッと息をのんだ。

そして俺の全身を頭のとっぺんから爪先まで舐めるように見た後、やや俯いてブツブツと呟きを始めた。

…女の子“を”舐めるように見る男ってのは俺がそうだから分かるんだが、男“を”舐めるように見る“女の子”ってのはあんまり聞いた事が…いや、居るには居るな。

もちろん某先代呉王と、その王家に仕える宿将…それと某巴郡太守とその友人の事だが。

「赤髪で高身長、全身に無数の傷跡があり…携えた槍には『飛刃赤戟』の銘…」

…漏れ聞こえてくる単語から察するに、俺の外見的特徴だろうか？
…いや、それだけじゃねえな。

「巨乳好きって話で、私と同年なのに…既に数人の“嫁候補”なる巨乳の人がいて、夢が自分だけの巨乳後宮を築く事…」

………それ、俺のトップシークレットだよな？

呟いてるつもりが丸聞こえ…つかアンタもか、アンタもなのか!？
どっから得たよその情報…いや、本人の口から語られるまでは問うまい。

「…（チラチラ）」

—むにゅっ、もみもみ—

そして俺の顔をチラチラ見ながら、自身の胸を下から持ち上げて揉

む。

顔良さんの手の動きに合わせて形を変えるデカメロン。
うむ、眼福なり…良きかな良きかな。

…って顔良さんの胸をガン見してる場合じゃねえや。

「あの、顔良さん？」

「うーん、姫は多分大丈夫だろうけど…文ちゃんはダメっぽいし、
私が…ね…どうしようかな？ 最悪の場合は『ごっとうゝえいど
お』の…

「顔良さん？」

…っひゃい！ な、ななな…何でしょう！？ 呂堂さん

いやそんなに慌てなくても…つか烈の五斗米道を良く『ゴッドヴェ
イドー』と発音できたな。

烈曰く、普通の人は『ごとべいどう』と発音してしまうそうなのだ
が。

「足元の奴、そのままでもいいのか？」

「えっ？ ああ、そうですね…よいしょっと」

言って顔良さんはどこからともなく取り出した縄で男を縛り上げ…
って、何故に亀甲縛りなんだ？

「呂堂さんはここギョウで何を？」

縛り上げた男をヒョイツと担ぎ上げ、大通りを行こうとする顔良さんがそう聞いてきた。
何を、か。

「見聞を広めるための旅をしてて、たまたま立ち寄っただけなのさ」

「……なるほど」

等と話す内に、衛兵の物と思わしき詰所のような小屋の前に着いた俺達。

着くなりすぐに引き戸を開け、中の衛兵を呼びつける顔良さん。
程なくして金色の胴鎧を付けた男が数人出てきて、顔良さんに頭を下げる。

「罪状は多分『強盗未遂』で大丈夫でしょうけど、確証はないので意識が戻ったら本人から聞いてくださいね？」

「了解しました！ ご苦労様です、顔良將軍！」

ふむ、顔良さんと話す衛兵の表情は明るいな…慕われているようだ。
良い表情だ…と思ったのも束の間。

「おーっほっほっほ！ やっと見つけましたわよ、斗詩^{とし}さん」

そんな声が聞こえてきて、それと同時に衛兵の表情が見る見るうちに曇って行く。

さっきまで明るかった衛兵の気分を一瞬で悪くするとはどんな奴だ
と思い、俺は衛兵の視線を追った。

すると通りの向こうから、超の付くほど立派な金髪ツインドリルを
装備した…どう見ても『お嬢様』な女性が、口元に手を当てて高笑

いをしてながらやって来ていた。

「麗羽^{れいは}さま…」

顔良さんも一瞬だけ表情を陰らせたが、すぐに愛想のよい笑みを浮かべ…やって来た人物に対応する。

「今日は文ちゃんと一緒じゃなかったんですか？」

顔良さんの話し方から察するに、この金髪ツインドリルの高笑い女こそ袁本初その人なのだろう。

ただ…部下にはウケが悪い人物とみた。

「それが猪々子^{いしえ}さんったら、私の命^{わたくし}じた書簡整理を放り出し…街へ行ってしまったらしいんですの」

「もう！ 文ちゃんったら…」

やはり苦勞人属性持ちだな。
それも高レベルの。

「それで？ 斗詩さん、そちらの方は？」

「…俺は呂堂って言うんだ…アンタは袁紹さん、で良いのか？」

「いかにも、この私こそ三公を四代に渡って輩出した名家中の名家…袁家の現当主、袁本初ですわ！ おーっほっほっほっほっほ！」

「ふうん、そっか」

「：麗羽さまを目の前にして、何ら態度を変えない人って初めて見たかも：」

袁紹に対する俺の態度を見て、顔良さんは驚いたような表情をする。だって仕方ねえべ？

俺の中には『袁紹Ⅱ反董卓連合の発起人Ⅱ月を苦しめる張本人』と言う、真・三國無双の設定とこの世界の人物像が混ざった：独特とも言える先入観があり、そのせいでいくら三公四代の名家と言えど媚びへつらう気が湧かないんだからさ。
：メロンが大きいのは好感が持てるが。

「それで、呂堂さんは私が治めるこのギョウに何の用ですか？」

「顔良さんにも言ったが、見聞を広める旅の途中でね」

「見聞を、ねえ？」

「まあそう言う事だ：んじゃそろそろ行くわ：目的も達したし」

「えっ？」

ギョウ：と言うより袁紹勢には、俺の基準で合格ラインを突破出来る巨乳ちゃんが2人いた。

それが分かっただけでも収穫だろう：そう思い踵を返し、立ち去ろうとしたのだが。

—ひしっ—

—むにゅっ—

「ん？」

脇腹の辺りに何か細い物が巻き付き、俺は動きを止められてしまう。同時に背中に感じる、柔らかで温かな感触。

首と眼球を動かして後ろを見ると、そこには袁紹だけが立っていた。と言う事は…

「斗詩さん、何をやっていますの？　突然呂堂さんに抱きついたりして…」

いやまさかとは思ったが、これ…本当に顔良さんが抱き着いてんのか？

つか見た目より大きいんだな…じゃなくて。

「顔良さん？」

「…」

何がどうなっているのか説明を願ひ、顔良さんと呼ぶ俺。だが返ってきたのは沈黙と言う答えだった。

「えっと…」

どうしたものかと考えていると…

―がしっ、ぎゅっ！―

それまで沈黙・不動を保っていた顔良さんに動きがあった。最初は脇腹辺りに抱き着いていたのだが、俺の肩に手をかけてジャンプし…首には腕を、腰には足を回してしがみ付いてきた。いわゆる『おんぶ』の姿勢になったのだ。

巨乳ちゃんにしがみ付かれるのって最近もあったような…ああ、アレか。

「……………んか？」

「えっ？ 何だって？ 悪いけどもう一回言ってくれないか？」

気が付けば顔良さんは顔を真っ赤にしたまま俺の耳元へ口を近づけ、小声で何かを言っていた。

だが声が小さすぎて聞こえない。
何を言っていたのか知りたくなった俺は、もう一度言ってくれと頼む。

そして顔良さんが何を言っているのか聞き取ろうと、耳に意識を集中させたのだが…結果として絶句するハメになった。
何故なら顔良さんの口から出てきたのは…

「もう一度言いますね？ 呂堂さんって胸の大きな女の子が好きで、巨乳の女の子ばかりを集めた後宮を作るのが夢なんですよね？ それでもし宜しければ、その末席に…私を加えて下さいませんか？」

…と言う爆弾発言だったからだ。

つか俺のプライバシーはどこ行った？

最近、ほとんど無視されてるような気がするんだが。

「…確かに顔良さんは俺の好みだし、俺の夢を構築する一要員たりえる…じゃなくて！ 俺の夢が『大陸中の巨乳の子ばかりを集めた巨乳後宮を作る事』って誰から聞いた!？」

「ちょっと斗詩さん？ 私のお話を…」

後ろで袁紹が喚いているが、この際無視だ無視！

…何？

何で顔良さんは『さん』付けで、袁紹に『さん』がないって？

媚びへつらう気がないからって言った…いや、今それはどうでもいい。

「誰かから直接聞いたという訳ではなくてですね…」

聞くところによると、呉郡の孫堅↓現呉王の孫策↓孫策を監視していた袁術の細作↓細作の報告を得た張勳↓自分…と言う情報伝達経路らしい。

つかまたアンタかよ神蓮！

…ちなみに張勳と顔良さんの繋がりには、袁術・袁紹と言う『袁家に仕える者同士』と言う関係にあるとか。

「いや情報の伝達経路は把握したが、その手の話を聞いた女の子って普通…そんな事をほざく男を軽蔑しないか？」

「…実は私、呂堂さんの夢の話を聞く以前に…呂堂さんの事を知ってました」

顔良さんが言うには6か月ほど前、長社の辺りで俺を見たことがあるらしい。

6か月ほど前の長社って言うと…黄巾賊6万壊走十波才討ちの頃か。

その時顔良さんは軍を率いて黄巾賊の、つまりは波才を討ちに来ていたそうだが…現場に到着した時には、朱儁と皇甫嵩は残った部下達と洛陽へ帰還する途中…俺は徒歩で帰る途中だったそうだ。

「圧倒的な数の賊徒を単身で相手取り、かつ官軍の将二人を守ったまま無傷で敵軍を壊走させた強い人：そんな貴方を見た私は、女心に『ああ、結婚相手にするならこう言った無双の武芸者がいいな』と思ったんです」

それ以来、それまで（順当な手順で）貯めた私財を使って俺の情報を集め始め：日々、胸に秘めたその思いを募らせていったとか。

「そして十日前、件の情報経路で呂堂さんの夢を知った私は：呂堂さんが描く夢なら、私の思いも成就できると確信しました」

思いを募らせれば募らせるだけ、自分の体は俺好みの成長を続ける。それを本当に喜んだ顔良さんだったが、前々から彼女を狙っていた同僚の文醜に体が狙われているらしい。

：つかこれで俺が知りうる限り2人目の同性愛者だな。

まあこれまでの実体験に基づく私的意見を言うなら、女尊男卑の傾向が強く：男であるだけで低く見なされることが多い。

だから男と女が普通に愛し合うには、男が猛奮闘して女に見合う必要がある：だから男と女の、いわゆる『普通のカップル』が出来にくく：同じ女同士で愛し合う傾向が強まるのだろうと思うが。

「確かに文ちゃんの事は好きですが、それはあくまで友達としての“好き”であって：恋人や愛しい人に向ける感情の“好き”では無いんです」

そこまで言って顔良さんは、俺にしがみ付いたまま器用にも俺の正面へ回り：俺の顔を真正面から見つめた。

「このままだと女の子同士で、お互いの色んな初めてを捧げあうおかしな関係になりかねません…けど私は普通の女の子…上の初めても下の初めても、同じ捧げるなら想い人に…好きになった男性に捧げたいんです」

「顔良さん…」

「私の事は斗詩って呼んでください」

言って目を閉じ、口を突き出す顔良さん…もとい、斗詩。
これは応えてやらなきゃ男が廃るな。

「俺の真名は刃^{じん}だ」

—ちゅっ—

言って俺は斗詩の唇に自身の唇を重ねる。

顔を近づけたが為に鼻腔へ広がる、斗詩自身の物と思われる甘い香り。

不思議と落ち着く香りで、いつまでも嗅いでいたい…そう思った矢先だった。

「てンめえっ！　アタイの斗詩に何してやがんだあっ！！」

と、見れば翡翠色の髪をしたボーイッシュな少女がその顔に怒りの表情を貼り付け…背負っていたと思われる大剣の柄を両手で握り、それを振りかざしてこちらへ走ってくるのが分かった。

「斗詩、アレが？」

「はい、文ちゃん…文醜です」

ふむ。

1人の女を巡って争う男と“女”。

聞くだけならちよっと（いや、かなりか？）おかしいが、十分にあり得る昼ドラ的展開。

だがこのままでは命の危険があるから、ジャンルは愛憎サスペンスだな。

まあやることは決まってるから、ちゃっちゃと終わらせますか。

「そうか…なら、斗詩は俺の女だって証明してやるか」

「え？」

言って俺は斗詩を降ろして彼女の前に立ち、背負っていた飛刃赤戟に手を伸ばした。

伝記の45 刃、背中が煤けるのこと（前書き）

書き溜めネタその3。

伝記の45 刃、背中が煤けるのこと

く刃 視点く

「でええいりやあああつ！」

ーガキンッ！ー

振りかぶった状態から放たれる唐竹割りの一撃を、手にした飛刃赤戟で真正面から受け止める。

ふむ…一撃の威力としては、魔改造前の焰耶ぐらいか。

「君は彼女^{とし}の事を『アタイの』と、つまりは『自分の物』と言った訳だが…彼女の気持ちは確かめたのか？」

言いつつ文醜の顔から眼をそらさず、真剣に問いかける。

だが当の文醜は感情の全てが、激しい怒りのみで埋め尽くされているらしく…

「うるせえっ！」

受け止められた大剣（後に知ったが銘を『斬山刀^{ざんざんとう}』と言うらしい）を一度引き戻し、今度は俺の左肩を狙う袈裟斬りの軌道で再度振ってきた。

「喰らえええっ！」

「ッ!？」

このバカ、俺が“誰”の前に立ってるのか忘れてやがる。
袈裟斬りは受け止め辛く、躲すのが定石なんだが…仕方ない。

「（ニヤリ）…殺^とった！」

「はあっ！」

―ドカツ！―

…なっ！？

俺は呼吸により瞬時に氣を練り、それを膜状にして左肩周辺に纏う。
そしてその部位で文醜の斬山刀を受ける。

…氣は氣でしか貫けないから大ダメージには至らないが、痛いには
痛いな。

―がしっ！―

そして斬山刀と共に文醜が動きを止めた一瞬の隙を突き、その手を
掴む。

「あっ！ テメエ、放しやが…

「うるせえこの直情アホ女！」

…なっ！？ うあっ！」

俺の恫喝に怯み、また生まれた一瞬の隙を突き…今度は文醜の両手
首をそれぞれ打って斬山刀を手放させ、それを少し遠くへ蹴り飛ば
す。

「お前がお前の勝手に激怒して俺を斬るのは構わん…けどな、俺が誰の前に立ってるか忘れたか!？」

俺の言葉を受けて、俺の背後から斗詩が顔を出した。

その顔は少しだけだが、恐怖に歪んでいる。

「文ちゃん…」

「斗詩!？」 アタイは一体…そうだ! テメエ、アタイの斗詩に…

「俺は呂堂、字は戦牙! 斗詩との合意の上、将来彼女を娶る事を袁紹殿の前で宣言した男だ」

…ッ!？ 本当なのか? 斗詩…」

「うん」

文醜の問いかけに対し、俺の後ろに隠れていた斗詩が前に出てきて肯定の意を示す。

斗詩は言う。

文醜の自分に対する恋愛感情は嬉しいが、自分は同性愛に興味がない普通の女である事。

そんな普通の女である自分は、6か月ほど前に戦場で見た…とある、強い男に恋をした事。

その男が呂堂と言う名の、方天画戟を使う赤髪の武芸者である…つまり俺である事を知った事。

そしてその俺は、今この瞬間でこそ自分の前にいるが…俺が旅人と

言う事もあり、今を逃すと次が無い事。

…と、そこまで聞いて文醜は斗詩の言葉を遮って言った。

「ゴメン斗詩、アタイ馬鹿だからさ…小難しい事言われたって分かんねえんだ…もうちょつと簡単に言ってくれ」

「もう、文ちゃんったら…だからね？」

…直情なだけではなく、脳筋でもあったか。

「待て斗詩、袁紹殿も置き去りにしてるから俺が無茶苦茶簡単に言ってる」

言って再び俺は斗詩の前に立った。

「斗詩に、君と結婚する気は無いんだ…そして、斗詩は俺の女だ…分かったか？」

「……………」

俺の言葉を聞いて、かみ砕いて…飲み込んで、理解して…と、そう言った脳内での処理があったのか…しばらくはフリーズしてた文醜だが…やがて頭を振って再起動すると…

―トットトット…ガチャ、トットトット…ス、チャキツ！―

俺が蹴り飛ばした斬山刀の傍まで歩いて行ってそれを拾い、また俺の前まで歩いてきて…それを正眼に構えた。

「文ちゃん!？」

「ゴメン斗詩、アタイやっぱり馬鹿だからさ…大事な物が目の前で奪われそうになってるのに、理由を説明されたから『ハイそうですか』って納得できないよ」

「文ちゃん…」

「だから、呂堂って言ったっけ？」

「ああ」

俺が頷くのを見て、斬山刀を一旦地面に置き…

―ガチャツ、カチャカチャ…パチン―

―…スチャ―

どこかから取り出した金色の鎧を装着し、また斬山刀を拾い上げ…肩担ぎにして両手持ちで構える文醜。

これが文醜の本気モードと言ったところか。

そして文醜は言う。

「斗詩が欲しかったらアタイを倒して見せろ！」

「なるほど、そう言う事か…ならば、行くぞ！」

これは斗詩を賭けた、殺害もありな本気の殺し合いだ。だがここで文醜を殺してしまうと、ありとあらゆる意味で俺の負けになってしまう。

かと言って俺自身には殺す気も無いし、だからと言って負けて死ぬ気も無いがな。

「刃さん!？」

「大丈夫だ、斗詩：君が望まない結果にはしないさ」

「…」

そう言って俺は羽織っていた上着を脱ぎ、背負っていた朱雀を斗詩に預ける。

そして飛刃赤戟の切っ先を地面へ突き刺し、穿紅を装備：半身になって左手は肘を軽く曲げて前に突き出し：右手は拳を握って振りかぶったまま構えて立つ。

「袁紹殿、合図を頼みます」

「……分かりましたわ：では両者とも準備はよろしくて？」

「……（コクッ）」

「……（コクッ）」

「それでは：始めっ！」

—ダッ!—

—ダンッ!—

袁紹の合図で俺達は同時に相手へ向かって走り出した。狙いは互いに一撃必殺だ。

「喰らえ、斬山刀斬山斬！」
ざんざんとうざんざんざん

聞いただけならばトンデモ名称だが、その一撃はさっきの比じゃない。
いくら氣を纏ったところで、受ければ負傷は免れない。
ならば迎撃するのみ！

「でえいりゃあっ！」

—ブオンツ！—

裂帛の気合いとともに放たれる渾身の両手持ち袈裟斬り。

選択した攻撃・踏み込み・タイミング・狙った部位・込めた力…それら全てが素晴らしい一撃だ。

だが惜しむらくはその、斬山刀を握っている手がマズイんだ。

大剣という武器の特徴である『重さ』を、威力増幅要素として活かすための両手持ちなのだろう。

だから俺はそれを…

「だりゃあっ！」

まともに受ければ顎の骨が碎ける勢いで、氣のコーティング付与アッパ―を放ち…

—ガゴオンツ！—

弾き飛ばす！

「うあっ！」

より強い力で弾かれた事により、とっさに斬山刀を手放せなかった文醜。

結果として弾かれた斬山刀の重い刀身が生み出す遠心力に振り回され、上体をガラ空きにしてしまう。

「そこだっ！」

対する俺はまだ攻撃姿勢のまま。

「しまっ…」

「轟撃！」
こうげき

—ズドンッ！—

「ぐはあっ！」

破城鎚のような右ストレートが、ガラ空きだった文醜の鳩尾へ突き刺さった。

文醜は体をくの字に折った姿勢のまま、衝撃を受けて後ずさる。

…そう、洛陽で対焰耶戦に使ったあのパンチ技だ。

今回は当てる部位が鳩尾なので、寸止めせずに力いっぱい振り抜かせてもらった。

「ぐ、く…力が入らない…アタイの負け、か…」

「良い勝負だったが、結果は…な」

「くそ…斗詩とは、アタイが結婚するはずだったんだけどな…」

この状況でまだ言うか…もはや天晴だな。

だが、勝負の結果は明白…言わねばなるまい。

「斗詩は俺が幸せにするから、君の女としては諦めてくれ」

「ちくしょう…」

「…友達としてはそのままが良いが、な」

「ッ!？」

俺の発言を聞き、それまで俯いていた文醜が顔を上げた。
そしてその表情を苦悶から笑顔に変える。

「そうか、友達でいいなら今までと変わんないのか…はは、そっか
…よかった…」

—…どさっ—

言って文醜はニコツと笑ったのち、前のめりに倒れこんだ。
どうやら気絶したらしい。

だがその手には未だに斬山刀が握られているのを見る限り、文醜の
斗詩に対する想いは相当なものだったと容易に推測できる。

「そこまで！ 勝者、呂堂さん！」

倒れこんだまま動かない文醜を見て、俺の勝利を告げる袁紹。

と同時に斗詩が駆け寄ってくる。

「刃さん！ お怪我はありませんか！？」

だから斗詩よ、走ると胸が揺れて眼福…今は別に良いか。

「俺は大丈夫だ、それより文醜を見てやってくれ…いくら無手とは言え籠手装着で相当な力を込めて打ったし、部位が部位だけに内臓や骨を傷付けてないとも限らないからな」

「でも…」

「確かに斗詩は俺の女だ…が、文醜は友達なんだろう？ なら見てやってくれ」

「…はい！」

俺の言葉に対し笑顔で頷き、文醜の方へ駆けていく斗詩。そんな斗詩を見ていてふと気が付いた。

視界の端で…俯いて己の肩を抱き、何かに耐えるようにして小刻みに震える袁紹の姿に。

「袁紹？ どっか具合でも…」

—がしっ！—

…えっ！？」

体調でも崩したのかと思い、彼女に近寄り手を伸ばしたのだが…何故かその手が袁紹に掴まれた。

「ッ!？」

そして俺に向けられた袁紹の顔を見て、俺は言葉を失った。

「ハア、ハア…」

眼は潤みながらも妖しい光を灯してギラついており、その眼光の鋭さは獲物を見つけた肉食獣のようだ。

頬は紅潮しているが、病的な赤さではない。

口は半開きだが間抜け面ではなく、唇は艶めかしく濡れている。

吐き出されている息は荒く、肩で息をしている為に全身が上下しており…それに伴い、備えたデカメロンが揺れている。

「……………」

そんな状況にある彼女を見て、俺は前に見た…とある人物の事を思い出した。

他ならぬアノ人だ。

そしてアノ人はこうなった後、俺に（性的な意味で）襲い掛かってきたのだが…袁紹に限ってそれは無い。

いや、無い事を願いたい。

…が。

「りよ、呂堂さん」

「…何だよ」

「わ、私…」

—くちゅ—

「ッ!？」

何かを伝えようと佇まいを整えた袁紹だったが…体が動くことにより、とある状態に陥った女性からのみ聞くことができる…特徴的な、湿った水音が俺の耳に届いてしまう。

音の発生源は十中八九、袁紹の下肢。

「あー、袁紹？」

「わ、私の事は麗羽と呼んで下さいまし」

…ウソだ、ウソだと言ってくれ。

これじゃあんまりにもアノ人と状況がそっくりすぎる！

呉郡建業城のとある一室

「くしゅっ！」

「あら穏、風邪でも引いたの？」

「ずっと…いえ、風邪ではありませんが…大方、旦那様が私とのまぐわいの時の事を思い出してるんでしょうねえ」

「…あゝあゝ、私も刃に迫つとくべきだったかなあ」

「姉様っ！ 真昼間っからそんな破廉恥な！」

「葛藤の末に仕事を取ったんだ…今更取り消しは効かんぞ？」

「ぶーぶー、めーりんがいじわるするう！ 母様も何とか言つてよー！」

「…祭？ 私達はいわゆる勝ち組なのかしら？」

「かも知れませぬな、はっはっは！」

…どれが誰のセリフなのかは推して知るべし。

「これでよし、さて刃さん…刃さん？」

このまま放置するわけにもいかず、どうしようかと項垂れる俺に斗詩が近づいてきた。

「刃さん？ 背中が煤けてますが、役満でも喰らいましたか？」

いや斗詩、そのネタをどこで…ってそれどころじゃないんだ。
俺は目線を斗詩の顔で固定したまま、顎先で麗羽を指し示した。

「えっと、麗羽さまがどうかしま…ッ!? ウソ!?」

やはり同じ女同士は理解が早い。

一目見ただけで、今の麗羽がどういった状況にあるか分かったらしい。

「真名を預けられちゃったんだが」

「ッ!? 麗羽さま? もしかしなくてももしかしますか?」

「…(こくこく／／／)」

「むゝ! 麗羽さまが相手だって負けないんだからゝ!」

俺の言葉を聞いて袁紹に確認を取り…そしてそれが事実であることを知るや否や、頬をぷくーっと可愛らしく膨らませて怒る斗詩。

もはや言うまでもないが、俺は袁紹に気に入られたらしい。
このまま行くと、反董卓連合はどうなるんだろうか。

伝記の46 刃、王佐の才を威圧すること（前書き）

書き溜めネタその4。

サブタイにてネタバレ発生中…なお、オリ武将が1人登場します。

伝記の46 刃 王佐の才を威圧すること

（刃 視点）

結局その日は斗詩の案内でギョウの城へ行き、斗詩の部屋で斗詩と乱れた一夜を過ごした。

…斗詩の具合はどうだったって？

斗詩は尽くすタイプだと言っておこう。

そして翌日の朝、俺は袁紹…いや、昨日真名を交換したから麗羽と呼ぼう…麗羽に呼び出され、玉座の間へと向かったのだが…年甲斐もなく迷子になっていた。

だってギョウの城、広過ぎんだもんよ。

ざっと見でも洛陽城の2倍、建業城と比較するなら4倍の広さはあるだろう。

「斗詩や猪々子いしえの言うとおり、財力だけなら大陸随一って話もあながちウソじゃないな」

ちなみに猪々子とは文醜の真名で、今朝…麗羽が呼んでいることを告げに来た猪々子本人から『アタイの真名と一緒に、斗詩の事を頼むよ』と預かった。

「文官さんの話だところを左へ曲がって…ありゃ？」

途中で出会った文官さんに聞いた通りに歩いているのだが、なぜか最後はいつも同じ場所に出てきてしまう。

「今更だが俺、実は方向音痴なのか？」

目印にと付けた柱の傷の前に、自身に不本意ながら備わっていた無用の才能に軽く落ち込む。

そう言えば洛陽城も建業城も、造りは単純だったもんなあ。

洛陽城は上から見ると山の字の形、建業城はコの字の形をしてる。

けどこのギョウの城はどんな形状か予測がつかない。

どんな迷路だって時間をかければ必ず抜けられるという左手の法則

（右手の法則とも言う）が全く通じない。

文官さんや侍女の後ろを着いて行こうにも、出会う文官さんと侍女はみんな一仕事を終えて自室ないし待機所へ帰る人ばかり。

「……………む？」

こうなったら氣弾で壁に穴を開けて、無理やり直線的に道を作ろうかと思っていると…視界の端に、猫耳フードを装着した…月や詠と同じぐらいの身長で…これまでに見た文官さんや侍女とは明らかに毛色の違う少女を発見した。

手には8巻ほどの書簡が抱えられているのを見る限り、文官には違いないんだろうが…まあいい、あの少女に賭けるか。

「あの、すみません」

「……………」

意を決して話しかけたのだが、帰ってきたのは沈黙。

距離的にはそんなに離れていないのだが、考え事にでも夢中で聞こえなかったのだろうか？

「あの…」

「うるさいわね、何よ！ 男のくせに私に話しかけないで！！ 全く、これだから男は嫌なのよ」

「……」

トライアゲインとばかりに話しかけたのだが、次に帰ってきたのは全ての気力も失せそうな酷い暴言だった。

しかも男性を対象にした、男性非難の色が強い…凄まじい暴言。

「男ってのはみんなそう！ 相手が女ならば誰であろうと容赦なく襲い掛かり、股間にぶら下げた汚らしいモノで孕ませようとするのよ…どうせアンタもその類なんでしょ！？ この全身精液男が…」

…過去に男からどんな嫌がらせを受けたかは知らんが、どうしてここまで言われる必要がある？

流石にキレて良いよな、コレ。

「…ハッ、天地逆になってもテメエだけは襲わねえよ」

「何ですって!?!」

「例え世界の全人類が滅び去り、残ったのが俺とテメエだけになっただけで襲わねえよ…つかそんな状況になったら、笑って舌噛み切って死んでやるさ」

俺にだって選ぶ権利ぐらいあるし、第一こんな断崖絶壁女…劣情のれの字すら催さねえよ。

「…ふふ…うふふ……」

…お？

貶されすぎて頭のネジ飛んだか？

「うふふふふ、そう…そうなのね、そこまで言うなら…今この場で殺してあげ…」

「ッ！」

…ひっ!？」

「武芸者と対峙中に『殺す』なんて言葉、例え感情が高ぶってるせいであっても迂闊に言うんじゃないやねえ…相手によっちゃその瞬間、テムエの頭が胴とサヨナラすんぜ？」

猫耳フードの口から出かかった『殺してあげる』と言う言葉に対し、俺の体は反射的に殺気を発し…この猫耳を殺そうと動いた。

だがまだ相手が俺だから攻撃に至らず、論す事が出来ているが…これがもし恋や神蓮相手なら、その瞬間死んでるだろう。

「…お？ アニキじゃねえか…何やってんだ？ アタイの部屋の前で」

俺の殺気に怯み、床に座り込んだ猫耳フードを見下ろしていると突如そんな声が聞こえ…振り返るとそこには猪々子が立っていた。

「猪々子か、ちょうど良かった…麗羽に呼ばれてんだけど、この城広すぎてさ…迷ってたんだよ」

「あー、そうなんだ…で？ 筍イクと何してんだ？」

そう言っ、未だに座り込んだ猫耳フードの前にしゃがみ込む猪々子だったが…俺は猪々子の発した言葉に強い違和感を感じていた。

「…なあ猪々子、筍イクって誰だ？」

「誰だって…目の前に居るじゃんか」

おかしいこと言うなと言わんばかりの表情で、座り込んだ猫耳フードを指さす猪々子。

オイオイ、ウソだろ？

この断崖絶壁の男嫌いなガキが、やがて曹操を支えたあの『王佐の才』だって？

「…猪々子、とりあえず早急に麗羽んそこへ案内してくれ」

「あー、アニキ…道に迷ったんなら天井を見ながら行くと良いぜ」

「天井？」

言われたとおりに天井を見上げると天井には…

『↑調練場 →玉座の間 ↓食堂』

と言う、行き先案内表が貼り付けてあった。
つか天井にかよ、分かりづらいわ！

…

……

……

そうして曲がり角で時折天井を見上げつつ、ようやく玉座の間へやって来たのだが……

「何ぞこれ……」

そこはカオスの真ただ中だった。

玉座は空席で、その前で麗羽と斗詩が（胸の掴み合いの）喧嘩中。それを呆れた表情で見ている猫耳……もとい、筍イク（仮）。

加えていつの間にか麗羽達の近くに陣取り、2人の喧嘩をエロオヤジの表情で見ている猪々子。

そしてそんな麗羽や斗詩、猪々子の事を『いつもの事』と言った微笑ましい表情で見ている兵長及び文官の皆さん。

「誰か説明してくれ……」

一向に收拾のつかない玉座の間と、その入り口でがっくり項垂れている俺。

「……あの」

「……はい？」

……と、そんな俺に向けてかけられたと思わしき澄んだ声。

だが辺りを見渡しても、声は聞こえども姿は見えず。

誰なんだ一体と探し続けていると不意に、服の袖がクイクイと引か

れる感触が。

引かれる方向に視線を降ろせばそこには…ダークブラウンのベレー帽を頭に乗せ、腰まで伸ばした綺麗でまっすぐな銀髪を緑のリボンで束ねた…絶世の美少女が立っていた。

「…君は？」

「わわわ！ 突然しゅみましえん！ 私は徐庶、字を元直と言いましゅ！」

うわあ、カミカミだあ…ってちよつとマテ。

「徐元直だって！？」

徐元直。

史実では豫洲潁川の出身で、撃剣の使い手。

持ち前の義侠心で友人の敵討ちを引き受けるが、役人に捕まる。

後日友人に助け出されるが、その際に強く感ずる物があって剣を捨てる。

その後は学問に励むようになり、やがて司馬徽の門下となり…あの諸葛亮と仲良くなったらしい。

「はいっ！ 私が徐元直でしゅ！」

言って徐庶…いや徐庶ちゃんは胸を張ったのだが…

—ぶるんっ！—

彼女はその身長と見た目の年齢にそぐわない、とてつもなく大きなメロンを備えていた。

つかデケエ！

身長は風ほどしかないのに、胸は現時点で紫苑さん並のギガメロンとは…徐元直、恐ろしい子！

「…やっぱり気になりますか？　これ」

ジッと胸を見ていたのが分かったのか、徐庶ちゃんがそう…顔を赤らめて言った。

「あ、いや…ごめん」

「良いんです、男性なら仕方の無い事…もっと背が伸びてからこうなるのでしたら良かったのですが」

「…なるほど、そういう悩みがある子も居る訳か」

「ええ…」

玉座正面のカオスは…未だ継続中、と。

「ところで…ああ、まだ名乗ってなかったな…俺は姓を呂、名を堂…字を戦牙と言う、旅人兼武芸者さ」

しかし徐庶か。

腰に直剣を佩いているのと、たまに見える手の剣ダコを見る限り元撃剣の使い手と言う話は史実と相違がなさそうだ。

そして司馬徽の門下で巨乳…戦える巨乳軍師か、欲しいな…

「ところで呂堂さんはここで何を？」

「俺は麗羽…いや袁紹さんに呼び出されたんだけど」

「…ああ、袁紹様はあの調子ですからね」

言っただけ息を吐く徐庶ちゃん。

チクショー、呆れた顔も可愛いじゃねえか。

「…あ」

「……あら」

そうやって出身がどうか、これまでの司馬老子…司馬徽殿が学院長を務める私塾『水鏡女学院』の話とか（何と徐庶ちゃんはあの諸葛亮だけではなく、またの名を鳳雛と謳われた名軍師『ホウ統』とも同門・同期で仲が良いらしい）を聞いたりして過ごす事2刻（約30分）…ようやく麗羽と斗詩が、俺が玉座の間に来ている事に気が付いたようだ。

「…あら斗詩さん、お着物が乱れてらっしゃいますわよ？／／／」

「そう言う姫こそ、服が乱れていますよ？／／／」

言っつまろび出していた互いの胸を互いの服へしまふ麗羽と斗詩。

斗詩のは昨夜堪能したから大きさも感触も知ってるが、麗羽も結構着痩せするタイプなんだな。

結構大きい…じゃなくて、ひょっとしてアレか？

これまでの30分間、麗羽は乳丸出しで過ごしてたのか!？

「さて、刃様」

オイオイ、ちょっと待て…刃“様”だって？
俺、麗羽から崇められるような事したか？

「…あのさ、麗羽…流石にガラじゃないから様付けは勘弁してくれないか？」

「嫌ですわ」

様付けなんてガラじゃないと、麗羽の俺に対する呼称を遠慮した俺。だが麗羽は俺の遠慮を即座に拒絶しやがった。

「嫌って…」

「名族袁家の現当主である私を目の前にして、その名が持つ財力や威光に一切ひれ伏さず…それでいて私の親衛隊を務める猪々子さんを軽くあしらひ、同時に倒した相手の女性を思いやれる気遣い…私、そんな刃様に惚れてしまいましたの…従って私が惚れた殿方を呼ぶ時の敬称は『様』以外あり得ませんわ」

あり得ませんわと言って目を閉じ、頬を赤らめた麗羽は…玉座の間と言う場所にいるにもかかわらず、体をクネらせ始め…自分の世界へトリップし始めた。

…が。

「袁紹様」

「……はっ！？ …オホン／＼／／」

徐庶ちゃんの呼びかけに応じ、すぐに帰ってきた。

…すげえな、徐庶ちゃん…文官勢でも御せぬ麗羽を、ああも簡単に

動かすとは。

「……………」

—ぎゅむっ—

いや斗詩よ、徐庶ちゃんの胸を注視してる訳じゃねえから…無言で歩み寄ってきて、無言で脇腹をつねらないでくれ…地味に痛い。

「…話を戻しますわ…さて、刃様には一つお願いがありますの」

「お願い？ 俺に叶えられることなら聞いてやる」

「じゃあ私と結婚を…」

「それは無理だ」

「……………冗談ですわ」

ウソをつくんじゃない…つか何だ、今の間は。

8割方本気だったくせに…見ろよ、斗詩のこの般若のような形相を。右手が腰にさがっている金鎚（銘を『金光鉄鎚』きんこうてつづい）と言うらしい）の柄に伸ばされている辺り、斗詩の方は事と次第によっては謀叛も辞さないらしいぞ。

さて、どうしたものか…と考え込んでいるその時だった。

—バァンッ！—

「朝議中失礼いたします！」

一人の兵士が鎧着用のまま玉座の間へ入ってきて、麗羽の前で跪く。その表情は真剣だ。

「何事ですか？」

「ハッ！ ギョウの街を目指して進む、小規模の砂塵を確認いたしました！」

街を目指して進む砂塵？

それって…

「軍隊ですか？」

「いえ、構成は数騎の騎馬と馬車だと思われます！」

騎馬に馬車って…要人でも護送してんのか？

この時期に袁紹勢を訪ねる要人なんていたかな…

「…旗は上がってましたか？」

「ハッ！ 銀糸の五花弁模様に白抜きで袁の旗、および同一模様に張の文字を確認しました！」

銀糸の五花弁模様に袁？

麗羽の袁旗は金糸の六角結晶模様だから…あれ？

確かどこかで見た記憶が…

「恐らくは袁術様が配下の大將軍、張勳様であると思われます…！」

…麗羽のお願い、有耶無耶になったが…良いよな？

伝記の47 刃、ギョウを発つのこと（前書き）

書き溜めネタその5。

伝記の47 刃、ギョウを発つこと

く刃 視点く

そうして麗羽がギョウの街への立ち入りと、入場・謁見を許可し…
玉座の間へ入ってきたのは、どう見てもバスガイドだった。
この子が詠の言う、袁術軍の腹黒忠臣…張勳か。

「お久しぶりです、麗羽様…麗しく、お変わりないようで」

言って張勳がぺこっと頭を下げると、彼女が備えたメロンがぷるんと揺れる。

おお…中々に大きく、立派なメロンじゃないか。
斗詩や麗羽と良い勝負…あれは美味しそ…

—ぎゅっ！—

—ぎゅむっ！—

…ってイタタタタタ！

「…」

「…」

いや斗詩さん？

無言で人の脇腹を抓らないでくれますか？

それと何故に徐庶ちゃんまで一緒になって、身長が足りない分手の甲を抓ってますか？

「むゝ…」

「うゝ…」

…どうやら、自分の前で他の女の子の胸を注視していたのが気に入らないらしい。

これは巨乳好きの健全な男ならば仕方のない反応であって…って、チヨイ待ち。

斗詩の反応は当然と言えば当然なんだが、何故徐庶ちゃんが機嫌を悪くする必要がある？

「貴女も元氣そうね、七乃…美羽は元氣かしら？」

「はい♪」

麗羽は張勳と話し込んでるから放置しておこう。

さて徐庶ちゃんだが…もしかすると徐庶ちゃんは俺の事を？

…いやいや、流石にそれは自惚れが過ぎるだろう。

そう思い徐庶ちゃんの顔を見たのだが。

「…／／／（ぼんっ）」

俺と目が合うなり、顔を赤くして俯いてしまう。

そして俺の服の上着をキュッと握って…って、この反応…もしかしなくても、もしかするののか？

「…」

「：／／／（チラチラ）」

見る時間を長くすればするほど、その時間に比例して徐庶ちゃんの顔は赤くなっていく。

時折チラチラと俺の顔を見る辺り、やはりそうらしい。

どこでフラグを立てたんだと悩む俺の頭にふと、旅に出る直前に父さんと交わした会話の内容が思い起こされた。

『刃、どうやらお前は女縁じょえんの相を持っているようだ』

『女縁の相？』

『そうだ、この世には霸王の相や仁王の相と言った：その人物が歩むであろう道が、人相や気品：風格となって現れる事がある』

『女縁の相：それは男なら誰しも羨む物で、己の好みの女性が：自分からは特に何もしなくても側へ寄ってきて、気が付くと深い間柄になっていると言う相なのだ』

：

……

……

今の俺様、メスホイホイ？

いや巨乳美（少）女ホイホイなのか！？

父さんの言葉を噛み砕いて理解するとそうなるんだが…よし、ここは一つ質問を試してみようか。
何、簡単な質問さ。

「…徐庶ちゃん、俺に惚れた？」

…何？

直球すぎるって？

バカを言うんじゃないよ…直球勝負は有効なんだよ？

ホラ…霞とか恋とか、祭さんとか穏とか…直球勝負で応えてくれたじゃん。

まあ理沙とか紫苑さんとか桔梗さんとか、天とか照とか焰耶とか…他にも神蓮とか斗詩とか麗羽みたいに、逆に直球勝負を仕掛けてくる人も居るには居るけど。

さて、徐庶ちゃんの反応は…

「……………初見で惚れました」

しゃっ！

戦える巨乳軍師ゲット！

うむ…我が巨乳後宮にまた一人、素晴らしい人材が加入した。

…等と考えていたのが拙かったのか…

『お兄さん、将来はお兄さんの為に巨乳になろうと頑張っている軍師の風を差し置いて…既に完成している巨乳軍師を得るとは何事ですかー？』

突如、俺の頭に生えているアホ毛アンテナ（3本仕様）が奇怪な電

波を受信した。

俺への呼称がお兄さんで、一人称が風って…マジか!?

やっぱり頭に乗つけた件の塔は、電波の受発信装置だったのか!?

『いえいえー…お兄さんの頭の毛束ほど高性能ではありませんが、風の宝ケイも中々に高性能なんですよー』

…モノログに返答があったし。

しかも塔の名前が宝ケイって…いや、俺のアホ毛にそんな機能は無いんだが…

『愛するお兄さんの為なら、この位は朝飯前なのです…あー、稟ちゃん血の海に沈んだので、今日はここまでですー』

それきり風の声は感じなくなった。

…ナイスタイミングだ、稟。

…と、アレ?

気が付けば目の前が真っ暗だった。

俺の手持ち6匹が、風1人相手に全滅だと!?

ああ、いつの間にか目を閉じてたんだ。

なら目を開ければ良い訳で…

「……どわっ!」

目を開けると、眼前には目を閉じて口を窄め顎を突き出し…そのまま俺の顔めがけて迫る徐庶ちゃんの顔のどアップが。

俺と徐庶ちゃんって30cmほどの身長差があったはずなんだが、

いつの間によじ登ったよ!?

「んゝ…」

—スッ—

徐庶ちゃんが何をしようとしているか瞬時に悟った俺。

とりあえずはそれを止めようと、突き出された彼女の唇に右手の人差し指を押し当てた…のだが。

—ちゅっ、ぢゅぽっ—

「いいっ!?!」

唇に俺の指が触れた瞬間、彼女は俺の指を吸い込み…指の付け根から先全てを、その口の中に収めてしまう。

「ちゅ、ちゅぶ…れろ、あむ…んちゅ、んむ…ちゅぶちゅぶ…れろっ……」

そしてそのまま舌で、俺の指を舐め回し始めたではないか。

「うおっ!　ちよ、うわっ…く、くく…これは…ぬおおっ!」

恐ろしいほどに濃厚な舌技から指を解放する為、俺は彼女の口から指を抜こうと試みる。

だが彼女はそれを察知するや否や、両手で俺の手を掴んでホールドし…俺の指が自身の口から抜けないようにする。
この姿勢で俺から離れないのは何故なんだろう。

「んちゅ、んちゅ…んぶ、んちゅ…れろっ、れろれろ…あむ、ちゅちゅ…ちゅっ、んちゅ…んっ、ちゅ…」

そうしている間にもまたもや繰り広げられる超絶舌技。

もしこれが本当に唇同士の接触、つまりキスなら…俺の口内は徐庶ちゃんの舌に蹂躪されることに…つか徐庶ちゃんの舌技、半端ないんだけど!?

「んちゅっ…っはあ…」

ややあって徐庶ちゃんは俺の指を舐め回す事に満足したのか、艶めかしい吐息と共に俺の指を解放し…

「どうでしたか? 水鏡女学院、学院長直伝の舌技は」

「どうでしたかって…」

学院長さん、アンタ…門下生に何教えてんですか?

水鏡女学院ってアレでしょ?

いわゆる文官及び軍師養成学校みたいなところでしょ?

「本当は生涯を誓った伴侶に対し、伴侶の下半身の槍につかう閨技なのですが」

「…(ぐくっ)」

アンタも何を習ってきたんだと言おうとしたものの、今の超絶舌技が閨技だと知り…不覚にも俺は喉を鳴らしてしまう。

…なあ斗詩よ、視界の端で…舌突き出してレロンレロンやってるのは、徐庶ちゃんの舌技を真似ようって魂胆なのか?

「私、呂堂さんのお嫁さんになりたいです」

やや潤んだ目で俺を見つめ、先ほどから俺の手を握っている自分の手にさらなる力を込めてそう言う徐庶ちゃん。

「…」

対する俺の返事は、沈黙と言う名の思案…あるいは葛藤だった。

今ここで『分かった』と言うのは簡単だし、俺には刃愛豊乳連合と言う強力な後ろ盾がある。

だがそれだと徐庶ちゃんの体が目当てで彼女を嫁にすると、男としては最低の行為だと思う。

いや確かに今の連合内には、当初そう言った目的で声をかけた人…いやかけてきた人も数人存在する。

もちろん今じゃ全員が大事な仲間…いや家族なのだが、俺自身彼女たちを『俺の女』として認識している部分はあるし、その認識は強い。

まあどちらかと言えば、俺が彼女たちとの今の関係に依存していると言われれば否定はしない。

事実その通りだし、彼女たちに捨てられる事を想像すると軽く不眠や食欲不振…情緒不安定に陥る。

「…………ッ!？」

と考えていて、体が小刻みに震えている事に気が付いた。
どうやら自爆したらしい。

…そんな時だった。

—きゅっ—

徐庶ちゃんが俺の背中へ腕を回し、抱き着いてきた。

「徐庶…ちゃん？」

やや震えた声が出てしまうのも気にせず、俺は彼女に抱き着くことの真意を問おうとしたのだが…

「…（にこっ）」

彼女から返ってきたのは、慈しみの感情が強く感じられる…何と言うか、母性的な笑みだった。

「大丈夫です、落ち着いてください」

「……………」

「誰も呂堂さんの事を捨てたりしません…経緯はどうあれ皆さん、呂堂さんの事がだーい好きですから」

「えっ！？ それってどう言う…」

徐庶ちゃんの言っている事の意味がとっさに理解できず、俺は彼女に聞き返そうとする。

しかしそれは叶わなかった。

何故なら眼前に件のバスガイド…張勲が立っていたからだ。

俺は徐庶ちゃんを降ろして、張勲を真正面から見る。

「貴方が呂堂さんですね？　初めまして、私…袁術様の配下で、張勳と申します」

「ああ、俺が呂堂だ…よろしく、張勳」

「それですが、お話は聞いてらっしゃいますか？」

「大方は、な」

袁術の下にいる紀霊が呉郡の孫権を狙っており、彼女を得んとせんが為に袁術を道化にして太守に据え…揚州を支配下に置いて、逆らえば袁術を消す…と。

その辺の話は神蓮から聞いてる。

もちろん口にも顔にも出さないが、な。

「…で？」

「で？　とは？」

「この時期に、キナ臭い場所である揚州の太守袁術から使いの将が来て…ソイツが、部外者であろう俺に話しかけると言う状況…何か勘ぐらずにはいれないだろう？」

真・三國無双3の下ヒの戦い魏軍シナリオで…窮地に陥った呂布が救援を求める為、同盟相手の袁術に使者を乗せた馬車を向かわせるイベントがあったが、呂布は…恋は洛陽で月と一緒だ。

ましてやこの張勳は詠から聞いた限り、腹ん中は墨すらビツクリの腹黒女らしい。

「…なるほど、ひよっとすると呂堂さんにも利があるご相談だったんですけど…今回はちよっと旗色が悪いので出直しますね」

「…アンタが紀霊と組んでるとかって言うなら話は別だがな」

「……………いえいえ、それはありませんよ…断じて、ハイ」

断言する割には即答じゃなかったな。

今の間…何かあるとみて間違いないな。

「なあ麗羽」

「何ですか？」

「さっき頼みがあるって言ってたが、結局のところ何だったんだ？」

「ええ、その…従姉妹の美羽さん、いえ袁術さんに会って頂こうかと…」

「…悪いが無理な相談だ」

「理由を聞いても？」

「俺の知り合いから得た情報なんだが、今、張勳に言った通り…袁術の現領地である揚州は、凄まじく騒がしい…そんなトコに行っただけが良いが、ゴタゴタに巻き込まれるのは御免こうむる」

揚州、すなわち呉の発祥の地。

雪蓮が袁術に奪われたと騒ぎ、奪還を願っている地。

そこへ俺が袁術側の人間として赴く事…それはつまり孫呉側との仲

に亀裂を生むだろう。

正直言えば今知り合った（と言い切るには惜しいが）麗羽・斗詩・徐庶ちゃんの3人を取るより、呉のみんなを味方につけておいた方が将来的には好都合だろう。

「そうですか：分かりましたわ、残念ですけど」

麗羽が諦めれば配下の将にどうこう言える手立てはない。

ならば後はこのギョウを出るだけなんだが：やっぱり惜しいから、唾だけは付けとこう。

「徐庶ちゃん」

「何でしょう？」

「俺はまた旅に出るが、正直：君を諦めたくはない」

「…」

「けど今は状況が状況なだけに仕方ない：だから、俺の真名『刃』を預けておく：再会の約束として」

「ッ!？」

再開の約束としての真名交換はある種、呪いより強い束縛力を持つ。再開の約束にと言う事は、相手に対し『また会えた時にも真名で呼んでほしいから、それまで死なないでくれ』と言う存命を強いる事だからだ。

「私の真名は『蘭里』^{らんり}です：私も再会の約束として、この真名を預

けます」

言ってその小さな手を差し出す蘭里。

ほう…この時代に握手の習慣があったとはな…まあ良いや。
俺は蘭里の手を握る。

「確かに預かった…じゃあ蘭里、また会う時まで壮健にな」

「はい、刃さんもお元気で」

「斗詩も達者でな」

「はい、刃さんも」

こうして俺はギョウを後にし、また旅路へ戻る事になった。

ちなみに別れ際、斗詩は腰に付けていた腰帯を…蘭里は髪を束ねて
いたりポンを俺にくれ…なぜか麗羽からも腰帯をもらった。

そんな俺を見てあの筈イクがまた毒を吐いたから、反撃の意味を込
めて思いつき罵ってやった。

マジ泣きしてたが、後悔も反省もしていない。

そして俺は蘭里のリボンと斗詩の腰帯を手首に巻いてリストバンド
代わりに、麗羽の腰帯をバンダナ代わりに額へ巻いて歩き出した。

さ、俺の活動開始時期となる17歳まであとわずか。
気合入れて行くぜ！

伝記の48 連合員＋a、蠢くのこと【番外編】（前書き）

書き溜めネタその6。

伝記の48 連合員＋α、蠢くのこと【番外編】

～第三者 視点～

呉郡は建業城の一室。

白い呂の字が染め抜かれ、呂布が持つと言う方天画戟を模した軸槍の牙門旗が立てかけられたその部屋の寝台にて…掛布の下でもぞもぞと動く者がいる。

「んっ、あっ…あんっ、あぁん……」

時折、股間から湿った水音を立てつつ…恍惚の表情で身悶えしているのは、先の呉王こと孫堅文台…真名を神蓮と言う、桃色の髪と健康的な褐色の肌…そして備えた大きな双子山により、すれ違う男10人が10人振り返るほどの美女である。

彼女は先日、故会って会う事が出来た愛しの男を夢枕に立たせ…いわゆる淫夢を見ているのだが…それも長くは続かなかった。

「早く、早くちょうだい…でないと私……」

彼女の夢の中では今まさに本番が行われようとしていた。

裸の彼女の足を割り開いてその間に座した男が、その股間でいきり立った剛直を彼女の秘裂に…

「起きられよ！ 堅殿っ！」

—スパアアンツ！—

挿し込まれる直前に後頭部へ走った鋭い痛みにも、彼女は意識を急浮上させ：彼女は目を覚ました。

「いったあゝい！ 何て事すんのよ祭さい！！ もうちょつとで刃の長くて太くて硬くて熱くて逞しいナニが私を：」

祭と呼ばれたのは、古くからこの呉で将をしている黄蓋：字を公覆と言う猛将。

彼女は神蓮の頭を叩いた手をパンパンと払いつつ、苦い顔をして言う。

「刃の剛直が欲しくて、刃を夢枕に立たせるのは堅殿の勝手じゃが：そろそろ起きてくれねば朝食が冷めるでな」

相手がいくら前呉王と言えど、立場的に上の者の頭を叩けば普通は不敬罪になる。

だが呉国ではこれが割と普通の光景。

何故なら神蓮の娘で現呉王の孫策こと真名を雪蓮しえれんに対し：呉の筆頭軍師である周瑜こと真名を冥琳めいりんは、王たる雪蓮の頭へ日常的に拳骨を見舞っているからだ。

「：時に堅殿」

「ん？」

「あ奴は放っておいて良いのかの？」

言って祭が指さす先には、この部屋の主の手帳：つまり刃が呉を出る際に、引継ぎ用資料として残した書簡に顔を乗せ：真っ裸で気絶している、軍師見習いの陸遜こと真名を穩のんの姿が。

「刃の残した文献を読んであんなったんでしょ？　ならいつもの事よ…」

「では神蓮様が呂堂の部屋で、日がな一日淫夢に耽るのもいつもの事ですか？」

「げっ！　めーりん！！」

「この部屋の今日の掃除当番は私なのですが、神蓮様が余分に汁を零す分だけ私は余分に疲れると言う事をお忘れなく」

目を半目にしてため息を吐きながら現れた冥琳に、自分の痴態を晒し：後の面倒事を察した神蓮。

ちなみに祭は穩を担いで脱出しており、この場には神蓮と冥琳の2人しかない。

そんな母と、母を叱る筆頭軍師の姿を遠目に見ている者が居る。

「ふふふ、母様ったら：その敷布は既に洗濯済みなのに、未だ気付いてないなんて」

と、刃が呉にいた当時使っていた全ての敷布に埋まり：恍惚の表情をしているのは雪蓮。

彼女は刃が呉に居た当時から、彼が使っていた敷布を毎日回収していたのだ。

「じゃあ私はこれから部屋に帰ってこの敷布で：

「雪蓮？」

…げっ！ めーりん！！」

これから敷布を使って一人情事に耽ろうとする雪蓮を止めたのは冥琳。

左手には縄でぐるぐる巻きにされた母、神蓮の姿が。

…冥琳を発見した時のセリフが、親子でまるで違わないのは親子だからだろうか。

「蓮華様れんふぁや小蓮様しょうれんは我らの目的の為…今この瞬間も僻地で政務に励んで居られると言うのに、今この瞬間既に王位にある貴女がその体たらくでどうするの？」

ちなみに蓮華とは雪蓮の妹である孫権の真名、小蓮は蓮華の妹である孫尚香の真名である。

「えっと、めーりん…これには深い訳が……」

「ほほう、どう言った訳があるのか…軍師の私が納得できるように説明していただきましょうか」

「イタタッ！ 痛いって冥琳！ 耳っ、耳が千切れ…いやああああああっ！」

こうして雪蓮は、耳を引っ張られながら己の執務室へ連れて行かれた。

…

：

：

またところ変わってここは邑郡太守の居城の一室。

そこでは書簡片手に政務に励む妖艶な女性と、その傍で彼女の作業を見守るようにして立つ少女：更にその近くで、小さな子供と一緒に彼女たちを見守る母性的な女性の姿があった。

「ふむ、武術大会とは随分な案件じゃが：これは美味しいのう」

言って太守である、真名を桔梗ききょうこと厳きん顔は：二番目の弟子である、真名を焰耶えんやこと魏延が持ち寄った書簡を読んで面白げに笑う。

「お兄様曰く『大会を太守運営で行う事により、民に太守の威厳を示して参加者を集める：同時に集まった参加者に一定の規約の元で争わせ、最後まで残った者に仕官権利を与えてやれば太守が持つ力も底上げされる：そして参加者や見物人を相手取った商人たちの商い面倒も見てやれば、結果として金の回りが良くなり豊かになる』との事でした」

今しがた桔梗に手渡した書簡の他に『区画整理』『治水工事』『雇用改革』『税率改定』等と言った表題の付いた数々の書簡。

それらをひとしきり読みつつ、桔梗は腰に提げた徳利から酒を飲む。

「私はこの『新造法の酒』が気になるかしら」

そう言って桔梗の徳利から自前の杯へ酒を注ぎ、それを美味しそうに飲むのは真名を紫苑しおんこと黄忠である。

紫苑は娘の璃々りりを膝に乗せ、手にした書簡を読み上げる。

「麦を水に漬けて二日放置し、十分に水を吸った所で建物の床にばらまき：時々空気を入れ替えながら発芽を促す：七日ほど経過し、発芽も安定したらこれを乾燥させ：石臼で挽いて粉碎麦芽を作る：出来上がった粉碎麦芽を茹でて麦汁を作り、これを甕に封じて密封し：温度を保ったまま更に十日放置すると、理論上は完成……ね」

「ほう、割と簡単じゃな：名前は？」

「刃君考案の名前だと『笑得』えーるって言うらしいわ：飲むと笑顔になるから、ですって：あ、粉碎麦汁の搾りかすは乾燥させて固めれば畑の肥料になるらしいわ」

読みつつ紫苑はまだ見ぬ新種の酒に期待をはせているらしい。膝の上で眠り込んだ璃々がおねしよをしている事にも気づいていない。

「それで、師匠」

「何じゃ？ 焰耶」

「お兄様から聞いたのですが、お兄様が描く夢には師匠のような主君が相応しいそうで」

「ほう？」

言って焰耶は声を潜め、周囲を見渡しながら桔梗に告げる。

「できればその……劉璋を倒して、自身がその後釜についてくださ
いませんか？」

「儂が劉璋殿を、領主の座から蹴落とせ……と？」

「はい」

焰耶は言う。

刃から聞いた、後宮の理想的な作り方の一部を。

それを静かに聞いていた桔梗だったが、やがてその顔には笑みがこ
ぼれ始めた。

「……なるほどの、面白い事を考える奴じやのう……刃の奴め」

「でも確かにそうよね……今の連合の構成員を名前で見るだけでも、
一国家が持つ軍事戦力を遥かに超越してるもの」

「『これを別の国に属して行おうものなら謀叛の意思があると思ら
れるのは明らか』とお兄様も言っていましたし、それまで一緒に旅を
していた軍師見習いの程立もその意見に賛同していました」

「刃君も言ってたなら、おおよそ間違いじゃないわね……あ、あらあ
ら」

紫苑は璃々のおねしよに気が付くと一瞬だけ眉間にしわを寄せた。
だがすぐに元の表情に戻ると璃々の服を脱がせ、桔梗の部屋に備え
付けてある衣装かごから替えの服を出し……手慣れた様子で、璃々を
起こさぬよう着替えさせる。

同時に自分も璃々のおねしよで濡れた服を脱ぎ、同じ衣装かごに入

っている新しい服を出してそれを着る。

それを手伝いながら焰耶が桔梗の頷きに賛同する。

「ありがと、焰耶ちゃん…けど桔梗が刃君の主ならそれを絶対に謀叛の意思とは見ないわよね？」

「うむ、しかし現状じゃと主戦力が儂と紫苑と焰耶の三人のみ、連合の同胞を召喚するにしても洛陽や建業の主力武將となっている皆を呼ぶ訳にもいくまいて…ましてや儂の手兵は精々千二百が限界、対する劉璋は七千を超す手兵が用意できるはず…いますぐの実行は厳しい物があるのう」

こうして邑郡の太守執務室の一夜は更けていく。

…

…

…

更にところ変わってここは洛陽城、太守の間。

ここでも数人の美女が、いずれ来る動乱に備えて綿密な会議を行っていた。

「うゝむ、俄かには信じがたいのじゃが…」

「ウソとも言い切れないですよ…調査の結果、莫大な額の使途不明金が出てきたんですから」

帳簿を手に眉間にしわを寄せるは、霊帝付きの武官である何進^{かしん}。

異母妹が霊帝に見初められて皇后になったおかげでこの地位に居るが、本人に武の腕はほとんどなく…代わりに肉付きが素晴らしく女性的で、そこにいるだけで男のほとんどは前かがみになるらしい。そして彼女の前で親しげに話しつつ、若干呆れた表情なのは皇甫嵩^{こうほうそう}だ。

「これを十常侍が、のう？」

「詠も月も霞も理沙も、これを駆逐する事自体には賛成のようです…しかしそれを何進様が行う事には反対だと」

言^いって朱儁^{しゅしゅん}が困った表情となる。

「現状で名前の分かっている十常侍は張讓・趙忠・夏ウン・段珪・郭勝・封シヨ・曹節・候覧・蹇碩・程コウの十人…中でも張讓と趙忠の二人は霊帝に取り入る事で『我が父、我が母』と言われるほど重用され…そのせいで十常侍内でも強大な権力を有しています」

「これを危険視した妾が宦官抹殺を図るも失敗し、逆に暗殺され…袁紹がそれに激怒して宮中へ乱入、宦官を虐殺…命の危機を感じて張讓たちが弁小帝と協小帝を連れて洛陽外へ逃亡する…詠や月…賈^か馭^くや董卓が反対なのは、その後に妾が死ぬという結果に対して…なのかえ？」

「はい、その通りです」

皇甫嵩と朱儁が聞いた何進暗殺の件は、詠達董卓軍が刃から聞いた話が情報源。

ただし現状で確信は誰にもない。

「このままじゃと漢王朝はもたんのかのう…」

「「…」」

：

：

：

何進と皇甫嵩および朱儁が談義を進めているその頃、同じく洛陽城の別の一室でも談義が行われているが…こちらは明るい、いや姦しい内容だ。

「せやから止めときつて言うたんや」

「だって、だってえ〜！　へう〜」

呆れた表情で言うのは真名を霞^{しあ}こと『神速』の異名を持つ張遼。対してその霞に呆れられているのは、この洛陽の太守である…真名^{ゆえ}を月こと董卓。

「それにしても豊胸薬か…眉唾物もいいところだな」

「まったく、月ったら…」

手にした白磁の小瓶に満たされた、紫色の怪しい液体を見ながら…
真名を理沙こと華雄りしやが言い、それに頷くは董卓軍筆頭軍師の…真名
を詠えいこと賈えい駟。

実は月が街で見つけてきたこの豊胸薬を試したのだが、結局は紛い物と判明…ただ、それだけなら良かったのだが…月の胸は薬剤による過敏反応を起こし、かぶれて腫れ上がってしまったのだ。

「あんまりデカ過ぎても疲れるだけやで？」

「そうだな、肩は凝るし汗は溜まるし…手入れも入念にせねばならんからな」

「へう、それはある人だから言える言葉だもん…え、ん、詠ちゃん…痒いよ」

「はいはい、こっちおいで月」

言われて詠の傍に駆け寄り、胸に別の…今度は刺激の少ない、れっきとした治療用の塗り薬を塗ってもらう月。

「しかし月殿は、何故そこまで胸にこだわるのです？ 無ければ無いで良いではないですか」

「それはそうなんだけど…回りがこうも大きいと、私一人だけが小さいみたいで…」

真名を音々音こと陳宮に励まされるが、なおも巨乳が諦めきれない様子の月。

ちなみに音々音は『自分を見ろ!』と言っているのだが、当の月はその音々音の意見をまるで聞いていない。
言いつつ周囲の面々を見渡す月。

「天ちゃんと照ちゃんも大きくなってるのに、どうして私だけ?」

ちなみに天と照とは、正史ならば皇帝の座をかけて争うはずの劉弁・劉協のそれぞれの真名である。

「どうしてと聞かれても、なあ?」

「うむ、強いて言うなら愛の力:かろう?」

とんでもなくクサイセリフを臆面もなく言う照だが、そのセリフはあながち間違ってもいない。

何故なら理沙や天や自分の胸が今までとは比べ物にならぬほど大きく成長を遂げ:もともと平均以上だった霞や恋の胸が更に大きく成長を遂げたのは、ひとえに刃と言う男を愛し:また、刃に愛されたからであつたりする。

「じゃあ詠ちゃんは どうして、刃さんとは何の関わりもないのに大きいのか?」

言つて詠の胸元を注視する月。

ちなみに月の頭の中では霞≧理沙>恋>天≧照>詠>自分≧音々音
と言う胸囲比較表が出来上がっている。

「わ、私!? 私のは…ホラ、あれよ…生まれつきと言うか、年齢相応の適性体型と言うか…」

「…詠ちゃんと私って、同じ年だったよね?」

「…ええ、それが?」

「私の胸は年齢不相応ってこと?」

詠が何気なしに言った言葉の端を捉えた月が、その頬をリスのようにぷくぷくと膨らませる。

「え、ちょ…いや、そう言う意味で言ったんじゃないくて…」

「むっつ! 詠ちゃんなんか大嫌いっ!」

「あゝん、ゴメンって月…お願いだから機嫌を直して!」

地団駄を踏んで拗ねる月と、そんな彼女の機嫌を直そうと躍起になる詠。

そしてそんな彼女たちを微笑ましげな顔で見ている霞と理沙。話の引き合いに出された天と照は微妙な顔だ。

そんな中…

「ううゝ、恋殿^{れん}おゝ…」

誰にも話の引き合いに出されなかった音々音は、同じく最初から話の引き合いには出されなかった…真名を恋こと呂布に縋り付いていた。

「恋殿おゝ、ねねの…ねねの胸は…」

「…くゝ、くゝ…」

だが恋は昨日ようやく賊討伐の遠征から帰ってきたばかりで、肉体的疲労もあって起きる余裕が無いらしく…音々音の必死の呼びかけに答えることはなかった。

「恋殿お…」

伝記の49 刃、崩壊させるのこと（前書き）

書き溜めネタその7。

伝記の49 刃、崩壊させるのい

く刃 視点く

これまで起きた・経験した事を纏めたノートを読みつつ、ギョウを出た俺は三度洛陽へ向かう事にした。

洛陽ではいよいよ霊帝の体調が危うくなってきたており、医者判断では余命：約3年と診断されたとか。

診断内容は箝口令によって城下へ漏らす事を禁じられたが、人の口に戸は立てられぬ：いつしか漏れた情報により、城下町はピリピリした雰囲気に含まれていた。

そんな城下町で俺は偶然にも朱儒さんと皇甫嵩さんと再会し、話を聞くことができた。

何でも十常侍の活動が活発になってきており：それをどうにか排除せんと、月と詠が日夜動き回っているらしい。

中でも月と詠は何進と言う人物の死について懸念しており、何進さんには十常侍の排除を試みないようと念を押して回っているとか。

：それって確か、反董卓連合のきっかけとなる騒乱の一部だよな？いや確かに月や詠、天や照には話したが：

そんな事を話していると、前方から桔梗さんによく似た女性が歩いてくるのが見えた。

拳げることが出来る外見的違いと言えば、髪長さ顔立ち：それに目の色位しかない。

背後に護衛と思わしき兵を数人連れているのを見る限り、かなり高位の人らしい：前に見た事がある気がするんだが。

「朱儁さん、あれ誰？」

「あれって…ああ、何進さんだね」

何進！？

あの、十常侍を抹殺しようとして失敗して暗殺される…元肉屋の！？
…そうか、妹が何皇后だから姉が都に居てもおかしくないのか。

「おーい、遂高さーん！」

何故こんなタイミングで何進と…等と内心慌てふためく俺をよそに、
いつも通りと言った風な顔で何進さんと呼び寄せる皇甫嵩さん。

「む？ 公偉に義真ではないか…どうしたのじゃ？」

「いえいえ、遂高さんに紹介したい人が居まして」

「妾に紹介したい者？ 誰じゃ」

「えっと、こちらの人で…呂堂さんです」

言って俺を何進さんの前に立たせる皇甫嵩さん。

何進さんは俺の顔を見るなり、嬉しそうな表情でゆっくりと歩いて
来て…そして俺の前で立ち止まる。

おお、何と言うサイズのメロンだ…こりや間違いなくギガメロンだ
な…って何進さん近いって！

その距離だと、少し動いただけで俺の胸に何進さんのギガメロンが
当たっ…

「おお！ お主が呂堂か！ 月や詠から話を聞いておる…何でも大変な武勇と人脈を誇るそうではないか」

―むにゅっ―

…遅かったか。

俺の顔を良く見ようと何進さんが歩み寄ってきた為、彼女が備えたギガメロンが俺の胸板で潰れてしまう。

この大きさでこの柔らかさ…紫苑さんと並ぶぐらいあるんじゃないのか？

身なりは桔梗さんで、口調は祭さん、メロンは紫苑さん…この世界は不思議に満ちている。

「ふうむ…整った顔立ちをしておるの…それに全身の傷跡が実に誇らしげじゃ」

…じゃなくて。

「え、えつと…」

「おお、まだ名乗っておらなんだの…妾の名は何進、字を遂高と言う」

「呂堂です…字は戦牙と申します」

「うむ、戦の牙とは良い名じゃの…ところで呂堂、お主に一つ聞きたい事があるのじゃが」

「…何でしょう？」

「お主、妾の親衛隊になる気はないかえ？」

「はっ!？」

月や詠からその武勇を聞かされ、また同時にこれからの自身の行い次第では落命もあり得ると公偉や義真から聞かされた。

しかし自分は元々肉屋の主で、腹違いの妹のおかげで今の地位におり…いわゆる牛刀と呼ばれる、肉切り包丁以外の刃物は持った事がないと彼女は言う。

…公偉・義真と言うのは朱儁さんと皇甫嵩さんの字だよな？

この2人が何進さんの落命を知ろうと思ったら、詠を交えなきゃ無理なんだが…詠よ、しゃべったのか？

「遂高さんは男を落とすのが得意ですけど、敵を落とすのは不得手なんですよね」

「調練で兵卒と剣を交えた事があったが、わずか二合で剣を取り落したからなあ」

そんな事を考える俺をよそに、何進さんの意見に賛同の意を示す朱儁さんと皇甫嵩さん。

なるほど…武官と言うよりは文官、いや文官と言うよりは娼官しょうかんとも言うんだろうか。

ともかく武の腕はからつきしだと、つまりはそういう事だ。

「それに聞くとお主は乳房おなこの大きな女子が好みと聞く…妾の胸はどうじゃ？ 中々の物であると自負しておるが…妾に仕えればこの胸、いやこの身…好きにしても構わんぞ？ どうする？」

でっけえ！

つか条件がマジパネエ！

…スマン、取り乱した。

「……………大変好ましく思いますが、それを仕官理由にはしたくありません」

「そうか…残念じゃ…まあ今はこれ以上誘うのは止めておくとするかの」

今“は”ってどう言う事だよ。

…今後もこう言った誘いを行うやも知れぬって事か？

「…次は無いから覚悟して居れよ？」

…やる気満々かよ！

「それで公偉、義真…例の話じゃが」

「それがですね…侍女に調べさせたところ、御二方とも資格を失っておりまして」

「何じゃと!?!」

俺が居るにも関わらず内密な話を始める3人だったが、何進さんの問いかけに朱雫さんが答えた瞬間…何進さんの眉間にしわが寄った。資格を失った2人？

誰の事だろう。

「…全く、だからあれほど監視は厳しくと言うておったじゃろうに」

「申し訳ありません」

「さあて…異母妹に、何氏の奴に何と説明したものかのう…まさか愚直にも『貴女様の娘君は、王族との婚約資格を無くしておいでです』などと言う訳にもいくまいし…」

何進さんの異母妹で、名が何氏…娘が王族との婚約資格を失ってる？

ちょっと待て…史実じゃ確か何進は肉屋もしくは屠殺家の出で、異母妹の何氏は賄賂を使って宦官に取り入って霊帝の後宮に入るんだよな？

その後、何氏は霊帝から寵愛を受けて子を産んで…その子が確か……

「あの、何進さん？」

「む？ 何じゃ？」

「その…何氏殿の娘君って、もしかしくても小帝弁様ですか？」

「おお、よく知っておるな…その通り、名を劉弁と言う娘じゃ」

俺は内心、頭を抱えていた。

劉弁…つまり照から王族との結婚資格を奪ったのは他でもない、この俺だ。

「……………と言う事は、王族との結婚資格を失ったもう一人と言うのは…」

「うむ、王美人が子である劉協じゃ」

うわあ、やっちゃったあ！

どうする、どうする俺！

切れるカードは…む？

「…あの、一つ質問があるんですが」

「何じゃ？」

「その、両小帝から王族との結婚資格を奪った相手を俺が知っているとしたら…その相手はどうなりますか？」

「うゝむ、基本的に妾達に干渉権限はないが…」

「普通なら相手側に突き出して、その後の処置は相手に任せるんじゃないかな」

「でも相手ってアレでしょ？ 幼女趣味で変態だっていうもつぱらの噂の…」

俺は、幼女趣味の変態さんから天と照を遠ざけたのか。

それってつまり政敵だよな？

…こうなっては致し方あるまい。

「何進さん、その…両小帝から王族との結婚資格を奪った相手、今ここに連れてきましょうか？」

「何じゃと？ 呂堂の知り合いなのか!？」

「知り合いと言うか…俺、なんですよ」

「…」

「…」

「…」

「「なにいつ!?!」」

うわ、何進さんの顔スツゲエ面白い!

…じゃなくて。

「実は少し前、所用で洛陽に立ち寄った時の事なんです…」

野とでも山とでもなりやがれ。

俺は全てをぶちまけることにした。

もちろん、俺が1800年後の未来から来た人間であると言う事だけは伏せておくが。

……………

……………

…

「くっくくくく、あーっはっはっはっは!　そうかそうか、協も弁も心は女じゃったか」

「にしても呂堂君、肝が据わってるよね」

「いくら思い詰めてるからとは言え、婚姻前の小帝殿下を両方とも食べちゃうなんて」

覚悟を決めてブチまけたのだが、意外や意外…何進さんたちの反応はこの通りだった。

俺の覚悟を返してほしい。

「なるほどのう…呂堂が相手なら致し方あるまい、妾が弁の立場でもそうするじやろうしな」

「けどどうするんです？ この分だとあの変態…呂堂君のこと、殺しかねませんよ？」

「だよね…協様も弁様も、呂堂君が死んじゃうと後を追いかねませんよ？」

「うゝむ…」

「協様と弁様…政略結婚の話を持ちかけた際、侍女の短刀で自害を試みたほですから…」

「霞ちゃんと理沙ちゃんがいなかったらどうなってたことか」

…なるほど、ここであの話…天と照の首にある自殺未遂痕につながるのか。

だとしたら話の規模としては相当どころの騒ぎじゃないな。

「…呂堂よ」

「…何でしょう？」

「お主、妾から手紙が行くまで：しばらくの間洛陽を離れておれ」

何進さんいわく、霊帝の体はもう何をしても回復する見込みはなく：死去は間近らしい。

そして霊帝が死ねば帝位は娘である劉弁か劉協のどちらかに移り、やがて世継ぎを残す為に結婚することになるが：結婚相手に王族を据える事が不可能となった。

「つまり事実上、漢王朝は終わりを告げた事になるんじゃない」

「俺、漢王朝を終わらしちゃったのか：」

「まあそう腐るな：漢王朝は終わっても、劉家が絶えた訳ではないし：霊帝が死ねば当然、娘が帝位を継ぐ：そしてその帝位を継いだ娘に婚約者がいれば、必然的に劉家は存続が可能となるはずじゃ」

「けどそれが何故、洛陽を離れることになるんです？」

「あゝ、そっか：十常侍の狸共か」

朱儁さんの説明を聞く限り、俺の存在は十常侍を調子づかせるのに格好の的らしい。

そしてその十常侍が霊帝から権力を得ている以上、次代の手駒として利用される危険性が少なくないと朱儁さんは言う。

「妾達は宦官の排除で手一杯じゃ：が、その宦官共を勢いづかせる材料があつては漢王朝の：ひいてはこの大陸に安寧など永久に訪れぬ」

「根が腐ると葉枝も腐る…ですか？」

「原流濁ると支流も濁る…とも言うよね」

つまり王朝の内部と言う、根元が腐っているから大陸と言う末端が腐ると言う事か。

そして俺がその腐敗を進めてしまう…くそ、こんなはずじゃなかったのにな。

だが天や照には何の罪もない…彼女らはただ普通の女の子として一生を過ごしたかっただけだ。

「ともかく、弁と協…それと董卓達には妾から言っておく……なあに心配するな、妾とて死ぬ気はないから宦官排除など行わぬよ」

俺の何気ない言動が、俺の意図せぬところで歴史を変質させるんだと言う事実。

それをこうして、改めて認識したのだった。

伝記の49 刃、崩壊させるのこと（後書き）

何進さんのキャラはアニメ版恋姫無双を参考にしています。

伝記の50 刃、漢女の師に会うのこと（前書き）

書き溜めネタその8。

伝記の50 刃、漢女の師に会うのこと

く刃 視点く

そうして俺は洛陽を離れて大陸各地を放浪、1年を過ごし…久しぶりに故郷の土を踏むことに決めた。

1年半ぶりに見る故郷は出立当時より面積が広がっており、記憶に無い建物が増えていた。

「ただいま」

「おお！ 刃、刃じゃないか！ 久しぶりだな…元気だったか？」

「まあね…入っても良いか？」

「もちろん！ ああ、騎馬…いや騎狼か？ その子は村の西にある厩舎に繋ぐと良い」

「ありがとう」

言って門をくぐり、村の西にあるという厩舎へ向かう。

聞けばこの厩舎は3カ月前に新しく出来た物で、最近増加した賊の襲撃に備え…自衛用の騎馬隊を編成したのが建築のきっかけだと言う。

「じゃあ白雪、また明日な」

「ぐるるるる…」

言って頭を撫でると白雪は心地良さそうな唸り声を発し、藁山の上にその体を横たえた。

思えば白雪とは結構な数の戦場を共にしたよな。

体長も、出会った頃より30cmは大きくなってからな。

そして村にある酒家にやって来たのだが、なんとこれが恋の実家。

老若男女問わず大食らいさん御用達の店として『阿蘇阿蘇』と言う書物に紹介された事もあるとか。

店名はそのまま【満腹】と言うらしく、その名前に恥じぬ売り上げを日々たたき出しているそうだ。

さて、俺の実家は恋の実家の真正面にあるはずなのだが…見れば全く覚えのない、凄まじく立派な鍛冶屋が立っていた。

屋根には【鎧袖一触】と言う名の看板が上がっており、軒先には『轟將軍御用達』と書かれた暖簾が出ていた。

…轟將軍は俺の二つ名だが、本当に俺の家なのか？

そんな事を考えつつ軒先に立っていると、店の奥にある引き戸がガラツと開き…中から見た顔が。

「やぁいらっしやい、何をお求め……刃!？」

「父さん!？」

奥から出て来たのは、見紛う事なき俺の実父だった。

鼻が低くなってるように見えるのは気のせいなんだろうか。

父さんは顔に驚きの表情を張り付けたまま、嬉しそうに声を発した。

「刃!？ 本当に刃なのか!？」

「響父さん、珊瑚母さんの息子だって言えば分かってくれるよな？」

「おお！ 母さん！ 刃だ、刃が帰って来たぞ！」

父さんが軒先で上げた声に反応し、奥の引き戸が再び開き：今度は母さんが出てきた。

「父さん何を…って、まあ刃！ 本当に刃だわ…いつ帰ってきたの！？」

「今さっきだよ」

久々に跨ぐ自宅の敷居。

何故いきなり鍛冶屋なんだと言う俺の質問に対し、父さんは言った。

俺に【轟將軍】と言う二つ名が付いてすぐ後、村を訪れたとある武芸者が『その武勇を称えられて轟將軍と名高い：在野の将、呂戦牙殿が使っている武器：それはこの村で打たれたらしいのだが、相違ないか？』と訪ねてきたそう。

その武芸者に対し父さんは『轟將軍とは我が息子の二つ名、そして呂戦牙は我が息子の名：息子が携えし武器は、確かに我ら夫婦が門出に授けた物だ』と答えたらしい。

するとその武芸者は『私は守るべき主の為に更なる強さを求めているが、最近は武器の方が我が鍛錬に付いてこれず：このままでは主を守ることが出来ない』と言った。

それに感銘を覚えた父さんと母さんは、その武芸者の為に専用の武器を打つ事を承諾：1か月の歳月を要してその武芸者専用の曲刀、銘『鈴音』りんいんを仕上げたらしい。

名前の由来は、彼女が使っている曲刀に鈴が結わえつけられており
：振るうとチリーンと言う鈴の音がする事に因むとか。

肉厚で幅広の刀身を持つ真紅の曲刀『鈴音』はその武芸者に大層気に入られ、彼女は『これならば主を守る事が出来る』と満足げに国へ帰ったそうだ。

それ以来武芸者が多数訪れ、村は俄かに活気付き：父さんは注文を聞いては手製の武具を作り、それを言い値より3倍は高く買ってもらっていた。

それを見ていた母さんは急遽、自身で武具を鍛造することを提案：それまでの売り上げをやり繰りして実家を改装、鍛冶屋として店を構えたそうだ。

「しかし誰だったんだろうな」

「曲刀を注文した客の事か？」

「うむ：背丈は五尺半、濃紫の髪を頭頂部で団子状に束ね：赤い着衣を纏っているんだが、下着が丸見えの禪でね」

身長が165で濃紫髪の団子ヘア、赤い服に曲刀と鈴：丸見えの禪。

：いや、まさかな。

「それで、今日はどうしたの？」

「ああ、色々あって少しの間旅を中断しようと思ってね」

「そうなんだ：じゃあしばらくは家に居る訳ね？」

「そうなるな」

そう言うなりすぐに厨房へ戻り、包丁を振るい始めた母さん。
どうやら夕食の支度の途中だったらしい。

「ところで刃よ、今回の旅はどうだった？」

「…得られる物が多かったから、良い旅だったとは思う…けど」

「けど？」

「女縁の相の凄まじさを知った」

「……………なるほど、刃の突然の帰郷もその相絡みと言う事か」

「うん」

こうして俺は…気合を入れた母さんの作った料理に舌鼓を打ちつつ、
この数カ月にもわたる旅の話をしたのだった。

…

…

…

そして夜も更け、真円を描いた月が南中を過ぎる頃：俺はふと目を覚ました。

「：久しぶりの実家だと言うのに眠れんぞ」

父さんと母さんは既に熟睡しており、酒も入っているせいかな滅多な事では起きる気配が無い。

親子で甕を18は空けたから、下手をすれば父さんも母さんも明日は二日酔いだろう。

まあ俺は桔梗さんや紫苑さん、霞や神蓮や孫策達と散々飲み明かした事もあり酒には強く：体調は至って普通なのだが。

「とりあえず水でも……ん？」

そうして水でも飲もうかと厨房へ出たその時、近くに妙な気配を感じた。

闘気としては膨大で強大、だが一切の悪意は感じられず：むしろ感じられるのは焦燥感が強い。

「（こんな夜更けに誰だ？ 方角的には：村の入り口の方か？ し
かも何を焦ってるんだ？）」

―チャキツ―

父さんたちを起こさぬように部屋へ戻り、壁に立てかけてあった飛刃赤戟を手取る。

穿紅は装着に時間がかかるし：朱雀は格納・展開機構の調整の為、分解された状態で工房に置いてある。

飛刃赤戟じゃ、相手が敵だった場合手加減なんかできそうにないが

…仕方あるまい。

—スーッ…—

入り口の扉を開け、村の通りに出てくる。

雲一つない夜空に満面の星…うむ、良い夜だ。

そしてそんな夜空を少しだけ堪能した俺は、改めて闘気の出所を探る。

…どうやら村の入り口近くにある、小さな林の真ん中のようだ。

「とりあえず行ってみるか」

そうして俺は村を出て、その林へ向かった。

…

………

………

その林は村がまだ小さいころからあった林で、俺は父さんとカブトムシやクガワタムシを取りに来ていた林であることを思い出した。

「小さい頃とは身長で視点の高さが違うが…間違ってなければ、中央に水の湧き出る泉があったはず…闘気はそっちからだな」

母さんとも来た事があり、その時ははしゃいで泉に飛び込んで溺れた俺を母さんが助けてくれたっけ。

そんな事を考えるうちに俺は泉のほとりに到着。

小さい頃は大きく見えた泉だったが、この年と体格になるとやはり

幾分は小さく見える。

「さてと、あの鬨気は……む？」

鬨気がいよいよ近くなってきた事もあり、俺は飛刃赤戟を握りなおす。

そして周囲をぐるっと見渡して、対岸にその気配を見つけた。

「アンタ、なにやってんだ？」

「む？」

その人物は燕尾服のような物を着ており、頭は白い。

俺の呼びかけに応じてこちらを振り返ったのだが、その容姿に俺は絶句した。

見た所年齢は55〜65程度だが、燕尾服の下は鋼のような肉体がむき出しで：着衣と言えば白のマイクロビキニと白のハイソックス、それと申し訳程度の赤いネクタイのみ。
：どう見ても変態だ。

「お主は？」

「あ、ああ：俺の名は呂堂、この近くの村に住んでるモンだ：アンタは？」

「儂の名は卑弥呼^{ひみこ}、倭国の王にして漢女道・亜細亜^{あじあ}方面前継承者じや」

卑弥呼でこの容姿ってお前：いや待て、漢女道・亜細亜方面前継承

者だって？

ならもしかして…

「アンタ、もしかして貂蟬の知り合いか？」

「我が弟子を知っておるのか？」

「外史の管理人だと言う…」

「おお！ では汝が頭部に銅鏡の、貂蟬の力の破片を宿して死に…後にこの世界に再誕した、日本は東京浅草の聖フランチエスカ学園在住だった青年…呂堂なのだな！？」

「！？」

久しぶりに他人から横文字を聞いたぜ。

いやそれよりも…聞けばこの卑弥呼は、通称『管理人の間』と呼ばれる空間でこの世界の崩壊を防ぐ為…日夜『史力』と言うエネルギーの充足に尽力している、あの貂蟬の師匠兼同僚で…今日は運命の日が始まる前に、この世界のキーファクターとも言える俺に対し…事実上最後の注意喚起に来たらしい。

「と言う事は貂蟬はエネルギーチャージ中って事か？」

「うむ、汝に与えた力によって汝が動いた事もあり…我が弟子がその力を取り戻し、汝を元の輪廻に戻すまでに10年縮まったかもと言っておった」

「ふうん、じゃあストレートに行けば俺は70まで生きればこの世界での役目を成就した事になるのか？」

「左様：もちろん現状のようにハーレムを拡大し、汝が愛する女達を囲ってそれ以上生きるのもアリになっておる」

「そうかそうか、よっしゃ」

つまりみんなに寿命はあるのだろうが、俺はこれから先も夢を投げずに済むと言う事だ。

「ところで我が弟子から伝言なのだが」

「ん？」

「お主が齡17となったその月の末、洛陽の近くで卜うらないを生業なりにしておる者が：この大陸を席卷する予言を発する」

「占い師が予言を？」

「そうだ：そしてそれを機に、我が弟子をして『貴方の知り合い』がこの世界に降り立つのだ」

「へえ、じゃあ俺の真のスタートラインはそこからって訳か」

「うむ：そしてその時に備え、汝にはこれを渡しておく」

言って卑弥呼がどこからともなく取り出したのは、どこかで見た記憶のあるバッグ。

あのサイドベルトに短剣符の意匠って：

「そうじゃ、汝の聖フランチェスカのバッグじゃよ」

「おいおい、それは呉郡に置いてあった筈なんだが…」

中から聖フランチエスカの上着を取り出してみる。

…ん？

ものすごく良い香りがするんだが…ってオイ、この香り…穩の家で焚かれてた香の匂いじゃないのか？

…アイツ、この上着を着てたな？

「うむ、呉郡に置いてあった物を正規手段によって運んだのだ…牙門旗も一緒にな」

見れば確かに俺がデザインをした軸槍を持つ、赤字に白い呂の字が鮮やかで…その下に『刃愛豊乳連合共有財産』と刺繍の入った旗が付いた牙門旗もある。

「俺の知り合いが来る事と聖フランチエスカの制服、それに牙門旗とバッグはなんの関わりがあるんだ？」

「それは我が弟子から聞けずじまいじゃったから儂も詳しくは知らん…じゃが我が弟子はこう言っておった…『管絡の占いが出たその時、刃ちゃんの私物が刃ちゃんの手元にないと拙いのよん』と」

ふむ、あんなナリしてても貂蟬は善人だしな。

忠告としてありがたく受け取っておこう。

「…とまあ、儂が出来るのはここまでじゃ」

「ああ、助かったよ卑弥呼…ありがとう」

「儂はもう行くが、もしどうしても困った事があつたら洛陽にある『漢女館』と言う店を訪ねてくるがいい：儂の知り合いが務めていて、儂に話を繋いでくれるはずじゃからの」

：極力行きたくないな。

だって漢女館だぞ？

きっと貂蟬や卑弥呼みたいなムキムキオカマがウヨウヨしてんだぜ？
許されるなら氣弾で建物ごと吹っ飛ばしてやりたいけど、こいつ等
硬いしなあ：

「分かった：まあ洛陽には今は行けないけど、どうしようも無くな
ったら何とか行ってみるよ」

「うむ、そうするが良い：さてそろそろ行くとするか」

そう言って卑弥呼は飛び去った。

：いや比喻じゃなくてマジで飛んで行ったんだ。

「：いよいよ、か」

俺は卑弥呼が飛び去った方角を見ながら、手にした上着を見てそう
呟いた。

伝記の51 刃、本格活動を始めるのこと（前書き）

書き溜めネタその9。

伝記の51 刃 本格活動を始めるのこと

く刃 視点く

そして俺が17になったその月の末、卑弥呼が言ってた通り…洛陽の近くで占い師が発したとある予言が大陸を席卷した。

『世が動乱に満ち、民が泣かんとするその時、天より御遣いを乗せし流星が降らん…流星に乗りし御遣いは白き衣を纏いて地に降り立ち、その者…備えし智と徳を以て乱世を鎮めん』

「…と言うのが、占い師の発した予言なのだが…私としてはあからさまな眉唾物の話と思っている…呂堂はどう思う？」

その予言の写しを読んでいた周瑜が、酷く不愉快そうな表情を隠しもせずそう言った。

俺は今ここ呉で、再び条件付きの客将となっている。

条件的には前とほとんど変わらない…挙げるならば滞在期間のみ。周瑜から受け取った竹簡を読む…なるほど。

「…白き衣を纏い、智と徳で乱世を鎮める天の御遣い…か、正直どうでも良いかな」

「そうか？ お前が持っているあの衣も十分に白いし…この大陸の職人じゃ作る事も出来ないそうじゃないか」

俺のいる部屋には聖フランチェスカの上着が、木で出来たマネキン（俺の手作り、木製）にかけられた状態で置いてあり…その横には俺のバッグも、中身そのまま置いてある。

…ポラロイドカメラはどうしたって？

もちろんここ1年の間にあちこち行って、みんなの写真をバチバチ撮りまくったさ。

都合、蘭里と洛陽の面々は隠し撮りになっちまったけどな。

稀に卑弥呼がカメラのリフィルシートパックを差し入れしてくれるんだが、最近じゃ烈…華佗の写真を頼まれるようになった。

ありゃ狙われたな、絶対…烈、尻は隠せよ。

「なら俺はいつ、流星に乗って降ってきたって話にならないか？それに俺に両親が健在なのは周瑜も知ってるだろうに」

「それもそうだな…ところで、この御遣いとやらの予言が『どうでも良い』と言う事は…」

「ああ、そうだな…俺の言ってるのはその情報じゃない」

俺が今回客将となるにあたり、前回とは滞在期間の条件が違うと言ったのは前述の通りだが…今回は『とある情報が入るまで』と言う滞在期間を定めた。

もちろん神蓮と祭と穏は俺に対する誘惑禁止を全面免除していて…俺が誘う事もあれば誘われる事もある。

…誘われる事の方が圧倒的に多く、穏は狙ってるのか書庫から出てこないがな。

「ちなみに、だ…今世間はこの『天の御遣い』と言う予言についての話題が噂の中心だが、私としてはそれに隠れていたこっちの予言の方が興味深いんだがな」

「隠れていた予言？」

「そう…」

『天の御遣いの降臨に時を同じくし…その身に強大な武と氣を宿した赤き刃が、虎の檻の中より現れる…赤き刃はその武と天恵の才によつて豊かな双丘を守り、無数の愛に支えられ…動乱の最中、異色の王として産声を上げる』

…と言った予言だ」

「ぶほっ！　げほげほっ！」

周瑜の言った予言の内容に俺は、口に含んでいた茶を吐き出してしまふ。

「大丈夫か？」

「ああ、なんとか…にしても周瑜よ、その予言…」

「私も私的な解釈を入れた上、推測と言う形でしか物が言えないのだが…この予言、指し示しているのは呂堂…お前の事だろうか？」

「何故そう思う？」

「さっきも言った通りこれは私的解釈を多大に含む推測論だが…まず一点目に『その身に強大な武と氣を宿した』の部分だが、これは言わずもがなこの人物は天下無双とも言うべき武と…それに匹敵するだろう氣の力を秘めている事を言ってるんだと思う」

俺の二つ名はここ1年でまた数を増やした。

今、俺に付いている二つ名は『赤戟の竜卷』『轟將軍』『氣龍將』

『白狼戟聖』^{びやくろうげきせい} 『豊双丘達の財宝』^{ほうそうきゅうたち} 『拳闘士』^{てんぶ} 『天舞の神朱弓』^{しんしゅきゅう} だ。

…余りに厨二臭が酷過ぎて閉口を辞さないが、事実は事実。
ちなみに『豊双丘達の財宝』とは、あの方々が付けた二つ名だ。

「第二に『赤き刃』の部分…これは言わずもがな呂堂の風貌と、口にはしないが呂堂の真名が大きく影響していると思われる…：第三が『虎の檻』と言う部分、これは言わずもがな神蓮様の二つ名【江東の虎】から来ている物…：そして第四が『豊かな双丘を守り』の部分…：基本的に双丘とは女性の胸部を指す隠語であり、これが豊かと言う事は胸の大きな女性を意味する…：それを守ると言うのは呂堂の夢に関する事だろう？」

「…」

「そして最後が『無数の愛に支えられ…：動乱の最中、異色の王として産声を上げる』の部分…：呂堂の後ろ盾となっている面々の名前を見る限り、呂堂は十分に王才があると思うぞ？ 何せ元国王に小帝殿下、一国に代々仕える宿将と軍師…：太守に飛將軍と、例えこれだけでも建国して王となる事は十分に可能はずだ…：ましてや呂堂には『豊双丘達の財宝』と言う二つ名もある事だしな」

…的確過ぎて反論できねえ。

確かに俺の後ろ盾となっている面々…：つまり刃愛豊乳連合のみんなだが、個々の経歴を見れば…：集まってしまえばどの国にだって負ける要素は皆無に等しい。

まあそれでも？

「今の俺は呉に籍を置く客将…：そんな大逸れた事をする気はないさ」

「：例えこの場で謀叛を起こされたとしても、私には勝つ術が無いがな」

言って笑う周瑜。

事実その通り：俺は先日、ここ呉の武将全員を相手どって模擬戦を仕掛け、勝利を収めた。

もちろん全員が敵と言う設定で、総大将が神連で副将が孫策と孫権：主軍師に周瑜、副軍師に穩と呂蒙：弓兵長に祭さんと副官が孫尚香、工作部隊に甘寧と周泰と言うベストメンバー相手に：だ。結果は全員を無傷で捕縛して勝利。

つまりは今現在、呉で最強の武官は俺：と言う事になる。

まあ俺自身、単純な武力だけで最強を名乗る気は無いし：最強よりは最高たりたい。

ちなみに孫権と孫尚香、甘寧と呂蒙は模擬戦の後にまた建業を離れている：ああ報告までもう1つ、俺の故郷で『鈴音』と銘打たれた赤い曲刀を買ったのはやはり甘寧だったらしい。

さてそんな状況下で孫策は今、祭さんを連れて寿春城へ向かっている。

袁術に呼び出されたらしい。

「袁術：大方、黄巾賊の討伐をして来いと言った呼び出し理由なのだろうが…」

ちなみに俺が再び呉の客将となった時、孫策は『袁術を倒してきて』と言ったのだが、周瑜が『今袁術を潰すのは簡単だが、それをするとあの広大な荒廢地である河南を収める必要が出てくるし：従姉妹である袁紹が黙ってないだろう』と言うと渋々我慢を選んだ。

「黄巾賊か、久しいな…今回はどんな規模なんだ？」

「現状、分かってるだけで拾万を超している」

「拾万!？」

俺が斬ったのは7万。

まあ恋が斬った分を合わせればキツチリ10万になる計算だが。

「最初こそ七百八百の集まりだったが、官軍や在野の強者等に討ち漏らされた一団…更には新規蜂起した連中がどんどん合流してその数は増加の一途を辿っている…そして、今この瞬間にも爆発的に増加しているだろう」

「下手をすると激突時には、今の倍以上になってる場合もあり得るわけか」

「うむ」

「なあ周瑜よ、一つ聞きたいんだが…」

「ん? 何だ？」

「神蓮はどうしてる？」

「あのお方なら今、中庭の調練場で兵を扱っておられるよ」

「へっ? 孫策に王位を譲る際、将であることを辞めたんじゃないかっただか？」

聞けば孫策は袁術の配下扱いとなっており、いくら黄巾賊討伐の為とは言え軍事演習はそれ即ち謀叛の意思ありと取られてしまう。だが神蓮なら呉の将ではないし、その事は袁術も知っているから何も言えないだろうと言う事だった。

「子供の言い訳じゃあるまいし：」

「と言っても事実袁術は子供だし、唯一の監視役とも言える張勳は紀霊の策略によって袁術からは遠く：紀霊本人も私腹を肥やすことに忙しい」

「ま、俺ならすぐにでも寿春城を潰しに行ってやるがな」

「そう言うな：我らにとて算段があるんだからな」

孫策の話にもあった通り：もっぱら袁術の支配からの独立の事だろうが、出来るだけの力が足りない。

力を付けようにも名声と金が無い：詰まるところ今は無理なのだろう。

：まあ“今の俺”には関係の無い話だがな。

「そりゃそうだ」

「ところで呂堂、お前はさっきから何をしてるんだ？」

言って周瑜は手にしていた書簡を机の上に置き、床に座り込んで作業をしている俺の手元を覗き込んだ。

：こうして見ると周瑜も十分に『超』の付く美人だよな。

左の目じりの泣き黒子とか色っぽい：って、それは横に置いてこ

う。

「これか？ 絡繰りを弄ってんのさ」

「絡繰り？ 何の絡繰りなんだ？」

「関節可動型人形」

「関節…可動型人形、だと？」

「ああ」

手にしたパーツを互いにかみ合わせ、その中央部をナットとボルトで留める。

まあ最初にナットとボルト、ネジやワッシャを見た時は驚いたもんさ。

この時代にやどう考えてもあり得ないし、各種ペンチやニッパー…各種レンチとか各種ドライバーもあるし、極めつけはギア…つまり歯車まで存在してるんだからな。

が…今じゃ俺には欠かせない道具さ。

「これで…よし！」

俺はそれまで組み上げたパーツを組み立て、1体の人形を作り上げた。

「これは…雪蓮か！？」

「お、流石は呉の筆頭軍師だぜ…良くわかったな？」

そう、俺が組み上げていたのは孫策人形だ。
ちなみに俺の人形の出来は父さんと母さん、それに洛陽の職人さんから太鼓判をもらってる。

「本人と瓜二つじゃないか：これが木に出せる触感なのか！？ お
お、胸も柔らかいし：む、指まで動かせるのか？」

「継ぎ目を目立たなくするのは、実家の秘伝だから言えねえけど：
：胸の部分は豚の鞣し革を縫製して成形して人形の胸部に貼る、その
後あらかじめ空けておいた背中の穴から綿を綺麗に詰めて：背中の
穴を塞ぎ、革の継ぎ目を消せば完了：：可動する関節は指だけじゃ
ねえぜ？ 首・両肩・両肘・両手首・手の平・胸部・腰部・股関節・
大腿・両膝・両足首・両足の全指が可動式になってる：だから
こうやって衣服を着せて、鉄で作った紛い物の南海霸王を持たせて
やれば：」

戦場で南海霸王を振るう孫策の勇ましい姿が再現できる。

足の内部に鉄を仕込んであるから、スタンド無しでもキッチリ自立する。

他には目元や口元等のパーツを差し替える事で、笑った顔や怒った顔：照れ顔や泣き顔まで再現できたりする。

「だからこうやって組み替えて関節を動かして、服を肌蹴させて寝
台に寝かせると：」

「何と言う扇情的な：ちなみに、製作期間は？」

「作る対象となる人物の詳細な外見的特徴と表情変化が把握でき、
かつ材料が十分なら一体四日ってところか？ 孫尚香や周泰みたい
に体格の小さい子なら三日だな」

「随分早いな…」

当然！

木材の加工は全部氣でやってるからな…木材部分の加工は1日あったら終わる。

あと3日は関節部の加工と服飾品・装備品の作成に充ててる。氣の無駄使いだって？

良いんだよ、鍛練と言う実益を兼ねた趣味の一環なんだから。

「まあな、作り慣れたしな」

ちなみに絡繰りの技術は故郷に居る時、朱雀を調整している母さんから学んだ。

母さんの親友に『李乾』って人がいるんだけど、この人が物凄い絡繰り好きで…絡繰りのギミックとその実用性に胸打たれた母さんは、俺に弓を作る時には必ず絡繰りを仕込もうと思っていたらしい。

その事を聞いた俺は思わず『絡繰りって浪漫あるよな』とつぶやいてしまったのだが、母さんは笑って『あらあら、刃ったら…李乾と同じ事を言ってるわよ』と言っていた。

また、これまでの作品は…

霞1体

理沙1体

恋2体（内1体はねねのオーダー）

月1体（詠のオーダー）

紫苑さん1体

桔梗さん1体

焰耶1体

天1体
照1体
神蓮1体
祭さん1体
穩1体
風1体
稟1体
斗詩1体
麗羽1体
蘭里1体
張勲1体
何進さん1体

…俺が17体…となっている。

もちろん俺人形は刃愛豊乳連合の皆さんと、風・稟・斗詩・麗羽・蘭里・何進さんからのオーダーなんだが…風と稟は諸国行脚中だろ？どこに置いてんだって話になるよな？

また、俺以外の人形は全部白雪はやしえが守る組み立て式倉庫に並べて置いてある。

この組み立て式倉庫も俺の手製さ。

…作成相手の選別基準？

もちろん呂堂後宮の構成予定員だが？

そうさ、孫策ばかりじゃない…周瑜や孫権だっていずれ作る予定さ。

「なるほど、お前の弓である朱雀も絡繰りを搭載しているのか」

「里帰りした時に籠手、つまり穿紅も弄ったけどな」

と、そんな話を話していた時…周瑜の執務室の戸が叩かれ、兵士が1人入ってきた。

「ご報告申し上げます！」

「どうした？」

「孫策様及び黄蓋様が寿春城よりご帰還なさいました…そして話がある、周瑜様と呂堂殿をお呼びにございます」

「…そうか、分かった…玉座の間だな？　すぐに向かう」

さて、そろそろ黄巾賊の討伐かな？

ちなみにこの後、孫策からは『冥琳人形も作って欲しいな♪』と依頼されたのは言うまでもない。

伝記の51 刃、本格活動を始めるのこと（後書き）

木製の人形…マネキンですが、胸を柔らかくする技法等は架空の設定です。

伝記の52 一刀、銅鏡の光に吞まれるのこと（前書き）

書き溜めネタその10。

書き溜めたネタ、これで打ち止めです。

伝記の52 一刀、銅鏡の光に吞まれるのこと

（第三者 視点）

「まさか再びここに来る日が来ようとは…」

言ってその人物は、物の配置が：最後に入った日とは全く違うその部屋を見渡した。

部屋の名前は『歴史資料保管室』と言い、数多くの祭器や神器の類を資料として保管している部屋。

そんな部屋を見渡して、何かを懐かしむように呟いた彼の名は『北郷 一刀』と言う。

この歴史資料保管室：通称『資料室』を施設として有する、ここ『聖フランチェスカ学園』の在学生だ。

「にしても難儀な問題に巻き込まれたもんやな、かずピー」

言って煩わしさを隠そうともしないのは、一刀のクラスメートにして悪友：その名を『及川 佑』と言う。

「ここは正直、まだ入りたくなかったんだが」

「まあな…それはワイも一緒やけど」

彼らの胸中に思い起こされるのは、17日前に亡くなった親友の事。親友の名は『呂堂 刃』と言い、彼らにとっては実に惜しい人物で

あつたようだ。

呂堂は20日前、この資料室で一刀と共に資料の回収作業をこなしてその時、些細な事がきっかけで頭部に怪我を負って入院…3日の治療を経て無事退院したのだが、その帰り道で事故に遭い…帰らぬ人となってしまったのだ。

「死因は、レンガ製植木鉢が頭部に直撃した事による脳挫傷やってんな？」

「ああ…息子の体だから私が直接って、刃の親父さんが検死解剖したから間違いない」

本当に呂堂は死んだのかと、事故発覚当初は誰もが耳を疑ったらしい。

中でも一番取り乱したのがこの一刀で、呂堂が死ぬ3日前に病床にあった彼と話していたから尚の事だった。

この資料室であった事故さえなければ、いやあの時俺がもっとちゃんとすれば…と、今でも一刀はそう悔やむ事が多いらしい。

ただ気がかりな点として、呂堂が事故に遭った直後…119番通報があった事なのだが。

「にしてもあんだだけの事になった言うのに、この資料室は未だに薄暗いまんまやねんな」

「予算が無いらしいぞ？　とまあ愚痴ってても仕方ない…早く終わらせて出ようぜ、俺…この部屋に長居したくないんだ」

「…やな」

言って一刀と及川は、担任から頼まれた資料の回収を始めた。

頼まれた資料は古代中国の後漢時代、いわゆる三国時代と呼ばれた時代の資料。

来週の古代史の授業で使うから集めてくれと、古代史を受け持っている担任から頼まれたそうだ。

「んじゃパパッと終わらして帰るで？ かずピーは東側、ワイは西側な」

「オッケー」

ただ呂堂の一件以来、高所に重量物を置くことはなくなり：代わりに部屋が広くなって、西側が書籍：東側が物資、と言うように内部の保管場所が変わったのだ。

そして今回、一刀が物資を：及川が書籍の資料を回収することとなっている。

「えっと、魏国設立時の印と：夏侯惇の剣の柄紐、関羽の青龍偃月刀の切っ先のかけら：後なんだっけ？」

一刀は手にしたリストから、資料として持ち出す物品の回収を始めた。

もちろん物品のほぼ全てが真贋怪しい事については一切触れないが。そしてそれらは順序良く見つかって行き、やがて最後の一品となる。

「最後は：外史の銅鏡？ 銅鏡って：ああ、アレか：やだなあ」

最近では祭器としてのニュアンスが強い銅鏡だが、古代アジア圏では実際に鏡としても使われていたことが多く：担任がリストに書き殴っているメモにも『後漢時代の皇族の生活備品』とある。だがこの銅鏡こそ、一刀の中では呂堂の死因たる物だった。

呂堂はあの日、自分が手を滑らせたこの銅鏡が頭に当たり入院：退院して家路に就いたところで事故死したのだ。

「…でもいつまでも逃げててもしょうがない：手早く終わらせないとな」

そう決めた一刀は、それまで手にしていた資料の数々を資料室入り口の机の上に置き：銅鏡が置いてあるエリアまでやって来た。

ここには後漢時代の銅鏡だけではなく、真贋は不明だがあの『ヤタノカガミ』までもがあるらしい。

「さてと、後漢の銅鏡は：この辺りだったか？ えーっと、後漢後漢…：…ん？」

銅鏡ばかり20枚が並ぶエリアを歩いていた一刀だったが、ふとおかしい物を見つけて足を止めた。

この資料室に保管してある銅鏡はいずれも桐の箱に入っているのだが、その内の1つが蓋と身の隙間から光を放っていたのだ。

「何だこりゃ？」

一刀はその銅鏡が入った桐の箱を手にとった。
確かに蓋と身の隙間から光が漏れ出ている。

「…：…どうしよう、先生を…いや、まずはアイツにも見てもらうか…おーい！ 及川！」

何かあれば報連相：つまり報告・連絡・相談と言うのが不測の事態における最たる対処法だが、それを一刀は及川を相手に実施するこ

とを決めた。

「何やかずピー、終わったんならワイの方を…何やそれ!？」

手に数冊のバインダーを抱えた及川は、一刀に呼ばれるまま彼の元へやってきた。

どうやら近くにおいて、資料回収が難航していたらしい。

終わったのなら手伝ってくれと言おうとしたが、それより先に一刀の手の中にある桐の箱とその光が目についたらしい。

「なあ及川、コレ…何だと思う？」

「何やてそれ、銅鏡の箱やろ？ 何で光っとんねん」

それこそ不測の事態。

鏡は確かに光を放つが、それは別の光源があって初めて成立する現象。

だがこの部屋は照明が少なくて薄暗く、かつ中の銅鏡が発している光はこの部屋の照明より明るい。

「…どうする？」

「どないするもこないするも、まずは開けてみんと分かれへんで？」

「だな…俺が開けるから、及川は箱を持っててくれ」

言って及川はその箱を落とさないようにしっかり持ち、一刀が蓋を外す。

すると中から出てきたのは、青白く明滅する…裏にヒビが入った銅鏡だった。

「青白く光つとんで：脈動的で気味が悪いわ」

「しかも何だこれ、何か：生温かいんだけど」

一刀が銅鏡を手に、そう言った感想を漏らす。

そして箱を床へ置き、一刀から銅鏡を受け取った及川もまた同じ感想を漏らした。

「とりあえず先生に連絡やな：かずピー、ワイ手え塞がつとるから頼むわ」

「りょーかい、って：スマン及川、俺：先生の携帯知らねえわ」

「マジかいな？ まあええわ：ワイがかけるから、かずピーは銅鏡持っとってや」

この場では結論の出しようが無い為、とりあえずは担任への連絡をすることにした2人。

及川の指示で一刀は担任へ電話で連絡をしようと試みる：しかし一刀は自分の携帯に担任の携帯電話の番号が入っていない事を思い出し、それを及川に告げる。

すると及川は自分の携帯なら大丈夫と一刀に銅鏡を手渡す。

「つか及川、何でお前の携帯に先生の電話番号が？」

「そりゃオマエ：桃香^{ももか}ちゃんが美人やからに決まっとるやろ？」

この及川と言う人物は女の子、とりわけ美女が好きで：美女ならば年齢職業、彼氏や夫の有無に関わらず：聖フランチェスカ学園の8

割に上る女性の電話番号を登録している。

ちなみに桃香とは一刀達の担任の名前で、今年で24になったばかりの美人教師。

抜群のプロポーションを誇るモデル体型の美女だが、気さくな性格で未だに独身。

…及川の好みにどストライクらしい。

「えーと、桃香ちゃんの番号は…」

「……………あれ？」

先週発売されたばかりの新型携帯を片手に、目的の相手の電話番号を探す及川。

そんな及川を見ていた一刀だったが、ふと…手にした銅鏡に変化が生じている事に気が付いた。

「……………気のせいかと思ったけど、やっぱりそうだ…この銅鏡、少しずつ熱くなってる」

「…もしもし？ 桃香先生？ 及川ですけど…はい、はい…ええ、実はですね…」

「…おい、及川」

「……………いやいやいや、桃香ちゃんは十分魅力的ですって…へ？ 合コンに失敗した？ そらまた何で…あゝ、なるほど」

銅鏡の異変を及川に知らせようとする一刀だったが、当の及川は先生を呼ぶことを忘れ…いつの間にか世間話を始めていた。

「おい、及川！」

「…それやったら今度の日曜にワイが…って何やねんなかずピー！
せっかく桃香ちゃんとデートの約束を…」

「銅鏡がさ、ガンガン熱くなってるんだけど」

…は？ 銅鏡が熱くなってる？」

あろうことか担任の教師とデートの約束を取り付けようとした及川
だったが、それは一刀の叫びにより寸差で阻止される。

大事な要件をぶち壊された及川としては事情の説明が欲しいところ
だが、一刀の口から出てきた言葉には耳を疑わざるを得なかった。

「銅鏡が熱^{あつ}なつとるって？ って、そないなアホな話が…」

と、疑いの表情をした及川が一刀の持つ銅鏡に手を伸ばした…その
時だった。

—カァッ！—

突如として銅鏡が夥しい量の光を放った。

「うわっ！」

「どわっ！」

それに驚いた一刀と及川だったが、その時すでに一刀の手に銅鏡は
無く…代わりにあったのは…

―ガシヤアアンッ！―

金属の板が碎け散るような音のみ。

やがて光が収まった時、そこに一刀と及川の姿はなく…残ったのは粉々に碎け散った件の銅鏡、そして『外史の銅鏡』とラベルの貼つてある桐の箱だけだった。

伝記の52 一刀、銅鏡の光に吞まれるのこと（後書き）

携帯用アプリ版『恋姫無双』のオープニングを参考に、シーン構築を行いました。

担任の名前が桃香なのは何の関係もございません。

伝記の53 一刀、3人組に出会うのこと（前書き）

ここより時間軸が原作開始時の物になります。

つまり原作開始。

頑張ります。

伝記の53 一刀、3人組に出会うのこと

「一刀 視点」

「…ん？」

強い光がまぶたを直撃し、それまで浮遊していた俺の意識は急遽覚醒へと至った。

そして身を起こして背伸びをし…目を開けて、言葉を失った。

「どこだ、ここ」

目につくのは砂・山・空。

そしてそれが視界全域に至るから、なお驚きである。

「足元は一応は土だから、砂漠って事はないと思うが…これ、ある種の荒野って言うんだよね？ こんな場所、日本にあったっけ？」

言って一刀は再び周囲を見渡した。

やはり見渡せど周囲には山か土か、あるいは見上げて空があるのみ。

「つかマジでここどこだ？」

やはり身に覚えのない場所だ。

爺ちゃんが住む鹿児島にもこう言った場所はあるけど、ここほど荒んでもいない。

空を見上げれば太陽はまだ高く、雲間から容赦なく陽光を降り注がせている。

「…しかし暑いな、今何時…そうだ！ 携帯があるんだ！」

時間を知ろうとして携帯があるのを思い出し、俺は制服の尻ポケットをまさぐる。

携帯があれば時間どころかGPSを使って、ここが何処かも分かる。そう思う俺の指先が触りなれた質感の携帯を探し当て、俺はそれを引き抜いて待ち受け画面を見る。

これで勝った！

…と思ったのだが、携帯の待ち受け画面には

『圏外』

と言う絶望の2文字が表示されている。

更にはバッテリーの残量メーターが残り1で、もう長くはもたない事も絶望の度合いを加速させた。

「くそ、どうなってんだ…俺、何かしたか？ 朝起きてメシ食って、

学校行って授業受けて勉強して…放課後は資料室で及川と、ってそうだ！ 及川は…」

とりあえず携帯を元の尻ポケットへねじ込み、自身が知りうる限りの情報を反芻していてふと…本来なら真っ先に思い出すべきはずのことをようやく思い出した。

そう、あの及川のことである。

及川とは銅鏡が光を発するその直前まで一緒にいたのだが、今自分が置かれている現状を鑑みるに多分同じような状況に置かれているはずだ。

そう思い周囲を見渡したのだが…

「…あれ？」

その及川は及川のおの字どころか、存在のその字すら見つからなかった。

代わりに見つかったのは、自分がクレーターらしき地形の底に居たという事実のみ。

「隕石飛来の跡地か何かか？」

足元にあるすり鉢状の大地のくぼみを見ながら、そうつぶやく俺。にしてもここはどこなんだろう。

そんな事を考えていた、その時だった。

「おう兄ちゃん、イイモン着てるじゃねえか」

昨今では滅多に聞かない言い回しが、俺の背後から聞こえてきた。

いや、イイモンってこの上着か？

イイモンってほどもないぞ？

ただのポリエステルだし：

そう思いつつ俺は後ろを振り返り、そしてまた絶句した。

振り返った先に居たのは3人の男。

1人は俺と同程度の身長でヒゲ顔。

1人は俺の胸ぐらいままでしか身長が無い小男。

最後の1人はどう呼んでも『デブ』としか言えない大男。

彼らは一様にお揃いの黄色い布を頭に巻き、体には革で出来たと思わしき…鎧と見られる衣装。

そして腰には剣を佩いている。

そんな彼らを見て俺は、思わず本音を漏らしてしまう。

「……コスプレ？」

だってそうだろう。

廃刀令が銃刀法と名を変え、刃物の所持はそれだけで捕まってしまうこのご時世：腰に剣なんか佩いて、何かのキャラっぽい衣装を身に着けるのはコスプレしかない。

そう思ったのだが：

「何ワケの分からねえ事言ってやがんだ？」

彼らから返ってきた反応はこの通りだった。

いや確かにこんな荒野でコスプレなんざする必要はないだろうが、真のレイヤーならどこでだって衣装を身に着けるはずだ。

あるいはこの荒野こそ巨大なセットで、俺には見えないところでカメラが俺を撮ってるんだ。

「いやだって、その身なりはどう見たって…」

「デメエ、死にたいのか？」

―スチャッ―

「ッ!？」

俺の言動に業を煮やしたのか：ヒゲの横に立っていた小男が、腰に履いていた剣を鞘から抜き：その切っ先を俺の首に当てる。

ってちよつと待て、この冷たさ…そしてその剣の所々に付着している赤黒い染みは…

「止めねえか、チビ」

「ですがアニキ…」

「殺すにゃ簡単だが、そのまま首を落としてみる…噴き出た血で、こいつの服が汚れちまうじゃねえか」

『殺す』『首を落とす』『噴き出た血』

その3つの単語だけで十分だった。

…この剣が本物で、彼らはその剣で他者を殺傷した事があると気づくには。

剣が本物と知り、そしてその事実には震えた俺は尻もちをついたのだ
が…尻ポケットでバキツと言うヤバイ音がした。

…ひょつとして携帯壊れたかも。

ばれぬようゆっくりと尻ポケットへ手を入れ、俺は予想が事実である事を察し…がっくりと項垂れた。

さらば、俺のデータ達。

だがそんな俺の状況を大男が、アニキと呼ばれたヒゲ面の男へ間違
って伝える。

「コイツ、ビビッてるんだな」

「あ？」

項垂れていたのがまずかったようだ。

だが勘違いは更なる勘違いを生み、それは時としてとんでもない結果を作り出してしまいうらしい。

「…へへっ、流石は貴族のお坊ちゃんだぜ…アニキ、コイツ…どうやら剣を見た事が無いらしいですぜ？」

「ま、その方が仕事が捗るさ…さて小僧、お前に選択肢をやろう…1つ、身ぐるみおいて立ち去る…2つ、死ぬ」

ちよ、ちよっと待て。

身ぐるみ置いてくか死ぬかって…

「早く答えろ」

言って手の剣を俺の首に押し当てるチビ。

つか痛い！

切っ先が首に、少しだけだけど刺さってるって！

「え、選ぶんだな」

こいつら、マジでやる気だ。

そう察した俺は、更なる震えに身を落とした。

いくら剣道を習っていて、主将が全国大会出場経験者とはいえ…あれはどう頑張ってもスポーツの域を出ない。

ましてや俺は喧嘩なんぞした事がないし、剣道三倍段…真剣持ちの相手に素手でかてるもんか。

「…ブルっちまって声もでねえか？ まあ良いや…血濡れの服は値が落ちるんだが、この際仕方ねえ…おい、チビ」

「へい」

「殺^やれ」

「へいっ」

答えあぐねている俺をビビッていると認識したヒゲ面は、チビと呼ばれた小男に命じる。

小男は抜いたままだった剣を振りかぶり、それを俺の首めがけて振った。

動くことができない。

俺はここで死ぬのか？

いよいよ迫る死の瞬間…俺は目を閉じたのだが。

「待てえい！」

そんな、凜々しい声が場に響き…振るわれた凶刃は、俺の首の皮膚を薄皮で切って止まった。

見れば3人組の後ろに、ナースキャップに見える白い帽子を被り…袖に蝶の羽を模した刺繍の入った浴衣のような服を身に着けた、水色の髪の女性が…槍のようなものを携えて立っていた。

「何だテメエ！」

「力無き庶民に徒党を組んで詰め寄り、あまつさえその命すら奪おうとする外道どもに名乗る名などない！」

目の前で高速で展開されるその様子に、俺は微動だに出来ずにいた。

槍の女性がその槍を手元でくるくる回し、穂先とは逆の先端を前に出して構える。

「ふっ！」

―ヒュ、ドス！―

女性の手がブレて見えた瞬間、鈍い音がしてチビの鳩尾へ槍の逆の先端が突き刺さった。

手がブレるとか、速すぎだろ！？

「デメエ、よくもチビを…」

「ほう？ お主らのような外道どもでも、仲間意識と言うものを持つていたのか」

「言ってくれるじゃねえか…オイ、デク！」

「く、喰らうんだな」

デクと呼ばれた大男は、アニキと呼ばれたヒゲ面の指示に従い腰に提げていたであろう鉞を手にとった。

…が。

「遅すぎて蝶が止まるぞ…はいはいはいはいーっ！」

―ズドドドドドドド！―

鉞を取り出してから振りかぶるまでの間に、槍の女性は大男の体を滅多突きにする。

うわ、急所こそ外してるけど全部クリーンヒットだ。

「…おふう」

ガスが抜けたような声とともに大男が崩れ落ちる。

「さあ残ったのはお主だけだ…どうする？　これ以上と言うなら私も容赦はせんぞ？」

「ち、畜生！」

仲間2人をあつという間に沈めた凶器の先端を突き付けられ、ヒゲ面はたたらを踏んだ。

そして頭を振った後、蹲っていた仲間たちを起こすと…

「くそ、逃げるぞ！」

そう言って3人揃って走り出した。

「逃がすか！」

そしてそれを追って自分も走り出す槍の女性。

やがて彼女たちは、あつという間に見えなくなった。

「…なんだったんだ？」

「怪我はありませんかー？」

「うわっ！」

今の出来事は何だったんだと考える俺だったが、突然聞こえてきた声に飛び上がってしまう。

見れば俺の足元に…金髪の、眠たげな眼をした少女が立っていた。頭にどこぞで見たようなデザインの塔が乗ってるんだが、何なんだろう。

つかこの子…身長割に、胸が異常に大きくないか？

ロリムチなんて言葉じゃおさまらない…さしずめロリ巨乳か。

「開口一番がうわとは…さすがにそれは失礼ではありませんかー？」

「あ、いや…ごめん、多分大丈夫だ」

「そうですかー」

「風、大丈夫ですか？」

「それは風の台詞だと思うんですよー」

のほほんとした少女と話していると、今度はメガネをかけた…全体的に凜とした雰囲気をもとう女性が出てきた。

彼女たちは一体？

「やれやれ」

「おお、おかえりなのですー」

そこへまた増える人影。

また知らない人かと思ったが、今度は違う。さっきの赤い槍を持つ、青髪の女性だった。

「馬でも使われたのですか？」

「うむ、同じ足の数ならば到底負けはせぬのだが…倍の本数で来られては流石に、な…済まぬ、逃げられたよ」

「最近は特に多いですからね…追いついただけでも御の字と言うものです」

いや、同じ足の数なら到底負けないってアンタ…あの3人組も相当なスピードで走ってたぞ？

…それよりもまず聞きたいことがある。

「あの、風さん」

そう思い、口を開いたのだが…

「ひうっ！」

「貴様！」

—ジャキッ！—

次の瞬間、俺はまた命の危険にさらされていた。

他でもない…あの、赤い槍の青髪の女性の手によって。

そう、あの3人組の内2人を一瞬で沈めたあの赤い槍を…今度は本当に切っ先が、俺の眉間に突き付けられていたのだ。

「本人の許し無しに真名を呼ぶとは笑止千万、今すぐ訂正しろ！」

「え、ええっ!？」

「は、早く訂正して下さい」

マナってなんだ!？」

そんな物、俺は呼んだ覚えがないぞ？

だが状況は刻一刻と悪化している。

このままじゃマジで危ない。

あの3人組も怖かったが、眼前の女性の怒気や殺気は先刻の3人組のソレを遥かに上回っていた。

「わ、わかった! 訂正する、済まなかった!」

「…宜しい」

—…チャキツ—

俺がそう言うなり引っ込められる赤い槍。

「にしても、真名って何だ？」

「真名を知らないんですか？」

「知ってたらあんな事にはならなかったと思うのだけど」

「なるほど、一理ありますねー」

聞けば真名とはその人物の本当の名前で、呼んで良いのは親や伴侶…あるいは呼ぶ事を許された者のみ。

それで無い者が呼べば首を刎ねられても文句は言えない物なのだ。うだ。

「なるほど…じゃあ俺は君達を何と呼べば良いんだ？」

「人に物をたずねる時はまず自分から名乗ると、親から教わらなかったのか？」

…すさまじく理不尽な物言いだ、ここでキレても仕方ない。

「俺は北郷一刀って言うんだ」

「変わった名だな」

「変わった名前？　　そうかな…俺の故郷にはありふれた名前だと思
うんだけど」

「姓は北で名が郷、字が一刀ではないのか？」

「いや、字はないんだ…姓が北郷で名が一刀、もちろん真名はない」

「字も真名も無い…そうか、私も名乗っておこうか…私は姓が趙、
名は雲…字を子龍しりゅうと言う」

…マテ、俺は頭がおかしくなったのか？

彼女は今、自分を指して『趙雲子龍』と名乗った。

趙雲と言えは三国志に登場する、蜀軍五虎将に数えられる武将だったはず。

趙雲がここにいると言う事は、ここは中国なのか？

いやそれよりも趙雲が女性であることのほうが驚きだ。

何故なら俺が知る趙雲は男だからだ。

「風の名前は姓が程立ていりつと言うのですよ」

「今は戯士才ぎしさいと名乗っております」

程立って後の程イクの事だよな？

それに戯士才ぎしさいって確か、郭嘉と関わりの深い軍師じゃなかっただろ
うか。

「それはそうと星ちゃん」

「ん？ どうした、風」

「あそこに軍が」

「何だと？」

言って程立が指差す先には、確かに砂煙が立ち上っているが…あれ
が見えるのか？

「…ええ、確かに軍ですね…旗は曹に夏侯、陳留の刺史ではないか
と」

「官軍か…面倒な」

官軍って確か、政府直轄の軍の事じゃなかったか？

「ふむ…致し方ない、北郷殿」

「何でしょう？」

「後は自力で乗り越えてくれ」

「は！？」

「風達は流れ者ですし、こんなところで官軍と関わると色々問題が多いですよ」

「風、急いで…時間がありません」

言って3人は、砂塵とは逆の方向へ走り去って行った。

…なんだったんだろう。

そしてここは…どこ？

伝記の54 刃 歩み始めるのこと（前書き）

今回はスランプで、筆が進まず…少し短いです。

伝記の54 刃、歩み始めるのこと

く刃 視点く

「んで？ 袁術は何て？」

「予想通り何も、黄巾党を討伐せよって」

「黄巾党か」

げんなりとした表情の孫策はそう言い、玉座にどっかりと座る。
さっきまで『冥琳人形が楽しみだわく♪』って嬉しそうにしてたのは何だったんだろう。

話を聞くに袁術から、ここ最近勢力を増して暴れつつある黄巾党――以前は黄巾賊と呼んでいた賊たち――を始末せよと言う事のようにだ。

「周瑜から聞いたが、本隊は現状で十万だから…予測で四千ほどか」

「そうだな…対する我らは最大戦力でも二千五百、数の面では不利だ」

「戦の基本は相手よりも多くの人数を集める事、確かに理論的には不利だ」

「じゃが実際は？」

玉座に座ってばやく孫策の元へ、ニヤついた顔を隠そうともしない祭がやってきて言った。

「負けるわけないでしょう？ 祭や私みたいな攻撃型武將に…冥琳と穩と亞莎って言う呉軍三大軍師が居て、かつ呂堂って言う超攻撃型武將がいるんだから」

「おいおい、俺まで戦力扱いかよ…俺は今んとこ客將で、いつ抜けるかなんて…」

「当然でしょ？ 呂堂は我ら孫呉が有する、管輅の告げた強靱なる赤き太陽…そしていずれは私の旦那様になる男なんだし」

…オイコラ、話聞けよ」

言って俺の話には耳を傾けず、妖艶な笑みを浮かべる孫策。そんな孫策を見て、祭は更に笑みを深めた。

「祭さんまでニヤニヤして、何がおかしいんだよ」

「はっはっは、いやなに…刃をそばに置いておきたいと言う策殿の意思が見えすぎでの」

「なによお…そう言う祭はどうなのよ？ このままじゃ刃は、そう遠くない将来…呉を出て行っちゃうのよ？」

「それが如何なされた？ 愛する男を待つのも良き女の務め、違わんかの？ 堅殿」

そう、祭が言ったその直後だった。

—むによんっ—

―れろん―

俺の背中に柔らかくて温かい物が押し付けられ、同時に耳がヌメツとした物で撫でられた。

「ふひゃっ」

同時に俺の口から飛び出す、俺自身をしても自分の物とは到底思えない甲高い声。

首だけを後ろへ向けるとそこには、孫策と似たような衣装を身に着けた神蓮がいた。

「…神蓮、突然耳を舐めるのってどうなのさ」

「うふふっ♪いいじゃない、刃の体に汚い所なんか無いわよ」

…いやソレ、普通は閨で…女に対し前戯を施す男に、秘所を愛撫された女が言うセリフでは？

内容が生々しすぎたな…スマン。

「まあ雪蓮と祭の言い分に関しては祭に軍配ね」

「母様まで…」

「それで？ 今回の黄巾党討伐ですが…神蓮様は如何なさるおつもりでしょうか？」

神蓮が断言し、孫策が項垂れたのを確認して真顔に戻った周瑜がそう言う。

訳するなら『前呉王で戦力的には申し分ないが、立場的に呉省でな

い事を小帝殿下にお伝えした神蓮様：今回は自身をどう運用するのか』と言う事だろう。

「本当なら剣を手に雪蓮と二人、最前線で大暴れしてやりたいのだけれど：今回は遠慮するわ」

「なぜなの？ 母様」

「考えてもみなさいよ：私、どんな剣を振るえばいいのかしら？
なんかいはおうち
南海霸王ほどの剛性を備えた剣じゃないと、私の力には耐えきれないのよ？」

そうなのだ。

神蓮の攻撃力は恋のそれを超えている。

いや、むしろ俺と互角。
ひじんせきげき
飛刃赤戟を手にした“本気の”俺と立ち会って、70合斬り結んだ：結果として神蓮が手にしていた調練用の、刃引きをした剣が根元から折れて終わりとなったが。

「いかんせん、脆い：と？」

「ええ」

だからこそ南海霸王のような、細身であっても驚異的な剛性を備えた剣でなくば使い物にならない。

「なるほど：堅殿が唯一まともに振るえる得物である南海霸王は、策殿の手に移っておるからの：」

「せめて思春の鈴音りんいんほどの剛性がなくっちゃ私には使えない：と言

って思春の武器を使うわけにもいかないし、そう言った理由で私は留守番をしてるわ」

思春：つまり甘寧が持つ曲刀『鈴音』は、確かに剛性だけなら南海霸王と同等：あるいはそれ以上。

何せ形状が違うだけで、俺の飛刃赤戟や恋の飛恋赤戟ひれんせきげきと同じ材料と工法で作成されたのだから。

「：そうよ、刃の親御さんに頼めばいいんじゃないかしら？」

「いや、止めといたほうがいいぞ？」

「どうして？」

「完成までに最低でも二月ふたつきはかかるし：神蓮に体に合わせて作るんだが、馴染ませるのにはまた時間がかかる」

甘寧は言っていた。

『呂堂の両親が手掛けたこの鈴音は素晴らしい物だが、素晴らしいが故に体へ馴染ませるのに三週間かった』と。

「いくら神蓮が周瑜泣かせな戦の天才だとしても、武器の扱いばかりはそうも言えないだろう？」

「そうだな：先日、呂堂の飛刃赤戟を借り：振るったはいいが手からすっぽ抜けていたしな」

あの時は甘寧に感謝したぜ。

何せあそこに甘寧がいなかったら、穏は今頃この世にいないからな。

「もう、冥琳までそういうことを言う…」

「それに堅殿の場合、狂化癖は策殿のそれより度合いは上じやろう？」

戦場と言うのは参戦者の性格にもよるが、多くの場合は興奮によって戦意が高揚する。

だが神蓮の場合は長時間血を見たり、多量の返り血を浴びたりすると興奮度合いが更に高まり…いわゆるトランス状態や、ランナーズハイの戦闘版…言うなればファイターズハイに陥る。

その『トランス状態』や『ファイターズハイ』の事を、俺たちは『狂化癖』と呼んでいる。

こうなった神蓮はまさに鬼神と化し、相手を屠る事以外のほぼ全てが意識の外へ押しやられる。

味方の判別は付くのだが、保身は考えてないので不意を突かれれば落命もありうる危険な状態と言える。

そしてその興奮は戦闘の終了と共に性的興奮へとシフトし、俗に言うヌレヌレになる。

その状態の性欲たるや凄まじく、本能の赴くままに腰を振るから大変だ。

ただ本人いわく相手は誰でも良い訳ではなく、こう言った悪癖を受け入れてくれる人物の見定めに苦労したそうだ。

「で、私は刃を見定めたんだけど…アレ、相当に凄いわよね？」

「だなぁ…丸二日も足腰がガクガクになるしな」

「けど足腰の状態は私だけじゃなく、祭や穩も貴方に抱かれれば同じでしょう？」

「いや確かに気持ち良いんだが、吐き出す方も腰に来るんだぞ？
…突かれる方もそうだと思うが」

「はっはっは、違うない」

俺は精を吐き出しすぎた事による脱力感と無気力感、神蓮と祭さんは腰砕けのようになってしまった。

穩に至っては丸一日、何を言ってもひたすら喘ぎ悶える始末。
いや、堪能したにはしたんだが。

「まあともかく、準備だけは進めておきましょうか：祭は調練の最終調整、穩には兵站の準備を進めるよう伝えといて欲しいんだけど
…母様、お願いできる？」

「分かったわ」

「穩？ 現地の情報が欲しいわ」

「は～い」

…居たのか、穩。

………

………

…

そしてやって来ました黄巾党討伐。

いや、俺にしたらもう飽きるほどと言えるんだが。

「揃いもそろってまあ…」

「仕方ないじゃない？ 漢王朝は衰退し、中央の政権は宦官が我が物顔で占拠…私腹を肥やす為に重税を課し、払えなきゃ死罪か嫁娘が慰み者になる…」

「身を削ぐ思いでその重税を払ったところで、官軍は民を賊から守る訳でもない…賊にでも身を落とさなきゃやってられないご時世って事でしょ？」

「まあそうやって集まり、名ばかりの漢王朝へ牙を剥くようになり…やがて討伐されるわけだが」

「それがですね、ついさっき袁術さんのところから伝令が来まして」

黄巾党は何考えてんだと言った、愚痴にもならない愚痴を零していた時…組んだ陣の奥で作業をしていた穂が、手に書簡を携えて歩いてきた。

「袁術から伝令？」

「はい…えっと『本隊を相手取った官軍が劣勢に陥った。手の出せる軍勢は冀州へ向かい、黄巾党の本隊を討つべし…戦果によっては褒美を取らす』との事です」

穩の報告を受け、俺は少しげんなりした。

この時の官軍と言えば洛陽の、靈帝直下の親衛軍のはず。

「そこまで弱ってるんだな、漢王朝の力って」

「……そうね」

「冥琳、諸侯の参戦状況は？」

「陳留からは刺史の曹孟徳が、九千の手勢を以て黄巾党の補給基地を叩いているらしい…また、幽州の太守である公孫賛が義勇軍を送り出している」

「義勇軍の将は誰なの？」

「資料によりますと…総大将の名は劉玄徳りゅうげんとく、配下の将に『黒髪くろかみの山賊狩り』こと関雲長かんうんちやうとその義妹である張翼徳ちやうよくとく…それと『常山の昇り竜』こと趙子龍ちやうしりゆう、軍師は水鏡女学院の誇る傑物…『伏竜』の異名ほうしげんを持つ諸葛孔明しよかつこうめいと、その親友で『鳳雛』の通り名を持つ鳳士元ほうしげん…さらに西涼からは馬騰の名代で『錦馬超』こと馬孟起ばもつぎと言う状況です」

『我が槍で応えよう！』ってありや違う馬超だよ。

つか馬騰の名代って、そりゃ確かに馬騰は病を患っていたが俺と烈…華佗の2人で治したはず。

にしても、黄巾党討伐の段階で五虎將軍の内4人が揃ってんのかよ。しかも孔明と鳳統って…鳳統はともかく、諸葛亮に対してはいつ三顧の礼を終えたんだよ。

まあそれでも五虎將にはならんだろうな…残るあの人的に考えて。

そう言えば天水の麒麟児こと姜維はこの世界にいるのだろうか？

「ふくん…黒髪 mountain 山賊狩りに常山の昇り竜、錦马超に伏竜・鳳雛…
か、凄まじい面々ね」

「まあ義勇軍に誰が来たって変わりやしねえよ」

「そうね、私たちは黄巾党と言う名の獣を狩るだけだもの………じゃ、行くわよ」

言って孫策はこちらを振り返って叫ぶ。

「聞け！ 孫呉の友達よ！ これより我らはこの地に蠢く獣共を駆逐する！ 敵は数が膨れ上がっただけの徒党にすぎぬ…聞け！ 孫呉の家族たちよ！ 恐れる必要はどこにもない！ 我らには赤き太陽が付いている！ 我が孫呉の牙門旗と、真紅の呂旗に続けっ！」

赤き太陽、真紅の呂旗…か。

「総員、拔刀！」

—キンッ！—

—ジャキッ！—

2500からなる勇士全員が、孫策の号令に合わせて拔刀する。
剣や槍、中には斧や弓もある。
そしてそれらが空へ掲げられ、太陽の光を反射して鈍い銀色に煌めいている。

「全軍……突撃っ!!!!」

「「「おおおおおおおおおおおっ!!」」」

伝記の54 刃、歩み始めるのこと（後書き）

本来なら先に、孫堅が没した事で起こる豪族の騒乱を鎮める戦いが呉軍シナリオの初戦なのですが：拙作では孫堅、つまり神蓮さんは存命なのでいきなり黄巾党討伐から始まります。

伝記の55 刃、義勇軍に焦ること（前書き）

原作を参照しましたが再現・表現は不可能…と言う事でオリジナル描写・設定にてお送りいたします。

伝記の55 刃、義勇軍に焦ること

く刃 視点く

―ザシユッ！―

「うぎゃあっ！」

一緒になってそろそろ2年になる、相棒の白雪ばいしえの背で飛刃ひじんせきげき赤戟を振るう。

振るわれた刃は眼前の黄巾党兵士の脇腹を捉え、そのまま体を上下に両断する。

「アオーンッ！」

―ブオンッ！―

―ゴシヤッ！―

白雪もまたその前脚に備えた、強靱かつ鋭利な爪を振るい…俺が討ち漏らした黄巾党兵士を屠っていく。

「野郎っ！ 死にやがれ！」

―ビュッ！―

戦力差は圧倒的なはずなのに、それでも向かってくる黄巾党兵士。繰り出された剣の一撃を難なく回避し、がら空きの首目掛けて飛刃赤戟を振るい…

―ザンツ！―

―…ブシュウウウ―

―ドシャツ…―

首を刎ねる。

それも一撃で。

人間と言うより有骨格生命体を一太刀で両断するのは、基本的に言えは難しい。

ましてや首にはその短さの中に、7つの骨があり…斬首にしようとすれば、関節と関節の間…つまり椎間板を狙わなければ両断は不可能だ。

「しかし…」

ふと周囲を見渡し、そう遠くない位置で南海霸王なんかいはおうを振るう孫策そんさくの姿を見つけた。

「あははははっ！ 弱いわ、弱過ぎよ貴方達！！」

既に狂化しつつある彼女は、その魅力的な肢体を黄巾党兵士の返り血で真っ赤に染め…笑いながら敵を紙のように斬り裂いて行く。

…どうやら彼女に人体構造は関係ないらしい。

「流石は江東の小霸王…害を為す奴にゃ容赦ないな」

その容赦のなさに関しては思うところがある。

以前、城下町で：彼女が懇意にしている老夫婦が、悪漢に人質にされる事件があった。

相手は4人組の男達で、聞けば押し入り強盗を働き逃げ出す途中：職務を放り出し、城下町散策をしていた孫策率いる警備隊に見付かったとの事。

男達は老父の頭に怪我を負わせ、老婦を羽交い締めにしてその首に短刀を突き付け：仲間に、逃げる為の交渉をさせていた。

老父は傷が少し深く、体力的にも危ない状況だが孫策は愚か警備隊員も動けない。

その現場に偶然居合わせた俺は、同じく現場を見守っていた祭さいさんと暗躍：物陰と屋根の上から男達を弓で狙撃、老婦に短刀を突き付けていた男の眉間とこめかみを射抜く事に成功。

仲間が狙撃された事に男達が動揺した一瞬の隙を突き、孫策が抜刀して突撃：男達は無力化された。

だが事件はこれで終わらない。

孫策はその後、男達をその場で斬首にしたのだ。

元日本人としてはやり過ぎ感が否めない：しかし、あれで正しい。なぜなら中途半端な情けは怨恨を生むからに他ならない。

例えばあの場で孫策が悪漢達を逃がした場合、逃げた悪漢達は十中八九：仲間を集めて報復行動に出るだろう。

すると今度は老夫婦だけじゃない：建業の城下に住まう民全員が危機に瀕する。

建業が危機に瀕すると、孫策の存在を疎ましく思う連中が悪漢達の

騒ぎに乗ずるだろう。

だから孫策は全員を斬首したのだ。
要らぬ怨恨を生まないように。

―ザシュッ！―

―ズバツ、ドスッ！―

「それっ！ あははっ！ えーいっ！ あーっはっはっはっ！」

―ザンツ！―

…以前読んだ漫画で、戦闘に入ると泣き出す女の子が登場した事がある。

その漫画の説明だと、泣く事で理性を意識外へ飛ばし…情け容赦無く、相手を殲滅出来るとあったのだが…

「ホラホラ、次に死にたいのは誰かしらあ？ 貴方？ いえ違うわね…だってみんな殺すんですもの」

…彼女の狂化はちよつと違う気がする。

―ズバツ！―

そんな事を考える内にまた1人、孫策の手で黄泉路へ渡された。

孫権や霞のように理詰めで振るう剣ではなく、力任せに振るう恋や焰耶のようなバトルスタイル。

「なるほど：攻撃型武将と言うのは、基本的に本能攻撃が得意な武将を指すのか」

—キュオオオ：—

—ドウツ！—

—ドオンツ！—

「うぎゃあぁっ！」

「な、なんだありゃ：バケモンか！？」

なら恋よりえげつない攻撃の中に、理詰めのように効果的な氣弾攻撃を混ぜる俺は何なんだろうな？

「か、勝てるワケがねえ！ アイツは無視だ！！ 回り込んで孫策の首を：」

—ザザザザンツ！—

台詞の終わらない内に、揃って頭を飛ばす黄巾党兵士。

「策殿の首を取るにはまだまだじゃのう、ヒョッコ共め」

言って現れたの祭さん。

手にした直剣の血を振るい落とす彼女だが、俺の記憶が確かならば祭さんの配置は確か：

「祭さん？ 何故ここに？ 俺の記憶だと祭さんは後局の本陣で弓隊率いて穏と援護射撃隊だったんじゃ：」

そう言うと祭さんはおかしそうに笑った。

「うむ、確かに配置はそこで間違いない…」

陣型は鋒矢陣。

先鋒と言うより最前線に孫策、陣型最奥部に周瑜率いる軍師達の控える本陣。

その左右に祭さんと穩とが指揮する弓隊、俺は孫策と同じ…つまりは前線で突撃だったはず。

「…が、肝心の総大将が最前線におり…その総大将の手綱が握れる人間で、動けるのは儂しかおらんのでな」

なるほど…つまり孫策のお目付役か。

「本陣は大丈夫か？」

「何、心配は要らぬ…本陣に詰める冥琳は、ああ見えて結構な使い手での…そんじょそこの雑兵ごときでは決して討てぬよ」

周瑜は軍師ながらあの暴走孫策を止めるための訓練も欠かしていないらしく、得物である白虎九尾びやっしきゅうびは本気で振るえば人間の骨を折る程度造作もないらしい。

加えて本人曰く『呂堂のおかげで体が軽い…今の私なら蓮華様とも互角以上に闘えそうだ』との事。

蓮華と互角…ねえ？

—ジャコン—

—キリキリキリ…—

「なら大丈夫かな…っと！」

―ヒュッ！―

―ドスッ！―

「がっ！」

「げっ…」

「うあ…」

祭さんの意見に同意しつつ俺は愛弓である朱雀^{すざく}を取り出して展開…
流れるように3本の矢を番えて弦を引き絞り、孫策めがけて殺到する
黄巾党兵士に向けて射つ。

放たれた矢は鋭い風切り音を立てつつまっすぐ飛び…孫策を討たんと
する黄巾党兵士3人の、それぞれの眉間に刺さる。

「相も変わらず見事な速射じゃの」

「師匠なら一射でこの倍は射殺してますよ…俺なんかまだまだです」

「そうか…なら儂も射手としての腕前を見せておこうかの」

―キリキリキリ…ヒュッ！―

―ドドドスッ！―

言って祭さんが放った矢は俺の矢より鋭い風切り音を発して飛び、
居並ぶ黄巾党兵士3人のこめかみを“貫通”する。

「すげえ！」

「はっは、矢を氣で覆えば刃にも出来ると思うぞ？」

なるほど、氣で覆うのか。

それならあの貫通力も納得できる。

「刃、危ない！」

「殺^とった！　くたばれ！」

「ッ！？」

しまった…どうやら戦場の真ん中で悠長に話しすぎたらしい。

祭さんに言われて氣が付けば、俺の背後に…大振りの斧を振りかざした黄巾党兵士が迫っていた。

この距離じゃ弓は間に合わないし、戟を振るうにも近付かれすぎ…
かと言って殴る・蹴るには届かない！

絶体絶命のピンチ…と、その時だった。

「…くたばるのは貴方の方です」

「ブォン！ー」

「バキヤッ！ー」

そんな声がして、鈍い風切り音が響いた後…突如、俺に襲いかかってきた黄巾党兵士の頭が破裂した。

何が起こったのかとよく見れば、黄巾党兵士の頭があつた場所に紫色の金属が生えていた。

「大丈夫ですか？ 旦那様あゝ」

「穩^{のん}！？」

俺の問いかけに応じ、穩は黄巾党兵士の後ろで腕を振る。

すると件の金属が兵士の頭から抜け、その姿を俺の目にさらした。

それはいわゆる『多節棍』と言う武器で、穩の手にあるのは彼女愛用の武器：銘を紫燕^{しえん}と言う九節棍らしい。

そういえば祭さんから聞いた事があるな。

穩も周瑜と同じく、軍師ながら前線に立ち：九節棍を振るって敵を倒すことができる、と。

だがあの話にはオチがあつたはずだ：ありや確か：

―むによん―

「ああんっ」

：そうだ、そうだ。

そういえばそんなオチだったっけ。

「や、やですゝ：見ないで下さいゝ」

見れば穩はその豊かすぎるギガメロンの谷間に紫燕の節を挟み込み、顔を赤くして悶えていた。

そう：祭さん曰く、穩は確かに武術もたしなむが：その大きな胸が九節棍を振るう妨げとなり、以前の賊討伐では追いつめた賊たちに『俺たちを誘惑する作戦だ』と：本人はまじめなのにそう言われた事があつたそうだ。

けど俺はそんな事は言わない。

「スマン、助かったぜ…穏、ありがとう」

「っ!？」

穏は俺の嫁だからな。

嫁に庇われるなんて情けない夫だと思う人もいるかもしれないが、俺達呉勢だとこんな事は日常茶飯事…それこそ夫婦だって関係ない。何せ仲間なのだから。

「旦那様あ、お礼なら閨で…最近ずっとお預けですし／／／」

…前言撤回していいか？

「…のう刃、その…儂も混ざっても良いかの？／／／」

いやいや貴女達、ここは戦場ですよ？

何を呑気に人を誘惑してますか。

「あーはっはっはっは!」

耳を済ませば孫策の高笑い。

駄目だこの人たち、早く何とかしないと。

とその時、俺に呉軍兵が1人駆け寄ってきた。

「伝令!」

「どうした?」

「南西に砂塵を確認！ 旗は緑地に『劉』並びに『関』と『張』！
幽州より上がってきた義勇軍かと思われれます！」

劉・関・張、義勇軍：劉備か！？

このタイミングで遭遇は少し厳しいな：

「他に旗は上がったか！？」

「ハッ！ 同じく緑地に『馬』が二つ、更には『趙』『諸』『鳳』
を確認しております！」

チッ：三國無双で言う蜀陣が軒並み来てんじゃねえか。

来てねえのは『黄』を掲げるべき黄忠こうちゅうこと紫苑しおんさんと、『魏』を掲
げるべきはずの魏延ぎえんこと焰耶。

後はこの世界での存在が不明な姜維ぐらいか。

2つある馬は馬超と馬岱だな。

「祭さん、穩！ どうする！？ モタモタしてると大将首討たれち
まうぞ！？」

「ええい、これだから……穩！ 冥琳へ伝令を飛ばせ！ 『孫呉が
宿願の為、突出して大将を討つ』と！」

「はーい！」

言って穩は近くの兵を呼び寄せ、本陣へ伝令として走らせた。

「刃！ お主は先に行って策殿の為に道を切り開け！ 背中ば儂が
援護してやる！」

「了解！」

こうして俺は足に氣を集め、脚力を強化して走り出した。

伝記の55 刃、義勇軍に焦ること（後書き）

次話、蜀陣と邂逅の予定です。

伝記の56 刃、蜀勢と会うのこと（前書き）

アンチ？ヘイト？

とりあえず劉備たちには厳しいお話です。

伝記の56 刃、蜀勢と会うのこと

（刃 視点）

俺は戦場を全速力で駆け抜け、一陣の風と化して孫策の元へ赴く。この戦は孫呉の力を官軍へ知らしめる大事な戦。

その為には『敵将は孫伯符が討った』と言う名声が不可欠。だからこそ蜀勢に大将首を渡す訳には行かない。

「どけえっ！」

居並ぶ黄巾党兵士を殴り、蹴り…時には投げ飛ばし、孫策の元へひた走る。

2分ほど走った先に、孫家の牙門旗が視認できた…そしてその近くに黄色地に『黄』の旗、つまりこの黄巾党の大將の旗もある。どうやら孫策はこの一団の敵将が率いる隊と戦闘中のようだ。

翻る桃色の髪が見える辺り、どうやら近くにいるらしい。

俺は眼前の黄巾党兵士をまとめて吹き飛ばし、孫策を囲んでいた人だかりを文字通り割って入った。

「っしや！ 間に合った！ 孫策！」

「あら、呂堂じゃない…どうしたの？」

「穏から伝令だ、ここからすぐ近くの距離に幽州から出張ってきた義勇軍がいるらしい」

「ああ、軍議で言ってたあの一団？ でもそれが？」

「アイツらも目的は名声だ」

「ッ!？」

それだけで俺が何を言いたいのか、孫策は察してくれたようだ。

―ザワツ!―

「ヒイツ!？」

抑えていた闘気を解放する孫策。

それは今の興奮状態も相乗し、周囲の黄巾党兵士を悉く威圧する。

「呂堂!」

「分かってる、俺が敵大将までの道を拓くから首を!」

―チャキツ!―

言って俺は手にしている飛刃赤戟を腰溜めに構え…

「セエイッ!」

―ボツ!―

大きく振るう。

これにより、俺と孫策を囲んでいた黄巾党兵士の内…俺の前方にいた連中が、その上半身と下半身に両断され…扇形に吹き飛んで行く。

「ハアッ！」

―ダダッ！―

―ザンッ！―

そして敵大将までの最後の壁となっている一団に突撃、そいつらも一撃で始末する。

「孫策！」

「分かってるわ！」

俺が道を切り開く後ろを、ピッタリと追走してきた孫策。

彼女は俺が壁を崩したのを確認するなり、俺を飛び越えて敵大将の前に立った。

「黄巾軍、大将とお見受けする！」

「何者だ！」

「我が名は孫伯符！ 建業は呉の王にして、江東の虎の娘！ 大陸に混沌をもたらす黄巾党！ 我が野望の為にもここでその首級頂戴する、覚悟っ！」

「ほざけ！ 我が名は程遠志^{ていえんし}…大賢良師様が願いを叶え、この世に永久の安寧をもたらす者！ 蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし…歳は甲子に在り、天下大吉！」

言って程遠志は腰に挿していた剣を抜き、騎馬状態で孫策目掛けて突っ込んで来た。

ってそうじゃない。

…馬VS人だぞ!?

下手すりゃ馬に蹴られるか、跳ね飛ばされるのがオチだ。

そう思い、俺は孫策に回避を促そうとしたのだが…

「…ハッ!」

—ザシュッ!—

孫策は別段慌てる事無く、馬と接触する直前に右へ3歩移動…そしてすれ違い様に南海霸王を水平に振るい、馬の前脚を斬り飛ばす。

「ヒヒインッ!」

「ぐおっ!」

程遠志を乗せた馬は、前脚が無くなった事でバランスを崩し転倒…乗っていた程遠志を無様に放り出した。

そして襲い来た激痛に、甲高い悲鳴を上げた。

—チャキッ…—

「王手よ」

「ぐっ…」

そして地に這いつくばった程遠志の背中を踏みつけ、南海霸王を振りかぶる孫策。

その間にも周囲の黄巾党兵士が、将である程遠志を助けようと躍起

になるがそうは問屋が卸さない。

―ガンッ!―

―ガキッ、ガガガッ!―

「なんだこりゃ、ここから先へ進めないぞ!?!」

「くっそ、ここさえ抜けられれば程遠志様が救えるのに!」

「妖術使いだど!?! 呉の連中は妖術使いを召し抱えてんのか!?!」

神蓮の一件でも使った氣技『硬氣功域』（こうきこういき）を展開し、孫策への邪魔を妨害する俺。

以前にも言った通り、氣の技は氣でなくば突破はできない。

「卑怯だぞ! 正々堂々戦え!」

オイオイ、言うに事欠いて卑怯者かよ。

じゃあお前らは何なんだと言いたい。

役人の取り締まりがキツイならキツイなりにやり方はあったはずなのに、それをしようともせず賊に身を落とし…無抵抗でか弱い女子供相手に、暴力を笠に着てやりたい放題する黄巾党こそ卑怯者なんじゃないのか?

さあ、孫策…今のうちに程遠志の首を…と、その時。

―ズドドドドドドッ!―

俺の事を妖術使いだと罵っていた黄巾党兵士全員の眉間に、赤い羽を備えた矢が突き刺さった。

「口ばかり達者なヒヨッコ共の分際で、儂の旦那を卑怯者呼ばわりとは良い度胸じゃのう？」

言いつつ現れたのは、こめかみに青筋を浮かべた祭さんだった。つて祭さん、さっきも言いましたがここは戦場なので惚気は控えめをお願いします。

「……流石は祭ね、良い仕事するわ…さて、じゃあ程遠志？」

「ちよ、まっ…」

「サヨナラ」

―ザンツ！―

……………」

周囲の味方が一瞬で全滅し、その動揺の隙を突いて孫策が程遠志の首めがけて南海霸王を振り抜いた。

首から先がなくなった程遠志の体は、その切り口から大量の鮮血を吐き出していたが…やがてそれも止まった。

そして孫策は悲痛な表情でこと切れている程遠志の首を持ち上げる。それを見ながら俺は硬氣功域を解除…同時に孫策が声を張り上げる。

「敵将程遠志、この孫伯符が討ち取った！」

「呉の精鋭たちよ！ 勝鬨をあげろっ！」

「」「」「おおおおおおおおおっ！！！！」「」「」

俺たちが発した勝鬨は周囲の黄巾党兵士をすくみ上らせ、そしてその戦意を悉く削っていく。

そして俺達は、戦意を失い投降してきた黄巾党兵士を…とりあえずは捕縛して捕虜とし、戦果を報告する為に本陣へ…そして建業城へ戻る事にしたのだが、その帰りだった…アイツらに出会ったのは。

「伝令！ 東の方角より我らに向けて行軍する砂塵を確認！ 距離三里！」

「砂塵ですって！？ 旗は！？」

「ハッ！ 新緑の劉、他には関と張を確認しました！」

「分かった…下がって頂戴」

ついに来たか。

劉備と関羽と張飛の桃園三兄弟。

しかし敵将は孫策が落としたし、いまさら何の用だって言うんだ？

「ねえ呂堂、最接近までどの位かかると思う？」

「さあ…三里だろ？ 二刻ぐらいじゃないか？」

言っただけ俺は祭さんと祭さんの隊に手伝ってもらい、その場に急ごしらえだが小さな陣と天幕を立ち上げる。

何分突貫工事だが、こうでもしないと威厳も何もあったもんじゃない。

その作業を見る内に孫策は幾分だが、クールダウンしたようだ。

「できたぞ」

「ありがと、呂堂」

言って孫策が天幕へ入った、その直後だった。

「ご報告申し上げます、孫策様にお目通りを願うと言う者が来ております」

赤い鎧を付けた、呉軍の女性兵士がそう言いながらやってきた。

補足説明になるが、呉軍兵士の男女比率は男2…女8。

これは昔から変わっていないらしく、俺が思うにこの世界が『女流社会』である事が影響しているのだろう。

「…間違いなく件の義勇軍だろうが、どうする？」

俺は臨戦態勢を解かぬまま、横で眉間に皺を寄せている周瑜にそう問いかけた。

「雪蓮しえれんの狂化癖アレも、戦鬪の規模が小さかったせいで比較的穏やかだった…まあ問題はあるまい」

「なら面会を許可すんのか？」

「下手に断れば雪蓮の、呉王としての器が知れる…会わざるを得まい、ああ呂堂…お前も立ち会うんだぞ？」

げっ、俺もかよ…と言いたいが、周瑜も事実上は俺の上官。下手に逆らうと軍法会議物だ。

「分かった」

「よし、なら通してくれ…雪蓮と私、それに呂堂の3人で会う」

こうして遂に義勇軍…後の蜀勢と対面を果たしたのだが。

「お目通り頂き感謝します、私は義勇軍を率いている劉備りゅうびって言います」

「我が名は関羽かんう、字は雲長うんちょう…桃香様一の家臣にして刃なり」

「鈴々は張飛ちようひなのだ!」

桃髪巨乳の天然娘、黒髪巨乳の堅物女、元氣印のスパッツ娘。

…まさかコイツらがあの劉備・関羽・張飛だとは。

正直信じられんぞ。

にしても劉備と関羽の發育度合いに比べて張飛は…うん、断崖絶壁。以前、麗羽れいはのところで見たあの猫耳毒舌女といい勝負だ。

「私は孫策、字は伯符…呉軍の大將よ」

「私は周瑜、呉軍の軍師だ」

「俺は呂堂、今は呉軍仕えの客將をしている」

ともあれ俺は思った事を顔に出さず、孫策に倣って自己紹介をしたのだが…

「…」

関羽から強い、蔑みの視線を感じる。

ああこりゃあれだ：何故、客将がこの場にいるんだって言いたい訳だ。

「で？ わざわざ幽州から出てきて、私に目通る理由って？」

「実はですね、管路と言う占い師の出した占いに『江東の虎』と言う一文がありまして：その娘である孫策さんはどんな心境なのか、と」

そんな劉備の台詞を受け、周瑜は一瞬だが眉間に皺を寄せた。
：コイツら、知ってやがるな？

さて我らが孫策はどんな切り返しをしてくれるのやら。

「どんな心境：か、正直興味ないかな？」

「えっ!？」

「だってそうでしょう？ 確かに江東の虎は私の母様の通り名だけど、母様は母様だし私は私：ましてや母様が治めていた地域なんかもうかなり狭くなってるし、それでなくても広い建業から言い伝えのような人材を探す事なんかしない：私には私の目標があるから、それを成すまで他の事に気を回す余裕なんか持ってられないの」

「目標、ですか？」

「ええ」

孫策の目標、それは袁術を太守の座から降ろして揚州を奪還：後に

自分が治める地域の民が笑って暮らせる国を作り、先代呉王孫堅：つまり神蓮が治めていた時の呉の日常を取り戻す事。孫策は言っていた。

『正直言えば、天下統一なんかに興味ないわ』と。

「…」

袁術の客将に甘んじている事を巧妙に隠し、自身の現在の心境を告げた孫策。

彼女の言葉を受けて黙り込む劉備一同。

「じゃあ私からも一つ質問、幽州くんだりから出てきて…貴女達は何がしたいの？」

そんな劉備たちに質問を投げかける孫策。
ナイスだ…それは俺も聞きたかった。

劉備は言う。

自分たちは力無い弱い人たちが傷つき、無念を抱いて倒れることに我慢が出来なくて…少しでも力になれるのならと、立ち上がった。官匪の横行、太守の暴政…そして弱い人間が群れをなし、更に弱い人間を叩く…そういった負の連鎖を打ち砕くために。

「私達は…この世の中みんなが、笑って…幸せに過ごせる世界を作りたいと思っています」

言って真剣な顔をする劉備。

そんな彼女には失礼だが…笑い飛ばしていいか？
見れば周瑜も茫然としている。

何と言うか、これは：

「無理ね」

「え…？」

孫策が言った『無理』発言に対し、まるで分かっていないような顔をする劉備。

流石に孫策は分かってるよな。

「みんなが笑って幸せに過ごせる世界？ 冗談はその大きなおっぱいだけにして」

いや孫策さん、おっぱいは関係ないでしょ？
…何？

呂堂は巨乳ならだれでも良いのかって？

そりゃ物による…って何言わせんだ。

「どう言う、事ですか？」

「人間には限界があるし…人の上に立つ者は、九を救う為に一を切り捨てなければならぬ事もあるのよ？」

「そんな…切り捨てるだなんて…」

「それに“みんなが笑って”と言うなら、貴女が今日までに下してきた賊たちは笑えてたの？」

当然そうなるわな。

“みんな”と言うのがこの大陸全土を指すなら、当然賊も“みんな”に入る訳だし。

「賊など切り捨てて当然だろう！ 力無き者たちを虐げる賊など…」

至極まっとうな意見を出した孫策に対し、激しい反論をする関羽。
しかし関羽よ、そりゃアウトだぜ？

何せ今は…

「…下がれ、下郎」

「なっ!？」

ほれ見た事か。

「私は呉軍を率いる王として、義勇軍を率いる長である劉玄德と話をしている…いかに忠臣と言えど王同士の対話に口を出すな、身の程をわきまえろ！」

「ぐっ…」

孫策の一喝で押し黙る関羽。

張飛は…あ、寝てやがる。

「私は今日までにこの手で直接、あるいは冥琳…軍師の策で屠った賊全ての事を忘れていないわ……同じ民だもの、救えなかった者として私の命ある限り…ずっと忘れない……」

「じゃあ孫策さんは何故、王をやっているんですか？ 何の目的があるんですか？」

「私は、私の大事な物を守る為に王になったのよ…それが民かどうかは“今の”貴女に言うべき事じゃないけど」

言って孫策は踵を返し、天幕内へ去って行った。

「私は、間違っているんでしょうか」

周瑜と共に立ち去ろうとする俺の背に、劉備のそんなセリフが聞こえてきた。

だから俺は言ってる。

「拾える物は拾いたい、だが拾う事で失う理想がある…決して理解出来ぬ物を貫き通すは己の意志、だからこそ受け止めよ…己が貫き通す中で失った物を、事実を…そして忘れず、己の糧と…血肉として生きよ、それが生きると言う事なのだ」

…彼女はこの言葉から何を拾うのだろうか。

伝記の57 曹操勢、呉について語るのこと【番外編】

～第三者 視点～

「それで？ 今回の被害状況はどうなの？ 秋蘭^{しゅうらん}」

厳かな雰囲気、玉座に響く、凜とした声に…真名を呼ばれた秋蘭と姓を夏候、名を淵、字を妙才は跪いて口を開いた。

「はっ、先日の戦いでは死者四十八の負傷者五十六…快勝かと思われ、華琳様」

「死傷者の扱いは？」

「桂花^{けいふあ}や北郷^{ほんごう}に命じ、丁重に弔う…あるいはしっかりと療養を取らせてあります」

「そう、手が速いわ…流石ね」

「ありがとうございます」

今この場にいない3人の内2人の名とその仕事を告げると、主である少女…姓を曹、名を操、字を孟徳…は手早い仕事をした秋蘭を誉め、満足げに笑う。

「秋蘭に聞きたいのだけれど」

「はっ、何なりと」

これこそ朝議、と内心で喜ぶ秋蘭だったが、華琳からふと投げかけられた質問に再び応答の意思を告げる。

「先の戦い、戦果としては私達の快勝だったのだけれど…風評的には芳しくない、どうしてかしら？」

華琳の計算ではこの戦いに快勝、あるいは完勝し…その武勇は中央、つまりは王朝へ届き…新たな官位を拝するはずだった。

だが戦いより今日でちょうど2週間、沙汰があるならとつくにあっても良いはずなのに、中央は何も言って来ないのが気に入らないようだ。

「その事ですが…各地に細作の内、建業から戻った者から関係が深いと思われる情報を得ました」

「建業から？　良いわ、聞きましょう」

「御意…細作の情報によれば建業の孫策が、精鋭を率いてこの度の戦いに参じたのですが、その際…二年前より親交の深かった在野の将を客将としたらしいのです」

「江東の虎の娘が在野の将を？　けど、それが私達の風評が高まらなかつたのとどう関係があるって言うの？」

建業は最近騒がしく、あの江東の虎と名高い猛将である孫堅が、娘である孫策に王位を譲って隠居…その後は悠々自適とした生活を送っている事は知っていた。

…その事を北郷に話すと、北郷は酷く驚き…他にも根掘り葉掘り聞かれたが、華琳は執務に差し支えると一喝して黙らせたが。

「はっ、その在野の将の活躍により、孫策は総大将でありながら最前線に立ち、この度の戦で敵大将を討つ事に成功したとの事」

「…なるほど、総大将自ら敵大将を討ったのならこの風評結果も頷けるわ…で？　当然、その在野の将の情報も入ってるんでしょう？」

「いえ、それがですね…」

自身が掴んだ情報が的確ではない為、それを華琳に告げる事を躊躇う秋蘭。

「どうしたの？」

「いえ、この情報には正確性が感じられない為、そんな情報を華琳様にお伝えする訳には…と」

「良いわ、話さない」

「はっ、その者は『赤戟の竜巻』『轟將軍』『氣龍將』『白狼戟聖』『拳闘士』『天舞の神朱弓』と言った様々な二つ名を持つ者なのですが…如何なる戦場においても名乗りを上げないせいで、伝え聞く人相しか情報が無いのです」

「ふむ…」

秋蘭の言葉に華琳は考えを巡らせた。

今秋蘭が告げた二つ名の中に、たった一つだけ聞き覚えのある物があつた。

「…その者、六万の賊を相手に単身で大立ち回りを繰り広げ、官軍

の将の窮地を救う」

「華琳様、それは？」

「『赤戟の竜巻』の逸話よ」

「何と…」

「赤い薙刀を手にした赤髪の猛者…彼が通った敵陣は竜巻の被害に遭ったよう、あるいはその力が竜巻のごとく強大で激しい事から付いた二つ名なのよ」

華琳は以前、今の官位を拝するにあたり…都、つまりは洛陽へ赴いた事がある。

その際、官軍の将達を賑わせる…とある将の話聞いたのだ。

その者は、敗走して籠城中の朱儁將軍と皇甫嵩將軍の元へ単身かけつけ、身の丈ほどある長柄の真っ赤な戟を振り回し…両將軍が立てこもる長社を取り囲む黄巾党七万を単身、無傷で討ち払い…かつ、敵將波才を見慣れぬ武術を用いて瞬殺したと。

と、そこまで語ってふと…件の人物が持つ、政務実績を思い出した華琳。

「…その者の功績は他にもあるのよ？」

「どのような？」

「区画整理、人材登用案…兵士達の武具の意匠考案、それと警備体制の案」

「警備体制の案、ですか？」

「ええ…奇しくも、北郷の提案した案件に酷似…しかし作業効率と治安維持精度が格段に向上した、だけれど」

「ッ!？」

北郷の提案した警備体制改善案は、多くの改善点を持つ物の…その時の華琳達にとっては、目から鱗が落ちるほどの案だった。

しかし建業にて件の人物が提案した警備体制改善案は、詳細な箇所こそ違う物の、基本的な骨子…根っこは北郷の提案したそれと何も変わらない物だった。

「……これが何を意味するか、秋蘭には分かるわね？」

「はい…件の人物はもしかすると、北郷と同じ境遇の者である…」と

「…秋蘭、その人物が提案した警備体制改善案…手に入るかしら？」

「そう仰ると思い、既に書簡化致しました…詳しくはこちらに」

言って秋蘭は一卷の書簡を取り出し、それを華琳に手渡す。

華琳はそれを受け取り、内容を確認め…

「…ふふっ」

そして楽しそうに笑う。

「桂花、只今戻りました」

「戻ったぞ」

そこへ現れる2人の男女。

片方はその身に白く輝く、襟首に短剣符が刺繍された上着を羽織った男：片方は頭に猫の耳を模した意匠の、萌葱色の頭巾をかぶった少女。

この2人こそ、先ほど話題に上がった2人：男が北郷で、少女が桂花である

「〔苦労様：まずは報告をしてちょうだい、桂花から」

「御意！」

桂花：姓は荀、名はイク、字を文若。

以前は袁紹の元に居たらしいが、献策の内容に派手さが無いと雑に扱われていたのを苦にして自主退役：後に曹操の噂を聞き、自身が仕えるのはこの人物しかないと士官：華琳を試して落命の危機もあったが、その豪胆さを買われて軍師となった少女。

幼少期に男に乱暴されかけた経験から重度の男嫌いとなっており、相手が男ならばたとえ同僚でも辛辣な言葉を浴びせる。

兵士としての戦闘力は0。

好きな物は華琳（と、彼女に奉仕する事）、嫌いな物は無知な者と男：特に、袁紹の元で出会った“全身傷跡だらけの赤髪の男”は天地逆になっても嫌う腹積もりだとか。

「先の黄巾党戦により黄巾党は大きな被害を受けており、斥候の報告によれば残存勢力は冀州にて結集しつつあり、近々勅令による大規模な決戦が行われるものと予測されます」

「敵の首魁は？」

「それが捕縛した敵兵を春蘭しゅんらんが尋問しましたが、皆口を割らず…舌を嚙んで自害しました」

春蘭：姓を夏侯、名を惇、字を元讓げんじょう…と言う、華琳の右腕にして彼女の配下の中では最強クラスの女性武將。

良くも悪くもまっすぐな性格で、華琳が『私の為に死ぬ』と言えば喜んで死ぬほど。

いわゆる『脳筋』『猪武者』の典型で、難しい事を言われると頭から煙を噴出する事が多々ある。

「そう…分かったわ、桂花は今後とも情報の収集を徹底しなさい…

「御意！」

…じゃあ次は北郷」

「分かった…今日の治安状況だけど」

北郷：西暦2008年は東京浅草から、タイムスリップする形でやってきた日本人で聖フランチェスカ学園に在籍していた。

純日本人なので当然字や真名は無く、名乗るなら姓は北郷、名は一かずと刀になる。

剣道をしてはいたがこの世界の武將に勝てるはずもなく、もちろん人間を相手取った殺傷沙汰などまるで抵抗力は無い。

今は自身が出した警備体制改善案に責任を持つ為に警備隊の隊長をやっている。

好きな物は華琳…なのだが、想いはまだ小さい上に華琳には告げら

れておらず、華琳本人にその気は無い。

かじり程度で有する三国志の知識を見込まれ、華琳の配下として仕えている。

曹操勢の男性兵士に属する中で唯一、華琳を『華琳』と真名で呼べる人物。

「新規増設した第六区画で痴情のもつれからくる喧嘩が三件…警備隊で調べたところ、第六区画の一部が廃墟街になっていて…そのどこかに未認可の娼館が出来ていて、その責任者が元凶らしい」

「未認可の娼館？ どうして未認可だど？」

「第六区画の地図から見れる建物数と、届け出のある建物数が合わないから」

「…なるほど、他には？」

「北から南下してきた商人が、冀州周辺で戦乱の予兆があるって言うってた」

「やはり起こるのね…分かったわ、それと北郷」

「ん？ 何だ華琳」

「これ、秋蘭が手に入れたとある町の区画整備及び警備体制改善案の草稿なんだけど、私が見ても素晴らしい出来なのよ…貴方にはこれを元にしてもっと良い街を作る事を命じるわ」

言って華琳は北郷へ件の書簡を投げ渡した。

そしてそれを受け取って、中を読み…目を見開く北郷。

「…バカな、区画を大通りと小通りで碁盤目状に区切るやり方が俺より早い!? いやそれだけじゃない…区画それぞれを部門街にしてあるし、治安向上に警備員詰め所を各区画に等数配置…けどこんな無茶をいきなりやって、資金面と人手面で頓挫…はっ? 国庫開放で税率低減? 同時に商人と傭兵を誘致して商売化し、初年度で国庫利益黒字…商人にはエールの生産法と、所属傭兵にはエールの特価購入権を? ンなアホな…この世界でエールって…:…なあ華琳、この整備案出したのってどんな奴だ?」

「聞くとところによると薙刀を得物とする赤髪の男らしいわ」

「「ッ!?!」」

驚きの表情で書簡を読みふける北郷の姿に、華琳は薄い笑みを浮かべた。

華琳はこれから北郷を試すつもりなのだ。

ある答えを期待して。

…桂花も息を呑んでいるが、それは恐らくあの忌まわしい記憶からなる憎悪からだろう。

「どう? やってくれるかしら」

「…全力を尽くす」

手が白くなるほど拳を握りしめ、憎悪で震える桂花には一瞥もくれず、華琳の質問にそう答えた北郷…その目には対抗心が見え隠れしている。

そんな北郷の様子を見て、華琳は薄い笑みを妖艶で魅力的な笑みに変えた。

この答えを期待していたのだ、華琳は。

北郷一刀と言う男は、男の癖にどこか貧弱で頼りないが…信頼に応えようとする姿は、そんなじょそこいらの男では到底叶わない。

以前も区画整理の案件を宿題とした時、最初は3日で投げ出しかけたが春蘭・秋蘭姉妹の檄により復活…結果として10日かかったものの、とりあえずは納得できる案件を形にして提出してきた根性を持っている。

「よろしく…さて今後の方針だけど、秋蘭と桂花、それに北郷が得た情報から以後…近い内に大きな戦が起こるのは間違いなさそうね」

「…戦力の拡張ですか？ 華琳様」

「訓練を行い、精度の上昇も図るべきです」

「となると警備隊の中にいる兵士を一旦城へ戻し、兵役に復帰させるか…となると巡回の回数を増やして、人手不足を補わなくちゃな」

「そうね、じゃあ秋蘭？ 今この場にはいない春蘭へ伝言、頼んだわね…私は少し調べ物をしに書庫へこもるから」

「御意」

「では解散！」

こうして朝議は終わりを迎える。

ちなみにこの時、去りゆく北郷の口から『薙刀使いの赤髪の男、もしかして…』と言う言葉が漏れていた。

本人にしてみれば誰にも聞こえていないつもりだったのだろうか…

「（察するに知り合い、か…負けないでよ、一刀）」

華琳にだけは届いていて、期待されている事を…北郷は知る由もなかった。

伝記の57 曹操勢、呉について語るのこと【番外編】（後書き）

何故秋蘭が呉の警備体制改善案の草稿が記された書簡を手に入れたのか、それは後日執筆するので、現状はツツコまないで下さい。

また、一刀が警備体制の改善案について提出期限を求められた下りですが、原作を参考に少しばかり設定を変更しました。

なお一刀を2008年の浅草出身としたのは、原作【真・恋姫†無双】の発売が2008年だからです。

ちなみに現状ではまだ季衣は魏軍にはいない事になってたりします。

伝記の58 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【出立編】（前書き）

今回は少し短めです。

伝記の58 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【出立編】

（刃 視点）

結局：蜀勢と言い争いをしたせいで再び興奮、狂化発情した孫策に襲われ：男女の仲になってしまった俺。

彼女は凄かった：特に締めりとタフネスが。

ちなみに途中で母親である、真名を神蓮しえんれんこと孫堅が俺達の情事に乱入：リアルに親子丼を食うハメになった。

ドウシテコウナッタ？

祭さんや穩のんがいなくて良かった：あの2人も交えて5Pなんぞやらかしてみろ：確実に腹上死する自信があるぞ？

全員底なしだからな：まあそんな彼女たちを『嫁にする』と断言した以上、絶対に嫁にして大事にするつもりではあるが。

「おい刃、もう少ししっかり出来ないのか？」

さてそんな、もはやお約束ともなった黄ばんだ朝を迎えた俺は、やげっそりした顔で朝議へ臨んだのだが：冥琳と顔を合わせるなり、開口一番にそう言われた。

「冥琳：文句なら俺が干からびる間近まで俺の上で腰を振っていた、元呉王と現呉王に言ってくれ」

言って俺は全身ツヤツヤの神蓮と：玉座に座り、同じく全身ツヤツヤの雪蓮しえれんをジト目で見た。

しかし当の2人に悪びれた様子は無く、むしろ：

「久しぶりだったから：燃え上がっちゃった／／／」

「昨日は凄かったわね：私、もう刃から離れられないかも／／／」

：と顔を赤らめて言ってくれた。

ちなみに冥琳は周瑜の、雪蓮は孫策の真名で：孫策からは情事が始まる前、周瑜からは情事が終わった後、それぞれ預かった。

「全く……さて、本調子ではない刃には悪いがとりあえず朝議を始める：雪蓮」

「えっと：言われてた黄巾党討伐も一段落し、建業に帰って来た訳なんだけど：刃に頼みがあるのよ」

「半腰砕けの俺に出来る事か？」

動く事に差し支えは無いが、痛いには痛い。

戦闘もこなす自信もあるが、相手が武将だと少しキツイ。

「実はね：陳留近くの小さな街で、賊の襲撃によって足止めをくつてる、母様の馴染みの行商隊がいるって情報が入ったの」

聞けば昔から神蓮の衣服や装飾品、好みの嗜好品：更には呉で多く流通する塩や、兵士達の武具を扱う商人達だと言う。

普段は各国を回り、出店形式で商いをしているらしいのだが：今回は孫娘に、王族を相手取った商売のイロハを教える為に、かなり親

しい王族である神蓮が居る建業へ定住するつもりだったとか。

「で…建業へ向かう途中賊徒に出くわし、足留めをくっているのか…」

「その賊達は定期的にその邑ゆうを襲うそうだ」

「邑ゆうだろ？ 自警団とか居ないのか？」

「最初は居たらしいんだけど、襲撃される度にその人数は減り…今では老人と子供しか居ないそうなの」

「年若い男は殺し、女は連れ去る…か…：…定番の手口だな」

年若い男を殺す理由、これは単に略奪対象の力を削ぐ為。

兵士や武將と比べると霞んでしまうが、先天的な力は男の方が上。庶民同士なら8歳〜16歳の間が最も顕著に差が出てくる。

にもかかわらずこの世界で女の方が強い事が多い理由は、女の方が伸びしろが大きいからに他ならない。

「（まあ俺の場合は、貂蟬からもらった能力のおかげもあるだろうがな）」

そして女は連れ去る理由、これは大別して3つに分けられる。

第1の理由は男と同じく戦力低下を狙う為で、女は放っておくと男より強くなるから…ただし後述する第2・第3の理由により、連れ去られても生きている場合が多い。

第2の理由が、賊自身が彼女らを慰み者にし…最終的には自身専用の性奴隷、あるいは肉奴隷とする為。

そして第3の理由が売却する為…これは裏ルートを用いて商品とし

て販売され、最終的には別の男に買われて2つ目と同じ末路を辿るか：あるいは娼館に売り飛ばされてしまうかのいずれか。

また、時折だが第2・第3の理由を同時採用する賊も存在する。

「幸い、行商隊はそのほとんどが五十代から五十代後半の壮年者が多かったの：でも何人かは若い娘もいたそうで、彼女たちは：」

「：よし、とりあえず行つて来よう：冥琳、現状で分かつてるだけの敵戦力は？」

「最後に送られてきた手紙には：賊の総数は不明だが、襲撃にくる賊は決まって百五十ほどらしいと書いてあった：襲撃対象となっている邑から四里の辺りに廃城があるんだが、ここが根城ではないかと私は睨んでいる」

最後と言う事は、手紙の主は他界したか連れ去られたと言う事だろう。

まあ雪蓮の言葉から察するに、手紙の主は連れ去られたと言う何人かの若い娘の誰かだろうな。

しかし150人ほどの襲撃班となると、居城にはその半分程度つてところか：総勢200人にも満たない、小さな賊徒だな。

「穩、ここから最短距離で行ける道はあるか？」

「はい、お任せ下さい旦那様あ」

言うど穩はその巨大なメロンの谷間から、1巻きの書簡を取り出した。

そして穩がその地図を卓上に広げ、俺に覗き込むよう催促する。

「ここが建業で、ここがその邑ですう：はあ、はあ：両地点を最速で行ける道となるとお、この峡谷とこの平原を突きぬけてえ：つく、はあ：この街を経由してえ、この河を縦断するのが速いですう：ああん、旦那様のぬくもりが私の背中にい：」

ちよつと待て、何故地図なんかでこんなに興奮するんだ？

：いやマテ、地図は書物だよな？

まさか、穩十書物Ⅱ発情の方程式が成立した？

そして背後に俺：あれ？

これってもしかして搾り取られるフラグか？

「はあ、はあ：旦那様！ もう我慢出来ませんっ！ 私のココ、力いっぱい揉み解して下さいっ！」

そら来た！

言って穩は俺の手を後ろ手で掴むと、自身の脇の下を通して前に移動させ：手のひらを自分のギガメロンへ押し付けた。

おお、流石は六大爆乳将（俺認定）の1人：相変わらず触り応えと重量感が凄まじいな。

：え？

残りの爆乳将5人は誰なのかって？

これまでの俺の歩みを振り返って貰えば、自ずとわかるはずだが。

しかしまあ、このまま情事へもつれ込むと：穩に搾り取られる事になれば、間違いなく穩十雪蓮十神蓮の4Pになる！

そんな事になれば俺は絶対腹上死するだろう：まだ死ねん！

「悪いな、穩：これで勘弁してくれ」

―むにゆっ、むにゆむにゆ―

「はあんっ…あ、あはあん…そんなあ」

だから俺は穩のギガメロンを後ろから優しく揉み解し、高ぶりだけを与えておく。

そして手を放し、穩の耳元で…

「帰ってきたら、穩が気絶するまでしような」

と言ってやった。

するとどうだ…

「はああああああああああっ！ あっ…」

―ドサツ！―

穩が甲高い悲鳴を上げてその場に崩れ落ちたではないか。

これは穩にだけ使える俺の必殺技で、その名も『桃色イメーシングピロートークの想像睦言』
と言う。

…ひよっとすると稟りん（郭嘉かくか、字は奉考ほうこうの真名）にも使えるかもしれないが、あの子は気絶する前に大量の鼻血を吹くだろうな…風ふう（程立りつ、字は仲徳ちゅうとく）が居なきゃトントンできないし。

…2人とも俺の嫁に相応しい女になるべく旅を続けるからと言って別れたが、あの子たちは元気なのだろうか。

稟も風も武才はからっきしだからな…誰か武芸者と一緒なら良いんだけど。

「相変わらず見事な威力ね」

「穏が書物で性的興奮を覚える癖を持っている事を知っていて、かつ自分だけがその興奮を鎮める事が出来るからこそ可能なのよ…穏にとっては実に良い旦那様でしょうね…私にとってもだけど」

「ねえ母様…刃が旦那様になるとするなら、私は刃を父様と呼ばば良いのかしら？ 私刃の嫁候補に立候補してるんだけど」

「うん」

ふと気が付けば後ろの方で神蓮と雪蓮がアホな会話をしている。
…ヘタに突つつくとんでもない目に遭うから、あえてここは放置する。

「冥琳」

「ん？」

「時間がかかっても一週間以内には戻る…その際、その行商連中も一緒に連れ帰るから受け入れ準備を進めておいてくれ」

「分かった、やっておこう」

「それと祭さんに伝言を」

「聞こう」

「『しっかり溜め込んでくれ』って…それだけ言えば分かるから」

「了解した…じゃあ刃、行商隊の件…頼んだぞ？ 必要な物があれば倉庫から持って行って構わない」

「分かった」

こうして俺は玉座の間を後にし、目的地である…陳留近郊の邑へと向かったのだった。

伝記の58 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【出立編】（後書き）

さて、皆さんは刃の言う『六大爆乳将』が誰か分かりますか？
ヒントは刃が、穂のメロンを何と呼称しているか、です。

別段正解者に何か特典がある訳ではありませんが、もし宜しければ
探してみてください（笑）

伝記の59 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【到着編】（前書き）

強引感が否めない。

だがこうしないと話が先へ進まない。

今回はアノ2人が登場です。

それではどうぞ。

伝記の59 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【到着編】

く刃 視点く

今回は相棒である騎狼ばいしえの白雪が居るため、前回の上洛よりは遅いが疲労は少ない。

と言うのもこの白雪、この2年でさらにたくましく成長し…今や呉の猛獣勢のなかで最高峰の戦闘能力を誇っている。

中でも孫尚香の友達兼護衛兼ペットの白虎『周々』を下した事もあり、その戦闘能力はあの赤兎馬なんぞお話にならないほどだ。

…信じられるか？

あの甘寧と互角なんだぜ！？

さてそんな白雪の背に跨がり、目的地までの道をひた走る俺だが…

「わふっ♪わふっ♪わふーんっ♪」

エラくご機嫌なんだよ、白雪の奴。

久しぶりに俺を背に乗せ、全力で走る事が出来るからだろうか
穩の言ってた峡谷なんか四刻前に通り過ぎちまったし。

「よし白雪、そろそろ速度を落としてくれ」

「わふん？」

「進路を北に取るからな」

「あおーんっ！」

こうして俺達は穩の言っていた平原を抜け、更には河も縦断して北上…程なくして目的地と思わしき邑に到着したのだが…

「酷いなこりゃ…」

邑ではまともな家屋がほとんど無く、住民達の間にも暗い雰囲気が漂っている。

「旅のお方ですか？」

そんな俺に話しかけるのは、右腕に血が滲んだ包帯を巻いた老婆だった。

「貴方様も不運な時に来なすったな…この邑は今…」

「…賊達の襲撃対象になっていて、年若い連中が居ない…違うか？」

「ッ!？ 貴方様はいつたい…」

「俺は呂堂、字を戦牙と言う…南東は建業の孫文台様の命により、最員の商隊一行を迎えに来た者だ」

言々と老婆は、その目を見開いて硬直した。

これは『孫堅様の私達を助けてくれるのではないのか』と言った感じだな…ふむ、フォローしといてやるか。

「案ずるな…俺に任せろ、賊達は駆逐して連れ去られた連中は全員連れ戻してやる」

「おお、ありがたやありがたや…」

「ともかくまずは件の商隊の連中に会いたいんだが」

「商人様達なら邑の西にある長屋ですじゃ」

老婆の案内で邑を歩き、目的地の長屋を目指す。

邑の内部は外から見るとより酷く、道のアチコチに石塚…恐らく、賊の襲撃により命を落とした住民の墓…がある。

犬や猫の物と思わしき亡骸はそのままだし、住民にしたってどこかを負傷しており…中には放っておくと命が危ない人もいる。

「…スマンが、ちょっと待ってくれ」

「どうなさいましたか？」

「怪我人の治療が先だ」

「え？」

俺の発言に驚き、立ち止まる老婆。

無理も無い…俺のような者に、医術の心得があるとは到底見えないだろうからな。

「年の行った者を優先する…負傷者を全員、邑の中央に集めてくれ」

「ほ、本当に？」

「手足がもげて無くなったりしていない限りは治す…さあ急いでく

れ」

「はっ、はいっ！」

言って走り去る老婆。

彼女の背中を見ながら、俺は考えを巡らせる。

恐らく、住民のほとんどが外傷を負っているだろう。

烈れつ…華佗から貰った4寸鍼で治せるのは内傷だから、今回の治療に
はまず向かない。

「ならば治癒功ちゆこうで…と言いたいが、今の俺の内在氣は絶頂時の35
%ほど…」

神蓮と雪蓮に絞り取られてなければ良かったんだが、このままじゃ
全員救うには到底足りない。

「連れて参りました」

そうこうする内に、老婆が負傷者達を連れて来たらしい。

「これは…」

見れば残留住民の実に9割が、体のどこかに痛々しい怪我を負って
おり…一番酷いのが、来週白寿になると言う老人だった。

話によればこの老人がこの邑の長で…彼の曾孫が賊に浚われそうに
なるのを見て抵抗したが、あえなく返り討ちに遭いこうなったと…
彼の次に酷い怪我をしている、彼の伴侶だという老婆が言う。

「…」

俺は彼らを見ながら、内心では齒噛みしていた。

やはり足りないのだ。

絶対的な氣の量が。

「何とかして氣を補わないと、全員分が賄えない…」

どうした物かと悩む俺の視界に、商隊に混じって動く…明らかに商人とは違う身なりをした2人の少女が。

「あの子らは……おおっ！」

俺はとっさに、彼女達の氣を読み…そして驚いた。

2人の少女、それも片方の少女は強い氣を備えているではないか。

俺は彼女達を呼び、協力を取り付ける事にした。

「そのの二人組！　ちよっと来てくれ！」

「自分達、ですか？」

言われてやって来た2人の少女。

1人は銀髪を長い三つ編みにし、紫色の服を着た…初見の印象は真面目な少女。

全身にある傷跡は、修練の賜だろうか？

もう1人は、何と言うか…虎縞のブラ（ビキニ？）にギガメロンを

包み、腰にベルトを巻いてホットパンツを履いた少女。

つかロリ顔、じゃないか？

ロリ顔＋縞ブラ＋爆乳＋ホットパンツ：何のエロゲーだ？

「俺は建業の前呉王である孫文台様の命により推参した、呂堂と言
う」

「孫堅様の！？ あ…ウチは李典^{りてん}、字を曼成^{まんせい}っちゅうモンです」

「自分は楽進^{がくしん}、字は文謙^{ぶんけん}と言います」

李典の口調がエセ関西弁、霞^{しあ}と同じなのが気になるが…ひとまず置
いておく。

「突然で済まないが貴殿らの力を借りたい」

「自分たちの、ですか？」

「そう…」

俺は件の長の元へ歩く道すがら、現状を簡単に説明する。

最初は李典が難色を示していたが、楽進の説得により何とか了解を
得た。

「自分はこの力が乱世を鎮められるならばと精進してきました…で
すが乱世で傷ついた人々を救えなければ、乱世は鎮められないので
すね…分かりました、この楽文謙、呂堂殿に力を貸しましょう！」

「ウチにも氣があるなんて信じられんけど、それでこの人らが助か
るんなら頑張るで！」

「なら今から始める、二人とも頼む」

「応！」

「了解や！」

言って李典と楽進は、俺が言った通り目を閉じる。

すると2人の体から氣が、柱のように立ち上るのが見える。

やはり調べた通り、楽進の氣の方が絶対量は多い。

「二人とも、手を前に」

—スッ—

俺の合図で2人が手を前に突出し、俺はその手に自分の手を重ねる。そして自身の氣を内部で渦巻かせ…李典と楽進の氣を巻き込むようにして体内へ取り込む。

「くっ…」

少しすると李典の額から汗が滲み出した。

普通の人間に比べるとあるほうだが、それでも絶対量が少ないせいで氣の譲渡は厳しいのだろう。

「真桜^{まおう}！？ 大丈夫か！？」

「ウチはまだイケる…と言いたいけど、アカン…足がふらついてきよったわ」

「楽進殿は大丈夫か？」

「自分は大丈夫です、ですから真桜を…」

「ああ、李典殿…もう大丈夫だ、手を離してくれ」

「えろうすんまへん…ちっとばかり休憩させてもらいます」

いって李典は手を放し、ゆっくりと地面へ座り込んだ。
そのおかげで彼女のギガメロンがプルンと揺れる。

「…」

普段なら眼福だと喜ぶんだが、今回ばかりはそうもいかない。
命に関わるのだから。

「（現在65%…もう一息、せめて85%は欲しい）」

だから俺は自身の気の総量を調べたのだが、やはり足りない。
見れば件の村長は、目を閉じて横たわり…息も小さくなっている。

「（速く、速く!）」

「呂堂殿、今から氣の出力を上げます…大丈夫ですか？」

そう願う俺に対し、これ以上無いタイミングで楽進からブーストの
申請があった。

願ってもないチャンスだ。

「可能な限り全力で頼む！ 何なら固めて放出しても構わん！」

「固めて放出…了解です！」

俺の言葉を聞いた楽進は、目を閉じたまま俺の手から自身の手を放し…そして10mほど後ずさった。

そして右足を半歩引いて半身に構えて立つ。

だが俺はその構えに違和感を感じていた。

「（あの構え、どこかで…）」

と思ったのもつかの間、楽進の氣がみるみる内に彼女の右足へと集まっていく。

もう目視が可能なほど凝縮された、オレンジ色の氣。

いや待て、あれはまさか…

「はっ！」

やっぱり俺の『猛虎蹴撃』じゃないか！

—キュオオッ、ドンッ！—

言って振りぬかれた足からはオレンジ色の氣弾が飛び出し、それは俺めがけてまっすぐ飛んでくる。

直撃を受ければ一般人なら軽く死ねるほどの殺傷力を秘めているだろう。

ただ、飛散率が高いな…ならば！

「烈、俺に力を貸してくれ…はああああっ！」

李典からもらった氣を練り上げ、それを懷から取り出した烈の4寸

鍼に込める。

氣を込められて赤く煌めく鍼。

そしてその鍼を楽進の氣弾に向けて突き出し…

「我が身、我が鍼と一つになり！ 一鍼同体！ 全力全快！ 必察
必治癒……病魔覆滅！」

更に氣を練りこむ。

こうする事で楽進の氣は、李典の氣に引寄せられ…俺の氣で鍼からは離れなくなる。

そしてそのままその鍼を振りかぶり…

「五斗米道！」

―プスッ―

自身の下丹田へ打ち込む。

「……………おおおおおおおおおおあああああああ
っ！」

滾る！

漲る！

迸る！

李典と楽進の協力により、俺の氣は総量が98%に到達した事を確認。

行ける、これなら行ける！

「全力全快！ 治癒功域ちゆこういき！！」

―ぶわっ！―

叫んだ次の瞬間、俺の体から緑色の光が噴出し…それは座り込んだ李典も含め、この場にいる全ての負傷者へ癒しの力となって降り注ぐ。

これはそう、あの襄陽の山中で冥琳相手に放った『治癒功』の広域化版。

治癒功は対象範囲が最大でも1体のみ、だが治癒功域は発動時の俺の氣の総量に応じて効果範囲が変わる。

そしてそれは氣の総量が95%以上の時、俺を中心として半径20mの範囲内にいる全員の疾病を治療するのだ。

「あれ？ 腕の傷が、痛くない…」

「動かなかった足が…」

「…ここは、どこだ？ 儂は、生きておるのか？」

「貴方！ ああ、無事でよかった…」

ほどなくして周囲の人たちの間から歓声が上がりはじめ。それを見て俺は安堵の溜息をついた。

そんな俺に対し樂進が声をかけてきたのだが…

「ふう、これで一安心だ」

「お疲れ様です、呂堂様」

「何のこれしき…って様あ！？」

楽進の口からでた言葉に、思わず大きな声を出してしまう。

「はっ、この楽文謙…将来仕えるべきお方を探しておりましたが、今呂堂様に仕える機会をなくすと後がないような気がするのです！」

「いや俺は別に、そんな大した器じゃないって…楽進ならもっと良
い士官先が…」

「^な風です」

「…いやいや、俺今は客将だし…真名を預けられても困るって…李典
も何とか言ってやってくれ」

俺の拒否を拒否し、更には真名まで預けようとする楽進。
そんな彼女を止めてもらおうと李典に助けを頼んだんだが…

「呂堂の兄さんってアレやろ？ 絡繰り飛將軍の作者やろ？」

「…は？」

「それにその腕甲、手首んとこに仕込み刀付いてんのとちゃう？」

「え？」

「その仕込み暗剣付き腕甲な、ウチの祖母の作品によー似てんねん」

「祖母さん？ 名は？」

「李乾^{りかん}っちゅうねんけど…」

「はあっ!?! 李乾さん!?!」

…何や、ウチの祖母の事知ってるんか?」

李乾さんてアレだろ?

俺の母さんに絡繰りのイロハを教え込み、この腕甲『穿紅』せんこうを作るに当たり…数々の機構案を提供してくれたって言う、俺の絡繰り始祖とも言うべき人だよな?
…あれ?

「って事は『桜』って呼ばれてるらしい姪っ子ってのは…」

「ああ、桜はウチの幼名や」

ギヤニィ!?!

いや、ジョジョってる場合じゃない。

「ちなみにこうなった風はウチじゃ止められへんで? 風はウチらの中じゃ一番頭固いさかい…」

「ま、待ってくれ…」

「それともう一つ、ええ事教えたら…ウチらな、これから孫堅様のおひざ元に移る予定の行商隊の一団やねん」

ナナナ、ナンテコッタァ!!

伝記の59 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【到着編】（後書き）

はい、と言う事で真桜こと李典と…凧こと楽進の登場です。

凧は言わずもがな、真桜はアノ螺旋槍を氣で動かしているという裏設定故にこう言った扱いにしました。

感想に『凧を刃の嫁ハーレムに！』と言う声がありました…どうしましうか。

三羽烏を揃って刃サイドにすると、魏がガタガタに…けど華琳様は姉妹多いみたいだし、司馬八達も入れれば三羽烏は不要？
うーん、悩みどころです。

さて今回は戦闘描写＋ある人と再会、そして三羽烏の最後の1人＋ある人と邂逅の予定。

お楽しみに。

伝記の60 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【潜入編】（前書き）

前回の後書きで色々書きましたが…すみません、出来ませんでした。なので今回はサブタイが【潜入編】となっております。

色々無理矢理設定が出てきますが、そこは皆様の大きな心で見逃してやってください。

ではどうぞ。

伝記の60 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【潜入編】

（刃 視点）

それからしばらく、真桜や凧（李典や楽進の真名）と話を重ね：彼女らのこれまでの経緯を聞いた。

真桜は実際に李乾さんの孫で、得物である機械式の回転槍『螺旋槍』らせんそうは：グレンラ○ンもビックリなほど、螺旋の浪漫に溢れた武器だった。

ちなみに彼女へ螺旋の浪漫について語ったところ『いやあ、刃の兄さんは話の分かる人やなあ』と喜んでいた。

螺旋だけじゃない、絡繰りは浪漫なんだ：それが俺達の合言葉になった。

そして凧だが、以前建業の街中で：俺が【猛虎蹴撃】を放つ瞬間をたまたま見ていたらしく、氣の使い手を自称する者としては何とか修得したくて：今日までずっと鍛錬に励んでいたらしい。

『私が今以上に強くなる為には、刃様に教えを乞う他ありません！』と、目をキラキラさせてそう断言した彼女。

つまり弟子入りさせろ、との事なんだが：彼女を弟子入りさせるとなると、序列的な意味での一番弟子である焰耶えんやこと魏延ぎえんの説得が大変そうだ。

「君達の言いたい事は良く分かった：しかし今の俺にそれを決める権限は無いから、一旦建業に戻って雪蓮：現呉王である孫策に聞かないとな」

「それがですね…」

「そうしたいのはやまやまやねんけど、ウチらのツレがなあ」

「ツレ？」

「はっ…名を于禁、字は文則ぶんそくと言いますが…実は賊に捕らわれておりまして」

聞けば凧と真桜と于禁の3人の中で、戦闘能力が最も低いのが于禁だと言う。

鍛えれば一角の将にはなれそうなのだが、本人は争いごとが嫌い…願わくば服飾品に気を使い、オシャレでカワイイ人生を送りたいそうだ。

「なるほど…」

「可愛さには自信があるて本人言うてたし、周りも認めてるフシあったしな…酷い目に遭うてなかったらええねんけど」

言って真桜はため息をついた。

凧も表情が暗い。

「他にも仲間が？」

「商隊を組んでいた中から十余名…いずれも年若い、美人と称して相違ない者たちばかりが捕まっています」

「綺麗どころを売り子にしとったんや」

売り子で武芸者は無い、か。
なら事は急ぐな。

「誰か賊の根城付近の地形が分かる奴はいるか？」

俺は早期決戦を行う事にした。

真桜も朧も、本人に自覚はなさそうだが相当な美人だ：そんな真桜達をして『可愛い』『綺麗』と呼ばれる連中が、飢えた賊共に捕らわれた：時間なんぞかける物ではない。

「地形はちいっと分かれへんけど、地図やったらウチが持つてるで」
言って背囊から地図を取り出し、俺に渡す真桜。

この時代、地図には2通りあり：1つは商人や旅人用にあしらわれた、主な街道や難所：城や砦の位置のみが書かれた簡素な地図。
そしてもう1つが、前述の機能に加え：砦の内部図や洞窟の位置、裏道や獣道までが詳細に記された地図。

簡素な地図はその用途通り書店や雑貨屋で販売されているが、後者の詳細な地図はそのほとんどが手書きで：軍部の最高幹部、つまり軍師が私的兼国的重要財産として持っている事が普通。

ちなみに呉の場合は冥琳が全国版を3枚と建業の詳細版を3枚、穩が全国版を1枚と有名な城砦それぞれの内部図版を2セット：そして亞莎（呂蒙の真名）が建業の詳細版を1枚持っている。

冥琳曰く『地図と帳簿は、軍師にとっては垂涎の財宝に等しい』だそう。

また洛陽でもそれは同じで：洛陽のと言うよりは董卓軍の軍師である詠：賈馱は、全国版を5枚と洛陽の詳細版を4枚：そして城砦そ

それぞれの内部図版に至っては何と8セットも抱え込んでいる。

俺はそこからシ水関と虎牢関の地図を複写してもらって、来る反董卓連合戦に備えているんだが。

：話がそれた。

真桜の地図は後者、つまり詳細版：それも城砦内部地図だった。
一介の商人がどうやって？

「ここが沙和たちが捕まってる、賊の根城やで」

取り出した地図を見ている俺に、根城の位置を教えてくれる真桜。

：つか真桜さん、近いです。

そのたわわに実ったギガメロンを、俺の二の腕に押し付けしないで下さい。

「：／／／」

凧さんが顔を赤くしながら、反対側からにじり寄って来てますんで。

「大きさはこの邑とおんなじぐらいの、あちこちが崩れかかったちっさい砦やね」

「捕まった者はここ、砦の最奥部です」

凧曰く昔は資材倉庫として使われていたのを賊たちが改修し、大きな牢を設けたという。

：城の内装を改築できるぐらいの知恵と腕があるんなら、賊なんかに身を落とすなよなと言いたい。

「見張りは？」

「恐らくですが入口に数人、牢の前にも数人：あとはここの広間で宴会をしているものかと」

城の最奥部にある空間と、扉らしきものを1枚隔てた先にある大きな広間。

見る限りの予想だと広間から牢屋へ通じる扉に見張り、その先の牢屋にもう数人と言ったところか。

「意外に守りが固いな：どうするべきか」

「正面突破なんぞしようモンなら、牢にたどり着く前に人質が…」

「かと言って潜入しようにも他に出入り口はなく、壁は堅牢です」

「むう……ん？」

どうするべきか悩む俺は、偶然：卓の上に乗っていた、風の三つ編みの先端が指し示す場所に一条の光明を見出した。
そこは牢と広間を結ぶ通路。

「真桜、この砦はどんな立地条件の上に建っているんだ？」

「ほえ？ えっと：周囲が林で、入口に通じてるんが獣道だけっちゆう砦やで」

「…なるほど」

ならば後は天か地か、だな。
まずは下見か。

俺は真桜にある事を頼んで、件の砦へ向かった。

俺は夜を待つて件の砦へ近付き…その周囲にある林へ身を潜ませた。真桜と凧には邑へ残ってもらい、ある物の制作に取り掛かってもらう。

「なるほど、思った通りだな…あそこの角が牢の真上か」

林を構成する樹の1本に登り、上から砦の様子を見る。

この時代の砦には珍しく、2階の無いタイプで…屋根部分がそのまま見張りの巡回経路となっているらしい。

俺は更なる情報収集の為、限界まで近づいて耳を澄ませる。

氣で聴覚を補佐すれば離れた場所の声だって聞こえるんだぜ？
ちなみに氣のこう言った応用法は、祭さんから学んだ。

「ふわぁ…眠いぜ」

「同感…だがもう少しの辛抱だぞ」

「分かってるよ…もう少ししたら交代だからな」

「次来るのは何人だっけ？」

「三人だ」

…今現在が3人で、交代で来るのも3人か。
もう少し情報が欲しいな…

「しかしアイツらも不幸だな」

「陳留に根城を持つ奴隷商人に弱みを握られたお館も、不運と言っ
ちゃ不運だが」

「借金のカタに嫁さんを娼館にとられ、取り戻す為に人身売買を…
か」

オイオイ、マジか。

つかそんな情報聞いちゃったら、勢いで救出出来ねえじゃねえか。

「だそうだ…で？ 捕まえたアイツらの売却はいつだっけ？」

「日の出前だ」

「あゝあ、あの乳のデカイ銀髪のカキ…俺の好みなのに…」

「そうかあ？ 俺はあの眼鏡のそばかす娘の方が好みだがなあ」

「「売られる前に一発やりたいぜ」」

…賊たちの事はまたあとで考えるか…作戦を決めた俺は一路、邑
へと戻る事にした。

決行は深夜…急がねば。

「戻ったぞ」

「よくぞご無事で：砦の様子はどうでしたか？」

邑へ戻った俺は、頼んでいた物の準備をしている真桜と凧に声をかけた。

真桜は物作りに携われるとあって、嬉々として作業に励んでいる。

「望みうる最高の砦だが、賊には賊の事情があるらしい」

「と言いますと？」

「部下の話を盗み聞きしたんだが：首魁はもともと賊ではなく、伴侶を人質にとられての行動らしい」

俺は砦で聞いた話を凧に説明する。

しばらくは黙って聞いていた凧だったが、最後は複雑な表情になっていた。

「奥方を取り戻すためとはいえ、その為に沙和たちが人質になるなんて：」

「らしいな：まあその悪徳奴隷商人は陳留のお偉いさんに任せるとして、俺達は俺達の目的を果たそう：ぐずぐずしていると、于禁達が

その商人へ売られちまうからな」

「はい！」

「でだ、頼んどいたアレの用意は？」

「真桜が張り切っているので万全です」

と言って真桜の方へ目をやると、彼女は座り込んで手元で俺が頼んだものをいじくっていた。

見れば腰のベルトには工具袋がさがっており、そこからペンチやニッパ…ドライバーやスパナが生えている。

「…よっしゃ、最後の一部品が完成や…あとはこれをこうして…」

そうこうする内に部品が完成したらしく、真桜はそれを素早く組み立てていく。

真桜に作ってもらったのは縄梯子だ。

これなら持ち運びと始末に便利だし、生産コストも安価で済む。

「できたで！ おお兄さん、いましがたできたところや…どない？」

言って完成した縄梯子を掲げる真桜。

俺はそれを受け取り、展開する。

「…すげえな、コレ」

縄の細工と言ひ桁の細工と言ひ、俺が希望しているスペックを完璧に満たしている。

この時代の梯子と言えば基本は竹梯子だが、あれは加工に手間がか

かる上に大きいから目立つ。

だからこそ小さくたためて持ち運びやすい縄梯子を作ってもらった。

「しかし刃殿、これでどうやって人質の救出を？」

「それなんだがな…真桜、コレの性能試験は十分か？」

「抜かりはあれへんで！ この邑のみんなに協力してもらって、子供でも四半刻かからずに登り切れるで」

「よし、なら風…ついてきてくれ、今宵の夜半過ぎ…計画を実行する、詳細は現地で」

「了解です！」

「真桜は邑長と協力して、奪還した人質達の受け入れ準備を頼む」

「任しとき！」

俺は風を引き連れ、再び砦へ舞い戻った。

真桜から受け取った縄梯子を使い、風と共にさっきの木へ登り…見張りの顔を凝視する。

…よし、まだ交替してないな…間に合ったようだ。

「風、俺が合図したら屋根まで跳べるか？」

「…はい、大丈夫です」

「よし、なら合図を待ってくれ」

言って俺は背中から格納機構搭載型蜘蛛糸弓『朱雀』^{すざく}を取出して展開、特製の黒矢を番えて準備する。
しばらく待つと屋根の上に、新たな人影が3つ現れた。

「…………ッ!!」

―ヒュヒュヒュヒュヒュッ!―
―ドスドスドスドスッ!―

それを確認した俺は黒矢を6本続けて速射、放たれた矢は寸分の狂いもなく見張りの頭部へ命中…彼らは悲鳴を上げる間もなく息絶えた。

練習しといてよかったぜ、速射。

「お見事です、刃様」

「第一段階成功、よし風…跳ぶぞ」

見張りの居なくなった屋根に向かって跳び、そして静かに降り立つ。
ここからは時間との勝負だ。
でなければ見張りを終えて戻ってくるはずの連中を、帰ってこないといぶかしむ奴も出るはずだから。

「…よっ!」

―ガスッ…―

俺は足元に飛刃ひじんせきげき赤戟を突き立てた。

伝記の60 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【潜入編】（後書き）

次回こそは邂逅とかできればいいな…なんて思っています。

伝記の61 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【邂逅編】（前書き）

前話にて正体不明だった巨乳の子の正体が明らかになります。

伝記の61 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【邂逅編】

く刃 視点く

「何と、岩石で出来た砦の建材をあっさり貫通するとは…」

言って驚く風の視線の先には、砦の屋根に相当する部位に突き立っている俺の飛刃赤戟。

何を隠そうこの武器は、本気を出せば小山をなます切りに出来る切れ味を持っている。

それゆえこの程度の岩なら豆腐を切るに等しく、サクサク切れる。

「よいしょっと」

―ガコツ、ススス―

そうやって岩を切りつつ、かつ音を立てず…更には落とさないように1個1個、切り取った岩を丁寧に取り外していく。

2刻ぐらいした時には、砦の天井には人1人が通り抜けるだけの穴が開いていた。

「第二段階完了、続けて第三段階へ移行…風、縄梯子を」

「はい」

―ガキツ、コンコンコン…―

真桜に頼んで作ってもらった縄梯子は、末端に楔が付いている。

俺はその楔を穴付近の屋根の岩の隙間に打ち込み、先ほど取り外し

た岩で外れないように固定する。

「…よし、今から俺がこの穴へ上半身だけを入れて階下を見る…風は俺の足を押さえて俺が落ちないようにしてくれ」

「分かりました」

風の言葉を確認し、俺は上半身だけを穴の中へ入れ…胸から上だけが、階下の天井から逆さまに生えているような姿勢になる。

階下は薄暗く、やや遠くに松明の明かりがある他に明かりはない。俺は氣を目に集中させて視界を確保…およそ8m先に見張りと思わしき男が2人いて、そこが鉄格子と通路の境目である事を確認する。

男たちは牢に背を向けて居眠りをしているらしい。

天井から上半身だけを逆さまに生やした俺に気付く様子はない。

「（けど下手に飛び降りて着地すれば着地音で気付かれる可能性がある…仕方ない、李乾さんが基礎を生みだし…俺の案で完成し、母さんが強化したアレを使うか）」

俺は右手を男たちの方へ向け、左手で右手の腕甲『穿紅』せんこうを掴む。

そして人差し指を宙に突出し…その指先を見張りその1の眉間に合わせ…左手で穿紅を右へをねじった。

—シュッ!—

—ガスッ!—

すると手の甲の付け根辺りから刃渡り10cmほどのナイフが撃ち出され、その刃先が見張りその1の眉間に深々と突き刺さった。

―シュッ！―
―ガスッ！―

続けざまに左手で掴んだ穿紅を、今度は右へねじる。

すると今度は手首の付け根辺りから、やはり刃渡り10cmほどのナイフが高速で射出され：見張りその2の眉間へ刺さる。

これは以前里帰りした際、母さんに協力してもらって生まれた穿紅の内臓兵器。

名を『閃刃^{せんじん}』と言い、旧ソ連の特殊部隊『スペツナズ』が使うブレード射出ナイフ：通称『スペツナズナイフ』を参考にした物。

両腕で計4本のナイフを仕込んでおり、穿紅をねじるとその方向に応じて手の甲側ないし手首側からナイフが射出される。

当初はユー・オー・アイソフトの名作『アサシンク・ロード』から、主人公が使う暗殺用仕込み短剣『アサシンブ・ロード』を真似しようと思った。

しかしあれは作中でダ・インチが制作をするシーンはあるものの、構造までは説明がなく：イメージだけでの再現は不可能だった。

それでも諦めきれなかった俺が思い出したのが、地上最強の生物を父に持つ少年（青年）が主人公のマンガだった。

あの作品で主人公は幼年期、北海道の山中で特殊部隊と遭遇し戦闘を行うのだが：その際、特殊部隊の1人が使っていたのがこのスペツナズナイフだった。

柄に仕込んだバネの反発力を利用して刀身を射出し、相手の意表を突いて傷を負わせるこのナイフは：軌道が単純で刀身の飛行速度も遅く、現代ではまず通用しない武器だと言われている。

ところがここは後漢と言う古代世界：ましてや初見でこれを見切る事は、神蓮や雪蓮：あるいは恋級の勘がないとまず不可能だ。

「（とは言っても刀身は基本的に使い捨てだから、回収できるように撃ち出し：かつ、きちんと回収する必要があるんだが）：第三段階完了：風、降りるから足を放してくれ」

「はい」

俺は見張りが居なくなった通路へ、風へ合図を出して舞い降りた。通路はかび臭く、ここが長らく手入れされていない事を教えてくれる。

とまあ現状を理解したところで再度、活動を開始：モタモタしてたらマジで于禁達が売られちまう。

次は第四段階、人質の救出だ。

俺は上から風が、俺の飛刃赤戟を背負い：件の縄梯子で降りてくるのを確認しつつ、鉄格子の前まで歩みを進める。

倒した見張りの額から、射出した閃刃を回収するのも忘れない。

見れば牢内には年若い：しかもほぼ全員が俺と同世代だろうと思われる女の子達が、半裸あるいは全裸に近い恰好で：両手を後ろ手に縛られて蹲っていた。

「風」

「はっ、ここに」

「まずは于禁を探してくれ」

「了解です…沙和、沙和？ どこだ？」

「凧ちゃん？ 凧ちゃんなの？」

凧の声に応じて立ち上がったのは、牢内において一番マシであろうと思われる格好をした…そばかすに丸眼鏡が可愛い少女だった。

「凧、彼女が？」

「はい、于禁です」

「そうか、俺は呂堂…字は戦牙、君ら行商隊を建業へ連れて行くべく派遣された者だ」

「沙和は于禁、字は文側なの」

互いに自己紹介を済ませた俺達は、ひとまず于禁へ事情と状態の説明をする事にした。

もちろん真名の交換を済ませ、真桜が邑で待っている事も伝えておく。

「そっか、真桜ちゃんも無事なの…よかったの」

言って于禁は顔に喜色を浮かべる。

どうやら少し安心したようだ。

「さて于禁、まず1つ手伝えてくれ」

「何をすれば良いのなの？」

「今からこの鉄格子を開けるから、他の子達と一緒に…すぐに動けるように身なりを整えてくれ」

「分かったの」

言うなりこちらへ背を向ける于禁。

俺は彼女の手を縛っていた縄を切る。

そして于禁に閃刃を1本渡し、それで他のみんなの縄を切るように指示。

すると于禁はすぐに動く。

彼女はみんなの手を縛る縄を切った後、全員に呼びかけ…自身らの身衣を寄せ集め、千切ったり結んだりしながら…ほぼ同じ仕様の服を作り出した。

「私達、逃げれるの？」

「お爺ちゃんとお婆ちゃんは大丈夫かな…」

手が自由になった少女達は、口々に故郷の邑への思いを呟く。

そんな彼女達を見ながら俺は、倒した見張り…衛兵の懷を漁る。

この手のケースだと大概は胸元か、腰帯…ベルトに鍵束が結わえ付けられている物だが、何故だか今回は無い…チツ、仕方ない。

「準備出来たの」

そうこうする内に、最後の1人が着替えを終えたらしく…于禁から

合図が出た。

：彼女達はとてもボロ布で出来た風には見えない服を着ていた。
ファッションセンスが高いのか？

しかしこれは伝えねばならない。

「于禁、鍵が見つからない」

「えっ？」

「だからこの鉄格子を“物理的に”排除する……ハッ！」

俺は尻が持ってきた飛刃赤戟を振るい、鉄格子の床側物を切断する。
正直言えば、岩より鉄の方が切れやすいんだ。

「みんな、この鉄格子を一人一本……しゃがんだ状態で掴んでくれ」

「何故しゃがむんですか？」

于禁のそばにいた別の女の子がそう質問をしてくる。

「次は頭上……天井の枠と繋がっている部分を切断する……その時、下
を押さえてないと切断した格子が倒れ……怪我をするか、倒れた音で
扉の向こうにいる賊に気付かれるからな」

俺の説明に女の子は納得したのか、みんなと一緒にしゃがみ……先ほ
ど俺が切断した、鉄格子の下部を握った。

「よっ！」

―ヒュカカカカッ―

彼女らが鉄格子をしっかり掴んだのを確認し、俺は飛刃赤戟を振るい…鉄格子を切断する。

「…よし、後は脱出するだけ…」

「ちょっと待って欲しいの！」

…何だ？」

これから脱出しようとしたその時、于禁が焦った様子で声をかけてきた。

「そっちの通路の先に、もう一人捕まってるの」

「何？」

于禁が指差す先には木で出来た扉があり、扉には覗き窓が付いている。

俺はその窓から中を覗き、そして…頭の芯がカツと熱を持つのを自覚した。

「蘭里^{らんり}！？」

あの銀髪に黄緑色のリボン、年の割に合わぬ超巨大なメロン…何より、今でこそ虚ろだが…その綺麗な赤眼は見間違うはずが無い。

「はっ！」

―バギャン!―

俺は音が立つ事も気にせず、その扉を開け放った。

中は高い場所に明かり取りの窓と思わしき小さな鉄格子があり、蘭里はその下で着衣は下穿き（水鏡と刺繍の入った、やたら外しにくい物：貞操帯?）のまま：手足を鎖で壁に固定され、磔になっていた。

「蘭里! 蘭里っ!!」

「…刃、様…?」

「ああ俺だ! 刃だ! 待ってろ、今すぐ助けてやる!」

俺は飛刃赤戟で蘭里を拘束する鎖と枷を切り、倒れ込んできた蘭里を抱き留める。

可哀想に頬が痩せて肌の色は悪い…あの綺麗だった銀髪もカサカサになっている。

背こそ伸びているが、間違いない…俺の蘭里だ。

俺は着ていた上着を蘭里に着せ、抱きかかえて小部屋を出る。

「刃様…」

「心配するな蘭里、今から他の子達と共に脱出するから」

「はい…」

蘭里を抱きかかえたまま、風と合流する。

見れば女の子達の内、体格が比較的しっかりした子達が数人…俺が

切断した鉄格子を持っている。

「少し重いけど…」

「せいっ、せいっ…うん、大丈夫かな」

どうやら槍代わりとして使うようだ。

…切っ先は鋭いし、鉄だから振り回しても凶器になるだろう。

「刃様、その方は？」

「俺の将来の嫁さんだよ」

「えっ？」

俺の説明にポカーンとする風。

真面目な風がこんな顔…カメラを持って来てないのが悔やまれるぜ。

「風、沙和…蘭里、いや徐庶を頼む」

「刃さんはどうするなの？」

「俺か？」

決まってるんだろ。

「俺の嫁さんを辱め、あまつさえ売ろうとした賊共…訳ありだろうが何だろうが生かしちゃおけねえ！」

俺は風に飛刃赤戟を預け、両腕の穿紅をガキンと打ち鳴らした。

伝記の62 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【激昂編】（前書き）

※警告※

最近：本作を読んだとは思えないような雑多な内容の感想、あるいは内容理解の努力の欠片も見られないような批判・嘲笑の感想の書き込みが非常に多く：作者としても返信に困窮しております。

そこで誠に勝手に申し訳ありませんが、上記：特に後者に該当すると思われる感想は放置あるいは削除等の処置をさせて頂きます。

当拙作は『オリジナルキャラを主人公にしつつ、原作主人公も登場する』二次創作です。

テンプレ・ご都合主義などの要素を含みますので、嫌悪感を感じる方はお読みにならないで下さい。

伝記の62 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【激昂編】

く刃 視点く

蘭里や凧、沙和や他の女の子達が縄梯子で屋根へ上がったのを確認し：俺は縄梯子を切り、それまで近づこうともしなかった：牢とは真逆の方向にある木の扉へ歩み寄り、それを思いっきり蹴破る。

―バギヤッ！―

「おうおう、随分と賑やかじゃねえか：あぁっ！？」

開いた扉の中では男が10人ほど寄り集まり、机を囲むようにして配された丸木椅子に座っていた。その内の2人が俺に気付き、軽く混乱する。

「な、なんだテメェ！」

「貴様らみてえなクソ虫共に名乗る名なんかねえよ！」

―ヒュッ、ドゴンッ！―

足で氣を炸裂させて瞬間的な速度で走り、手近な場所にいた男を右ストレートで殴り飛ばす。

殴られた男は顎から上をひき肉に変え、様々な物をばらまきながら誰もみ回転で吹き飛んでいく。

「テメェ！ 何しやがる！」

「それはこっちの台詞だクソ虫共！　よくも俺の婚約者を辱めてくれやがったな？　覚悟しろよ…テメェら全員、五体満足にや死なさねえぜ…はあっ！」

―バゴオッ！―

「ぐあっ!？」

俺はまたすぐ近くに居た別の男の顔を掴み、男の腰を支点にして後ろへ押し…後頭部を机へ叩きつける。

その衝撃で後頭部の骨が砕け、脳に近い部位への衝撃が夥しい量の鼻血を誘発する。

しかしそんな事知った事か…

―ガッ！―

―ガッ！ガッ！ガッ！ガッ！ガッ！―

―バギヤッ―

「うがっ！」

―…ゴシヤアッ！―

「ッ！……………」

幾度も頭をぶつけた机はそこから真っ二つに割れ、男は後頭部をぐちゃぐちゃにしたまま床へ転がる。

そしてその転がった男の顔を、全力で踏みつけ…頭を踏み潰して柘榴くろのようにしてやる。

「ひいっ！」

「ば、バケモンだあっ！」

「誰か仲間を呼んで来い！」

俺が瞬殺した男2人の惨状を見て、残っていた男数人が奥の部屋へ消える。

俺はそれを見ながら更に虐殺行為を繰り返す。

ある男は四肢の骨を踏み砕かれ、壁に投げつけられその衝撃で死んだ。

ある男は素手で腹を裂かれ、生きたまま五臓を千切り取られてショック死した。

またある男は男性器を引きちぎられ、それを喉の奥にねじ込まれて窒息死した。

またある男は壁に縫い付けられた後、手足に釘を打たれて貼り付けにされ：猛虎蹴撃で胴体に風穴を開けられて死んだ。

「お、お頭！ コイツが仲間を！」

そんな時、床が血の池と化したその広場へ：首魁と思わしき男を連れ、また賊がやってきた。

「ずいぶんと粋がった事してくれたじゃねえか：どう落とし前付けたんだ？ ああっ！？」

「落とし前だあ！？ テメエらの命で清算してやるわ！」

「ほざきやがれ：テメエら、かかれっ！」

首領と思わしき男の一声で、周りにいた男達がそれぞれの得物を抜いて跳びかかって来た。

「しゃらくせえっ！」

―ドガガガンッ！―

そんな男達に対し1人頭10発、渾身の力でラッシュを加えて吹き飛ばす。

「はあああああああっ！」

そのまま腕を十字に組み、その交点を意識して氣を込める。

「氣功十字斬！」
（きこうじゅうもんじざん）

言って腕を振って氣を解き放つ。

放たれた氣弾は綺麗な十字文字を描き、今し方殴り飛ばした男達を十字文字に切り裂く。

「な、なんだコイツ…」

「テメェらに辱められた、俺の嫁の痛みを知れえっ！」

組んだ手を天へに突き上げ、竜の口を象るように開き…氣を充填・圧縮する

そして前方目掛けて一氣に解き放つ！

「昂龍戦吼！」
（きりゅうせんこう）

―ズガガアンツ!!―

ぶっちゃけ『ダイの大○陰』で『ダ○』や、その父である『バラ○』
が使う竜闘気呪文【ド○オーラ】だ。

遠目【かめ○め波】に見えない事も無い…だがその威力は絶大、件
の技とは天と地ほどの開きがある。

「…ば、ばかな」

見れば賊共は首領1人を残し、残りの連中は足首から下を残し消し
炭になっている。

本来は放てば前方へ扇状に拡散する波動で相手を攻撃するのだが、
本家とは違い氣の塊なので若干の操作が可能って寸法だ。

「…残るはテメエだけだ…テメエだけは楽には死なさねえぞ!？」

「な、何故なんだ」

「俺の婚約者である蘭里…徐元直を辱めたからだ」

「婚約者…徐元直!？ あ、アイツには何もしてない! 貞操帯が
邪魔で…」

俺が宣告すると、首領は青ざめながら蘭里に対して行った事を告白
した。

正直に言えば見逃してもらえる…そんな魂胆だったのだろう。

しかしそれは逆に、俺の怒りの炎に油を…いや、ガソリンを注ぐ行
為となった。

「貞操帯が邪魔で犯せなかったとでも言いたいのか…？ フザケンじゃねえぞカスが！ 逆を言えば貞操帯がなければ犯してたって事だろうが！ テメエだけはぜってえ許さねえ！！」

「そ、そんな…私には妻がいるんだ…殺さないでくれ！」

拳を握り、にじり寄る俺に…伝家の宝刀とも言えるセリフを吐く首領。

しかし俺はそのセリフを聞き、遂に全キレしてしまった。

「これまでもそうやって命乞いをした連中を、テメエは助けてやったのかあっ！」

「そ、それは…」

俺は右腕に渾身の…現状放てる全力の氣を込める。

「テメエは俺が裁く！ 奥義、轟撃（こうげき）…！」

—ドンッ！—

右手で殴った瞬間、臨界目前まで圧縮された氣が首領の鳩尾で炸裂。首領は鳩尾から広がった衝撃で背中から破裂、まさに五臓六腑ブチ撒いて悲惨な死を遂げた。

「…カスが」

「…見事ね、流石は赤戟の竜巻だわ」

溜飲のさがった俺に突如、そんな言葉が投げかけられた。

く華琳 視点く

「この情報は間違い無いのね？」

「はい、桂花の情報と照らし合わせましたが間違いありません」

私は手元の書簡を見ながら、今からとりかかるべき事の詳細を頭の中で練っていた。

以前、北郷からの報告で明らかになった…私が認可していない娼館にまつわる騒動で進展があった。

どうやら件の娼館の主は、客だった男を詐欺にかけて架空の借金を作り上げ…そのカタに男の妻をとったらしい。

ここまでならその娼館へ乗り込んで主を罰し、妻を解放すれば済む。しかし今回はそうも行かない。

主は男へ借金返済の為だと誘拐と人身売買を強要し、男は明日の夜明けにでもこれまでに捕まえた女子供を…主子飼いの奴隷商人へ売り払うそうだ。

私が治める土地で人身売買などあってはならない。

今読んでいる書簡は、明日の未明にでも行われる人身売買が行われ

るだろう砦と相手の詳細。

秋蘭が斥候を放って調べてくれた物だ。

「そう…なら三刻後に出発するわ…準備は？」

「万全です…人員はどうしますか？」

「私と春蘭、それに季衣きいと流琉るる…そして秋蘭、貴女よ」

「はっ、北郷と桂花はどう致しますか？」

「あの子たちは留守番よ…人身売買の現場に連れていけば、恐らくは発狂するでしょうから」

北郷は千八百年後の未来から来たと言う。

そこでは大々的に見れば紛争や犯罪で日常的に人は死んでいるそうだが、北郷自身はそう言った物にほぼ無縁の生活を送っていたらしく…先日、頭に黄布を巻いた賊達（北郷の発案で以後『黄巾党』と呼ぶ事にする）の討伐で、北郷は生まれて初めて人間を手にかける…戦闘終了後、人知れず吐いていた。

賊の討伐で吐くなど、私自身、北郷は軟弱だと思うが…それを叱咤する気は無い。

人間を殺す事に決して慣れてはいけない…人間としての理性が、罪悪感が…吐かせるのだから。

まあつけあがるから言ってあげないけど。

ちなみに桂花は単純に男嫌いな為。

あの子の知略はとても素晴らしいのだけれど、どうしたものかしら。今夜、閨で問い詰めるのも良いわね…ふふ、可愛い声で鳴いてくれ

るでしょう。

「仰せのままに」

言って秋蘭は立ち去った。

さて…私の領地で罪を犯すようになるか、思い知ってもらいましょうか。

……

……

…

そうして私は春蘭・秋蘭・季衣・流琉と彼女たちの部隊を引き連れ、人身売買が行われると情報のあった砦へたどり着いた。

部隊には特製の黒鎧を身に着けさせ、馬も黒馬を選んだから砦側からの被発見率は低い。

「華琳様、斥候が戻ってきました」

「早かったわね、流琉…それで、情報はどうなってるの？」

流琉…名を典韋てんいと言う、素晴らしい剛力を持っている。

根は真面目で料理が上手く、その腕前は私の舌をも唸らせるほど…北郷なんかはひたすら『美味い！』と言って食べていたし、春蘭…夏侯惇かこうとんに至っては黙々と食べ続けていた位。

友人である季衣…許きよチヨからの手紙で彼女を探していたらしいのだが、まさか季衣が城勤めをしているとは思わなかったらしく…合流の際には互いを罵りながら武器を打ち合わせ、近くの林を更地に

変えた事は記憶に新しい。

根は真面目で、頭もそこそこ回る。

季衣：名を許チヨ。

人攫いの被害があり、今から向かう砦を近くに有する邑とは別の邑で門番をしていた少女で：発見当初は百余名の賊を相手に孤軍奮闘していた。

見かねた春蘭が助けに入ったのだけど、我々が官軍と知った季衣はそれまでの官軍の言動から私たちを敵視して攻撃を開始：私がその腑抜けた官軍の分も含め謝罪、ついでに隣の陳留から来た事を伝えると攻撃をやめた。

その食欲はまさに底なしで、彼女の参入で桂花の兵糧計算が狂い：私は彼女へ試練を与える破目になったのだけれど。

彼女の胃袋は流琉が握っているといっても過言ではない。

ちなみに性格は明るく、頭は悪い方だけどかえってそれが良いかもしれない。

春蘭：姓を夏候^{かこう}、名を惇^{とん}、字を元讓^{げんじょう}。

姓から分かる通り秋蘭：夏侯淵^{かこうえん}とは同じ家の出身で、春蘭は秋蘭の姉。

季衣を上回る剛力を持ち、その武力は我が軍で最強を誇る：のだけれど、頭は：春蘭には悪い、あまり良くない。

北郷ですら理解できる事を理解できない：まあそこが可愛いのだけれど。

彼女は我が軍の将で唯一の男である北郷を、私に近づく害虫として認識しているらしく：愛刀である七星餓狼^{しちせいがろう}を振りかざし、北郷を追い掛け回す光景が度々見られる。

「それがですね…」

私の問いかけにはそれがどんな物であれ、即座に応える流琉が珍しく言いよどむ。

何かあったのかしら？

「何があったの？ 言いなさい」

「はい！ えっと、目的地の砦で赤髪の男が仲間数人を連れ相手を襲撃しているそうです」

「何ですって！？ 赤髪の男！？」

赤髪の男、そう聞いた私は直感的に…その男が『赤戟の竜巻』だと思った。

確信はないけれどきつとそう。

そして私はこうも思った。

その男が欲しい、と。

赤戟の竜巻に関して調べた所、北郷の登場を予言した管輅の占いで…北郷ではなく件の彼の事を予言したと思われる卜が、建業周辺で発せられている事が分かった。

『天の御遣いの降臨に時を同じくし…その身に強大な武と氣を宿した赤き刃が、虎の檻の中より現れる…赤き刃はその武と天恵の才によって豊かな双丘を守り、無数の愛に支えられ…動乱の最中、異色の王として産声を上げる』

内容に関していくつか分からない部分はあるものの、要約すれば動乱の最中に孫堅の元から次代の王が生まれると言う事。

次代の王を配下として使う…それは支配者としてとても喜ばしい事

だと私は思う。

飼いならせないなら、我が覇道を阻む最大にして最高の障害となるよう育ててあげましょう。

障害は大きければ大きいほど、それを打ち崩す喜びも増えるでしょうから。

「なるほど…他には？」

「はい…斥候が調べたところ、今回の商売で売られる予定の被害者たちの中に男の仲間がいるそうで…男はそれを奪還しようと戦闘を行っているそうです」

なるほど、彼には何かしらの誇りがある訳ね？

武勇・知力、そして誇り…素晴らしいわ。

何が何でも手に入れないと。

…

…

…

そうして私は砦に到着。

既に戦闘は激化しているらしく…私は周辺の賊を春蘭と秋蘭に、内部の賊を季衣と流琉に任せて内部を探索…桂花から預かった地図に記されていた、宴会場と思わしき場所で彼を見つけた。

彼は二十数名の賊を相手に無手で戦っており、その戦闘は苛烈の一言に尽きる。

しかし同時に完成された武のようで、美しくも感じられる。

私は気配を殺して彼を見守る。

「それはこっちの台詞だクソ虫共！　よくも俺の婚約者を辱めてくれやがったな？　覚悟しろよ…テメェら全員、五体満足にゃ死なさねえぜ…はあっ！」

―バゴオツ！―

「げひゃっ！？」

彼は叫んで賊の頭を掴むと、その頭を体ごと投げるように机へ叩きつけた。

そしてそのまま頭を机に何度も打ち付け、机が割れたのを確認するなり賊の頭を踏み潰した。

賊の頭は潰れた唐柿（トマトの事）の様に原型を留めていない。彼の形相はさながら悪鬼羅刹のようだ。

何がそこまで彼を…と考えかけ、彼の言葉を思い出した。

『よくも俺の婚約者を辱めてくれやがったな？』

…察するに今宵、人身売買で売られる予定の被害者の中に彼の婚約者がいて…賊共に辱めを受けたのだろう。

ならば彼の怒りも頷ける。

…けど、私としては賊の首領である男の…借金のカタに取られた奥さんが心配なのだけだ。

「ほざきやがれ…テメェら、かかれっ！」

そんな事を考えている内に、状況に進展があったらしい。見れば首領と思わしき男の一声で、周りにいた男達がそれぞれの得

物を抜き…彼に跳びかかっていた。

…が。

「しやらくせえっ！」

―ドガガガンツ！―

そんな男達に対し彼は無数の突きを放ち、跳びかかってきた男達を吹き飛ばす。

何て拳速なの！？

肩から先が霞んで見えるほどの突きだなんて…

「…ば、ばかな」

どうやらしばらくの間、驚きのあまり意識が飛んでいたらしい。

首領と思わしき男の震える声で我に返って見れば、賊共は首領1人を残すのみとなっていた。

「…残るはテメエだけだ…テメエだけは楽には死なさねえぞ！？」

「な、何故なんだ」

「俺の婚約者である蘭里…徐元直を辱めたからだ」

「婚約者…徐元直！？ あ、アイツには何もしてない！ 貞操帯が邪魔で…」

婚約者の名前は徐元直、と。

…徐元直？

どこかで聞いた…そうよ！

荊州は水鏡女学院にその人ありと謳われ、あの北郷ですら知っていた『伏竜』『鳳雛』の同期じゃない！

…水鏡女学院の生徒であった婚約者、素材としては素晴らしそうね。

閨ではさぞ良い声で鳴いて…

―じゅる…―

いけないわ、涎が…。

「貞操帯が邪魔で犯せなかったとでも言いたいのか…？ フザケンじゃねえぞカスが！ 逆を言えば貞操帯がなければ犯してたって事だろうが！ テメエだけはぜってえ許さねえ！！」

「そ、そんな…私には妻がいるんだ…殺さないでくれ！」

拳を握り、にじり寄る男に…伝家の宝刀とも言える言葉を吐く首領。北郷ならこの言葉で足を止めたでしょう…けれど彼は違った。彼はその言葉を聞き、怒りが頂点に達したようだ。

「これまでもそうやって命乞いをした連中を、テメエは助けてやったのかあっ！」

「そ、それは…」

首領の言葉が弱弱しく紡がれるなか、男の右腕が光を放ち始めた。赤く、なお紅い…激しい昂ぶりを感じられる光。妖術使いかしら？

まあこれだけの武勇があるのならば妖術使いでも構わないのだけ

ど。

「デメエは俺が裁く！ 奥義、轟撃こうげき！！」

—ドンッ！—

叫んで男が右手で首領を殴った瞬間、右腕の光が首領の鳩尾で炸裂。首領は何故か背中から文字通り破裂し、まさに五臓六腑ばら撒いて悲惨な死を遂げた。

威力が周囲へ音と光となって轟く一撃、まさしく轟撃ね。

「…カスが」

ゆっくりと崩れ落ちる首領。

そんな首領を、汚物を見るような冷めた目で見る赤髪の男。

私はその光景を見ていて、口を突いて出る言葉を押さえる事が出来なかった。

「…見事ね、流石は赤戟の竜巻だわ」

私の言葉に驚いた表情を見せる赤髪の男。

「…誰だ、アンタ」

…人に名を尋ねる時は自分から名乗ると親に教わらなかったかしら？
と言いたいけれど、今回は私が不意打ちした様な物だから私が先に名乗りましょうか。

「私は曹操、名を孟徳もうとく…陳留の刺史よ」

さあ覚悟なさい。

貴方は私の物になるんだから。

伝記の62 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【激昂編】（後書き）

と、華琳様と遭遇するお話でしたが…私が書く華琳様はどうもレベルとかクオリティが低いような気が…華琳様ファンの方、申し訳ありません。

伝記の63 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【帰還編】（前書き）

と言う訳で霸王様との語らいです。

途中出てくるあの方々ですが、半分…いえ3／4以上空気と化します。

そして刃の、華琳からの勧誘に対する答えは如何に？

詳細は本編で。

ではどうぞ。

伝記の63 刃 行商隊奪還へ赴くのこと【帰還編】

く刃 視点く

コイツがレズビアンサディスト、曹操か…ふむ、眼力及び滲み出る覇気は相当な物だが…身長は小さく胸は残念だ。

とは言えこの手の人間は異常に勘が鋭い…ともかく呉寄りの人間である事を悟られないようにしなくちゃな。

「孟徳殿か…俺は王允^{おういん}、字は子師^{しし}と言う…王允と呼んでくれ」

「王允ね？」

「ああ」

そしてさりげなく偽名を使い、情報を攪乱しておく。

この曹操が詠の情報通りなら、今回こんなボロ砦に来たのは半々の確率で俺のヘッドハンティングなはずだ。

でなければ開口一番に『赤戟の竜巻』と言う単語は出てこないだろうから。

「で？ その陳留の刺史様がこんなオンボロ砦に何の用なんだ？」

「この砦で人身売買が行われると言う情報を耳にしてね…私の領地で不正を働く輩を粛清に来たのよ」

領地、ああ…そういやココ、陳留にほど近い邑が持つ砦なんだよな。頭に血が上ってて忘れてたぜ。

「尤も？ その不埒な輩は貴方が成敗してしまったみたいだけど」

「なるほど」

「そしてここへ来て、別の用事が出来たわ」

「別の用事？」

「ええ…王允、貴方…私の物になりなさい」

そら来た。

覇気を解き放って、威圧とも取れる勧誘を行う曹操。
中々の覇気だが俺には通じない。

何故なら俺はこれより強い覇気の持ち主を2人、いや3人知ってお
り…その内1人とは最近、ずっと一緒にいるからだ。

「何故俺なんだ？ 理由を聞こうか」

「簡単な話よ…私はこの大陸を治める王になる為、覇道を行くわ…
その時に必要なのは力、そんな時に黄巾賊七万を討った猛者の話を
聞いた…手元に置きたいと思うのは普通ではなくて？」

…想定の範囲内だな。

にしても覇道か…むう。

— バアンツ！ —

「ご無事ですか華琳様！」

どう答えようか考えていたその時、曹操の背後にある木の扉が吹き

飛び：黒髪で額の広い、中々の大きさのメロンを備えた女が入ってきた。

その手には大きな、拔身の太刀が握られている。

「ちょっと春蘭、貴女はもう少し空気を読みなさい」

「空気ですか？ 読むにしても字が書いてないと読めませんが：むっ！ 誰だ貴様は！？」

いや空気を読むってそう言う意味じゃ：もしかしてバカなのか？
そう言う意味合いも兼ねて曹操の顔を見れば、俺の意図を察したらしい曹操は苦笑していた。
なるほど、コイツはバカだと。

「…………王允、字は子師と言う：貴女は？」

「私は華琳様に仕える将で華琳様の大剣：名を夏侯惇と言う！
そして王允！ 貴様、華琳様に何の用だ！？」

オイオイ、この黒髪デコが夏侯惇だって？

夏侯惇と言えば冷静で思慮深く、曹操とは不臣の礼を結んだって言うあの夏侯惇だよな？

それがコレ：ひよっとしたら魔改造前の理沙：華雄や、同じく魔改造前の焰耶：魏延より性質が悪いぞ！？

「いや、孟徳殿が俺に話があるそうだ」

「本当ですか？ 華琳様」

黒髪デコ：もとい夏侯惇の問いかけに、口元に笑みを浮かべてそれ

を肯定する曹操。

「じゃあ忠臣も来た事だしもう一度言うわね？ 貴方、私に仕えなさい」

「な！？ 華琳様！？」

なるほど…夏侯惇は俺が曹操に仕える事に反対らしい。

それもそうか、曹操の大剣を名乗るほどだ…ひよっとしたら自分の立場が危うくなるんだからな。

「この男はね春蘭、黄巾賊七万を無傷で殲滅し…同時に敵將波才はたけを討ったのよ？ その武力、在野に埋もれさせるのは惜しくはなくて？」

「ですが華琳様あ」

「大丈夫よ春蘭、貴女を捨てたりはしないから…後で可愛がつてあげるから、機嫌を直してちょうだい」

「はいっ」

後で可愛がる…なるほど、詠の情報はどこまでも間違っていないようだな。

「姉者の後を追ってみれば…華琳様、ご無事で？」

そうやって桃色の雰囲気が漂い始めるなか、今度は青髪の知的な大メロン美人がやってきた。
その手には弓がある。

夏侯惇を指して『姉者』と言う事は、コイツが夏侯淵だろう。

「あら、秋蘭…貴女には外で待っているよう告げたはずだけど？」

「申し訳ありません華琳様、この失態の処罰は後で如何様にも…しかし現状の説明だけはして頂けますでしょうか？ 例えば目の前に『赤戟の竜巻』と思わしき男がおり、その男の周囲に人肉と思わしき血肉が転がっている事についてなど」

へえ…妹の方は姉より遥かに頭が回るらしい。

このミンチが元人間で、かつ俺が『赤戟の竜巻』である事を分かっている風な言い方…そして前髪で隠していない左目が、周囲を絶え間なく観察している事からも夏侯淵が聡明だと言うのが見て取れる。

「…そうね、じゃあもう一回だけ説明しておきましょう…王允、貴方…私に仕えなさい」

「…」

…お？

姉とは随分と反応が違うな…俺を見定めている、と言った所か。

「…差し出がましいようですが、この男は我が陣営には不要かと」

「どうしてそう思うの？」

「はっ、目です」

「目？」

「はい、その男の目には強く激しい野心の炎が燃え盛っております
：今は姉者がいるので滅多な事をしないでしようが、これほどの惨劇を一人で引き起こせる男：黄巾七万を単身無傷で討てる武勇は確かに凄まじいのでしようが、北郷との兼ね合いもあります：いずれは手に余る事になるかと」

「ッ!？」

夏侯淵が発した言葉に、俺はわずかに顔を顰めてしまった。
今コイツ、北郷って言ったか？
北郷ってアイツだよな？

「北郷もコイツも我が陣には不要です華琳様！ 何が天のお使いか
！」

「姉者、天の“御遣い”だ」

「「…」」

スマン、今の間違いは流石に俺もどうかと思うぞ？

「…ともかく！ その御遣いもこの男も、我が陣営には不要！ 華琳様が覇道を歩むにあたり、必要なのは我らのみ！ 意見の賛同を認めたくはありませんが、私の意見には桂花も同意するはずです！」

言って拳を握る夏侯惇。

どうやら間違いないようだ：北郷がこの世界に居る。

そして当人は曹操勢にいるらしい。

つまり冥琳の言っていた『管輅の予言した天の御遣い』及び、貂蟬

の言っていた『今から向かう外史の、俺の友人でキーパーソン』は
一刀の事を指すのか。

しかし一刀が起こす行動でこの世界が崩壊する…それを止める、か。
どうしたもんかな？

「と、春蘭…夏侯惇はこう言ってるけれど、貴方は我が陣営に加わ
るとして、どんな意見を持ってるのかしら？ 何か思うところもあ
りそうだけど」

俺の表情が僅かに変わった事を見抜いていたらしい。
クッソ、やり辛い女だぜ。

とは言え答えを出さなきゃ拙いか。
なら俺の答えは…

「悪いがこの話、無かった事にしてもらおう」

「へえ…どうして？」

「天の御遣いだかなんだか知らんが、そんな珍妙な人間を抱え込み
…かつ、部下を“物”の様に見る者に下げる頭を持っていない」

「何だと!？」

至極まっとうな意見を言っただつもりなのだが、それに反応したのは
曹操ではなく夏侯惇だった。

彼女はその手に携えていた太刀を振り上げて構え、怒気をまき散ら
し始めた。

「貴様…華琳様のお誘いを断るばかりか、華琳様を侮辱する気か！

「？」

君は俺に入ってほしいのか？
それとも入ってほしくないのか？

「：侮辱だとしたらどうする？」

「無論、叩き斬ってやる！」

—ジャキッ！—

「でええええいっ！」

—ビュオッ！—

言って夏侯惇は俺に駆け寄り、その太刀を最上段から振り下ろした。
ふむ、良い太刀筋だ。
なら力はどうか？

—ガギンッ！—

「ッ！」

俺は夏侯惇の攻撃を真正面から穿紅で受けとめたのだが、これは強烈だ。

受けた左腕が、たった一撃で痺れてしまっている。

なるほど、曹操の大剣を名乗るほどの事はある：剛力の度合いだけなら恋：呂布と互角か。

「：やるな、私の初太刀を避けもせず真正面から受け止めるとは：

男のくせに相当鍛えているようだな」

「男のくせにと言うのは聞き捨てならないが、今度は俺の番だな…はあっ！」

―ガゴオンッ！―

「ぐっ！」

受け止めた左腕が仕えない分、体重移動が不安定だが…それでも俺は夏侯惇へ向けて右のストレートを放った。

夏侯惇はそれを剣の腹で受け止めたが、瞬間的には顔をゆがめる。そして後ずさるようにして吹き飛んだ後、立ち上がって体勢を整えたが…

―……ガランッ―

その右手から太刀が滑り落ちた。

夏侯惇は顔を顰め、右手をさすっている。

「何と言う剛力、一撃で右腕が痺れてしまったぞ」

なるほど、腕の痺れ…つまりは俺と同様か。

このままだと決着がつかないな。

そういえば曹操は何をしてるんだろう…と、俺は目だけをわずかに動かし、曹操を見た。

「……」

見れば曹操はまるで『面白い玩具を見つけた』と言わんばかりの表

情で、俺と夏侯惇の打ち合いを見ていた。

横に立つ夏侯淵も似たような表情をしている。

コイツら…夏侯惇がこんな行動に出ると知ってて放置したな？

主の許し無しに相手へ斬りかかるのは、部下の制御が甘いと思う…
まあ今の俺の主は部下より先に斬りかかるからなあ…ケースとして
アリっちゃアリなのか？

「…………俺は左腕だが、痺れは君と同様だ…それと孟徳殿、いつまで
で見ているつもりだ？」

「気付いてたの？」

「せめてその、楽しそうに歪んだ口元を隠す素振りぐらいを見せたら
どうなんだ？」

「あら、ごめんなさい」

言って佇まいを直し、まじめな表情に戻る曹操。
見れば夏侯淵もまじめな表情になっている。

「で、俺と夏侯惇を戦わせて何がしたかったんだ？」

「それはもちろん貴方の力量を見るためよ…結論として、私は貴方
が余計に欲しくなったわ」

「欲しいと思われるのは勝手だが、俺はアンタに従う気は無い…と
言っても随分と高い出費を強いられたがね…部下の躰がなくな
いんじゃないか？」

言って俺は左腕を大げさにプラプラさせる。

「それについては部下の非礼を詫びるわ…悪かったわね」

「謝罪してくれるんなら非礼の件はこれ以上言う気は無いが、俺の事は諦めてくれ…じゃあな」

これ以上問答を続けても埒があかない。

もしこれ以上続けるなら、最悪の場合は夏候惇を熨す必要が出てくる。

俺としては自ら進んで女に手を上げる事はしたくない。

まあ以前の理沙や焰耶、そして今回の場合みたいなケースは自衛の意味も含んで例外とするが。

「でも、これだけは言っておくわ王允…私はね…」

俺としては蘭里が心配だから、一刻も早くこの場を立ち去りたい…だがそんな俺の心境を知ってか知らずか、曹操が声を投げかけてきた。

俺は振り返らずに足を止める。

「欲しいと思った物は何が何でも手に入れるの…そして私は貴方が欲しい」

「…」

俺と言う“人間が”ではなく、俺と言う“力を持った駒が”欲しいんだろう？

言葉はキチツと選べよな。

「今回は諦めるけど、次は無いわ…覚悟しておく事ね」

どこかで聞いた風な言葉だが、今回ばかりは言っておく必要がありそうだ。

つか…言っても良いよな？

「なら俺も自衛の為に言っておこう…その夏侯淵が言う通り俺には夢がある、そしてそれは俺が家族と…そして俺を家族と見定めてくれる上官や同僚の武将と一緒に作る夢なんだ…けどあんたは部下を駒だと言う…俺はな、曹操…部下を物扱いする奴が大嫌いなんだよ」

「えっ？」

俺の一言で背後の空気が凍ったのが分かる。

長らく呉勢や洛陽勢と過ごしたせいかな、俺は配下や上司を家族だと思っている。

だからこそ俺は家族の為ならなんだってするが、そこへ来て部下は駒…これはいただけくない。

「それと俺の夢は胸の大きい子で構成される予定だから、アンタの仲間に…アンタの駒になっちゃ俺の夢が死んじゃう…あ、夏侯姉妹は別な？ いつでも歓迎するぞ」

うん、あの2人は合格ラインだ。

さあ反応や如何にと曹操を見れば、曹操がプルプル震えていた…どうやら心の臓を抉ったらしい。

あまりにも明言しすぎてフリーズしたようだ。

「ッ！？ ちょっと、それってどう言う…私が貧乳だと言いたいのか！？」

と思ったのもつかの間…曹操は叫びつつ、再起動したらしい…

「貧しいとは言っていない、だが大きいとは言えないな」

そう…俺はアンタの事を貧乳とは言ったんじゃない、中途半端な発育度合いだと言いたいのだ。

本当は『ましてやアンタ、同性愛者の気があるんだろ？俺の嫁さん候補がアンタに喰われるのは我慢ならない…』とも言いたいのだが…夏侯惇の顔色を見るに、ここが潮時だな。

「ま、アンタの胸は男から見てどう映るかを知りたいなら、北郷にでも聞いてみるんだな…それじゃ、あーばよー！」

「コラ！待ちなさいっ！！」

そして言いたい事を言うだけ言って、俺はその場から走り去ったのだった。

伝記の63 刃、行商隊奪還へ赴くのこと【帰還編】（後書き）

蒲公英と華琳はどっちが大きいんでしょう？
同じラインで明命・思春・亞莎も。

伝記の64 刃、部隊を持つこと（前書き）

数時間もの試行錯誤を繰り返し、ようやく拠点フェイズらしきものが書けました：が、文章の前半がR18スレスレなのは何故なんでしょう：ドウシテコウナツタ？

伝記の64 刃、部隊を持つ的一瞬间

（刃 視点）

それから後、律儀にも蘭里を抱えて砦の屋上で待っていた風と合流した俺は：曹操の追っ手（夏侯惇の追撃とも言う）を振り切るようにして砦を離れ、出発地である邑で真桜・沙和及び、建業への移住を希望している商人達とも合流、彼女達を引き連れ：建業へ向かった。

途中：疲労で昏睡していた蘭里が目を覚ました為に、俺は風達を先に建業へ向かわせ、自身は蘭里と共に建業に程近い町で一泊する事にしたのだが、その際：俺は蘭里を、蘭里たつての願いで消毒と言う名目で食う事になった。

ちなみに蘭里の言う『消毒』とは、全身隅々まで俺の総て（誤字に非ず）を染み込ませ：俺の宝槍で貫き、俺の女である証を付ける事を言うそうだ。

蘭里は斗詩^{とし}：顔良^{がなりよう}以上に尽くすタイプで、俺を悦ばせる為ならどんなプレイだって大丈夫と豪語し：事実、それを最高に喜んで受け入れていた。

（もちろん俺にSMの気は無いので、極普通の様々なプレイ：と言う意味でだが）

ちなみにロマン砲の発射回数は、インターバルを挟みつつも一晩で30発：我ながら自身の絶倫ぶりに呆然としたが、蘭里もさるもので『今日は絶対安全日ですから、何回出して頂いても大丈夫です：

寧ろ、何回でも出して下さい／＼／＼』と言っていた。

今度、インターバルなしで何連続発射できるか試してみよう。

いや、それを差し引いてもマジでスゲーわ蘭里。

2年前は135も無かった身長が、今では160ほどになっており
：その急激な成長に比例したのか、初見当初はメガメロンだったあれを：今ではレベル100を超すギガメロン：いや、テラメロンへと進化させていた。

蘭里のテラメロンはその大きさだけではなく色・形・張り具合・肌触り・感度・重さ：などなど、俺が大きなメロンに求める要素全てを完璧な値で満たしており：更に腰はギュツとくびれて細く、臀部は張りがあつてムツチリとした：年齢不相応の、ある意味とんでもない（けど嬉しい）娘こになっていた。

また：幼い顔に魔乳持ちなので、真桜のお株をそっくりそのまま奪う形になったのだが：真桜本人は、自身が童顔である自覚が無いようだ。

もちろんあの超絶舌技は健在で、更に磨きをかけた舌技＋その超立メラ派な物で、俺を大いに悦ばせてくれた。

事が済んだ後、蘭里は幸せそうな表情でこう言った。

『私は旦那様専用の全身性感帯仕様超奉仕型魔乳少女です：公私共に末永く、よろしくお願い致します』

：と、いつの間にか俺への呼称を『刃様』から『旦那様』へ変えな

がら。

ちなみにこのセリフ、俺が強要したんじゃないから悪しからず。

「愛してます、旦那様…お休みなさい」

そう言って俺の腕に頭を乗せ、テラメロンを俺の脇腹に押し付けつつ…安らかな寝息を立て始める蘭里。

「俺も愛してる…お休み、蘭里」

そんな蘭里を愛おしく思いながら、頭を撫で…綺麗な銀の直毛を手で梳く俺。

本当に俺って巨乳好きで…巨乳の娘には甘いよなと思う。

さて、そんな…俺には珍しい形で夜が明けた次の日…朝一番で建業へ戻った。

そして…報告が済み、真桜達一行は無事に建業へ受け入れてもらった事を知った。

そして数日後、朝議が始まったのだが…終わるなり冥琳がこんな事を言い出した。

「刃、お前…部隊を持つ気は無いか？」

「……………は？」

脇腹にしがみついた（衣服を新調した）蘭里を伴ったまま、俺は正にアホ面をしてしまった。

「冥琳、今：俺に部隊を持つ気は無いかと言ったのか？」

「うむ：刃には刃専属の部隊を持ってもらい、その部隊を刃の力として：来るべきその日に、呉に役立ててもらいたい」

「いや、俺は客将なんだぞ？　いつ抜けるか分からない人間に隊を発足しろとは：なあ蘭里、蘭里もそう思うよな？」

「旦那様の仰る事は正論です：ですが旦那様は孫家の客将で、冥琳殿は我らの上官で軍師：来る祭まつりの事を考えるなら、旦那様に隊を持つてと言うのもまた正論です」

蘭里の言う『我ら』とは、言うまでもなく俺と蘭里の事。

そう、蘭里は俺を唯一の主君としているのだ：まあ『唯一の主君』には『公の場では』と言う冠詞が付いたりするが。

：じゃあ公の場じゃなければどうなるかって？

冠詞が『最愛の旦那様にして』ってのに変わるんだ。

「蘭里の言う通り、私は軍師：刃と蘭里も知っているだろう：狩猟祭に備え、今はひたすら蓄える必要があるのだ」

冥琳のその言葉に深く同意する蘭里。

この『狩猟祭』とは言うまでもなく、袁術の支配下から脱する事を意味する隠語である。

ちなみに蘭里だが、別にやんでいる訳ではない。

属性付けをするならば『俺に対してはデレオンリー』と言ったところだろう。

自分で『旦那様専用全身性感帯仕様超奉仕型魔乳少女』と言うだけの事はある。

なので俺に対してはデレ100%の態度で来るが、どこでも求めてくる痴女・変態では無いし：俺が神蓮・祭さん・穂・雪蓮と仲良くしていても、普通に対応し：2人きりになったからと言って過激にベタつく事もしない。

ゆる軍人将棋に耽る姿が度々見られる。

また、撃剣の使い手と言う事もあり：象棋の出来ない日は調練場で剣を振るい、実力の伯仲している思春と試合う姿も見られている。

ちなみに完全な蛇足だが、俺的な現状の呉勢内武将の武力順位は……

俺_レ神蓮_ニ雪蓮_ヲ祭さん_ノ（氣術の扱いの壁）
思春_ニ蘭里_ニ明命_ヲ亞莎_ノ（経験・適性の壁）
蓮華_ヲ冥琳_ニ穩_ニ小蓮_ノ

…となっている。

思春を超えて、かつ氣を覚えれば祭さんと並べる位置にいる蘭里つて…。

鼯鼠目に見すぎかも知れないが、文武両道とは彼女の事を言うのだ
 ろう。適性や潜在能力の面も見ると、蓮華も同じ。いや、潜在能
 力を加味すれば一気に雪蓮と並べるポテンシャルを持っている。

後はきっかけ次第だろうが……流石は呉のラストエンペラーだな。

「（にしても、だ…蘭里の事はいずれ、他の連合員みんなに紹介しなくちゃな…）」

「で？ 部隊編成はどうなんだ？」

…思考に耽り過ぎて、話が逸れていたようだ。

「…編成条件は？」

「まず、必ず呉の者を隊員として組み入れる事…これは武将でない事が望ましいが、この場に居る者である必要は無い」

「ふむ」

「次に人員数は二百を限界とし、その隊長を刃が務める事…そして最後、隊名及び部隊特色は刃に任せるが各種報告は欠かさない事…報告は隊に組み込んだ呉の者を通じて私に行うか、直接報告に来るという」

「それだけか？」

「以後追加する可能性はあるが、現状で定めているのはこれだけだ…備品費用や食費、兵舎や隊員の給金の心配はしなくて良いぞ」

言って冥琳はずれた眼鏡をクイツとして戻す。

冥琳は『現状ではこれだけ』と言うが、それにしても少々厳しい条件だ。

まず条件1の『呉勢力に属する者を組み入れる』
これは謀反を防ぐ為の条件だ。

謀反なんか起こせる立場では無いが、まだまだ信用と信頼が足りないようだ。

次の条件2である『人員は最大200人まで』

これは今、建業にいる新兵の数と一致する。

即ち俺に新兵の訓練を任せてしまおうと言う魂胆のようだ。

…新兵では俺が作りたい部隊なんぞ出来ないが、な。

そして条件3『俺が隊長を務める』

これは俺を隊長にする事によって条件1を最大限活かし、俺を呉に縛るつもりなのだろう。

俺が隊長なのに呉を出るような事になれば、民からの信用と信頼の実績を地に付ける事になりかねないから。

最後の条件4『報告は欠かさない』

これは言わずもがな、だな。

「…んゝ……」

断るのは簡単だが、それをしてしまうと冥琳ゲットが難しくなる。

…麗羽^{れいは}、つまり袁紹^{えんしょう}のところでやった問答と全く同じ状況だが…難易度的にはこちらの方が圧倒的に上。

かと言って安易に請け負ったら、他の嫁たちに合うのが難しくなる。客将と言えど隊長格が、おいそれと本拠地…建業を離れる訳には行かなくなるからだ。

さて、どうしたものか。

「旦那様」

「ん？」

ふと蘭里の声がして、そちらへ顔を向けると…蘭里が耳を貸せのジエスチャーをしている。
何か妙案でもあったのだろうか。

「どうした？」

「まず……………」

「…………なるほど」

説明すると蘭里の意見はこうだ。

まずこの場合は冥琳の提示した条件通りに隊を作る事を承諾し、許可を得て新兵達を50人ほど厳選して精鋭部隊を作り…条件1と2をクリア。

同時にその精鋭部隊の隊長となる事で条件3もクリア。

ただこれだと条件1の達成状況が脆弱なため、とある人物に頼んで精鋭部隊の副長に任命し…条件1の脆弱性をカバー、同時にその人物であれば余裕で条件4をこなせる。

…流石は蘭里、俺がやりたいように出来…かつ条件1～4全てを完璧に満たせる案を出してくれた。
これならば問題はない。

「なら蘭里、蘭里には…の……………の…………を頼む」

「お任せ下さい♪」

「冥琳、その話…受けるぞ」

「良かった、刃ならそう言ってくれると信じていた…さて、ではいつから動く？」

「…急がば回れとは言うが、この場合は善は急げだ…まずは調練場へ行ってくる、とりあえず報告を待っててくれ」

「早速か…了解した」

こうして俺は蘭里を伴い、玉座の間を後にした。

（雪蓮 視点）

「…急がば回れとは言うが、この場合は善は急げだ…まずは調練場へ行ってくる、とりあえず報告を待っててくれ」

「早速か…了解した」

言って玉座の間を立ち去る刃と蘭里ちゃんを見送る私と冥琳。
私は彼らの姿が完全に見えなくなったのを確認し、冥琳に向かって口を開いた。

「めーりーん、アレで良かったのお？」

「…ん？ 何がだ？」

またまたあ、とぼけちゃってえ。

「隊を持つにあたり、刃に課した条件よ」

「だから何の事だ？」

私は知っているし、決して忘れない。

刃が蘭里ちゃんを連れて帰ってきて『婚約者だ』と紹介した時の貴女の顔を。

冥琳ってば素直になれば良いのに、肩肘張って強がってたわよね？
まるで『刃の筆頭軍師は私なのに』と言わんばかりに。

「冥琳、刃の事…好きなんですよ？」

私がそう言うのと冥琳は若干だが頬を紅潮させた。
これは凶星ね。

「…どうしてそう思う？」

「勘よ」

「…」

「…と言いたい所だけど、実際は冥琳の態度だったりして」

だから私は冥琳に説明する。
蘭里ちゃんが『刃の婚約者』と紹介をされた時の、冥琳に感じた態度の違和感を。

「……………雪蓮には勝てないな」

「認めるの？」

「…ああ」

違和感を突き付けると冥琳は降参したのか、やがてゆっくりと…言葉を選ぶようにしながら話し出した。

「最初は、呉に害をもたらず妖術師か何かだと思ったんだ」

「妖術師？」

「ああ…刃は初対面であるはずの私が抱えていた病を見抜き、それを氣によって一瞬で完治させた…氣と言う物の存在は黄蓋殿の事もあり、知識としては知っていた…しかし実際に目にすると、少し怖かったのだ」

冥琳は言う。

その後一旦は別れる事になったが、別れ際に刃が見せた目に宿る…激しく強い、意思の炎の煌めきが氣になった。
病によってそう遠くない将来、落命する事が分かっていた自分にとってあの煌めきは非常に懐かしく感じたらしい。

「そして刃が十七になり、ここへ戻って来た時に私は…懐かしさの

正体を理解した」

「何だったの？」

「野望だよ」

「野望？」

「夢とも言うがな」

冥琳は語る。

別れ際、刃の目に見えた煌めく炎は…かつて自分も胸の奥で日夜燃やし、そして自身の双眸にて煌めかせた…果てなき野望の炎だったと。

そしてその煌めきを見て、自身の心が熱を帯びるのを感じたと。

「私は刃に問いかけた…」

『お前は何時^{いつ}何時^{なんどき}も、その双眸に炎を灯している…それは野望あるいは夢と呼べる物を、成就させんと飽くなき努力を続ける者だけが灯せる炎だ…この乱世においてそれだけ強い炎を灯すお前は、何を夢見ているんだ？』

すると刃は一瞬キョトンとし…だが次の瞬間には笑ってこう言ったそうだ。

「『俺の夢は八十まで五体満足に生き抜く事、そして終世のその時まで好きな女達を囲い…やがて子供や孫に看取られながら後悔無く、笑顔で安らかに死ぬ事だ』と」

「…」

どこか嬉しそうに、そしてそれを自分の事のように冥琳は言った。

「その時、私は思い出したのだ…この男の見ている夢こそ、かつての自分が見ていて…だが病を理由に諦めた夢なのだ」と

…もちろん冥琳は女だから『好きな女達を囲い』の部分は色々変わるでしょうけど。

そして同時に気になったらしい。

このご時世においてそんな平凡な…しかし崇高な夢を見る男は、もし寄り添った際にどんな光景を見せてくれるのかと。

「それはいつしか『見せてくれるのか』ではなく『共に見たい』へと変わり、そしてそう思い始めたその時にはもう…」

「刃の事が好きで、そして好きである事に気が付いた…と？」

「……ああ」

そう言って頬を赤らめる冥琳を見て、2つの意味を込め…私は心の中で溜息を吐いた。

一つはこの、理論的説明が出来なければ色々となんて出来ない親友の、そのややこしい性格に対して。

そしてもう一つは…

「強力な好敵手出現ってところかしら…」

そう、金塊をも断つ事の出来る強さ…あるいは大金でも断てない強さで結ばれた絆を持つ…最愛の親友が、強力な恋敵として立ちふさがった事に対して。

「故に私は自身が持てる能力は全て使い、刃を落とす事にしたんだ」

「あ、だから刃が呉から離れにくいような条件を課したの？」

「そうだ…とは言ってもまだ序の口だが」

刃はとある情報を得るまでは客将でいると言っている。

そして冥琳はその刃が自分に対し好意を抱いている事を知った上で、呉に縛る為にあんな条件を課した。

客将である間に落とし、自分が刃の夢に寄り添う為の手段として。

「蘭里…徐元直、お前には負けん…軍師としても、刃の女としても…そして雪蓮」

「ん？」

「お前にも負けるつもりはないからな」

言って私の顔を真正面から見つめ、不敵に笑う冥琳。

ふふ、面白くなってきたわ。

でもね冥琳、オンナとしては今の所私が優勢なんだけど。

そこの所はどうなのかしら？

「…不意打ちの基本は知っている、その差…今夜埋めてやる」

「えっ？」

私が何を言いたいのか察したのか、冥琳は更に不敵に笑い…玉座の間を出て行った。

伝記の64 刃 部隊を持つこと（後書き）

と言う事でめーりんが動き始めました。

動の雪蓮と静の冥琳：皆様はどちらがお好きですか？

私は綺麗な巨乳のお姉さんが好きです。

伝記の65 巨乳将、刃の女縁を知ること【番外編・前編】

（冥琳 視点）

玉座の間にて雪蓮に宣戦布告をした私は、自身がより有利な状況で戦うべく…まずは敵の、他ならぬ雪蓮を含む巨乳将達…特に、あの神蓮様も所属なされておられると言う…以前記述として見た事がある、あの【刃愛豊乳連合】の情報を得る事にした。

「思春、いるか？」

「ハッ、お側に」

私が呼びかけると廊下の天井の詰め板が外れ、思春が静かに降りて来た。

「今から仕事を頼みたい…適任者はお前しかない」

「私が適任者…どのような仕事でしょうか？」

「実は雪蓮…孫策と争う事になってな…」

「…御言葉ですが冥琳様、私は孫家…蓮華様に仕える身なればその争い、冥琳様に加担する事は…」

全く、良くも悪くも真面目だな。

雪蓮と私は、口喧嘩をする事はあっても命を懸けたやり取りはしないぞ？

「そうでは無いんだ、思春」

「…と申されますと？」

「刃：呂堂と言えはおおよその察しは付くと思うが、今回：刃を巡って女として争う事になったのだ」

「……………」

おい思春、何だその『うわ、何言ってるんだこの人は』みたいな顔は。

「そこで思春、お前には：刃を共に愛でて守り共有し、有事の際には刃だけの矛となり盾となる謎の組織『刃愛豊乳連合』の調査を頼みたい：可能ならば雪蓮には内密に」

「雪蓮様にも内密……でしたら明命が適任と存じますが」

「明命では向かない：確かに明命ならば小柄で動きも俊敏、かつ雪蓮や神蓮様の勘にも引っかからないあの隠形能力ならば確かに思春を上回るだろう…だが」

明命は巨乳の女を敵視する傾向があるからだ。

以前、こんな事があった。

仕官してきた明命の技量を見る為、潜入工作が得意だと言う明命に
対し：対工作員戦闘の模擬戦になるだろうからと、文武官総出で明
命の相手をした事がある。

内容としては明命が潜む林に文武官全員で行き、一定制限の内に一
人でも明命の襲撃から逃れれば我らの勝ち：全員が襲撃されれば明
命の勝ちとしたもの。

ただし：明命から襲撃された場合、明命から罰を受けて退場となる。

「まあ言っても工作員戦闘でしょ？ 気楽に行くわよ」

と雪蓮の言葉があり、彼女と神蓮様の勘もあって『誰一人襲撃され
る事なく終わるだろう』と我らは思っていた：が。

「：ねえ冥琳、穩はどこ？」

「：何？」

気が付けば周囲に穩の姿だけが無く、その異常さに祭殿と思春が即
座に臨戦態勢へ移行する。

そしてその直後：

—ガサツ：—

「「「ッ！？」」「」」

そんな音と共に真後ろにあった茂みが揺れ、その中から：苦悶の表
情を浮かべて気絶している穩が見付かった。

「穩、しっかりしろ穩！」

「ううゝん…」

蓮華様が気付けを試みるが、効果は芳しくない。

「ねえ冥琳…これ、何かしら」

「ん？」

ふと雪蓮がそんな事を言い、穏の胸元を指差した。
見ればそこには…

『乳房を育てるより、気配察知能力を育てましょう』

…と、ご丁寧にも消しにくい墨で落書きがしてあった。

「これは…」

「酷いわね…」

一瞬の間に繰り広げられた惨劇に、雪蓮と神蓮様が顔をしかめている。
る。

「ッ！ 冥琳さま！ 祭さまも居られませんかっ！」

「何だと！？」

言った亞沙の声に、私は思わず声を張り上げた。
そんな馬鹿な。

祭殿ならつい先ほどまでそこで…

―ドサツ：―

「ッ!？」

私は祭殿がつい先ほどまで立っていた場所を見て、思わず息を呑んだ。

何故ならそこには：

『貴女の乳房は搾ると酒が出るんですか?』

：と、件の墨で落書きされ：穏と同じく苦悶の表情を浮かべて気絶している祭殿の姿があった。

その後：立て続けに神蓮様と雪蓮、そして蓮華様が襲撃を受けて脱落。

神蓮様の胸元には『その胸の中は実は戦いではなく、男性に飢えてませんか?』の文字。

雪蓮の胸には『頭で行う政務は苦手なのに、体：特に胸で行う性務は得意そうですね』の文字。

蓮華様は胸元に『貴女の胸は頭と同じく少し硬いですね』とある：しかも胸元だけではなく、衣装の都合で剥き出しの太股に『胸だけではなくお尻も存在感が大きすぎます』と書いてあった。

「明命め：何の恨みがあって蓮華様だけにこんな：」

言った思春の言葉で私は悟った。

明命は蓮華様に恨みがあるのではない。

巨乳に恨みがあるのだ。

ならば次にやられるのは私…

そう思った直後、私は首筋に軽い痛みを覚え…そのまま意識を失った。

そして気が付くと私の胸元には『貴女は策で敵を落とすのが得意なのではなく、胸で好みの男性を落とすのが得意なのではありませんか?』と書いてあった。

「……………」

もちろん、と言うか当然と言うか…小蓮様・思春・亞沙の三人は無事だったが、結果的には明命の勝ちとなった。

小蓮様は『おっぱいが小さいから狙われなかったんだろうけど、それを喜んでしまうと自身が貧乳である事を認めるのと同じなのよね』と、複雑な表情で仰っていたが。

もちろん墨文字を書かれた全員は…目を覚ました後、己の胸元や臀部に書かれていた墨文字を見て絶句していた。

蓮華様に至っては『私のお尻、そんなに存在感ある?』と半泣きになっておられたの言うまでもない。

「：明命に任命すると、調査対象全員が以前の我らのようになる危険性がある：何より相手は刃の婚約者候補達だ：婚約者の胸にそのような落書きをされた事が刃に知れてみる、後が怖くて堪らん：明命に限ってそれは無いとは言えないだろう？」

「……………」

私が言うと思春は黙り込んだ。

当然だろう：刃が本気になった場合の戦闘能力は呉の全員が理解している。

二年前なら思春でも勝てる要素はあったが、今ではまず勝つ事が難しい：ましてや勝てても甚大な被害と引き換えになる。

「：仰る通り、明命では不向きな様です：分かりました：この任務、この甘興覇が必ずや遂行致します」

「頼んだぞ」

「御意」

言っと思春は再び天井の穴へ飛び上がり、姿を消した。

「さて、男をいきり立たせる香でも買いに行くか：後は……扇情的な下着か？ うゝん／＼／」

（思春 視点）

さて、冥琳様より特命を排した訳だが：調査対象の手掛かりが少な過ぎて、何から始めれば良いのか皆目見当が付かん。

「ふむ」

刃愛豊乳連合：か。

ふざけた名称の連合だが、所属人員的戦闘能力は一国のそれを超越すると言う。

冥琳様は中でも上位に食い込むつもりなのだろうか：

「…」

大きすぎる乳房など戦の邪魔になるだけだ！

：む、思考がばらばらになっているな。

いかんいかん。

作戦に集中しなければ。

「さしあたっては建業の城下で情報収集が妥当だな」

言っ
て
私
は
自
室
へ
戻
り
、
愛
刀
で
あ
る
鈴
音
を
装
備
し
：
再
び
天
井
裏
よ
り
建
業
城
の
外
へ
向
か
っ
た
。

………

……

…

「…何なんだこれは……」

建業の城下で情報を収集していて、私は我が目を疑う物品を目にした。

それは有り得ないほど奇抜な衣装を着て、頬を染めた神蓮様。
…を模した人形が店頭に並ぶ衣服店。

私は何故かその人形こそ、件の『刃愛豊乳連合』に繋がる近道だと思ひ店主へ声をかけた。

「御免」

「いらっしやい…おや、甘寧將軍では御座いませんか？」

「うむ、少し尋ねたい事があってな」

「尋ねたい事？ はて、何でしょう」

「表の人形だが」

「人形？ 似・絡繰り孫堅將軍の事で御座いますか？」

「似？ 絡繰り？」

店主が言うには、あの神蓮様の人形だけに留まらず…この大陸には、

とある技術者が作った…本人を精巧に模した絡繰り人形があると言
う。

その精巧さたるや凄まじい物で、全身の可動により本人さながらの
迫力ある姿勢を取らせる事が可能なのはもちろんの事…首及び顔の
各部品が着脱式になっており、差し替える事で豊かな表情を再現す
る事も可能らしい。

「出回るようになったのは半月ほど前からですが、その素晴らしい
出来に感化され…最近ではその腕に覚えを持つ多くの技師が、この
人形を作ろうと努力しております…ですがそのほとんどが始祖曰く
『論外の出来』だそうで、中でもこうして自身の作った人形に『似
の字を得る事が出来る職人は極僅かだとか」

この『似』の文字は、人形の出来に応じて付けられる品質の証らし
く…店主曰く証にはその出来の良さで階級が定まっており、上から
『似』『垂^あ』『模^も』『習^{しゅう}』『贗^{がん}』となるに従い出来が悪くなると言
う。

それでも『贗』の字を得る事が出来る腕ならば、細工職人としては
十分な腕前だそうだ。

何より『似』と『垂』の間が果てしなく遠い道のりだと言う。

「私はとある人づてで偶然、この『似・孫堅將軍』をこうして店頭
へお飾り出来る機会がありまして…孫堅様の美貌は我ら一商人です
ら周知の事実、そのお美しさを貸して頂き…そして売上として倍以
上、呉と言う国へ返そうとしている次第です」

言って店主は人形を店の奥に担ぎ込み、鉄製と思われる…凄まじく
重厚な箱へ人形を収納する。

「なるほど…大事な商売道具、と言う事か」

「ええ、孫堅様よりお許しも頂いております…さて、これでこの人形の事はご理解頂けたかと思いますが？」

「ああ、良く分かった…」

「お邪魔するでー」

後はこの人形の入手経路を聞くだけ。

そう思った時だった…軒先に李典…真名を真桜が現れたのは。

「おお、これは李典様」

「ウチの『似・絡繰り孫堅將軍』はどない？」

「ッ!？」

真桜の口から出てきた『ウチの似・孫堅將軍』と言う言葉に、私は我が耳を疑った。

「って、アレ？　そこにおんのって思春はん…甘寧將軍とちゃうの？」

「おや李典様、甘寧將軍とお知り合いで？」

「ウチ自身に特別な事は無いけど、風…楽進がな」

「なるほど」

李典の言葉を聞いて納得した様子を見せる店主。

凧と私は良く手合わせをしているのだが…凧と真桜、そして沙和は同郷の幼なじみ…恐らくはその事を言っているのだろう。

…いや、今考えるべきはそこではない。

真桜がこの人形を指して『ウチの』と言った理由を聞かなければ！

「真桜、少し良いか？」

「ん？ 何や？」

「その『似・絡繰り孫堅將軍』だが…真桜が手掛けたのか？」

「せやで？ この『似・絡繰り孫堅將軍』はウチの作品や…見てみい、師匠直筆の認定書や」

言って真桜はその豊かな胸の谷間から人差し指ほどの長さしかない小さな巻物を取り出し、中身を私に見せてくれた。

それには『当書簡を持つ者、絡繰りは浪漫である事を知る者なり』と記述があり、文末には『李曼成殿へ』と書いてある。

「この巻物は師匠の氣が込められとって、精巧に書いて真似ても氣の有無で一発で嘘が分かるそうや」

言って真桜は語り始める。

自身は元々こういった絡繰りに携わるのが好きで、兵装技師として仕官した事もあるが…仕官先では兵装技師など不要とされ、仕方なく家業を継ぐ事を決めた。

当初は祖母の居住地である、故郷の邑で…絡繰り仕掛けを使った『

全自動竹籠編み機』を作り、それで作った竹籠を売る事で生計を稼ぐつもりだったそうだ。

「けどウチの婆ちゃんが『ウチの絡繰りが陽の目を見る時が来た…真桜、準備し！ ウチら一同、ご先祖様のいらっしゃる建業へ行くで！』って言うんや」

「陽の目？」

「婆ちゃんが言うには…昔、基礎だけ作った新型武器が、婆ちゃんの親友の息子の手で完成され、それがその人愛用の武器に搭載されたんやて」

「ほう？」

真桜は続ける。

「で、ウチは先日…その武器に会ったんや、使い手と一緒にな」

「ふむ」

「エエ人やったでえ？ 武器の使い方も、武器に合うた使い方しかせえへんし…何より、このウチと絡繰りの話題で延々語り合えるだけの浪漫を持つとるんや」

…真桜と絡繰り談議を延々と…か。

穂が冥琳様と、策について延々語り合ったり…祭殿が雪蓮様と、酒について延々語り合ったり出来るのと同じぐらいか。

「『絡繰りは浪漫』それがウチとその人との合い言葉や」

「なるほど…」

「で、や…その人が作った作品の一つに『絡繰り人形』があったな？
ウチ、その人形に惚れ込んでしもてん」

「……」

「作るとこの一部を見せてもらたけど、アレは凄まじいわ…流石に『胸を柔らかくする技法』は、その人の一族の秘伝らしいから教えてもらわれへんかったけど…ウチかて技師や、誇りがある…んで、五十数体の失敗作を経て…あの『似・孫堅將軍』が完成したんや」

真桜の言うその人物…便宜上『絡繰り師匠』は、真桜が独力で作り上げた人形を見て驚き…そして大いに喜んだらしい。

そうして贈られたのがこの『似』の文字で、未だにこの業界で『似』の証を持つ人形職人は真桜一人しか居ないとか。

「あの人は『真桜ならきつと後世に名を遺せる』って」

「ほう、そこまでの人物なのか…にしてもその人物、技量を見抜く目に関しては凄まじい物を感じるぞ…私も会えるものなら会ってみたい」

「…ってか思春はん、誰を偉人扱いしとん？　ウチの絡繰り師匠、思春はんも知っとるはずやけど？」

「何？　誰だ？」

「誰やって…刃の兄さんやけど」

「…何だとっ!？」

驚きつつ、ある意味納得していた。

私が持つ愛刀『鈴音』は、刃の故郷で打たれた物。
手掛けたのは刃のご両親。

これだけの傑作を作る事が出来るならば、息子である刃がその手の
技能…物品生産技能に長けていたとて不思議は無い。

「なるほどな…」

「ウチの目標は、師匠が作った『豊乳連合人形』を超える出来の人
形を作る事やねん」

「豊乳連合人形…だと!？」

真桜の言葉に今度こそ私は驚いた。

「せや…何でも刃の兄さんは、とある人達からしたら『共に愛でて
守り、共有するべき財産』らしくて…志を同じくした連中が、部族
も国をも越えて連合を発足したらしいねん…それが豊乳連合、正式
名称を『刃愛豊乳連合』って言うんよ」

「部族も国をも越えた…刃愛豊乳連合、か…」

「刃の兄さん自身もその連合員全員を好いとして、自身の自己満足
の為に連合員全員の絡繰り人形を作っとるんやけど…これがまたご
っつい出来でな」

聞けばその人形はとある場所に保管されていて、刃の許可無く近付く者は白き番人により排除されるのだと真桜は言う。

「ちなみに、その連合やけど…この国には構成員が二人と、幹部が一人おるんは知っとる？」

「何？ 誰だ！？」

「誰やて…構成員は黄蓋はんと陸遜はん、幹部は…ほれ、その人形の」

「…この人形がなん…ツ！？ まさか、連合の幹部の一人が…神蓮様なのか…！？」

「せや」

真桜の一言に私は言葉を失った。

いくら前任とは言え、一国の王であつたお方があのようないや、少し待て。

構成員として祭殿と穩が居ると言っていたな？

神蓮様・祭殿・穩…この三人の共通点は…まさか！？

「だから…刃愛“豊乳”連合と言う名称で…明命には不向きな任務なのか」

とすれば次に起こす行動は…

「…櫓元暗し、か」

眩き、私は真桜と店主へ礼を言い…駆け足で建業城へ舞い戻った。
目指すは酒蔵、もしくは厨房だ。

伝記の65 巨乳将、刃の女縁を知るのこと【番外編・前編】（後書き）

思春の言った『櫓元暗し』と言うのは、現代で言う『灯台元暗し』を後漢時代版にアレンジした作者オリジナルの諺で、辞書などには載っていないので注意を。

さて、次回は番外編後編の予定。

拙作において前後編構成となる番外編は初めてですが、現在の刃を巨乳将が知る為には大事なイベントだと思いますので…次回も乞うご期待。

伝記の66 巨乳将、刃の女縁を知ること【番外編・中編】

（神蓮 視点）

その日は朝から面白い事になっていた。

朝議の終わりがごろから始まったその騒動は、先達としての私の心を熱く揺さぶった。

雪蓮対冥琳、巨乳将の乱。

ともあれこの騒動が当事者である雪蓮と冥琳、とりわけ冥琳に軍配が上がればまた刃が持つ力は強くなる。

実の娘には少し悪いけど、貴女はもう少し『理論的な行動の仕方』を覚えた方が良いと思うの：呉の王として。

さて冥琳を追ってみたのだけど、思春に何かの調査を依頼したみたい。

刃から教えてもらった『氣による聴覚強化』を用いて、冥琳と思春の会話を盗み聞きする。

「そこで思春、お前には：刃を共に愛でて守り共有し、有事の際には刃だけの矛となり盾となる謎の組織『刃愛豊乳連合』の調査を頼みたい：可能ならば雪蓮には内密に」

：ふむ、冥琳は私も属するあの組織『刃愛豊乳連合』への参加を希望しているのね？

なるほど：あそこに属する事が出来れば、冥琳は雪蓮を差し置いても刃を愛でる事が出来る訳だし。

刃も言ってたものね：

『ここに属する人間には王家も名家名門も血筋も官位も国も部族も関係ない』

それ即ち『刃を愛でる…あるいは刃に愛してもらう事は、例えば王でも止める事は出来ない』と言う事。

まあ小帝殿下や元太守、元国王までひしめく…いわば伏魔殿、いえほうにゅうでん豊乳殿ですから。

「さて、男をいきり立たせる香でも買いに行くか…後は…：扇情的な下着か？ うゝん／＼／＼」

言って立ち去る冥琳。

そんな彼女の背中を遠くから見送りつつ、私は今後の予定を立てる。
：そう言えば今日は定例会だったかしら？

場所は…あら、好都合じゃない。

「うふふ、雪蓮の驚く顔が目には浮かぶわ…うふふっ♪」

私は定例会に手土産を持ち込むべく、まずは刃を確保するべく…朝議の話の流れで出た調練場へ足を向けた。

「脇を締めろ！」

「はいっ！ せえいっ！」

「踏み込みが甘いぞ！　ていつ！」

―バチッ！―

「きゃふっ！　ま、参りました……いたゝい」

「よし、次！」

調練場では刃がその手に何も持たず、兵士二十数人の真ん中で組み手に勤しんでいた。

見れば周囲には打ちのめされたと思わしき兵士が多数転がっており、中には息をするだけで微動だにしない兵士もいる。

刃は相手を倒す際、いずれも全員の背中に張り手を放ち……その痛みで悶絶させているみたい。

背中叩かれるのって痛いわよね、良く分かるわ……私も政務さぼった時とか、冥琳に何度叩かれた事か……

「じゅん」

「……ん？」

私は中央に居た刃を呼ぶ。

彼は私の声に気付き、手を止めてこちらへ振り返る。

「ッ！」

―ガシッ！―

……が、それを隙と取ったのか……ある兵士が木剣を振りかざして刃に

突撃を実行。

けど刃は別段焦った様子もなく、その兵士が振るう木剣を腕を掴んで止め…笑顔で言った。

「よしよし、良い判断だ…ただ、もう少し気配遮断の能力を鍛えようか…でなければ『今から不意を打ちます』って宣言してるのと同じくらい、攻撃しますよって気配が漏れてるからな」

「はい」

「んじゃちょっと休憩するか」

「「はいっ!」「」」

刃は鍛錬の中断と休憩を告げ、私の方へ歩いてくる。
するとさっきまでは居なかったはずの蘭里が突如、どこからともなく現れ刃の脇腹にぴとってする。

…凄い懐かれ具合ね。

「どうした?」

そんな蘭里を伴った刃に、今日は定例会である事を告げる。

「連合の定例会か…今日はどこだ?」

「今日は長沙なんだけど、刃にも来て欲しいのよ」

「は?」

私が来て欲しいと言うと、刃は目を丸くした。

…可愛いわね、今すぐ食べちゃいたい位。

「いやいやいや、ちょっと待て…今俺は仕事中で…あ、そうかなるほど」

「どうかなさったんですか？ 旦那様」

公衆の面前で、男を平然と旦那様と呼ぶ（見た目は）幼な妻。穂を姉さん女房だとすると良い勝負ね…胸も、奉仕度合いも。

「さっきの件、神蓮に頼むってのは？」

「…ああ！ なるほど！」

…ん？

私の名前が出てきたけど、何の事？

「ねえ刃、何の話？」

「いや何、大した事じゃないんだが…実はかくかくしかじかで…」

「…まるまるうまうま、と」

なるほど、刃にも思惑があったのね？

…これは好都合だわ。

「ならその話を受けるから、代わりに刃は今日の定例会へ参加して頂戴…他の奥さんたち、放っておいたら可哀想でしょう？」

「いや、まあそれもそうなんだが…」

「それに私からも連合員として推挙する娘の情報があって、その情報を連合に上げていかなくちゃ」

「オイ、ちょっと待て…誰を推す気だ？」

「うふふ、まだ秘密よ♪ 刃の基準としては十分に合格なはずだから…まあ詳しい話は現地で、ね？」

こうして私は刃から、刃が指揮する精鋭部隊五十人の副隊長となった。

元王とは言え今の私は呉の将ではない。

蘭里ちゃんの話によればこの話を出したのは冥琳なんだけど、部隊編成に際しいくつか条件を出してみたいで…その中の一つを達成する為に、白羽の矢を立てれる人物を探していたところだそうなるほど、私を副隊長として採用すれば冥琳の出した条件に引かかることなく…むしろ達成できる、と…考えたわね。

「わかった、じゃあ先に済ませる事を済ませておこうか」

「なあに？」

「隊員に神蓮を副隊長として採用・任命した事を言っておかなくちやな」

「それもそうね」

そんな私の言葉に応じ、刃は蘭里へ目くばせする。それを受けて刃の脇腹から離れる蘭里。

「…集合！」

―ダダダダッ！―

―ザッ！―

「」「」「ハッ！」「」「」

調練場の中央へ舞い戻った刃がそう声を張り上げると、今までだらだらしていた新兵達が一斉に立ち上がり…そして刃の前に集合する。
…凄まじい調練精度ね…祭ですら投げ出しにかけていたこの女性新兵達を、僅か数時間足らずでここまでまとめ上げるなんて…刃、貴方やっぱり人の上に立つ才能…あるわよ？
管輅の予言通りに。

「さて…呉の将来を担うであろう君達へ、俺の部下として新しい上官を紹介する…孫文台殿だ」

「知ってる子も多いでしょうけど改めて…今回、呂堂隊長が指揮官を務めるこの隊の副隊長となった孫文台よ、呼ぶ時は孫堅副隊長か文台副隊長と呼んでちょうだい…みんな？　よろしくね？」

「」「よろしくお願いします！　孫堅副隊長！！」「」

「今の俺が立場上は客将で、君らを最後まで見届ける事が出来ない状況にあるのは調練前に話した通りだが…俺が呉を抜ける事となった場合は、この孫文台殿を最上位として指示を仰ぐように！」

「」「御意！」「」

うわあ、相手はたったの五十人だけど…それでも言いたい事を端的にかつ的確に言う刃、カッコイイわあ。

可愛さとカッコよさが同居…ううん、お姉さん困っちゃう。

けれども戦場と寝台の上では一騎当千の豪傑…ううん、お姉さん痺れちゃう。

「じゃあ孫文台副隊長にも一言頂こうか」

…あら、私にも一言言わせるのね？

分かったわ…元国王の演説、見せてあげるわ。

「紹介に預かった孫文台だ…聞けい呉の将来を担う精鋭たちよ！

貴殿らは選ばれし強者への道を堂々と歩いて行ける資格を手にして
いるのだ！ 貴殿らの前にある道は長く、辛く、険しい道だ…しか
し耐えよ！ 耐えて耐えて足掻き続けよ！ さすればその双肩に呉
の未来を担える日が必ず来る！ この孫文台が孫家の牙門旗と真紅
の呂旗に賭けて約束しよう、貴殿らに栄えある未来があらん事を！
！ 未来を呼ぶ為の勝鬨を上げえい！」

「「「「おおおおおおおおおおおっ！！！！」「」」」」

ふと目線を横へ向ければ、まるで『やるじゃないか』と言いたげな
目をした刃の視線とがち合った。

私が微笑みを返すと、刃もまた微笑んでくれた。

私だって出来るのよ？

以心伝心ぐらい。

「さて…紹介も終え、氣勢の上がつている所を申し訳ないんだが…
今日の調練はこれにて終了とする」

「「「はっ！」「」」

「本当はこんな事態、あっちゃいけないんだけど…私も呂堂隊長もこれから別働隊の定例会で長沙まで行く事になってね…初日で私達が居ないからって怠けたりしない事！一人で出来る事もあるし、仲間を誘えばそれだけで出来る事は増えるんだからね？ 日々鍛錬を怠らないように…でも無理は禁物だからね？」

「「「御意！ 呂堂隊長、ご指導ありがとうございます！ 孫堅副隊長、ご指導ありがとうございます！」」」

そう叫んで彼女たちは去って行った。
これからが楽しみね。

「じゃあ行こうか」

「そうね…」

言って私たちは定例会へ向かう為、建業の城を後にした。

門番に話を聞くと一刻前に祭と穏が『長沙へ行く』と言って門を出た事が分かった。

さて、私の勘によるともう一人…いえ二人、長沙へ向かうと思うんだけど…あ、門番へ言伝を頼んでおこうつと♪

…どうなることやら、うふふっ♪

（思春 視点）

それから急ぎ足で建業城へ戻ってきた私だったが、調べる限りでは酒蔵にも厨房にも神蓮様のお姿を確認できなかった。

近くの者に話を聞くと、どうやら朝議を終えてすぐ…刃を探しに訓練場へと向かったらしい。

刃と一緒か…これは好都合だ。

そんな期待を胸に訓練場へ到着したのだが、神蓮様はおろか刃の姿もない。

あったのは思い思いに鍛錬をしている、五十人ほどの新兵のみ。

「おい、そこのお前」

「はっ！ ご苦労様です、甘寧將軍！ 何かご用でしょうか！」

「神蓮様…いや、孫堅様を見なかったか？」

「孫堅様ですか？ 孫堅様でしたら呂堂様を伴って長沙へ向かわれましたが…」

「何だと!？」

…私は後何回、この言葉を発するのだろうか。
内心そんな事を思いつつ、兵に先を促す。

「長沙で開かれる、別働隊の定例会へ出席されるそうで」

長沙で別働隊の定例会？

聞いていないぞ？

いや待て、可能性の話をするならば件の連合員が集まる会合なのかもしれない。

『別働隊』と言う言葉が『連合』と言う言葉の隠語ならばあるいは…。

断言は出来ないが可能性の否定も出来ない。

「長沙だな？」

「はっ」

これは拙い。

神蓮様の性格を考えるなら、既に長沙へ向かっておられるはずだ。

冥琳様へ知らさなければ。

「この事を冥琳様へ…」

そう思い、踵を返した私は一路…冥琳様の私室へ向かう。

この任務ももうすぐ終わりだが、気を抜かぬようにせねば。

（冥琳 視点）

「ふむ、こんな物か？」

部屋の入り口に鍵をかけ、私は寝台の上に並べたそれを検分していた。

寝台に並べられたのは、神蓮様ご贔屓の衣服品店で購入した下着の類。

店頭我真桜作の人形を飾る事を…神蓮様直々に許可されただけあり、品揃えは豊富と言う言葉に留まらない。

中でもこうした下着の類は他では類を見ないほど多く…外見だけでは用途の説明出来ない下着だって売っている。

「私としては黒が好みなのだが…むう、迷うな…」

その中でも、手にした黒の下着と白の下着で私は頭を悩ませていた。

黒は店主曰わく扇情的、白は店主曰わく清楚らしい。

「いつもは黒だが、今日は白にしようか…ん？」

黒を置いて白を胸へあてがい、姿見の前で思案に耽る私だったが…天井裏に奇妙な気配を感じた。

「誰だ？」

「……私です」

「思春か…報告だな？」

「はっ」

天井に仕込まれた嵌め板が動き、そこから思春が降りてくる。
顔が心なしか焦っている風に見えるが、何かあったのだろうか？

「何か掴めたか？」

「はっ…私が調べたところによりますと、件の組織は今宵…長沙にて定例会なる物を開催するそうです」

「長沙で定例会？ 参加者は？」

「神蓮様と刃が出席する可能性があります…また、神蓮様は当該連合の呉派幹部で、祭殿と穩が連合員として名を連ねています」

「…ふむ」

神蓮様が連合員なのは知っていたが、祭殿と穩も連合員だったか。
ならば先ほど連れ立って『遠乗りをしてくる』と言ったのは、恐らくだが会合へ向かう為だろう。

「神蓮様と刃は？」

「それが、私がその話を聞いた時には既に姿が無く…」

拙いな。

急がなければ…

「思春、人事緊急任命でお前を蓮華様護衛の任から一時的に解く」

私には雪蓮が呉王を継いだ際、雪蓮から人事緊急任命権を貰っている。

この権限は『元に戻す事を条件に、一時的な人事異動を許可し、それを一任する』と言う物で：その発動は雪蓮に、呉王にすら阻害出来ない。

まあ呉王を相手取って臨時職へ任命は出来ないが。

「御意、拝命します」

「そして、一時的にだが新たな任を与える：私の護衛だ」

「御意：蓮華様には何と？」

「急ぎの事態故に書付で明命に任せる事にしよう：馬を用意してくれ、すぐに出立するぞ」

「はっ！」

言って立ち去った思春を見送り、私は書簡を準備する。

「内容は……」

私は筆と硯を用意し、書簡へ記す文面を考える。

雪蓮の目に留まる事も考え、不審な点が無いように書く必要があるな。

「えっと……」

長沙近郊にて黄巾賊と思わしき連中が決起を試みていると言う報告

を受けた。

場合によっては討伐戦の実施もあり得る為、手空きの将であった刃及び祭殿と思春…軍師として私、穩の派遣を決定した。
なおこの作戦で思春が一時的に蓮華様のお傍を離れる為、臨時の護衛として明命をその任に命ずる。

「……これで良し」

私は同じ内容の書簡をもう二卷用意し、内一つを明命の私室へ…もう一つを雪蓮の執務室へ、私が外出した後届けるよう女官へ指示…身支度を整え、部屋を後にしたのだった。

伝記の67 巨乳将、刃の女縁を知ること【番外編・後編】（前書き）

本当は【起・承・転・結】で4部構成にしようと思いましたが、それをするに4部じゃ収まりきらないぐらい書きそうなので、いつもの如く後編だけが大ボリュームと言う様式美で決着としました。次話からは本編へ戻る予定です。

伝記の67 巨乳将、刃の女縁を知ること【番外編・後編】

（思春 視点）

それからしばらくして：私は冥琳様を護衛しつつ、件の連合が定例会を行うと言う：長沙の街の外れにある、外装全てが赤い：巨大な屋敷が見える場所までたどり着いた。

建業を出る際、何故か門番が：「私」と「冥琳様」が長沙へ向かう事を知っていたのだが、何故なんだろうか。

冥琳様は『恐らく神蓮様の口添えがあったのだろう』と仰っておられたが、勘だけでこうも的確に“我々”が長沙へ向かう事を察知出来るのだろうか？

「あのお方や雪蓮の勘に関しては、深く考えると負けだぞ」

「はあ…」

「どうしても言うなら『神蓮様だから仕方がない』『雪蓮だから仕方がない』と思えば良い：その方が精神的疲労は少ないからな」

「…なるほど」

「っと、多分ここだな」

そんな話を話す内に目的の屋敷へ到着したようだ。

屋敷は高い壁で囲われており、貴族や豪族の屋敷を彷彿とさせる外観をしており：入口と思わしき場所には剣兵・槍兵・斧兵・と言っ

た歩兵達が詰めており、何人たりとも通さぬと言わんばかりの警備をしている。

「…入口上部に『豊双山館』の看板、戸口に真紅の呂旗…間違いない」

言って冥琳様が馬から降り、屋敷に近付く。
だが門番は冥琳様を通さなかった。

「お待ち下さい」

「当館への立ち入りは関係者以外ご遠慮下さい」

「冥琳様、お下がり下さい…ここは私が」

「あら、やっと到着したのね？」

目的の為ならば手段は選ばぬ。

例え相手が事情を知らぬ傭兵だとしても、任務の為ならば私が排除してやる…そう思い、鈴音を構えて冥琳様の前に出た私。

しかしそんな私の耳に聞き覚えのある声が聞こえた。

私は臨戦態勢を解かぬまま、声の主を見て…

「ッ!？」

絶句した。

「しえ、神蓮様!？」

眼前にてにこやかに佇むのは、我らが孫呉の前王にして…今回の任務における調査対象である『刃愛豊乳連合』の呉派幹部、真名を神蓮こと孫文台様その人だった。

「神蓮様…」

「色々聞きたい事があるって顔ね？」

言って、困ったような表情をする冥琳に笑みを投げかける神蓮様。

「流石に、と言ったところでしょか」

「まあ詳しい話は中でしましょか…いらっしやい」

聞きたい事があるのだなと言う質問に対し、流石にと言う言葉で肯定した冥琳様。

そんな冥琳様を見て、神蓮様はなお楽しげに…ついて来いと踵を返し、館内へと戻って行く。

気が付けば周囲の衛兵達に漂っていた危機感は霧散しており、内何名かは最初に見た時と同じように再び見張りの任に戻っていた。

そんな衛兵達の間を縫うようにして冥琳様と歩き、我らは屋敷の入口を潜る。

そして通された広間には、まさしく『豊乳連合』の連合員と名乗るに相応しい女達…いや、見た顔の中には武将も居るから巨乳将達と呼ぼう…が、奥に据え付けられた玉座に座す…刃と楽しげに話をしていた。

「これは：凄まじいな：物凄い面子、しかも全員が全員私や雪蓮並：もしくはそれ以上の豊かな乳房を有している：なるほど、明命に言わなくて正解だったな」

そんな冥琳様の言葉を受け、私は連合員と思わしき者達を見渡した。

確かに大きい。

中には大きいと言う言葉では収まりの付かない者もいる。

「さてこれで全員ね？ 始めるわよ」

何を食えばここまで育てられるのか：等と言った間抜けな内容の考え事に耽っていたその時、神蓮様から凜とした声が発せられ：それまで和氣藹々としていた雰囲気が一瞬の内に厳かな雰囲気へと変わった。

見れば玉座に座る刃もそれまでの楽しげな表情を消し、堂々とした：まるでかつて王位にあった、神蓮様のような表情をしている。

「さて今回は私が音頭を取る定例会なんだけど、我らが連合に新しい同胞を加えたいと思うの」

「ほう？ 神蓮ほどの者が、自ら入りたいと？」

神蓮様の事を真名で呼んだ事に反応し、反射的に鈴音を抜こうとする。

だが神蓮様の事を真名で呼んだその者は、私を一瞬だけ睨み付ける。ほんの一瞬。

しかしそれだけで私は、その者の発する眼力に吞まれてしまった。

アイツ、出来る。

「それは…そこに立っている、黒髪褐色肌…眼鏡の麗人の事か？」

続けざまに口を開いたのは、私も見た事がある者だった。

名を華雄。

都は洛陽、靈帝のお膝元で武を振るう武將。

戦にも出やすい真っ直ぐな性格で、策に従わない事も多い為に『猪武者』などと呼んで蔑む者もいるそうだ。

「そうよ、紹介するわ…彼女は姓を周、名を瑜…字を公瑾と言う、我ら呉の筆頭軍師よ…冥琳、いらっしゃい」

「は、はあ…」

神蓮様の言葉に従い、冥琳様が一同の前へ歩み出る。

そして周囲を一度だけ見渡したのち、堂々とした態度で自己紹介を始めた。

「紹介に預かりました周瑜、字を公瑾と申します…神蓮様、いえ孫堅様が呉王の頃より軍師を務めさせて頂いております…宜しくお願い致します」

「みんなも自己紹介しましょうか、今日が初見の子もいるでしょうし」

「なら済み順でいこか？」

言って立ち上がった、紫髪の…どこか猫を彷彿とさせる女がそう言

う。

みな一様に頷く辺り、反論は無いらしい。
済み順とは何の順なのだろうか。

「つて事でウチから：ウチは姓を張、名を遼、字を文遠：得意な得物は偃月刀で銘は飛龍偃月刀、人呼んで『神速の張遼』とはこのウチの事や！」

「ならば二番手は私だな：我が姓は華、名は雄、字は牙遠と言う：得物は金剛爆斧と言う大斧だ：宜しく頼む」

張遼に華雄か：洛陽を守護する神速の偃月刀に、白銀の大斧か。
名前だけならば建業までその名が響いているな。

そして神蓮様の真名を無断で呼び、私を眼力で抑え込んだ女が立ち上がり：口を開いた。

「次はわしかのう：わしは厳顔、字を竜胆と言う：得物は豪天砲と言う絡繰り仕掛けの道具か弓じゃ：成都にほど近い邑で太守を務めさせてもらっておるよ」

なるほど、厳顔と言うのか。

それにしても大きい。

大ききだけならば祭殿に引けを取らないのではないだろうか。

「私は黄忠、字を漢升と申します：得物は銘を鷹鵬と言う弓、桔梗：厳顔の友人で、厳顔と共に刃君の弓の師匠を勤めさせて頂いておりました」

この黄忠殿も祭殿並に大きいな：。
厳顔と並んで刃の弓の師匠か。

「……呂布、字は奉先……刃兄の従妹、武器は方天画戟……よろしく……？」

次いで立ち上がり自己紹介をしたのが……全身の傷跡を消した刃を女体化したような女。

だがコイツが……コイツがあゝの飛將軍、呂奉先……だと!?

加えて飛將軍が刃の従妹!?

バカな……それだけで呉を滅ぼせるではないか……。

「次は妾達かのう？」

「そうだ……しかし我らは……」

「まあこの場なら問題はあるまい……我が姓は劉、名は弁……字は彩矢……得物は短刀じゃ」

「私は姓を劉、名を協……字を魅奈と言う……得物は短刀、照……弁と同じ短刀だ」

——ガタッ!——

——ガタガタッ!——

お二方の名前を聞いて、座っていた椅子から転げ落ちる者が数名。当然だろう……この方々は本来、我々武將等では到底……御姿を見る事すら叶わない御人なのだからな。

「この二人が小帝殿下で、こんなところに居ると知れば当然の反応だよな……神蓮もずっこけたんだっけ？」

：私だって失神しそうなのを、拳を握る痛みで耐えているんだ。
しかし小帝様：この中で最年少でしょうが、それでもなお立派な双
子山はどのようにしてお備えになられたのでしょうか？
願わくばこの甘興覇にご教授を…。

「次はワタシだな：ワタシは魏延^{ぎえん}、字は文長^{ぶんちやう}：桔梗様、いや嚴顔様
が配下で二番弟子：得物は鈍碎骨^{どんさいこつ}と言う鉄棍だ」

：おほん。

先ほどの呟きは忘れてくれ。

：無理だと？

貴様：鈴の音を標に三途へ渡してやろうか？

「焰耶^{えんや}の次なら私ね？ 姓は孫、名は堅、字は文台：得物は剣なん
だけど、娘に王位と一緒に渡したから今は無手：前呉王よ」

「次は私です。姓は陸^{りく}、名は遜^{そん}、字は伯言^{はくげん}：得物は九節棍の紫燕^{しえん}、
冥琳様の下で軍師として働いていますう」

「そして儂だな：儂は姓を黄^{こう}、名を蓋^{がい}、字を公覆^{こうふく}と言う。得物は多
幻双弓^{んそつきゆう}と言う弓と、近接戦闘用の剣：好物は刃と酒と…それに戦い
じやな、よろしく頼む」

この三人に関して私見は省いても構わんだろう。

まあ穩^{えん}（陸遜）と祭^{さい}（黄蓋）殿の胸は、先の嚴顔と黄忠殿に匹敵す
るぐらい大きいとだけ言っておく。

「…となれば最後は私でしゅ！ わわわ…囁んじやいましちや」

「……」

今のは…舌を噛んだのか？

緊張するぐらいなら誰かに代弁を…大きい！

今日見た中で最も大きいな、あの少女の胸は。

「蘭里、大丈夫だ…落ち着いて行け」

「はい旦那様…では、おほん！ 私の姓は徐、名は庶、字は元直と申します…基本的に文官ですが、有事には武官として動けます…得物は剣、よろしくお願いしましゅ！ …あう」

徐元直！？

水鏡女学院の二大傑物である、伏竜・鳳雛の同期で先述の二人を上回る智謀を誇る…あの『星摺』がこの連合に…

「さて、これで全員ね…じゃあ本題、今回の定例会なんだけど…刃？ 貴方、女縁の相と言う言葉を知ってるわよね？」

―ガタガタッ！―

神蓮様の言葉を受け、刃が玉座から転げ落ちた。

女縁の相？

聞いた事がない言葉だな。

「何で神蓮がそれを知ってるんだ？」

「あの、神蓮様？ その…女縁の相とは一体…」

「そうね、説明しておこうかしら…人間には定められた生き様が、人相となって現れる事があるの」

神蓮様は言う。

例えばそれは、世の乱れに応じて顕現し…乱れを総て覇を唱える『霸王の相』

例えばそれは、その心の清さが人心を掴み…やがて人の上に立つとも仁に生きる『仁王の相』

例えばそれは、手堅き行いにより大衆を導き…逆境にあっても賢き王となる『賢王の相』

「まあみんなにも聞き覚えがありそうな相と言うなら『水難の相』や『女難の相』ぐらいかしら…」

それなら聞いた事がある。

我ら呉軍水兵には昔から暗黙の掟があり…それは、これまで一度でも水難の相があると言われた者は入軍出来ないと言う物。

これは初代呉軍水兵の総大将となったお方が、出先の港で水難の相を言い当てられ…帰りに船が沈んだ事が由来とされる。

以来我ら呉軍水兵の間では水難の相持ちは忌避すべき存在としているのだが…

「この『女難の相』だけど…定義的には『その行いにより女性絡みの問題を多く被る相』なんだけど…これを逆転させたような相が『女縁の相』なのよ」

「女難の相を逆転？　　どない言うこっちゃ」

「刃兄のとーさんが言ってた…『女縁の相…それは男なら誰しも羨

む物で、己の好みの女性が…自分からは特に何もしなくても側へ寄ってきて、気が付くと深い間柄になっていると言う相なのだ』…って」

神蓮様の言葉に対し張遼が質問を投げかけ、それに呂布が答える。
なるほど…女にとっての誘蛾灯と言う訳だな。

「なるほどのう、さしずめ『好色王の相』とでも言うべきか」

「好色王ね、確かに好色だわ…それも巨乳限定の」

「巨乳好きで何が悪い！ 女の子の大きな胸には、男にとっては必要不可欠な物が詰まってるんだ！！」

黄忠殿の声に対し、刃は立ち上がり…胸の前で拳を握ってそう叫んだ。

女の大きな胸には男にとって必要不可欠な物が詰まっている…言いて妙だが、本心を言えば女の胸には乳が詰まっているのではないのか？

「それに、俺に巨乳の魅力を教え込んだのは紫苑さんでしょうが！」

「あらやだ…覚えてたの？ 恥ずかしいわ／＼／」

「人を酔い潰して襲って喰らい、桔梗さんと一緒になって朝までくんずほぐれっ…おかげで、美人でも胸が小さい子には何の反応も示さなくなりましたが！？」

「まあまあ、刃君も楽しんだのだから良いじゃないの…」

「アンタ人妻だろう!？」

「元、ね？」

「ついでと言っただが、わしの処女かて貪り食ろうたろうに：翌日は腰の痛みで大変だったんじゃないぞ？」

「うがー！ー！ーっ！」

黄忠殿と厳顔の言葉を受け、顔を真っ赤にしながら頭を掻き毟る刃。これがコイツの素なのか：子供ではないか。

こんな男のどこに惚れる要素があると言うんですか？
神蓮様、それに冥琳様も。

「なるほど、せやから二回目ん時はウチの胸ばかり責めた訳やねんな？」

「羽織と袴はそのままで、サラシだけを肌蹴させて胸で逸物を扱く：何とも趣味的だと思った物だ」

「そのまま舌で舐めてあげても悦びますよ？ 旦那様は」

「そりゃ蘭里の舌技だと大概の男は堕ちると思うが？」

何なんだ、この破廉恥な会議は：もはや会議ではなく、ただの猥談ではないか。

頭がおかしくなりそうだ。

「ははははは、刃の巨乳好きにも困った物じゃのう」

「何を他人事みたいに言ってますか祭さんは！ 俺の逸物、胸に挟まれずに目を覚ます日がなかったんですが！？」

「そうよねえ…起こしに行った明命が発狂してた物ね…『巨乳死すべし！ 祭様！ 穩様！ お覚悟を〜！』って」

「ほう？ 穩もやっておったのか？」

「旦那様の逸物はあゝ、私のここに挟んでおくのが一番安全かと思いましてえ〜」

言って自身の巨大な胸を下から持ち上げ、刃に見せるように揉み始める穩。

なるほど、それで書庫への立ち入り禁止令が解けたのか。

うえたけもの
発情した穩を鎮められる存在がそばにいるから…

「とまあこんな状態だけど話を戻すわ…：私は自身がこの連合の存在を知り、そして入る事を決めた際に『呂堂 戦牙』と言う人間を興味本位で占ってもらい、刃が女縁の相を持ってる事を知ったのよ」

「その後…刃が女縁の相の手助けもあり、妾達を含む…好みの女子おなじを次々と囲い始めた事を知ったのじゃな？」

「仰る通りです、劉弁様…：ですが私は…囲われた女の子達を見て、ある事に気が付きました」

「ある事とは？」

「はい、劉協様…：ここには元太守や元国王…小帝殿下と言った様々な人間がいます…ですが、全員を刃配下の将と見た場合…ある役

職の人間が足りていないのです」

「ある役職の人間？　　なんや、それ」

「軍師よ」

「軍師？」

「そうよ…これを見て頂戴」

神蓮様は服の袖口から一巻の書簡を取り出した。
それには『連合内適性表』と題が付いている。

「これは…」

「なるほど、確かに…」

私も冥琳様の後ろから、覗き込む形でその書面を見せてもらう。
そこには次のような記述がなされていた。

張遼…適性…騎兵・指揮官、軍配置…前線

華雄…適性…歩兵（斧）・騎兵、軍配置…前線

黄忠…適性…弓兵、軍配置…中局

嚴顏…適性…弓兵・指揮官、軍配置…中局

呂布…適性…歩兵（槍）、軍配置…前線

劉弁…適性…無し、軍配置…不可能

劉協…適性…無し、軍配置…不可能

魏延…適性…歩兵（棍）、軍配置…前線から中局

孫堅…適性…歩兵（劍）・指揮官、軍配置…前線

陸遜…適性…歩兵（棍）・指揮官、軍配置…後局・軍師

黃蓋…適性…歩兵（劍）・弓兵、軍配置…前線から中局

徐庶…適性…歩兵（劍）、軍配置…全距離・軍師

「歩兵・騎兵の割合や武器配分はどうとして、これだけの人員を纏め…かつ戦時に効果的な作戦を立てようと思ったら、どう考えても軍師が足りないのよ」

「…なるほどのう、堅殿の考え…この老軀にも読めたわい」

黄蓋殿はよく、自分の事を『老軀』『老骨』『年寄』『老いぼれ』などとお年を召された発言をする事がある。

若輩の自分から言わせてもらえば、まだまだ十分に若いと思うのだが…その手の話題をしようとする決まってはぐらかされる。

「…刃の軍師陣に美周朗びしゅうろうを加えようと、そう言った腹積もりなのだな？」

聞きなれない言葉だろうから説明しておく、黄蓋殿の言った『美周郎』とは冥琳様の二つ名だ。

私としては冥琳様は女性なのだから、男性称である“郎”を変えて『美周嬢』が良いと思うのだが。

「そうよ：筆頭を誰にするかは後に当人同士で話し合ってもらうとして、私の考えでは冥琳・穩・蘭里ちゃんの三人を刃の軍師に据えたいの」

「ですがその場合、稟殿りんと風殿ふうはどうするつもりです？ あの二人も刃兄様の後宮構成員に加わりたいたっていた気がしますが」

魏延の説明によれば、現在は在野の将として郭嘉かくかと程伊ていと言う人物がおり：この二人もこの連合へ加わりたいたっているらしい。

「刃の説明によれば稟ちゃんりんと風ちゃんふうは今の所『軍師見習い』でしょう？ けどうちの冥琳は呉の筆頭軍師：優先順位で言えば冥琳が先よ」

「では麗羽さんれいはと斗詩さんとし：袁紹さんえんしょうと顔良さんがんりょうはどうするんですか？」

袁紹だと！？

我々より揚州を取り上げ、我々を苦境へ追い込んだあの袁術の従姉か！

それに顔良と言えば袁紹の腹心ではないか！

刃、貴様：

「ちょっと待て神蓮に蘭里：まず神蓮、今更だが冥琳の意思はどうなる？ 俺個人の主観で言えば冥琳は十分に射程圈内だが、互いが

合意しないと話にならんぞ？ それに蘭里、あの二人は到底無理だろ…それこそ戦でも仕掛けて滅ぼし、その上で行かなきゃならんぞ…普通に考えて、自身の居場所を滅ぼした相手に靡く女がいるか？ まさか冥琳に麗羽と斗詩を、襲った後で説得しろとは言わないだろうな？ 俺も無理矢理は嫌だぞ」

「私としては無理矢理、襲って頂いても構わないんですが」

刃の意見に対し、異口同音な返答を返すのは穏と徐庶の二人。

…この二人の頭の中は一体どうなっているんだろうか？

ともあれ今の私は冥琳様の護衛…冥琳様の意見を聞き、冥琳様から許可が出なくば発言もできない。

そう言った意味を込めて冥琳様を見たのだが…

「……………／／／」

当の冥琳様は頬を染めておられた。

まさかとは思うが…

「まさかとは思うが…」

おい刃、それは私の台詞だ。

「刃は、私が連合へ加わる事に反対なのか？」

…それは爆弾発言と言う物です、冥琳様。

伝記の68 刃、黄巾討伐に赴くのこと（前書き）

本文中に何度か孫子の文言を記載しておりますが、解釈は作者独自の物で正典を批判する物ではありません…また、盗作ではありません。

伝記の68 刃、黄巾討伐に赴くのこと

（刃 視点）

結局、自分の性癖フエチズムに抗う事が出来ず：俺は冥琳の連合入りに納得すると同時に、彼女と男女の仲になった。

雪蓮と冥琳は義姉妹の契りを交わした仲らしいのだが、その事を冥琳に聞くと『確かにその通りだ』と肯定してくれた。

さて、ここでちょっと考えてみようか：俺。

雪蓮と冥琳は義理だが姉妹：両方食った↓姉妹丼。

雪蓮と神蓮は実の親子：両方食った↓親子丼。

結論……ヤバいな、俺。

これが生前で、及川辺りに知れたら間違いない殺しに来るだろうな……
てんせいまえ

『リア充逝ねや！ いやむしろワイが逝かしたるわっ！ 仲間内（自分・刃・一刀）で真っ先にチェリーを卒業するだけでも許せんに、何を姉妹丼まで食うとんのじゃあっ！ 派手に死にさせやあつ！！』

とか何とか言いながら。

ちなみに冥琳だが：普段見せている計算高く思慮深い冥琳は、閨の

中にはおらず：居たのは、恥ずかしがり屋で純情な女の子だった。
胤を受け入れるに値する“男”の絶対数が少ないこの世界：多くの
女性が閨でも優位に立つ中、冥琳のように男に任せてくれる女性は
貴重だと思う。

まあ他にも、その場に居並ぶ巨乳爆乳魔乳を貪り食らい：寝所無双
乱舞をやらかした俺。

冥琳も2回目以降は慣れたのか、自身がリードを取っていたが：初
回の初々しい冥琳カムバック。

そんなこんなで寝所無双乱舞をやらかし、武力換算なら三國無双の
呂布すら瞬殺出来る大ハッスル振りを発揮した俺だが：最後には動
く事すら出来ないほど疲弊していた。

この世界で初めて、俺は自身の体力・精力限界までロマン砲を撃ち
切ったのだ。

先述の通り流石に終盤は相手に任せたが、1人頭平均で7発：我な
がらビックリだ。

そうして全員が千鳥足になりつつも定例会は終わりを迎え：俺はみ
んなに對しあれこれ話した後、現行最新の『刃愛豊乳連合加盟者証』
を発行：同時に持ち込んだポラロイドカメラ（説明は簡単に終わっ
た）で一同それぞれの写真を取って解散：俺は呉勢（神蓮・祭さん・
穂・冥琳・思春）に蘭里を伴い：夜半過ぎ頃、建業へ帰着した。

途中：思春の顔が異様に赤く、どうしたのか聞いても口ごもる始末
：問い詰めようとしたが、神蓮に『おおよその想像は出来るけど、
思春が自身で気持ちに踏ん切りを付けなくちゃ』と言われた為に、
それ以上の追及を止めたと言う一幕もあった。

：俺の無双乱舞を覗き見てたんだろうか？

さて：離れたのはたった数時間だと言うのに、やたらめったら懐かしい雰囲気を感じさせる建業城だが：帰ってからも一段と大変だった。

まず冥琳は痛む腰を引きずって、思春を自身の護衛から孫権の護衛に戻し：明命を再び隠密に戻す。

直後に思春は姿を消した為、先ほどのアレは孫権補正が外れていたせいだと考える。

祭さんは情事で消費した：自身及び呉勢と俺&蘭里の体力を回復すべく、疲れた体で大量の夜食を作ってくれた。

祭さん特製の青椒肉絲は実に美味しかった。

：青椒肉絲を見た冥琳が微妙な表情をしていたが、何かあったんだろうか。

神蓮は食事により体力を回復した穏と蘭里を伴い、定例会に参加したが為に冥琳が処理しきれなかった仕事を消化する。

執務室で繰り広げられる：艶々になった神蓮と穏と蘭里による、落款無双乱舞。

書簡が乱れ飛びつつも、キッチリ整理されていく様は見ていて圧巻だった。

そして：一番大変だったのが、やはりと言うか何と言うか：留守番となった雪蓮の相手だった。

彼女は俺達が帰着するのを待ち望んでいたようで、見れば顔は赤く

…周囲には無数の酒樽が転がっていた。

どうやら俺達が居ない事を知り、退屈しのぎに酒を飲み始めたが…待てど暮らせど戻らない俺達に業を煮やしたのか、玉座に陣取って1人ヤケ酒を始めたらしい。

転がっている酒樽のいくつかには、俺がこの世界向けに手がけた…桔梗さん謹製のエールの樽も転がっている。

あれのアルコール度数は、この世界で親しまれている酒より数段強い…つまり泥酔状態にあるらしい。

冥琳並びに俺達を見つけた雪蓮は、とんでもなく酒臭い状態で冥琳へしなだれかかり…

「めくりんおそ〜い！　こんらじかんまれらりやつれらによよお〜！」

…と、呂律の回らない口調で冥琳に絡み始めた。
ちなみに今のは『冥琳遅い！　こんな時間まで何やってたのよ！』だ。

「済まん雪蓮、賊討伐の事後処理が思いの他手間取ってな…文官ではないのに刃や祭殿にも手伝って貰ってたんだ」

漂う酒臭に若干顔をしかめつつ、平然と嘘を言う冥琳。

「わらひなんてめくりんらひいないから、ひろりれおひゃけのんれらによよ？」

訳…私なんて冥琳達居ないから、一人でお酒飲んだのよ？

「分かった分かった…次はしっかり付き合ってやるから、少し離れてくれ…湯浴みがしたいんだ」

「ぶうぶう…あうっ」

―コトツ…―

「「あ…」」

赤い顔をしたまま頬を膨らませ、雪蓮は冥琳から離れる…が、その際にフラついた雪蓮が冥琳の服の袖口を掴み…中に入っていた書簡を床へ落としてしまう。

「にゃんらおひたわよ？（何か落ちたわよ？）」

「それは！」

…刃愛豊乳連合加盟者証…ッ！　ちよつと冥琳！　何よこれ！」

ヤバいと思ったのだが時既に遅し。

落ちた書簡…連合加盟者証…を手にとった雪蓮は、へたり込んだまま中身を読み…そして一気に酔いを覚ましたらしい。

「『周公瑾、真名を冥琳…汝を刃愛豊乳連合の一員と認め、国や役職を越えた愛を育む事…劉弁並び劉協の名においてここに認める』
って…ずるーい！　ずるいずるいずるーいっ！　何で私だけ仲間外れにするのよーっ！」

…加盟者証を見られたらこうなると予想はしていたが、本当に予想を裏切らないな…雪蓮は。

「母様が連合の呉派幹部って…」

「だから言っただろう？ 『その差は今夜埋めてやる』と」

「うあゝん！　じゝんゝ！　めゝりんが、めゝりんがゝ！」

―がしっ―

「おわっ！」

冥琳にトドメを刺された雪蓮は、目尻に涙を浮かべて俺に飛び付いてきた。

「私も連合に加えてよおゝ！　加えてくれなくちゃやだあゝ！　私だけ仲間外れにしないでよお、私も抱いてよおゝ」

言いつつ胸を俺に押し付け、必死のアピールを敢行する雪蓮。エロンリークリーチャー再び。

雪蓮がエロンリークリーチャーと化すのを再び見た、他の一同は呆れ顔。

これが江東の虎の娘で、江東の小霸王で、現呉王なんだぜ？

「ちょ、離れろって雪蓮！　うお、胸をうりうりするんじゃない！　いくら頑張ったって今日はもう一滴も出ねえって！」

「うあゝん、刃のバカあゝ！　枯れ果てるまで他の子に注いだなんてえゝ！　私の分の胤も残しといてよおゝ」

「明日には何とかなるんじゃないか？」

「おい冥琳！」

「ははは、軽い冗談だ…さて雪蓮、お前を連合へ加えると言う件だが…連合の主である刃に、実は許可権が無いんだ」

「うあゝんうあゝ……………え？」

冥琳の言葉を受けてピタツと泣き止む雪蓮。
嘘泣きだったのか？

つかいい加減降りてくれ…この姿勢は流石につらい。

「連合員を新たに加える場合、幹部三人以上の承認と小帝殿下の許可が必要でな…神蓮様以外の幹部は、成都に二名と洛陽に二名いるんだ…今から行くのか？」

「そんな…」

「なら今は我慢しておくの良い…此度の様な定例会は、日を改めては繰り返し行われるだろうからな」

と冥琳は言う訳だが、実は俺自身…定例会の開催日程を知らない。
開催日程は天と照、ならびに幹部だけが知っている。

「ぶうゝ、分かった…今回は我慢するわ…刃も本当に勃たないみたいだし」

…頼むからEDみたいに言わないでくれ。
明日の朝にはキツチリ元通りに…

「夜分遅く失礼致します！ 袁術様より書簡が届きましたのでお持ち致しました！」

「袁術から…」

「こんな時間に…」

「書簡ですって!？」

「ハッ、こちらです!」

相も変わらずふざけた、ユルユルな会話を楽しむ俺達の雰囲気はブチ壊したのは…袁術からもたらされたと言う一巻の書簡だった。

瞬時に俺から離れた雪蓮は、すぐさま呉王モードを起動…冥琳と共に書簡を読む。

俺は俺でダッシュで私室へ戻り、装備品一式を身に付けて玉座の間へ舞い戻る。

「……………」

俺が舞い戻るとそこには装備を整えた雪蓮・冥琳・祭さん・穩・亞莎・明命・蘭里の姿があった。

雪蓮が居ないのは、彼女は公的には呉将ではないからだ。

「…装備品身に着けてきて正解だったな……この物々しい雰囲気、恐らくだが袁術から黄巾党本隊の討伐勅令が下った…違うか？」

「正解よ…敵は冀州で何進將軍率いる官軍を破り、周辺の野盗・山賊を吸収しつつ更に勢力を拡大している…これを窮地と見た漢王朝は各地の諸侯へ檄文を飛ばし、黄巾党の鎮圧を命じた」

「實際檄文を受けたのは袁術のようだが、客将と言うだけで我らに鉢が回ってきたのだ」

袁術は俺達に本隊をなすった訳か。

以前会った張勳ちやうくんの腹黒さだと、十中八九その線だな。

「黄巾党ていきの詳細は？」

「敵の首魁であると言う『大賢良師』の正体は相変わらず不明だが、敵の兵数だけははっきりしている…その数、実に二十五万だ」

ふむ…想定していたより少ないか。

予想だと40万級の雑兵が集うのではなからうかと考えていたが。ってか大賢良師って張角の別称か何かじゃなかったか？

「なるほど…それだけ大きな部隊じゃと情報の統制は甘いじゃろうな」

「仰る通りです祭殿…私の予測ですと実際に戦えるのは三万から四万程度ではないかと」

「俊敏な虎も太ればただの的、か…けど決戦は冀州だろ？ 今から行くのか？」

孫氏兵法・作戦篇にこんな言葉がある。

『兵は拙速を聞くも、未だ巧の久しさを賭みざるなり。夫れ兵久しくて国に利するは未だ之有らざるなり』

現代的解釈をすれば『作戦に多少拙いところはあっても早急に決着をつければ成功するが、戦果を長引かせたところで良い結果を得ら

れない。そもそも戦争を長引かせて国の為になった例などない』と言ったところか。

相手の情報統制が上手く機能しておらず、なおかつ臨戦可能戦力が分かっている以上早急に仕掛けて早急に討つべきだと俺は思う。

「兵は拙速を尊ぶ…孫子の作戦篇か、だが軍形篇には『兵法は、一に曰く度、二に曰く量、三に曰く数、四に曰く称、五に曰く勝』とあるが？」

ふむ、冥琳の言う事も尤もか。

意味合いは『武力抗争は地形や兵力要素、その他様々な幾何学要素を把握して…敵と自軍とを比較評価し、自軍の優勢化を図って勝利を得る事が大切だ』と言ったところか。

「…穏ならどうする？」

「私ならとりあえず兵を纏めて出立し、冀州へ着いた後に諸侯の状態を見て策を練ります」

「蘭里は？」

「私も穏さんと同意見ですね…ただこの場合は臨機応変に動く必要があるので、連れて行く兵は個々の将の最精鋭で良いかと」

機を見て敏なり、だったか？

俺と冥琳の意見のちょうど中間点位の意見。
落としどころだな。

「じゃあ方針はそれで行きましょう…冥琳」

「基本的には冀州へ着いた後、諸侯の様子を見つつ情報を集めて機敏に動く事になる…まずは明命、先行して冀州へ赴き敵軍の情報収集にあたれ」

「御意！」

「刃も足が速かったはず…だから明命に同行し、明命の任務補助を」

「了解」

「後に雪蓮を総大将として現地入りし、明命と刃の情報で策を練り…敵を討つ」

先行できる部隊は先行させ、自身が勝ちやすい状況を作る。

これも孫子にあるんだが、思い出せない…まあ良いか、綿密な策を練ったりするのは俺の分野じゃないし。

「んじゃ、張り切っていくか…最初から飛ばしてくぜ？ 遅れんなよ、明命」

「はいっ！」

こうして俺は明命と共に建業城を飛び出し、明命を伴って冀州へ先行した。

これから始まるのだ…俺の戦いが。

伝記の69 刃、再会すること（前書き）

すみません…前話に対する感想で『次回は戦闘』と書きましたが、戦闘シーンへ入る事が出来ませんでした。

伝記の69 刃、再会すること

（刃 視点）

建業を出て暫くした後、真南から冀州へと入った俺達。

州境にほど近い邑で情報を集めたところ…黄巾の連中は、冀州中央にある大平原で本陣を設営しているらしい。

そんな大平原を見下ろせる林の一角に…遠くに見える松明の火が見える位置に陣取り、俺達は居た。

ちなみにこの林は南、つまり州境にもう一つ大平原を抱えており…俺達はそこを今回の黄巾討伐の本陣にするつもりだ。

「夜番であれだけの人数がいるのか…」

「凄まじいですね」

「見えるのか？」

「はつきり見えてますよ」

明命曰わく任務の都合でこう言った夜行作戦もあるので、夜目には自信があるらしい。

同じような理由で思春も夜目が利くらしい。

「しかし夥しい人数だな…あれだけの人員を使うなら、間違いなく食料の集積地があると思うんだが」

「敵が本陣を設営中の草原から六里ほど東へ行つた場所に、ひなびた古城があるそうです：そこなら食料の集積地に使えるかと」

「ひなびた古城、ね：夜襲って言葉を知らんのだろうか」

「『これだけの軍勢を持つ自分達相手に、夜襲など仕掛けられるはずがない』等と、自身達の規模に自信があるのでしよう：私なら真っ先に夜襲を仕掛け、兵食備品に痛手を与えますが」

「俺も同意見：なら当然火計だな：火の手を上げて混乱させ、その隙を突いて敵陣を蹂躪：これを討つ」

「幸い松明用の薪には困りませんし、私も同意見です」

この時代の夜の主な光源は、松明か燭台の火。

こう言った夜営の場合は篝火を使う事もあるが、それでも篝火はあくまで種火：人が灯りとして持ち歩く場合、どうしても松明になりがちになる。

松明は薪の先端に油を吸わせた布を巻き、それに篝火から火をもらう形で着火して運用する。

だから松明や篝火のある場所には当然、布に染み込ませる油や薪と言った：可燃物がたくさん蓄えられている。

「氣技で纏めて灰燼に帰しても良いんだが、来る前に一戦やらかしたせいでまともな破壊力は期待出来んな」

「大丈夫なんですか？」

「ああ、戟や弓とかを使う分には全く問題ない」

俺の主武装は氣技ではなく、飛刃赤戟・朱雀・穿紅による物理攻撃だ。

特にこう言った密集状態の相手を倒す為に飛刃赤戟は特に有効な攻撃手段となる。

「とか言う明命だって大丈夫なのか？ その『魂切』って曲刀…乱戦をこなせる武器じゃないんだろ？」

最初に明命の武器を見た時は腰を抜かしそうになった。

明命の武器はどう見ても日本刀だったからだ。

この時代の剣は刀身が両刃の直剣がほとんどで、片刃の剣となれば思春の『鈴音』や夏侯惇の剣のように大振りな物となる事が多い。ましてや剣とはその大半が力押しに…つまりは斬ると言うより叩き切ると言う使い方をする。

「私は、武器が可哀想だからと戦い方を変えるような甘い人間ではありません…ましてやこの魂切はその名の通り魂を切る武器ですから」

神蓮や雪蓮、祭さんの剣を動の剣とするなら思春や明命は静の剣だろう。

闇の中で静かに翻る銀の剣閃は、相手にそれが剣戟である事を悟らせる事無く相手の魂を刈り取るんだと明命の師は言ったらしい。

「けど相手が猫の妖あやかだったらどうするんだ？」

「はうっ、刃様はズルいです」

気配遮断と察知に長け、まるで空気のように潜入任務を果たす明命だが…弱点がある。
それは猫。

明命は無類の猫好きで、非番の日は煮干し片手に街へ繰り出し…裏路地などで猫を見つけては顔をほころばせ、まるでキャラが崩壊したように『お猫様あ〜』と猫を愛でまくる。

それは任務中でも出てくるらしく、命令に『鼠一匹通すな』と言われたとて『お猫様は無害なはずですから、通しても構いませんよね？』と泣きそうな顔をする。

「…ま、明命なら例え相手が妖であっても…猫の姿をしているだけで説得しそうだよな」

「言わないで下さい…必死に説得している自分が安易に想像できまずから」

顔を赤らめて恥ずかしげに言う明命。

その内頭に猫耳でも生えてくるんじゃないか？

そんな事を考えていた時だった。

「呂堂様、周泰様…本陣に来客が来ております」

赤い胴鎧の上から黒の外套を身に着けた、明命配下の兵が俺達を呼びに来たのは。

「本陣に来客？ 誰だ？」

「それが、名を曹孟徳と」

「げっ、あのくるくる女か…何しに来たんだ？」

「お知り合いですか？」

「俺としては非常に嬉しくないがね」

大方、漢王朝から出された黄巾討伐の勅令に際し…声のかかった諸侯の実態調査と言った所だろう。

つか俺、曹操には偽名を名乗ってんだよな？

俺は本陣へ戻る道すがら、明命へ口裏合わせを頼む事にした。

「明命、一つ頼みがある」

「何でしょう？」

「曹操が近くにいる間は、俺の事は『王允^{おういん}』あるいは『子師^{しし}』と呼んでくれ」

「王允さん、あるいは子師さん…ですか？」

「ああ…以前曹操と会った事があるんだが、その時にちょっとな…」

俺はこれまでの曹操との関係を端的に話す事にする。

雪蓮の密命を受け、陳留近くまで商隊誘導へ出向いた事。出向いた先で商隊構成員の数名が、賊に攫われていた事。助けに行った先で曹操と出会った事。

曹操の勧誘を蹴る為に偽名を名乗った事。

曹操の胸が中途半端な大きさと貶した事は黙っておく。

「…なるほど」

「頼んだぞ？」

「お任せ下さい、王允さん」

伝令の兵と共に本陣へ戻った時、自陣の脇に『曹』の牙門旗を掲げた一団が居るのが見えた。

そして陣と陣の境目に、闇夜でも目立つ金色のツインドリルが見える。

オイオイ、総大将自ら出向いてきたのかよ。

「こちらです」

「夜分遅く失礼するわ…私は陳留刺史、曹孟徳…ここは呉の陣地で良いのかしら？」

「はい、ここは呉軍陣地…私は呉の将で周幼平と申します…こちら…は……」

「あら？　もしかしくても王允かしら？　久しぶりね」

「俺は会いたくなかったがな」

俺の発言を受け、曹操は目を細めてニヤリと嗤う。

コイツの目見てると平伏したくなるヤツは多いんじゃないかと思う。

「今日は番犬と一緒にじゃないんだな」

「あら、私よりあの子達の方が良いの？　そうよね…私みたいな、胸が中途半端な女よりは春蘭や秋蘭みたいに大きい方が良い物ね…でも残念、あの子たちは向こうの本陣よ…今日の共は親衛隊だけなの」

このクソ女…前回の邂逅の時の俺が言った言葉、しっかり根に持ってやがるし。

「そうか、夏侯惇とは勝負を預けっぱなしだったからな…試合えると思っただが……で？　何の用だ？」

「ふふ…まあ挨拶と言った所かしら？　同じ敵を相手にする友軍への」

相変わらず口は達者だな…本心では俺を引き抜きたそうな顔をしてやがる…ま、俺には関係ないがな。

「華琳、本陣設営完了したぞ」

と、そこへ現れたのは…篝火の中でも、火の光で白く輝く衣を着た青年だった。

俺はその青年の顔を見て、これまで生きてきた中で一番の驚愕に苛まれていた。

「ご苦労様、一刀…ああ王允、紹介しておくわ…北郷一刀、天の御遣いよ」

「つと、お客さんだったか？ 初めまして、俺は北郷一刀…字と真名はないから、北郷か一刀と呼んで…えっ？」

それまで曹操の方を向いていた青年…北郷だったが、曹操の紹介で俺の方を向いた瞬間…口をあんぐりと開けたまま固まってしまふ。つかやっぱりお前か、ば一刀。

「アンタ…もしかし…」

「初めまして…だな。俺は姓を王、名は允…字は子師と言う…呉軍の客将を務めている者だ」

…あ、ああ…よろしく」

あぶねえ！

思わず素で『何やってんだば一刀』と言っちゃまうとこだったぜ。

「こちらは呉軍の将で周泰」

「曹操さんには名乗りましたが改めて…周泰、字は幼平です…よろしくお願い致します」

「周泰!？」

その顔は…クックク、この阿呆め。

曹操・夏侯惇・夏侯淵以外の、史実では男だったがここでは女の武将を知らないんだな？

つか曹操配下と言えば許チヨとか典韋とか居たはずだが、まだ従軍していないんだろうか？

「はい、周泰です」

「…っ、よろしく」

なるほど、全く変わっていないようで安心したぜ一刀。
まあ安心と言っても俺個人の安心だな。

「さて互いの挨拶も済んだことだし、本題に入らせてもらおうわ」

「何だ？」

「この戦い…一番槍さえ貫えるなら、敵首魁の首は貴方達にあげるわ」

「…何？」

どういふつもりだ…確かに一番槍は武士の誉れだが、それよりも首魁撃破の方が名声的には高いはず。
それをあえて捨てて、俺達に譲るだって？

「…今の貴方達に必要なのは名声、違うかしら？」

「…何が狙いだ？」

「狙いも何も、私は陳留の統治で忙しいの…最近じゃ、ある男が作った新種のお酒…名前を『笑得』^{えいどく}と言ったかしら？ そのお酒を超えるお酒を作る事に夢中なのよ…だからこんな茶番の様な戦に尽力している暇はないって訳よ」

ッ！？

コイツ：エールの事を知ってやがるのか！？

いや、コイツの事だからエールの事だけじゃない：恐らくは俺が建業で成した色んな事を、全てとは言わないがおおよそは掴んでいるだろう。

「尤も？ その男の積んだ実績は我々としても目から鱗の出る行いで：私は一刀に命じて、その男が考案した警備体制の案を更に改良する事に成功したのだけど」

チィ、面倒なモンまで知ってやがる。

クソ：どこから漏れた？

「……………」

悟られぬように目線を動かすと、一刀は直立不動で佇んでいた。

「：我が軍には出来の良い軍師が居てね、名を荀イクと言うのだけど：彼女、私に仕える以前に仕官していた場所で赤髪の男に辱めを受けたそうでね：復讐の為とその男の情報を集めて回ったのよ：その時にその男が作ったとされる、その『笑得^{えーる}』の作成法が分かったそうで」

あの断崖絶壁猫耳毒舌軍師、よりによって曹操に仕官しやがったのか！

ちつくしよ：あんまりにも頭に來たから、麗羽んところから去る時にオモツクソ泣かしてやったんだが：どうやらそれが裏目に出たらしい。

しかし言われっぱなしじゃ腹立つな。

いかんいかん。

少しでも溜飲を下げとかなないと、後の大事に関わる。

「へえ？ そうなんだ……ま、天の御遣い等と言う、逆臣扱い必至の神輿の案に頼らないと新事案が実らないとは……陳留刺史も大したことないんだな」

「……何ですって？」

「この時代、天と言えば漢王朝の事を指すのはガキでも知ってるはずだが……その中で漢王朝とは別に【天】を戴くなんて『私こそ王』と漢王朝へ唾するのと同義だぜ？」

「……………」

帝の事を『天子』と呼ぶのは古代中国史でもあった出来事だったはず。

とあるマンガでの話だが、古代中国の王朝であった殷と言う国の王が……自身を指して『天子』と名乗る描写があったし。

個人的には姐○さん、無茶苦茶好みなんだが……まあ俺の好みはこの際、横へ置いておくとしようか。

「ま、孟徳殿が敵首魁の首をくれると言うんなら俺達は喜んで一番槍を譲るさ……んじゃ俺達は本陣設営の作業が残ってるから、そろそろお暇するわ」

「ま、待ちなさい！」

「じゃあな、中途半端さん」

言って俺は本陣へ駆けだした。

とりあえずは策の練り直しだな…友軍と名乗る連中の中に、俺の同郷の出が居る。

それ即ち、俺程度の知識で良ければ…その同郷かずとの出も、俺と同程度の知識は持つてると言う事。

そしてそれはさっき、周泰みんめいに自己紹介させた際のリアクションで確定している。

「さあて…どうしたもんかね…面白くはなってきたが、な…」

明朝、激昂の最中にあった曹操の命により…夏侯淵の隊が黄巾へ火矢による火計を仕掛け、戦の火蓋は切って落とされた。

伝記の69 刃、再会すること（後書き）

と言う訳で刃と一刀の再会でした…とは言え一刀は王允（刃）が、元の世界でつい先日死去した『呂堂 刃』だとは気付いておりません。

さあ次回こそ戦闘です。
乞うご期待。

伝記の70 刃、敵を蹂躪すること

く刃 視点く

「……って訳なんだ」

夏候淵の火矢による戦闘開始から数時間が経ち、俺は立ち上げた本陣天幕で雪蓮達にこれまでの経緯を説明する。

「なるほどね…まあ敵首魁の首を、私達にくれると言う約束を取り付けたのなら…曹操に情報を持ち去られていた件は不問にするわ」

「ありがたい」

「だが雪蓮、敵首魁の首と言っても相手はその正体すら不明なんだぞ？ どうやって討つ気だ？」

「それが問題なのよね」

敵の首魁はその通称を『大賢良師』と言う導師だと言うのは、これまでの情報で既に明確化している。

俺個人の知識ではこの大賢良師イコール張角なのだが、知りうる限りの著名武将全員が女と言うこの世界…大賢良師イコール張角なのか自信が無い。

ましてや俺自身がイレギュラーな存在なのに…

「…ともかく、今の相手は夏候淵の火矢により混乱の最中にある…

一番槍はくれてやったんだ…」

「ならば次は儂らの番…そしてそのまま敵首魁を討って終いじゃな」
言って不敵に笑う祭さん。

雪蓮も似たような表情をしている。

「とりあえず出ようぜ？」

「そうね…じゃあ冥琳、お願い」

「全く…では布陣を発表する…先鋒、刃…軍師は蘭里」

「おう」

「はい」

この場面で俺が先鋒と言う事は、真っ先に突入…敵の補給線を断ち、
相手を更なる混沌の渦へ叩き落とせ…同時に本陣から敵を呼び寄せ
ろと言う意味だろう。

「次、祭殿…軍師は穏、補佐は明命」

「応！」

「は…い」

「御意！」

俺が混乱させた隙を突いて明命が、食糧庫へ忍び込んで火計を発動

：上がる火の手を合図に祭さんが穏と共に、敵本陣にも火計を仕掛ける。

そこへ：

「遊軍、雪蓮」

「さっすが冥琳、私の使い方が分かってるわね」

俺と同等かそれ以上の攻撃力を持つ雪蓮が、配下の精鋭を率いて敵本陣を急襲：蹂躪して大打撃を与え、願わくばそのまま敵将：つまり黄巾党首魁・大賢良師の首を取る。

「なお本陣は私と亞沙が詰める」

これで方針は決まった。

後は黄巾を討つのみ。

「では半刻後に出撃、刃：派手に頼むぞ？」

「任せろ：これ以上無いぐらい、ど派手にやってやる」

＊＊そして半刻後＊＊

「止まれっ！」

「この先は我らが盟主、大賢良師様がおわす本じ：

「…」

「ザスッ！―

―ドシヤッ…―

古城と本陣を結ぶ輸送経路にいた黄巾に、徒歩で近づいておもむろに斬り殺す。

左肩から右腰へ至るラインで綺麗に切断された黄巾賊は、斬撃を受けた瞬間の表情を保ったまま物言わぬ屍と化した。

「デメエ！」

「て、ててて敵襲だあっ！」

「大賢良師様達を御守りしろおっ！」

「銅鑼だあっ！ 銅鑼を鳴らせえっ！」

「ジャンジャンジャン！―

いきなり殺された仲間の惨状を見て、一瞬呆けた黄巾党だったが…すぐに我に返り、行動を開始。

あえてそれを見届けたのち、俺は口を開いた。

「我が二つ名は赤戟の竜巻！ 貴様らを黄泉路へ送る破滅の使者なり！！」

「降伏すれば命だけは助けましょう…ですが逆らうならば容赦はしません！」

俺の声に続き蘭里も声を発し、その腰に提げていた直剣を抜く。

「赤戟の竜巻だど!？」

「長社で同胞七万を単身で薙ぎ払い、波才様をも討ったあの…」

「ええい怯むな! 我らには二十万からなる同胞が居る!! 敵はたった二人、数でかかれれば倒せる!」

名乗りと言う訳ではないが、二つ名を聞いて少しでも士気が下げられ
ばと思った。

けどそれは逆効果で、むしろ波才の仇を取ろうと奮起させる結果に
なったようだ。

「蘭里、奴さんらはどうも命が要らんらしいぞ?」

「命は尊い物ですが、その価値が見出せないから賊徒に堕ちたので
しょう…哀れな」

―ザザザンッ!―

―ザシュッ!ズバババツ…ドシュッ!―

飛びかかってきた黄巾に向けて飛刃赤戟を振るい、全員を一撃のも
とに葬り去る。

蘭里も剣を振るい、静かに…だが確実に相手を屠って行く。

その間にも賊が続々と押し寄せてくる。

―ズバババツ!―

―ザクザクザクッ!―

―ザスッ、ブシュッ…ドスドスドス―

それを2人して黙々と斬り捨てて行く。

「はあああっ！」

「でええいっ！」

見れば視界の端に、黒髪を翻す2人の武将の姿が。

あれは見た顔だな。

幅広の大太刀に赤い服：夏侯惇と、霞の飛龍偃月刀にそっくりな意匠をした偃月刀を振るう女：関羽か。

「…中々やりますね、あの二人」

「どちらも武力特化の猛将：黄巾など烏合の衆なんだろうさ…」

夏侯惇と関羽は互いにその得物を振るい、黄巾達をまるで埃を吹くように吹き飛ばして行く。

夏侯惇は一合だけ打ち合った事があるが…あの馬鹿力は恋並^{れん}だったつけ。

夏侯惇とは…いや、曹操勢とは約束があったから遅れて参戦したんだろうが…関羽、つまり劉備とは何の約束もしていない。

しかしこの参戦タイミング：諸葛亮と鳳統の入れ知恵だろうか？

「…旦那様の考えておられる通りだと思えます」

そんな事を考えていると、黄巾兵の首から剣を抜きつつ蘭里が口を開いた。

「この時点での合流を決めたのは、旦那様の予測通り…朱里ちゃんしゅりと雛里ちゃんひなり、いえ諸葛亮と鳳統の指示だと思います」

「分かるのか？」

「戦場に出てくる系統の軍師なら絶対にそうするでしょう…ましてやあの二人は水鏡先生をして『伏竜』『鳳雛』と称された、水鏡女学院の傑物…もちろん、私が義勇軍の軍師でも主には同じような進言をするでしょうし」

蘭里曰く、諸葛亮は兵法の他に経済・算術・地理・農政方面にも知力の高さを誇る万能型で…鳳統は総合的には諸葛亮にわずか及ばない物の、実戦における戦術考察では諸葛亮を凌駕する才能を持つと言う。

諸葛亮は冥琳型、鳳統は詠型と言った所か。

「万能型と実践戦術特化、か…あ、蘭里の評価はどんな感じだったんだ？」

「…自分に付けられた評価をお話するのは、旦那様相手でなくても恥ずかしいんですが／＼／」

蘭里は水鏡先生曰く『貴女には朱里や雛里に比肩出来るほどの突出した軍才は無いと思います…ですが朱里や雛里と違い、戦場において大男を一蹴できるだけの武力を持っています…もし諸侯に仕官するなら、文武官として活躍できるでしょう』と言われたそうだ。

「朱里ちゃんと雛里ちゃんが文官一辺倒なら、私は文武官として主を支えたい…水鏡先生からの評価を聞いて以来、そう思うようにな

りました」

言って、直後に『私は旦那様と共に戦場を駆けれる軍師でありたいです』とも。

「…負けてられねえな」

「…はい」

言いつつ更に黄巾を斬り伏せ、死体の山を築いて行く。

俺と蘭里の体は黄巾の返り血に濡れ、大地は赤く染まっている。

そんな中、件の古城がある方角から数人の黄巾兵が走って来た。

「大変だあっ！ 兵糧庫で火の手が上がったぞ！」

…明命が上手くやったらしい。

「蘭里！ 祭さんとここに戻るぞ！」

「はいっ、旦那様！」

俺と蘭里は足元に転がる、黄巾兵の死体に足を取られないように本陣へ向けて移動を開始する。

そうこうしながら更に黄巾兵を、蘭里と2人で合計2000ほど斬り伏せ…孫呉と赤地に黄の旗がある場所までやってきた。

黄の旗の下では祭さんが小振りの直剣を振るい、弓兵の弱点を突いたと喜ぶ黄巾兵を次々に斬り伏せていた。

「祭さん！」

「応よ！ 明命から合図が来たのは知っておる！ 黄蓋隊、総員火矢を番えよ！」

―ボツ―

―キリキリキリ…―

号令に合わせて歩兵が、弓兵の周囲に居る黄巾党を排除：同時に鏃に巻いた油布へ火を灯し、その矢を弓へ番える祭さんの隊の兵士達。

「目標、敵本陣の天幕…射^てっ！」

―ヒュヒュヒュヒュヒュ…―

祭さんの号令で火矢が放たれ、オレンジの光が放物線を描いて敵陣へ飛んで行く。

東の空には太陽が浮かんでいるが、まだ若干薄暗い為に火矢の明かりが良く見える。

―…チリチリチリ…―

―…メラメラメラ…―

「火矢だあ！ 火を消せっ！ 急ぐんだ！！」

「大賢良師様は無事かあっ！」

どうやら火矢を受けて炎上を始めた天幕のどれかに、敵首魁の大賢良師がいるらしい。

「祭さん！ 雪蓮は！？」

「儂が火矢を射掛けた直後に『こっちに大将が居そうな気がするわ』と、嬉々とした表情へ走って行かれたぞ」

「…流石だな」

ならば悠長にしている暇はない。

この手の賊徒は頭を潰せば霧散する場合がほとんどだが、今回は規模が違う。

何せ相手は20万からなる大集団だ。

頭が潰れたところで第二第三の大賢良師が立ち上がらないとも限らない。

ましてや俺の知る大賢良師…張角には、張宝・張梁ちようほう ちようりようと言う弟達が居る。

つまりは張宝・張梁が次代の大賢良師になりかねない、そう言う事だ。

「俺は雪蓮の援護へ向かう！ 祭さん、後よろしく！」

「任せい！」

「蘭里、行くぞ！」

こうして俺達はまだ周囲に居た黄巾賊を粉碎しつつ、敵陣中央部へ突撃をする。

「だりゃっ！」

—ゴシヤツ！—

「ぐはあっ！」

火矢による火計で炎に包まれた黄巾党本陣を、蘭里と共に三國無双よろしく駆け抜ける。

ある者は飛刃赤戟で吹き飛ばされ、またある者は蘭里の剣で黄泉路へ渡される。

とは言え現時点で本陣へ籠っていた多くの黄巾兵が、火計により炎と煙に巻かれてもがき苦しみながら息絶えていく。

「…」

人が焼かれる臭いと言うのは凄まじい物があり…若葉色の鎧を身に着けた、劉備軍の兵と思われる連中数人がその臭いで吐いている。後ろから俺達2人を追いかける形で進軍してきている、呉軍の兵の中にも吐いている奴はいるんだが。

そうしながら敵本陣を中央部へ向かって駆け抜けていた時だった。

—ドンッ—

「あうっ」

—ドサッ—

天幕の陰から出てきた、桃色の髪をした少女とぶつかってしまった俺。

相手は俺の勢いに負けて後ろへ倒れ、尻もちをつく。

見れば身長は160程度。

その身には黄色を主体とした上着と、茶褐色のスカートを穿いている。

「っと、悪い…大丈夫か？　ここはもうすぐ呉軍が制圧する…どこ
の誰だか知らないけど、早く逃げたほうが良いぞ」

「え、あ…あの…」

手を差し伸べてやると少女はその手を掴み、ゆっくりと立ち上がった。

その弾みで胸部がぷるんと揺れる。

ふむ、麗羽並れいはのメロンだと見た。

「さあ早く逃げるんだ、大賢良師が討ち取られればここは大騒動になるから」

「けど、私は妹たちを…」

とりあえず彼女を、黄巾党本陣から最速で出れる方へ誘導しようとするが…当の本人はこの戦場で妹とはぐれたらしく、離脱するなら妹たちも一緒でないと嫌だと駄々をこねる。
ええい、この忙しいときに…

「…姉である君が怪我でもしたら、妹さん達は悲しむだろう？　妹
さん達は俺が探してやるから、早くこの場を離れろ」

「でも…」

「旦那様！」

何とか彼女を脱出させようとする俺だったが、蘭里の声で身の危険を察知する。

「チイツ！ うぜえ！」

―ザンツ！―

隙を突いて飛び出してきた黄巾兵を一太刀で切り捨て、俺は再び彼女に向き直る。

「さあ早く…」

そんな時だった。

「黄巾党首魁、大賢良師はこの孫伯符が討ち取った！ これより我らは烏合の衆と化した賊共の殲滅に入る！ 全員続けえっ！！」

と言う、雪蓮の勇ましい名乗りが聞こえたのは。

今一步遅かったかと項垂れる俺達だったが、次の瞬間…件の少女からもたらされた言葉に、言葉を失った。

「…もう無理ね」

「え？」

「私の影武者さん、討たれちゃったし…もう、活動は出来ないよ」

「影武者…どういう事です？」

「……私の名前は張角、先ほど孫伯符さんが討ったのは私の偽物で

す…」

ナンドッテ!?

伝記の70 刃、敵を蹂躪すること（後書き）

と言う訳で張角…天和との邂逅でした。

張宝と張梁…地和と人和は、私的見解ではナイチチ寄り…けど立ち絵で比較すると人和と華雄が良い勝負な気がする。

華雄は魔改造施してメガメロン化したけど、地和と人和はどうしよう…とりあえず次回、黄巾の乱…終結の予定です。

伝記の71 刃 あらましを聞くのこと（前書き）

次話への繋ぎ話になる為、ボリュームとしては少々少なめです。

独自解釈及び独自設定が入るので、お読みになられる際はご注意ください。

2011／11／25…サブタイトルを変更しました。

伝記の71 刃 あらましを聞くのこと

（刃 視点）

「私とちいちゃん、れんほーちゃんは…ただ、歌を歌いたかっただけなの」

始まりは南郡の小さな街。

そこで彼女達は、歌を趣味として過ごしていたそうだ。

元々才能があったのだろうか…小さな村だとは言え、彼女達の歌を知らない者は誰一人として居なくなっていた。

歌を始めて2ヶ月が過ぎた頃、近隣の村からも『歌を歌ってくれ』と言う依頼…つまり公演依頼が来た。

「公演は大成功…私達は太守様の目に留まり、御前公演をした事もあったの」

いつしか、彼女達を支持する民達…現代で言うファンは600人を超え、公演会…ライブの開催回数も日増しに増えて行った。

そんなある日、ファンを名乗る人物から『陳留のお偉いさんの書庫から盗ってきたんだが…自分には必要の無い書物だから、売って公演費用の足しにしてくれ』と、古ぼけた本を預かった。

「古ぼけた本？」

「これ」

張角から手渡されたのは、表紙に『太平要術』と言う文字が書かれた本。

「その本には、歌で人を魅了する方法：舞台演出を派手に見せる妖術：効果的な費用配分……歌を生業とするには、十分な方法が書いてあったの」

張角は言う：この本には、歌で人を魅了する方法や歌い方が書いてあったと。

しかし張宝は『観客の心を驚掴みにする舞台演出を行える妖術』が書いてあったという。

さらに張梁は『最低限の出費だけで出した倍以上の利益を上げる費用配分法』が書いてあったと言う。

「…読む人によって内容が変わる、ですか？」

「読んでみれば良いと思う」

その言葉を受け、俺は蘭里へ太平要術の書を手渡した。

受け取った蘭里は真剣な表情でそれを読み、そして驚愕の表情になる。

「…どうだ？」

「…端的に言えば、水鏡先生の下で学んだ学問がお遊びになります」

蘭里の言葉で俺は悟った。

これは『読む人が一番欲しい情報を提示する妖書』だと。

「この本は処分すべきだな」

「「え？」」

俺の言葉に驚く張角と蘭里。

これは拙い書物だ。

「これは、極論で言えば…自殺を促す書物だと言えはいいか？」

「それって…どう言う…」

「これは戦争を招く本だって言ってるんだ」

これを得た者はすぐに、その者が望む事においては完璧になれるだろう。

だがその者を周りで見ている者たちはどう思う？

何の努力もなしに、あっさりと完璧超人になった者の事を。

「妬む…でしょうね」

「あるいは恨む、ですか？」

「当たり前だ」

何故あいつだけが…

俺の努力は何だったんだ…

あいつさえいなければ俺が一番だった…

いやあの書物さえあれば俺だって…

「そうして巻き起こる紛争、戦争…」

俺は思う。

この書物を放置すれば、第二第三の大賢良師が現れる。
今回の大賢良師…張角とは、決起の理由が違えども。

「…誰かがこの本を得れば、その得た者を狙う紛争が起き…紛争の勝者を狙ってまた紛争、この繰り返し…たった一冊の書物で大陸が、終わらぬ戦国時代を迎えるんだ」

「……………」

「それを阻止するのもまた紛争だが、こんな…終わらなき災厄を招く書物なんか存在しちやいけない」

「ならどうするの？ 焼くのか？」

「いや、焼かない…と言うより、焼け残った時の事を考えれば迂闊に焼けない」

「じゃあどうやって処分を？ 川に流すんですか？」

「それも無理だろう…求める道具は求める人間の元へたどり着く…俺のお袋の言葉だが、それがこの本にも通じるなら…これは人の手で処分できる本ではない…」

「人の手で処分は出来ない…ではどうするんです？」

「俺の知り合いに、仙人と称される古い導師がいる…ソイツならき

つと大丈夫だ」

「仙人ですか！？ え、でもその導師様がその本を読んだ場合は…
…」

蘭里の心配は尤もだ。

だがアイツなら大丈夫…何せ世界の管理人だ…この書物の危険度
位把握しているだろうからな。

「大丈夫だ…アイツはこの世界に対し欲が無い…だからこそ仙人と
呼ばれるんだろうが」

「わわわ、しゅごい導師しゃまなんですネ！ あう／＼／」

まあ仙人と言うよりは変態の分類だが。

オカマ
貂蟬の師匠を名乗るほどの管理人だ…真面目な話に関しては下手を
打つまい。

かみかみの蘭里、可愛いぞ。

「とまあその太平要術に関しては、俺に任せてくれ…後は君の身柄
だが、どうする？」

「私は…妹達が無事なら、他に多くは望みません」

ふむ。

妹達が無事なら、と言う事は…3人が無事に合流出来、以後も一緒
ならば他に願いは無い…と言う事か。

「……ならまずは妹さん達を探そうか…この陣に居るんだろう？」

「うん」

「分かった…それじゃ蘭里、黄巾党本陣にいる手の空いてる呉軍兵を二十人ほど集めてきてくれ」

「御意」

言って駆け出す蘭里の背中を見送りつつ、俺は…

「（残る張姉妹を相手取った取引、張姉妹を引き取った事に対する諸侯への取引…そして呉軍兵将への取引、か）」

…と、次なる問題に頭を悩ませていた。

伝記の72 刃、侍女を得ること（前書き）

キャラ崩壊警報発令！

しかも内容はずさんで強引で無茶苦茶です！

とてもではありませんが『お待たせしました』と言えない話となつてしまいました。

伝記の72 刃 侍女を得ること

（刃 視点）

と言う訳で20余名で黄巾の陣を搜索したところ、張角の妹達はあつさり発見出来た。

次女の張宝は青髪の元気娘：イメージとしては歌の上手い、胸の平らな馬岱。

三女の張梁は紫髪的眼鏡っ娘：イメージとしては、滅多に激昂しないミニチュア冥琳。

「さて、お姉さんの張角にはひとしきり話したんだが：君らには三つの選択肢がある」

一応は投降者と言う扱いな為、極々緩く縄をかけ：雪蓮の天幕に来てもらっている。

立会人は蘭里・雪蓮・冥琳・祭さん。

「一つ：それまでの身分と名前を捨て、呉勢として生きる」

これは一番おすすぬ。

身分と名を捨てるのは、さっき雪蓮が張角の影武者を討ち：それを声高に宣言した事で、周囲は『張角は孫策が討ち取った』と認識している事が理由。

まあ殺す訳ではないし歌を取り上げる訳でもない。

侍女扱いか、偽名（Ⅱ以後の本名）を与えて建業限定で歌姫に戻ってもらうか：だな。

「二つ：それまでの身分と名前を捨て、流浪する：この場合は当然路銀といくばくかの食料を出そう」

これは放流扱い。

身分と名を捨てる理由は前述の通り。

路銀と食料を持たせてしまえば、後は旅人なり故郷へ帰る旅路なり：何だって言い訳できる。

ただし彼女達個人の戦闘能力は極めて低い（一般庶民と同程度かそれ未満）ので、途中で災いに巻き込まれない：あるいはそれが原因で死なないとも言い切れない。

「最後の三つめ、黄巾の残党として：ここで死ぬ」

これは個人的に一番やりたくない。

彼女達は既に討ち取られた身とは言え、黄巾は黄巾：先の殲滅戦で逃げ出した敗走兵も存在する事から、本陣より逃げそびれた残存兵として始末する事も出来る。

「さて、少し時間があるから考えてくれ：あ、でもこの天幕からは出ないでくれよ？ でないと即座に、俺達以外の手によって選択肢の三が実行されちまうからな」

言って俺は彼女達の縄を切り、向こうにある休憩所で話をするよう促した。

そして彼女達が休憩所へと消えるのを見送った後、天幕奥で簡易玉座に座する雪蓮へと歩み寄った。

雪蓮はその手に徳利と杯を手にしており、どうやら勝利を肴に一杯やっているようだ。

「おう雪蓮、お疲れさん」

「んぐっんぐっんぐっ…っはぁ！ あら刃、そっちもお疲れ様」

「冥琳、その後は？」

「ああ、蘭里と穩が張り切ったおかげで事後処理が非常に楽だよ…だからこうして雪蓮の酒の相手が出る」

「刃も飲む？ 勝利の美酒…美味しいわよ？ なんなら肴に私のからだ…」

「ぎゅむっ！」

…ってイタタタタタ！ めーりんダメ、耳は…」

ふざけた事を言おうとする雪蓮だったが、その言葉は今一步の所で冥琳が…雪蓮の耳を振じり上げると言う力技で封じた。

しかし凄い力をかけていたように見えたんだが、今に千切れないだろうか心配だ。

「全く、油断も隙も無い…」

「だあってえ…」

「だってもへったくれもあるか…む、そうだ刃…お前に言っておきたい事がある」

冥琳は左手で眼鏡の位置を直しながら俺にそう言う。
ちなみに右手は雪蓮の耳たぶを抓んだままだ。

「何だ？」

「あの三人、もし助命を…お前の言う『選択肢の一』を希望したらどうするつもりだ？」

実の所、捕虜及び投降者の扱いに関しては選択肢の2及び3が一番簡単。

2は取り逃がしたと言えば済むし、3は孫策の御身を守る為にやむを得なかったと言えば済む話だからだ。

「それなんだがなあ…あの娘達は、三人揃って歌が歌えれば名前や身分などはどうでもいいそうだ」

「ふむ」

「だから髪の色や長さを変えてもらって、偽名を与えて建業限定の歌い娘になってもらおうかと」

歌と言う物には、いや言葉と言う物には力がある。

それは人を容易に元気づけ、容易に傷つける。

そして曲と言う媒体に乗せて綴られる言葉…歌は、一对一の状態で発せられるより多くの人間…つまり観客へ言葉の力をかける事が出来る。

つまり何が言いたいかと言えば、戦地慰撫に彼女たちの歌が使えないかと。

「…なるほど」

「三女の張りよ…いや人和は長女及び次女と、公演日程や資金運用を管理していたから政務にはそこそこ使えると思うが…長女と次女は、第一印象が『天然』『わがまま』だったからなあ」

長女がKY意見を発し、次女がそれを煽り、三女が全てを収める…
と言うイメージが強い。

だから俺の中で、張三姉妹内の権力ヒエラルキーは三女＞＞長女＞
＞次女となっている。

「とは言え影武者を立てるほどの強さは持っているんだ…例え助命を乞うたとして、厳しめの制限は付けるべきだろうな」

「ねえめーりん、私の耳はいつ放してくれるの？」

「…三女は政務が出来そうだったかな？ 雪蓮に付けてやろうか…
…雪蓮に政務をさせると建業内で歌う事の出来る権利を与えるんだ…うん、我ながら名案だと思うんだが？」

「……えっ？」

「ついでに三女に言われても政務をしない場合は禁酒にするか…余った酒は祭殿に飲んでもらうのが良いだろう」

俺は頭の中で想像する。

びっしりと綿密に書き込まれたスケジュール帳を手し、冷ややかな声で雪蓮へ政務を促す人和。

その冷徹ぶりに慌てて逃げ出そうとする雪蓮だが、人和がボソッと『お酒』と呟けばあら不思議…馬車馬のように政務をこなす雪蓮の

姿が。

「……ぶふっ」

その姿に思わず吹き出してしまう俺。

「あーっ！ 刃が身もだえするほど大笑いしてるじゃないの！
却下、却下よ！」

「我ながら良い案だと思ったんだが」

「めーりんひどーい」

しかしこりゃ傑作だな。

酒を餌にされて仕事漬けの雪蓮か……くっ、一度見てみたいもんだ。

「……さて、冗談はさておき……三姉妹が助命を選んだ場合、どうするんだ？ いや、配置ではなく諸外候への対応として……だ」

雪蓮の耳から手を放し、胸を抱え上げるように腕を組んで真面目な
雰囲気を纏う冥琳。

同時に雪蓮も即座に王の貌となる。

「基本は隠し通す」

「露見したら？」

「…コレで脅す」

言って俺は懷から、古ぼけた書物を取り出した。

表紙には『太平要術』の文字。

「おい刃、それはまさか…南華老仙の…」
なんからうせん

南華老仙。

中国・戦国時代の思想家、莊子が死んで仙人になった姿と考えられている。

生没年不明。

三国志演義ではこの南華老仙が、当時山へ薬草を摘みに来ていた張角へ『これを使って世直しをせよ。ただし、悪しきことに使えば天罰が下る』と言って太平要術の書を授ける。

その書物に書かれていた妖術により、張角は太平道を作って黄巾の乱を起こす。

また張角が病死しようとしているところにも現れ、張角に『悪しきことに使えば天罰が下る』ことを告げ、消える。

この直後に、張角は病死する設定となっている。

「由来は知らない…が、張三姉妹及び蘭里の意見からこの書物は本当に『魔書』や『禁書』の類である事を把握している」

「ではそれでどうやって脅すと？」

「今回の黄巾討伐で目立った殊勲を立てたのは、雪蓮を除けば…陳留の刺史である曹操、それに幽州義勇軍の長である劉備ぐらいだ」

おれたち
呉勢が本物の張三姉妹を匿っているのが劉備にバレた場合、この書物は劉備の責任の下『諸葛亮』と『鳳統』にだけ読む権限を与えて偽物を渡す。

そしてこう言えば良い。

『この書物をあげるから黙っててくれ……ただし、その書物の中身は全部把握している……以後、我らに対し良からぬ事が起きてその内容がその書物通りだった場合……呉軍は劉備軍を滅ぼす』と。

「蘭里から聞いた話、諸葛亮と鳳統の二名は気が弱く……威圧すれば縮み上がる事も多いと聞く……さらに君主劉備は、頭の中がお花畑だ……率いる軍勢も、俺や雪蓮が相手にすれば十分潰せるからな」

「ふむ」

だが問題は、事が曹操にバレた場合だ。

俺の記憶が正しければ、この書物は『陳留のお偉いさんの書庫』から盗み出された物のはず。

そして推察が正しければ陳留のお偉いさんイコール曹操の事。

つまりこの書物は元々、曹操の所有物であった可能性が極めて高い。

曹操なら書物より張三姉妹を得ようとするだろう。

歌や妖術を用いたとは言え、僅か数カ月で20万に上る人間を集めたのだから。

その集客率を軍事転用……徴兵に応じれば、張三姉妹の人気を以て比較的楽に兵士の補充が出来るからな。

「とは言え曹操は非常に、いや異常に誇り高い……たかが妖術書一本でガタガタ言うはずが無いと思うが、それでも言ってきた時はコイツを餌に何とか言い含めるさ」

「……分かった、ではその書物及び張三姉妹の処分はお前に一任しよう」

「了解した」

とりあえず話はまとまった。
後は張三姉妹の中で話がまとまれば…

「失礼致します…捕虜の三人が、孫策様と周瑜様…並びに呂堂様と徐庶様に話したい事があると言っています」

…どうやらまとまったらしい。

「さて、んじゃ行きますか」

言って『こちらです』と先導する兵士の後に続き、天幕内を移動する。

この天幕は縦長で、奥が簡易玉座…厚布製の間仕切りを挟んで、手前が休憩所となっている。

見ればその休憩所となっている場所の一角に、呉軍兵士が用意したと思わしき茶菓子を食べつつ…真面目な顔をした張三姉妹がいた。
天和と地和の顔はこれまでにないほど真剣で、人和は普段の真面目さに箔が付いているほど。

ちなみに出口は穩と明命の部隊、及び本人が固めており…彼女たちだけで抜くのは相当難しい。

「話はまとまった？」

「…呂堂さん」

「まとまったよ」

「姉さんの言う通り纏まりはしたわ…けどこれ、中身は半分ぐらい

脅しじゃない？」

俺が話しかけると、天和↓地和↓人和の順に口を開く。
人和の言いぐさに内心ヒヤツとした俺だったが、この子相手に隠し
事は後に災厄を招くだろう…ならばと開き直る事にした。

「そうだな…実質脅しだな」

「…えっ？」

「だってそうだろう？ 君ら三人共通の願いは『姉妹の生存』だったし」

「つまりは私たちが『助命』を嘆願すると、初めから見抜いて…？」

「まあな…経緯はどうあれ、君たちは黄巾の乱の首魁…捕縛されても願いが通るなら、それに付与する条件は呑んで然り…違うか？
無論、呉軍側からすれば、それを脅しと取られても仕方ないと思っ
てる」

世の中には捕縛した敵兵を凌辱し、性奴隷に落とし込むゲス野郎も居ると聞く。

まあ麗羽…袁紹の所に居たあの断崖絶壁猫耳毒舌小娘、荀イクだっ
け…アイツはそれに近い事が原因で、男性恐怖症になったと思わ
れるが。

…あ。

断崖絶壁猫耳毒舌小娘の事を思い出したら、何かムカムカしてきた。

「…で？ 答えは？」

「答える前にいくつか聞かせて欲しい」

「俺に答えられる事なら」

なるほど、条件を呑む前に確認か。

当然と言えば当然だが、それを敵地のど真ん中で：一応は捕虜の身でありながらそれが出来る胆力：うむ、凄いな。

「まず、私たちが助命を望んだ場合：私たちの命は保障してくれるのね？」

「当然だ：無論雑務をこなしてはもらうが、衣食住と私室も保障しよう：働き次第では給金を出してもいい」

「：次、名前と立場は？」

「どちらも今の所は未定：ただ、名前に関しては真名はそのまま：姓名字を変えて、髪形や色を変えてもらう事にはなるだろう」

「じゃあ最後：私たちは歌えるの？」

「そこは互いの努力したいだな：君らが真面目に職務をこなし、計画的な貯金を行えば私財公演が出来るし：俺達が頑張って、この戦乱の世を終わらせれば大陸公演だって出来るからな」

俺の考えを聞き、人和は黙考する。

今は質問に答え、利点しか挙げてない：裏読みして不利点を考えているんだろう。

「：ねえ呂堂さん」

「ん？ 何だ？」

そんな中、天和がにこやかな表情で口を開いた。

「呂堂さんって、好きな人とか恋人とか…居る？」

「「「……………えっ？」」」

天和の質問に思わずマヌケ面を晒す俺・地和・人和。

視界の端では穏が、明命によってホールドをかけられている。

どうやら恋人と言うキーワードを耳に入れ、我こそはと駆け出すつもりだったようだ。

「えっと姉さん、それはどう言う意味？」

「私ね？ 呂堂さんの事が、好きみたいなの」

「…えっ？」

「だから好きな人とか恋人とか居る？」

この局面において何故にこんな話を…いや、現実逃避イクナイ。
とりあえずドン引き覚悟で…

「…ああ、いる」

「居るの？」

「えっと、ひのふのみ…正式に嫁候補として認められてる候補が十

三人、条件未達成で副次候補的扱いになつてゐる嫁候補が…四人か？」

「……………」

ああ、やっぱドン引きされた。

でも良いんだ！

反省も後悔もしてないから！！

「…じゃあ私もお嫁さんにしてくれる？」

…ナンデスト！？

「姉さん正気？」

「そうよ！ 何でこんな…全部で十七人も囲う気の見境なしに天和姉さんが嫁ぐのよ！」

「だあゝつてえゝ、うらやましいんだもん」

「けど、だからと言って…」

「お妾さんとか侍女でも良いよ？」

マンマミーア…誰か助けてくれ。

こうして俺は断るに断れず、天和を俺専属の侍女にした。

ちなみに地和は服飾関係にも高い適正がある事が分かり、沙和…于禁と共に建業城下で衣服店を開かせた。

無論、人和は冥琳が『私の侍女兼、雪蓮の傍付きにする！』と声高に宣言して即実行…すぐさま『酒を餌にされて仕事漬けの雪蓮』を

目の前で見る事が叶ったのだった。

「ねえ呂堂さん、私…呂堂さんが巨乳好きって聞いたんだけど、私ってどうなの？」

こうして、黄巾の乱は無事(?) 終結した。

伝記の72 刃、侍女を得ること（後書き）

と言う訳で『張三姉妹は呉勢へ取り込む』となりました。

これにて黄巾党の乱編は終了です。

伝記の73 刃、三羽烏と戯れるのこと【凧編】（前書き）

ここから数話は拠点フェイズ風となります。
まずは凧から行きます。

伝記の73 刃、三羽鳥と戯れるのこと【風編】

く刃 視点く

黄巾の乱が鎮圧されて2週間が経過：鎮圧直後は騒々しかった張三姉妹、もとい役満姉妹もようやく職務に慣れ：呉としても通常活動に戻りつつあった。

長女の天和てんぼうは女の命でもある髪を、背中の辺りでバツサリと切った上で項で束ね：張角の名を捨て、公私ともに『天和』を唯一の名前として俺の侍女に。

次女の地和ちーぼうは束ねていた髪をいつも下ろし、雰囲気を変えて『地和』を唯一の名前にして沙和さわ：于禁うきんが店主を務める衣服店へ。

三女の人和れんぼうは、たまたま建業にいた烈れつ：華陀かだに頼んで五斗米道ゴットウエイドで髪へ超育毛&超成長をかけ、ボブだった髪型を腰までのロングに変え：髪色が違うだけの、正にミニチュア冥琳めいりんとなり：オリジナル冥琳の侍女になった。

名前に関しては天和・地和と全く同じ。

地和は沙和と共に衣服店を盛り立て、わずか一週間で沙和の衣服店で看板娘を務めるほどになり：人和は冥琳と組んで、雪蓮しえれん：孫策そんさくを日々税務へと追い立てている。

天和は俺の侍女と言う立場が気に入ったのか、その立場を利用して俺を落とそうと躍起になっている。

だがほぼ毎日蘭里らんりや祭さんさい：徐庶じょしよや黄蓋こうがいさんや神蓮しえんれんや穩のん：孫堅そんけんや陸遜りくそんと共に、下着姿で俺の寝所に雪崩れ込んでくるのはどうなのか。

入口で『私も混ざりたい…けど、他の連中に見られてするのは…』と恥ずかしがる冥琳を可愛いと思うのは俗に言う“知らぬは本人ばかりなり”だ。

建業がこんな雰囲気の中、諸侯の動きと言えば…曹操が官位を得てようやく『魏』の樹立を宣言。

劉備は仲間を引き連れて幽州方面へUターン…どうやら烏丸をどうにかするようだ。

他には幽州太守の公孫贊こうそんさんが、烏丸討伐に乗り出した話を聞いた。

劉備とは示し合わせてあったのだろうか？

またその、公孫贊不在の幽州を麗羽れいは…袁紹えんしやうが狙っていると言う話。あれだけデカイ土地を治めててなお、幽州を欲しがるのは何でだろうな？

中央では何進かしんさんが大將軍に就任し、朱儁しゅしゆんさんや皇甫嵩こうぼうそうさんと一緒に水面下で宦官の締め出しを画策中との事。

さてそんなある日のこと、俺は黄巾の乱前に部隊として預かった呂堂隊の武具を整える為…建業の城下にある武具店を訪れていたのだが。

「もう少し負からないだろうか」

「スマンね…俺っちも家族がある身なんで、これ以上下げるとおまんまの食い上げになっちまう」

「むう…」

店主に値段交渉をかける、楽進がくしん…風なぎの姿を見つけた。

「…風、何やってんだ？」

「刃様！？」

言ってこちらを振り返った風の手には、黒く煌めく光を放つ一對の脚甲が。

「腕甲…にしちゃ長いな…脚甲か？」

「はい…先日の戦で使っていたのですが、猛虎蹴撃を放った反動で破損してしまいました」

差し出された脚甲は、右足用と思わしき物が脛すねの辺りで真つ二つに割れていた。

「こりゃ修理より買い換えた方が早いんじゃないのか？」

「はい、店主にも同じ事を言われました…ですがこの脚甲は、籠手えんおうである閻王と対になっていまして…刃様と合流する以前より愛用していたので…」

「愛着がある、と？」

「……はい」

ふむ、愛着がある武具を『壊れたから』と言う理由で『捨てろ』とは言えんわな。

「風、その脚甲…見せてもらっても良いか？」

「は、はい」

尻から脚甲を預かり、破損した部位をジッと見る。

なるほど、割れたと言うよりは砕けたと言った方が正しいか。

経年磨耗で脚甲を形成する、主だった金属が限界を迎えている。

そこへ来て猛虎蹴撃：氣が持つエネルギーの強さに、弱った金属が形状を保っていらなかったのだろう。

「ふむ」

「どうでしょう？」

「元来、氣を技として扱う者の武具は適した金属で打つ必要がある」

俺の飛刃赤戟ひじんせきげきや穿紅せんこう、朱雀すざく：祭さんの多弦双弓たげんそうきゅう、雪蓮なんかいほうの南海霸王なんかいほうが
そうだ。

「ところがこの脚甲は黒羽鉄くろばてつを加工しただけの物：黒羽鉄は氣への
馴染みが悪いんだ」

黒羽鉄は漢全域にある鉄鉱山にて、鉄鉱石の次に良く取れる金属で
：鉄鉱石を精製鉄へと製錬する過程で出来る、副産物の様な物。

割合的には1個の鉄鉱石から鉄70%、黒羽鉄30%と言った所。

鉄が延性に優れ、焼成鍛造に強いのに対し：黒羽鉄は焼成鍛造にあ
まり耐久性が無い。

これは黒羽鉄が精製される際に鉄鉱石に含有していた鉛や錫と言
った、熱に弱い金属物質が精錬過程で黒羽鉄と結合する事が原因と

されている。

だから黒羽鉄はその塊を大きく作る事が至上であり、大きな塊から切削造形で武具を作る手法が取られる。

よって黒羽鉄は、造形の際に焼成が不要な場合が多い防具用の金属として使われるのだ。

ちなみに氣は圧縮をかけると火に近い高温を発する場合があり、風が使う『猛虎蹴撃』は：脚部で圧縮した氣を、キックのモーションから砲弾のように撃ち放つ技。

脚甲へかかる熱負担も尋常ではない。

この熱負担が黒羽鉄製脚甲の防具的寿命を削り、それでも耐久限界を超えて氣の熱負担をかけた為：脚甲がと言うより主成分である黒羽鉄が、その形状を留めておけなくなった。

「…と言う事だろう」

「…なるほど」

「剣や槍と言うよりは鎧兜と言った防具に向く黒羽鉄を、脚甲に用いた鍛造師及び店主には充分に及第点を付ける事が出来る：が、相手に氣の特性があるかどうかは売る前に聞くべきだったな」

大方、風自身：買った後に氣に目覚めたのだろう。

買って、身に着け、鍛えて、目覚めて、使って：そして寿命。

「さて風、俺としてはやはり買い替えを推奨したいが：どうしてもと言うなら、とある代価を支払う事でソイツを：氣技に適合する脚甲へ生まれ変わらせられる：と言ったら、どうする？」

「買い替えではなく、生まれ変わらせる：ですか？」

「ああ」

「…お願いします」

「なら代価を教えよう…それは風、お前の血と汗だよ」

「えっ？」

氣技を使う人間に適合する武具を作ろうと思ったら、地金となる金属が特殊になるのはもちろんの事…その金属と持ち主の氣を馴染ませる為の、繋ぎの素材が必須となる。

そしてその繋ぎとして使うに最も適した素材…それが持ち主の血と汗である。

「これは鍛造鍛冶師で、俺の飛刃赤戟や穿紅…朱雀を作ったとある店主からの受け売りなんだが…『その者の血肉は、その者がどんな氣を使うのかを…その者の涙汗は、その者が氣を発している間の体の事を精密に教えてくれる』…だそうだ」

無論、必要となる血や汗は…作りたい武具の大きさや形状によって必要量が変わってくる。

天や照そらが持つ短刀程度なら、半日も休めば十分大丈夫な血と…1日分の運動量に匹敵する汗があれば良い。

「ちなみに俺はその店主の言に従ってこの武具を作った際、一週間は絶対安静が必要になるほどの血を抜き…建業から官渡までを全力疾走で往復して出る量の汗を使った」

「そ、そんなに…ですか!？」

「それぐらいの代価を支払わなければ、戦場で己の命を支える事が出来る武具には巡り合えないと言う事さ……ちなみにこれは概算だが…えんおう風の閻王一式を全部作り変えようと思ったら…丸一日は貧血で動けないほどの血と、この建業の街を囲う城壁の上を丸二日無休憩全力疾走して出るだけの汗が必要となるはずだろうな」

実を言えば他にも氣への適性が高い武具を作る方法はたくさん存在する。

…が、俺がこれ以外の方法を知らないと言うだけの話。

「……」

まあ計算式の基礎が、血1…汗2。

出した血の倍の汗が必要と言う事になる。

「…やります」

しばらく考え込んでいた風だったが、自身の手の中にあるもう1つの脚甲を見て決意したのか…やがて、強い意志を込めた瞳をたたえてそう言った。

うむ、覚悟を決めた良い表情だ。

「ならコレを持って、南陽にある『鎧袖一触』って言う武具鍛冶屋を訪ねると良い」

言って俺は赤く細い書簡を一卷、風到手渡した。

「これは？」

「まあ紹介状みたいな物だ：これがあれば、依頼主の注文を誠実に反映し：かつ、依頼主の体に適した武具を格安で作ってもらえるはずだから」

はずとは言ったが実際は確実だ。

あの書簡は黄巾の乱が始まる前の里帰りの時、父さんと母さんから預かった書簡だ。

『個人的には息子の推薦した相手なら無償で腕を振るいたいのが、我らとて職人：生きる為には商売をしなくてはならないからな』と父さんが。

母さんは『だから刃、お前にはこの【推薦状】を二十巻、渡しておく：もしお前の目に叶う使い手が現れ、その使い手に相応しい武具を探している時はこの書簡を渡してあげなさい』と。

「南陽の『鎧袖一触』ですね？ 分かりました：それではこの楽文謙、武具を作成すべく南陽へ参ります！」

言って風は俺に脚甲の片方を預けたまま、猛然と門の方へ走って行った。

俺はその背中を、何故か懐かしい想いに駆られながら見送った。

伝記の73 刃、三羽烏と戯れるのこと【凧編】（後書き）

『黒羽鉄』は作者が作った空想の産物です。

また黒羽鉄の事辺りのくだりは独自設定です。

いずれも実際の世界には存在しませんのでご注意下さい。

伝記の74 公孫賛 脱普通宣言をすること【番外編】（前書き）

後のイベントの為、オリジナルイベントを書きました。
タイトルのあの人に、意外な人が絡みます。

伝記の73とは何ら脈絡はありませんが、それでも宜しければどうぞ。

また、当番外編はご都合主義全開の超展開な幕間話ですので…読ま
ずとも大丈夫な仕様になっています。

設定や記述がおかしいところが無数にあるかとは思いますが、もし
お読み下さる場合は太平洋より大きくマリアナ海溝より深い器で読
んで下さい。

大事なのでもう一回言います。

当節話はご都合主義全開の超展開な幕間話です。

納得できる方だけお読みください。
ではどうぞ。

伝記の74 公孫賛 脱普通宣言をすること【番外編】

（公孫賛 視点）

突然だが私は姓を公孫^{こうそん}、名を賛^{さん}、字が伯珪^{はくけい}と言う：幽州は啄郡の太守だ。

先日鎮圧された黄巾の乱に際しては、幼少より育てぬいた自慢の白馬達を騎馬として活躍した事から『白馬將軍』と二つ名が付いた。これにより、名が知られる事で我が幽州軍の兵は強大な騎馬兵団である事を知らしめる事ができたのだが：

「むう」

最近の悩みは自分自身について。

私は良く『公孫賛様って普通ですね』と言われる事がある。

誰と比べて普通なんだと問い返せば返ってくるのは、真名を桃香^{とうか}と劉玄德が比較対象だと言う。

劉玄德とは同じ私塾の出で、古くからの友人と言っても差し支えない。

その劉玄德：桃香は先日の黄巾党討伐に赴く際、私に兵と食料を貸してくれと言ってきた。

私としては友人の頼みと言う事で兵と食料、両方を融通したかったが：既に太守であるこの身では、流石に両方を：と言う訳には行かなかった。

そこで路銀と食料を分け与えた上で『兵はお前たちで募ればいい』と落とし所を設け、集まった義勇兵に関しては武器も揃えてやる事にした。

したらどうだ：桃香め、この街から義勇兵として兵二千を持って行

ったではないか。

昔から人を惹きつける事に関しては、無自覚な癖して最高峰の力を秘めていたからな…立ち上がった者が義勇兵として着いて行くのも分かると言えば分る。

そりゃ桃香に比べれば私にはそこまで他者を惹きつける魅力は無いし、顔立ちは普通だし…胸の大きさだって桃香や愛紗…関羽と比べれば普通ぐらいしかない。

武将の腕としても関羽や張飛ほど強くなければ、軍才も諸葛亮や鳳統のように賢くもない。

政務は文武官共どちらでも普通にできるし、武具の扱いも剣・槍・弓・無手と基本的な物は全部普通にこなせる。

有する武器は『剣』と言うだけで、銘も曰くも無い…普通の剣。

「私はどこまで行っても普通なのか？」

落ち着け、考えろ私…他に何かないか？

例えば、例えばそう…馬、馬だ！

あ、いやでも西涼の馬一族や洛陽の張文遠の騎兵術に敵う気がしない。

ならば料理はどうだ？

…作ってみたが誰に食わせても『普通に食べれますよ』と言う反応しか返ってこない。

特別美味くもなければ別段不味い訳でもない…つまりは普通、と。

他は？

他には何か…ああ、駄目だ…考えてたら気分が悪くなってきた。少し散歩にでも出よう。

何か新しい発見があるかもしれない。

「誰かいなか？」

「はっ、どう言ったご用件でしょう伯珪様」

「気分がすぐれないのでな、少し街を散策してくるよ」

「護衛はどう致しますか？」

「巡回警備任務に出ている者もいるだろうから、今回は不要だ」

「了解しました…では行ってらっしゃいませ」

城の門の側にある小屋で服を着替える。

普段は白を基調とした肩当や腕甲、脚甲などを身に着けた上で政務には励んでいるのだが…散歩の時ぐらい防具は外して行こう。

うん、どこからどう見ても普通の町娘だ…くうっ、町娘にしか見えないので何故か妙に物悲しい。

ともかくそうして赤い庶民服をまとい、私は城下街へと足に向けた。

啄郡と言う街は規模こそ小さいものの、その中身は平穏そのもの。

頻繁に悪漢や強盗が出るほど治安が悪い訳じゃないし、かと言って大商人の目に留まるほど優れた点もない。

…太守が普通で街も普通、これってどうなんだ？

まあ平穏…平和なのは良い事だが。

「ちよいとそこの、赤い庶民服を着た赤髪のお姉さん」

「…ん？」

そんな平和な街並みを観察しながら歩いていると、沢山出ている露店の一角で男の声に呼び止められた。

周囲を見渡せば、頭巾を被って外套を着た男：らしき者が、私に対して手招きをしている。

「私の事か？」

「今この場に赤い庶民服を着た赤髪の女性なんて、あんさんの他にいてまへんやろ？」

その者に近づくと、その者が男である事と：男の正体が分かった。男が座っているのは、白布に黒字で『うらない卜』と書かれた布を被った机。この男は占い師の様だ。

「まず不賤っちゅうかいきなりっちゅうかで悪いんやけど、あんさん：ドギツイ散財の相が出とるんですわ」

「はは、確かに不賤だな：で、散財する相が出ているとはどう言う意味だ？　最近では強盗の話等ほとんど聞かないぞ？」

「いやいや、そうやありまへん：もうチョイ先の話ですわ……実を言いますとあんさん、この街を：己が身一つで出る事になるやも知れんのですわ」

「何だって!？」

話を聞けば男の占いでは、向こう一年の後にもう一度大きな乱が起ころる。

その乱だけは私は無事に乗り越えるらしいが、その乱が終わった後

に他国から攻め込まれて落とされるそうだ。

「なるほど、治める街が落とされるから散財か…上手い事言うじゃないか」

「お褒めの言葉おおきに」

「で？ 誰がこの幽州を落とすんだ？」

「つと申し訳ありまへん、そこまでは出とらんのですわ…仮に出つても、占い師の掟で言う事は出来まへんのや」

なるほど…そこまで言える占い師ならば、抱え込めば将来は安泰だろうからな。

この男の言う事も一理ある。

そんな事を考えていると、男の視線が私をじっと見ている事に気が付いた。

男の視線は私を見据えたまま上下している。

な、何だ？

何か変な所でもあるか？

「…お姉さん…あんさんもしかして、公孫賛って言いहार太守様とちゃうのん？」

「…何？」

「せやからお姉さんの名前や…あんさん、姓は公孫で名は賛、字を伯珪って言うんでっしゃろ？ 職業は幽州啄郡の太守でっしゃろ？」

…何者だこの占い師。

私は確かに公孫伯珪だが、この占い師の前では一度たりとも名乗った事は無いぞ？

もちろん太守である事を言った覚えも無い。

「まま、そう警戒しなさんな…ワイの占い師としての頭の中には、多くの著名人がおるんですわ…その中の一人、公孫賛はんの…ワイが知つとる特徴が、今のあんさんには全部当てはまった…せやからあんさんを公孫賛はんとは断言したわけや」

「なるほど…では改めて、私は姓を公孫、名は賛、字を伯珪と言う…ここ幽州は啄郡の太守だ…伯珪と呼んでくれ」

「ご丁寧にどうも…ワイは及川^{おいかわ} 佑^{たすく}っちゅうモンです」

…変わった名だな。

姓が及で名が川、字が佑と言った所だろうか？
む？

及川、何故私の顔を見て啞然としている？

「……あつと、すんまへん…恐らくは現在進行形で予想中や思いまっけど、ワイの名前…姓が『及』で名が『川』で字が『佑』っちゅう訳やおまへんで悪しからず」

「は？」

「言うなれば姓が及川、名が佑…この国で言う『字』と『真名』は持ってまへん…まず最初に言うときます…ワイ自身は“今このご時世”の“この大陸生まれ”やありまへん」

「名と真名が無い？　どう言う事だ？　それにこの時代のこの大陸生まれではないとは…もしか、異民族か!？」

私が治める幽州は異民族の地…所謂『五胡』が治める地域にほど近い。

そこならばこの及川のように、名と真名がない人種が居ても不思議ではない。

「異民族？　ああ、言葉としては合ってまっけど五胡とは何の関係もありまへん…そうですね、あえて説明するなら…」

及川が住んでいた国では全ての者が『姓』と『名』だけで名前を形作っているらしい。

この漢王朝の影響下にある国では全く聞かない風習だが、本当に五胡の者ではないのか？

「公孫賛はんは倭^{やまと}って知ってはりまっか？」

「倭？　…ああ、ここからずーっと東…南蛮を超えてなお東に行ったところにある海を越え、さらに東にある島…だったか？」

「そうそう、その倭ですわ…実はワイ、その倭で…今からおよそ千八百年後に生まれた人間なんですわ」

「…は？　はああああああああああああっ！
」

及川の発言に私は、今自分が市場に居るにも関わらず絶叫してしまった。

とてもじゃないが信じられない。

今から千八百年も先の倭から来たとはどう言う意味なのか、いやそれ以上にこの及川と言う男は一体何者なんだ？

「せやから“単語の意味として”は、ワイは異民族で間違いおまへん：ホンマに漢人やおまへんし、声が小さくなりまっけど別に漢王朝へ忠誠を誓つとる訳でもあれへんし」

聞けばこの及川は、今からひと月ほど前：ちょうど黄巾の乱が始まる二週間ぐらい前の頃、私塾の帰り道だったはずなのに気が付いたら森の中にいたそうさ。

話を聞いただけだと書物か何かに夢中になって、道を間違えた事に気が付かなかったのだろーかと思う。

自分がそれまで居た場所と、今いる場所が全然違う事に一瞬焦った及川だったが：幸い村が近くにあった為にそこへ向かい、商人を見つけて情報を収集して驚いたそうさ。

「ワイも最初はここがそんな世界やと到底信じられへんかった：けど、情報を教えてくれた人から：今の都が洛陽で、帝が靈帝や言う話を聞き：そして、あんさん見て確信しましたわ」

及川が言うには、この戦乱の世の事は千八百年たった先の時代では書物となって語り継がれているそうさ。

にしても、自身がこの時代のこの大陸生まれではない事と：今が、自分の居た時代から見て千八百年も昔だと断定するに至った材料が何故『公孫贊』なんだ？

「ともかく、ワイの事は及川って呼んで欲しいんや」

「分かった、及川：私の事は伯珪と呼んでくれ」

「了解や伯珪はん：で、こっからが本題やけど：伯珪はんなら『世が動乱に満ち、民が泣かんとするその時、天より御遣いを乗せし流星が降らん：流星に乗りし御遣いは白き衣を纏いて地に降り立ち、その者：備えし智と徳を以て乱世を鎮めん』 っちゅう管輅の予言を知っとると思うけど、どない？」

「ああ、天の御遣いとやらの話か：あれは確か：：陳留刺史の曹操の所へ流星は落ちたと聞いたぞ？ 何でも画期的な警備体制を考案し、陳留の街の治安維持に大きな貢献を果たしたとか」

本当を言えば管輅の占いにはもう一つ：

『天の御遣いの降臨に時を同じくし：その身に強大な武と氣を宿した赤き刃が、虎の檻の中より現れる：赤き刃はその武と天恵の才によって豊かな双丘を守り、無数の愛に支えられ：動乱の最中、異色の王として産声を上げる』

：と言う予言もある。

個人的にはそっちの方が気になるのだが：及川には伏せておく事としよう。

「うわあ、よりによってあのツンデレ控え目ドリルんとか：：むくん、魏ルート：しかも既に警備隊長：いっちゃん外史崩しのルートやんけ、アホかズピーめ：」

私の話を聞いて難しい顔で考え込み始めた及川。
何か拙い事を言っただろうか？

「…どうした？ 難しい顔をして…天の御遣いが曹操に拾われると拙いのか？」

「いや、こっちの話ですわ…御使いが曹操に付く事が拙いかどうかは、現状やとまだ多くは語れまへん……今からワイが言う事を、狂言だ何だと言わずに全体的に信じてくれん限りは」

そう言って及川は真面目な表情で私を見つめた。

傍から見れば相を見てもらっている風に見えなくもないだろうが、当事者としては真剣な話だ。

…察するに天の御遣いが曹操に拾われる事は、及川的に拙いのだろう。

そしてその拙いと言わしめる理由が、恐らくは狂言的なのだろう。

「…分かった、この公孫伯珪…今から及川が話す事を、如何に狂言じみてても全部真実として受け止めよう…真名に誓って」

「おおきに」

言って及川は静かに語り始めた。

世界とは、自己が認識出来ていないだけでいくつも存在する。

世界には軸と言う物が定まっており、その軸を中心として様々な可能性で未来や過去が分岐した世界もある。

それら世界の全ては軸と言われる世界を正史とし、それ以外の…様々な可能性で、可能性の数だけ枝分かれした…正史に似ているが別の世界を外史と言う。

世界は神と呼ばれる存在、あるいはその世界の管理者と呼ばれる存

在によって管理されている。

この神ないし管理者は、自身が管理する世界の人間の想いを元にまた新たな世界を作る。

正史も外史もこの管理者が存在し、日々生まれては消える数多の世界を管理・監視している。

「…ここで大事なのは、それぞれの世界に存在する全ての知的生命体は…自身がいるその世界こそ全てと思うとる点やね」

「どう言う事だ？」

「例えば今この瞬間、ワイと喋っとる伯珪はんやけど…伯珪はんが認識できひんだけの別の『外史』には、劉備はんの為に力を貸さん“公孫賛はん”も存在する…今この瞬間ワイと喋っとる伯珪はんは、その“公孫賛はん”を絶対に認識できひんちゅう話や」

桃香に協力しない公孫賛^{わたし}が居る世界。

それこそが『可能性の数だけ枝分かれした、正史に似ているが別』の世界であると及川は語る。

無論それ以外の可能性も決して否定出来ず…可能性だけで言えば、そもそも桃香が公孫賛^{わたし}に助力を求めない可能性から派生した世界もあり得ると言う。

そして及川曰く、この世界も外史なのだそうだ。

と言うのも及川の中で正史とは『公孫賛 伯珪』と言う人物は男な

のだそうだ。

男の私がいる世界か：少し興味あるかな。

「ワイは立場がチト特殊よつてに、男の公孫賛はんが居る世界も：女の公孫賛はんが、伯珪はんが居る世界も知つとるんや」

「：なるほど、だから私を見て『ここは自分の居た世界ではない』と確信したんだな？」

「そう言うこっちゃ：なら話続けるで？」

「ああ、頼む」

この世界は：及川が住んでいた世界の人間の想いが生み出した世界を軸とした、言わば正史の外史の外史で：厳密に言えば『天の御遣いがどこに落ちるか』と言う大元の可能性で分岐した世界の一つだと言う。

及川が知るこの世界の外史では、天の御遣いはその降臨地点と回収者の違いによって：以後の展開が全く異なるそうだ。

「……けど：うん、とりあえず伯珪はんには言うておかなアカンかな？　ワイな、実を言うとなの御使いとは同郷なんですわ」

「なっ!？」

言って及川は周囲を警戒した後、声の大きさを落としてぼつぼつと

語り始めた。

曹操が確保した天の御遣いは名を『北郷ほんごう 一刀かずと』と言い、及川がこの時代へくる直前まで一緒に行動していたと言う。北郷の人となりは一言で言えば『優しい』との事。

特に女には優しく、例えば女に刺殺される事になっても犯人となつた女を恨む事は出来ないそうだ。

だが女に優しいが故に今一步踏み込むことが出来ず、かつ慕われている事には中々気付けない鈍感。

及川はそんな級友：天の言葉で【くらすめいと】を、日々やきもきしながら見ていたそうだ。

「と言う事は及川、お前も天の御遣いなのか？」

「天の御遣いと言う言葉面だけを捉えればそうなります…けど、この時代において『天』とは漢王朝…ひいては霊帝の事…：天は同時に二つも戴けまへんやろ？ 時間や気候で天の色は変わりまっけど、天自体は一つしかないモンやし」

「ふむ、それもそうか」

霊帝が健在の状態で『天』を名乗る事は、漢王朝へ弓引く行為も同じ。

と言う事は、曹操は身内に重犯罪者予備軍を抱えているのか…

「なるほど、それならば及川が天の御遣いに協力できないのも分かる気がするぞ」

「……ワイ、この世界がワイの知る世界やって分かった瞬間…ホン

マやったらかずピー…いや北郷を探し出し、協力してこの時代を生き残ろうと考えとった…けど北郷は、アイツがittyちゃん居たらアカンところに居る…そうなった以上、ワイはアイツと協力する事が出来んのや」

「どうしてだ？ その天の御遣い…北郷とやらが曹操の所にいるのがそんなに拙いのか？」

「せや…理由を今話す事は出来ん、けど拙いんは間違いない…それにな伯珪はん、ワイ…曹操の事、嫌いやねん」

「…はっ？」

「いや、せやからな？ ワイは曹操が好かん、そう言うとりんや」

そう、まじめな顔で言い放つ及川。

と言うより…曹操が嫌いだから、その傍にいる御使いに…北郷に協力できない、と？

「…ぷっ」

私は堪えきれず噴き出してしまった。

だってそうだろう？

あの曹操と言えば人材収集家としては非常に名高く、曹家の出だけあって血筋は良い。

親族に夏侯家の長女と次女がおり、そのどちらも忠臣として扱う稀代の名君。

仕える事が出来れば後世に語り継いでも良いぐらいの大抜擢なのに、

それを“曹操が嫌い”とは……くっ。

「まあ真面目な話をする、ワイには……もしこの世界に来る事が出来たなら、生涯の全てを注いでも仕えたいと思う主君が二人おったんや」

「ほう？ 興味があるな……誰と誰だ？」

「一人は益州巴郡太守、嚴顔はん」

嚴顔殿か。

劉焉と劉璋の配下として巴郡の太守を務める妙齡の女傑で、酒と戦いこそ人生の華と豪語する豪快な人と聞いている。
話ついでにだが、嚴顔は胸が大きいとも。

「んで二人目があんさんや、伯珪はん」

「……えっ？ ええっ！？ 私なのか！？」

「せや？ 他の誰でもない、今ワイの目の前に居る、公孫伯珪その人や」

言って及川は、自分が仕えるべき君主の理想像を言い始めた。

及川が求める君主は特化型の天才ではなく、普遍型の秀才らしい。
正しい部下とは、君主が道を誤った時……殴ってでも道を正せるのが理想の部下だとか。

そしてそんな部下に相応しい君主とは、万象を普遍的にこなし……自身の出来ない事には素直に部下へ助力を求める人物が良いと言う。

その点で言えば先の曹操は『普遍型の天才』と言う、及川からすれば部下の存在価値が無くなる君主だとの事。

ちなみに『何故厳顔殿を?』と聞いたところ『単にワイの好みや』と及川は言った。

『やはりあの胸なのか!?』と聞けば『胸は大きい方が好きやけど胸に貴賤はない、あゝ伯珪はんやったらワイが大きくしたるか?』と言われたので思わず殴ってしまった。

…私は悪くないはずだ。

「あたたゝ」

「お、お前が公衆の面前で下品な話をするからだろう!？」

「いや堪忍や、つい口が滑って本音が出てしもてんゝすんまへんすんまへん」

「全くゝ」

「とまあそんな感じでワイは、本郷と結託する事無く今の時代を生き抜く術を探しとんねやゝこの占い師は世を忍ぶ仮の姿っちゅう訳やな」

及川自身は武術の経験がまるでなく、先日の黄巾党大討伐ゝ俗に言う『黄巾の乱』も、庶民を装って戦から遠ざかったと言う。

「でゝ話を戻しまっけど、伯珪はんゝあんさん、自分の能力に自信

が持ててまへんやろ？」

「…えっ？」

頬に私が付けた手形を残したまま、不意に今一番気にしている事を言い始める及川。

そうだ…私はどれもこれも普通すぎて、自分に自信が持てないんだ。

「伯珪はんは、全般底上げって言われて何か閃きまっか？」

「全般、底上げ？」

「そうです」

言って及川は書簡を一巻取出し、そこから小刀で数枚の紙を切り出した。

そして筆を使い、ある紙の上部に『曹操』と書き記す。

「…それは？」

「まあ見てておくんなはれ」

及川は続けざまに紙に名前を書いていく。

書かれた名前は曹操・孫策・劉備・袁紹・袁術・劉表・劉璋・馬騰・董卓・孟獲、そして私こと公孫賛。

それが及川の書き記した名前だ。

「えっと、これがこうで…こつちをこうで、っと…こんなもんか？
…ほい完成」

及川が差し出した紙には『推測能力値表』と題されている。

及川曰くこれは、伝え聞く人為や支配地域の現状から各人の持つ能力を推測…仮の数値として書き出した物らしい。

紙にはこう書いてある。

曹操…武力…七十、統率…八十、知力…九十、政力…九十、財力…七十五、魅力…八十
孫策…武力…八十、統率…七十、知力…六十、政力…六十、財力…六十、魅力…五十
劉備…武力…二十、統率…四十、知力…三十、政力…三十、財力…二十、魅力…九十五
袁紹…武力…十五、統率…二十、知力…二十、政力…零、財力…百、魅力…三十
袁術…武力…五、統率…十、知力…二十五、政力…零、財力…九十五、魅力…五十
劉表…武力…四十、統率…三十、知力…五十、政力…三十、財力…五十、魅力…二十
劉璋…武力…三十、統率…三十、知力…三十、政力…三十、財力…五十、魅力…二十
馬騰…武力…七十、統率…八十、知力…五十、政力…六十、財力…四十五、魅力…五十
董卓…武力…五、統率…八十五、知力…六十、政力…九十五、財力…七十、魅力…七十
孟獲…武力…五、統率…零、知力…五、政力…零、財力…不明、魅力…十
公孫贊…武力…五十、統率…五十、知力…五十、政力…五十、財力…五十、魅力…五十

「武力は個人の戦闘能力、統率はそのまま軍勢指揮能力：知力は文武両方における頭の回転の速さ、政力は政治力全般：財力は個人が発揮・放出できる金品の量：で、最後の魅力はその国内部での慕われやすさってところすわ」

「なるほど：武力は孫策が一位で曹操が二位、統率は董卓が一位で曹操が二位：知力は曹操が段違いに一位：ふむ、こうして数値化してもらおうと各勢がどのような感じかが一目で分かるな」

「ちなみにこの一覧表には、ワイ個人の好みとかが影響を出しとる場合もあります：で、もちろん現在の推定予測値で：各項目の上限は百って事にしてます」

「なるほど：で？ 私が全部五十と言うのはどう言う事なんだ？ 普通って事なのか？」

最高値が百で最低値が零、つまり五十はちょうど真ん中。

真ん中と言う事は、特筆すべき点は何もない：そう言う事ではないのか？

そう思い、私の数値が全て五十である事に意見したのだが：返ってきた答えは、今までの私では考えた事もないような物だった。

「なあ伯珪はん、普通の何があきまへんのや？」

「：は？」

「実際そうやろ？ 力がバケモンみたいに強かったら日常生活できひんし、頭が神がかりに賢かったら親家族要らんやん？ 普通ってそれだけで凄い事やねんで？」

及川は言う。

さっきの表で言えば『武力』は確かに戦闘能力の事だが、単純な筋力の話ではない。

己の持つ武器を的確に扱い、戦場でそれを駆使できる能力：言葉を変えれば『戦場での適性値』だそうだ。

そしてそれは算出の基準となるのが戦場なので、地理や自身の置かれた状況等：おおよそ全ての『戦に関係がある条件』を全て加味した上の数値なのだと。

それで言えば曹操は部下に武将となる者で夏侯惇・許褚と言った力自慢を抱え、軍師としてはあの『王佐の才』と名高い荀文若がいる。

そして荀文若ほどではないが戦場全域を見渡せ、かつ武の腕も高い夏侯淵や典韋も揃えている。

現状の戦況を見て荀文若が出した策を曹操や夏侯淵、典韋が吟味して実行。

夏侯惇や許褚は文若が次の策を実行しやすいように渾身の働きをする。

また逆も然りで、夏侯惇や許褚が大暴れし、相手を圧倒するからこそ文若がその戦況において最善の策を練る時間が作れる。

そう言った“百戦”なら“百戦”の戦い方が出来る、総合的な戦闘能力の高さ：と言う意味で曹操は武力七十なのだそうだ。

孫策の武力が曹操より十多いのは、孫策勢は曹操に比べて文武官の絶対数が比率的にやや多く：曹操勢に比べてより柔軟で高度な戦い出来るだろうからと言う事らしい。

その点孫策は本能任せに行動する事も多く、それが結果として『知的ではない』と言う印象を及川にもたらしたそうだ。

「…いや、だがしかし…」

しかし私はその意見に納得が出来なかった。

如何に各勢が一長一短な状態とは言え、私には短も無ければ長も無い。

無論、長が無くて短ばかりと言うのは流石に嫌だが。

私がそう言うと及川は苦笑の表情となった。

「まあ伯珪はんやったら納得せんとは思ってたから、想定の範囲内の反応や言うたらそれまでやけど」

「私の反応が想定範囲内？　どう言う事だ？」

「普通っちゅう存在は、実は同時に一番恐れるべき存在でもあるとワイは考える」

「普通が、一番恐れるべき存在…？」

『何事もそつなくこなす』それが『普通』の定義である。

だが“普通”と言う言葉から得られる最大の印象…言わば『可もなく不可もなく』と言った状態。

「みんなはそう考えがちでっしょ？　けど考えてみなはれ…普通とは、目覚ましい結果として残る訳ではないが…一人で、ほぼ全てが普遍的にできる万能手でもあると考えるんです」

及川の話に、私は目から鱗が落ちる気がした。

例えば戦場で、敵の兵団を相手取るのに兵が一人足りなくて劣勢に陥る。

そこへ私が飛び込み、兵一人分の働きをすればまず負けは無くなる。

例えば軍議で、次の戦で使う策が大まかに二つ決まったが方向性が決められない。

そこへ私が飛び込み、軍師代わりの働きをすれば双方の策を盛り込んだ第三の策が作れる。

例えば厨房で、戦いで疲れた兵士が戻って来るから沢山の料理を用意したいが人手が足りない。

そこへ私が飛び込み、料理人を料理だけに集中出来る様にすれば料理が完成させられる。

「万能手は多芸であるが故に器用貧乏になりがちでつけど、そこを弛まぬ努力で研鑽を続ければ：それまで培った“全般に対する平均技能”が『全般に対する高等技能』に化けるっちゅう寸法です」

例えば今の私が武力五十なら、これからは厳しい鍛練も行って武力を六十にする。

例えば今の私が統率五十なら、積極的に多彩な訓練を行って自身の指導能力を上げて統率を六十にする。

例えば今の私が知力五十なら、これまでは読まなかったような難しい書物も読んで知力を六十にする。

：以下、政力・財力・魅力も同じ。

要は今適温の湯に浸かっている状態だが、そこで我が身に鞭を入れて少し熱い湯に入る訓練を行う。

そうすれば適温の湯の時代の事が経験となり、少し熱い程度では動じなくなる。

動じなくなれば更に少し熱い湯へ…これを全力で繰り返すのだ。

「そうすればやがて伯珪はんの能力は、全能力値が七十や八十に達する事も可能です…で、八十に達した時はホレ…孫策とは武力で拮抗するものの、その他は段違いに伯珪はんの方が上になると」

「お、おお…」

「後は伯珪はん次第です…やるか、やらないか」

私は嬉しくなった。

こんな平々凡々私でも、その平々な能力全てを万遍なく育てる事で『万能型強者』になる事が出来ると分かったのだから。

「感謝するぞ及川、礼として扱うのには少し違うかもしれないが…我が真名を受け取ってくれ」

「…ええんでっか？」

「ああ、今の今まで…私の悩みをこんな方法で解決しようとしてくれた人間は他にいない…せめてもの感謝の証だ」

「謝儀でんな…分かった、伯珪はんの真名…預かりまひよ」

「私の真名は白蓮ほいれんと言う」

「白蓮はんやね？ ほなワイの事は…」

「話の腰を折って済まん、及川」

…ん？ なんや？」

「私…及川に字と真名を付けたいんだ」

「白蓮はんが、ワイに字と真名を？」

「そうだ」

それまで腐っていた私を立ち直らせ、新たな可能性まで提示した男…及川。

私はそんな及川を、公私ともに傍に置いてみたかった。

及川と居れば例え普通の人生でも、様々な意味で普通では無くしてくれる…そんな気がしたから。

「及川、お前には今日から姓を及、（きゆう）名を川、（せん）字を黒蓮、（しんれん）真名を佑と名乗るんだ」

「……カッコエエ字と真名、確かに頂戴しました…ワイは今日から及川 （きゆうせん）黒蓮と名乗ります…なら白蓮はん、ワイの真名…受け取ってや」

「うむ、確かに預かったぞ…佑……それで佑、物は相談なんだが…佑はウチに仕える気は無いか？」

「ほえ？」

どうせ傍に居たいと思うなら、まずは役職で縛ってそこから…もちろんさつき及川が言った『胸は大きい方が好きやけど胸に貴賤はない、あ…伯珪はんやったらワイが大きくしたるか？』と言うのが気にならないわけじゃない。

及川は『大きい方が好きだ』と言うんだ：私の胸も大きくしてもらえたら、と言う望みが捨てきれないのだ。

「役職は傍付き参謀だ：給金は月二千銭から始めよう、どうだ？」

「：終身雇用でんな？」

「無論だ、むしろ私に佑を逃がす選択肢は持ち合わせていない：ならなら、最終的な就職値を私にするとすると言う選択肢なら用意できるぞ？／／／」

言ってて少々恥ずかしいが、私だって女だ。
気に入った男の独占だってしたい。

その思いが通じたのか：及川はまた苦笑を浮かべ、そしてこう言った。

「ワイ、自他共に認める女好きで：閨でしか行えんような事大好きでっけど……こんな男で後悔せえへんか？」

なんだ、その答えか：言葉を返すようだがな佑、その答えは想定内だ。

「ならどんと来い、佑は私の全てを理解してくれた：私も佑の全てを理解したいんだ／／／」

「は、はは：あははははっ：おおきに、白蓮はん：ワイ、白蓮はんに一緒に着いて行くわ」

「ありがとう、その言葉を待っていたんだ：一緒に最高峰の万能を

目指そうじゃないか、無論佑にとっての最高峰の女も…な」

こうして私は及川と言う、天と言う肩書を持ちも使いもしないが…
その実天の御遣いで、以後私の伴侶となる男を手元に収める事に成功した。

もう残念だと言わせない。

この公孫伯珪は、今日から生まれ変わるんだ。

脱普通宣言だ！

伝記の74 公孫賛 脱普通宣言をすること【番外編】（後書き）

及川君が書いた武将の強さ表は、作者の独自設定です。

既存既出のパラメータとは大きく食い違っている事を認識して書いてますので、無用のツツコミはお止め下さい。

また、及川君と白蓮は現状『孫堅の存命』を、及川君は『刃の存在』を知らない設定になってます…これに関しても言及は止めて下さい。

伝記の75 刃、三羽烏と戯れるのこと【沙和編】（前書き）

これがイグニス式の沙和でございます。

途中、無茶苦茶な設定が多々ありますが…どうぞ大きな心で受け止めるか、あるいは『いつもの事だ』と気にしないで頂けると助かります。

伝記の75 刃、三羽鳥と戯れるのこ【沙和編】

く刃 視点く

風を見送った俺はその後、手空きになった為に再び街を散策する事にした。

道中で数回：何かに追われて逃げている雪蓮や、鬼面の表情で何かを探す冥琳とすれ違ったが：アレは間違いなく『政務をサボったのが冥琳にバレて逃げる雪蓮と、政務をサボって逃げた雪蓮を追う冥琳』の図だ。

日常茶飯事：うむ、平和だ。

「ちょっと刃！ 何が『うむ、平和だ』よ！ 助けてくれたっていいでしょー！？」

言って耳被抓まれた雪蓮が泣きそうな顔で俺に縋^{すが}り付く。

こらこら雪蓮、地の文に語りを入れるなんてメタな事をするんじゃない。

「馬鹿を言うな雪蓮、刃は与えられた仕事を三日先の分までこなしているんだ：お前のように三日前の分すら終わっていないのとは訳が違うんだ」

「三日前の分って：溜め過ぎだろ？」

俺の立場を説明する冥琳だが、その説明内容に思わずツツコミを入

れてしまう。

三日前の分と言う事は、先の分はおろか今日の分すら出来てないと言う事になる。

「あーっ！ 刃までそう言う事言うのー！？」

俺のツツコミを受けて頬を膨らませる雪蓮。

うん、よく見る顔だ。

「俺までって…誰だって言うだろ、普通…：つかこの国で一番少ない政務の量なのに、それすらこなさず逃げるってどうなんだ？ 傍付きの人和はどうしたよ」

実を言えば人和が来てから、雪蓮自身が決済をするべき仕事はかなり減った。

冥琳・穂・蘭里・人和の4文官の存在が、政務その物を格段に減らしたからだ。

とは言え王が決済をするべき仕事はキチンと存在する。

しかしそれも午前中、しっかりと励めば午後からは手空きになるような量だ。

あの祭さんでさえ、部隊調練の案件や報告を毎日こなし…空いた時間で充実した一時を過ごしていると言うのに。

「人和は雪蓮の執務室で落款片手に汗を流しているよ…」

「政務をしなくちゃ酒を取り上げるんじゃないのか？」

「酒を取り上げても、私財を持って街に行かれ…そこで飲まれては

防ぐすべも無いからな」

『お酒が無いなら買えばいいじゃない』的な事らしい。
つかそれ、どこのマリーさん？

等とそんな話を話す内に、軒先の外装が非常に可愛い服屋に着いた。

「うわあ、この服スツゴく可愛くない？」

そんな店の軒先で飾られていた、変わった意匠の服を手になんと言う雪蓮。

「ふむ、確かに可愛い：蘭里に似合いそうな意匠だな」

店の看板には『美装愛装』とあり、その看板を沙和：于禁と地和の人形が掲げている。

人形の造り方を見るに、真桜：李典作の人形で、出来は『似』だな。沙和の眼鏡やソバカスの再現度合の精巧さ、地和の元気そうな表情やその衣装の模倣具合：こりやもうすぐ皆伝だな。

「ああ、沙和と地和の服屋だな」

「ほう？」

「神蓮人形を飾ってある服屋と並んで、この建業で一位二位を争う服屋らしいぞ？」

「お母様の人形：あの、二番横丁と正面大通りの交差点にある店？」

建業の街は俺の区画整理案に伴い、各区画が碁盤目状に整備されて

いる。

建業城城門から城壁正門までを南北に貫く大通りを『正面大通り』とし、その通りに東西のラインで直角に交わる道を『横丁』と称する。

雪蓮の言う二番横丁とは、建業城城壁正門前から数えて2番目の東西通りの事を指す。

「そう、そこ」

ちなみに冥琳はその店で勝負下着を買ったそうだ。

つかこの時代ってマジでおかしいよな：ブラジャーはあるし、腰ゴムのパンツはあるし。

ブラジャーに至ってはレースとか普通に使われてるし。

「あ！ 刃さんなの」

「いらっしゃいませ〜！」

店の軒先で商品を見ていると、店の中から沙和と地和が出て来た。

沙和は現代女子高生のような格好をしており、地和はその色違いを着ている。

この格好を見る限り、地和がああ黄巾の乱の中心人物だとは誰も思えない。

「うっわあ〜！ 刃さん両手に花でモテモテなの〜」

「もしかして逢引？」

そんな事を考えていると、沙和と地和からはやし立ての言葉を受けた。

最初は冷やかしかと思ったが、実を言えば真正面から違うとも言い切れない俺だった。

何故なら…

「…／＼／」

「…／＼／」

俺の両サイドで、雪蓮と冥琳が顔を赤くしてモジモジ照れているから。

ちなみに照れる冥琳は貴重である。

「あ、逢引だなんてそんな…」

「私はそんなつもりじゃ…」

あー、雪蓮に冥琳。

今は何を言っても全部墓穴になるぞ？

「すみませーん！」

「はーいただきます！」

そんな中、店の中から客の声がして地和が店内へ引っ込んで行った。そしてそれを合図に、雪蓮と冥琳もさっさと姿を消してしまった。

「…あれ？ 雪蓮様と冥琳様は？」

「地和が呼ばれたのを合図に何処かへ行ったぞ？」

「ふーん、そうなの」

「沙和、店はどうだ？」

俺は前々から気になっていた事を聞いてみる事にする。

沙和はその性格や思考傾向が戦向けではなく、風や真桜の足をいつも自分が引っ張っている事を気にしていたそうだ。

本人としては親友である風や真桜と共に世直しの旅を始めたが、本音を言えば可愛い服やオシャレな服を扱う服飾関係の職に就きたかったらしい。

「儲かってるの、これも刃さんのおかげなの！」

以前1度だけ新兵の訓練に参加させた事があるが、持って生まれた声が可愛い事もあって新兵から舐められ…訓練としては成立しなかった。

俺としてはいつそのこと、アメリカ海軍の訓練方式…いわゆるハートマン軍曹式を採用して、その声で新兵を罵りつつ…ギャップを用いた訓練してもらおうかとも考えていた。

だが沙和はその不成立だった訓練の後、物陰で泣いていたのだ。

『沙和は戦向けじゃないの…けど正式に軍人になった以上、お仕事

出来ないとかビにされちゃう：どうしよう』と。

それを偶然聞いた俺は、沙和本人には内緒で会議を開いた。
無論議題は『沙和の扱い』についてだ。

様々な意見が飛び交う中、参加者は軍属賛成・調練強行派と軍属反対・別職推薦派との2つに割れた。

冥琳や祭さん、凧と言った軍属賛成・調練強行派は口を揃えて『多少無理をさせても調練を行わせるべき』と言う。
逆に蘭里や穩、明命と言った軍属反対・別職推薦派は口を揃えて『性格的に向かないから別職を宛がうべき』と言う。

言い出しっぺの俺としては非常に悩んだが、結局は中間の意見で落としどころとした。

沙和には【呉軍属・服飾將軍】と言う役職を与え、兵の調練は行わず…兵の衣服を作る職人を育成しろと言う事にしたのだ。

「♪」

だから普段はこうして趣味全開で衣服屋を営んでいるが、戦時には兵たちの戦闘服を作る仕事に迫られる事になる。

これならば戦場へ出る事無く軍人として立ち回れ、かつ彼女の趣味や技量を活かせると言う寸法だ。

「あ、もちろん兵士さん達の衣服もバッチリなの。今日は地和ちゃんやお店の針子さん達と一緒に、兵士さん達の衣服を合計五〇着作ったの」

「へえ、一日で五〇着か…凄いじゃないか」

「えへへゝなの」

ちなみに戦場では衣服などどうでも良いではないかという意見もあるだろうが、意外に無視出来ない物なのだ。

もちろん敵味方の判別を容易にすると言う目的は元より：汚れた衣服とはそれだけで周囲の仲間の士気を下げるし、破けたりすると場合によっては行動が制限される事もある。

戦場で士気が下がったり、行動が制限されればその先は自ずと“死”に繋がる。

だが沙和や地和のような戦闘衣装専門の供給者が居れば、前線に立つ者はそれだけ致死率が下がる事になる。

加えて汚れにくい服や破けにくい服が出来れば、致死率が下がるだけじゃなく逆に生存率：ひいては勝率が上がる。

「ところで刃さん、あの服なんだけど」

「ん？」

言って沙和は、店の軒先に飾ってある木彫りの人形マネキン（真桜謹製）が着ている服を指差した。

太腿の辺りまで深く入ったスリットが特徴的な、赤いチャイナ服風の服だ。

イメージとしては雪蓮や祭さんが着ている服に近いだろうか。

「この服がどうした？」

「沙和ね？ この服を基礎にして、新しい意匠の：出来れば色っぽい服を作りたいんだけど、地和ちゃんと相談しても良い案が出なく

て」

「……色っぽい服？」

「うん…あの、真桜ちゃんが作った人形を飾ってるお店…あのお店には、男の人を誘惑できるような服も売ってるんだけど…沙和達のお店にはそう言った服が無くて、売り上げが僅差で負けるの」

「それは分かったが、どうして俺なんだ？」

「…冥琳様が、あのお店で買った下着で刃さんが喜んだって」

…。

あほー！

めーりんのあほー！

こんな無垢な子になんちゆう事を漏らしとるんじゃあー！！
大体、あの下着だって基本的には下着としての役割を果たさ…げふんげふん。

失礼…取り乱した様だ。

「…………だから俺なのか？」

「刃さんを虜に出来る服が出来れば、その方面での売り上げは負けなくなるかなって思ったの」

俺が喜んだ下着…神蓮人形の店の下着。

俺が喜ぶ服…神蓮人形の店の服を上回る服。

…そう言う事なのか？

「まずは聞いておきたい、その新しい服は誰が着るんだ？」

「初作は沙和自身が着るの…で、着て評判が良かったら色違いを出して本格的に売るのが」

ふむ…沙和自身が試着第一号か。

と言う事は…

「……………」

俺は沙和から2～3歩離れ、彼女を頭のとっぺんからつま先までじっくりと見る。

…なるほど、真桜＞風＝沙和…ぐらいか。
だとしたら…

「…そうだな、まず沙和に合わせて採寸し直そうか…誤差は一寸（3cm）以内で」

「体にぴったりする大きさにするの？」

「ああ…で、前垂れの部分を下着が見えるか見えないか微妙な位置で落として…色は薄い桃色にしようか」

俺は脳裏に浮かんだ沙和の姿を、出来るだけ正確に言葉にして本人へ伝える。

沙和は俺の言葉から何かを閃いたのか、書簡にメモを取りながら話を聞き始めた。

「前垂れに花柄の染めを入れて…透けるぐらい薄い、網靴下を合わせる…長さは太ももまで」

「そうそう…後は踵の高い靴かな？ 草履の鼻緒なめを模して、鞣し革で打ち直して…」

「ふむふむ…えっと、こんな感じなの？」

沙和が見せてくれたのは、俺が脳裏へ浮かべた沙和の姿そのままが描かれた書簡だった。

沙和…何気に絵心もあるんだな。

まあ衣服店の職人だから、型紙から起こす事も必要だろうし…当然の技術と言えば当然だが。

「おお、良いじゃないか」

「…うん、何とか形に出来そうなの…ありがとうなの！」

「何、気にする事は無いさ…頑張れよ？」

「分かったの♪」

言って書簡を手には、笑顔で店の中へ戻って行く沙和。

見ればその書簡を店の奥に居た地和に見せ、早速型紙を起こし始めたようだ。

その表情は非常に嬉しそうだ。

「…趣味と実益、一挙両得…か？」

そんな事を考えつつ、俺は美装愛装を後にした。

伝記の75 刃、三羽烏と戯れるのこと【沙和編】（後書き）

次回は真桜編の予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7079r/>

真・恋姫†無双～巨乳将伝～

2011年12月29日02時19分発行